

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

田篠中原遺跡

—縄文時代中期末の環状列石・配石遺構群の調査—

1990

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集

田篠中原遺跡

—縄文時代中期末の環状列石・配石遺構群の調査—





1807

平成7年度に開始が予定されている上清原自動車道は、富岡市から葛岡市にかけて荒川のうっただ見事な河岸段丘と、それに連なる巨礫地上を走ることになります。緩やかな甘菜の谷の景観は、ドライバーの人達を楽しませることになるでしょう。

甘菜の谷の南側に連なる山々の内、稲倉山から流れ出る雄川は、甘菜町善慶寺・富岡市田窪を中心に河岸段丘を侵食し、善慶寺原と呼ばれる広い扇状地を作り出しました。

その扇状地上の桑畑となっていた高速道路予定地の発掘調査から、縄文時代中期の祭祀遺構が現れてきました。環状列石、配石、立石、敷石住居跡、墓地等と、それに伴う多数の多孔石も出土し、

当時の人々がこの土地をどのように使い、またその人々の社会観・祭・祭祀のあり方を研究するのに格好の材料を提供してくれました。

今回の報告書が、全国の研究者、地域の社会教育・学校教育等に活用され、歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

発掘調査・整理事業を行うに当たり、調査に参加された皆様をはじめ、地域の皆様、関係された諸機関の皆様の暖かい御援助、御協力に感謝し、序といたします。

平成2年9月10日

群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水一郎





かぶらの谷

群馬県の北西部に位置する荒船山頂に立つと、かぶらの谷が一望できる。

荒船山(1,423m)とその裾野に連なる山々は、上信越国境の分水嶺になっている。この谷合いから湧き出る水は鍋川の源流となり、たくさんの支流を集めて、下仁田町、富岡市、甘楽町を東に流れて鳥川に合流しているが、この流域を「かぶらの谷」とよんでいる。

下仁田町より東方の鍋川流域は、川の流れも一転して緩やかになり、河岸段丘面が未広がりに平地をつくっている。富岡市を中心とした平地は、鍋川を境にして、南側には高瀬段丘面が広く発達している。一方北側には、妙義山麓丘陵、丹生丘陵、富岡丘陵など小高い丘が続いている。高田川(21,619m)、丹生川、そして鍋川(37,645m)の流水の働きによって河岸段丘(面)が発達し、一ノ宮・富岡市街地をつくっている。

甘楽町一帯の地形は、下仁田町との境界に聳え立つ種含山(1,370m)に源を発して流れる雄川(15,394m)が、小幡丘陵の北側を流れて小幡扇状地を発達させて鍋川へ合流している。

遺跡はこの小幡扇状地のほぼ扇状部に立地している。

写真左に流れている川が雄川である。撮影日は昭和62年2月9日。



36号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

縄文時代の環状列石と敷石住居跡

環状列石（弧状列石）は集落の広場部分に構築されていた。径約38mを呈している。列石内部からは立石が検出された。この立石は調査の過程では倒れた状態で検出されたものであるが、構築当初の姿を復元してみた（図と復元写真を参照）。

敷石住居跡は11軒検出された。構築時期は加曾利E 3 式期から加曾利E 4 式期にかけてであった。



23号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）



24号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

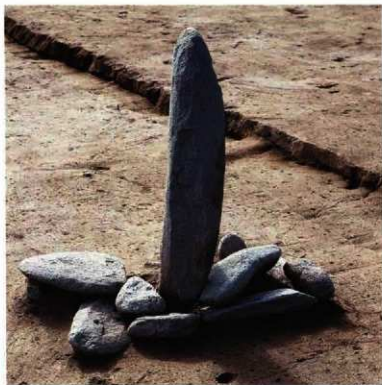


37号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）





環状列石の部分



立石



5号配石遺構（円形敷石住居跡）



8号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）埋裏



8号配石遺構（柄鏡形敷石住居跡）

【例言・凡例】

例 言

- 本書は、国越自動車道（上越線）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。
田藤中原遺跡（たじのなかはら）遺跡
富岡市田藤419番、他
- 発掘した遺跡の調査期間と調査面積は以下のとおりである。
昭和61年5月28日～昭和62年12月27日
面積 15,800㎡
- 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 実際の調査にあたっては、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越地域埋蔵文化財調査を目的に設置された国越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台3-15-8所在）が担当した。
調査担当者は以下のとおりである。
依田治雄（昭和61・62年度 専門員）
右島和夫（昭和61年度 専門員）
菊池 実（昭和61・62年度 調査研究員）
飯塚 龍（昭和62年度 調査研究員）
- 出土遺物の整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。
平成元年4月1日～平成2年9月30日までの1年6ヵ月。
整理担当者 菊池 実（主任調査研究員）
- 本文執筆は菊池を中心に各執筆者間で協議して行い、本文執筆の文書については目次に記した。
- 当遺跡の内容をより詳細に浮彫りする意図で、次の各位に資料の分析・測定を依頼し、その分析・測定結果の玉髄を賜った。各位に厚く御礼申し上げます。
残存動物分析 中野益男（帯広畜産大学）
長田正家（株式会社 ズコーシャ）
中野寛子（株式会社 ズコーシャ）
福島道広（株式会社 ズコーシャ）
土器胎土分析 井上 廉（第4紀地質研究所）
黒曜石分析 二宮修治（東京学芸大学）
薬科 実（東京学芸大学）
網干 守（成城学園高等学校）
大沢真澄（東京学芸大学）
石材鑑定 陳内主一（群馬県立自然科学資料館）
地中レーザ 渡辺広勝（テラ・イン・ホームーション・エンジニアリング）
- 発掘調査および出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関に御教示、御協力を賜った。（敬称略）
野村 崇（北海道開拓記念館）、林 謙作（北海道大学）、工藤研治（北海道埋蔵文化財センター）、富樫 幸時（秋田県埋蔵文化財センター）、秋本信夫（鹿角市教育委員会）、藤井安正（よねしろ考古学研究所）、佐藤 樹（よねしろ考古学研究所）、仲田茂司（福島県三春町教育委員会）、海老原郁雄（宇都宮商業高校）、相澤貞順（前

橋立女子大学高校）、赤山容造（群馬県企業局）、井上 太（富岡市教育委員会）、内田憲治（新里村教育委員会）、小宮俊久（新田町教育委員会）、小安和順（甘楽町教育委員会）、菊池誠一（吉井高校）、藤原幹夫（富岡市教育委員会）、新藤 彰（榑東村教育委員会）、田口 修（松井田町教育委員会）、小林進雄（國學院大学）、橋枝 努（東京国立博物館）、宮澤義人（シン航空写真株式会社）、栗原文蔵（埼玉県立歴史資料館）、秋山道生（板橋区教育委員会）、小栗一夫（東京都埋蔵文化財センター）、棚生直彦（多摩市教育委員会）、都築恵美子（鎌倉市教育委員会）、小杉 康（明治大学大学院）、内山博可（シン航空写真株式会社）、鈴木保彦（日本大学）、園 俊彦、原塚正典（慶応義塾大学）、山本輝久（神奈川県立埋蔵文化財センター）、戸田哲也（玉川大学）、今井 亮（大井町史編纂委員会）、橋口尚武（武蔵村山東高校）、大賀 健（山武考古学研究所）、千田華生（山武考古学研究所）、肥田順一（山武考古学研究所）、平田貴正（山武考古学研究所）、近江屋成陽（山武考古学研究所）、北村 亮（新潟県教育委員会）、渡辺明和（新津市教育委員会）、平林 彰（長野県埋蔵文化財調査センター）、群馬考古学研究会、よねしろ考古学研究会、学習院大学考古学研究会、群馬県立女子大学考古学研究会、富岡市教育委員会、富岡市農協、甘楽町教育委員会

凡 例

- 本書中の遺構番号は発掘調査時に付したものをそのまま使用しているが、以下の遺構名称は整理作業の過程で変更している。

調査時	整理時
13号配石遺構	17号配石遺構
18号配石遺構	12号外埋設土器
19号配石遺構	22号土壌
39号配石遺構	2号整穴住居跡
42号配石遺構	21号土壌
1号集 石	13号配石遺構
第2集 石 群	19号配石遺構

- 本書の遺構・遺物挿入の指示は次のとおりである。
 - 挿入縮尺
環状列石……………1/80、1/160、1/300
敷石住居跡・整穴住居跡・配石遺構……1/40
1/80
屋外埋設土器・土壌……………1/20
土器実測図……………1/4、土器展開図は1/6
土器拓本図……………1/3
石器実測図……………1/6、1/8
全体図……………1/200
 - 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第IX系である。
 - 水糸レベルは標高を示す。
 - 遺物番号は本文、挿入表と一致する。

(5) 挿入中のスクリーン・トーンの指示は各挿入中に示してある。

(6) 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖(1976)に基づいている。

7. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1(「富岡」)地形図を使用した。

【編集】

菊池 実

【執筆】

網子 守(成城学園高等学校)

飯塚 聡(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

井上 麗(第4紀地質研究所)

大沢 眞彦(東京学芸大学)

長田正宏(株式会社 ズコーシャ)

菊池 実(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

桜井美枝(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

陣内圭一(群馬県立自然科学資料館)

徳江 紀(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

中野益男(帯広畜産大学)

中野寛子(株式会社 ズコーシャ)

二宮修治(東京学芸大学)

福島道広(株式会社 ズコーシャ)

渡辺広勝(テラ・イン・ホームーション・エンジニアリング)

薬科 実(東京学芸大学)

【写真撮影】

飯塚 聡(遺構写真)

菊池 実(#)

佐藤元彦(遺物写真 群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)

シン航空写真株式会社(航空写真 モザイク写真)

国際航空株式会社(航空写真 測量図)

中央航空株式会社(航空写真)

【測量・トレース】

株式会社 洞研

【保存科学】

関 邦一(群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)

北爪健二(# 嘱託員)

小村浩一(# 補助員)

【整理補助員】

宇田川千恵 小嶋八重子 小林 幸子 湯浅美枝子

堀 由美子 渡部 重子 大川万里子 若佐美枝

瀧井 久子 入江 由美 菊池スミ子 横尾 友子

(岡越道上越線調査事務所整理補助員)

中村 奈津(鶴見大学)

【事務 昭和61年4月～平成2年9月】

岡越道上越線調査事務所長

井上 信(昭和61～63年度)

高橋 一夫(平成元～2年度)

総括次長 片桐 光一(昭和62～平成元年度)

大澤 友治(平成2年度)

次 長 原田 恒弘(昭和62年度)

徳江 紀(昭和63～平成2年度)

課 長 長谷部道雄(昭和61年度)

鬼形 芳夫(昭和63～平成2年度)

庶務課係長代理

黒沢 重樹(昭和61～63年度)

宮川初太郎(平成元～2年度)

主任 国定 均(昭和63～平成元年度)

主任 笠原 秀樹(平成2年度)

庶務課臨時職員

山崎 郁雄 神戸市四郎 松井 留雄

町田 康子 本城 美樹 後関 玲子

田中知恵美

(本部)

常務理事 白石保三郎(昭和61～63年度)

邊見 長雄(平成元～2年度)

事務局長 井上 唯雄(昭和61～62年度)

松本 浩一(昭和63～平成2年度)

管理部長 大沢 秋良(昭和61年度)

田口 紀雄(昭和62～平成2年度)

調査研究部長 上原 晋巳(昭和61～63年度)

神保 伯史(平成元～2年度)

(内部協力者)

須田朋子 板岡正信 鹿沼栄輔 春山秀幸 綿貫鋭次

郎 関口功一 依田治雄 石島和夫 松村和男 小林

裕二 小島達夫 船橋 亨 亀山幸弘

【発掘調査従事者 敬称略】

秋山いね 浅香時子 浅香法子 浅香春道 浅香重作

新井樺次 新井ミツ 新井光江 新井美代 新井重幸

新井英子 飯間 操 野野口久代 岩井みち子 岩井

幸雄 井田松寿 飯塚君子 飯塚豊作 飯塚リキ 飯

塚静枝 浦辺重代 江原秋江 江原恵子 大野かつ子

小柏洋子 折茂たき子 帯川よう子 笠原正五 加藤

あいつ 金田キヨ子 木戸ふぢ子 衣川 勉 黒沢利

次 黒沢 広 黒沢富久子 工藤和枝 熊井戸和子

久保みち子 小出伸一 高岡まき 小林忠男 渡藤徳

治 斉藤はつ江 斉藤君代 酒井よし江 酒井紀江

左瀬利政 清水きよ子 清水道雄 藤崎かほる 神宮

政江 神宮儀一 鈴木ふじ江 鈴木みや 須賀隆雄

須賀尚子 関谷ろく 関口治郎 関口とみ子 高木基

三郎 高木とり 高岡幸子 高橋ふき 高橋和子 高

橋 守 田村梅之祐 田村嘉三郎 田村カメ 田村ふ

み 谷川あき子 長岡三郎 中野初次郎 中野セツ

中野利一 中野道子 中村保男 野口藤巳 橋本マユ

深沢恒一 福田玄十郎 布瀬川千代松 布瀬川はつ子

堀口 巖 松井キクコ 松井シズ江 松井昌子 松井

洋子 松浦みや 丸沢君枝 宮前美恵子 宮下きわ子

森平文男 森平玲子 矢島みどり 山崎章子 山内勝

山 山本剛二郎 山田カフ 山田けさ子 山田長治

山田茂樹 山田タケ 山田ツネ 八木はな 吉田さく

渡辺一女 渡辺武江

【群馬県立女子大学】

木本綾子 志田尚子 小笠原直子

【学習院大学】

若淵合治 江藤正浩 尾田倫一 松本右子

【筑波大学】

谷中 隆 有田貴紅葉 沖松信隆 山田康弘

【日本大学】

長 義之

抄 録

1 遺跡の概略

当遺跡は群馬県富岡市田篠に所在する。調査対象地は、富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。この地域は鍋川の支流雄川によって形成された扇状地のほぼ扇中央部にあたる。発掘調査は昭和61（1986）年5月28日から昭和62（1987）年12月27日までの1年7か月間実施された。調査当初、遺跡は田篠遺跡として命名されてきたが、昭和63（1988）年8月に上越線関連の遺跡名検討が行われた結果、遺跡名は大字小字名の連記を原則として、従来の遺跡名は事業名称として残すことになった。このため、田篠遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は田篠上平遺跡に、0・Ⅰ区は田篠中原遺跡として分離され、田篠遺跡は事業名称として残ることになった。田篠上平遺跡は古墳、奈良～平安時代の遺跡であり、平成元（1989）年3月に当事業団から報告書が刊行されている。

2 遺構数量

当遺跡の調査面積は約15,800㎡であり、縄文時代中期加曾利E3式期～加曾利E4式期の集落が調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

種 別	時 代	数 量	備 考
環 状 列 石	縄 文 時 代 中 期	1	径約38mを有する。集落の広場部分に構築。加曾利E3式期に構築され、加曾利E4式期まで機能。
敷 石 住 居 跡	縄 文 時 代 中 期	11	加曾利E3式期7軒、加曾利E4式期4軒。
竪 穴 住 居 跡	縄 文 時 代 中 期	2	加曾利E3式期2軒。
配 石 遺 構	縄 文 時 代 中 期	36	加曾利E3～E4式期にかけて構築。
屋 外 埋 設 土 器	縄 文 時 代 中 期	12	加曾利E3～E4式期にかけて構築。
土 壇	縄 文 時 代 中 期	22	加曾利E3～E4式期にかけて構築。
鹿 野 場 跡	縄 文 時 代 中 期	1	加曾利E3～E4式期にかけて使用。

3 まとめ

縄文時代中期集落（加曾利E3～E4式期）のほぼ全容を調査することができた。集落の広場部分には径約38mの環状列石が構築され、この列石を囲うようにE3～E4式期の敷石住居跡が構築されていた。集落の規模は東西約250mである。E4式期の敷石住居跡は総て柄杓形を呈し、環状列石に近接して構築されている。環状列石下、また環状列石内部の掘り下げも実施したが、土壇の検出は列石下から1基、内部から1基の検出にとどまった。まとまった土壇群は環状列石外から検出された。

自然科学的分析として、残存脂肪分析、土器の胎土分析、黒曜石産地同定、石材分類、地中レーダ分析を掲載した。

4 その他

- 1) 現地説明会 昭和61年10月11・12日 昭和62年9月12・13日
- 2) 講 演 会 甘楽町教育委員会主催の町民文化講座
- 3) 雑 誌 発 表 『群馬文化 第209号』昭和61年 『考古学ジャーナル No285』昭和62年 『東国史論 第3号』昭和63年
- 4) 研 究 発 表 日本考古学協会第54回総会（昭和63年度）研究発表

田篠中原遺跡

- 1章 調査の経過
- 2章 遺跡の立地と環境
- 3章 縄文時代の配石遺構群と遺物
- 4章 自然科学的分析
- 5章 成果と問題点

1章 調査の経過

- (1) 調査に至る経過…………… 2
徳江 紀
- (2) 調査の経過(日誌)…………… 3
菊池 実
- (3) 調査の方法…………… 7
菊池 実
- (4) 基本土層…………… 9
菊池 実
- (5) 整理事業の経過…………… 10
菊池 実

2章 遺跡の立地と環境

- (1) 地理的環境…………… 12
飯塚 聡
- (2) 歴史的環境…………… 16
菊池 実
- (3) 隣接遺跡の状況…………… 19
飯塚 聡

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

- (1) 配石遺構群の概要…………… 22
菊池 実
- (2) 環状列石と立石……………23~48
菊池 実
- (3) 敷石住居跡……………49~173
菊池 実
 - 1号配石遺構…………… 49
 - 2号配石遺構…………… 55
 - 5号配石遺構…………… 58
 - 8号配石遺構…………… 66
 - 17号配石遺構…………… 77
 - 23号配石遺構…………… 86
 - 24号配石遺構……………101
 - 26号配石遺構……………125
 - 36号配石遺構……………137
 - 37号配石遺構……………153
 - 38号配石遺構……………165
- (4) 竪穴住居跡……………173~197
菊池 実
 - 1号竪穴住居跡……………173

- 2号竪穴住居跡……………180
- (5) 配石遺構……………190~373

菊池 実

- 3号配石遺構……………198
- 4号配石遺構……………200
- 6号配石遺構……………206
- 7号配石遺構……………211
- 9号配石遺構……………218
- 10号配石遺構……………222
- 11号配石遺構……………224
- 12号配石遺構……………229
- 14号配石遺構……………234
- 15号配石遺構……………238
- 16号配石遺構……………240
- 18号配石遺構……………244
- 20号配石遺構……………248
- 21号配石遺構……………256
- 22号配石遺構……………259
- 25号配石遺構……………265
- 27号配石遺構……………272
- 28号配石遺構……………278
- 29号配石遺構……………283
- 30号配石遺構……………289
- 31号配石遺構……………295
- 32号配石遺構……………302
- 33号配石遺構……………307
- 34号配石遺構……………315
- 35号配石遺構……………322
- 40号配石遺構……………327
- 13号配石遺構……………333
- 41号配石遺構……………334
- 43号配石遺構……………341
- 44号配石遺構……………342
- 45号配石遺構……………348
- 46号配石遺構……………352
- 47号配石遺構……………359
- 48号配石遺構……………365
- 49号配石遺構……………369
- 50号配石遺構……………370

- (6) 屋外埋設土器……………374~390

菊池 実

- 1号屋外埋設土器……………374
- 2号屋外埋設土器……………374
- 3号屋外埋設土器……………376
- 4号屋外埋設土器……………376
- 5号屋外埋設土器……………376
- 6号屋外埋設土器……………378

7号屋外埋設土器	378
8号屋外埋設土器	378
9号屋外埋設土器	378
10号屋外埋設土器	382
11号屋外埋設土器	382
12号屋外埋設土器	382

〔7〕配石墓・土墳墓・土坑

.....391~411

菊池 実

1号土壇	391
2号土壇	391
3号土壇	391
4号土壇	392
5号土壇	392
6号土壇	392
7号土壇	392
8号土壇	393
9号土壇	393
10号土壇	393
11号土壇	393
12号土壇	403
13号土壇	403
14号土壇	403
15号土壇	403
16号土壇	403
17号土壇	404
18号土壇	404
19号土壇	404
20号土壇	404
21号土壇	404
22号土壇	405

〔8〕廃棄場所

菊池 実

〔9〕グリッド

菊池 実

4章 自然科学的分析

〔1〕田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

.....426~454

中野 益男

福島道広

中野 寛子

長田 正安

〔2〕田篠中原遺跡の縄文土器

胎土分析.....455~466

—X線回折試験及び電子顕微鏡観察—

井上 巖

〔3〕田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定

.....467~472

二宮 修治

藁科 実

網干 守

大沢 真澄

〔4〕田篠中原遺跡で見られる石材の種類と地質的関連

.....473~484

陣内 圭一

〔5〕遺跡調査における地中

レーダの活用.....485~504

渡辺 広勝

5章 成果と問題点

〔1〕田篠中原遺跡の提起する

諸問題.....505~512

- 1 環状列石
- 2 敷石住居跡
- 3 配石遺構
- 4 埋 壙
- 5 屋外埋設土器
- 6 土 壇

菊池 実

飯塚 昭

〔2〕出土石器の検討

.....513~517

—多孔石・凹石・石皿・磨石を中心として—

菊池 実

〔3〕田篠中原遺跡出土石斧

について.....518~520

桜井 美枝

PLATES

別添資料

付図 1 田篠中原遺跡全体図

2 環状列石全体図

3 環状列石石材別分布図

4 環状列石重量別分布図

挿 図 目 次

第 1 図	発掘区配置図	8	第 60 図	17号配石遺構重量別分布	81
第 2 図	O区・I区基本土層	9	第 61 図	17号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	82
第 3 図	調査地周辺の地質図	13	第 62 図	17号配石遺構出土土器	83
第 4 図	周辺地形の模式図	14・15	第 63 図	17号配石遺構出土土器	84
第 5 図	田舎中原道跡と周辺の縄文時代遺跡	17	第 64 図	23号配石遺構 鈔 (左)・先端部埋壁 (右)	86
第 6 図	環状列石全体図と埋設土器分布	24	第 65 図	23号配石遺構	87・88
第 7 図	環状列石 (部分 1)	27	第 66 図	23号配石遺構土器出土状況	89
第 8 図	環状列石 (部分 2)	28	第 67 図	23号配石遺構土器出土状況	90・91
第 9 図	環状列石 (部分 3)	29	第 68 図	23号配石遺構石材別分布	92
第 10 図	環状列石 (部分 4)	30	第 69 図	23号配石遺構重量別分布	93
第 11 図	環状列石 石皿・多孔石出土状況	31	第 70 図	23号配石遺構出土土器 (1)	95
第 12 図	環状列石 凹石・磨石・打製石斧等出土状況	32	第 71 図	23号配石遺構出土土器 (2)	96
第 13 図	環状列石出土土器 (1)	34	第 72 図	23号配石遺構出土土器 (1)	98
第 14 図	環状列石出土土器 (2)	35	第 73 図	23号配石遺構出土土器 (2)	99
第 15 図	環状列石出土土器 (1)	38	第 74 図	24号配石遺構 先端部埋壁 (左)・ 接縫部埋壁 (右)	101
第 16 図	環状列石出土土器 (2)	39	第 75 図	24号配石遺構	102・103
第 17 図	環状列石出土土器 (3)	40	第 76 図	24号配石遺構土器出土状況	104・105
第 18 図	環状列石出土土器 (4)	41	第 77 図	24号配石遺構土器出土状況	106・107
第 19 図	環状列石出土土器 (5)	42	第 78 図	24号配石遺構石材別分布	108
第 20 図	環状列石出土土器 (6)	43	第 79 図	24号配石遺構重量別分布	109
第 21 図	環状列石出土土器 (7)	44	第 80 図	24号配石遺構出土土器 (1)	111
第 22 図	環状列石出土土器 (8)	45	第 81 図	24号配石遺構出土土器 (2)	112
第 23 図	立石の石材別グラフ	46	第 82 図	24号配石遺構出土土器展開図	折り込み
第 24 図	立石	47	第 83 図	24号配石遺構出土土器 (3)	115
第 25 図	立石出土土器	48	第 84 図	24号配石遺構出土土器 (4)	116
第 26 図	1号配石遺構	49	第 85 図	24号配石遺構出土土器 (5)	117
第 27 図	1号配石遺構 鈔 (左)・埋壁 (右)	50	第 86 図	24号配石遺構出土土器 (1)	121
第 28 図	1号配石遺構遺物出土状況	51	第 87 図	24号配石遺構出土土器 (2)	122
第 29 図	1号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	51	第 88 図	24号配石遺構出土土器 (3)	123
第 30 図	1号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布	52	第 89 図	24号配石遺構出土土器 (4)	124
第 31 図	1号配石遺構出土土器	53	第 90 図	26号配石遺構	折り込み
第 32 図	1号配石遺構出土土器	54	第 91 図	26号配石遺構遺物出土状況	折り込み
第 33 図	2号配石遺構	55	第 92 図	26号配石遺構 鈔 (左)・埋壁 (右)	127
第 34 図	2号配石遺構 鈔 (左)・埋壁 (右)	56	第 93 図	26号配石遺構石材別分布	折り込み
第 35 図	2号配石遺構遺物出土状況	56	第 94 図	26号配石遺構重量別分布	折り込み
第 36 図	2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布	56	第 95 図	26号配石遺構出土土器 (1)	132
第 37 図	2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	57	第 96 図	26号配石遺構出土土器 (2)	133
第 38 図	2号配石遺構出土土器	58	第 97 図	26号配石遺構出土土器 (3)	134
第 39 図	5号配石遺構	59	第 98 図	26号配石遺構出土土器	137
第 40 図	5号配石遺構 鈔 (上)・埋壁 (下)	60	第 99 図	36号配石遺構	138・139
第 41 図	5号配石遺構遺物出土状況	61	第100 図	36号配石遺構 鈔・接縫部埋壁・先端部埋壁	140
第 42 図	5号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	61	第101 図	36号配石遺構遺物出土状況	142・143
第 43 図	5号配石遺構 石材別 (上)・重量別 (下) 分布	62	第102 図	36号配石遺構石材別分布	144
第 44 図	5号配石遺構出土土器	63	第103 図	36号配石遺構重量別分布	145
第 45 図	5号配石遺構出土土器 (1)	65	第104 図	36号配石遺構出土土器 (1)	147
第 46 図	5号配石遺構出土土器 (2)	66	第105 図	36号配石遺構出土土器 (2)	148
第 47 図	8号配石遺構	67	第106 図	36号配石遺構出土土器 (1)	149
第 48 図	8号配石遺構 接縫部埋壁 (左)・鈔 (右)	68	第107 図	36号配石遺構出土土器 (2)	150
第 49 図	8号配石遺構遺物出土状況	69	第108 図	36号配石遺構出土土器 (3)	151
第 50 図	8号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布とグラフ	70	第109 図	36号配石遺構出土土器 (4)	152
第 51 図	8号配石遺構出土土器 (1)	72	第110 図	37号配石遺構	154・155
第 52 図	8号配石遺構出土土器展開図	73	第111 図	37号配石遺構遺物出土状況	156・157
第 53 図	8号配石遺構出土土器 (2)	74	第112 図	37号配石遺構石材別分布	158
第 54 図	8号配石遺構出土土器 (3)	75	第113 図	37号配石遺構重量別分布	159
第 55 図	8号配石遺構出土土器	77	第114 図	37号配石遺構出土土器	160
第 56 図	17号配石遺構 鈔	78	第115 図	37号配石遺構出土土器 (1)	162
第 57 図	17号配石遺構	79	第116 図	37号配石遺構出土土器 (2)	163
第 58 図	17号配石遺構遺物出土状況	80	第117 図	37号配石遺構出土土器 (3)	164
第 59 図	17号配石遺構石材別分布	81	第118 図	38号配石遺構	166

第119回	38号配石道溝遺物出土状況	167	第182回	11号配石道溝出土土器	228
第120回	38号配石道溝石材別分布	168	第183回	11号配石道溝出土土器	229
第121回	38号配石道溝重量別分布	169	第184回	12号配石道溝	230
第122回	38号配石道溝出土土器	171	第185回	12号配石道溝遺物出土状況	231
第123回	38号配石道溝出土土器	173	第186回	12号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	231
第124回	1号竪穴住居跡	174	第187回	12号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) 分布	232
第125回	1号竪穴住居跡	175	第188回	12号配石道溝出土土器	232
第126回	1号竪穴住居跡遺物出土状況	176	第189回	12号配石道溝出土土器	233
第127回	1号竪穴住居跡出土土器 (1)	178	第190回	14号配石道溝	234
第128回	1号竪穴住居跡出土土器 (2)	179	第191回	14号配石道溝遺物出土状況	235
第129回	1号竪穴住居跡出土土器	180	第192回	14号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	235
第130回	2号竪穴住居跡	181	第193回	14号配石道溝石材別分布	236
第131回	2号竪穴住居跡土器出土状況	折り込み	第194回	14号配石道溝重量別分布	236
第132回	2号竪穴住居跡土器出土状況	折り込み	第195回	14号配石道溝出土土器	237
第133回	2号竪穴住居跡出土土器 (1)	187	第196回	14号配石道溝出土土器	238
第134回	2号竪穴住居跡出土土器 (2)	188	第197回	15号配石道溝	239
第135回	2号竪穴住居跡出土土器 (3)	189	第198回	15号配石道溝 重量別 (左)・石材別 (右) 分布	239
第136回	2号竪穴住居跡出土土器 (4)	190	第199回	15号配石道溝出土土器	239
第137回	2号竪穴住居跡出土土器 (5)	191	第200回	16号配石道溝	240
第138回	2号竪穴住居跡出土土器 (6)	194	第201回	16号配石道溝遺物出土状況	241
第139回	2号竪穴住居跡出土土器 (7)	195	第202回	16号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	241
第140回	2号竪穴住居跡出土土器 (3)	196	第203回	16号配石道溝重量別分布	242
第141回	3号配石道溝	198	第204回	16号配石道溝重量別分布	242
第142回	3号配石道溝遺物出土状況と石材別グラフ	198	第205回	16号配石道溝出土土器	243
第143回	3号配石道溝重量別分布とグラフ	199	第206回	16号配石道溝出土土器	244
第144回	3号配石道溝出土土器	199	第207回	19号配石道溝	折り込み
第145回	4号配石道溝	200	第208回	19号配石道溝石材別分布	246
第146回	4号配石道溝遺物出土状況	201	第209回	19号配石道溝重量別分布	246
第147回	4号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	201	第210回	19号配石道溝出土土器	247
第148回	4号配石道溝 石材別 (上)・重量別 (下) 分布	202	第211回	20号配石道溝	249
第149回	4号配石道溝出土土器	203	第212回	20号配石道溝遺物出土状況	250
第150回	4号配石道溝出土土器 (1)	204	第213回	20号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	250
第151回	4号配石道溝出土土器 (2)	205	第214回	20号配石道溝 石材別 (上)・重量別 (下) 分布	251
第152回	6号配石道溝	206	第215回	20号配石道溝出土土器	253
第153回	6号配石道溝遺物出土状況	207	第216回	20号配石道溝出土土器	255
第154回	6号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	207	第217回	21号配石道溝	256
第155回	6号配石道溝石材別分布	208	第218回	21号配石道溝出土土器	256
第156回	6号配石道溝重量別分布	208	第219回	21号配石道溝遺物出土状況	257
第157回	6号配石道溝出土土器	209	第220回	21号配石道溝石材別分布	257
第158回	6号配石道溝出土土器	210	第221回	21号配石道溝重量別分布	257
第159回	7号配石道溝	211	第222回	21号配石道溝出土土器	258
第160回	7号配石道溝遺物出土状況	212	第223回	22号配石道溝	260
第161回	7号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	212	第224回	22号配石道溝遺物出土状況	261
第162回	7号配石道溝石材別分布	213	第225回	22号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	261
第163回	7号配石道溝重量別分布	213	第226回	22号配石道溝石材別分布	262
第164回	7号配石道溝出土土器 (1)	215	第227回	22号配石道溝出土土器	262
第165回	7号配石道溝出土土器 (2)	216	第228回	22号配石道溝重量別分布	263
第166回	7号配石道溝出土土器	217	第229回	22号配石道溝出土土器 (1)	264
第167回	9号配石道溝	218	第230回	22号配石道溝出土土器 (2)	265
第168回	9号配石道溝遺物出土状況	219	第231回	25号配石道溝	266
第169回	9号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	219	第232回	25号配石道溝遺物出土状況	267
第170回	9号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) 分布	220	第233回	25号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	267
第171回	9号配石道溝出土土器	220	第234回	25号配石道溝石材別分布	268
第172回	9号配石道溝出土土器	221	第235回	25号配石道溝重量別分布	269
第173回	10号配石道溝	222	第236回	25号配石道溝出土土器	270
第174回	10号配石道溝石材別分布とグラフ	222	第237回	25号配石道溝出土土器	272
第175回	10号配石道溝重量別分布とグラフ	223	第238回	27号配石道溝	273
第176回	10号配石道溝出土土器	223	第239回	27号配石道溝遺物出土状況	274
第177回	11号配石道溝	224	第240回	27号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	274
第178回	11号配石道溝遺物出土状況	225	第241回	27号配石道溝石材別分布	275
第179回	11号配石道溝 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ	225	第242回	27号配石道溝重量別分布	275
第180回	11号配石道溝石材別分布	226	第243回	27号配石道溝出土土器	276
第181回	11号配石道溝重量別分布	227	第244回	27号配石道溝出土土器	277

第245図	28号配石遺構	278	第306図	41号配石遺構重量別分布	336
第246図	28号配石遺構遺物出土状況	279	第306図	41号配石遺構出土土器(1)	338
第247図	28号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	279	第307図	41号配石遺構出土土器(2)	339
第248図	28号配石遺構石材別分布	280	第308図	41号配石遺構出土土器	340
第249図	28号配石遺構重量別分布	280	第309図	43号配石遺構	341
第250図	28号配石遺構出土土器	281	第310図	43号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	342
第251図	29号配石遺構	283	第311図	43号配石遺構出土遺物	342
第252図	29号配石遺構遺物出土状況	284	第312図	44号配石遺構	折り込み
第253図	29号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	284	第313図	44号配石遺構石材別分布	折り込み
第254図	29号配石遺構重量別分布	285	第314図	44号配石遺構重量別分布	折り込み
第255図	29号配石遺構重量別分布	286	第315図	44号配石遺構出土土器	346
第256図	29号配石遺構出土土器	287	第316図	44号配石遺構出土土器	347
第257図	29号配石遺構出土土器	289	第317図	45号配石遺構	折り込み
第258図	30号配石遺構	290	第318図	45号配石遺構石材別分布	折り込み
第259図	30号配石遺構遺物出土状況	291	第319図	45号配石遺構重量別分布	折り込み
第260図	30号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	291	第320図	45号配石遺構出土土器	351
第261図	30号配石遺構石材別分布	292	第321図	45号配石遺構出土土器	352
第262図	30号配石遺構重量別分布	292	第322図	46号配石遺構	折り込み
第263図	30号配石遺構出土土器	293	第323図	46号配石遺構石材別分布	折り込み
第264図	30号配石遺構出土土器	295	第324図	46号配石遺構重量別分布	折り込み
第265図	31号配石遺構	296	第325図	46号配石遺構出土土器(1)	355
第266図	31号配石遺構遺物出土状況と 石材別(左)・重量別(右) グラフ	297	第326図	46号配石遺構出土土器(2)	356
第267図	31号配石遺構石材別分布	298	第327図	46号配石遺構出土土器	359
第268図	31号配石遺構重量別分布	299	第328図	47号配石遺構	360
第269図	31号配石遺構出土土器	300	第329図	47号配石遺構遺物出土状況	361
第270図	31号配石遺構出土土器	301	第330図	47号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	361
第271図	32号配石遺構	302	第331図	47号配石遺構 石材別(上)・重量別(下) 分布	362
第272図	32号配石遺構遺物出土状況	303	第332図	47号配石遺構出土土器	363
第273図	32号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	303	第333図	47号配石遺構出土土器	365
第274図	32号配石遺構石材別分布	304	第334図	48号配石遺構	366
第275図	32号配石遺構重量別分布	305	第335図	48号配石遺構遺物出土状況と出土土器	367
第276図	32号配石遺構出土土器	306	第336図	48号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	367
第277図	32号配石遺構出土土器	307	第337図	48号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布	368
第278図	33号配石遺構	折り込み	第338図	48号配石遺構出土土器	369
第279図	33号配石遺構石材別分布	折り込み	第339図	49号配石遺構	369
第280図	33号配石遺構重量別分布	折り込み	第340図	49号配石遺構 石材別(上)・重量別(下) 分布	369
第281図	33号配石遺構出土土器(1)	311	第341図	49号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	370
第282図	33号配石遺構出土土器(2)	312	第342図	50号配石遺構	371
第283図	33号配石遺構出土土器	314	第343図	50号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ	372
第284図	34号配石遺構	316	第344図	50号配石遺構出土土器	373
第285図	34号配石遺構遺物出土状況	317	第345図	1・2号屋外埋設土器	375
第286図	34号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ	318	第346図	3・4・5号屋外埋設土器	377
第287図	34号配石遺構出土土器(1)	319	第347図	6・7号屋外埋設土器	379
第288図	34号配石遺構出土土器(2)	320	第348図	8・9・10・11号屋外埋設土器	380
第289図	34号配石遺構出土土器	321	第349図	12号屋外埋設土器	381
第290図	35号配石遺構	322	第350図	1・2・3号屋外埋設土器	383
第291図	35号配石遺構石材別分布	323	第351図	4・5・6・7・9号屋外埋設土器	384
第292図	35号配石遺構重量別分布	324	第352図	8・10・11・12号屋外埋設土器	385
第293図	35号配石遺構出土土器	325	第353図	屋外埋設土器展開図(1・2・3 6・9・12号) 折り込み	
第294図	35号配石遺構出土土器	327	第354図	屋外埋設土器出土土器	389
第295図	40号配石遺構遺物出土状況	328	第355図	土壌(1・2・3号)	394
第296図	40号配石遺構	折り込み	第356図	土壌(4・5・6・7号)	395
第297図	40号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) 分布とグラフ 折り込み	331	第357図	土壌(8・9号)	396
第298図	40号配石遺構出土土器	333	第358図	土壌(10・11・12・13号)	397
第299図	40号配石遺構出土土器	331	第359図	土壌(14・15・16号)	398
第300図	13号配石遺構	333	第360図	土壌(17・18・19号)	399
第301図	41号配石遺構	334	第361図	土壌(20・21号)	400
第302図	41号配石遺構遺物出土状況	335	第362図	22号土器	折り込み
第303図	41号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ	335	第363図	土壌出土土器	407
第304図	41号配石遺構石材別分布	336	第364図	土壌出土土器(1)	408
			第365図	土壌出土土器(2)	409

第366図	土曜出土石器(3)	410
第367図	廃棄場所遺物出土状況	412・413
第368図	廃棄場所出土石器	414
第369図	廃棄場所出土石器(1)	415
第370図	廃棄場所出土石器(2)	416
第371図	グリッド別中期土器分布図(点数)	418
第372図	グリッド別中期土器分布図(重量)	419
第373図	グリッド別石函分布図	420
図 1	土曜試料採取地点(1-1~19)	427~429
図 2	重金屬分布(2-1~10)	431・432
図 3	各遺構から採取した土壌のリン分布	432
表 1	試料の残存率抽出量および抽出率 (1-1~5)	432・434
表 2	コレステロールと シトステロールの割合(2-1~13)	435・436
図 4	残存する脂肪の脂肪酸組成(4-1~31)	439~442
図 5	残存する脂肪のステロール組成 (5-1~16)	442・445・446
図 6	残存する脂肪の脂肪酸組成変化経過 (6-1~17)	446~448・451
図 7	残存する脂肪の脂肪酸組成による 種別異性相関(7-1~17)	451~454
第 1 図	三角(A)・菱形(B)ダイヤグラム位置図	456
第 2 表	粘土性状表	458
第 2 図	(A) Mo、Mi、Hb 三角ダイヤグラム (B) Mo-Cb、Mi-Hb 菱形ダイヤグラム	460
第 3 図	Q ₁ -P ₁ 相関図	462・463

第 4 図	縄文土器X線回折図型	466
第 1 図	下仁田町付近の地質図	482
第 2 図	富岡市付近の地質図	483
図 1	礫状列石シュミレーション図	487
図 2		487
図 3	住居跡	489
図 4	住居跡	489
図 5	河溝・周溝・溝・堀跡	489
図 6	横穴入口部断面・横穴	490
図 7		490
図 8		491
図 9	トンネルの横断面データ	494
図 10	地中における表現例(雑群・空洞・埋設物)	494
図 11		495
図 12		495
図 13		496
図 14	埋設物体の反射面	497
図 15	リアルタイムパターン発生	498
図 16	ロー周波数での反射波の取得条件(溝の場合)	498
図 17	地中レーザ法に利用される電磁波パルス電	500
図 18	導体の電気特性	500
図 19	地中レーザ探査装置概要図	502
図 20	C/R 映像表示例	502
第 1 図	打製石斧分類概観図	518
第 2 図	打製石斧類型組成	518
第 3 図	打製石斧類型別石材組成	519
第 4 図	磨製石斧石材組成	520

PLATES

PL. 1	航空写真	PL. 32	24号配石遺構
PL. 2	航空写真(東から)	PL. 33	24号配石遺構
PL. 3	航空写真(東から)	PL. 34	24号配石遺構
PL. 4	航空写真 上(西から)・下(南から)	PL. 35	24号配石遺構・先端部埋塞
PL. 5	航空写真(北から)	PL. 36	24号配石遺構・先端部埋塞・裾縁部埋塞
PL. 6	1区全景	PL. 37	26号配石遺構・張出し部
PL. 7	0区全景	PL. 38	26号配石遺構・炉・先端部埋塞
PL. 8	モザイク写真	PL. 39	26号配石遺構
PL. 9	モザイク写真・下(礫状列石の部分拡大)	PL. 40	26号配石遺構
PL. 10	礫状列石	PL. 41	26号配石遺構・張出し部・炉
PL. 11	礫状列石	PL. 42	26号配石遺構・先端部埋塞・裾縁部埋塞・多孔石・ 石皿・丸石・磨製石斧
PL. 12	礫状列石(部分)		
PL. 13	礫状列石(部分)		
PL. 14	立石	PL. 43	27号配石遺構
PL. 15	1号配石遺構・埋塞・炉	PL. 44	27号配石遺構・張出し部
PL. 16	2号配石遺構・埋塞・炉	PL. 45	27号配石遺構
PL. 17	5・6号配石遺構	PL. 46	27号配石遺構
PL. 18	5号配石遺構	PL. 47	27号配石遺構・炉
PL. 19	5号配石遺構・炉・埋塞	PL. 48	27号配石遺構・立石・先端部埋塞・多孔石
PL. 20	7・8号配石遺構	PL. 49	28号配石遺構・埋塞
PL. 21	8号配石遺構	PL. 50	1号壁穴住居跡
PL. 22	8号配石遺構	PL. 51	2号壁穴住居跡
PL. 23	8号配石遺構	PL. 52	2号壁穴住居跡
PL. 24	8号配石遺構・張出し部	PL. 53	2号壁穴住居跡
PL. 25	8号配石遺構・炉・埋塞	PL. 54	3号配石遺構・4号配石遺構
PL. 26	17号配石遺構	PL. 55	6号配石遺構
PL. 27	17号配石遺構・炉・石皿	PL. 56	6号配石遺構・伏徳
PL. 28	23~26号配石遺構	PL. 57	7号配石遺構
PL. 29	23号配石遺構	PL. 58	8号配石遺構
PL. 30	23号配石遺構	PL. 59	9号配石遺構・10号配石遺構
PL. 31	23号配石遺構・張出し部・埋塞・炉	PL. 60	11号配石遺構
		PL. 61	12号配石遺構

- PL. 62 14号配石遺構・15号配石遺構
 PL. 63 16号配石遺構
 PL. 64 12号屋外埋設土器
 PL. 65 20号配石遺構
 PL. 66 21号配石遺構
 PL. 67 22号配石遺構
 PL. 68 22号配石遺構・埋塞
 PL. 69 27号配石遺構・28号配石遺構
 PL. 70 29号配石遺構
 PL. 71 30号配石遺構
 PL. 72 31号配石遺構
 PL. 73 32号配石遺構
 PL. 74 33号配石遺構
 PL. 75 33号配石遺構
 PL. 76 34号配石遺構・35号配石遺構
 PL. 77 40号配石遺構
 PL. 78 41号配石遺構・43号配石遺構
 PL. 79 44号配石遺構・45号配石遺構
 PL. 80 46号配石遺構・47号配石遺構
 PL. 81 48号配石遺構・多孔石
 PL. 82 49号配石遺構・50号配石遺構
 PL. 83 13号配石遺構・19号配石遺構
 PL. 84 1号屋外埋設土器・2号屋外埋設土器
 PL. 85 2号屋外埋設土器
 PL. 86 3号屋外埋設土器
 PL. 87 4号屋外埋設土器
 PL. 88 5号屋外埋設土器・6号屋外埋設土器
 PL. 89 7号屋外埋設土器・8号屋外埋設土器・9号屋外埋設土器
 10号屋外埋設土器
 PL. 90 1号土壇・2号土壇・3号土壇・4号土壇
 PL. 91 3号土壇・5号土壇
 PL. 92 6号土壇・7号土壇・8号土壇
 PL. 93 9号土壇・10号土壇・11号土壇・12号土壇・13号土壇
 PL. 94 14号土壇・15号土壇・16号土壇・17号土壇・18号土壇
 PL. 95 19号土壇・20号土壇
 PL. 96 21号土壇
 PL. 97 22号土壇・伏塞
 PL. 98 廃棄場所
 PL. 99 廃棄場所
 PL. 100 グリッド
 PL. 101 石棟出土状況・グリッド遺物出土状況・多孔石出土状況
 PL. 102 環状列石（土器・石器）
 PL. 103 環状列石（石器）
 PL. 104 環状列石（石器）・立石（石器）
 PL. 105 1号配石遺構（土器・石器） 2号配石遺構（土器）
 5号配石遺構（土器・石器）
 PL. 106 5号配石遺構（石器） 8号配石遺構（土器・石器）
 17号配石遺構（土器・石器）
 PL. 107 17号配石遺構（石器） 23号配石遺構（土器・石器）
 PL. 108 24号配石遺構（土器）
 PL. 109 24号配石遺構（土器・石器）
 PL. 110 24号配石遺構（石器） 26号配石遺構（土器）
 PL. 111 26号配石遺構（土器・石器） 36号配石遺構（土器・石器）
 PL. 112 36号配石遺構（石器）
 PL. 113 36号配石遺構（石器）
 PL. 114 37号配石遺構（土器・石器）
 PL. 115 37号配石遺構（石器） 38号配石遺構（土器・石器）
 1号竪穴住居跡（土器・石器） 2号竪穴住居跡（土器）
 PL. 116 2号竪穴住居跡（土器・石器）
 PL. 117 2号竪穴住居跡（石器）
 PL. 118 3号配石遺構（石器） 4号配石遺構（土器・石器）
 PL. 119 6号配石遺構（土器・石器） 7号配石遺構（土器・石器）
 9号配石遺構（土器・石器）
 PL. 120 9号配石遺構（石器） 10号配石遺構（土器）
 11号配石遺構（土器・石器） 12号配石遺構（土器・石器）
 13号配石遺構（土器） 14号配石遺構（土器・石器）
 15号配石遺構（石器）
 PL. 121 16号配石遺構（土器・石器） 19号配石遺構（土器・石器）
 20号配石遺構（土器・石器） 21号配石遺構（土器・石器）
 PL. 122 22号配石遺構（土器・石器） 25号配石遺構（土器・石器）
 27号配石遺構（土器）
 PL. 123 27号配石遺構（石器） 28号配石遺構（土器・石器）
 29号配石遺構（土器・石器） 30号配石遺構（土器・石器）
 31号配石遺構（土器）
 PL. 124 31号配石遺構（石器） 32号配石遺構（土器・石器）
 33号配石遺構（土器・石器）
 PL. 125 34号配石遺構（土器・石器） 35号配石遺構（土器・石器）
 40号配石遺構（土器・石器）
 PL. 126 41号配石遺構（土器・石器） 43号配石遺構（土器・石器）
 44号配石遺構（土器・石器） 45号配石遺構（土器・石器）
 PL. 127 46号配石遺構（土器・石器） 47号配石遺構（土器・石器）
 48号配石遺構（土器・石器） 50号配石遺構（石器）
 PL. 128 1号屋外埋設土器・2号屋外埋設土器・3号屋外埋設土器
 4号屋外埋設土器・5号屋外埋設土器・6号屋外埋設土器
 7号屋外埋設土器・8号屋外埋設土器・9号屋外埋設土器
 10号屋外埋設土器・11号屋外埋設土器・12号屋外埋設土器
 PL. 129 3号土壇・7号土壇・8号土壇・9号土壇・13号土壇・
 14号土壇・15号土壇・18号土壇
 PL. 130 19号土壇・22号土壇
 PL. 131 廃棄場所
 PL. 132 廃棄場所・グリッド

1章 調査の経過

1 調査に至る経過

上信越自動車道（関越自動車道上越線）は、首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘栗町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過、新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

群馬県側に係る埋蔵文化財の取り扱いには群馬県教育委員会が所管している。

昭和56年、藤岡市～松井田町間の路線発表があり、以後、インターチェンジ・サービスエリア等を中心にその設計について、日本道路公団から説明が行われてきた。

建設に係る埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な進展は、昭和59年に入ってからである。日本道路公団東京第2建設局と県教育委員会文化財保護課を中心に頻繁な事前協議が行われ、その結果、昭和59年11月28日付け、東京第2建設局長から県教育長あてに「関越自動車道上越線（藤岡市～下仁田町間）に係る埋蔵文化財包蔵地の分布調査について」の依頼があった。その根拠になったのは、昭和42年9月30日付け「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」第3項である。

分布調査の結果（その後の補正を含め）、発掘調査必要面積の約100万㎡が定まることになり、昭和60年には発掘調査計画が策定された。公団・県教委・文化庁の協議が繰り返され、文化庁から次の指導がなされている（昭和61年5月9日付文化庁次長より県教育長あて通知）。

事前の発掘調査等に遺漏のないよう（道路公団に）指導すると共に、東京第2建設局長あて文書の中に、埋蔵文化財の取り扱いについて遺漏のないようお願いするとして次の4点をあげている。

1 当該予定地に係る49箇所の遺跡[※]については、

工事の施工に先立って発掘調査を実施すること。

2 発掘調査の結果、重要な遺跡が発見された場合は、その保存について十分配慮すること。

3 当該予定地内において、未確認の遺跡が発見された場合は、その取り扱いについて十分配慮すること。

4 発掘調査後の措置については、群馬県教育委員会と協議すること。

※49箇所は後に55遺跡に変更された。

田篠遺跡は、昭和61年に上信越線の調査が開始された4つの遺跡の内の1つであり、昭和62年に調査を終了している。

当遺跡は、その遺構の性質上・調査上から、田篠上平遺跡・田篠中原遺跡の2つに分け、前者については、昭和63年度に整理と報告書の刊行が行われている。田篠遺跡全体の調査に至る経過については、田篠上平遺跡報告書に記述してあるので、それを参照していただきたい。

上信越線の整理事業については昭和63年度から始まっている。一般的に開発事業に伴う発掘調査は、工事工程に追われることから発掘調査をすべて終了させてから整理に入ることが多い。その場合、整理期間が長期にわたることから発掘と整理にギャップが生じ易く、また、予算についても問題点として指摘されていた。

今回、上信越線全体の発掘調査・整理事業の効率化をはかるという観点から、発掘調査と一部並行し、3班体制で上越線調査事務所で行われた。

当田篠中原遺跡の整理は平成元年4月～平成2年9月までの1年6カ月である。

上越線調査事務所での整理は平成3年度までとし、以後の整理は本部で行うことになっている。

2 調査の経過（日誌）

田篠遺跡は昭和61年4月、関越道上越線調査事務所開設と同時に発掘計画が進められた。当遺跡は県教育委員会文化財保護課による分布調査で、中央部（遺物分布濃密地区）22,800㎡、そこを挟んで、東に分布の薄い地区10,900㎡と西に要試験区約9,000㎡とに、3分割されていた。当遺跡内には南北に走る市道2本、農道2本があり、それによって分割される部分を西からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区とした。さらに要試験区は61年度調査の結果、遺構の継続が予想され0区とした。

整理作業を実施するにあたり、田篠遺跡0・Ⅰ区は田篠中原遺跡に、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区は田篠上平遺跡に分類されたが、調査は並行して実施している。田篠上平遺跡報文中ではⅡ～Ⅳ区検出の古墳、奈良～平安時代の遺構調査を中心に日誌がまとめられており、今回は0・Ⅰ区検出の縄文時代の遺構群の調査を中心に日誌を掲載する。

なお、日誌の記述にあたっては、調査の問題点等も記した。

昭和61（1986）年度

5月13日 日本道路公団富岡工事事務所へ打ち合わせ。発掘場所の図面、その他の資料をいただく。調査担当者は依田治雄、右島和夫、菊池 実の3名である。

5月16日 農道と事務所用地借地の件で打ち合わせ。富岡市教育委員会と発掘作業員雇用条件についての協議。

5月18日 作業員募集の広告と、事務所用地契約を行う。

5月21日 事務所用地的の桑の抜根作業及び整地。

5月23日 調査事務所建設。

5月24日 発掘調査工程について公団と打ち合わせ。またそのことについて農道へ連絡。

5月26日 作業員雇用受付開始。

5月27日 試掘トレンチ設定。桑の収穫終了まで調査に入れぬ畑もあり、調査会議にかけて、地層把握のための試掘トレンチを設定する。

5月28日 作業員が本日より出勤。試掘トレンチの発掘調査を開始する。

5月29日 基準杭打ち作業を（株）新研に委託。発掘機材を搬入。

6月3日 桑の収穫終了した畑から重機による抜根開始。

6月16日～25日 遺構確認作業を行う。

6月26日 縄文時代の遺構を検出。1号配石遺構・2号配石遺構と命名。

遺構名称について 1号配石遺構・2号配石遺構の調査を進めて行く過程では、これらの遺構が敷石住居跡になるものは想像もつかなかった。Ⅰ区調査区からは敷石住居跡とは確実に異なる配石遺構が多数検出され、それらと同一のものとも理解していた。その後、1・2号配石遺構に砂跡と思われる石組の存在と埋没の検出、さらに決定的であったのは5号配石遺構の調査結果であり、そこから1・2号配石遺構は敷石住居跡の残欠と判断されるに至った。このため、調査段階では敷石住居跡か配石遺構かの判断のつかないもの、確実に敷石住居跡と判断されるものも、遺物取り上げ時の混乱を防ぐ目的で、総てに配石遺構名称を付けて調査の円滑をはかった。

6月27日～7月10日 遺構確認作業を継続。

7月11日 Ⅰ区西端から縄文時代中期土器片が多数出土した。

7月12日～27日 遺構確認作業と精査。

7月28日 1号～5号配石遺構の写真撮影。

7月29日 遺構確認作業を継続。

7月30日 Fd-47・48グリッドから縄文時代中期の埋没土器を検出。土壌内に逆位状態で埋設されていた。本年度0区に調査が及んで、この土器が環状列石に伴うことが判明した。

Ⅰ区の調査



1章 調査の経過

屋外埋設土器について 住居内埋設と異なり、屋外に単独に、あるいは複数個体埋設された土器を指す。住居内埋設と同一範囲でとらえる報告書が多々見られるが、明らかに分離すべきである。

- 8月1日～7日 遺構確認作業を継続。
- 8月8日 読売新聞朝刊に遺跡の紹介記事が掲載される。
- 8月9日～25日 遺構確認作業、配石遺構の実測、遺物取り上げ等を行う。

配石遺構の実測作業 詳細な図面を作成するために、1/10実測を原則とした。敷石住居跡や土壇も同様である。というのも、配石遺構や敷石住居跡には多種多様な石が使用され、大石があれば、それら大石の押さえの小石も多量に出土していた。これらを実測するには1/20図面では不可能にちかかったからである。このため実測作業にあたっては、(株)開研の応援を得た。

- なお、塵状列石は規模が大きいため1/20実測図を作成した。
- 8月25日 武口 宏先生来跡。
- 8月26日～9月4日 遺構確認作業の継続。9号配石遺構までを検出した。
- 9月5日～12日 5・6・7・9・10号配石遺構の実測作業。10号配石遺構の写真撮影。
- 9月13日～18日 調査継続。
- 9月19日 レン航空写真株式会社(宮野義人氏、泉企業局の赤山容道氏来跡)。
- 9月20日 現地説明会の資料作成。
- 9月22日～29日 遺構確認作業、配石遺構の調査。
- 9月30日～10月4日 航空写真撮影のための1区全域の清掃。東京新聞社取材。
- 10月5日 ヘリコプター使用による航空写真撮影の実施(中央航業株式会社)。
- 10月6日～8日 現地説明会の準備。
- 10月9日 レン航空写真株式会社によるモザイク写真撮影の実施。

遺跡航空写真の撮影について 9月末日現在、幅約60m、長さ約230mの路線範囲で発掘調査を行っている。このうち約6,000㎡の調査区(I区)から縄文時代の配石遺構群を検出し、残りの調査区(II・III区)からは古墳、奈良～平安時代の集落を検出している。遺跡の立地、検出した遺構の配置を検討するために、航空写真撮影を実施した。撮影にあたっては、高高度・低高度による垂直写真および4方向(東西南北)からの斜め写真である。



敷石住居跡の調査

①高高度・低高度の垂直写真撮影。
高高度一周辺河川、地形および古墳群を明確に撮影できるように。

低高度一遺跡を中心とした撮影になるが、とりわけ配石遺構群が明確に撮影できるように。

②斜め写真撮影。
高高度からの4方向撮影を考えており、遺跡の立地(扇状地)を中心とした撮影。

上記撮影方法には、従来①クジコン機②パルン③航空機(セスナ機あるいはヘリコプター)使用による撮影が行われてきたが、過去の実績ならびに遺跡の条件を考慮してヘリコプター使用による撮影を実施した。

10月11・12日 現地説明会を開催。11日(土)は雨天にもかかわらず100余名の見学者、翌日は200余名集まり、総計330名に達した。このほかにTBSテレビ、日本テレビ、日本写真新聞社の取材があった。

現地説明会について 開催日の1カ月前より準備を始めた。案内の送付は、富岡市内の小・中・高等学校、甘藷町内の小・中学校、福島の町村教育委員会、近隣埋文事業団・同センターなどである。説明会は土・日曜日の2日間を設定し、時間は午前10時から午後3時までとした。小雨決行である。遺跡の見学と遺構および調査の方法について解説し、また、事務所において出土遺物および写真パネルを展示して解説を行った。遺跡パンフレットはB4版2つ折り、計1,000部を印刷配布した。

- 10月17日 8号配石遺構の写真撮影。
- 10月18日 育英高等学校の松本 保先生、生徒見学。
- 10月20日～26日 朝々の配石遺構の調査実施。
- 10月27日 甘藷町文化財調査委員来跡。
- 10月28日 朝倉陸奥高等学校の川原秀夫先生、生徒見学。
- 10月29日～11月4日 配石遺構の調査実施。
- 11月5日 青山学院大学の吉田章一郎先生、田村晃一先生、清水信行氏来跡。
- 11月5・7日 配石遺構と土壇の調査を行う。
- 11月8日 埼玉県埋蔵文化財調査事業団の職員、研修で来跡。
- 11月10日 2・3・7号土壇と2号屋外埋設土器の遺物取り上げを実施した。
- 11月12日 文化庁の岡本調査官来跡。
- 11月13日 3・4号土壇と4号屋外埋設土器の調査。
- 11月14日 残存動物分析土壇採取の指導で、帯広畜産大学の中野益雄先生と北海道測量国土社の長田正宏所長来



写真撮影の準備

2 調査の経過（日誌）

跡。

残存跡分析について 住居内埋土、屋外埋設土器の用途に差異あるものか、また土層は墓として機能したものを判断するために上記分析を実施した。

11月17・18日 12号配石遺構までを調査。18日には戸田哲也、鈴木卓彦、山本輝久、笹登 健の各氏来跡。

11月19・20日 6号土層、立石の写真撮影。

立石について 61年度調査段階では、立石は単独のものとして理解していたが、0区に調査がおよんだ62年度に入って、これが環状列石内に組み込まれていることが判明した。

11月21日 熊立歴史博物館の外山和夫、石川正之訪問氏来跡。

11月22日～29日 グリッドの遺物取り上げ作業。

12月1日～3日 配石遺構の下部調査。7・8号土層の写真撮影。グリッドの遺物取り上げ。

12月4日 北海道教育庁の工藤研二氏来跡。

12月5日～8日 配石遺構の遺物取り上げ。

12月9日 群馬大学の新井房夫先生来跡。

12月10日～20日 7・8号配石遺構の遺物取り上げと散石の取り上げ。4・5号土層の土壌サンプリング。

12月22日～25日 屋外埋設土器の土壌サンプリング。25日は周辺整理と大掃除。

昭和62（1987）年

1月8日 調査を再開。

1月9日～12日 1区東端の遺物取り上げ。

1月13日 前日の降雪のために午前中は雪掻き。午後から作業開始。

1月14日～30日 1区東端の遺物取り上げ。この調査箇所は縄文時代の産業場所と思われる。多量の土器片と多孔石が出土した。

1月31日 『群馬文化』第209号に遺跡の概要を紹介。

2月2日～7日 2日から3日にかけて降雪があり、4日は雪掻き作業。5・6日は航空写真撮影のための準備。

2月9日 航空写真撮影。今回の撮影はセナ機を使用。館林市の大西飛行場を離陸。

2月10日～12日 1区東端（南東端）と1区西端の遺物取り上げ。

2月13日 9・10号土層写真撮影。1区西端遺物取り上げ。

2月16日～18日 8・9号土層の土壌サンプリング。

2月19・20日 保存処理室の北爪氏による立石下の土層割り取り作業。

2月21日～26日 1区掘り下げ作業。1・2号配石遺構の最終調査。

2月27日 0区をジョレンで精査。

3月2日～6日 0区精査。1区の5・6号配石遺構の最終調査。

3月9・10日 0区精査。5・6号配石遺構の最終調査と16号配石遺構の写真撮影。17号配石遺構を新たに検出。

3月11日 降雪のために作業中止。

3月12日～16日 17号配石遺構の写真撮影。

3月17日 本日もつづいて昭和61年度の調査を終了した。

この後、遺物・図面・写真の基本整理を行う。

昭和62（1987）年度

4月14日 本日より作業を開始。調査担当者は依田治雄、菊池 実、飯塚 聡の3名である。依田、飯塚の両名でIV区の調査を、菊池が0区の調査を担当。0区西端から遺構確認作業。配石遺構を3箇所検出（以後、すべて作業は0区）。

4月15日～17日 遺構確認作業。新たに3箇所の配石遺構を確認。「安全に関する講義」を現場事務所で行った。

4月20日～24日 遺構確認作業。現在までに約20箇所の配石遺構を検出。22日には石構が出土した。

4月27日～30日 遺構確認作業。甘楽町立小幡小の先生2名来跡。

5月2日～7日 遺構確認作業を継続。

5月8日～12日 昨年度未検出された17号配石遺構の図面作成と遺物取り上げ作業。

5月13日～20日 17号配石遺構の石圍い調査。遺構確認作業。

5月21日～25日 20・21号配石遺構の調査を開始。

5月26日 環状列石を検出。列石内から屋外埋設土器が出土した。

環状列石について 環状列石の検出によって1区にまでこの遺構が広がっていることが判明した。1区調査段階では全く想像のつかなかったことである。航空写真、図面の照合によって幸じてその列石の一部が認められた。

5月27日～30日 環状列石の調査。

6月1日～3日 環状列石の周辺掘り下げ。グリッドの遺物取り上げ。

6月4日 20号配石遺構の図面、22号配石遺構の写真撮影。グリッドごと掘り下げ。配石遺構が検出。

6月5日 20号配石遺構の写真撮影。21号配石遺構の図面作成。

6月8日～12日 21号配石遺構の写真撮影。グリッドごと掘り下げ、遺物取り上げ。

6月13日 当遺跡において上級調査課会議が行われる。



配石遺構の調査



環状列石の調査

1章 調査の経過

- 6月15日～19日 グリッドごとに掘り下げ。
6月22日～25日 グリッドごとに掘り下げ、遺物の取り上げ作業。
6月26日 早企業局の赤山寄道、小宮俊久氏来跡。
6月29・30日 グリッドごとに遺物取り上げ。
7月1日～3日 24号配石遺構の写真撮影。
7月6日～10日 20～22号配石遺構の掘削終了。23～27号配石遺構、9号屋外埋設土器の写真撮影。
7月13日～17日 28～31号配石遺構の写真撮影。31号配石遺構まで実測を終了。
7月20日～24日 グリッドごとに掘り下げ、遺物取りあげ。西端から多量の土器と石が出土。
7月27日～31日 グリッドごとに掘り下げ、遺物取り上げ作業。
8月3日～7日 グリッド出土遺物の取り上げ。
8月10・11日 32号配石遺構、11号土壇の写真撮影。
8月12日 本橋幸美子氏来跡、33・34号配石遺構の調査。
8月13日 34号配石遺構の写真撮影。
8月17日～21日 35号配石遺構の写真撮影。36・37号配石遺構（扇形敷石住居）の調査。
8月24日～26日 37・38号配石遺構（敷石住居跡）の調査。グリッドごとに掘り下げ。
8月27日 相澤直昭氏来跡。35号配石遺構まで実測終了。
8月28日 現地説明会の準備作業。
9月1日～4日 40号配石遺構、10号屋外埋設土器の写真撮影。環状列石の実測開始。グリッドごとに掘り下げ、遺物取り上げ。
9月7日 青山学院大学の吉田章一郎先生来跡。
9月8日～11日 2号墓穴住居跡の調査。上毛新聞に現地説明会の案内が掲載される。現地説明会の準備。
9月12・13日 現地説明会を実施。2日間で456名の見学者があった。天気に恵まれ、前年よりも盛況であった。
9月16日～18日 環状列石の写真撮影。11～13号土壇の調査。6～8号屋外埋設土器の写真撮影。20～27号配石遺構の遺物取り上げ。
9月21日～25日 環状列石の周辺調査。24号配石遺構が扇形敷石住居になる。29・27・32～34号配石遺構の遺物取り上げ。22日に航空測量に関する現地説明をし、国際航業株式会社へ決定。
9月28日～30日 グリッドごとに遺物の取り上げ。
10月1日～5日 空測にそなえて積査。
10月6日 東京都埋蔵文化財センターの千野裕道、小栗一夫、小島正治、丹野泰人各氏来跡。
10月7日 日本農業新聞に道跡の紹介記事が掲載される。

- 10月8日 本日は6時からヘリコプター使用による航空測量、写真撮影を実施。
10月9日 関 俊彦先生、佐藤 誠、常松成人両氏来跡。
10月12日 関 茂先生来跡。41号配石遺構の写真撮影。7～9号屋外埋設土器の掘り下げ。
10月13日～16日 28・29・38・40号配石遺構の石取り上げ。11～15号土壇調査。環状列石の全景写真撮影。
10月19日～24日 22～25号配石遺構の石取り上げ。11～17号土壇の写真撮影。23号配石遺構に埋設土器を確認。
10月26日～27日 23・24号配石遺構（扇形敷石住居）の遺物取り上げ。23号配石遺構の掘出し部写真撮影。土壇の図面を作成。
10月28日 栗原文雄、斎藤原都郎両氏来跡。
10月29日～31日 23・24号配石遺構の石取り上げ。
11月2日～5日 23・24号配石遺構の掘り下げ。26・32号配石遺構の石取り上げ。30号配石遺構の写真撮影。
11月6日 26・27・30号配石遺構の石取り上げ。新たに配石遺構を検出。藤岡市教育委員会の志村 哲氏来跡。普及資料館の石守、佐藤順氏による道跡のビデオ撮影実施。
11月7日 清浦一朗氏来跡。
11月9・10日 26・27・30・31号配石遺構の調査。グリッドごとに遺物の取り上げ。石の計測、重量測定を実施。
11月11日 群馬自然科学資料館の堀内主一先生による地質調査、石材鑑定を実施。
11月12日～15日 7・8・18～20号配石遺構の石取り上げ。7号配石遺構下に土壇検出。12号屋外埋設土器を検出。23号配石遺構、2号屋外埋設土器の最終掘削終了。1号墓穴住居跡の遺物出土状況図作成と遺物取り上げ。石の洗いと往記作業。

石材鑑定について 配石遺構出土の石は勿論のこと、配石遺構を構成している絶ての石をも取り上げ、計測、重量の測定、石材鑑定を実施した。石の計測、重量測定は調査と並行して11月から実施した。膨大な量の石のために、大変な努力を必要とした。このため12月末日の調査終了まで、土・日を並走して作業を行った。石材鑑定を堀内主一先生におまかせしたが、先生は昭和初年から川口流域の石材についての研究を進められ、これまでに数多くの実績を残された方である。約17,000点に上る石の鑑定を短期間で実施していただいた。

- 11月16日～20日 8号配石遺構の躯体土器の取り上げ、煙臺の写真撮影。12号屋外埋設土器の取り上げ。22号配石遺構の埋設土器の実測。25号配石遺構の遺物取り上げ。26号配石遺構の掘出し部の石取り上げ。9号土壇の実測。41号配石遺構、1・2号墓穴住居跡の遺物取り上げ。環状列



環状列石の遺物取りあげ



環状列石の遺物取りあげ

石の部分写真撮影。

11月21日 多摩市教育委員会の桐生直彦氏来跡。

11月22日 22号配石遺構の埋設土層、26号配石遺構の伊体土器の取り上げ。8号土層の石取り上げ。環状列石内の土層写真撮影。本日から吉野院大学考古学研究会の岩間吉治君が調査に参加。

11月24日～27日 23号配石遺構の主体部配石取り上げ、張出し部埋設2面体の写真撮影。24号配石遺構の調査、26号配石遺構の埋設取り上げ。41号配石遺構の遺物取り上げ。9号屋外埋設土層の取り上げ。土層の調査。

11月28日 甘楽・富岡地区の社会科の先生11名来跡。

11月29・30日 23・24号配石遺構の遺物取り上げ。43・44号配石遺構の調査。

12月1日～6日 23・24号配石遺構の掘り下げ。36・37号配石遺構の遺物取り上げ。1・2号竪穴住居跡の遺物取り上げ。33～35号配石遺構の写真撮影。2日から筑波大学の有田貴紅葉さん、5日から日本大学の長 義之君調査に参加。

12月7日 環状列石の石をブロック別に取り上げ開始。23号配石遺構の石階いすの実測。33～35号配石遺構の遺物取り上げ。本日から筑波大学の沖松信隆、山田康弘両君調査に参加。

12月8日 テラ・インホメーション・エンジニアリングの渡辺広勝氏による地中レーザ探査を実施。

地中レーザ探査の実施について 環状列石の一部が路傍外に延びている。このために路傍外の列石を把握する目的で地中レーザ探査を実施した。

12月9日～13日 環状列石、33号配石遺構の石の取り上げ。44～47号配石遺構の写真撮影。1・2号竪穴住居跡の

掘り下げ。2号竪穴住居跡に伊体土器出土。グリッドごとに遺物取り上げ。10日に筑波大学の谷中 隆君、仲山さん来跡。12日から筑波女子大学考古学研究会の志田尚子さん、小笠原直子さん調査に参加。

12月14日～16日 環状列石、34・44～46号配石遺構の石取り上げ。グリッドごとに遺物の取り上げ。『考古学ジャーナル』№285誌上に遺物の連絡が掲載される。

12月17日 福島県三春町教育委員会の神田茂司氏来跡。47号配石遺構の石取り上げ。

12月18日 環状列石、46号配石遺構の石取り上げ。48・49号配石遺構の写真撮影。現場忘年会。

12月19・20日 環状列石、1号竪穴住居跡の石取り上げ。50号配石遺構の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。

19日に筑波女子大学の木本綾子さん調査に参加。20日には当事業団の船藤 亨氏調査に比べ。

12月21日～23日 環状列石の内部掘り下げ。36号配石遺構の張出し部埋設の写真撮影と先端部埋設の取り上げ。37号配石遺構石階いすの写真撮影。48号配石遺構の石取り上げ。6号屋外埋設土層の写真撮影。土層サンプリング。18・19号土層の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。23日に宇野院大学考古学研究会の江崎正浩、尾田倫一両君、松本右子さん調査に参加。

12月24日～26日 環状列石の石取り上げ後の全景写真撮影。24号配石遺構の先端部埋設の写真撮影。38号配石遺構の埋設取り上げ。8号屋外埋設土層の写真撮影。グリッドごとに遺物取り上げ。

12月27日 本日もって調査を終了。

以後、年明けとともに農機、遺物の引っ越し作業を行い、次の調査地である吉井町長根安坪遺跡へ移動。

3 調査の方法

調査対象地は、富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。

① 遺跡名の選定

調査は昭和61(1986)年度にI・II・III区、昭和62(1987)年度に0・IV区順で実施した。遺跡は調査当初から田篠遺跡として命名されてきたが、昭和63(1988)年度からの整理事業をひかえ、

上越線関連の遺跡名検討が63年8月に行われた。その結果、遺跡名は大字小字名の連記を原則として、従来の遺跡名は事業名称として残すことになった。このため、田篠遺跡II・III・IV区は田篠^上上平遺跡に、0・I区は田篠^中中原遺跡として分離され、田篠遺跡は事業名称として残ることになった。



竪穴住居跡の調査

1章 調査の経緯

なお、田原上平遺跡は古墳、奈良～平安時代の遺跡であり、すでに平成元（1989）年3月に報告書が刊行されている。

② 調査区（グリッド）の設定

調査区全域に5m四方のメッシュをかぶせられるように雄川の近く、発掘区の南東約200mに原点を設けた（国家座標 基準X=26700, Y=-82100が原点）。グリッドは南東コーナーの杭をもって呼称した。北方向へ5mごとに1づつ増え、西方向は100mごとにA・B・Cというように大区面を作り、その中の5mごとにa・b・cというようにアルファベット順に20区画を設定した。

なお、グリッドの設定水準点の移動は（株）測研が対応した。

③ 調査手順

昭和61年5月から翌年3月までI区の調査を、62年4月から同年12月27日まで0区の調査を実施した。I区の調査の結果、多数の配石遺構群が検出され、0区にも同様遺構の検出が予想されたが、最終的には環状列石を含めた貴重な遺構群を検出した。

④ 遺構の調査

配石遺構の調査で苦慮したことは、石の配置が人為的なものか、自然の状態であるか、といった

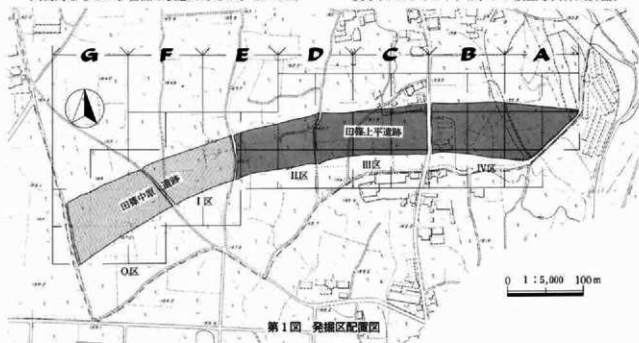
ことであった。というのも遺跡の立地が雄川の扇状地上に構築されているために、その識別が困難なことが多かったからである。このため調査にあたっては、細心の注意を払って進めた。遺構図面は1/10実測図を原則として詳細図を作成した。この詳細図作成にあたっては、（株）測研の応援を得ている。また0区については、遺構全体図（1/50、1/100）を国際航業株式会社に、ヘリコプター使用による航空測量図作成を委託した。

⑤ 遺物の取り上げ方

出土遺物の中で、遺構に伴わないものについてはグリッドで取り上げ、遺構に伴わない土器はP No、石はS Noを付して取り上げた。配石遺構を構成する石、敷石住居跡の敷石、環状列石の石も当然取り上げ調査を実施した。このため取り上げた石の総点数は、約17,000点に達している。これらの石は、調査と並行して石材分類、計測、重量の測定、石器分類等を実施した。担当者にかかる負担は並大抵ではなかったが、詳細なデータが得られたものと自負している。

⑥ 写真撮影

遺構写真は35mm白黒フィルムとカラーズライドフィルムおよび6×7を使用した。また遺跡空中写真（4×5インチ）は、シン航空写真株式会社、



第1図 発掘区配置図

国際航業株式会社、中央航業株式会社のヘリコプターとセスナ機使用により、また遺跡モザイク写真作成をシン航空写真株式会社それぞれ委託し

た。

なお、報告書掲載の遺構写真は6×7を使用した。

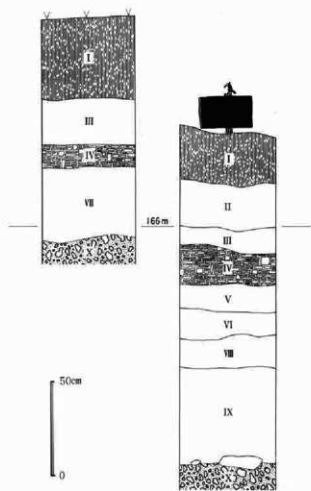
4 ————— 基本土層

鱒川の段丘は、基盤層として、吉井層と呼ばれる(新第3紀、中新生堆積)泥岩と粘性土が分布している。雄川と下川に挟まれたこの地では、その基盤層の上に、段丘堆積層(第4紀洪積世堆積)の玉石混じりの礫層が堆積している。この段丘堆積層が当遺跡の第X層とした層に一致する。この堆積層は、場所によって多少異なるが、さらに1m程の厚みをもって基盤層につづく。

遺跡地は西が高く、東に向かって低くなっており、その比高差は約60cmである。したがってそれぞれの地区において基本土層の厚みが異なるところが見られる。

0区・I区基本土層

- 第I層 耕作土層 浅間A軽石を含んでいる。
 第II層 暗褐色土層 やわらかく粘性が少しある。
 第III層 暗褐色土層 固く締まり粘性がある。
 第IV層 暗褐色土層 やや固く粘性がある。遺構構築面。
 第V層 黄褐色土層 固く締まるが、粘性はあまりない。浅間C軽石を含んでいる。
 第VI層 黄褐色土層 固く締まるが、粘性はあまりない。第V層より砂礫を多く含む。
 第VII層 砂礫層
 第VIII層 黄褐色粘質土層 非常に固く締まり、粘性がある。
 第IX層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。小礫を含む。



第2図 0区・I区基本土層

第X層 砂礫層

第IV層上に縄文時代中期の配石遺構群が構築されているが、土壌の調査ではプランを明瞭に確認するために、第V層まで掘り下げたものもある。

5 整理作業の経過

関越自動車道上越線の埋蔵文化財整理事業は、昭和63（1988）年4月より多野郡吉井町南陽台にある調査事務所敷地内の整理棟で開始された。

田篠遺跡の整理事業については、0・I区を中心とする縄文時代の遺構群を田篠中原遺跡として1年6カ月の整理期間、II・III・IV区を中心とする古墳、奈良～平安時代の遺構群を田篠上平遺跡として1年の整理期間で、報告書を刊行することになった。すでに田篠上平遺跡の報告書は平成元（1989）年3月に刊行されている。

当遺跡の整理期間は、平成元（1989）年4月から2年9月までである。

主な作業の流れ

元年4月 縄文土器の接合・復元作業。

（1989） 遺構図面の修正作業。

5月 縄文土器の接合・復元作業。

遺構図面の修正、遺構写真版下作成作業。下旬から縄文土器の実測と遺構トレース作業を並行。

6月 前月の作業を継続。

7月 縄文土器の接合・復元が終了。土器の実測はSスペースで素図を作成し行う。

8月 縄文土器の実測、遺構図修正とトレース作業を中心に実施。

9月 中旬までに遺構図修正が終了。

10月 縄文土器の実測と土器のトレース作業に入る。

11月 土器実測、遺構トレース終了。石器実測開始。

12月 原稿執筆開始。石器実測継続。鍋川流域の岩石標本を作成。

2年1月 縄文土器トレース、石器実測終了。土器・石器写真撮影。

2月 土器拓本作業。石器トレース。

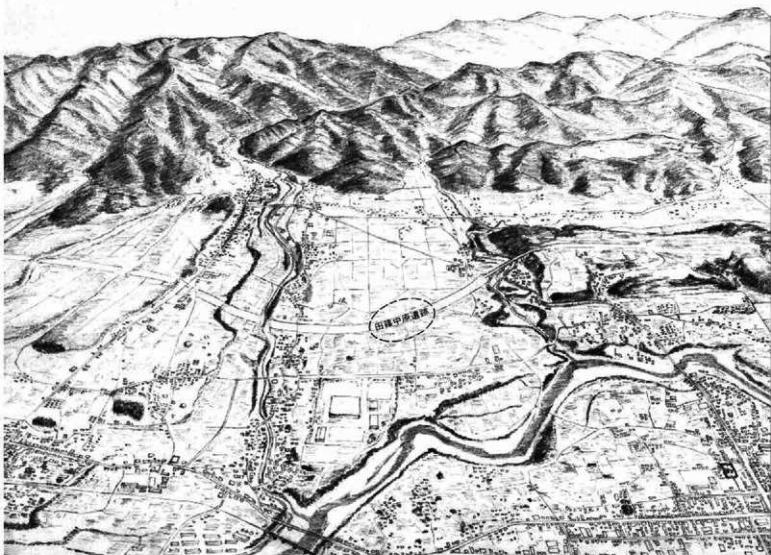
3月～4月 遺構・遺物版下作成。

5月～6月 原稿執筆終了。入札。

以後、校正と遺物収蔵作業を行い、9月末に報告書を刊行。

月	区分	平成元年												平成2年								
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月			
遺物	接合	—																				
	復元	—																				
	実測		—																			
	トレース							—														
	版下作成													—								
	写真撮影																					
遺構	写真版下作成																					
	原因整理	—																				
	トレース		—																			
原稿	版下作成														—							
	写真版下作成		—																			
	土器観察表																					
その他	本文																					
	その他																					

2章 遺跡の立地と環境



小幡原状地遺景

福岡市君川付近の上空から南方を俯瞰。右上方に駒倉山。中央左上の街が小幡。平地地へ出た雄川はそこから北（手前）へ流れ下り、納川と合流する。既に発掘調査も終わり高速道路の建設が進む1980年初夏の頃の景色。破線で示した部分は、調査によって判明した縄文時代中期の遺構検出状況より推定した、遺構の展開領域。

(絵・飯塚 聡)

1 地理的環境

当遺跡は、群馬県富岡市田篠字中原に所在する。ここは富岡市の東南端にあたり、甘楽郡甘楽町善慶寺に隣接している。かつて甘楽郡福島町（現甘楽町）の一部をなしていた地区であったが、昭和34年、富岡市に編入されて現在に至っている。

調査地域は、東・南・西三方を甘楽町善慶寺地区に囲まれた舌状に張り出す富岡市域に所在し、雄川左岸段丘上を東端とする東西650mの区域である。田篠字上平・中原・細田地区にわたっており、そのうちの東半分が田篠上平遺跡、そして西半分の中原・細田地区が田篠中原遺跡に該当する。また西方で甘楽町に接して善慶寺早道場遺跡へ連なる。

南方には関東山地へと連なる多野・甘楽山系の山並みが迫り、その北麓、当遺跡より南東約1km余りに城下町小幡の町並み、南西約3kmの丘陵上に国峰城跡、その後方には古くからの信仰の山である福含山（標高1,370m）を眺め、西方0.5kmには崖上に内匠城跡を戴く内匠・下高瀬の丘陵をまじかに望む。東北方約1.5kmには笹森稲荷塚古墳及び神社の森が望まれ、北方1～1.5kmにて鍋川ならびに国道254号線に連なるほか、古道「鎌倉街道」の伝承を伝える道筋が北方約0.6kmのところを東西に通過している。

なお、周辺には富岡市田篠から甘楽町善慶寺にかけて小円墳が群集し、当遺跡はその中央を東西に貫く。

「甘楽の谷」あるいは「かぶらの谷」と呼ばれる鍋川流域には、大規模な河岸段丘の発達が見られ、大きな地域的特色となっている。これは下仁田町馬山付近から藤岡市上落合に至る二十数kmにおよぶもので、段丘面は上下2段に分かれている。下位段丘は両岸に発達するが、上位段丘は特に南岸において顕著な発達を見せる。これは地殻の傾動運動による鍋川南岸の相対的な隆起に起因し、



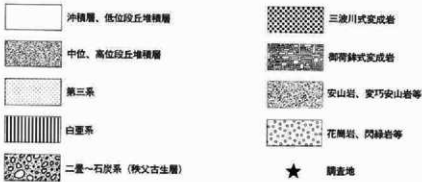
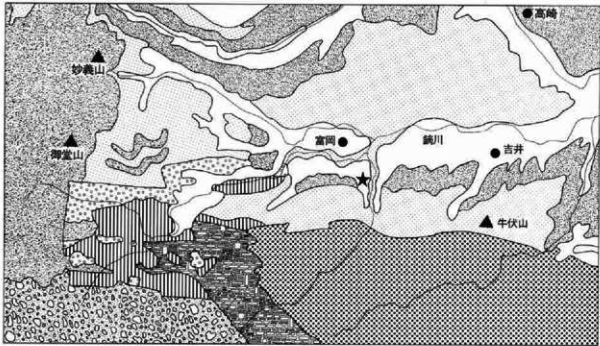
遺跡から福含山を望む

徐々に鍋川流路が北に移動しつつ起こされた浸食作用の結果形成されていったものと考えられている。田篠地区に隣接する富岡市内匠・下高瀬付近に見られる上位段丘面の標高は、およそ200～240mで、南から北へ緩やかに傾斜している。下位段丘面との比高差は40mから50mである。上位段丘面の形成は数万年から十数万年前の洪積世末期と考えられている。その後、約2万年前から始まる浅間火山噴出物による上部ローム層が上位段丘面に堆積しはじめる頃には、鍋川は下位段丘面を氾濫原としていたものと考えられている。したがって下位段丘面にはローム層の堆積はほとんど見られない。

地殻の傾動運動による鍋川の北方への移動に伴い、南方の多野・甘楽山系から流れ込む河川はや



小幡から扇央・扇端部を望む



出典：群馬県地質地図（1964）、内外地図発行を簡略化

第3図 調査地周辺の地質図



雄川上流



雄川中流 (田窪付近)

2章 遺跡の立地と環境

がて上位段丘を浸食・分断して北へ伸びて行く。このうち、稲含山東腹に源を発する雄川は、甘楽町秋畑地区の山間部を東北方向に流下し、小幡地区南方で平坦面に達している。そしてここを扇頂とする扇状地を形成しながら北方に流下し、下田篠付近にて鍋川に注いでいる。この扇状地は「小幡扇状地」あるいは「雄川扇状地」と呼ばれ、雄川をその主たる形成要因の河川とするほか、かつて富岡市額部・岡本を東流していたと推察されている旧野上川や、内匠地区の上位段丘東崖下を北流する下川によっても形成されたと考えられている。その領域は甘楽町町谷～小幡付近を扇頂部として、東は甘楽町郡島、西は下川、北は原田篠・下田篠地区にて鍋川下位段丘面に接し、南北2～2.5km、東西約2kmにわたっている。標高は扇頂付近が約200m、扇端部が約160mほどである。富岡市内匠・下高瀬と甘楽町上野の間の上位段丘を浸食・分断して北へ扇形に広がる様相を呈している。当遺跡はこの小幡扇状地の中央やや西より、扇尖部から扇端部へさしかかる部分に相当する位置を東西に横断するかたちで立地している。

扇状地には上位・下位段丘面とほぼ同様に砂礫層の厚い堆積が見られる。ただし、雄川・下川・野上川等の河川のの上流域山間地帯が、馬山金井線と呼ばれる構造線の南側および下仁田以東に広がる三波川変成帯に属しているために、そこから運ばれてくる小幡扇状地の堆積物には、緑泥片岩・



下川（早道場付近）

石黒片岩をはじめとする三波川結晶片岩と総称される変成岩類（いわゆる“長瀨系”と称される礫種）が大方を占めているのが特色である。一方、鍋川本流域について見れば、源流である南牧川流域が秩父古生層帯に属することから、チャート・輝緑凝灰岩など、いわゆる“秩父系”と称される礫種がその堆積物に多く含まれているのが特色である。この傾向は上位・下位段丘面、現流路を問わずに見られる。したがって、鍋川本流が下位段丘面を流路としたのち、雄川・旧野上川等が上位段丘面を浸食しながら北流する時に秩父系の礫種

第4図 田篠中原遺跡周辺地形模式図

富岡市北部上空から南方向、小幡扇状地を中央に望む景観を想定して作図。西方（向って右）から鍋川が大規模な河岸段丘を形成しながら東流。特に南岸にて上位・下位段丘面が顕著に発達する一方、南方の多野山系から流下する野上川・下川・雄川・白倉川・天引川・大沢川等によって各地で浸食・分断され、大小の河谷・谷地・扇状地が形成されている様子が窺える。高速道路予定線が主に上位段丘面を東西に貫くのに伴い、遺跡の発掘調査対象地も帯状に続く。各時代に互る遺跡の濃厚なる分布状況が見てとれよう。（作図・熊野 聡）

-  微高地・畑地
-  水田耕作地
-  市街地





遺跡から内匠の丘陵（上位段丘）を望む



遺跡から妙義山・浅間山（右奥）を望む

を含む堆積物を伴う可能性があるほかは、小幡扇状地の場合、その堆積物では長湊系の礫種が支配的であるという特徴が窺える。

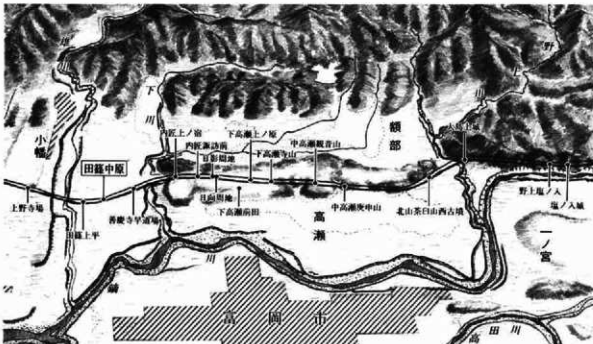
なお、彌川上位段丘面に見られる上部ローム層の純層としての堆積は、下位段丘面、扇状地には見られない。さらに、上位段丘面を浸食しかつ扇状地形成にも一役かつた旧野上川・下川流域にもまた、上部ローム層の堆積は見られない。

砂礫層の上には黒褐色土が40~70cm程度堆積している。耕作土としても利用されているが、高燥な土地柄ゆえ、扇状地一帯には主に桑畑とコン

ニャク畑が広がっている。上位段丘面の土地利用状況とはほぼ同様である。また、富岡市高瀬や甘楽町福島などの下位段丘面や、旧野上川流域の額部・阿本地区等、小幡扇状地を取り巻く周辺部には水田耕作が見られるが、扇状地域内では雄川下流河床低地沿いに若干行われているほかは、ほとんど見られない。

参考文献

- 「かぶらの自然」1972 かぶら理科研究会
 木崎喜雄・野村 晋・中島善治編著 「群馬のおいたちをたずねて」上・下 1977 上毛新聞社
 「富岡市史」自然編 原始・古代・中世編 1987



2 ————— 歴史的環境

かぶらの谷は群馬県の南西部に位置し、富岡市、甘楽郡の3町1村で構成され、総面積は48,950haである。南は赤久縄山系、西は荒船山系、北は金洞山系で三方が山嶺に囲まれ、東部に開けた集水地形である。

鯛川は、この谷の水を集め流れ下っている。上流部ではV字谷を造り、中流部では河岸段丘をつくり、生活の場を提供してくれている。

富岡・甘楽地域は、この鯛川の浸食によってできた下位段丘とその背後にある上位段丘によって構成されている。

遺跡の分布を大きく見ると、鯛川の北側上位段丘には22箇所、南側上位段丘には20箇所程の縄文時代の遺跡の分布が見られるが、過去に調査された遺跡の数は少ない。昭和61年度から開始された関越自動車道上越線地域の埋蔵文化財調査によって、この地域の縄文時代遺跡の調査が進みつつあるというのが、現状である。

(縄文時代前期の調査遺跡)

前期の関山式期の住居跡が、野上塩之入遺跡(第5図11)と富岡市本宿・郷土遺跡(第5図27)から検出されている。また南蛇井増光寺遺跡では前期中葉の黒浜式期の集落調査が実施されている。前期後半の遺跡は、富岡市南部に高瀬地区と額部地区とを隔てるように存在する、通称「離れ山」丘陵(幅約500m、長さ約3km)を中心に比較的检测されているが、いずれも小規模な遺跡である。そのなかで、ややまとまって検出されているのは、寺山遺跡(第5図8)の諸磯b式期の住居跡9軒と中高瀬観音山遺跡(第5図9)の同じく諸磯b式期の住居跡6軒である。標高は約200~240mである。甘楽町小幡の佐久間遺跡(第5図30)でも諸磯式期の住居跡5軒が調査されている。また前期末の十三菩提式期の住居跡1軒が内匠諏訪前遺跡(第5図5)から検出されている。

(縄文時代中期の調査遺跡)

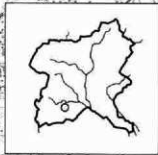
中期の遺跡では、五領が台式期の住居跡1軒と該期の屋外埋設土器3基が富岡市小塚遺跡(第5図21)で検出されている。田篠中原遺跡と同時期の遺跡では、南蛇井増光寺遺跡で竪穴住居跡15軒と敷石住居跡3軒、本宿・郷土遺跡で柄鏡形敷石住居跡1軒が調査されている。なお、甘楽町善慶寺の早道場遺跡(第5図2)の調査(平成元年・2年度)において、田篠中原遺跡の集落西端部が確認されている。通称「離れ山」丘陵上には今のところ中期集落の検出例はない。該期の集落は前期集落とは明らかに集落立地を異にしている。

(縄文時代後期の調査遺跡)

後期の遺跡では、田篠中原遺跡西の「離れ山」丘陵上に内匠上ノ宿遺跡(第5図4)が調査されている。検出遺構は柄鏡形敷石住居跡1軒、竪穴住居跡3軒、屋外埋設土器12基であり、田篠中原遺跡の集落立地を考えるうえで興味深いものがある。また田篠坂詰遺跡(第5図3)では土坑が、南蛇井増光寺遺跡からは敷石住居跡1軒が検出されている。甘楽町白倉下原遺跡(第5図29)では2軒の柄鏡形敷石住居跡が調査され、また栗の沢遺跡(第5図31)では加曾利B式期の住居跡が検出されている。

(縄文時代晩期の遺跡)

晩期の遺跡の調査例は今のところないが、富岡土木事務所のある、鯛川に向かう東傾斜面から耕作の際に多量の晩期の土器片が発見されている。



- 縄文前期の遺跡
 縄文中期の遺跡
 縄文後期の遺跡
 時期不明

- | | |
|--------------|------------|
| 1 田獲中原遺跡 | 16 上ノ山遺跡 |
| 2 新井早遺跡 | 17 野戸谷遺跡 |
| 3 田巻坂遺跡 | 18 小沢遺跡 |
| 4 内匠上之宿遺跡 | 19 芥田山遺跡 |
| 5 内匠源跡遺跡 | 20 法平遺跡 |
| 6 内匠日影地遺跡 | 21 小塚遺跡 |
| 7 下高瀬上之宿遺跡 | 22 駒宮前遺跡 |
| 8 寺山遺跡 | 23 楚日市遺跡 |
| 9 中高瀬野山遺跡 | 24 地区に記載なし |
| 10 中高瀬中山遺跡 | 25 宮崎遺跡 |
| 11 野上橋入遺跡 | 26 神島原遺跡 |
| 12 地区に記載なし | 27 本宿・郷土遺跡 |
| 13 後貫遺跡 | 28 地区に記載なし |
| 14 白岩遺跡 | 29 白倉下原遺跡 |
| 15 相野田(大平)遺跡 | 30 佐久間遺跡 |
| | 31 軍の跡遺跡 |
| | 32 長板安呼遺跡 |

第5図 田獲中原遺跡と周辺の縄文時代遺跡 1:50,000 富岡 倭岡

2章 遺跡の立地と環境

周辺遺跡一覧表（縄文時代の遺跡を中心として）

No	遺跡名	所在地	調査年度 面積	遺跡の概要	文献
1	田藤中原遺跡	富岡市田藤	昭和61・62年度 15,800㎡	中期末の環状列石、敷石住居跡11軒、竪穴住居跡2軒、配石遺構36基、屋外埋設土器12基、土壇22基、屋敷場所1箇所。	本書所収
2	善慶寺早道場遺跡	甘栗町善慶寺	昭和63・平成元年度～	田藤中原遺跡の続き。土坑2基と土器包含層。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
3	田藤友話遺跡	富岡市田藤	昭和62年度 3,200㎡	田藤中原遺跡の北東約1.1km、楚川右岸段丘上。土坑、後期の住口土器が出土。	『新井・坂詰遺跡』1990 富岡市教育委員会
4	内匠上之宿遺跡	富岡市内匠・下高瀬岡本	昭和62年度 16,500㎡	鍋川右岸の上位段丘面、通称「難山」。丘腹の東端に位置。標高213～221m。柄鏡形敷石住居跡1軒、竪穴住居跡3軒、屋外埋設土器12基、土坑250基。	『年報』7 1989 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5	内匠諏訪前遺跡	富岡市内匠字諏訪前	昭和63年度 8,000㎡	内匠上ノ宿遺跡と谷地を隔てて西側に位置。竪穴住居跡2軒（諸磯b式期と十三菩提式期）と土坑。	『年報』8 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6	内匠日影岡地遺跡	富岡市内匠字日影岡地	昭和63・平成元年度	内匠諏訪前遺跡と谷地を隔てて西側に位置。竪穴住居跡1軒（諸磯b式期）と土坑。	『年報』8・9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
7	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬字上之原地	昭和63・平成元年度 10,500㎡	内匠日影岡地遺跡の西側に位置。標高220～230m。竪穴住居跡1軒、落とし穴状土坑、袋状土坑。	『年報』8・9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
8	寺山遺跡	富岡市岡本字寺山	平成元年度 2,251㎡	日影岡地、上ノ原遺跡の西方に位置。竪穴住居（諸磯b式期）9軒、土坑41基、集石土坑1基、落とし穴1基。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
9	中高瀬観音山遺跡	富岡市中高瀬字観音山	平成元年度 13,000㎡	高瀬山丘陵上。標高230mに立地。竪穴住居跡（諸磯b式期）6軒、土坑6基、集石土坑1基、包含層1ヶ所。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
10	中高瀬成中山遺跡	富岡市中高瀬	平成元年度 3,400㎡	中高瀬観音山遺跡の南西に位置。竪穴住居跡3軒、土坑。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
11	野上塩入遺跡	富岡市野上	昭和62・63年度	鍋川上位段丘から栗東山地に連なる丘陵の東部に位置。竪穴住居跡3軒、土坑10数基。	『年報』8 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
12	南蛇井増光寺遺跡	富岡市南蛇井	昭和62・63、平成元年度～	鍋川左岸段丘上に立地。前期の竪穴住居跡23軒、中期の竪穴住居跡15軒、中期の敷石住居跡3軒、後期の敷石住居跡1軒、後期の配石遺構1基、埋薬、土坑478基等。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
13	後賀遺跡	富岡市後賀		里川が里川に流れ込む西側一帯にかけての台地へ傾斜地。中期の土器片と打製石斧、石鏃出土。	『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市
14	白岩遺跡	富岡市白岩		里川に接する北傾斜の台地上。土器片の散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会
15	相野田(大平)遺跡	富岡市相野田		里川を見下ろす南から北側に傾くなる傾斜地。標高150～152m。打製石斧出土。	『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市
16	上ノ山遺跡	富岡市上高尾		山上の平坦地から南側面にかけて、土器片の散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会
17	背戸谷遺跡	富岡市背戸谷		上ノ山遺跡の北方。土器片の散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会
18	小沢西遺跡	富岡市七日市字小沢西492番地	昭和62年度	高田川に架かる小沢橋から上流へ西南約400mの右岸。標高165.5m。竪穴住居跡3軒、土坑71基。	藤原幹夫編『小沢西遺跡』1989 富岡市教育委員会
19	坪田向山遺跡	富岡市		辻平遺跡から1.5km北東の上位段丘上に立地。中期の土器片と石鏃の出土。	
20	辻平遺跡	富岡市黒川字辻平		小塚遺跡の北北東500m、上位段丘にあたる山並の裾部に立地。標高188m付近。土器片の散布。	『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』1987 富岡市
21	小塚遺跡	富岡市黒川字小塚	昭和59年度 10,000㎡	鍋川の支流高田川の左岸に立地。前期（諸磯b式）の竪穴住居跡2軒、中期初期の竪穴住居跡1軒と竪穴4基、屋外埋設土器3基、前期～中期の土坑61基。	井上 太編『小塚・六反田・久保田遺跡』1987 富岡市教育委員会
22	観音前遺跡	富岡市七日市字観音前	昭和62年	上信電鉄上野七日市駅北側一帯に分布。中期後半の土器の出土。	
23	七日市遺跡	富岡市七日市		観音前遺跡の西南約100mに位置。中期の竪穴住居跡検出。	
24	神守寺南遺跡	富岡市字田		高田川と丹生川の合流点を丹生川にそって約1.3kmさかのぼった北方の山地の南側面に立地。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』1972 群馬県教育委員会

No.	遺跡名	所在地	調査年度 面積	遺跡の概要	文献
25	宮崎遺跡	富岡市		鍋川左岸の宮崎丘陵緩斜面に土器片の散布。	
26	神島原遺跡	富岡市神島原		鍋川左岸段丘上に立地。土器片の散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』 1972 群馬県教育委員会
27	本宿・郷土遺跡	富岡市一の宮字 本宿・田島	昭和53・54年 度	前期の竪穴住居跡(関山式期)2軒、中期の竪穴住居跡1軒、土坑20基。	井上 太編『本宿・郷土遺跡』 1981 富岡市教育委員会
28	下丹生山口遺跡	富岡市原		大下駄山斜面の山麓に発達した傾斜地。遺物の散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』 1972 群馬県教育委員会
29	白倉下原遺跡	甘楽町白倉	平成元年度～	天引川と白倉川によって大きく開析された鍋川右岸の上位段丘面に立地。前期の竪穴住居跡2軒と土坑200基、中期の竪穴住居跡2軒と土坑2基、後期の竪穴住居跡2軒。	『年報』9 1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団
30	佐久間遺跡	甘楽町小幡	昭和62年度	上信電鉄の上州福島駅より南方約4km、懸川の東に所在。標高230～260m。前期の竪穴住居跡5軒、中期の竪穴住居跡1軒、不明の竪穴住居跡4軒、土坑53基。	肥田順一編『佐久間遺跡』1988 山武考古学研究所
31	栗の沢遺跡	甘楽町秋期	昭和25年度	後期(加曾利式期)の竪穴住居跡を検出。	神道 登『秋畑における先史時代の考察—とくに栗ノ沢遺跡とその付近の調査について—』1950 秋畑村役場
32	長根安坪遺跡	吉井町字長根	昭和62・63年 度 18.273㎡	中期前半と後半の住居跡15軒、配石遺構3基(1基は環状列石)、土坑多数。	『年報』7・8 1989・1990 群馬県埋蔵文化財調査事業団

3 隣接遺跡の状況

田篠中原遺跡は、東接する田篠上平遺跡とともに小幡扇状地を東西に横断するかたちで調査が行われた。両遺跡とも扇状地の富岡市域内に位置し、両調査地をあわせると雄川～下川間の約2/3に達する。扇状地の西よりに位置する田篠中原遺跡の西は甘楽町善慶寺早道場・蛇喰地区である。

田篠中原地区から下川までの区域は、善慶寺早道場遺跡と称し、昭和63年度以降2回に分けて調査が行われている。調査対象面積は18,300㎡で、平成元年度末までに15,300㎡の調査が実施されている。これまでのところ、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡4棟、古墳1基、近世墓壇1基、古代末期以降の溝数条、土坑、ピット群等の遺構が検出されている。出土遺物は縄文時代前期～後期、古墳時代後期～奈良・平安時代以降近世に及ぶ。このうち田篠中原遺跡との連続性が予想される縄文時代遺構については、調査区の東端、すなわち田篠中原遺跡に接する地点で中期末の遺物包含層および土坑2基が検出されており、扇状地に展開される中期集落の西限を確認することができた。下

川に近い場所では前期～後期の遺物はまばらで、遺構は伴わない。古墳の墳丘は削平されてなく、周堀から土師器や須恵器が出土。これは扇状地域に南北に展開する上田篠・善慶寺古墳群に含まれると考えられ、古墳時代末期のものであろう。竪穴住居跡は、平安時代のものが1～2軒見られるほかは、ほとんどが古墳時代末から奈良時代初期にかけてのものである。砂礫混じりの黒褐色土および地山の砂礫層を掘り込んで構築され、規模は最大のもので一辺約7m、最小で約3m、多くは4～5mの方形もしくは長方形を呈している。カマドは北壁に設けられたものが多いが、東壁のものも5軒、東南隅のものも1軒検出されている。分布状況は下川至近にて濃厚で、扇状部は散在的である。立地、構造等、扇状地上の同一環境のもとにある田篠上平遺跡の住居跡と同様である。なお、田篠中原遺跡に東接する田篠上平地区では、古墳3基、奈良～平安時代の住居跡50軒、掘立柱建物跡23棟、水田跡約1,000㎡等が検出されている(『田篠上平遺跡』1989)。住居跡は8～9世紀におよぶ

2章 遺跡の立地と環境

が、特に8世紀前半および9世紀後半を中心とする時期の集落の展開が顕著である。

以上、田籾中原遺跡の東西に接する2遺跡の状況から判断すると、扇状部には縄文集落以後、古墳時代になり古墳群の形成とともに扇状地西端部の下川沿いに当該期集落が営まれ、次代になって東半部の雄川沿岸に集落が展開して行ったことが窺われる。

現在、扇状地の東端に雄川、西端に下川が北流する状況下で、縄文中期集落の立地する扇状部地域は、両河川によって形成された扇状地の脊梁的立地を示すといえ、最初に居住が可能となった部

分と言えよう。このころ、扇状地の他の部分は雄川・下川および支流の流路地帯であったと思われる。両河川がほぼ現在地を浸食し小段丘を形成し、定着して以降、古墳時代以降の集落が展開する。下川沿岸地域が先行して居住域となったことは、雄川沿岸は下川にくらべて段丘も発達し、河床も広く、流路の定着が遅れた可能性を窺わせる。下川沿岸を中心とする扇状地西半部は標高も扇状部とほぼ同レベルで、割合はやくに居住域の条件が整っていたと考えられる。扇状地域における各時代の集落の展開のありようは、大局的には両河川の流路の変遷を反映しているものと言えよう。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

1 配石遺構群の概要

田篠中原遺跡から検出された縄文時代中期の遺構群は以下のとおりである。

環状列石(径約38m)…	1基	(中期加曾利E3式期に構築され、E4式期まで機能)
敷石住居跡……………	11軒	(中期加曾利E3式期 7軒) (中期加曾利E4式期 4軒)
竪穴住居跡……………	2軒	(中期加曾利E3式期)
配石遺構……………	36基	(中期加曾利E3式期～E4式期)
屋外埋設土器……………	12基	(中期加曾利E3式期～E4式期)
土 壌……………	22基	(中期加曾利E3式期～加曾利E4式期)
商業場所……………	1個所	(中期加曾利E3式期～加曾利E4式期)

発掘調査はI区から開始し、敷石住居跡5軒、配石遺構10基、屋外埋設土器7基、土壌10基を検出した。その後、0区に調査が及んで、環状列石1基、敷石住居跡6軒、配石遺構26基、屋外埋設土器5基、土壌22基を検出し、約1年7か月間(田篠上平遺跡調査期間も含む)の調査で、縄文時代中期集落のほぼ全容をつかむことができた。配石遺構群は扇状地上に構築されていたために、人為的な石の配置なのか、自然の状態であるのか判断に迷うこともたびたびあったが、調査の進展に伴いその識別も容易になっていった。

環状列石の検出は群馬県内では3例目であった。吾妻郡中之条町の久森遺跡からは、当遺跡と同時期の環状列石と敷石住居跡が検出されている。利根郡月夜野町の十二原II遺跡からは、中期前半の環状列石と該期の竪穴住居跡が検出される。当遺跡の調査終了後も、多野郡吉井町の長根安坪遺跡から中期加曾利E3式期の環状列石が検出され、また碓井郡松井田町の行田II遺跡から後期の弧状配石墓群が検出され、徐々にではあるが類例が増している。

敷石住居跡や配石遺構の調査例となると県内では数多く知られている。例えば、勢多郡新里村上鶴か谷遺跡(後期)、北群馬郡子持村押出遺跡(後期～晩期)、北群馬郡榛東村下新井遺跡(後期～晩期)、等は最近調査された代表的遺跡であり、配石墓や配石遺構が多数検出されている。

田篠中原遺跡検出の敷石住居跡は加曾利E3～E4式期にかけての構築である。これらの住居の敷石状態は、張出し部では明確な敷石が認められるが、主体部については部分敷石であったり、大小様々な礫が雑然と組まれていたり、主体部は偏平な礫や小さい礫で円形に周囲と区画しているなど、大きな特色となっている。初頭の敷石住居跡ということで、加曾利E4式期から称名寺式期の定型化された柄鏡形敷石住居跡(県内では小室遺跡、中大塚遺跡、栗の木平遺跡等に代表される)とは趣を異にしている。

群馬県内における縄文時代の環状列石、柄鏡形敷石住居跡、配石遺構等を検出した遺跡の大多数は、集落全体のなかで検討することのできない単独の検出例であったり、限られた調査区の中での検出例であった。このために縄文集落のなかでの具体的な検討は、いまだ不十分な状況であると言わざるを得ない。こうしたなかであって、田篠中原遺跡検出の環状列石・配石遺構群は、縄文集落を解明していくうえで貴重な遺構群であるといえる。

2 環状列石と立石

環状列石（第6～22回、PL. 9～13、102～104 付図2～4）

位置 Fd-47・48、Fe-46～49、Ff-46～50、Fg-45～50、Fh-44～50、Fi-44～50、Fj-44～51、Fk-44～50、Fl-45～49、Fm-48・49グリッドにかけて検出された。調査区のほぼ中央からの検出であったが、その一部は路線外に延びている。

経過 I区（昭和61年度調査区）から0区（昭和62年度調査区）にかけて検出。61年7月30日に1号屋外埋設土器を検出した。周辺には明瞭な遺構は存在せず、単独の遺構と判断し調査を進めた。その後、1号屋外埋設土器の北西10m20cmの所から立石が検出されたが、当初この遺構も単独のものとして判断し調査を実施した。昭和61年度の調査では環状列石の出現は予想もできなかった。

0区に調査の及んだ62年5月26日に、Ff-48グリッドにおいて環状列石の一部を確認した。配石遺構と考えて周辺を精査した結果、列石が広範囲に延びていることが判明した。この列石の検出によって、61年度調査区にも遺構が存在していることが考えられたので、図面と写真の照合を行った。その結果、列石がかろうじてI区にまで及んでいることが判明した。わずかに石の配置が認められるだけであったので、これが環状列石を構成する石とは、I区調査段階ではとても判断できなかった。そして1号屋外埋設土器の出土位置は列石下に、立石は列石内に組み込まれていることがさらに判明した。しかし列石の一部が路線外に延びているために環状列石の全域を調査することはできなかった。このために路線外については地中レーダを使用してその全容の把握に努め、路線外にも列石が延びていることが解った。その結果、径約38mを有していることが判明した。

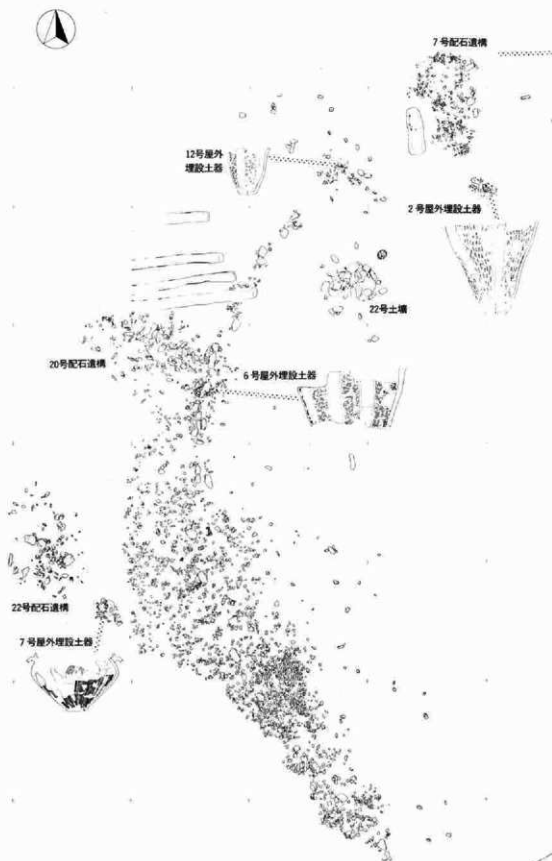
重複 列石下から3基の屋外埋設土器（1・6・12号）が出土している。このうち6号屋外埋設土器には列石が蓋石となっていた。3基の埋設土器はいずれも加曽利E3式土器であり、列石の構築時期を加曽利E3式期に求めることができる。このほかに列石周辺から2基の屋外埋設土器、列石内部から1基の屋外埋設土器がそれぞれ出土している。

土壌では列石下から8号土壌（配石基）が検出され、列石内部から22号土壌（配石基）が検出された。8号土壌上の墓標は列石に連なるものであった。列石下から明瞭な墓標が検出されたのは8号土壌の1基だけであり、これをもって環状列石は墓地であるという根拠にはならないであろう。

列石には張出し部と考えられる遺構が存在している。7号配石遺構と20号配石遺構がこれに該当しよう。7号配石遺構は加曽利E4式の土器が主体的に出土し、20号配石遺構からは加曽利E3式の土器が主体的に出土していることから、環状列石は加曽利E3式期に構築され加曽利E4式期まで機能していたことが解る。

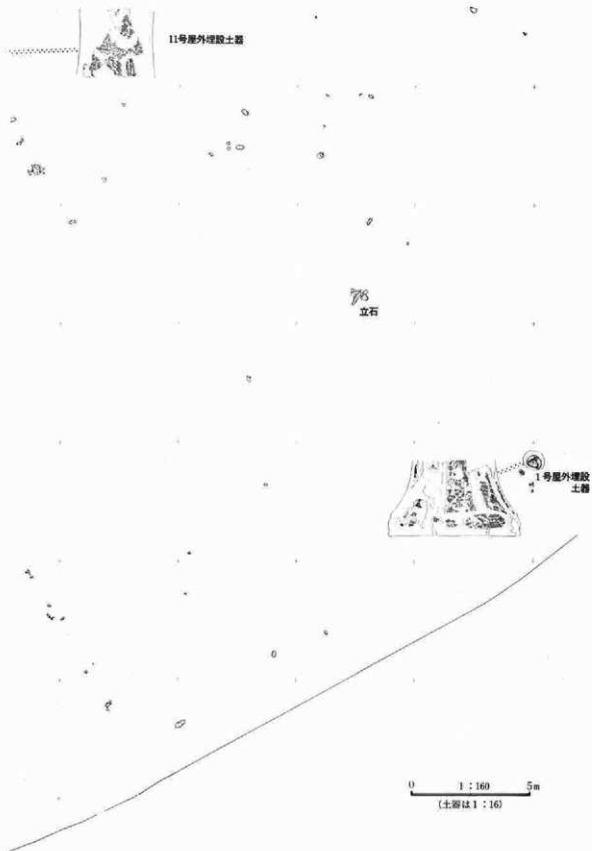
覆土 空穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・列石状況 径約38mの環状列石であるが、列石の明瞭な部分はFj-44、Fk-44・45・49、Fl-46・47・48グリッドにかけてであり、実際は弧状列石として理解できるものである。構築当初から石の分布に濃淡があったのか、後世何らかの破壊があったものなのかは、にわかに決しがたいが、従来環状列石として把握されているものも石の分布に濃淡があることから構築当初からのものと理解して良いのかもしれない。秋田県大湯環状列石においても石の分布に濃淡は認められる。群馬県内の最近の調査でも弧状列石が確認されている。環状列石の調査面積は現状では約918㎡であり、路線外を含めた推定面積は約1,050㎡である。このため環状列石の約87.4%を調査したことになる。



第6図 環状列石全体図と埋設土器分布

2 環状列石と立石



使用石材 列石を構成する石の総てを取り上げて石材鑑定を実施し、49種類の石材が確認された。2,519点の石材別点数は、網雲母石墨片岩768点(30.5%)、輝綠岩336点(13.3%)、点紋緑泥片岩161点(6.4%)、緑泥片岩144点(5.7%)、珪石135点(5.4%)、輝岩129点(5.1%)、点紋網雲母石墨片岩105点(4.2%)、網雲母緑泥石墨片岩62点(2.5%)、網雲母緑泥片岩55点(2.2%)、斑駁岩53点(2.1%)、チャート47点(1.9%)、石墨網雲母片岩40点(1.6%)、珪岩36点(1.4%)、綠色珪質板岩30点(1.2%)、点紋網雲母緑泥片岩29点(1.2%)、緑簾緑泥片岩・角閃岩各24点(各1%)、変斑駁岩16点(0.64%)、閃綠岩15点(0.6%)、赤色珪質板岩・紅簾網雲母片岩各14点(各0.56%)、緑泥石墨片岩・砂岩各13点(各0.5%)、点紋網雲母石墨緑泥片岩11点(0.44%)、方散虫板岩10点(0.4%)、安山岩・閃輝綠岩各9点(各0.36%)、石墨片岩・点紋網雲母緑泥石墨片岩各7点(各0.28%)、石墨緑泥片岩6点(0.24%)、熱変成岩・千枚岩各5点(各0.2%)、網雲母片岩・輝綠凝灰岩・紅簾片岩各4点(各0.16%)、硬砂岩3点(0.12%)、石英斑岩2点(0.08%)、滑石片岩・流紋岩・点紋石墨緑泥片岩・蛇紋岩・粉岩・熔結凝灰岩・緑泥網雲母片岩・腕雲母網雲母片岩各1点(0.04%)であり、不明は161点(6.4%)を数えた。2,519点中1,458点(57.9%)の石は片岩類である。

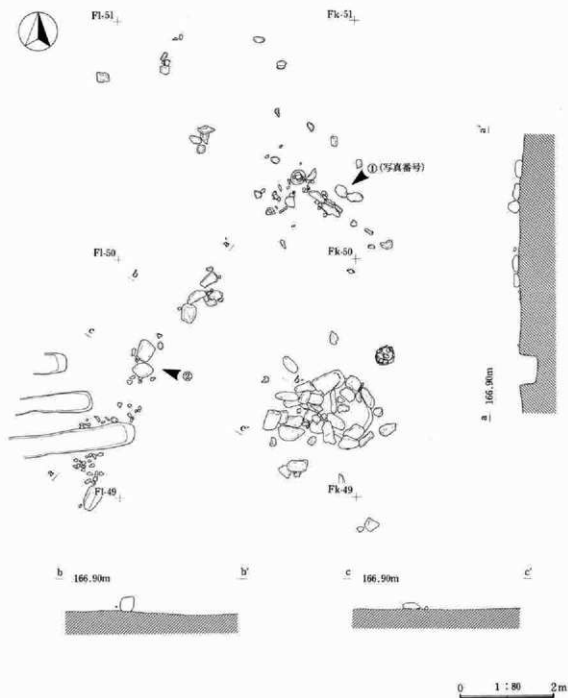
列石を構成する石の中でも指標となる石には大石が使用され、また一定間隔で配置されている。これらの石の最長間隔は3m70cm、最短間隔は1mであり、平均間隔は2m11cmであった。これらの石の重量は一番軽いもので約17kg、最大重量は60.5kgであり、平均は約40kgとなる。確認された石材は、網雲母緑泥片岩3点、点紋緑泥片岩・点紋網雲母緑泥片岩各2点、網雲母石墨片岩・輝綠岩・安山岩・閃輝綠岩・砂岩各1点であった。

石材重量 重量の判明している石は2,409点である。その内訳は、500g未満の石1,156点(48%)、500g～1kg未満の石592点(24.6%)、1kg～2.5kg未満の石463点(19.2%)、2.5kg～5kg未満の石101点(4.2%)、5kg～7.5kg未満の石34点(1.4%)、10kg～20kg未満の石21点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石14点(0.6%)、20kg～30kg未満の石13点(0.5%)、40kg以上の石10点(0.4%)、30kg～40kg未満の石5点(0.2%)である。

遺物出土状況 列石下から3基の埋設土器の他に、255点の土器片が出土している。加曾利E3式土器片を主体に加曾利E4式土器片も含まれている。

石器では石皿5点、多孔石15点、凹石17点、磨石3点、打製石斧10点、磨製石斧4点、丸石2点である。石皿2点と多孔石15点中の6点は列石の指標となる石に使用されていた。他の多孔石は列石を構成する石の中からの出土であるが、1点だけは列石内部からの出土であった。凹石等の石器はFk-45・46グリッドにかけて集中して検出された。石器の含有率は2.2%であり、また焼石は2,519点中189点で、7.5%を占めている。所見 加曾利E3式期の集落の広場部分に構築された環状列石であり、加曾利E4式期まで機能していたのであろう。明確な環状を呈しておらず、実態は弧状列石ではあるが、立石の存在と1号屋外埋設土器、さらにわずかに点在する石の存在から環状列石として判断したものである。立石の在り方は秋田県大湯環状列石の原型を思わせるものであるが、列石下からは土壌がわずかに1基存在したのみであった。列石内部にも1基の配石基だけの存在であり、環状列石を墓地遺構と断定することには疑問があった。

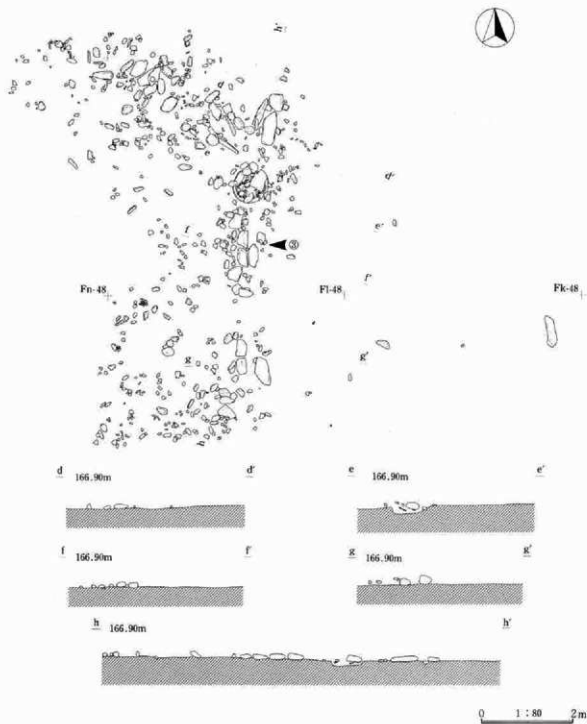
なお、使用石材の点数と、石材重量の点数が合地しないのは、ラベルを紛出した石や、注記の判読できなかった石があったために生じたものである。また、石材不明の石は鑑定からもれた石や該当する石が確認できなかったものであり、石材鑑定の結果不明となったものではない。



第7図 環状列石 (部分1)



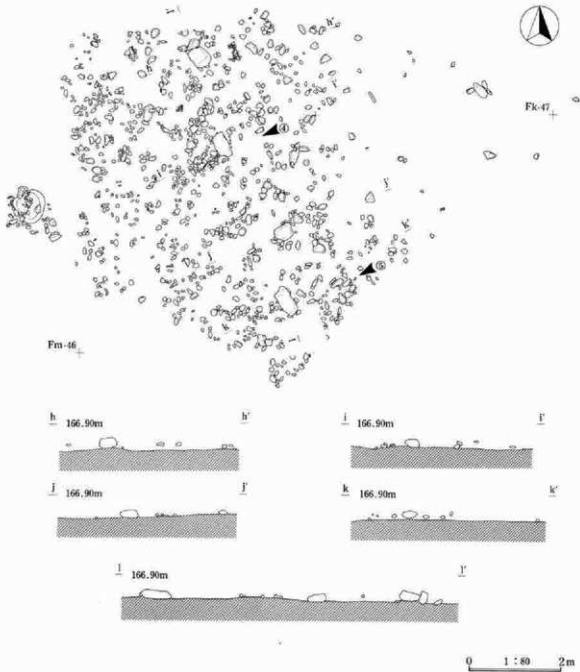
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第8図 環状列石(部分2)

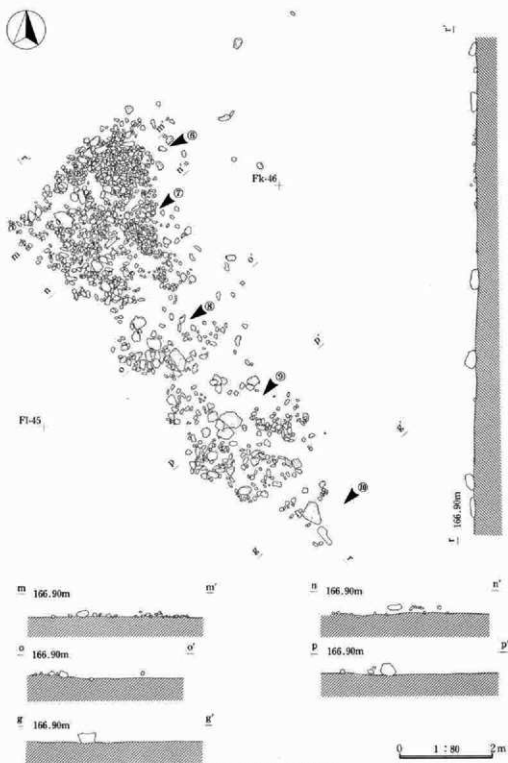


2 環状列石と立石



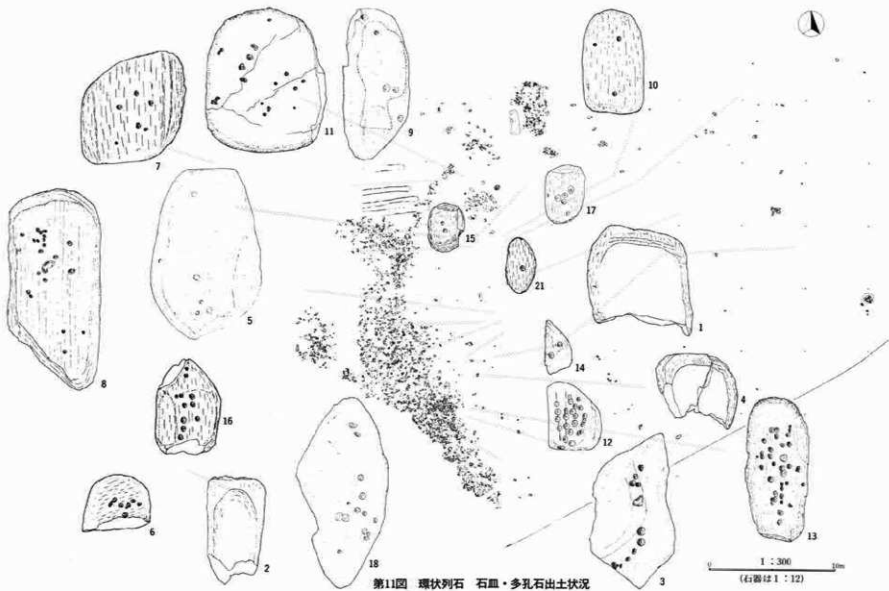
第9図 環状列石 (部分3)



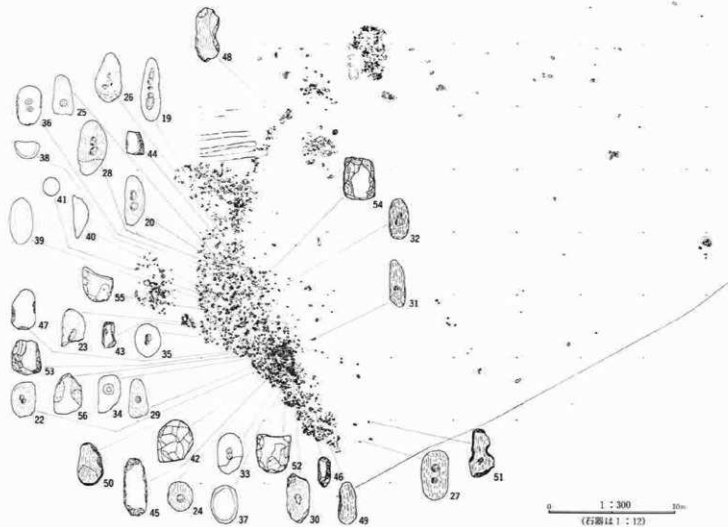


第10図 環状列石（部分4）





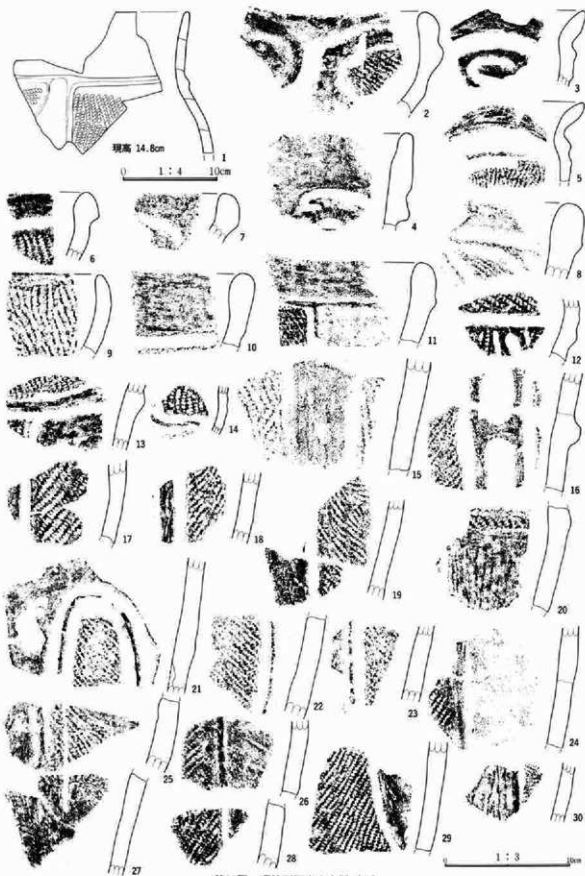
第11回 環状列石 石皿・多孔石出土状況



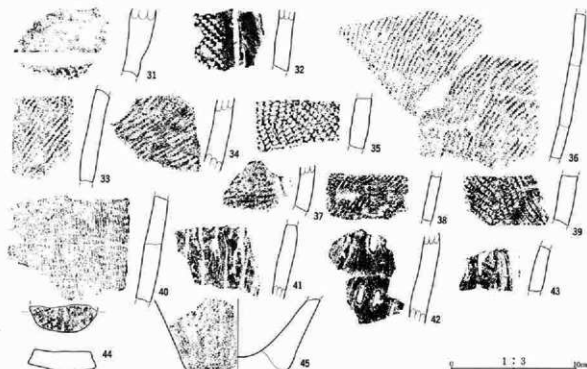
第12図 環状列石 凹石・磨石・打製石斧等出土状況

環状列石土器観察表

図番 PL	部色 ①釉土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
13-1 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器(両耳面)の口縁一部断片。器厚8~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面はふい黄褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。胴部にはそれに接続する微隆起帯を配し、区画内に縄文施文。原体はR(上)横・縦位施文。	Fk-46 グリッド
13-2 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚10~17mm。 内面は横方向のミダギが行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯による横内等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)横がし。	一括
13-3 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい黄褐色、内面はふい褐色。	波状口縁断片。隆帯と幅広の沈線による文様が描かれる。 外面に煤が付着している。	一括
13-4 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚10~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はふい赤褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれる。	一括
13-5 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚7~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はふい黄褐色。	波状口縁断片。口縁部に幅広の沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)縦・横がし。	FI-46 グリッド
13-6 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)横がし。	一括
13-7 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚20mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黄褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれている。	FI-47 グリッド
13-8 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚19~25mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を配し、区画内に縄文施文。原体はL(上)縦・横がし。	FI-47 グリッド
13-9 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はふい黄褐色。	口縁部は内湾する。 縄文施文。原体はR(上)。	Fk-46 グリッド
13-10 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚13~20mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	口唇部に無文帯をおき、以下縄文施文。	FI-47 グリッド
13-11 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁断片。器厚17~20mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。それに接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL(上)縦・横がし。	Fk-46 グリッド
13-12 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁一部断片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外外面の色調は明褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)横位。胴部縄文はR(上)縦位。沈線を垂下。	Fk-45 グリッド
13-13 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁一部断片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はふい黄褐色、内面は褐色。	口縁部に隆帯による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)横がし。胴部は沈線を垂下している。	FI-46 グリッド
13-14 102	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁一部断片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)。	FI-46 グリッド
13-15 102	胴部 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部断片。器厚16~18mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦・横がし。 沈線を垂下。	Fk-45 グリッド
13-16 102	胴部 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部断片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	隆帯による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上)縦・横がし。	FI-46 グリッド
13-17 102	胴部 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部断片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦・横がし(0段多条か?)。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押しが強い。	一括
13-18 102	胴部 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部断片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外外面の色調は褐色。	隆帯を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦・横がし。	FI-46 グリッド
13-19 102	胴部 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部断片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明黄褐色。	隆帯を垂下。 縄文施文。原体はL(上)縦・横がし。	一括



第13図 環状列石出土土器(1)



第14図 環状列石出土土器(2)

環状列石土器観察表

図番 PL	部位	①軸土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
13-20 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~19mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい褐色。	1条の微隆起帯を巡らせ、R(上縦転がし)沈線を垂下している。		Fk-45 グリッド
13-21 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は明褐色。	微隆起帯による「口」状の文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体L(上縦転がし)。		F1-47 グリッド
13-22 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL(上縦転がし)。		F1-47 グリッド
13-23 102	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体はL(上縦転がし)。		一括
13-24 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体はR(上縦転がし)。		一括
13-25 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は明褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体はL(上縦転がし)。		一括
13-26 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体はR(上縦転がし)。		Fk-45 グリッド
13-27 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	縄文施文。原体はR(上縦転がし)沈線を垂下。		F1-48 グリッド
13-28 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	縄文施文。原体はR(上縦転がし)沈線を垂下。土器接合面に刻みを施している。		F1-48 グリッド
13-29 102	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(上縦転がし)。		Fk-45 グリッド

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

環状列石器観察表

図番 Pl.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
13-30	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黄褐色。	微隆起部を垂下させ、縄文施文。 原体はL(上)縦転がし。	F1-44 グリッド
14-31	口縁 〜胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁〜胴部片。器厚18〜20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線をはさめる。 以下縄文施文。原体はR(上)。	F1-47 グリッド
14-32	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はL(上)縦転がし。 沈線を垂下。	Fk-45 グリッド
14-33	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はよい黄褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	F1-48 グリッド
14-34	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は明褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	F1-46 グリッド
14-35	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦・横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	Fk-45 グリッド
14-36	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は明褐色。	縄文施文。原体はR(上) (0段多条か?) 縦 転がし。	F1-48 グリッド
14-37	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は褐色。	微隆起部を垂下させ、縄文施文。 原体はL(上) (0段多条) 縦転がし。	F1-46 グリッド
14-38	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明黄褐色。	縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	F1-46 グリッド
14-39	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	F1-46 グリッド
14-40	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11〜14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は赤褐色。	糸線が施されている。	Fk-45 グリッド
14-41	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐灰色。	沈線が施されている。	一括
14-42	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	微隆起部と押し引き状の沈線が施されてい る。	Fk-46 グリッド
14-43	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9〜11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はよい黄褐色。	微隆起部と押し引き状の沈線が施されてい る。	Fk-47 グリッド
14-44	土製 円盤 片	①細粒の砂を混入 ②良	土製円盤の破片。器厚15mm。 外面の色調は明褐色、内面はよい黄褐色。	重量21g	F1-47 グリッド
14-45	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 底部周縁は磨耗している。	Fk-45 グリッド

凡例補則

縄文土器の観察視点のなかで、焼成(遺存状況)の判定については、便宜的に非常に良・良・やや良・不良の4分類している。これは上條朝宏氏⁴⁾の分類に従っている。

非常に良→内・外面ともよいに調整されており、光沢のある土器片。

良 一次のやや良との中間的な土器で光沢のない土器片。

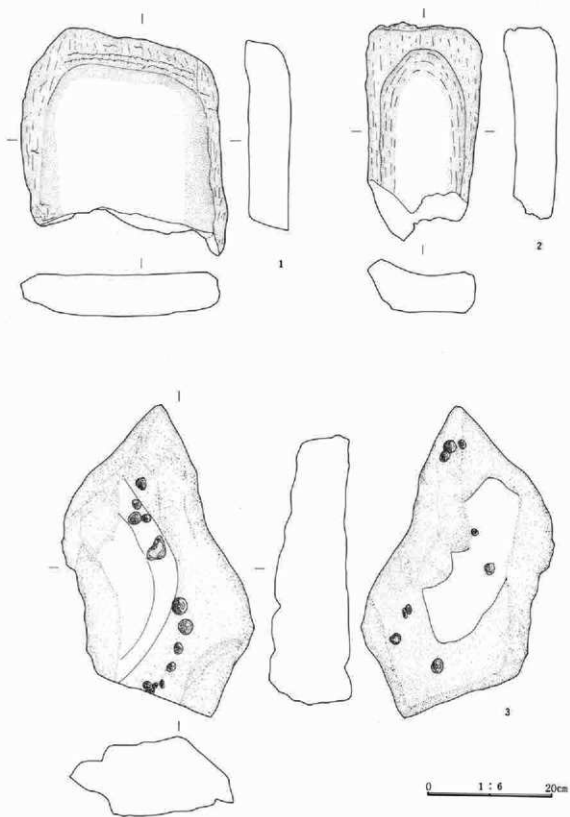
やや良→手で触れると細かい粒子が指先につく土器片。

不良→注意して持たないと破損する土器片。

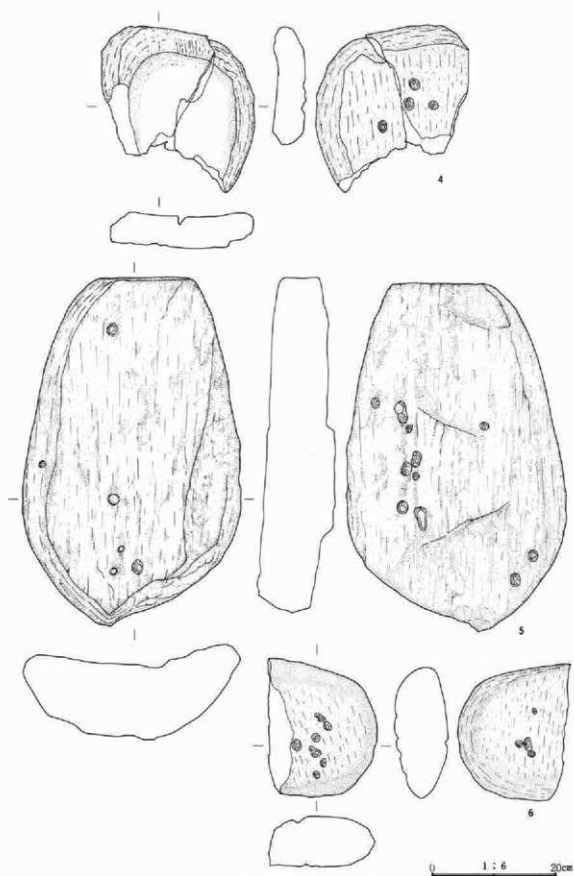
*上條朝宏「胎土分析I」「縄文文化の研究 第5巻 縄文土器III」1983

環状列石石器観察表

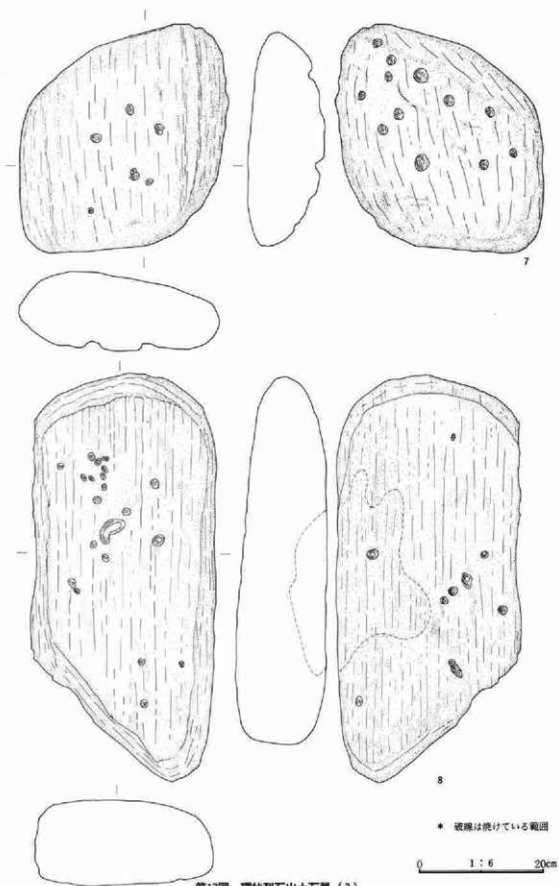
図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
15-1 102	石 皿	瓦	点紋網雲母緑泥片岩	(35.8)	32.6	6.8	(12,400)	長方形を呈し、窪みは浅い。	F1-47・48 グリッド
15-2 102	石 皿	一部欠損	点紋緑泥片岩	(34.7)	18.3	8.6	(8,100)	長方形を呈し、窪みはやや深い。全面焼けている。	F1-46 グリッド
15-3 102	石 皿	一部欠損	砂岩	(49.0)	(30.7)	12.5	(16,600)	両面に磨面と凹みがある。凹みは22個で、最大は長40mm、短24mm、深4mm、最小は長10mm、短7mm、深2mmで、平均は長18mm、短14mm、深5mm。	Fk-45 グリッド
16-4 102	石 皿	瓦	点紋緑泥片岩	(26.2)	24.4	5.8	(5,100)	楕円形で窪みは浅い。裏面に4個の凹み、最大は長18mm、短17mm、深5mm、最小は長15mm、短12mm、深4mmで、平均は長17mm、短15mm、深5mm、一部焼けている。	Fk-46 グリッド
16-5 102	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	54.3	35.0	14.9	34,800	両面に18個の凹み、最大の凹みは長37mm、短16mm、深2mm、最小は長11mm、短9mm、深1mmで、平均は長19mm、短14mm、深2mm。	F1-48・49 グリッド
16-6 102	多孔石	瓦	点紋緑泥片岩	(21.8)	17.4	8.5	(4,700)	両面に13個の凹み、最大の凹みは長21mm、短12mm、深5mm、最小は長7mm、短7mm、深5mmで、平均は長13mm、短10mm、深4mm。	F1-46 グリッド
17-7 103	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	35.9	33.1	12.5	20,900	両面に18個の凹み、最大の凹みは長26mm、短23mm、深14mm、最小は長11mm、短8mm、深3mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm。	Fk-49 グリッド
17-8 103	多孔石	完形	点紋網雲母緑泥片岩	64.2	29.8	13.7	43,600	両面に32個の凹み、最大の凹みは長46mm、短20mm、深2mm、最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長14mm、短10mm、深2mm、一部被熱。	F1-48 グリッド
18-9 103	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	47.9	21.7	13.3	(18,650)	両面に9個の凹み、最大の凹みは長25mm、短24mm、深18mm、最小は長10mm、短10mm、深7mmで、平均は長19mm、短18mm、深10mm、一部被熱。	Fk-49 グリッド
18-10 132	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	33.8	19.4	10.4	12,350	両面に3個の凹み、最大の凹みは長16mm、短14mm、深4mm、最小は長10mm、短9mm、深1mmで、平均は長14mm、短12mm、深3mm、一部磨耗している。	Fg-50 グリッド
18-11 103	多孔石	完形	安山岩	46.5	37.8	15.5	44,700	片面に22個の凹み、最大の凹みは長20mm、短19mm、深6mm、最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長12mm、短10mm、深3mm。	Fk-49 グリッド
18-12 103	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	21.8	17.2	11.2	5,700	両面に39個の凹み、最大の凹みは長24mm、短21mm、深8mm、最小は長8mm、短8mm、深2mmで、平均は長17mm、短14mm、深6mm。	Fk-45 グリッド
19-13 103	多孔石	完形	紅縞網雲母片岩	46.0	20.1	9.0	13,600	両面に77個の凹み、最大の凹みは長24mm、短20mm、深7mm、最小は長4mm、短3mm、深1mmで、平均は長14mm、短11mm、深4mm、一部被熱。	Fg-45 グリッド
19-14 103	多孔石	部分	網雲母石墨片岩	(17.4)	(8.8)	(7.5)	(310)	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径17mm、深さ7mmである。	F1-46 グリッド
19-15 103	多孔石	一部欠損	網雲母石墨片岩	15.6	11.3	6.5	(1,400)	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径10mm、深さ2mmである。	F1-48 グリッド
19-16 103	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	30.0	21.0	11.6	(12,800)	両面に19個の凹み、最大の凹みは長21mm、短16mm、深10mm、最小は長11mm、短10mm、深3mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm、一部被熱。	F1-47 グリッド
19-17 103	多孔石	完形	石墨網雲母片岩	18.1	12.9	12.0	4,150	ほぼ全面に11個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深6mm、最小は長11mm、短11mm、深2mmで、平均は長17mm、短14mm、深5mm。	F1-48 グリッド
20-18 104	多孔石	完形	砂岩	60.5	29.5	20.4	26,500	両面に21個の凹み、最大の凹みは長73mm、短42mm、深7mm、最小は長12mm、短10mm、深2mmで、平均は長25mm、短16mm、深4mm。	F1-46 グリッド
20-19 104	凹石	完形	点紋緑泥片岩	20.5	6.3	3.3	700	両面に8個の凹み、最大の凹みは長41mm、短22mm、深4mm、最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長24mm、短15mm、深3mm、一部被熱。	F1-48 グリッド
20-20 104	凹石	完形	点紋緑泥片岩	16.1	6.3	4.3	600	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径31mm、短径22mm、深さ3mmである。	F1-47 グリッド
20-21 104	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	17.9	9.4	7.2	1,600	片面に1個の凹みがある。凹みは長径20mm、短径15mm、深さ8mmである。凹石の凹みとは異なる。	F1-48 グリッド



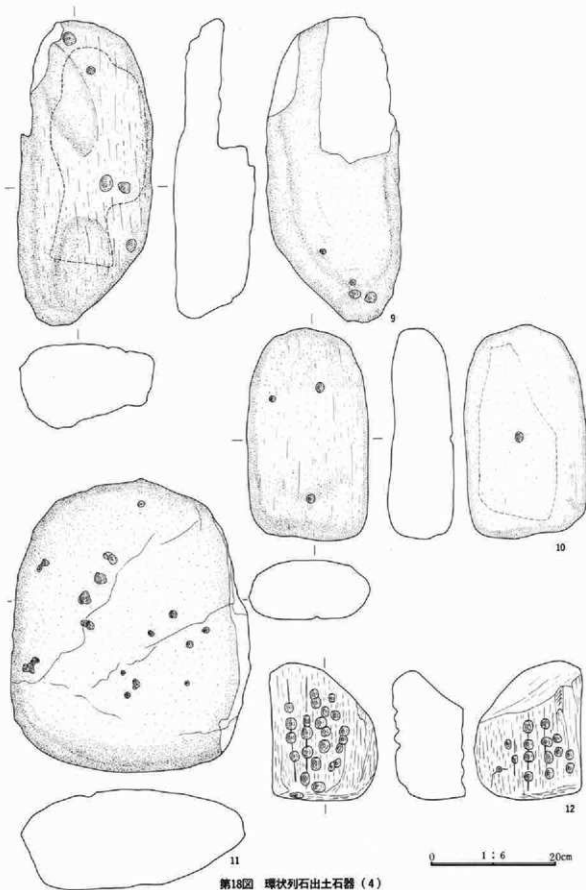
第15図 環状列石出土石器(1)



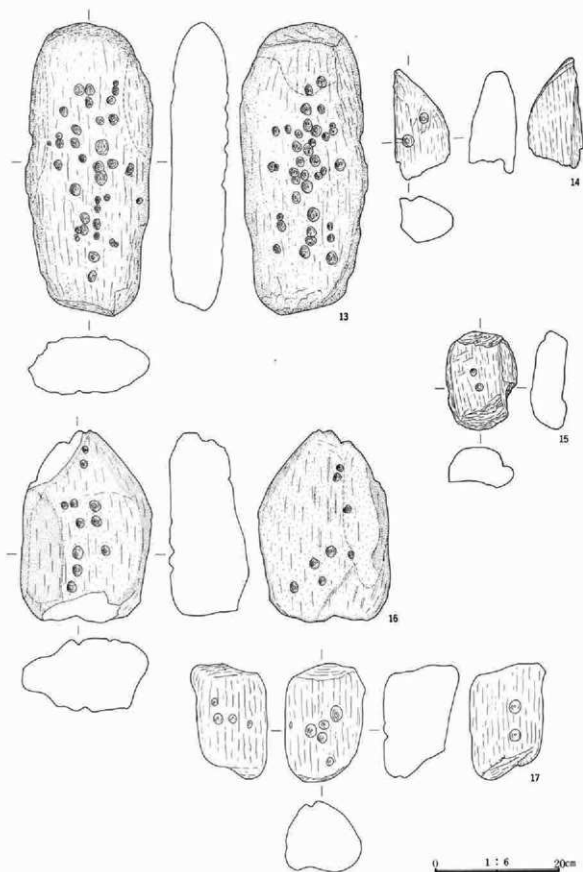
第16図 環状列石出土石器 (2)



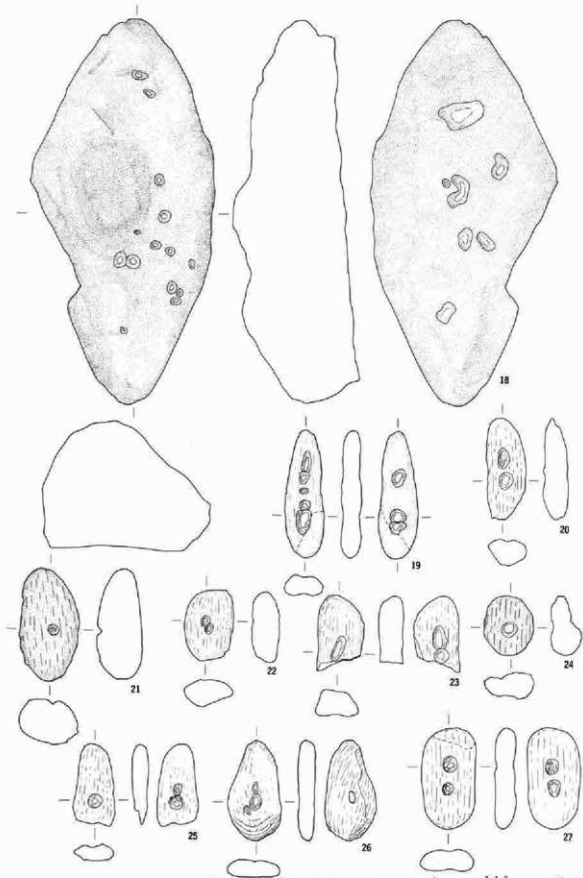
第17図 環状列石出土石器 (3)



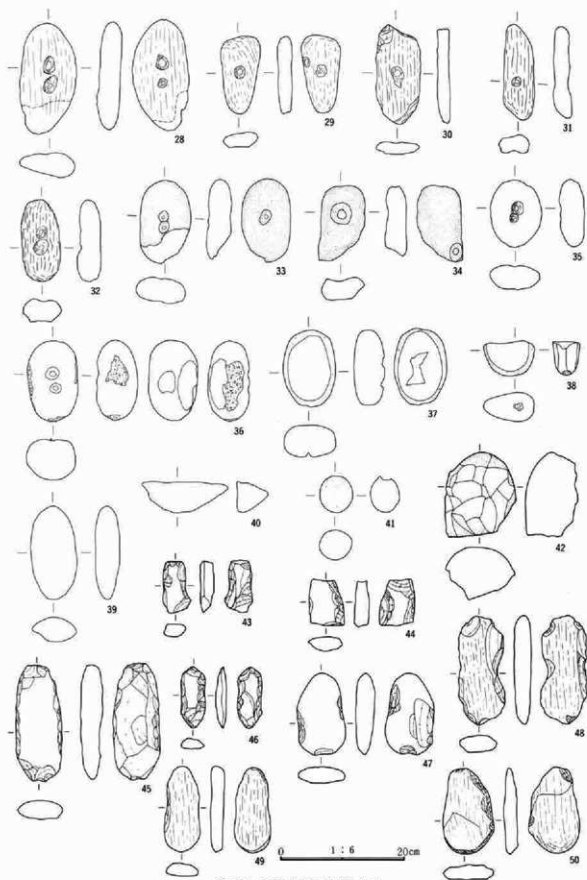
第18図 環状列石出土石器 (4)



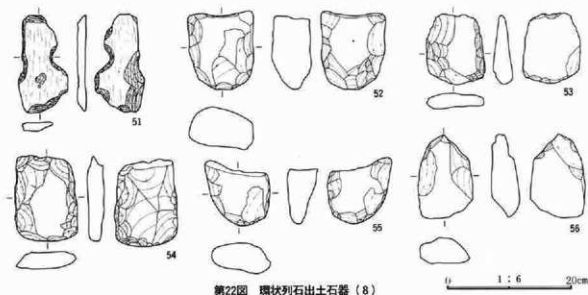
第19図 環状列石出土石器 (5)



第20図 環状列石出土石器 (6)



第21図 環状列石出土石器 (7)



第22図 環状列石出土石器(8)

環状列石石器表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
20-22 104	凹石	完形	点紋緑泥片岩	11.2	8.0	4.4	600	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径14mm、深さ2mmである。	Fk-46 グリッド
20-23 104	凹石	片	点紋緑泥片岩	(12.0)	7.5	4.2	(600)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長42mm、短16mm、深2mm。最小は長24mm、短23mm、深3mmで、平均は長34mm、短21mm、深2mm。	Fk-46 グリッド
20-24 104	凹石	一部欠損	点紋緑泥片岩	9.5	7.9	5.0	(500)	片面に1個の凹みがある。凹みは長径26mm、短径25mm、深さ5mmである。	Fk-45 グリッド
20-25 104	凹石	一部欠損	点紋網雲母片岩	(13.0)	6.7	2.6	(300)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深2mm。最小は長18mm、短14mm、深1mmで、平均は長22mm、短19mm、深2mm。	F1-47 グリッド
20-26 104	凹石	完形	網雲母石炭片岩	15.8	8.7	2.8	500	両面に4個の凹み。最大の凹みは長26mm、短18mm、深3mm。最小は長15mm、短9mm、深2mmで、平均は長19mm、短12mm、深2mm。片面被蝕。	F1-48 グリッド
20-27 104	凹石	完形	石炭網雲母片岩	16.0	8.6	3.4	340	両面に4個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深2mm。最小は長18mm、短18mm、深1mmで、平均は長23mm、短20mm、深2mm。一部被蝕。	F1-44 グリッド
21-28 104	凹石	完形	緑泥片岩	17.6	9.0	3.9	950	両面に4個の凹み。最大の凹みは長30mm、短20mm、深2mm。最小は長19mm、短15mm、深2mmで、平均は長26mm、短19mm、深2mm。一部被蝕。	F1-47 グリッド
21-29 104	凹石	完形	石炭網雲母片岩	12.2	6.4	2.4	300	両面に3個の凹み。最大の凹みは長20mm、短17mm、深1mm。最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長18mm、短15mm、深1mm。	Fk-46 グリッド
21-30 104	凹石	ほぼ完形	緑泥片岩	15.9	7.2	1.9	350	片面に1個の凹みがある。凹みは長径34mm、短径17mm、深さ2mmである。	Fk-45 グリッド
21-31 104	凹石	完形	緑泥片岩	15.3	5.0	3.0	380	片面に1個の凹みがある。凹みは長径16mm、短径14mm、深さ1mmである。	Fk-46 グリッド
21-32 104	凹石	完形	網雲母石炭片岩	13.2	6.3	3.8	430	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径25mm、短径18mm、深4mm。	Fk-47 グリッド
21-33 104	凹石	一部欠損	安山岩	(13.1)	8.3	4.3	(600)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、深2mm。最小は長18mm、短17mm、深3mmで、平均は長20mm、短17mm、深2mm。全面に磨耗痕。	Fk-45 グリッド
21-34 104	凹石	片	砂岩	(11.7)	7.5	3.6	(400)	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長33mm、短28mm、深4mmである。	Fk-45 グリッド
21-35 104	凹石	完形	輝緑岩	10.7	8.1	4.1	550	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径16mm、深さ2mmである。	Fk-46 グリッド
21-36 104	凹石	完形	輝緑岩	12.7	8.2	6.0	1,100	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径18mm、深さ4mmである。両面に磨耗痕と最打痕がみられる。	F1-47 グリッド

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

環状列石器験専表

国書 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
21-37 104	磨石	完形	安山岩	12.0	8.4	4.9	710	器面に磨耗痕がみられる。	Fk-45 グリッド
21-38 104	磨石	片	安山岩	(5.5)	7.2	4.6	(300)	器面と磨耗痕と敲打痕がみられる。	F1-47 グリッド
21-39 104	磨石	完形	輝緑岩	15.0	7.4	3.9	700	器面に磨耗痕がみられる。	F1-46 グリッド
21-40 104	石皿(?)	部分	砂岩	(13.7)	(4.6)	4.9	(300)	小型の石皿か?。全面焼けている。	F1-46 グリッド
21-41 104	丸石	一部欠損	安山岩	9.7	9.3	4.7	(300)	丸い石。	F1-47 グリッド
21-42 104	丸石	完形	安山岩	13.5	11.2	8.3	1,400	丸石に加工痕がみられる。	F1-47 グリッド
21-43 104	打製石片	刃部欠損	熱変成岩	(8.2)	4.4	2.2	(110)	バチ (II a)。	Fk-45 グリッド
21-44 104	打製石片	両端欠損	熱変成岩	(7.4)	5.7	2.5	(146)	バチ (II b)。	F1-46 グリッド
21-45 104	磨製石片	完形	遷移岩	18.3	7.3	3.5	750	敲打途中。片面が粗割り段階のまま残る。	Fk-45 グリッド
21-46 104	打製石片	完形	熱変成岩	9.7	4.0	1.7	80	分割 (I?)。両側の内湾の度合いが小さい。	Fk-45 グリッド
21-47 104	打製石片	完形	輝緑岩	13.0	7.8	3.0	450	バチ (II a?)。加工頻度少なく未成品の可能性。	Fk-46 グリッド
21-48 104	打製石片	完形	点紋緑泥片岩	17.0	7.4	2.9	510	分割 (I)。一側縁のみ内湾。	Fk-49 グリッド
21-49 104	打製石片	完形	点紋網雲母石巻片岩	13.5	5.9	2.3	246	バチ (II a)。	F1-45 グリッド
21-50 104	打製石片	完形	緑泥片岩	13.6	8.2	2.4	350	バチ (II a)。一側縁のみわずかに内湾。	Fk-45 グリッド
22-51 104	打製石片	一部欠損	石巻網雲母片岩	(15.4)	7.9	1.5	(200)	分割 (I)。	F1-44 グリッド
22-52 104		基部欠損	閃輝緑岩	(12.3)	10.3	6.7	(1,530)	粗割り途中。両面一部に自然面残る。	Fk-45 グリッド
22-53 104	打製石片	基部欠損	輝緑岩	(11.1)	9.3	3.2	(450)	バチ (II a)。即座に設けて基部から片面にかけ欠損。	Fk-46 グリッド
22-54 104	打製石片	基部欠損	輝緑岩	(13.7)	10.0	2.8	(720)	バチ (II b)。折れ面からの調整痕あり、再加工か?	Fk-47 グリッド
22-55 104		基部欠損	輝緑岩	(10.3)	10.5	4.9	(630)	粗割り段階。	Fk-46 グリッド
22-56 104		完形	輝緑岩	13.2	8.8	4.5	770	粗割り途中。両面にかなりの自然面残る。	Fk-46 グリッド

立石 (第23・24図、PL. 14、104)

位置 Ff-49グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東13m、列石内部に位置している。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。当初、単独の立石として調査を進めた。8月6日に全景写真の撮影を行い、その後、他の配石遺構の調査に移行した。11月に入って立石の復元写真の撮影を行ったが、復元にあたっては倒れていた中心の石を立てただけである。実測と写真の作業が絶て終了した後、石の取りあげと下部調査を実施したが、土壌は存在しなかった。61年度調査段階では、立石は単独のものとして理解していたが、0区に調査がおよんだ62年度に入って、これが環状列石内に組み込まれていることが判明した。

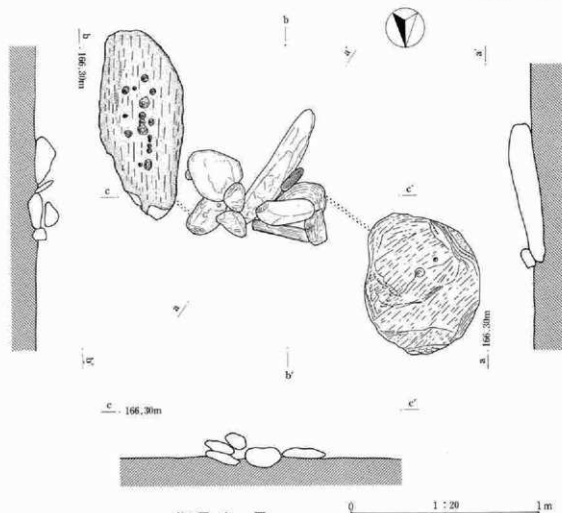
重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 秋田県大湯環状列石検出の所謂「日時計」と共



第23図 立石の石材グラフ



第24図 立石

通するものである。11点の石から構成され、中心の立石は長さ78cmを測る。

使用石材 7種類の石材が確認された。11点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点（各18.2%）、緑色珪質板岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・緑蘆緑泥片岩・絹雲母脆雲母片岩各1点（各9.1%）であり、不明は1点（9.1%）を数えた。9点（82%）の石は片岩類である。

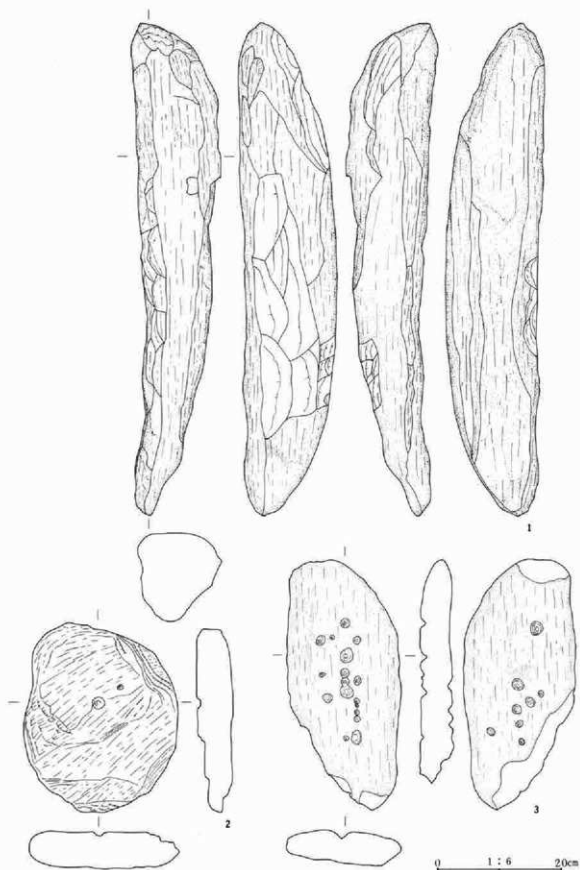
石材重量 重量の判明している石は10点である。その内訳は、500g～1kg未満の石1点、1kg～2.5kg未満の石4点、5kg～7.5kg未満の石4点、20kg～30kg未満の石1点である。

遺物出土状況 立石1点と多孔石2点が出土している。焼石は3点であり、27%を占めていた。

所見 当遺構は環状列石内の立石である。秋田県大湯環状列石の所謂「日時計」と同遺構であるが、下部に土壌は存在せず、集落のシンボリック存在だったものであろう。

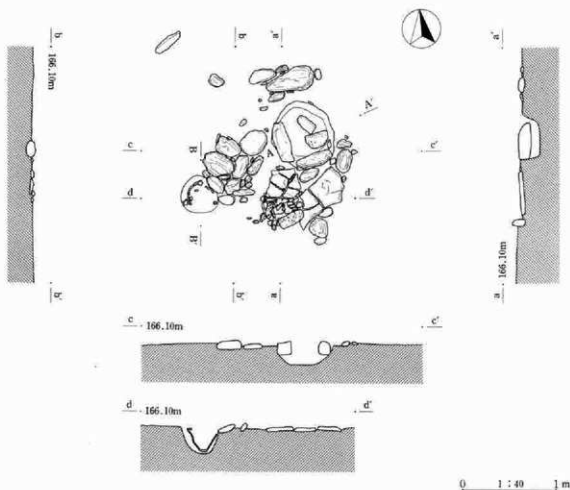
立石観察表

図番 PL	石種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
25-1 104	立石	完形	点紋緑泥片岩	78.0	15.7	14.0	2,100	周囲に加工度がみられる。	立石
25-2 104	多孔石	完形	絹雲母石墨片岩	30.0	24.6	5.8	6,100	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径15mm、短径14mm、深さ5mmである。	押入の石
25-3 104	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(39.3)	18.2	5.6	(5,100)	両面に25個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深12mm。最小は長7mm、短5mm、深3mmで、平均は長14mm、短12mm、深7mm。	押入の石



第25図 立石出土石器

3 敷石住居跡



第26図 1号配石遺構

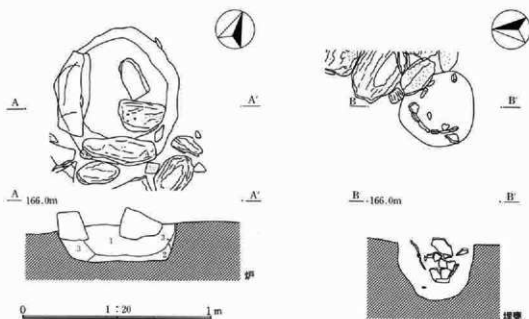
1号配石遺構 (第26~32図, PL. 15, 105)

位置 Ep・Eq-53・54グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約66m (炉までの距離)、2号配石遺構の北東約9.5mに位置している。また、東端の廃棄場所からは約50mの所に位置している。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。6月16日よりI区の調査に入り、26日になって縄文時代の配石遺構もしくは敷石住居跡と考えられる遺構を検出した。その後、周辺の遺構確認作業を行う過程で、中期縄文土器片の出土や、同様な配石遺構の検出により、I区全域に縄文時代中期の遺構群が広がる 것이予想された。当遺構は8月に入り実測作業に入ったが、この段階では配石遺構なのか敷石住居跡なのか判断に迷った。というのも石の配置が部分的であり、また張出し部に該当する個所が存在しないこと等からである。その後、5号配石遺構の調査所見や当遺構に炉跡と思われる石組の存在と埋壘の検出等から、当遺構は敷石住居跡であり、その残欠と最終的に判断された。このため他遺構の調査にあたっては、敷石住居跡と考えられる遺構についても配石遺構No.を付して調査進行をはかり、最終判断は該遺構終了時まで持ち越した。

重複 風倒木と重複しているが、当遺構のほうが新しい。

覆土 竅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。



第27図 1号配石遺構 炉(左)・埋壙(右)

形状 炉や埋壙の位置から判断して、当遺構は5号配石遺構と同様な円形の敷石住居跡になるものと思われる。敷石を中心とした当住居跡の規模は、現状で長径2m75cm・短径2mで、面積約4㎡である。

敷石状況 炉跡を中心に3個所の敷石が認められる。炉南側で長径120cm・短径95cm、炉と埋壙間で長径80cm・短径60cm、炉北側は長径80cm・短径35cmの範囲である。基本的に炉を中心として石の配置があるが、北東方向には認められない。こうした配置は、5号配石遺構の調査により構築当初からの姿と考えられるが、周囲を囲う石のほとんどは抜き去られたものと思われる。かろうじてそのうちの一点が、炉端から北西1m35cmのところで検出されている。

使用石材 当敷石住居跡は総計56点の石から構成され、9種類の石材が確認された。56点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩29点(51.8%)、輝岩7点(12.5%)、点紋緑泥片岩4点(7.1%)、点紋絹雲母緑泥片岩・砂岩各3点(各5.4%)、緑泥片岩2点(3.6%)、輝緑岩・千枚岩・珪石各1点(各1.8%)であり、不明は5点(8.9%)を数えた。56点中38点(68%)の石が片岩類である。炉石には硬い輝岩が使用され、敷石には絹雲母石墨片岩が一般的に使用されているが、炉南側では板状に加工された長径35cm・短径30cmの砂岩が特徴的に使用されていた。

石材重量 重量の判明している石は54点である。その内訳は、500g未満の石26点(48.1%)、1kg～2.5kg未満の石8点(14.8%)、2.5kg～5kg未満の石8点(14.8%)、500g～1kg未満の石4点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(5.6%)、10kg～20kg未満の石2点(3.7%)、20kg～30kg未満の石(3.7%)、7.5kg～10kg未満の石1点(1.9%)である。

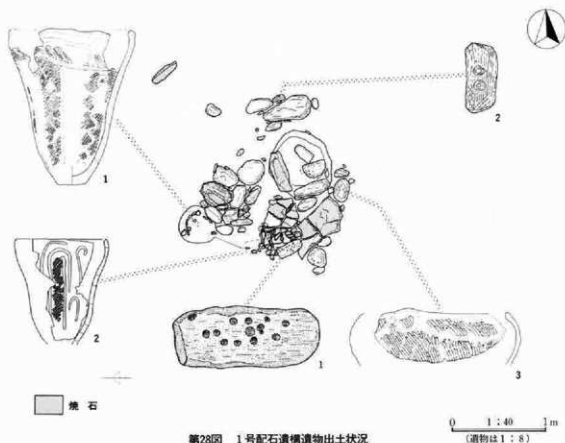
壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったものと思われる。

床面 敷石面は凹凸が認められる。これは大きさ、厚さとも不均一な石が多数使用された結果であろう。

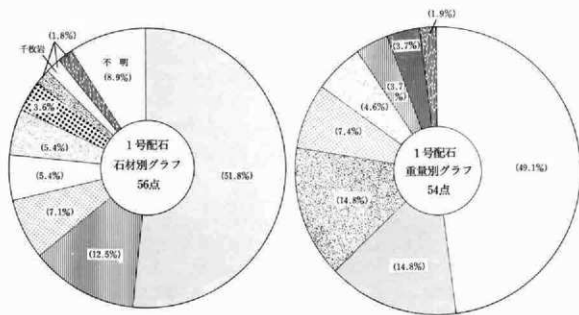
柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径72cm・短径65cm・深さ20cmの楕円形を呈している。面積約0.4㎡。炉石は2個で

3 敷石住居跡〈1号配石遺構〉

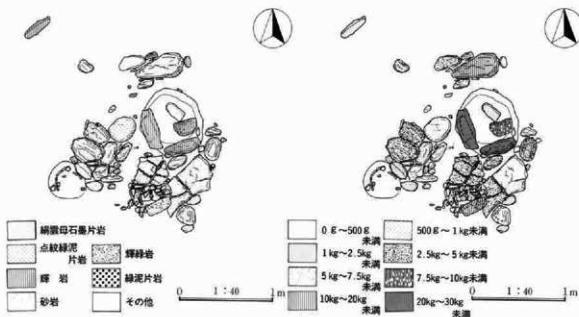


第28図 1号配石遺構遺物出土状況



第29図 1号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

南端・西端に配置され、硬い輝岩が使用されていた。焼土は全く認められなかったが、炭化物が多量に含まれていた。また、覆土中からは加曾利E3式土器の口縁部片が出土している。覆土は3層に分かれた。第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。炭化物粒子を多量に含み、黄褐色粘質土粒子を少量含む。



第30図 1号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・粒子を含む。

第3層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・粒子を多量に含む。

この炉跡の検出によって、当遺構は敷石住居跡であることが判明した。

埋壘 加曾利E3式土器の深鉢(口縁部一部欠損)が斜位状態で埋設されていた(第31図1)。埋設ビットは長径42cm・短径40cm・深さ32cmであり、炉端の南西約90cmのところを位置している。埋壘内覆土は暗褐色土層で、やや固く締まり粘性が少しあり、底部ちかくなるにしたがい炭化物を多く含んでいた。

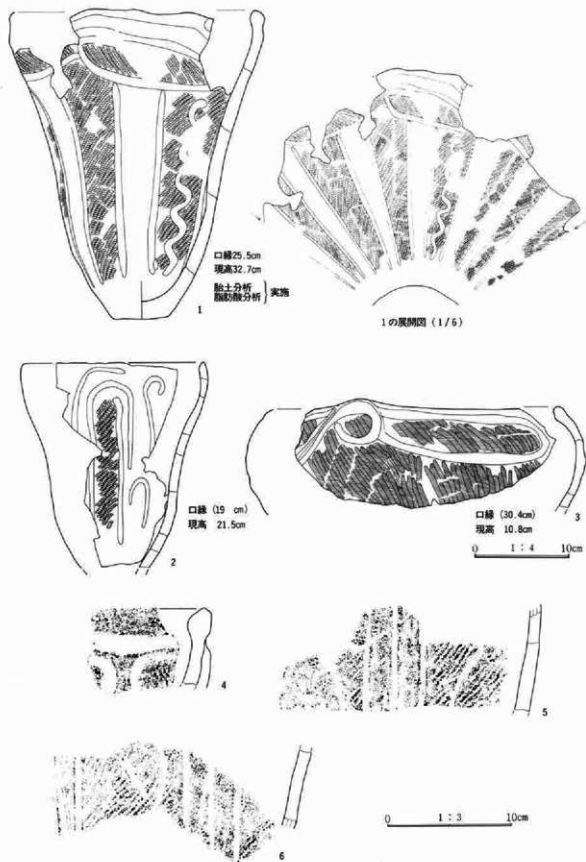
なお、埋壘内・外土壌と埋壘土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 検出できなかった。構築当初より存在しなかったものと思われる。

遺物出土状況 埋壘の他に口縁部片一点(第31図3)が炉跡内から、深鉢形土器片(第31図2)が敷石上から出土している。いずれも加曾利E3式土器片である。土器の出土は少量であった。石器では多孔石1点が炉南側の敷石として利用され、凹石1点は北の敷石内から検出された。石器含有率は3.6%である。また敷石54点(炉石2点除外)中、焼石は5点で、9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。主軸方向はN-62°-E。

3 敷石住居跡〈1号配石遺構〉

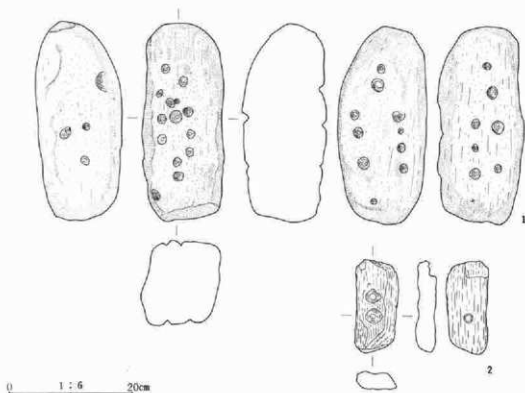


第31図 1号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺情群と遺物

1号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
31-1 165	ほぼ 完形	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部一部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色。内面は暗褐色。	口縁部は滑り土器を埋壁に転用。口縁部に幅 広の沈線による楕円の文様が描かれ、R(土)縦転がし。胴部にはR(土)縦転がし。沈線と 蛇行沈線を垂下。内面の胴下半部に炭化物 が付着している。	埋壁 (倒伏状態)	
31-2 165	口縁 ~底 部片	①細粒の砂を混入 ②良	小型深鉢形土器の大形破片。器厚5~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面は明褐色。	口縁部はやや内湾する。沈線による文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(土)縦転がし。 隣り合う部の傾きが一部異なる。	埋壁東側	
31-3 165	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はよい褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる楕円、渦巻き等の文様が描かれ、縄文 施文。原体はL(土)縦転がし。内外面に煤が 付着している。	6'内	
31-4 165	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面はよい褐色。	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体は磨耗してわかりにくい がR(土)縦転がしと認められる。	一括	
31-5 165	胴部 6片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面は褐色。	31-5・6は同一個体。縄文施文。 原体はR(土)縦転がし。沈線を垂下。	一括	



第32図 1号配石遺構出土石器

1号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm±ε)	特 徴	出土状況
				全長 幅 厚 重量		
32-1 165	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	31.4 13.9 13.3 10,200	全面に凹み。その数は35個で、最大は長22mm、短 20mm、深8mm。最小は長9mm、短8mm、深2mmで、 平均は長15mm、短13mm、深5mm。	6'南の敷
32-2 165	凹石	完形	網雲母石片岩	14.9 7.1 3.3 490	両面に3個の凹みがある。最大の凹みは長26mm、 短23mm、深3mm。最小は長15mm、短13mm、深1mm で、平均は長22mm、短18mm、深2mm。	北の敷石 内

3 敷石住居跡〈2号配石遺構〉

2号配石遺構 (第33~38図、P.L.16、105)

位置 Er-52・53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約56m、1号配石遺構の南西9.5mに位置している。また、東端の廃棄場所からは60mの所に位置している。

経過 1区(昭和61年度調査区)から検出。6月後半に入り1号配石遺構とほぼ同時に検出された。当遺構も調査開始段階から配石遺構として考え、調査を進めてきたが、その後の調査進展で炉跡の検出、さらに埋塞の存在等から判断して1号配石遺構と同様に敷石住居跡と考えられるに至った。しかし、その在り方からはかなりの敷石が抜き去られたものと判断される。

重複 なし。

覆土 壁穴としての掘り込みが存在しないために遺構内覆土は認められなかった。

形状 敷石住居跡の残欠のために、全体

規模は不明である。敷石を中心とした規模は、現状で長径1m65cm・短径1m30cmで、面積約2.3m²である。

敷石状況 当敷石住居跡からは総計26点の石が出土している。このうち炉東にある3個の石が部分敷石を構成するものである。以下、計測値と石材を記す。① 長径53cm・短径28.5cm・厚さ8cm・重量22kg、絹雲母緑泥片岩、② 長径38cm・短径35cm・厚さ11cm・重量30kg、絹雲母緑泥片岩、③ 長径40cm・短径35cm・厚さ12.5cm・重量22.7kg、点紋緑泥片岩である。これらの石は部分敷石の残存であろう。他の石は炉覆土中から出土しているもの、埋塞の押さえの石として使用されているものである。

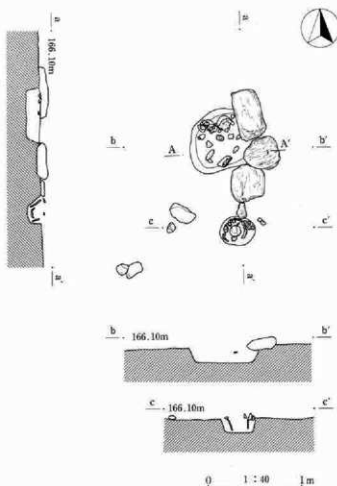
使用石材 8種類の石材が確認された。26点の石材別点数は、点紋緑泥片岩5点(19.2%)、絹雲母石墨片岩4点(15.4%)、絹雲母緑泥片岩3点(11.5%)、輝岩2点(7.7%)、紅糜絹雲母片岩・砂岩・変斑岩・珪石各1点(各3.8%)であり、不明は8点(30.8%)を数えた。26点中13点(50%)の石が片岩類である。

石材重量 500g未満の石13点(50%)、500g~1kg未満の石4点(15.4%)、1kg~2.5kg未満の石4点(15.4%)、2.5kg~5kg未満の石2点(7.7%)、20kg~30kg未満の石2点(7.7%)、30kg~40kg未満の石1点(3.8%)である。部分敷石はいずれも20kg以上の石が使用されている。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったと思われる。

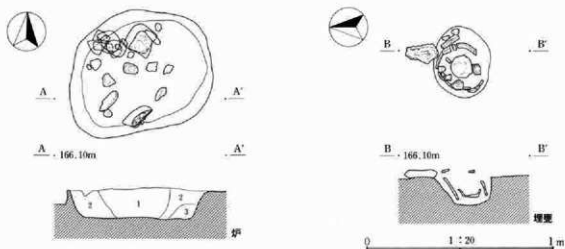
床面 わずかな敷石からの判断ではあるが、凹凸が認められる。

柱穴 検出できなかった。

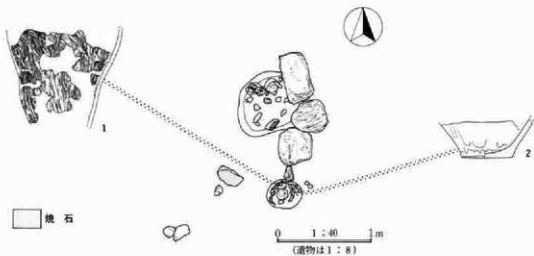


第33図 2号配石遺構

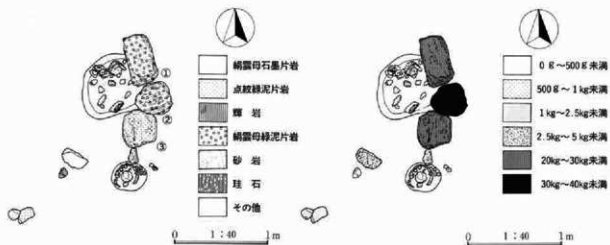
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第34図 2号配石遺構 炉 (左)・埋壁 (右)

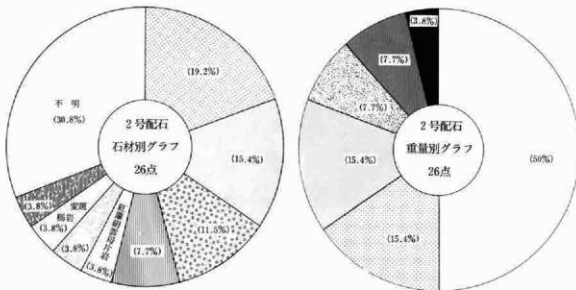


第35図 2号配石遺構遺物出土状況



第36図 2号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) 分布

3 敷石住居跡〈2号配石遺構〉



第37図 2号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

炉 地床炉である。長径78cm・短径64cm・深さ15cmの楕円形を呈している。面積約0.4㎡。覆土中からは、土器片等が出土している。覆土は3層に分れたが、焼土・炭化物は含まれていない。

第1層 暗褐色土層 非常に固く締まり粘性が少しある。

第2層 黄褐色土層 非常に固く締まり、粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色粘質土層 非常に固く締まる。

この炉跡の検出によって、当遺構は敷石住居跡であることが判明した。

埋壘 加曾利E 3式土器の深鉢(口縁部と底部欠損)が炉内側に向く斜位状態で埋設されていた(第38図 1)。埋設ピットは長径38cm・短径31cm・深さ15cmであり、炉端の南65cmの所に位置している。埋壘内覆土は暗褐色土層で、黄褐色粘質土ブロック・粒子を含んでいた。また、埋壘内からは、別個体の底部が出土している。

なお、埋壘内・外土層と埋壘土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 検出できなかった。1号配石遺構と同様に構築当初より存在しなかったものであろうか。

遺物出土状況 埋壘の他には炉内から少量の土器片が出土しているだけである。26点の石のなかで焼石は3点で、11.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の敷石住居跡と考えられる。構築当初

2号配石遺構土器観察表		成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
図番 Pl.	部位 ①胎土 ②焼成(遺存状況)			
38-1 105	口縁部と底部欠損 ①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部(口縁部と底部欠損)。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は褐色。	6本1単位とする条線による文様が施されている。	埋壘(斜位状態)
38-2 105	底部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい橙色、内面は明褐色。	土器接合面が磨かれている。	埋壘内から出土
38-3 105	胴部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原体はR(土蔵転がし)。条線を垂下。 外面に裾が付着している。	敷石北西部



第38図 2号配石遺構出土土器

の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。しかし、1・5号配石遺構と異なり、敷石は抜かれたものが多いものと思われる。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。主軸方向はN-6°-W。

5号配石遺構 (第39～46図、PL. 17～19、105・106)

位置 Ff-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西39m (炉までの距離) の所、6号配石遺構に接して構築されている。

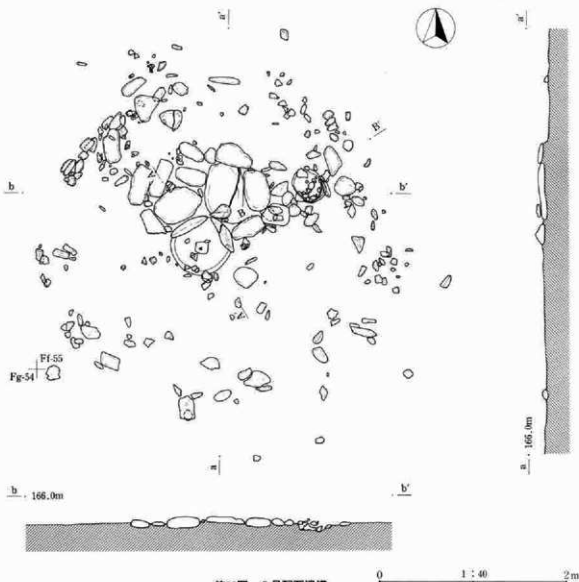
経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。7月中旬に入り石の配置を確認し、周辺を広げ遺構の把握に努めた。下旬までには遺構全体を検出。しかし、東に接して配石遺構 (6号配石遺構) が存在し、この遺構が当遺構と同一遺構を構成するものなのか判断に迷った。9月になり、写真撮影と実測作業を行う過程で、当遺構に石囲い炉と埋塞の存在、この延長線上 (埋塞の北東方向) には張り出し部が存在しないことから、当配石遺構は円形の敷石住居跡になるものと判断された。ところで6号配石遺構については、当初は5号配石遺構の張り出し部ではないかと思われたが、配石の位置関係から別遺構と判断せざるを得なかった。

重複 6号配石遺構と接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 長径3m70cm、短径3m50cmのほぼ円形に石を巡らし、炉北側に部分敷石を施している。その範囲は、長径約150cm、短径約80cmである。1・2号配石遺構が敷石住居跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状況からである。当遺構から囲繞する石を取り除けば、1・2号配石遺構とほぼ同様な遺構となってしまう。住居面積は約11㎡である。

敷石状況 炉北側の敷石を構成している石は12点であり、少量の小石を間際に詰めている。敷石12点のなかには多孔石1点、焼石6点が含まれていた。また敷石中最大のもの、長径64cm・短径31cm・厚さ6.5cm・重量29.5kgの点紋緑泥片岩である。敷石平均では、長径40cm・短径21.4cm・厚さ5.6cm・重量11.2kgになる。囲繞する石は計127個からなるが、均等には巡っていない。比較的まとまりの良い箇所は炉北西の部分と埋塞にほぼ接した箇所であり、前者は43個の石、後者は27個の石から構成されている。他の箇所はまばらな分布で



第39図 5号配石遺構

あるが、5つのブロックにまとめられる。1ブロック9個、2ブロック11個、3ブロック10個、4ブロック10個、5ブロック13個からなり、約10個程の石でそれぞれ構成されている。これらの石は、炉北側の部分敷石と比べると非常に小形の石が選定されている。最大のもので、長径31cm・短径17.5cm・厚さ8.5cm・重量5.7kgであり、平均では長径11.9cm・短径7.3cm・厚さ3.3cm・重量698gとなる。これらの中には凹石1点、磨石2点、打製石弁3点、磨製石弁1点、焼石15点が含まれていた。

使用石材 当敷石住居跡からは総計218点の石が出土し、18種類の石材が確認された。218点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩69点(31.7%)、点紋緑泥片岩23点(10.6%)、輝岩20点(9.2%)、緑泥片岩14点(6.4%)、輝緑岩10点(4.6%)、点紋絹雲母緑泥片岩8点(3.7%)、熱変成岩・珪石各7点(各3.2%)、斑輝岩5点(2.3%)、絹雲母緑泥片岩・安山岩・絹雲母片岩各3点(各1.4%)、赤色珪質板岩・角閃岩各2点(各0.9%)、点紋絹雲母石墨片岩・紅簾絹雲母石墨片岩・絹雲母脆雲母片岩・流紋岩各1点(各0.5%)であり、不明は37点(17%)を数えた。218点中123点(56.4%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は205点である。その内訳は、500g未満の石130点(63.4%)、500g～1kg未満の石29点(14.1%)、1kg～2.5kg未満の石(11.2%)、2.5kg～5kg未満の石11点(5.4%)、5kg～7.5kg未

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

満の石6点(2.9%)、10kg~20kg未満の石2点(1%)、30kg~40kg未満の石2点(1%)、7.5kg~10kg未満の石1点(0.5%)、20kg~30kg未満の石1点(0.5%)である。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来掘り込みはなかったものと思われる。

床面 敷石面は凹凸が認められる。これは大きさ、厚さとも不均一な石が多数使用された結果である。

柱穴 検出できなかった。

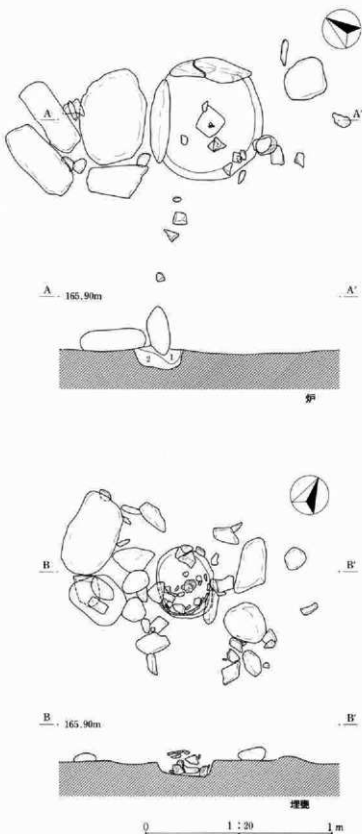
炉 石囲い炉である。長径65cm・短径60cm・深さ5cmのほぼ円形を呈している。面積約0.3㎡。炉石は2個で北端と東端に配置され、1号配石遺構と同様に硬い輝岩と輝緑岩が使用されている。このうちの1点は多孔石が利用されていた。覆土には焼土は全く含まれていなかった。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。黄褐色粘質土粒子を含む。

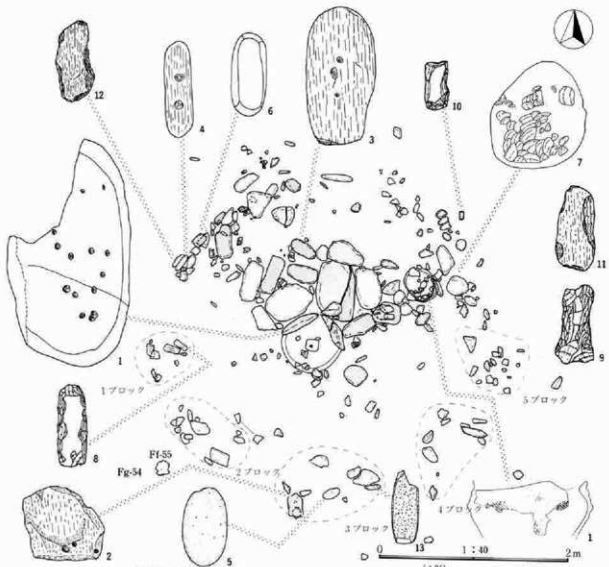
第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。極少量の炭化物粒子を含む。

第3層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。燻石固定のための人為的埋土。

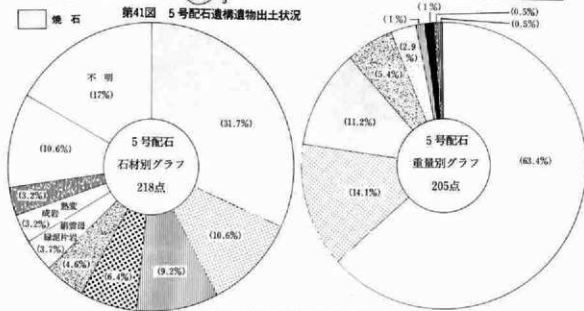
埋甕 加曾利E3式土器の深鉢(胴部欠損)が逆位状態で埋設されていた(第44図1)。埋設ビットは長径37cm・短径30cm・深さ10cmであり、炉端の北東約1mの所に位置している。埋設ビット覆土は黒褐色土層でやや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子・炭化物粒子を含んでいた。埋甕は18個の石で周囲を囲われている。埋甕内覆土は暗褐色土層であり、やや固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子・黄褐色粘質土粒子を極少量含む。



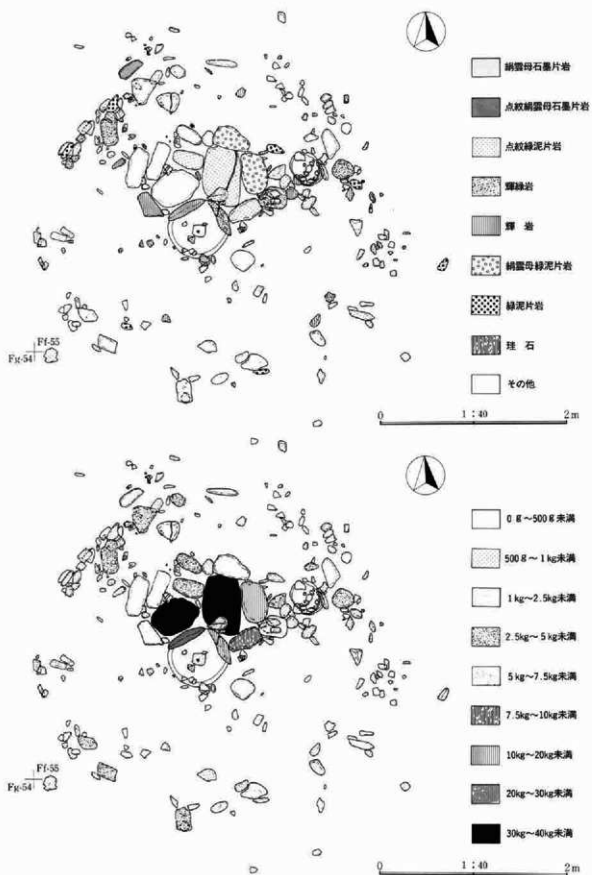
第40図 5号配石遺構 炉(上)・埋甕(下)



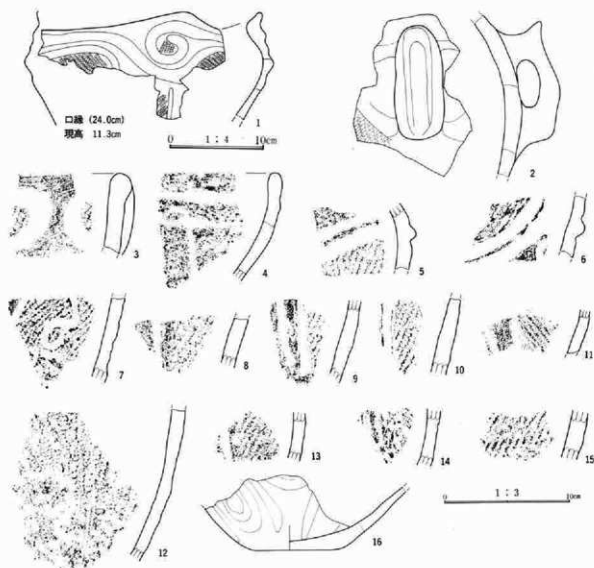
第41図 5号配石遺構遺物出土状況



第42図 5号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ



第43図 5号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布



第44図 5号配石遺構出土器

張出し部 検出できなかった。構築当初より存在しなかったものと思われる。調査段階では6号配石遺構が張出し部に該当するのではないかと考えたが、炉と埋竈の延長線上（埋竈北東方向）には敷石は存在せず、6号配石遺構は別個遺構と判断されるに至った。

遺物出土状況 埋竈の他には炉周辺と圍繞する石に混じて加曾利E3式土器片を主体に、E4式土器片も若干出土している。口縁部10点、胴部21点、底部1点の計32点の出土は少量であった。石器では圍繞する石のなかから、多孔石1点、凹石1点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧1点が検出され、また炉石と部分敷石に多孔石がそれぞれ1点づつ使用されていた。石器含有率は6%である。焼石は32点で、14.7%を占めていた。

所見 当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形敷石住居跡と考えられる。炉を中心とした小範囲に部分敷石を施し、周囲に石を円形配置したものであるが、バラツキが認められる。当遺構は1・2号配石遺構の構築当初の姿になるものと思われる。主軸方向はN-119°-W。

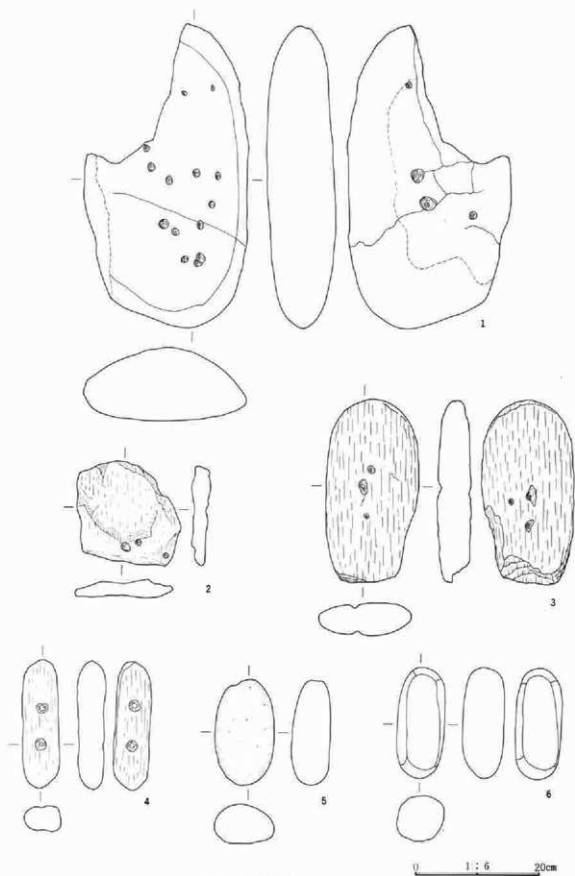
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

5号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
44-1 105	口縁部	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の口縁部(胴部欠損)。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	口縁部は内湾し、突起を有する。口縁部に 隆帯と沈線による高低差、横溝等の文様が 描かれ、R(上)横転。胴部はR(上)縦転。沈 線を下下。外面に煤が付着している。		埋壁 (逆位状態)
44-2 105	把手	①細粒の砂を混入 ②優良	把手の破片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原形はR(上)。		配石中心部
44-3 105	口縁部	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は褐色。	口縁部は沈線による横溝等の文様が描かれ、 縄文施文。原形はL(上)横転がし。		配石東南部
44-4 105	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②中や良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に1条の沈線を 巡らせ、縄文施文。原形はR(上)縦転がし。		配石緑石内
44-5 105	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原形はL(上)横転がし。		配石緑石内
44-6 105	胴部片	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原形はL(上)横転がし。 外面に煤が付着している。		一括
44-7 105	胴部片	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はR(上)縦転がし。沈線による 文様が描かれている。 外面に煤が付着している。		配石緑石内
44-8 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	縄文施文。原形はR(上)(0段多条)縦転がし。 沈線を下下。 土器面は柔軟で押圧が強い。		配石西部
44-9 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。	縄文施文。原形はR(上)縦転がし。 沈線を下下。		配石西部
44-10 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はR(上)縦転がし。 沈線を下下。 外面に煤が付着している。		一括
44-11 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はL(上)縦転がし。 沈線を下下している。		一括
44-12 105	胴部片	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はR(上)斜め転がし。 土器面は柔軟。		配石南西部 土器面は柔軟。
44-13 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原形はR(上)(0段多条)縦転がし。 沈線が施されている。		一括
44-14 105	胴部片	①細粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は赤褐色。	刺突が施されている。		配石南西部
44-15 105	胴部片	①中粒の砂を混入 ②優良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はL(上)横転がし。		一括
44-16 105	底部片	①中粒の砂を混入 ②中や良	深鉢形土器の底部片。底径73mm。 内面は荒れている。 外面の色調は赤褐色、内面は黄褐色。	沈線による文様が描かれている。内外面とも 荒れており、内面に煤が付着している。		配石南西部

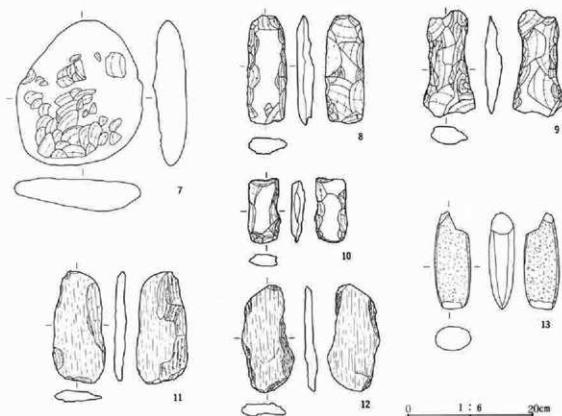
5号配石遺構土器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)			特 徴	出土状況
				全長	厚	重量		
45-1 105	多孔石	欠	輝岩	47.8	25.8	11.5 (18,000)	内面に17個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、 深2mm。最小は長10mm、短7mm、深4mmで、平均 は長14mm、短9mm、深4mm。一部被熱。	9石
45-2 105	多孔石	写	明貴母石型片岩	(16.3)	16.8	3.1 (1,000)	片面に3個の凹み。最大の凹みは長16mm、短13.5 mm、深3mm。最小は長9mm、短8.5mm、深1mmで、 平均は長12mm、短10mm、深3mm。全面被熱。	緑石 (3プロ ット)



第45图 5号配石遺構出土石器(1)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第46図 5号配石遺構出土石器(2)

図番 PL.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
45-3 105	多孔石	ほぼ完形	網雲母石墨片岩	28.8	14.9	5.3	3,500	両面に6個の凹み。最大の凹みは長22mm、短13mm、深4mm。最小は長8mm、短7mm、深3mmで、平均は長13mm、短10mm、深4mm。	部分散石
45-4 105	凹石	完形	緑泥片岩	20.5	6.2	4.2	1,000	両面に4個の凹み。最大の凹みは長19mm、短19mm、深3mm。最小は長18mm、短16mm、深1mmで、平均は長19mm、短17mm、深2mm。	緑石
45-5 105	磨石	完形	安山岩	16.9	9.5	6.3	1,600	器面に磨耗度がみられる。	緑石
45-6 105	磨石	完形	流紋岩	17.4	7.7	7.1	1,250	器面に磨耗度がみられる。	緑石
46-7 106	台石	完形	輝緑岩	23.4	20.0	5.3	3,600		埋壁近く
46-8 106	打製石斧	完形	安山岩	17.2	6.3	2.7	367	短冊(III)。片面に大きく自然面残す。	1ブロック
46-9 106	打製石斧	一部欠損	熱変成岩	(16.9)	8.0	2.8	(325)	バチ(Ha)。刃部付近の左側欠損。	一括
46-10 106	打製石斧	基部欠損	輝緑岩	(10.3)	5.3	2.2	(155)	短冊(III)。一側がわずかに内湾。	緑石
46-11 106	打製石斧	完形	網雲母石墨片岩	17.7	8.4	1.8	335	バチ(Ha)。	一括
46-12 106	打製石斧	完形	網雲母石墨片岩	16.9	8.3	2.1	280	バチ(Hb?)。調整の痕度少なく未成品の可能性。	緑石
46-13 106	磨製石斧	基部欠損	緑泥片岩	(15.4)	5.7	4.0	(530)	磨き段階。両面かなりの部分に敲打痕残す。	緑石

8号配石遺構(第47~55図、PL. 20~25、106)

位置 Fj-51-52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東25m(炉までの距離)、列石からは7m50cmの所、7号配石遺構の北東にほぼ接するように構築されている。

3 敷石住居跡〈8号配石遺構〉



第47図 8号配石遺構

経過 1区（昭和61年度調査区）から検出。9月下旬に遺構の一部を確認し、10月に入り周辺を掘り下げ全体を把握した。遺構上面から多量の土器片と石が出土し、何らかの祭祀遺構ではないかと思われた。その後、1/10の図面を作成し、遺物を取り上げる過程で、ようやく敷石住居跡として理解できるようになった。規模の小さい柄鏡形敷石住居である。最終敷石面の実測終了後、総ての石を取り上げ、石材分類、計測、重量の測定等を実施した。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 柄鏡形を呈している。主体部は長径2m40cm、短径2m30cmのほぼ円形を呈し、張り出し部は長径1m55

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

cm、短径1m10cmである。主体部の面積は約4㎡、張出し部の面積は約0.7㎡であり、総計約4.7㎡になる。
敷石状況 張出し部では明瞭な敷石が認められる。3個の石を配置し周囲に押さえの石を配置したものである。3個の石の最大は、長径45cm・短径31.5cm・厚さ7cm・重量15.5kgの点紋石墨緑泥片岩である。主体部の敷石は炉北西部部分に若干の敷石が認められるが、内部にはほとんど敷石は施されていない。緑石は主体部北から西にかけて認められるが、東部分は存在しない。ただし緑石下の小石が存在することから判断して、当初緑石は存在していたものであろう。緑石の大ききの平均は、長径33.3cm・短径19.8cm・厚さ4.6cm・重量4.1kgである。

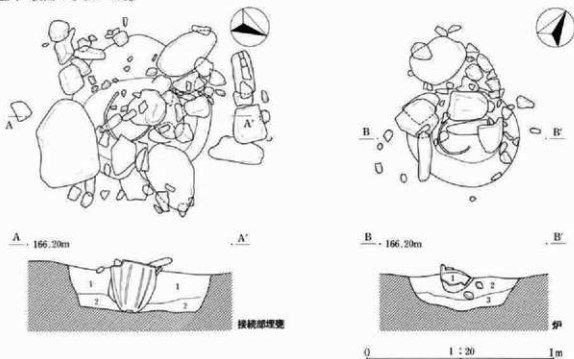
使用石材 32種類の石材が確認された。270点の石材別点数は、網雲母石墨片岩107点(39.6%)、輝岩20点(7.4%)、点紋緑泥片岩19点(7%)、緑泥片岩18点(6.7%)、輝緑岩12点(4.4%)、珪石6点(2.2%)、砂岩5点(1.9%)、点紋石墨緑泥片岩・脆泥片岩各4点(各1.5%)、点紋網雲母石墨片岩・網雲母緑泥片岩・点紋網雲母緑泥片岩・熱変成岩各3点(各1.1%)、網雲母緑泥片岩・安山岩・網雲母片岩・紅簾片岩・紅簾網雲母石墨片岩各2点(各0.7%)、斑輝岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨網雲母片岩・石墨片岩・緑泥片岩・網雲母石墨緑泥片岩・点紋網雲母石墨緑泥片岩・角閃岩・綠色珪質板岩・頁岩・千枚岩・網雲母脆泥片岩各1点(各0.4%)であり、不明は39点(14.4%)を数えた。270点中179点(66.3%)の石は片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は246点である。その内訳は、500g未満の石184点(74.8%)、500g～1kg未満の石27点(11%)、1kg～2.5kg未満の石17点(6.9%)、2.5kg～5kg未満の石13点(5.3%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.8%)、10kg～20kg未満の石2点(0.8%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)である。

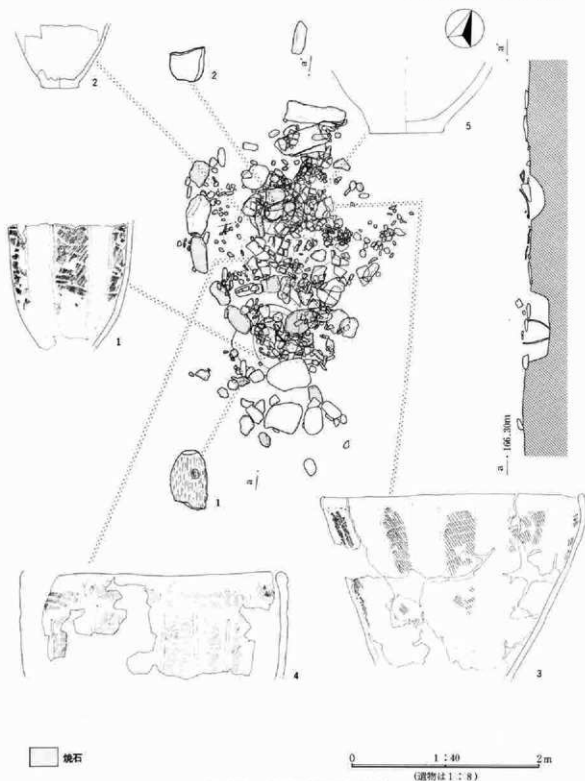
壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係等から判断して、本来ほとんど掘り込みはなかったものと思われる。

床面 ほぼ平坦であるが、張出し部より若干低くなっている。

柱穴 検出できなかった。



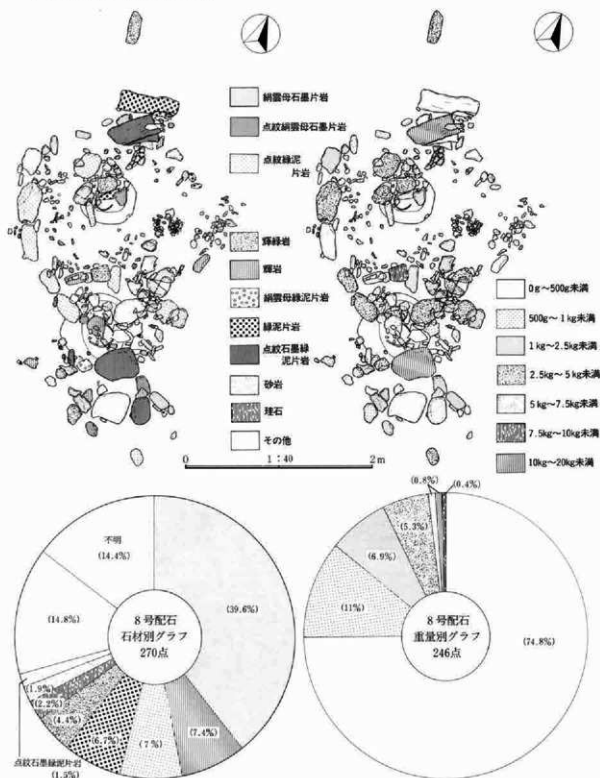
第48図 8号配石遺構 接続部埋壁(左)・炉(右)



第49図 8号配石遺構遺物出土状況

炉 石囲い炉で、炉体土器（第51図 2）を伴っている。炉の規模は長径60cm・短径53cm・深さ20cmの楕円形を呈し、面積約0.24㎡である。炉石は3個で東端・西端・北端に配置され、緑泥片岩・点紋緑泥片岩・輝緑岩が使用されていた。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が少しある（炉体土器の覆土）。



第50図 8号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布とグラフ

第2層 黒褐色土層 やわらかくて締まり、粘性がある。

第3層 黄褐色土層 やわらかくて粘性がある。小石を多量に含む。人為的埋土。

炉体土層は底部を使用して、炉内におかれているが押さえのための小石も存在していた。

埋壘 主体部と張り出し部の接続部に加曾利E4式土器の深鉢(口縁部と底部欠損)が斜位状態で埋設されて

いた(第51図 1)。埋設土壌は長径75cm・短径70cm・深さ27cmのほぼ円形を呈し、面積0.43m²である。炉端の南1m20cmのところに位置している。覆土は3層に分かれた。いずれも人為的埋土である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小石を含む。

第2層 黒褐色土層 やわらかくて粘性がある。黄褐色土ブロックを多量に含む。

第3層 黄褐色土層 やわらかくてサラサラしている。

埋土には扁平な蓋石が伴い、埋土の東側にずり落ちていた。この蓋石は長径18cm・短径15cm・厚さ2cm・重量650gの脆雲母石墨片岩を使用している。埋土内・外土壌と埋土土器片については、残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

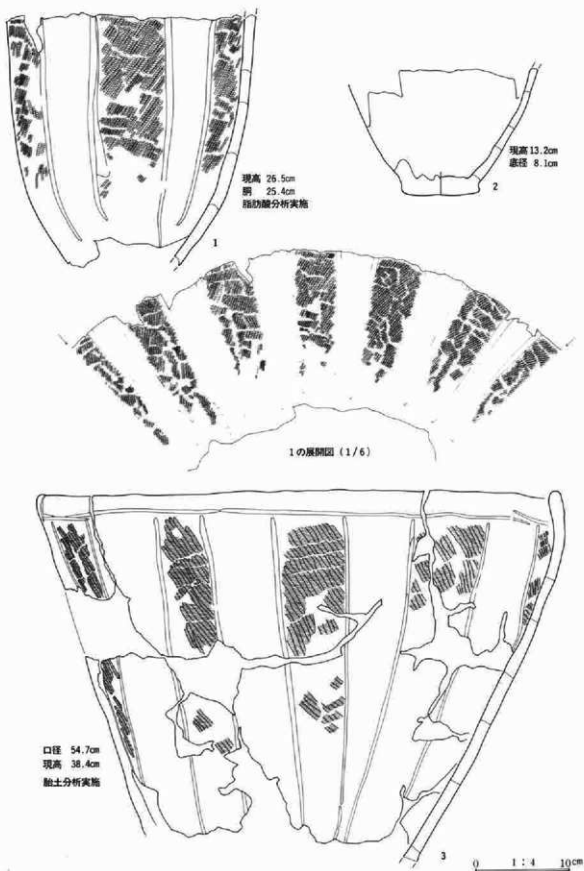
遺物出土状況 炉体土器と埋土のほかには、炉東から胴下部欠損の大型土器(加曾利E4式)、炉南から胴下部欠損の大型土器片(加曾利E3式)が出土し、このほかに口縁部21点、胴部184点、底部3点の計208点の土器片が出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も含まれていた。石器では四石1点、打製石斧1点が出土しているが、石器含有率は0.7%と少ない。また焼石は270点中46点の出土で、17%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の小規模な柄鏡形敷石住居跡である。環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-20°-W。

8号配石遺構土器観察表

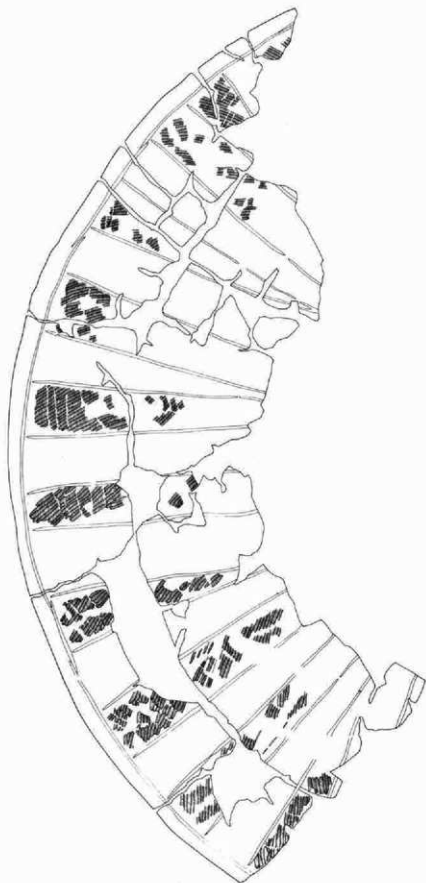
図番 Pl.	部位	①土質 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
51-1 106	口縁 ・底部 欠損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部と底部欠損。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい明褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下下し、縄文施文。原体はR(上)縦転がし。粘土接合面は整形している。	埋土 (斜位状態)
51-2 106	底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。底径81mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はぶい黄褐色。	胴上半部を欠損して、炉体土器として使用 している。外面も粗い調整が行われている。	炉体土器
51-3 106	胴下 半部 欠損	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴下半部欠損。器厚10~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。	口縁部は内湾し、胴部の折れをもたない器 形。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈 線を垂らせる。これに連続させるように沈 線を垂下。区画内にL(上)縦転がし。土器面は柔 軟。	炉東
53-4 106	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	口縁部に幅広い沈線による楕円等の文様を 描き、縄文施文。原体はR(上)。胴部はR(上) 縦転がし。沈線を下下。土器面は柔軟で押 圧が強い。	炉南
53-5 106	底部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。底径110mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰黄褐色。	内面に帯が付着している。	炉東
53-6 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は明赤褐色。	波状口縁部片。口縁部は隆帯と沈線による 渦巻き等の文様が描かれ、縄文施文。原体 はL(上)横転がし。磨り細い。	主体部内部
53-7 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい赤褐色。	口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(上)横転がし。	主体部内部
53-8 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は黒褐色。	口縁部は隆帯と沈線による楕円等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(上)横転がし。	埋土
53-9 106	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL(長)斜め転がし。	主体部内部
53-10 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はL(長)。	主体部縁石

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

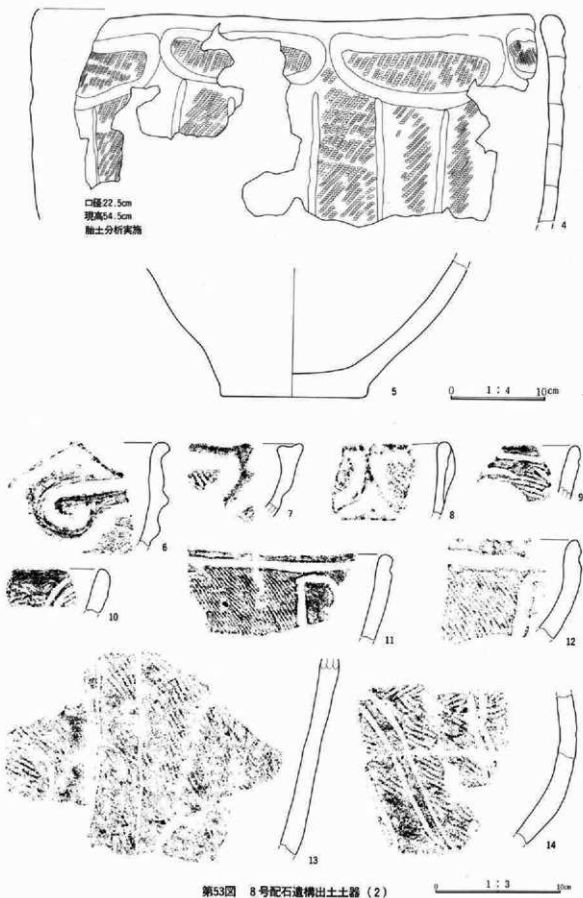


第51図 8号配石遺構出土土器 (1)

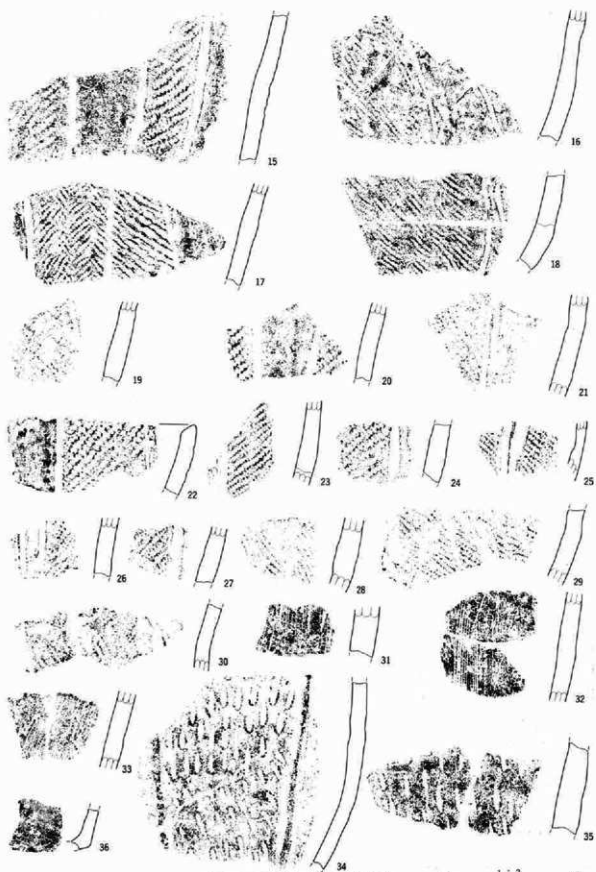
3 敷石住居跡〈8号配石遺構〉



第52図 8号配石遺構出土器展列図(1/6)



第53図 8号配石遺構出土土器(2)



第54図 8号配石遺構出土土器(3)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

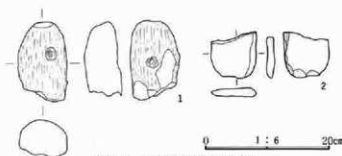
8号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
53-11 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は黒褐色。	口唇部に1条の沈線が施されている。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。外面に煤が付着している。	伊周辺	
53-12 106	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に1条の沈線が施されている。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。外面に煤が付着している。	伊周辺	
53-13 106	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。	主体部内部	
53-14 106	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明黄褐色。	縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦・横転がし。	主体部縁石	
54-15 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	沈線を下下。縄文施文。 原形はR(Ⅱ)縦転がし。	主体部内部	
54-16 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原形はL(Ⅱ)縦転がし。	伊周内部	
54-17 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒灰色。	沈線を下下。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がしとR(Ⅱ)縦転がし。3種類の原形を使用している。土器面は柔軟で押圧が強い。	埋蔵周辺	
54-18 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原形はL(Ⅱ)縦転がし。	主体部縁石	
54-19 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。	主体部内部	
54-20 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。	伊周辺	
54-21 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい赤褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。	一括	
54-22 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。押圧が強い。輪積み皿を口縁部として再利用。	掘出し部	
54-23 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。	主体部縁石	
54-24 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。	沈線を下下。縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。	一括	
54-25 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。	微隆起部を下下。縄文施文。原形はL(Ⅱ)縦転がし。	主体部縁石	
54-26 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明黒灰色。	沈線を下下。縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。	主体部縁石	
54-27 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原形はR(Ⅱ)縦転がし。 隆帯を下下。	一括	
54-28 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16~20mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。	縄文施文。原形はR(Ⅱ)。	主体部縁石	
54-29 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原形はL(Ⅱ) (0段多糸) 縦転がし。 沈線が施されている。	伊北	

3 敷石住居跡 <17号配石遺構>

8号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②構成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	種 (その他)	出土状況
54-30 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色。		縄文施文。原体はR(1)縦・横転がして羽状。 外面に煤が付着している。	主体部緑石
54-31 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。		条線が施されている。粘土接合面に刻みが 施されている。	主体部緑石
54-32 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。		条線が施されている。	張出し部
54-33 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。		条線が施されている。	伊
54-34 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。		微隆起帯を垂下させ、区区内に押し引き状 の紋線が施されている。	主体部緑石
54-35 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。		押し引き状の紋線が施されている。	一括
54-36 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。		縄文施文。原体はL(1)斜め転がし。 磨りは非常に細かい。	伊



第55図 8号配石遺構出土土器

8号配石遺構土器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
55-1 106	凹 石 笥	点紋緑泥片岩		(12.5)	8.2	5.9	(400)	内面に2個の凹みがある。ほぼ同じ大きさで、長 径20mm、短径18mm、深さ4mmである。	埋蔵の南
55-2 106	打製石片	基部欠損	輝岩	(7.2)	7.4	1.5	(90)	バチ(Hb?)。1面に大きく自然面残す。	伊北

17号配石遺構 (第56~63図、PL. 26・27、106・107)

位置 Fe・Ff-58・59グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東59m(伊までの距離)、12号配石遺構の北東12mの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。12月上旬、Fe-58グリッドにおいて配石遺構を検出した。当初、遺構名を13号配石遺構として調査を進めたが、その後、3月10日になってFe-59グリッドにおいて石皿いしが検出された。さらに周辺から土器片が出土したことから、この遺構を17号配石遺構とした。その後、調査を進めていく過程で、13号配石遺構と17号配石遺構は同一の遺構で敷石住居跡となることが判明した。遺構の北半分ほどは路線外に延びているために、完掘はできなかった。

重複 なし。覆土 遺構上層には耕作土層と暗褐色土層が堆積している。第1層 暗褐色土層 浅間A

軽石を多量に含む耕作土層。第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を含む。第3層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。遺構内は竪穴としての掘り込みが確認できなかったために、覆土は把握できなかった。

形状 部分的な検出のために柄杓形を呈するものか、円形になるのか不明である。現状では長径5m、短径3m10cmを測る。面積は約12.3㎡である。

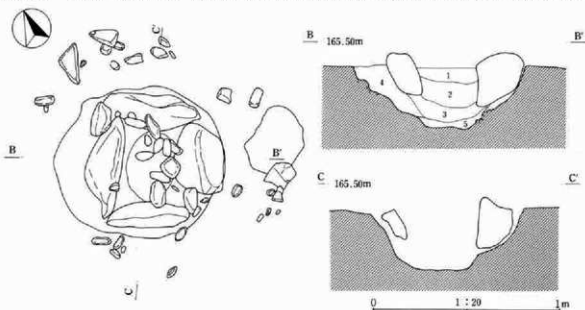
敷石状況 伊南西1m80cmのところには石が集中している。また伊東1m50cmの部分にも集中箇所があるが、遺構内部の敷石ではなくて圍繞する縁石となろう。

使用石材 26種類の石材が確認された。274点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩109点(39.8%)、輝岩30点(10.9%)、点紋緑泥片岩24点(8.8%)、輝緑岩17点(6.2%)、緑泥片岩・珪石各15点(各5.5%)、絹雲母緑泥片岩9点(3.3%)、絹雲母石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・流紋岩・変斑岩各3点(各1.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑岩・砂岩各2点(各0.7%)、点紋絹雲母石墨片岩・滑石片岩・赤色珪質板岩・チャート・安山岩・絹雲母片岩・熱変成岩・紅泥片岩・緑色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・石英安山岩・珪岩各1点(各0.4%)であり、不明は25点(9.1%)を数えた。274点中167点(61%)の石は片岩類である。

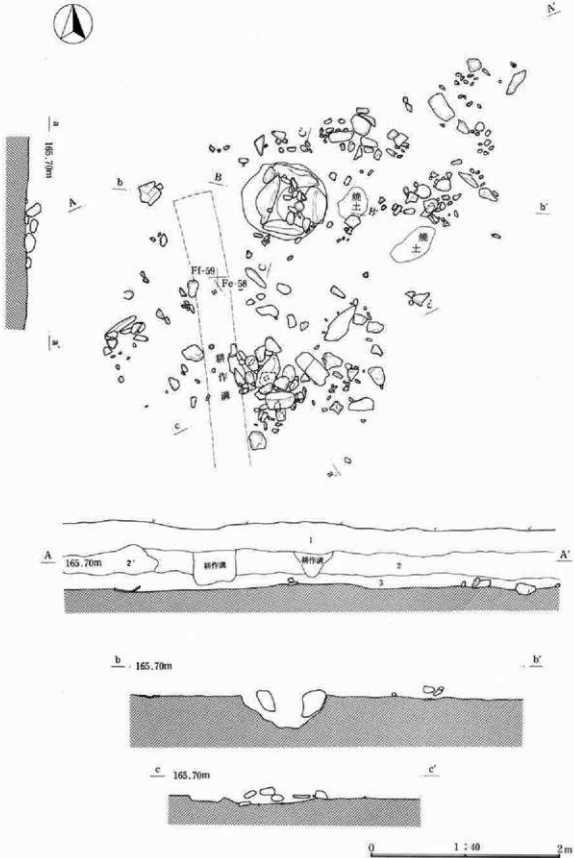
石材重量 重量の判明している石は257点である。その内訳は、500g未満の石164点(63.8%)、500g～1kg未満の石38点(14.8%)、1kg～2.5kg未満の石29点(11.3%)、2.5kg～5kg未満の石16点(6.2%)、10kg～20kg未満の石5点(1.9%)、7.5kg～10kg未満の石3点(1.2%)、5kg～7.5kg未満の石1点(0.4%)、30kg～40kg未満の石1点(0.4%)である。

壁高 確認できなかった。遺構の状況、他遺構の関係から判断して、本来掘り込みはなかったものと思う。

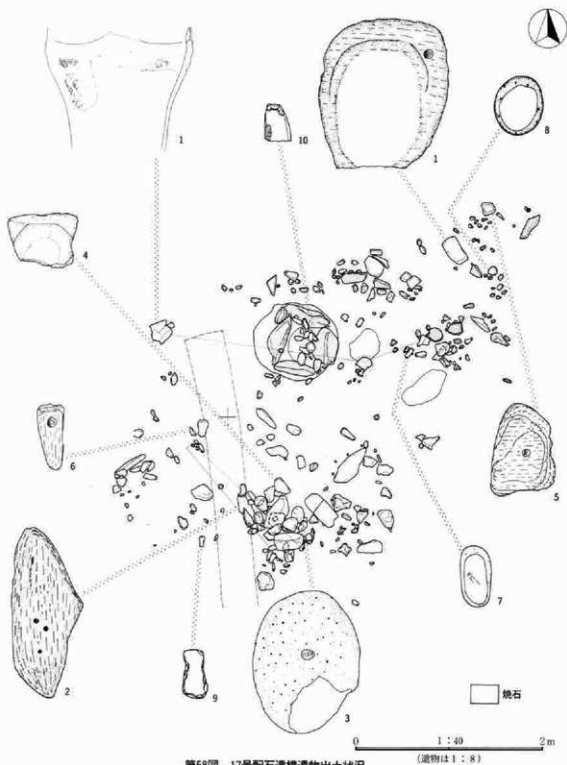
柱穴 検出できなかった。伊 石囲い伊である。長径92cm・短径80cm・深さ34cmの楕円形を呈し、面積0.6㎡である。覆土は5層に分かれた。第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性がある。炭化物粒子を少量含む。第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子、焼土粒子を含む。第1層よりやや黒色を増す。第3層 茶褐色土層 やわらかくて粘性がある。焼土粒子を多量に含み、炭化物粒子を少量含む。第4層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量



第56図 17号配石遺構 伊



第57図 17号配石遺構



第58図 17号配石遺構遺物出土状況

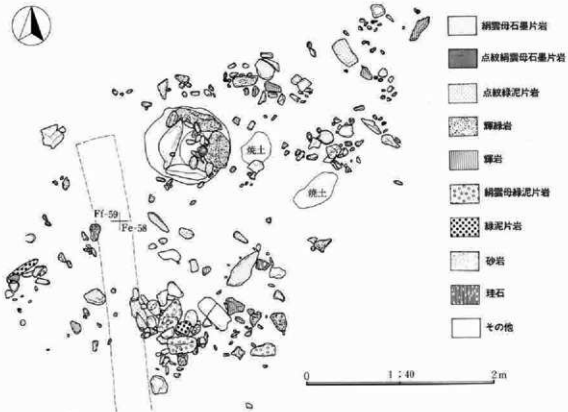
(遺物は1:8)

に含む。炉石をおさえる人為的埋土。第5層 黄褐色土層 黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

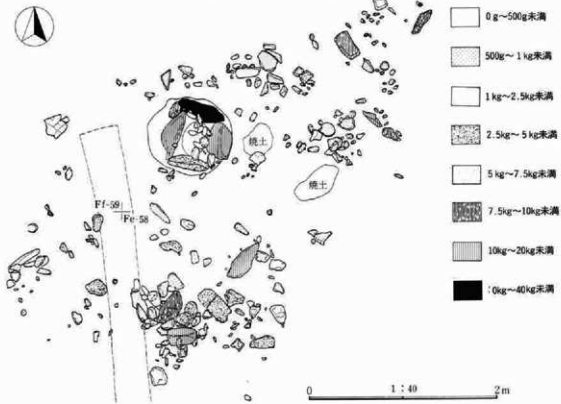
炉には4個の大石と2個の小石を配置している。6点の炉石のうち4点は固い石材が使用されていた。石材は輝緑岩3点、点紋緑泥片岩・斑岩・絹雲母緑泥石墨片岩各1点である。

埋壘 検出できなかった。張出し部 検出できなかった。

遺物出土状況 加曾利E 3式の大形土器片1点の他に、口縁部14点、胴部47点、底部1点の計62点の土器片

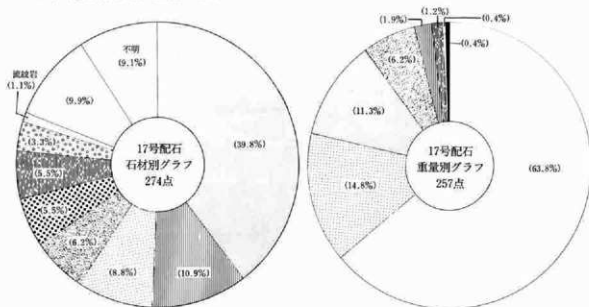


第59図 17号配石遺構石材別分布



第60図 17号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



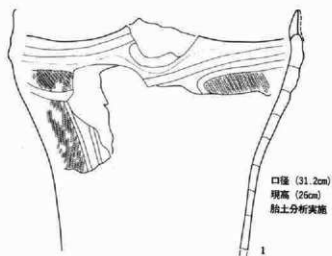
第61図 17号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

が出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も若干含まれていた。石器では石皿2点、多孔石3点、凹石1点、磨石2点、打製石斧1点、磨製石斧1点が出土している。石器含有率は3.6%であり、焼石は274点中28点の出土で、10.2%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡である。ただし完掘できなかったために円形なのか、柄杓形なのか判断はつかない。

17号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
62-1 106	口縁 ~胴部	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は黄褐色。	内湾する波状口縁部。口縁部は隆帯と沈線 による渦巻き、楕円等の文様が描かれ、R [土模。胴部はR]土模。太い糸と細い糸を 使用。沈線を垂下。土器面は柔軟で、押圧 が強い。		伊西
62-2 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は橙色。	口縁部に狭い無文帯をおき、1本の沈線を 巡らせる。以下押し引き状の沈線が施され ている。		主体部縁石
62-3 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線 による文様が描かれる。		主体部縁石
62-4 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい褐色。	口縁部に隆帯と沈線による渦巻き等の文様 が描かれる。		一括
62-5 106	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ る。		伊北
62-6 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は橙色。	刺突が施されている。		一括
62-7 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は明褐色。	縄文施文。原体はL[目線転がし]。 沈線を垂下。		伊西
62-8 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は橙色。	縄文施文。原体はR[目線転がし]。 沈線を垂下。		伊東



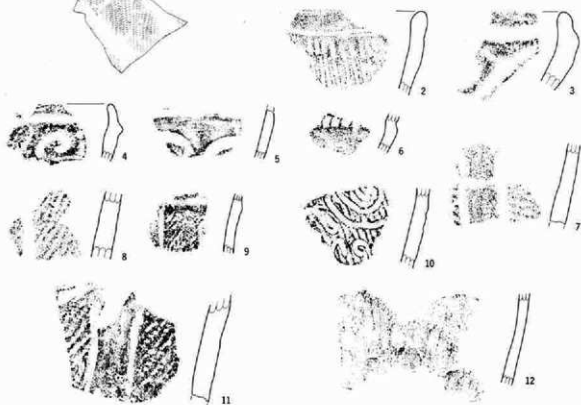
口径 (31.2cm)
 規高 (26cm)
 胎土分析実施

1



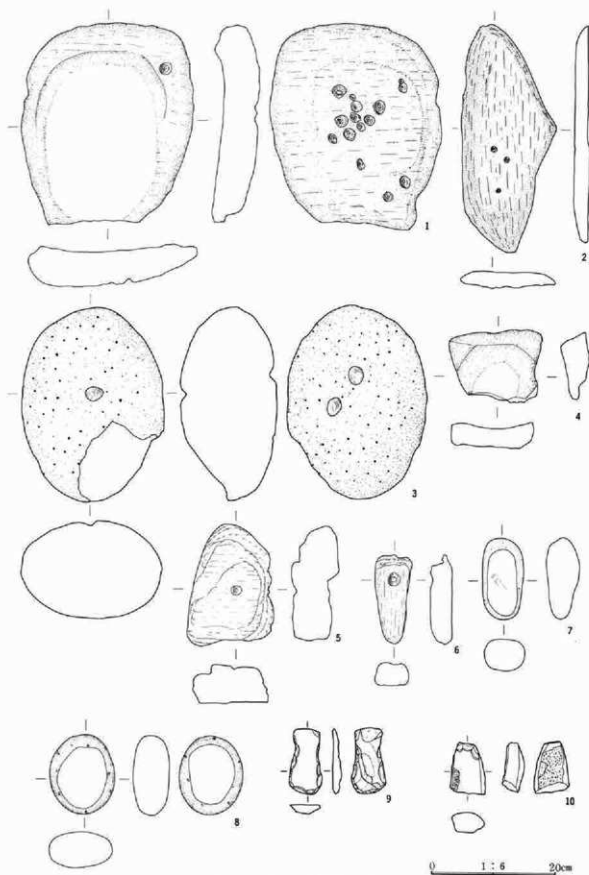
展開図 (1/6)

0 1 : 4 10cm



0 1 : 3 10cm

第62図 17号配石遺構出土土器



第63図 17号配石遺構出土石器

3 敷石住居跡 (17号配石遺構)

17号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①軸土 ②構成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
62-9 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR(土)縦転がし。 沈線を下下。	一括
62-10 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はL(土)縦転がし。 沈線による文様が描かれている。	伊南
62-11 106	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は明赤褐色。	縄文施文。原体はR(土)縦転がし。 沈線を下下。	一括
62-12 106	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は縦方向のミゾキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はL(土)縦転がし。	伊東

17号配石遺構石器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
63-1 106	石 皿	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	31.7	27.5	7.1	9,400	楕円形で磨面浅く湾曲している。15個の凹み。平均は長径17mm、短径15mm、深さ6mmで、多孔石の凹みと共通している。	伊北東
63-2 107	多 孔 石	完形	点紋緑泥片岩	36.2	15.0	25.0	2,000	片面に3個の凹み。最大の凹みは長10mm、短9mm、深さ2mm。最小は長2mm、短6mm、深さ1mmで、平均は長9mm、短8mm、深さ3mm。	伊南の緑石
63-3 107	多 孔 石 (丸石)	一部欠損	石英安山岩	20.5	15.3	10.4	(3,700)	片面に3個の凹み。いずれもほぼ同じ大きさである。平均は長径20mm、短径15mm、深さ6mmである。	伊南の緑石
63-4 106	石 皿?	部分	砂岩	(11.5)	(15.1)	4.6	(716)	小型の石皿片である。	
63-5 106	多 孔 石	完形	縹雲母石片岩	19.3	13.7	7.6	2,500	片面に1個の凹みがある。長径16mm、短径15mm、深さ4mm。凹みは1個であるが、多孔石の凹みと共通している。	伊南の緑石
63-6 106	凹 石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(14.0)	6.0	3.7	(500)	片面に1個の凹みがある。長径22mm、短径21mm、深さ3mm。	伊南西
63-7 107	磨 石	完形	流紋岩	13.1	6.4	5.3	600	磨面に磨耗痕がみられる。	伊東
63-8 107	磨 石	完形	安山岩	12.5	10.5	5.7	1,150	磨面に磨耗痕がみられる。	石皿近く
63-9 107	打製石斧	完形	輝緑岩	10.4	5.4	1.5	80	バチ(IIa)。	緑石
63-10 107	磨製石斧	刃部欠損	輝緑岩	(8.0)	5.7	3.6	(230)	敲打途中。	伊内

23号配石遺構 (第64~73図, PL. 28~31, 107)

位置 Fo・Fp-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西40m (炉までの距離)、列石からは20mの所、24号配石遺構の南6m (炉から炉までの距離) に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。6月から環状列石周辺の調査を開始し、多数の配石遺構を確認した。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土したため、図面作成と遺物取り上げには時間がかかった。このため配石遺構として調査を進めていったが、敷石住居跡と判断されたのは調査もなかばをすぎてからである。7月上旬に遺構の全景写真の撮影を実施し、その後、他の配石遺構の調査を行った。9月中旬になり、遺物の取り上げを再開し、10月下旬に張出し部の写真撮影、11月下旬から主体部の敷石の取り上げを開始した。12月に入って石囲い炉の調査を行い、敷石の総ての石を取り上げて調査を終了した。

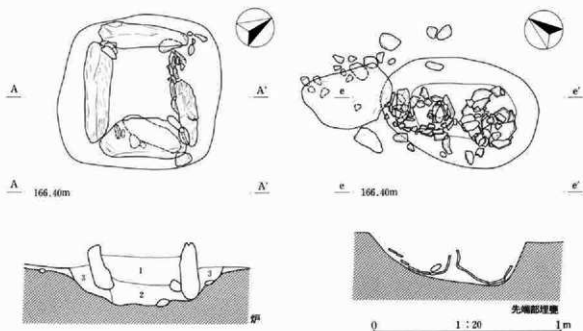
重複 なし。24号配石遺構に近接している。

覆土 堅穴としての掘り込みは確認できなかった。しかし、張出し部と主体部には段差が生じているために本来は掘り込みは存在していたものであろう。

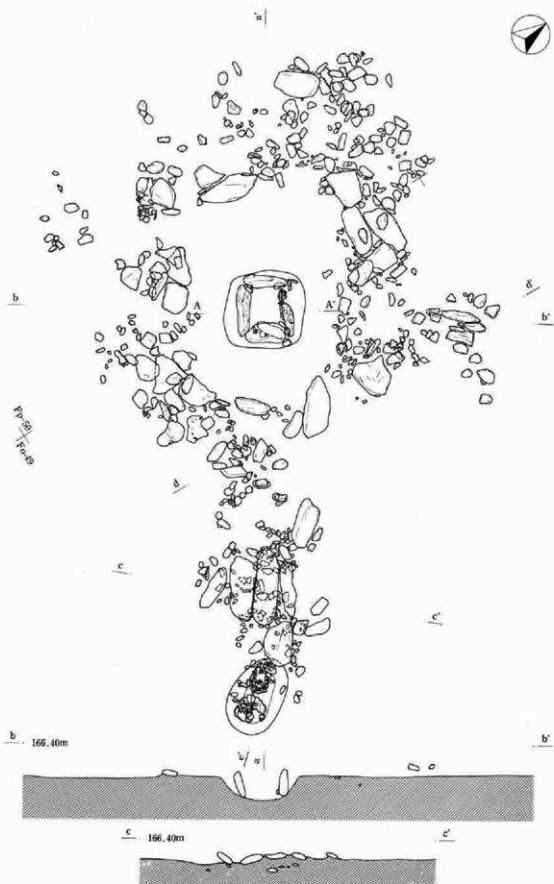
形状 柄杓形敷石住居跡で全長6m40cmを測る。主体部は長短とも径3mの円形を呈し面積約9.2㎡、張出し部は長径3m40cm、短径90cmで、面積約2.6㎡ある。総面積は約12.1㎡になる。

敷石状況 主体部の緑石と張出し部に敷石が施されているが、主体部の内部には敷石は認められない。この事実は他の敷石住居跡と共通するものである。張出し部の石の下には多量の小石が、押さえの石として使用されていた。また主体部の緑石の間隙にも小石が認められた。

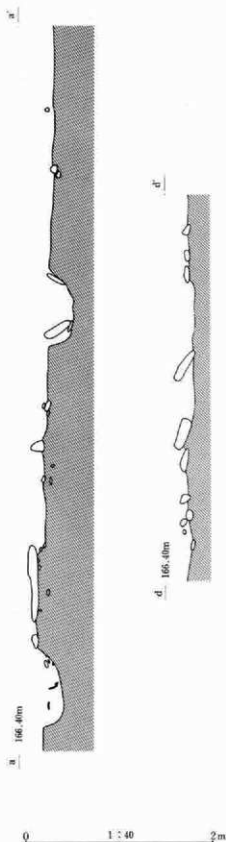
使用石材 敷石住居跡を構成している敷石と、この敷石の押さえの小石は総計518点検出されている。この石材別点数は、絹雲母石墨片岩146点 (28.2%)、点紋絹雲母石墨片岩86点 (16.6%)、輝緑岩48点 (9.3%)、点紋緑泥片岩39点 (7.5%)、点紋石墨緑泥片岩17点 (3.3%)、緑泥片岩・珪石各15点 (各2.9%)、チャート13点 (2.5%)、その他の石材97点 (18.7%) であり、不明は42点 (8.1%) を数えた。また敷石を構成しない石は823点出土している。この石材別点数は、絹雲母石墨片岩278点 (33.8%)、点紋絹雲母石墨片岩74点 (9%)、



第64図 23号配石遺構 炉 (左)・先端部埋壁 (右)



第65図 23号配石遺構



点紋緑泥片岩55点(6.7%)、輝緑岩53点(6.4%)、輝岩48点(5.8%)、珪石44点(5.3%)、緑泥片岩37点(4.5%)、点紋石墨緑泥片岩34点(4.1%)、その他の石材143点(17.4%)であり、不明は57点(6.9%)を数えた。

石材重量 重量の判明している敷石関係の石は487点である。その内訳は、500g未満の石300点(61.6%)、500g～1kg未満の石77点(15.8%)、1kg～2.5kg未満の石65点(13.3%)、2.5kg～5kg未満の石16点(3.3%)、10kg～20kg未満の石9点(1.8%)、5kg～7.5kg未満の石8点(1.6%)、20kg～30kg未満の石5点(1%)、7.5kg～10kg未満の石4点(0.8%)、30kg～40kg未満の石3点(0.6%)である。また敷石を構成しない石は698点の重量が判明している。その内訳は、500g未満の石409点(58.6%)、500g～1kg未満の石150点(21.5%)、1kg～2.5kg未満の石107点(15.3%)、2.5kg～5kg未満の石24点(3.4%)、5kg～7.5kg未満の石5点(0.7%)、7.5kg～10kg未満の石2点(0.3%)、10kg～20kg未満の石1点(0.1%)である。

壁高 確認できなかったが、張り出し部と主体部の床面とは段差があるので、主体部には若干の掘り込みがあった可能性が高い。

柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径84cm・短径82cm・深さ26cmの方形を呈し、面積0.6㎡である。覆土は3層に分かれた。

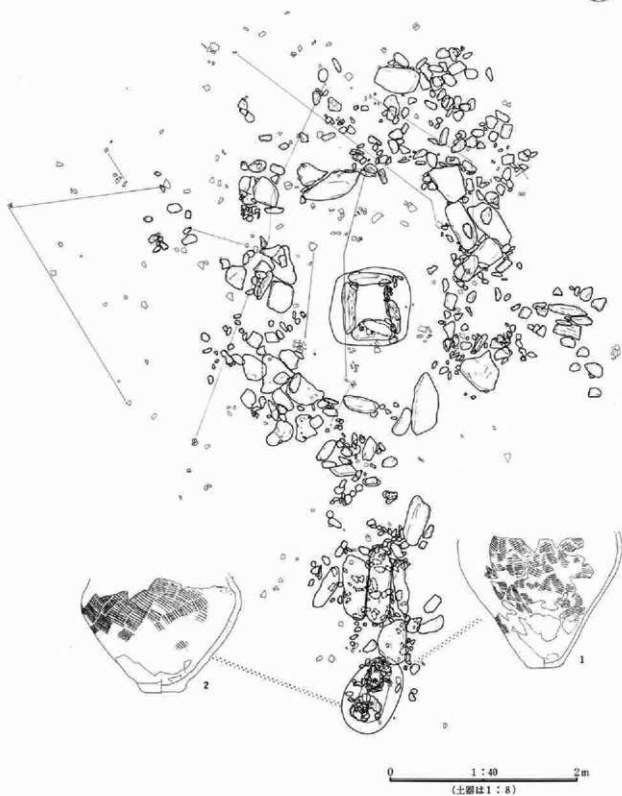
第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極少量含む。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。炭化物粒子を少量含む。

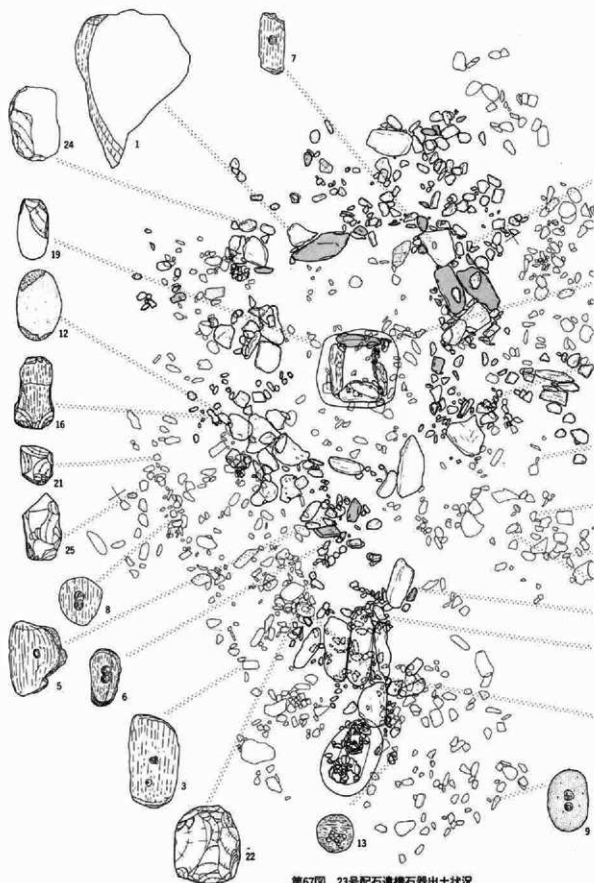
第3層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炉掘り方の覆土である。

1・2・3層には焼土は含まれていない。

炉石は4個の大石が使用され、この間隙に小石を配置している。この構築方法は17号配石遺構の石囲い炉と共通するものである。炉石4個の石材は絹雲母石墨片岩2点、点紋緑泥片岩1点、点紋絹雲母緑泥片岩1点であり、固い輝緑岩・輝岩等の石材は使用されてい



第66図 23号配石遺構土器出土状況



第67図 23号配石遺構群出土状況

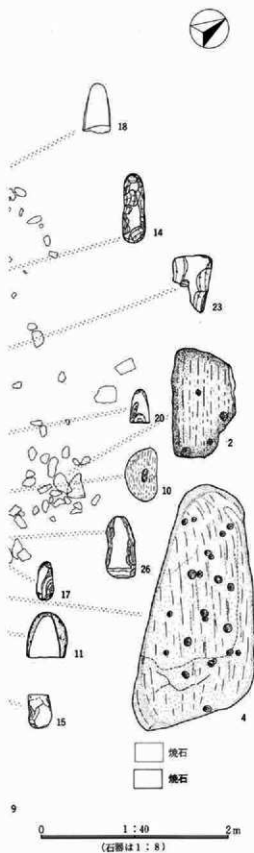
なかった。

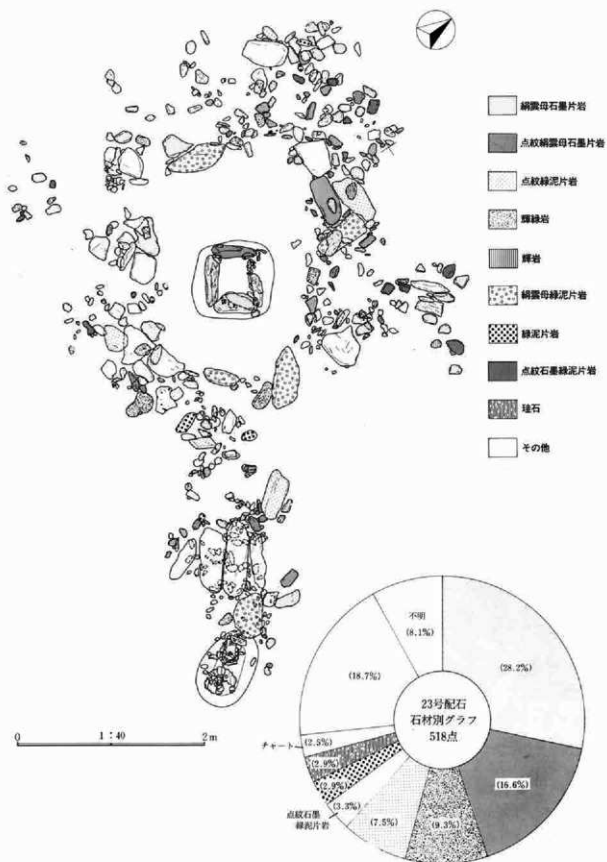
埋壙 張出し部先端から口縁部を欠損した加曾利E4式土器2個体が出土した(第70図1・2)。埋設土壌は長径85cm・短径56cm・深さ24cmの楕円形を呈している。覆土は暗褐色土層で、やわらかくて粘性は余りなかった。埋壙はこの土壌内に斜位状態で埋設されていたものである。埋壙①は蓋石を伴っていた。この蓋石は長径17cm・短径8cm・厚さ4cmを測る。埋壙2個体の覆土は、暗褐色土層でやわらかくて締まり悪い。粘性は余りなかった。埋壙内土壌はいずれも残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析〔1〕参照)。

張出し部 3m40cmの張出し部で、明瞭な敷石が認められるのは埋壙の北1m20cmまでの範囲である。石材は網雲母緑泥片岩1点、点紋網雲母緑泥片岩4点であり同様な石材が選択されていた。この敷石下には多量の小石が存在していた。なお、接続部近くに立石がある。この立石は焼石で、長径31cm・短径21cm・厚さ10.5cm・重量10kgの点紋網雲母緑泥片岩を使用していた。

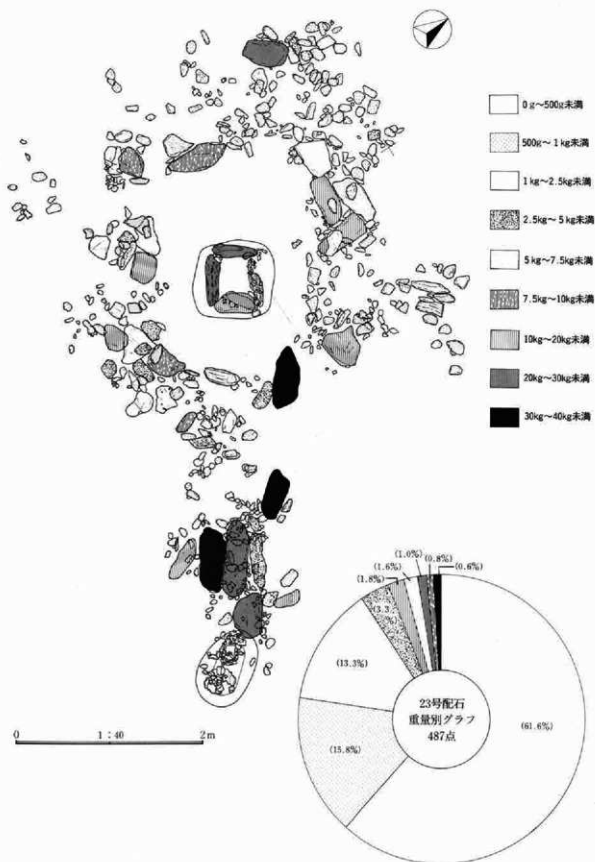
遺物出土状況 埋壙2個体を含め、297点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部34点、胴部254点、底部9点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片が若干含まれていた。石器では石皿1点、多孔石4点、凹石6点、磨石1点、敲石2点、打製石斧4点、磨製石斧は未製品も含め9点が出土している。石器含有率は2%である。また焼石は107点の出土で、8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。加曾利E3式期の敷石住居跡とは異なり、環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-54°-W。





第68図 23号配石遺構石材別分布



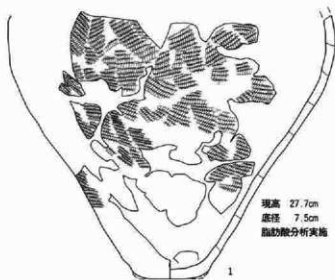
第69図 23号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

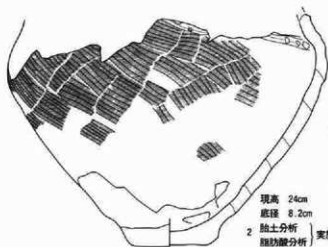
23号配石遺構土器調査表

調査 No.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
70-1	胴部 ①底	②良	深鉢形土器の胴上半部～底部。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。 底部周縁は磨耗している。		張り出し部 (斜位状態)
70-2	胴部 ①上半部 ②底	②良	浅鉢形土器の口縁部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。	1条の微隆起帯を巡らせている。縄文施文。 原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。外面に煤が付着して いる。底部周縁は磨耗している。		張り出し部 (斜位状態)
70-3	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と幅広い 沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		埋没否
70-4	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12～22mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に幅広い沈線に よる構内等による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部縁石
70-5	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部は内湾し、突起を有する。口唇部に 1条の微隆起帯を巡らす。以下微隆起帯に よる文様を描く。原文はL <u>横</u> 。		主体部内部
70-6	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5～8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇 部に刺突を施し、1条の微隆起帯を巡らせる。 区画内にL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部内部
70-7	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 2条の微隆起帯を巡らす。以下縄文施文。 原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部西
70-8	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		伊南西
70-9	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部縁石
70-10	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。	口唇部に幅広い沈線を巡らせ、以下縄文施 文。原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部内部
70-11	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚22mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にはR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部北西
71-12	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。土器面は柔軟で 凹凸が強い。		張り出し部
71-13	口縁 ①部片	②良	深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚13～18mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。微隆起帯上にはR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。 胴部には沈線を垂下し、区画内にR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部縁石
71-14	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	沈線による「U」字状の文様を描き、区画 内に縄文施文。原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。土器 面は柔軟。外部に煤が付着している。		主体部西
71-15	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10～13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。	沈線による「U」字状の文様を描き、区画内 に縄文施文。原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。 内面に煤が付着している。		主体部内部
71-16	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	細沈線による文様が描かれ、縄文施文。原 体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部縁石
71-17	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。	細沈線を垂下し、縄文施文。原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。		主体部内部
71-18	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。	縄文施文。原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。 沈線を垂下。		主体部縁石
71-19	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8～12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。	細沈線を施し、縄文施文。原体はR <u>横</u> ・ <u>縦</u> がし。外側に煤が付着している。		主体部縁石
71-20	胴部 ①部片	②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はL <u>横</u> ・ <u>縦</u> ・ <u>縦</u> がし。 沈線を垂下している。		主体部縁石

3 敷石住居跡〈23号配石遺構〉



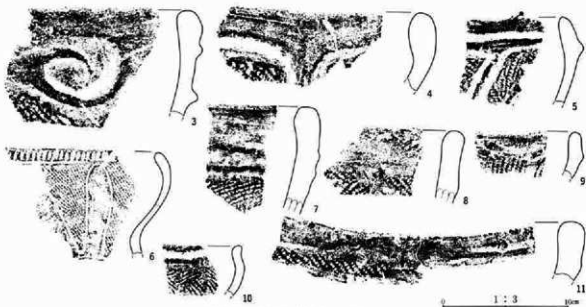
現高 27.7cm
底径 7.5cm
脂肪酸分析実施



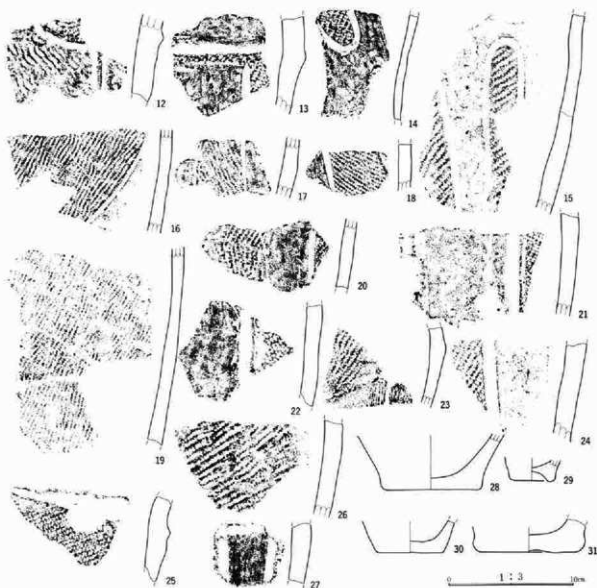
現高 24cm
底径 8.2cm
脂肪酸分析 実施



2の展開図 (1/6)
0 1:4 10cm



第70回 23号配石遺構出土土器 (1)



第71図 23号配石遺構出土土器(2)

23号配石遺構土器観察表

図番	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
71-21 107	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	微隆起帯を垂下し、縄文施文。原体はR ↑ 縦転がし。	主体部内西
71-22 107	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は R ↑縦転がし。	主体部内部
71-23 107	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はふい黄褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR ↑縦転がし。条線が施 されている。	主体部緑石

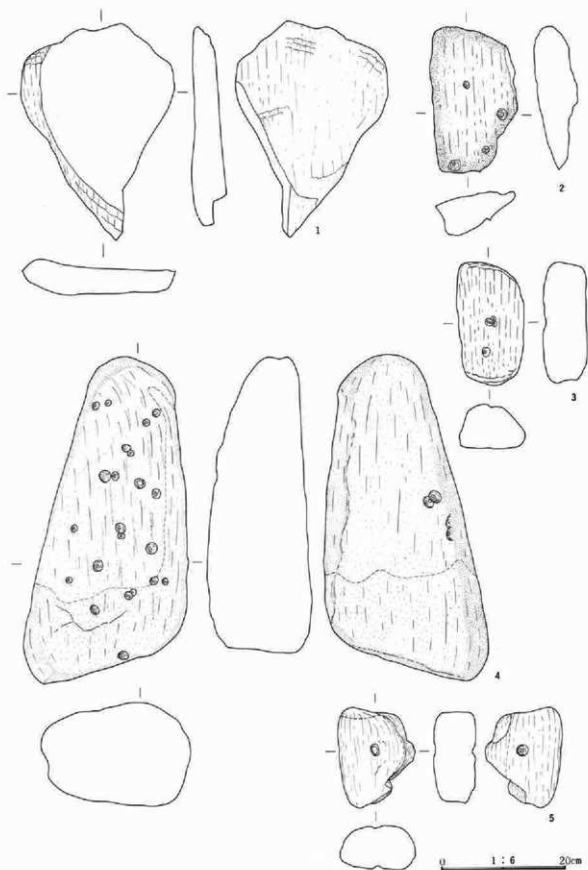
23号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粗粒の砂を混入 ②良	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
71-24 107	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は、ぶい黄褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR(↑)回転がし。 沈線垂下。	主体部西
71-25 107	口縁 一部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は、ぶい赤褐色、内面は褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR(↑)回転 がし。	主体部緑石
71-26 107	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。	縄文施文。原体はR(↑)回転がし。	主体部緑石
71-27 107	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13～16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は、ぶい黄褐色、内面はぶい褐色。	沈線垂下している。	張出し部
71-28 107	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径77mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は、ぶい褐色、内面はぶい赤褐色。		主体部西
71-29 107	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	底径35mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。	縄文施文。原体はL(↑)回転がし。	張出し部北
71-30 107	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径52mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はぶい褐色。		主体部緑石
71-31 107	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は、ぶい褐色、内面はぶい黄褐色。		主体部緑石

23号配石遺構石器観察表

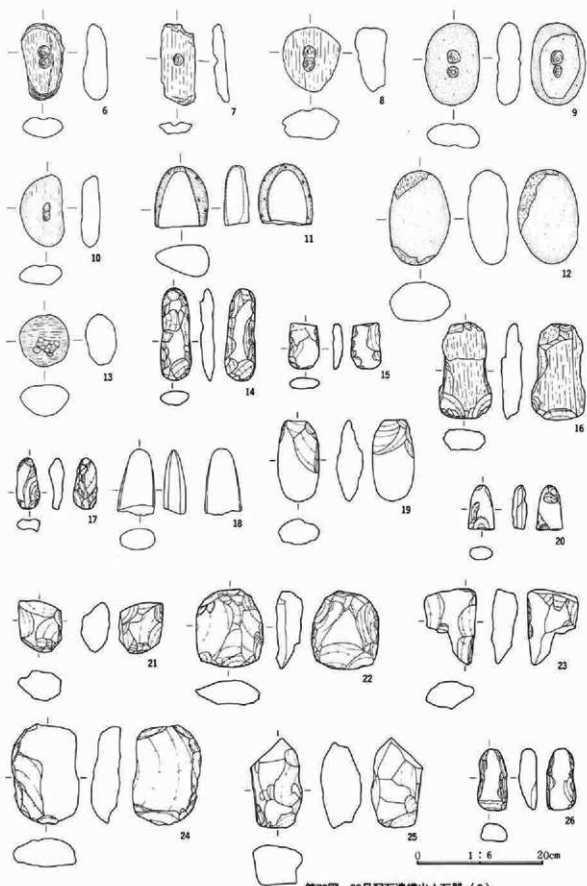
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
72-1 107	石 皿 列		網雲母緑泥片岩	(33.9)	(24.4)	5.8	(4,900)	破片。窪みは浅い。	主体部 緑石
72-2 107	多 孔 石	欠損	点紋緑泥片岩	(23.2)	(13.9)	6.9	(2,700)	片面に4個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、 深10mm。最小は長13mm、短9mm、深5mmで、平均 は長17mm、短14mm、深6mm。全面焼けている。	主体部の 北東
72-3 107	多 孔 石	完形	網雲母石黒片岩	19.5	10.8	7.1	2,500	片面に4個の凹み。最大の凹みは長15mm、短7mm、 深4mm。最小は長8mm、短7mm、深2mmで、平均 は長11mm、短8mm、深3mm。	張出し部 西
72-4 107	多 孔 石	完形	点紋緑泥片岩	51.3	26.4	16.7	34,800	両面に26個の凹み。最大は長22mm、短17mm、深3 mm。最小は長10mm、短8mm、深3mmで、平均は長 15mm、短12mm、深3mm。焼けている。	張出し部
72-5 107	多 孔 石	ほぼ完形	緑泥片岩	15.8	12.4	6.9	1,900	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、 短径16mm、深さ5mm。一部焼けている。	張出し部
73-6 107	凹 石	完形	網雲母石黒片岩	12.3	6.8	3.9	400	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17.5 mm、短径17mm、深さ3mmである。焼けている。	張出し部
73-7 107	多 孔 石	完形	石黒片岩	12.9	5.3	1.8	200	片面に1個の凹みがある。凹みは長径20mm、短径 16mm、深さ7mmである。全面焼けている。凹石の 凹みとは異なっている。	主体部
73-8 107	凹 石	完形	緑泥片岩	10.4	9.0	4.9	650	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径21mm、 短径19mm、深さ3mmである。	主体部の 南
73-9 107	凹 石	完形	流紋岩	12.9	8.9	3.9	600	両面に4個の凹み。最大の凹みは長23mm、短20mm、 深4mm。最小は長20mm、短15mm、深2mmで、平均 は長21mm、短18mm、深3mm。片面に煤が付着。	埋没の北 東
73-10 107	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	11.4	7.0	3.1	390	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、 短径11mm、深さ2mmである。	主体部の 東
73-11 107	磨 石 列		流紋岩	(9.6)	8.5	5.1	(500)	器面に磨痕がみられる。一部焼けている。	張出し部
73-12 107	敲 石	一部欠損	流紋岩	14.8	9.7	6.3	(1,150)	器面に敲打痕がみられる。	主体部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第72図 23号配石遺構出土石器(1)

3 敷石住居跡〈23号配石遺構〉



第73図 23号配石遺構出土石器(2)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

23号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
73-13 107	敲 石	完形	点紋緑泥片岩	8.1	7.9	4.9	500	器面に敲打痕がみられる。	埋蔵付近
73-14 107	打製石片	完形	輝緑岩	14.5	5.1	2.5	250	バチ (II a)。一側がわずかに内湾。かなり細身。	炉付近
73-15 107	打製石片	基部欠損	熱変成岩	(7.2)	4.9	1.8	(80)	バチ (II b)。片面に素材となった剥片の断面残す。	張出し部
73-16 107	打製石片	完形	点紋石黒燐雲母 片岩	15.2	8.4	3.3	540	バチ (II a)。	主体部
73-17 107	打製石片	完形	輝岩	8.1	3.6	2.5	90	バチ (II b)。かなり小型。	主体部東
73-18 107	磨製石片	刃部欠損	角閃岩	(10.3)	6.3	3.5	(300)	磨き段階。	緑石
73-19 107	磨製石片	基部欠損	緑泥片岩	(12.8)	6.6	4.1	(480)	磨き段階。	炉近接
73-20 107	磨製石片	刃部欠損	角閃岩	(7.0)	4.2	2.2	(111)	磨き途中。両面に粗割り痕残す。	主体部東
73-21 107			角閃岩	8.1	7.1	4.6	380	粗割り段階。	主体部南
73-22 107		完形	輝緑岩	12.4	10.7	4.4	810	粗割り段階。	張出し部
73-23 107			輝緑岩	12.1	8.1	4.2	510	粗割り段階。	緑石
73-24 107		完形	輝緑岩	15.6	11.1	4.7	1,210	粗割り途中。ほとんど素材 (分割際) の状態。	緑石
73-25 107		完形	輝緑岩	14.1	8.2	6.3	1,130	粗割り途中。	主体部南
73-26 107		完形	輝緑岩	9.7	4.6	2.9	220	粗割り段階。一部に自然面残す。	張出し部 北

24号配石遺構 (第74~89図、PL. 32~36、108~110)

位置 Fo・Fp-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東43m (炉までの距離)、列石からは23m50cmの所、23号配石遺構の北6m (炉から炉までの距離)に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。6月から環状列石周辺の調査を開始し、多数の配石遺構を確認した。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土したため、図面作成と遺物取り上げには23号配石遺構と同様に時間がかかった。調査開始時から配石遺構として調査を進めていったが、敷石住居跡と判断されたのは調査もなかばをすぎた9月下旬に入ってからである。23号配石遺構と同様に、これが敷石住居跡となるとは調査初期の段階では想像もつかなかった。その後、他の配石遺構の調査を行い、10月中旬になって遺物の取り上げ作業を再開した。多量の石と土器片が出土したために、1/10図面もまた多量に作成しなければならなかった。12月に先端部の埋裏を検出し、写真撮影、図面の作成を行い、調査最終日に取り上げを行った。また敷石の総ての石も取り上げて調査を終了した。1軒の敷石住居跡の調査であったが、23号配石遺構と同様に多くの労力と時間をかけて実施した。

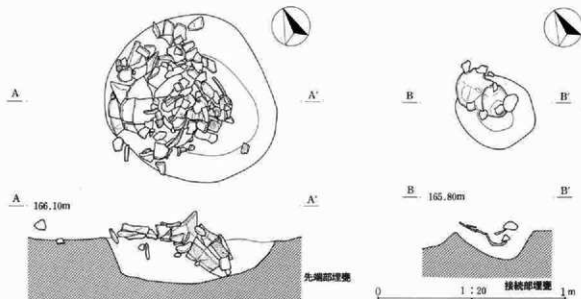
重複 なし。23号配石遺構に近接している。

覆土 主体部は掘り込みが確認された。覆土は暗褐色土層であり、やわらかくて締まり良く、粘性が非常にあった。

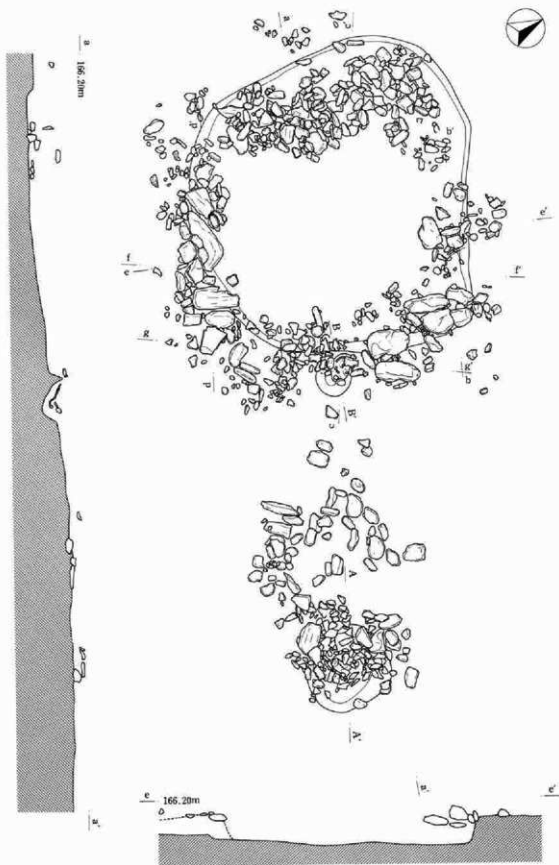
形状 柄杓形敷石住居跡で全長7m20cmを測る。主体部の規模は長径3m80cm、短径3m20cmの方形を呈し、面積約9.5㎡。張り出し部の規模は長径3m40cm、短径1m20cmで、面積約3.6㎡である。総面積は約13.1㎡になる。

敷石状況 主体部の縁石と張り出し部の一部に敷石が施されているが、主体部内部には敷石は認められなかった。縁石は堅穴内に巡るのではなく、掘り込みの外側に巡らされたものであり、類例のない敷石状況である。北壁と西壁上に巡っていた縁石は、堅穴内部に崩れ混んだ状態で検出され、多量の石が使用されていた。東壁と南壁の縁石は大きな石が選定されているが、西壁の縁石はやや小さな石が主体的に選定されている。

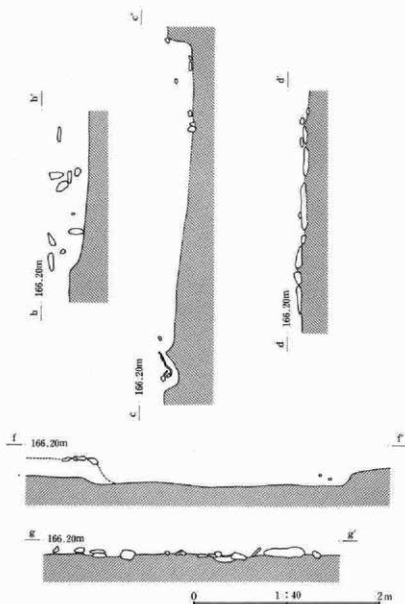
使用石材 敷石住居跡を構成している敷石は959点出土している。この石材別点数は、網雲母石墨片岩299点 (31.2%)、輝緑岩110点 (11.5%)、点紋網雲母石墨片岩107点 (11.2%)、点紋緑泥片岩66点 (6.9%)、珪石



第74図 24号配石遺構 先端部埋裏 (左)・接続部埋裏 (右)



第75図 24号配石遺構



48点（5%）、緑泥片岩32点（3.3%）、石墨絹雲母片岩27点（2.8%）、輝岩20点（2.1%）、その他の石材186点（19.4%）であり、不明は64点（6.7%）を数えた。また覆土中の石は392点出土している。その石材別点数は絹雲母石墨片岩145点（37%）、輝緑岩44点（11.2%）、点紋緑泥片岩28点（7.1%）、珪石25点（6.4%）、点紋絹雲母石墨片岩17点（4.3%）、輝岩15点（3.8%）、絹雲母緑泥石墨片岩・点紋石墨緑泥片岩各14点（各3.6%）、その他の石材70点（17.9%）であり、不明は20点（5.1%）を数えた。

石材重量 重量の判明している石は888点である。その内訳は、500g未満の石550点（61.9%）、500g～1kg未満の石157点（17.7%）、1kg～2.5kg未満の石120点（13.5%）、2.5kg～5kg未満の石43点（4.8%）、5kg～7.5kg未満の石9点（1%）、10kg～20kg未満の石7点（0.8%）、7.5kg～10kg未満の石1点（0.1%）、20kg～30kg未満の石1点（0.1%）である。

壁高 10cm～28cmを測る。北壁が比較的残存状況は良かった。

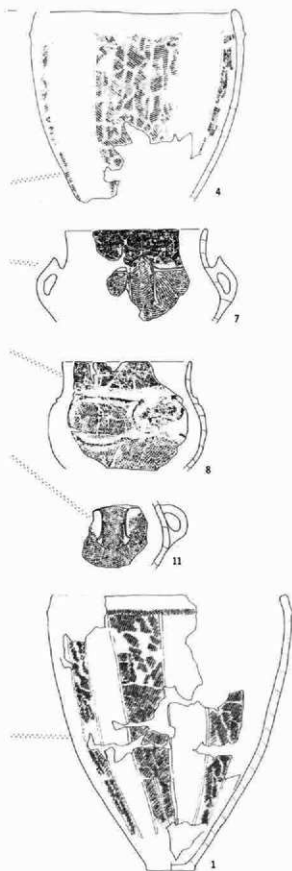


0 1 : 40 2m

(土器は 1 : 8)

第76図 24号配石遺構土器出土状況

3 敷石住居跡 (24号配石遺構)



柱穴 検出できなかった。

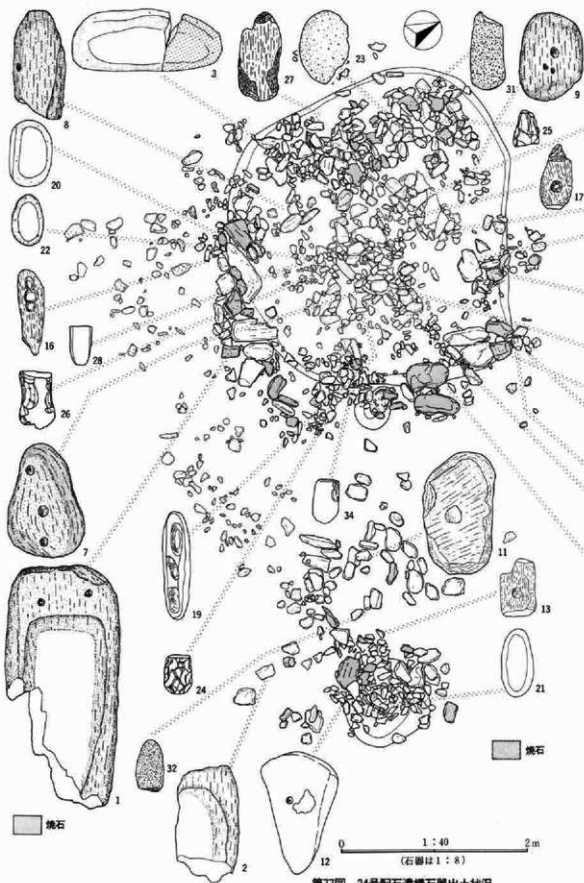
炉 検出できなかった。主体部内部に炉と断定できる遺構は存在しなかった。

埋壘 主体部と張り出し部の接続部に1点(第80図2)、張り出し部の先端部に1点(第80図1)の計2点が出土している。接続部の埋壘は口縁部の一部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。埋設ピットは長径48cm・短径38cm・深さ15cmを測る。埋壘には蓋石が伴っていた。この蓋石は長径13cm・短径8cm・厚さ3cm・重量350gの網雲母石墨片岩を使用していた。先端部の埋壘は口縁部の一部を欠損した大型の加曾利E4式土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた。土壌の規模は長径93cm・短径85cm・深さ30cmである。覆土は暗褐色土層であった。やや固く締まり粘性が非常にある。黄褐色土層を含み、炭化物粒子を極少量含んでいる。先端部埋壘については残存脂肪分析を実施している(4章 自然科学的分析 [1] 参照)。

張り出し部 3m40cmの張り出し部で明瞭な敷石が認められるのは、先端部埋壘の西1m40cmの範囲である。地山が砂礫層であったために、人為的な配石なのか自然の石の状態であるのか把握は困難を極めた。23号配石遺構の張り出し部で見られたような大石を使用した敷石ではなかった。

遺物出土状況 埋壘2個体の他に、大形土器片9点が主体部から出土している。また口縁部63点、胴部416点、底部77点の計486点の土器片が主体部を中心に出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も若干含まれていた。

石器では石皿3点、多孔石8点、凹石7点、磨石5点、打製石斧4点、磨製石斧は未製品を含め7点が出土している。石皿2点は緑石として利用され、1点は先端部埋壘の南西から出土している。多孔石では3点が緑石として使用され、3点は主体部からの出土、1点は張り出し部、1点は先端部埋壘に近接してそれぞれ出土している。凹石は3点が礫石中から、3点は主体部から、1点が先端

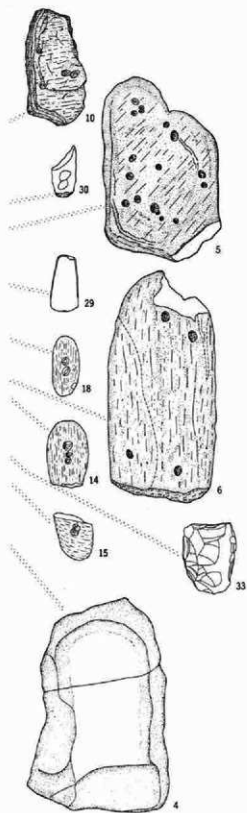


第77図 24号配石遺構石器出土状況

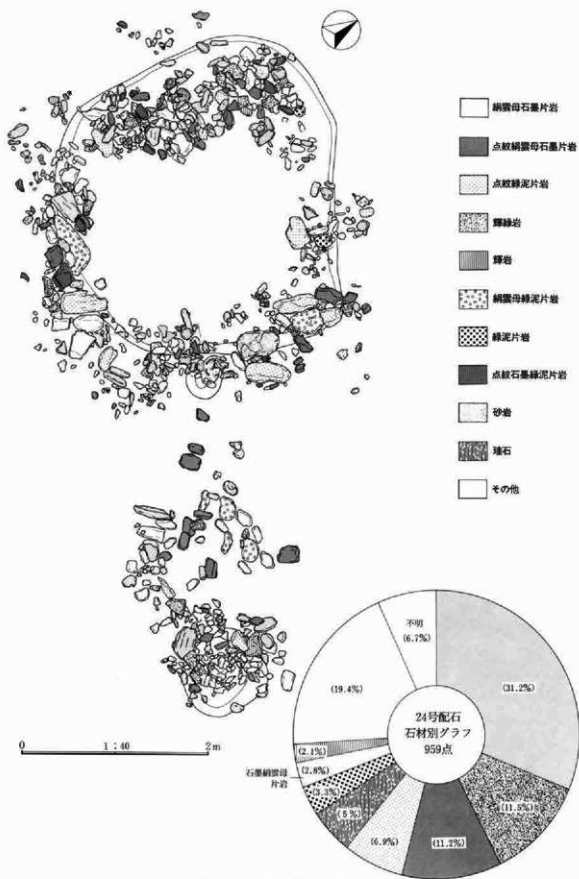
3 敷石住居跡〈24号配石遺構〉

部埋裏に近接してそれぞれ出土している。磨石は2点が緑石中から、2点は主体部から、1点が先端部埋裏周辺から出土している。敷石中の石器含有率は3.5%であった。また焼石は97点の出土で、5.3%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。加曾利E3式期の敷石住居跡とは異なり、環状列石に近接して構築されている。主軸方向はN-67°-W。

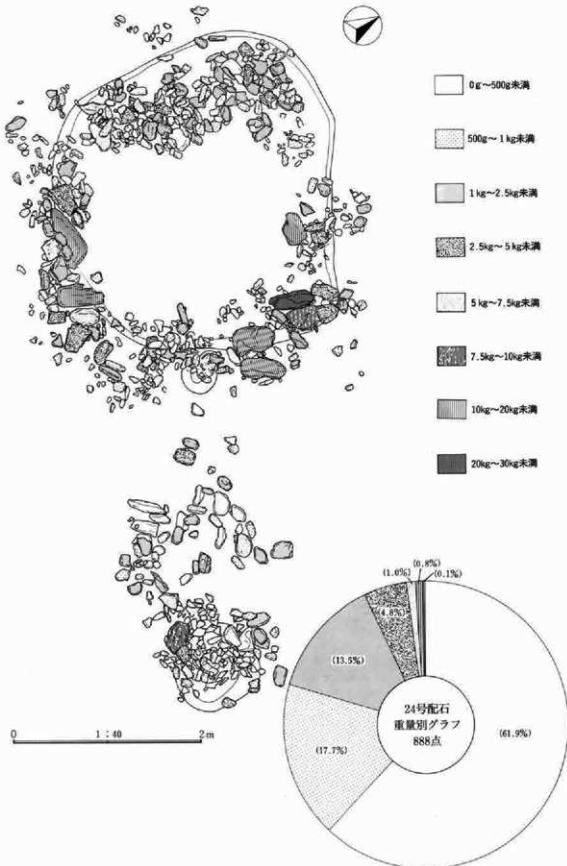


3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第78図 24号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡 <24号配石遺構>

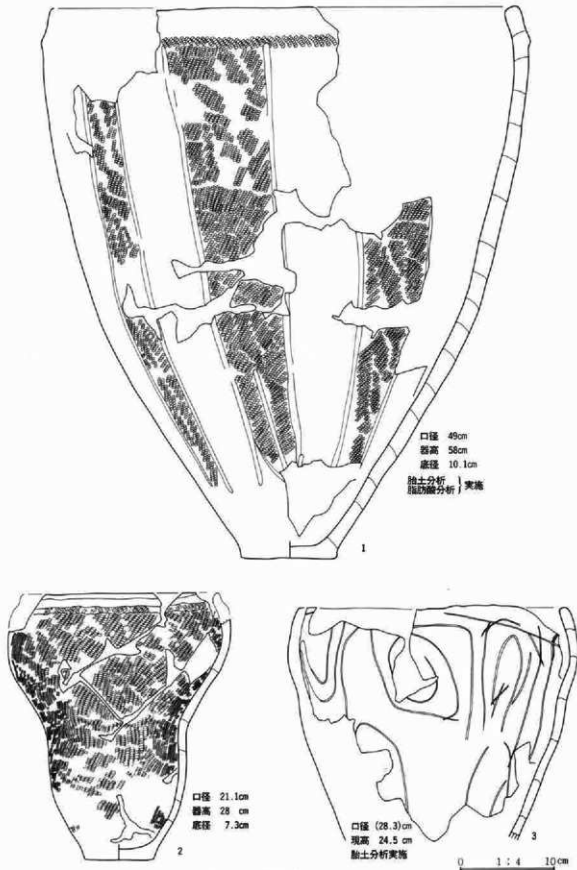


第79図 24号配石遺構重量別分布

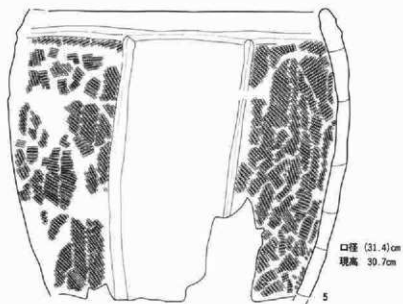
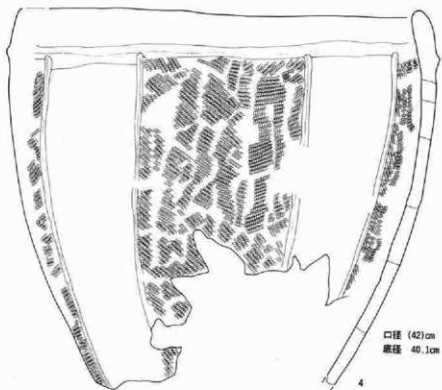
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
80-1 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部を一部欠損している。 器厚12~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する沈降帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体は微隆起帯上にR(上)横紋、以下R(上)縦紋。押圧が強い。	先端部埋没 (斜位状態)	
80-2 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部を一部欠損している。 器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はよい黄褐色。	口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇部に幅の狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。微隆起帯上にR(上)横紋、以下R(上)縦紋がし。	接続部埋没 (斜位状態)	
80-3 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚8~10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。以下微隆起帯による文様が描かれている。 外面に縁が付着している。	主体部内部	
81-4 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL(背横・縦紋)がし。	主体部内部	
81-5 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。原体はL(背横・縦紋)。外面に縁。	主体部内部	
81-6 108	口縁 部一 部欠 損	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。微隆起帯上にR(上)横紋がし。以下R(上)横・縦紋がし。隅り合う部の相が異なる。縄文施文は乱舞。	主体部内部	
83-7 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおいて、1条の微隆起帯を巡らせる。以下微隆起帯。原体はR(上)横・斜め転がし。肩部に横状把手をもつ。	主体部内部	
83-8 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は黒褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおいて、横状把手両端を連絡するような微隆起帯を巡らせる。区画の内外にR(上)縦紋がし。肩部に横状把手をもつが割落している。	主体部内部	
83-9 108	口縁 部一 部欠 損	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は褐色。	口縁は内湾し、胴部中で括れる器形。横状把手をもつが割落している。口唇部に狭い無文帯をおいて、縄文施文。原体はL(背横・縦紋)がし。	主体部内部	
83-10 108	口縁 部一 部欠 損	①中粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。肩部に横状把手をもつが割落している。胴部に縄文施文。原体はL(背横)がし。	主体部内部	
83-11 108	横状 把手	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の横状把手部分。 器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。肩部に横状把手をもつ。胴部に縄文施文。原体はR(上)。	主体部内部	
83-12 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体はL(背横)がし。隅り合う部の傾きが異なる。	主体部縁石	
83-13 108	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はよい赤褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体はR(上)縦紋がし。	主体部縁石	
84-14 106	口縁 部一 部欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚8~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。以下縄文施文。原体はR(上)縦紋がし。	主体部内部	
84-15 108	口縁 部一 部欠 損	①中粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器(両耳壺)の口縁~胴部片。 器厚9~13mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らせる。肩部に横状把手をもつが割落している。	突出し部	

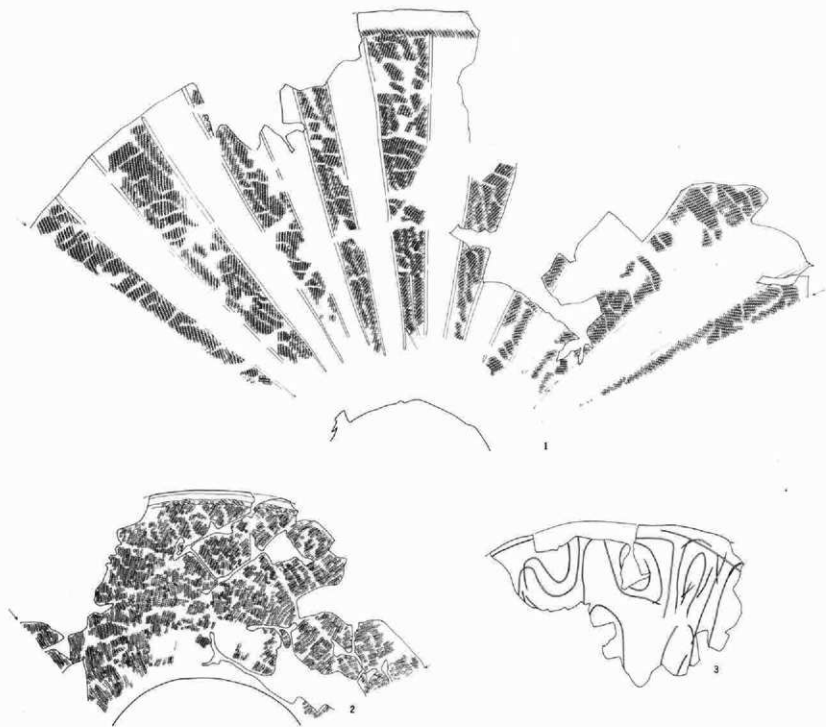


第80図 24号配石遺構出土土器(1)

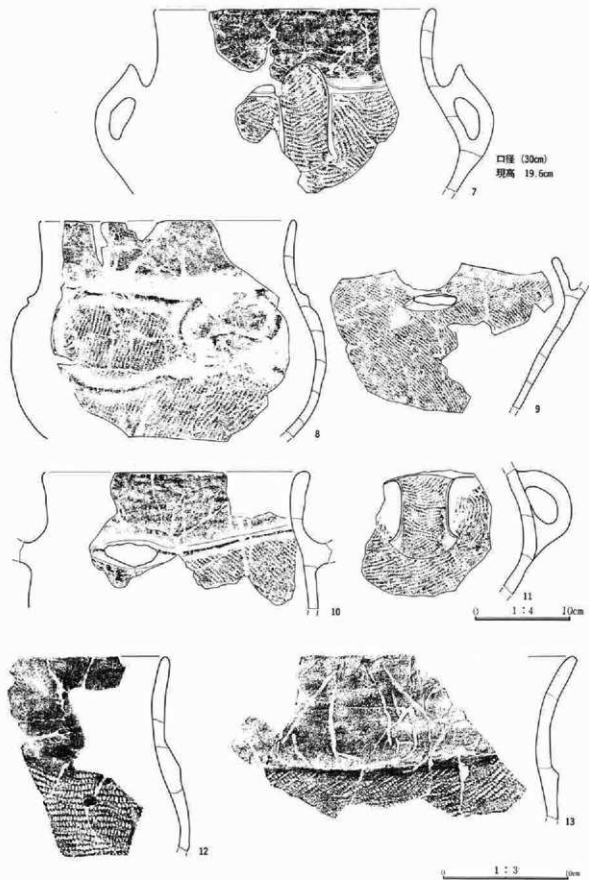


0 1 : 4 10cm

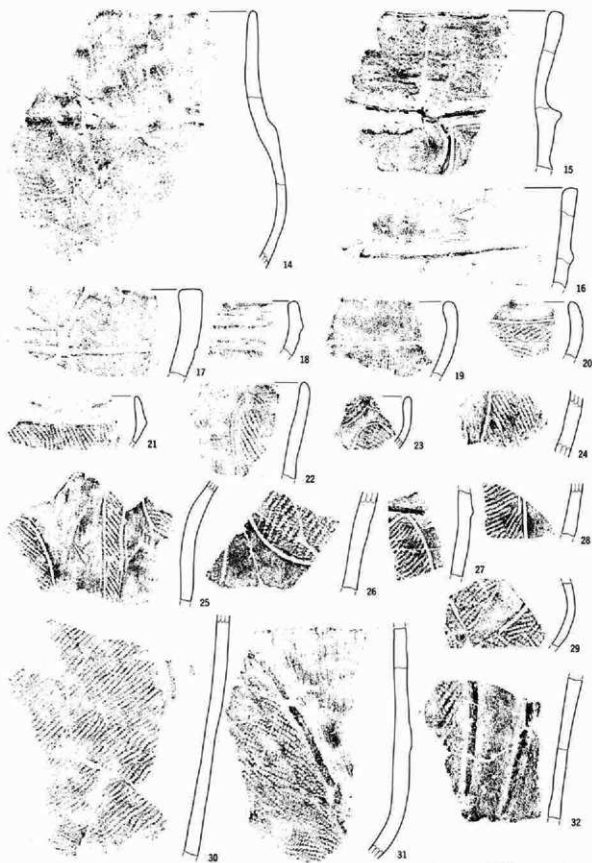
第81図 24号配石遺構出土土器 (2)



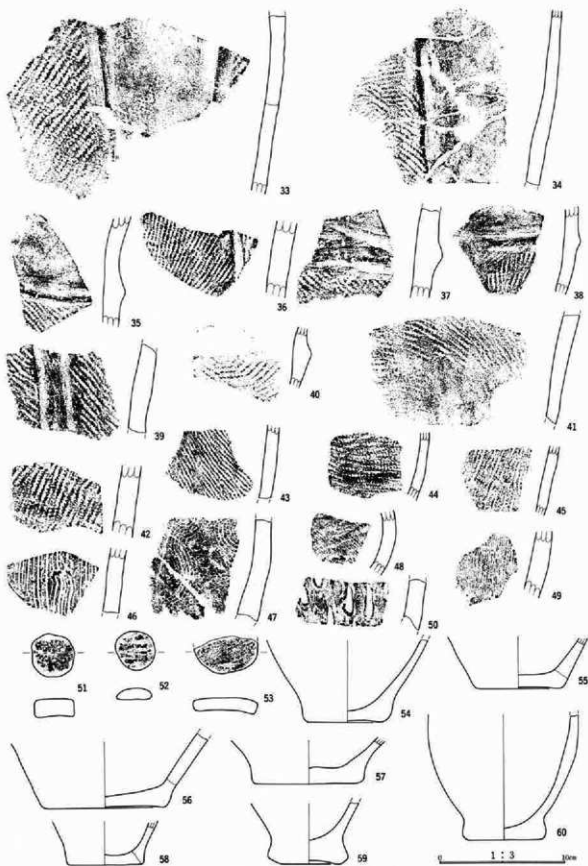
第82図 24号配石遺構出土土器展開図 (1/6)



第83図 24号配石遺構出土土器(3)



第84図 24号配石遺構出土土器 (4)



第65図 24号配石遺構出土土器（5）

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

図番 PL	部 位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
84-16 108	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。胴部には細沈線による文様が描 かれ、区画内にRⅠ縦転がし。	主体部縁石
84-17 108	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚15~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の沈線を送ら せる。以下糸線による文様が描かれる。	張出し部
84-18 108	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい橙色、内面はよい赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。以下糸線が施されている。	張出し部
84-19 108	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい黄褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の沈線を送らせる。以下糸線が施され ている。	主体部内部
84-20 108	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の細沈線を送らせる。縄文施文。 原体はRⅠ上。	主体部縁石
84-21 108	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚は4~7mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は黒色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を送らせる。以下縄 文施文。原体はLⅠ横転がし。	主体部内部
84-22 108	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい橙色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はLⅠ横転がし。	主体部縁石
84-23 108	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	口唇部に剣突と細沈線を送らせ、以下「 <u>門</u> 」 状の細沈線による文様を描き、区画内に縄 文施文。原体はLⅠ横転がし。	主体部内部
84-24 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はよい橙色、内面は褐色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はLⅠ横転がし、土器面は柔軟。	主体部内部
84-25 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は褐色。	胴部で括れる器形。細沈線による文様が描 かれ、区画内に縄文施文。原体はLⅠ上。 外面に塚が付着している。	主体部縁石
84-26 108	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は褐色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はRⅠ横転がし。	主体部縁石
84-27 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はよい褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。胴部に細沈線による文様が描か れ、区画内に縄文施文。原体はRⅠ縦 転がし。	主体部内部
84-28 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はRⅠ(0段多糸)縦転がし。 外面に塚が付着している。	主体部内部
84-29 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は暗褐色。	胴部で括れる器形。細沈線による「V」字 状等の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はRⅠ上・横転がし。内面に保存釘。	主体部縁石
84-30 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい褐色。	微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はRⅠ上。	主体部内部
84-31 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はLⅠ上。	主体部縁石
84-32 108	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は明赤褐色。	微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はRⅠ横転がし。	主体部内部
85-33 108	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はRⅠ横転がし。	主体部縁石
85-34 108	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良好	深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はよい褐色。	微隆起帯を垂下させ、区画内に縄文施文。 原体はLⅠ上。	主体部内部

3 敷石住居跡 <24号配石遺構>

24号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位 (①軸土 ②焼成遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
85-35 108	口縁 ①細粒の砂を混入 ②良 一部 部片	深鉢形土器(内耳型)の口縁~胴部片。 器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面はにじい赤褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR L 上縦 帯がし。	主体部内部
85-36 108	胴部 片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面はにじい黄褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR L 上縦帯がし。 土器面は美致。	主体部内部
85-37 108	口縁 ~胴 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は黒褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR L 上縦 帯がし。	主体部内 部
85-38 108	口縁 ~胴 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにじい赤褐色、内面はにじい 褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR L 上 縦帯がし。	主体部内部
85-39 108	①中粒の砂を混入 ②良 片	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。	沈線を下下し、縄文施文。原体はL L 上縦 帯がし。	張出し部
85-40 108	口縁 ~胴 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにじい赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR L 上 縦帯がし。	主体部内部
85-41 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面はにじい赤褐色。	縄文施文。原体はL L 上縦帯がし。 内面に炭化物が付着している。	先端部埋塞
85-42 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面は暗褐色。	縄文施文。原体はR L 上縦帯がし。	主体部縁石
85-43 108	①中粒の砂を混入 ②良 片	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにじい褐色。	縄文施文。原体はL L 上縦帯がし。	主体部内部
85-44 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は黒褐色。	縄文施文。原体はL L 上 縦帯がし。	主体部内部
85-45 108	①中粒の砂を混入 ②良 片	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面はにじい黄褐色。	縄文施文。原体はR L 上縦帯がし。	主体部南西 部
85-46 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにじい褐色。	条線が施されている。	主体部北西 部
85-47 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにじい褐色。	条線による文様が施されている。	張出し部
85-48 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はにじい赤褐色。	条線が施されている。	張出し部
85-49 108	①中粒の砂を混入 ②良 片	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	条線が施されている。	主体部縁石
85-50 108	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにじい褐色、内面はにじい赤褐色。	押し引き状の沈線が施されている。	主体部内部
85-51 108	土製 円盤 ①細粒の砂を混入 ②やや良	胴部片を利用。厚さ13mm。 外面の色調は褐色、内面はにじい褐色。	重量20g。	主体部縁石
85-52 108	土製 円盤 ①細粒の砂を混入 ②やや良	胴部片を利用。厚さ9mm。 外面の色調は褐色、内面はにじい褐色。	重量7g。	主体部内部
85-53 108	土製 円盤 ①細粒の砂を混入 ②やや良	土製円盤の破片。胴部片を利用。厚さ10mm。 外面の色調はにじい赤褐色、内面は黒褐色。	重量(15)g	主体部縁石
85-54 109	底部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにじい褐色。	縄文施文。原体はL L 上縦帯がし。 底部周縁が磨耗している。	主体部内部

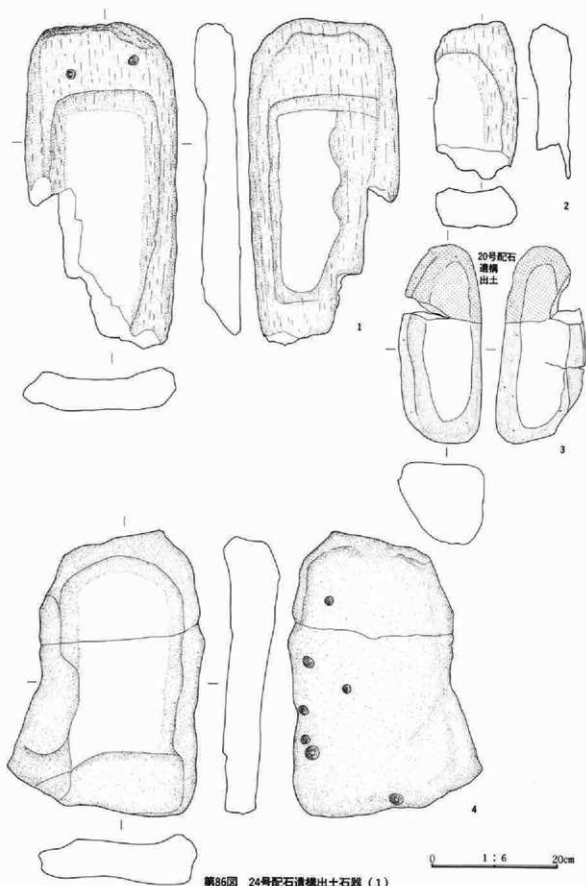
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

24号配石遺構土器観察表

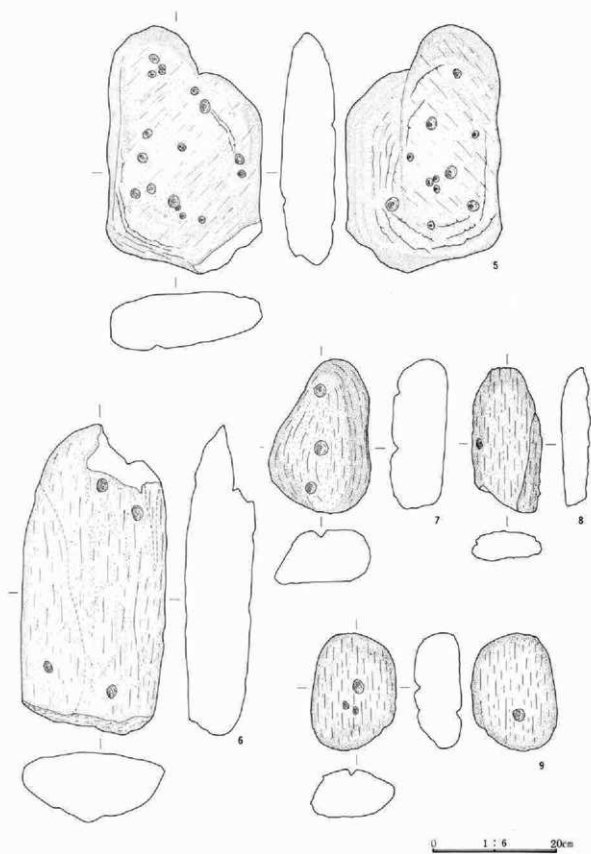
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
85-55 109	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は黒褐色。	底部周縁が磨耗している。	主体部縁石
85-56 109	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径98mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい黄褐色。	底部周縁が磨耗している。	主体部内部
85-57 109	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径87mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。		主体部内部
85-58 109	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径59mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。	底部周縁が磨耗している。	主体部内部
85-59 109	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	底径60mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	細沈線による「V」字状の文様を描き、縄 文施文。原体はL(背腹転がし)。	主体部内部
85-60 109	胴部 ～底 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部～底部片。底径65mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は暗褐色。	細沈線による「V」字状の文様を描き、縄 文施文。原体はL(背腹転がし)。	主体部内部

24号配石遺構土器観察表

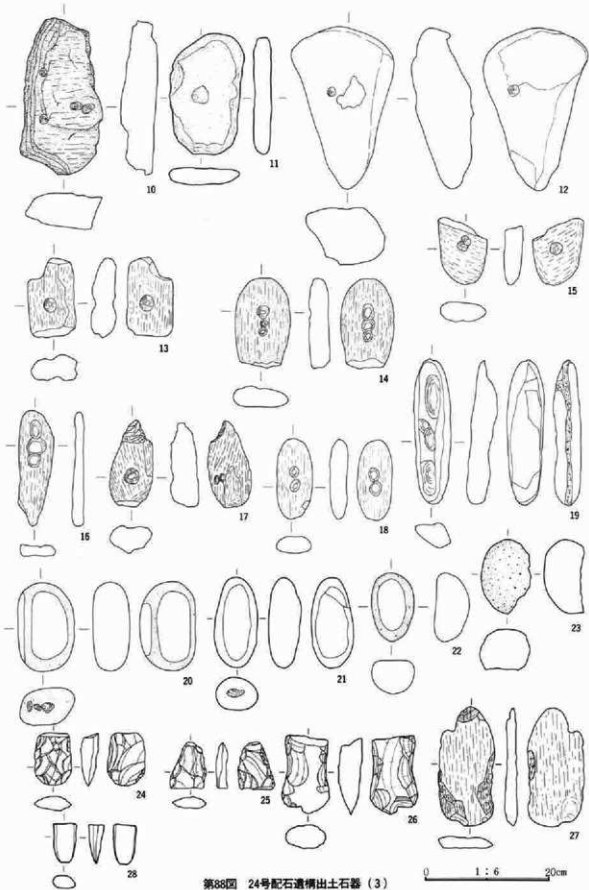
図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
86-1 109	石	Ⅲ 一部欠損	点紋緑泥片岩	(51.3)	24.1	6.6	(13,350)	長方形で窪みは浅い。両面に磨面を有するが、使用痕跡はほとんどない。片面に3個の凹み。平均は長15mm、短15mm、深4mmである。	内壁の縁石
86-2 109	石	Ⅲ 部分	点紋緑泥片岩	(24.9)	(13.6)	6.7	(3,460)	石面の破片。裏面に凹みを有する。凹みは3個。	先端部埋 埋の南西
86-3 109	磨石	ほぼ完形	安山岩	31.7	13.2	13.1	8,950	両面に磨耗痕がみられる。20号配石の磨石と推定。	主体部の 覆土
86-4 109	石	Ⅲ ほぼ完形	砂岩	45.0	31.1	8.9	12,300	長方形で窪みは浅い。裏面に7個の凹み。最大の凹みは長22mm、短22mm、深2mm、最小は長13mm、短13mm、深2mm、平均長17mm、短15mm、深3mm。	東壁の縁石
87-5 109	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	38.9	24.9	9.0	13,800	両面に28個の凹み。最大の凹みは長22mm、短22mm、深6mm、最小は長11mm、短6mm、深3mmで、平均は長15mm、短12mm、深3mm。	北壁の縁石
87-6 110	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	49.1	23.0	11.2	(20,100)	片面に4個の凹み。最大は長23mm、短17mm、深8mm、最小は長19mm、短12mm、深3mmで、平均は長21mm、短16mm、深5mm、一部焼熱。	東壁の縁石
87-7 109	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	24.5	16.2	8.9	5,100	片面に3個の凹み。最大の凹みは長25mm、短22mm、深12mm、最小は長20mm、短18mm、深10mmで、平均は長22mm、短20mm、深11mm。	主体部の 覆土
87-8 110	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(23.0)	11.1	4.9	(1,600)	片面に1個の凹みがある。長径、短径ともに17mm、深さ5mmである。一部焼けている。	主体部の 覆土
87-9 110	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	18.5	13.7	7.5	2,900	両面に4個の凹み。最大の凹みは長22mm、短17mm、深11mm、最小は長13mm、短9mm、深6mmで、平均は長17mm、短14mm、深8mm。	北壁の縁石
88-10 110	多孔石	完形	点紋網罟母石墨片岩	24.8	13.1	5.5	2,450	片面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短15mm、深4mm、最小は長14mm、短13mm、深2mmで、平均は長19mm、短13mm、深3mm。	主体部の 覆土
88-11 110	多孔石	完形	点紋網罟母石墨片岩	19.2	12.0	2.8	1,120	片面に1個の凹みがある。長径28mm、短径27mm、深2mmである。凹石の凹みとは異なる。	張り出し部
88-12 110	多孔石	ほぼ完形	輝緑岩	25.4	16.5	9.9	4,500	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短15mm、深さ9mmである。凹石の凹みとは異なる。	先端部埋 埋付近
88-13 110	凹石	完形	網罟母石墨片岩	12.5	7.6	4.2	600	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径24mm、短径22mm、深さ7mmである。	先端部埋 埋の周辺
88-14 110	凹石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(14.2)	9.0	3.3	(700)	両面に6個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、深2mm、最小は長13mm、短11mm、深1mmで、平均は長19mm、短13mm、深2mm。	東壁の縁石中
88-15 110	凹石	片	網罟母石墨片岩	(10.6)	8.0	3.2	(380)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、深2mm、最小は長17mm、短12mm、深1mmで、平均は長18mm、短14mm、深3mm。	主体部の 覆土



第86図 24号配石遺構出土石器(1)

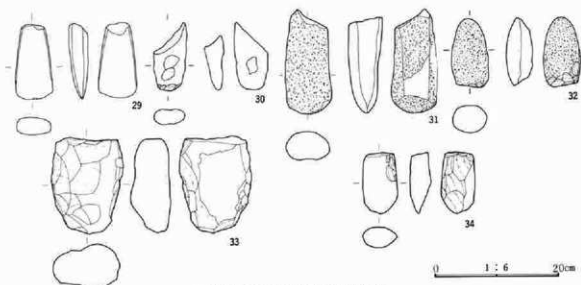


第67図 24号配石遺構出土石器(2)



第88図 24号配石遺構出土石器 (3)

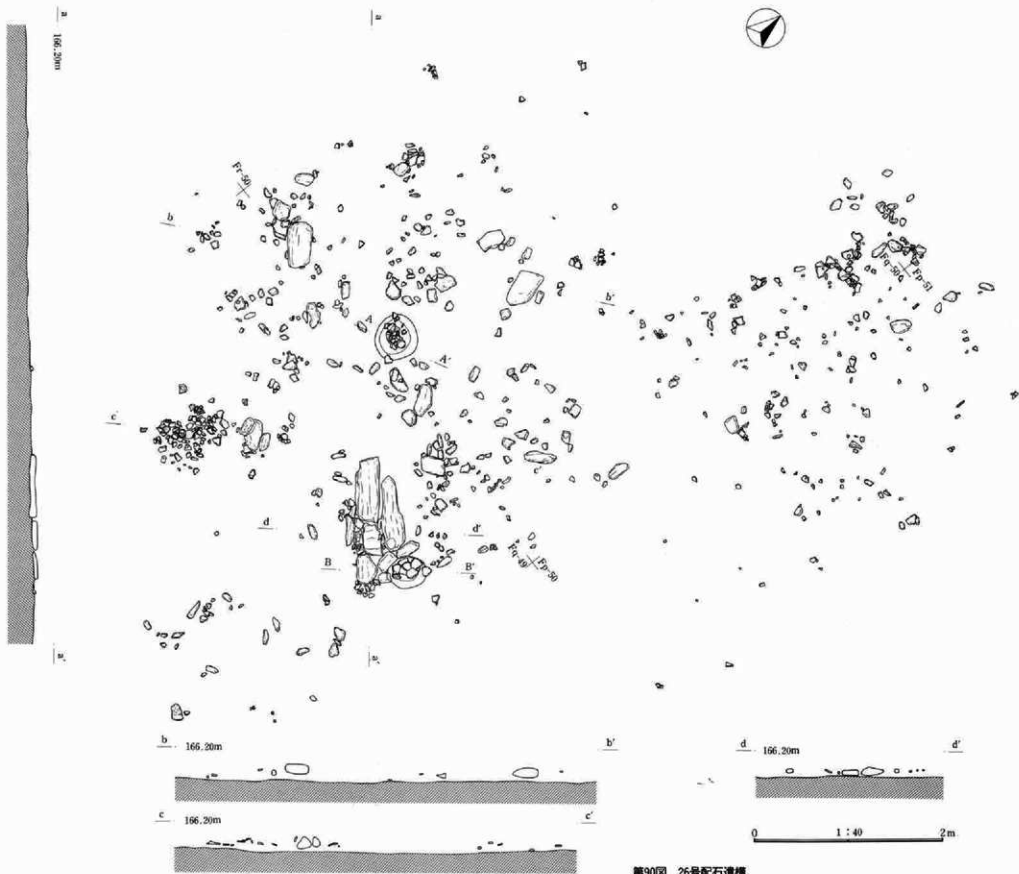
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



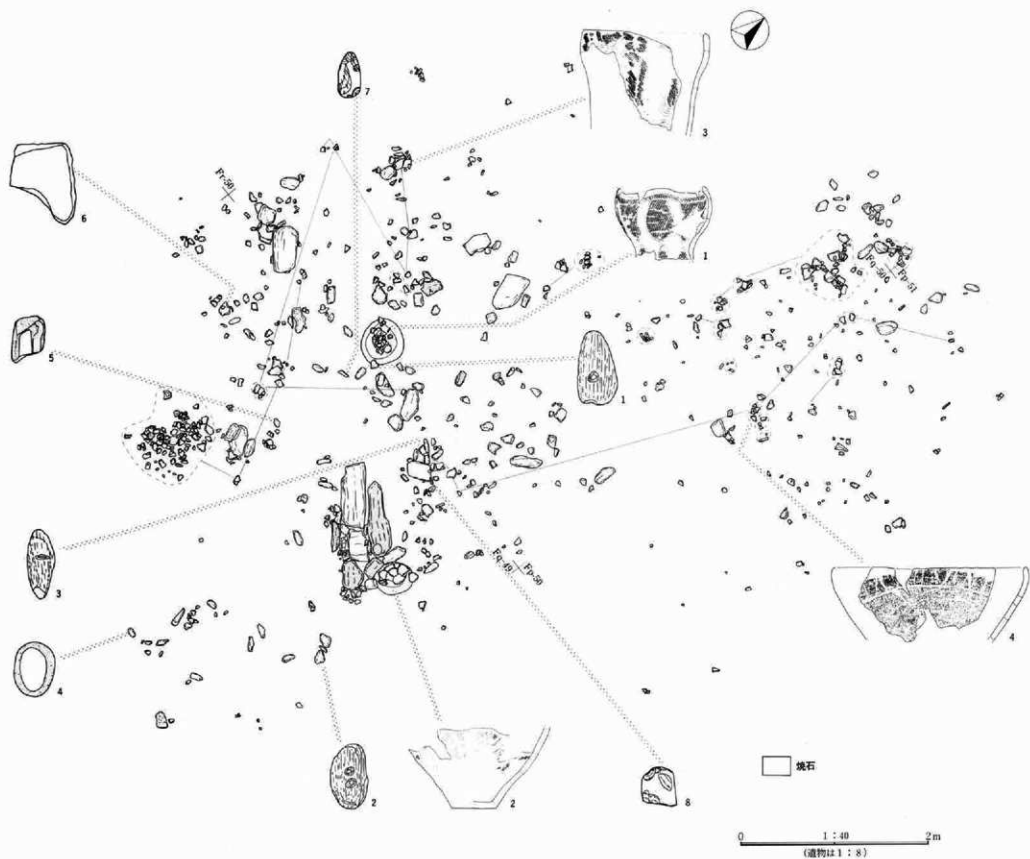
第99図 24号配石遺構出土石器(4)

24号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
88-16 110	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	18.5	5.5	2.0	350	片面に3個の凹み。最大の凹みは長30mm、短27mm、深4mm。最小は長21mm、短20mm、深2mmで、平均は長27mm、短22mm、深3mm。	両側の緑石中
88-17 110	凹 石	一部欠損	胡雷母石墨片岩	13.7	6.9	4.4	(700)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長26mm、短23mm、深4mm。最小は長12mm、短11mm、深1mmで、平均は長18mm、短14mm、深2mm。	主体部の覆土
88-18 110	凹 石	完形	胡雷母片岩	12.6	5.6	2.6	400	両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、深0.5mm。最小は長18mm、短15mm、深1mmで、平均は長21mm、短16mm、深0.6mm。	主体部の覆土
88-19 110	凹 石	完形	輝岩	23.3	5.8	4.9	800	片面に4個の凹み。また両面には磨耗がみられ、側面には敲打痕がみられる。凹石、磨石、敲石として機能。	主体部の覆土
88-20 110	磨 石	完形	炭紋岩	14.2	9.0	6.0	1,050	器面に磨耗痕と敲打痕。一部壊れている。	緑石中
88-21 110	敲 石	完形	炭紋岩	14.3	6.9	5.8	820	一端に敲打痕。	先端部埋壊
88-22 110	磨 石	完形	安山岩	11.1	6.7	5.6	520	器面に磨耗痕がみられる。	主体部覆土
88-23 110	磨 石	瓦	炭紋岩	11.8	(8.1)	6.5	(810)	器面に磨耗痕がみられる。	緑石中
88-24 110	打製石斧	基部欠損	熱変成岩	(7.7)	5.9	2.5	(170)	バチ (II b)。	張り出し部
88-25 110	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(7.6)	5.7	1.8	(110)	バチ (II b)。	緑石中
88-26 110	打製石斧	基部欠損	輝緑岩	(12.4)	7.7	3.8	(520)	分割 (I)。	主体部覆土
88-27 110	打製石斧	完形	点紋絹雲母石墨片岩	18.7	9.0	2.0	480	分割 (I?)。両側のえぐりほとんど施されず未成品の可能性。	緑石中
88-28 110	磨製石斧	基部欠損	角閃岩	(6.2)	3.6	2.4	(100)	磨き段階。	主体部覆土
89-29 110	磨製石斧	基部欠損	輝緑岩	(11.8)	6.1	3.0	(400)	磨き段階。ほぼ全面磨かれている。	緑石中
89-30 110	磨製石斧	基部欠損	輝岩	(10.6)	5.3	3.5	(200)	磨き途中。両面に粗削り痕残す。	主体部覆土
89-31 110	磨製石斧	基部欠損	輝緑岩	(16.4)	7.4	5.3	(1,100)	敲打段階。	緑石中
89-32 110	磨製石斧	刃部欠損	輝緑岩	(10.9)	6.0	4.3	(420)	磨き段階 (?)。風化激しく磨きの区別困難。	張り出し部



第90図 26号記石遺構



第91図 26号配石遺構遺物出土状況

24号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)			特 徴	出土状況
				全長	幅	厚 重量		
89-33 110		一期欠損	輝緑岩	(15.3)	11.7	6.8 (2,000)	粗削り途中。	縁石中
89-34 110	磨製石斧	基部欠損	輝緑岩	(9.6)	5.6	3.5 (320)	磨き途中。片面かなりの部分に粗削り痕が残す。	接縁部埋 壘近く

26号配石遺構 (第90～98図、PL. 37・38、110・111)

位置 Fq-49・50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西47m (炉までの距離)、列石からは27m50cmの所、23号配石遺構の西南西9m (炉から炉までの距離) に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。環状列石の周辺に調査が及んだ6月に、多数の配石遺構を検出した。21号～27号・41号の各配石遺構がこれに該当する。当遺構周辺からは多量の石と土器片が出土し、配石遺構として調査を開始した。遺構を掘り下げ、図面作成と遺物取り上げを行う過程で、炉跡の検出と張出し部先端の埋壘の存在から、当遺構が柄鏡形敷石住居跡となることが判明した。7月に遺構の写真撮影を実施し、その後、他の遺構の調査に入った。9月中旬から遺物取り上げを再開し、11月になって敷石住居跡の石の取り上げを始めた。中旬には張出し部の石の取り上げ、炉体土器の実測作業と取り上げを行い、他の配石遺構の調査と同様に敷石を構成する総ての石を取り上げ、調査を終了した。

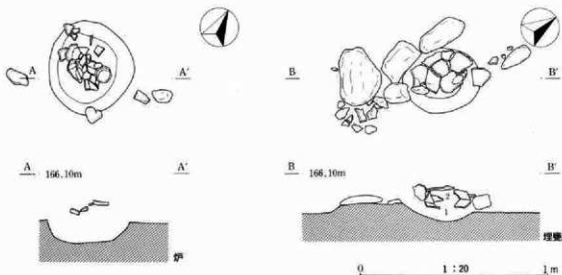
重複 なし。41号配石遺構に近接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長4m80cmを測る。主体部の規模は推定長径3m40cm、推定短径3m30cmを呈し、推定面積は約8.4m²である。張出し部の規模は長径1m40cm、短径60～80cmで、面積約1.6m²である。総面積は約10m²となる。

敷石状況 張出し部の敷石は明瞭であるが、主体部の敷石は乱雑であった。主体部内部には当初から敷石は存在せず、縁石だけと考えられるが、この縁石も当初の姿を留めてはいない。しかしこの縁石の同レベルの拡散から判断して、当柄鏡形敷石住居跡の掘り込みは存在しなかったものと考えられる。

使用石材 33種類の石材が確認された。300点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩87点(29%)、閃緑岩26点(8.7%)、珪石21点(7%)、輝岩18点(6%)、点紋緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各14点(各4.7%)、輝緑岩13点



第92図 26号配石遺構 炉(左)・埋壘(右)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

(4.3%)、緑泥片岩9点(3%)、砂岩8点(2.7%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・チャート各7点(各2.3%)、変斑岩6点(2%)、絹雲母緑泥片岩・赤色珪質板岩・斑岩・石墨片岩・絹雲母片岩各4点(各1.3%)、点紋絹雲母緑泥片岩3点(1%)、緑泥片岩・安山岩・紅縷絹雲母片岩・角閃岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・紅縷絹雲母石墨片岩各2点(各0.7%)、石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・脆雲母石墨片岩・硬砂岩・凝灰岩・頁岩・珪岩各1点(0.3%)であり、不明は19点(6.3%)を数えた。300点中162点(54%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は321点である。その内訳は、500g未満の石224点(69.8%)、500g～1kg未満の石49点(15.3%)、1kg～2.5kg未満の石28点(8.7%)、2.5kg～5kg未満の石7点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石6点(1.9%)、10kg～20kg未満の石4点(1.2%)、20kg～30kg未満の石2点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.3%)である。

壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

柱穴 検出できなかった。炉埋燧炉である。炉体土器を埋設するピットの大きさは、長径50cm・短径46cm・深さ22cmである。面積は約0.17m²である。覆土は黒褐色土層であった。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まりは良くない。粘性もあまりない。小石と極微量の炭化物粒子を含んでいる。焼土は検出できなかった。

炉体土器は胴下半分を欠損した加曾利E4式土器(第95図1)であり、潰れた状態で出土した。

埋燧 張出し部の先端から底部を転用した埋燧1個体が斜位状態で検出された(第95図2)。埋設ピットの周囲には4個の石が配置されている。埋設ピットは長径40cm・短径34cm・深さ20cmであり、覆土は黒褐色土層。第1層 黒褐色土層 やや固く締まり、粘性が少しある。小石を含む人為的埋土。

埋燧は底部を転用したものであり、覆土は暗褐色土層であった。

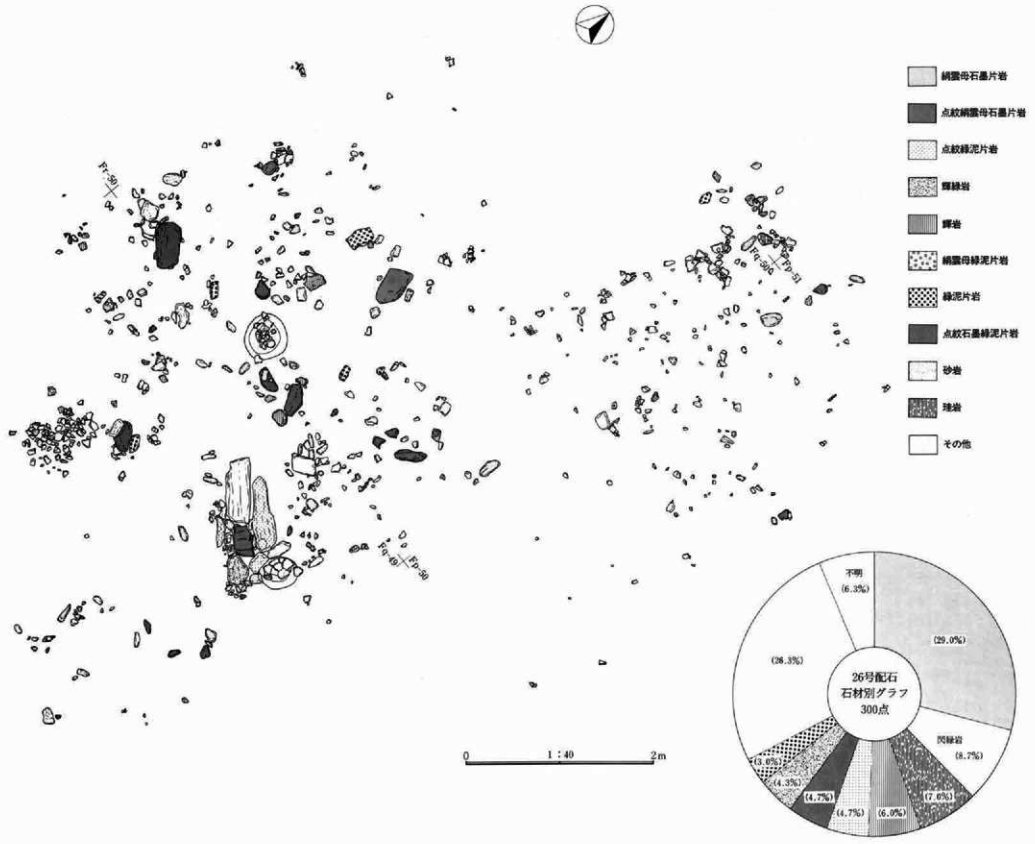
第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性はあまりない。小石2個が入っていた。蓋石の役割をしていたものであろうか。

張出し部 長径1m40cm、短径60cm～80cmの範囲に敷石が施されている。この敷石は6点の石とその間隙に小石を詰めて構築されており、先端部の埋燧の周囲には4点の石を配置している。6点の敷石中、最大の石は長径81cm・短径24cm・厚さ11cm・重量24.1kgの点紋緑泥片岩の焼石である。敷石平均では、長径46.6cm・短径19.2cm・厚さ5cm・重量9.4kgとなる。6点中3点は焼石であった。

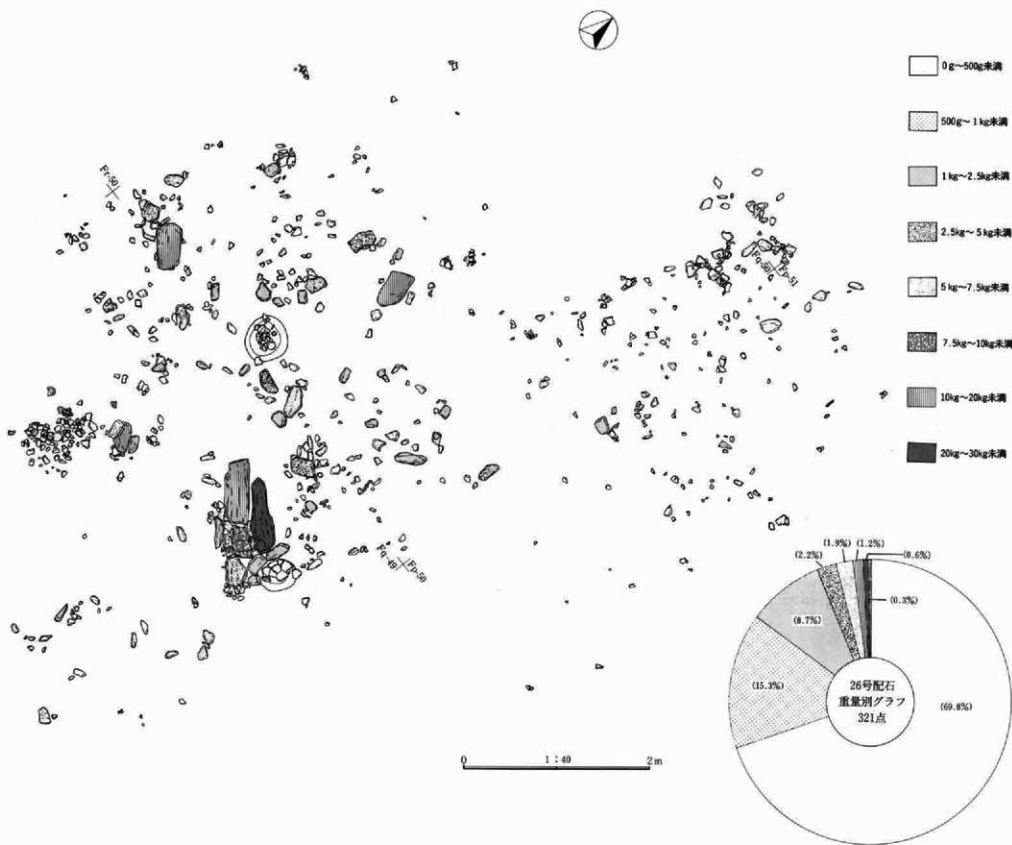
遺物出土状況 炉体土器と埋燧の他には、大形破片2個体、口縁部39点、胴部314点、底部6点が敷石住居跡内外から出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も多量に含まれていた。第91図の遺物出土状況図から解るように、土器の接合関係は広範囲に認められる。このことは当住居の廃絶後、かなりの部分が破壊を受けたことを物語るものであろう。このことはまた緑石の乱雑さからも読み取ることができる。しかし破壊の手は張出し部と炉には及んでいない。

石器では凹石2点、石棒(?)1点、磨石1点、砥石2点、打製石斧1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。凹石1点は炉の近くから、もう1点は張出し部の南から出土し、石棒と思われるものは主体部の緑石中から、磨石1点は張出し部の南2m40cm、砥石2点は主体部の緑石中、打製石斧1点は炉の近く、磨製石斧1点は張出し部の北からそれぞれ出土している。石器含有率は2.7%であり、また焼石は300点中18点で、6%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡である。同時期の柄鏡形敷石住居跡である23号・24号配石遺構と近接して構築されている。主軸方向はN-49°-W。



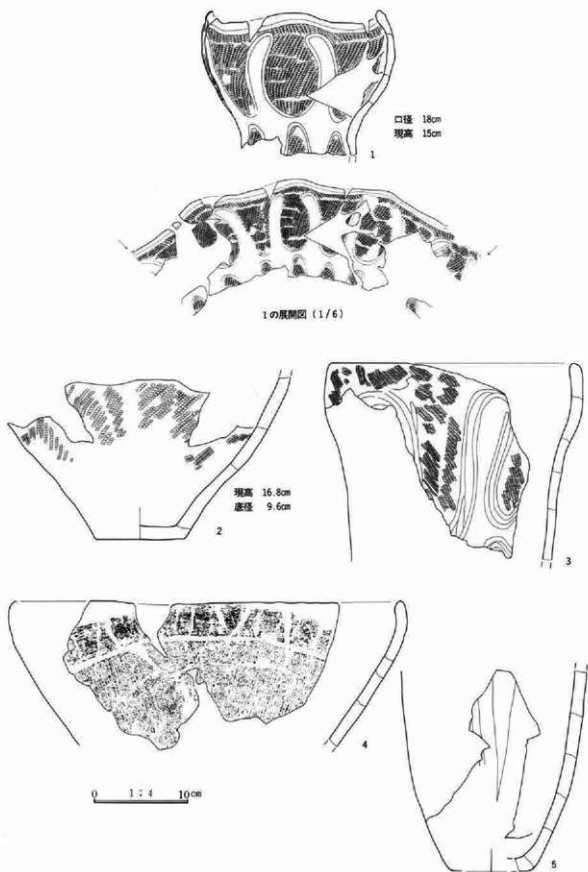
第93図 26号配石遺構石材別分布



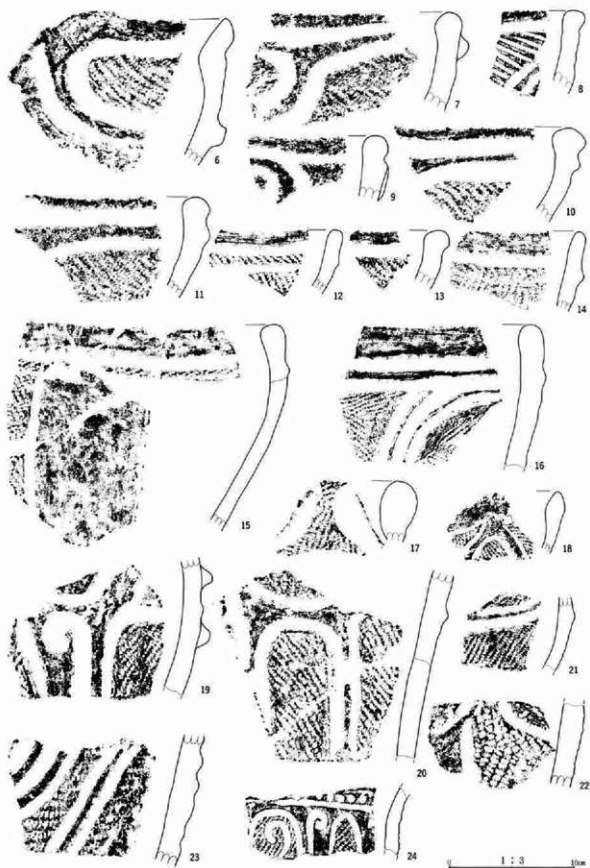
第94図 26号配石遺構重量別分布

26号配石遺構土器観察表

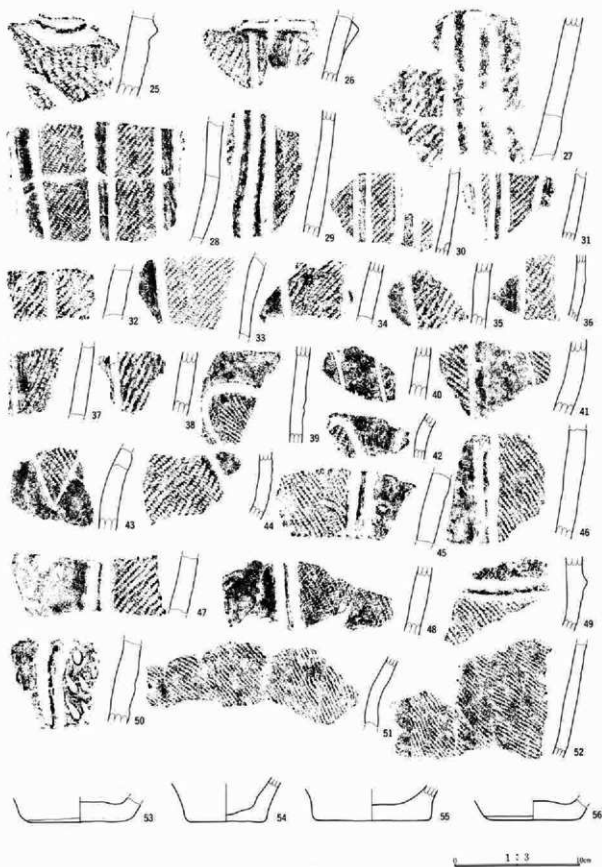
図番 PL	部位	①細粒の砂を混入 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
95-1 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割下半部欠損。 器厚6~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部は内湾し、割部で括れる器形。4単位の波状口縁を呈する。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を送らせる。割部上半部に「V」字状・「U」字状の区画、割下半部に「U」状の区画、区画内にR↑。外面係存者。	が体土器
95-2 111	底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。底径96mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR↑上横帯がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	先端部埋没 (斜位状態)
95-3 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~割部片。 器厚10mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部はやや内湾する。胴部上半には二重の沈線による波状文が描かれ、縄文施文。原体はL↑上横帯がし。割下半部には二重の沈線による「U」状の文様、外面に係存者。	主体部の縁石
95-4 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~割部片。器厚10mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を送らせる。以下縦位の条線が施されている。	主体部東部
95-5 111	底部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部部。底径80mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線が施されている。内面に煤が付着している。	主体部南部
96-6 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~22mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	主体部北東部
96-7 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は黒褐色。	口縁部はやや内湾する。口唇部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	主体部北東部
96-8 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、沈線が施されている。	張り出し部
96-9 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15~20mm。 内面は荒れている。 外面の色調は褐色、内面は黄褐色。	口縁部は隆帯と沈線による文様が描かれている。	張り出し部
96-10 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	主体部北東部
96-11 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~22mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	口縁部はやや内湾する。口唇部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	主体部南部
96-12 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を送らせる。微隆起帯上にR↑上横帯がし。胴部にもR↑上横帯がし。	主体部内部
96-13 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	張り出し部
96-14 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を送らせる。微隆起帯上にR↑上横帯、以下R↑上横帯がし。	主体部北東部
96-15 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	口縁部は内湾。口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を送らせる。それに接続する沈線を垂下、区画内にL↑上横帯。微隆起帯上は横位。	主体部北西部
96-16 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚16~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を送らせる。以下微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL↑上横帯。内面荒。	主体部北東部
96-17 111	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~28mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	口縁部の突起部分。縄文施文。原体はR↑上横帯がし。	主体部内部 (0段多来カ)
96-18 111	口縁 ~割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐色。	縦沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL↑上横帯がし。	主体部北東部



第95図 26号配石遺構出土土器(1)



第96図 26号配石遺構出土土器 (2)



第97図 26号配石遺構出土土器(3)

3 敷石住居跡 (26号配石遺構)

26号配石遺構土器観察表

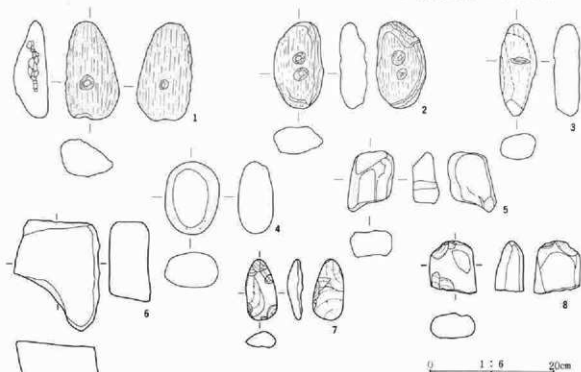
図番 P.L.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
96-19 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	隆帯と沈線による兼手状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はR〔L〕長。	主体部北東部
96-20 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面はふい褐色。	隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL〔L〕長。	主体部北東部
96-21 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	微隆起帯を巡らせ、縄文施文。原体はR〔L〕長。	主体部北東部
96-22 111	口縁 ~胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚16~18mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はふい褐色。	口縁部に沈線による栴円等の文様が描かれ、 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。胴部 は沈線を垂下し、R〔L〕横・縦転がし。	主体部北東部
96-23 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~20mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面はふい黄褐色。	隆帯による文様が描かれ、縄文施文。原体 はR〔L〕長。	主体部北東部
96-24 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。	胴部中に2条の沈線を巡らせ、刺突を施す。 以下沈線による「目」状、兼手状の沈 線を施し、縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。 区画内にも兼手状沈線を施す。	主体部南部
97-25 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はふい褐色。	隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR〔L〕長。	主体部北東部
97-26 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミダキが行われている。 外面の色調はふい褐色、内面はふい赤褐色。	沈線を垂下。縄文施文。原体はR〔L〕長。 土器面は柔軟。	主体部内部
97-27 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい黄褐色。	隆帯を垂下させ、縄文施文。原体はR〔L〕横 転がし。	主体部北東部
97-28 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	主体部南部
97-29 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	隆帯を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	主体部南部
97-30 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。 外面に煤が付着している。	主体部南東部
97-31 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	先編部埋壁 南部
97-32 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はふい褐色。	縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	主体部北東部
97-33 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	主体部南部
97-34 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕(太い糸と細い糸を 使用) 縦転がし。	主体部南部
97-35 111	胴部 ①片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	主体部南部
97-36 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔L〕横転がし。	主体部内部
97-37 111	胴部 ①片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はふい褐色。	微隆起帯を垂下させ、縄文施文。原体は R〔L〕横転がし。 内面に煤が付着している。	主体部北西部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

26号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
97-38 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下す。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 押圧が強い。	掘出し部南 部
97-39 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は黒褐色。	沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施 文。原体はL(上)縦転がし。	主体部緑石 文。
97-40 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は褐色。	細沈線が施されている。	主体部北東 部
97-41 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚13～15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	細沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL(上)縦転がし。 外面に僅か付着している。	主体部北東 部
97-42 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	細沈線による「冂」状の文様が描かれ、縄 文施文。原体はR(上)縦転がし。	掘出し部北 部
97-43 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚12～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は褐色。	細沈線による「V」字状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	先端部埋 東部
97-44 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。	細沈線による文様が描かれ、縄文施文。原 体はR(上)縦転がし。 内面に僅か付着している。	主体部北東 部
97-45 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗赤褐色。	微隆起帯を下ろさせ、縄文施文。原体は L(上)縦転がし。土器面は変色。	主体部北東 部
97-46 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚13～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は赤褐色。	微隆起帯を下ろさせ、縄文施文。原体は L(上)縦転がし。	主体部北東 部
97-47 111	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚8～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	微隆起帯を下ろさせ、縄文施文。原体は R(上)縦転がし。	主体部北東 部
97-48 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②非常に良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。	微隆起帯を下ろさせ、縄文施文。原体は L(上)縦転がし。縄文は土器面が硬い段階 で、施文されている。	主体部北東 部
97-49 111	口縁 ～胴 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚10～13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色、内面はぶい褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 返らせる。以下縄文施文。原体はL(上)縦 転がし。	主体部東部
97-50 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚13～16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に押 し引き状の沈線が施されている。	主体部北東 部
97-51 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	胴部で括れる器形。 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	主体部北東 部
97-52 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	主体部北東 部
97-53 111	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の底部片。底径82mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色、内面は明赤褐色。	底部周縁が磨耗している。	一括
97-54 111	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の底部片。底径60mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は灰黄褐色。	底部周縁が磨耗している。	掘出し部北 部
97-55 111	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はぶい褐色。	底部周縁が磨耗している。	先端部埋 北東部
97-56 111	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。	底部周縁が磨耗している。	伊体土器周 辺

3 敷石住居跡 <36号配石遺構>



第98図 26号配石遺構出土石器

26号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (mm)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
98-1 111	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	15.7	8.5	6.0	1,000	両面に2個の凹みがある。凹の平均は長さ21mm、短径13mm、深さ3mmである。側面には縦打痕がみられる。	伊の近くから出土
98-2 111	凹 石	完形	点紋黒緑泥片岩	13.7	8.1	4.6	700	両面に4個の凹み。最大の凹みは長さ25mm、短径18mm、深さ3mm。最小は長さ19mm、短径15mm、深さ3mmで、平均は長さ22mm、短径18mm、深さ3mm。	張出し部南3mから出土
98-3 111	石 棒 ?	一端欠損	緑泥片岩	(14.5)	5.7	4.0	(500)	未成品か? 片面一部に横長のくぼみ。一部破けている。	主体部の緑石中
98-4 111	磨 石	完形	安山岩	11.5	8.7	5.7	900	磨面に磨耗痕がみられる。	張出し部南
98-5 111	砥 石	部分	砂岩	(9.3)	(7.3)	4.0	(310)	片面と側面に痕跡がある。	主体部
98-6 111	砥 石	部分	輝緑岩	(17.5)	(13.8)	7.0	(2,600)	磨面に磨耗痕がみられる。	主体部
98-7 111	打製石斧	完形	輝岩	9.7	5.0	2.5	150	バチ (II b)。	伊近く
98-8 111	磨製石斧	刃部欠損	角閃岩	(8.3)	7.3	4.5	(520)		張出し部北

36号配石遺構 (第99~109図, PL. 39~42, 111~113)

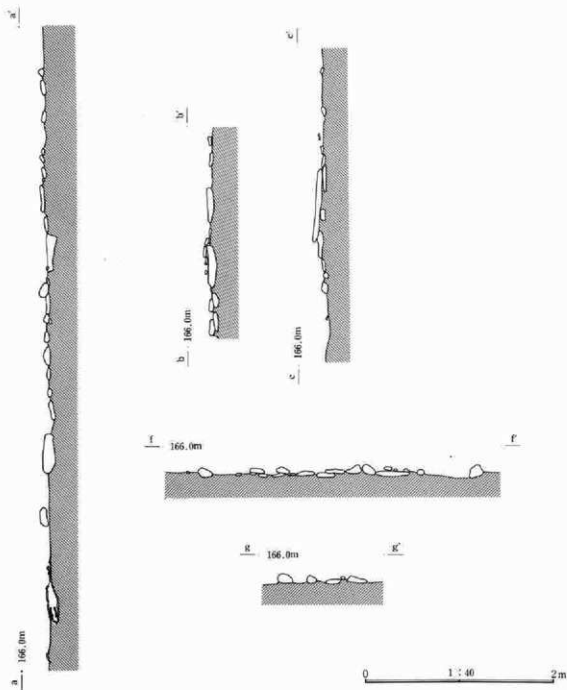
位置 Gg-44, Gh-43+44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西101m(炉までの距離)、列石からは81mの所、37号配石遺構の北41m50cm(炉から炉までの距離)に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月中旬から37号配石遺構とともに調査を開始した。多量の石が検出され、また重なり合っていたために、遺構の全容を把握するには時間がかかった。19日に全景写真と主体部敷石の部分写真、張出し部の写真撮影を実施し、実測作業を行った。以後、他の配石遺構の調査に移行し、調査を再開したのは12月に入ってからである。遺物の取り上げを行い、さらに敷石をはずしながら下部の調査を実施した。その結果、張出し部の敷石下から接続部埋塞が検出された。12月下旬までに敷石の

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第99回 36号配石遺構



総ての石と接続部埋塞、先端部埋塞を取り上げて調査を終了した。1軒の敷石住居跡の調査であったが、他の敷石住居跡と同様に多くの労力と時間をかけて実施した。

重複 なし。新しい耕作溝によって張り出し部の一部が壊されている。また50号配石遺構に近接している。

覆土 空穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長6mを測る。主体部の規模は長径3m60cm、短径2m60cmで面積約7.9㎡。張

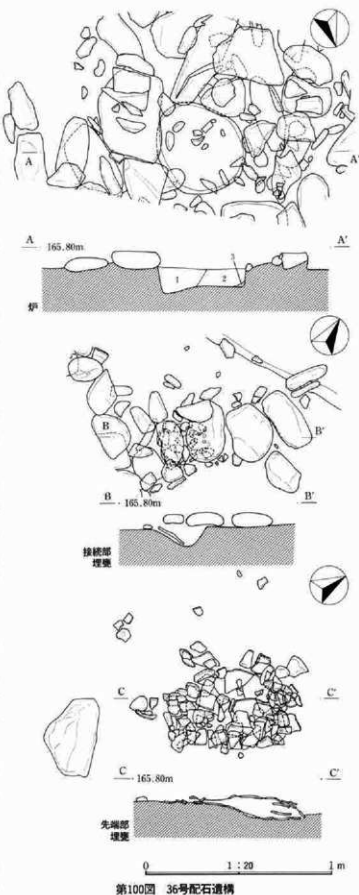
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

出し部の規模は長径3m40cm、短径50cmで、面積約2.1㎡である。総面積は約10㎡になる。

敷石状況 主体部内部の全面には敷石は施されていない。炬を中心に西側にかけて敷石が認められるが、大小さまざまな石が使用され雑然としている。この周囲に縁石が巡るが、内部敷石との間には空間部が存在している。この空間部は当初から存在していたものであろう。

使用石材 33種類の石材が確認された。378点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩68点(18%)、点紋絹雲母石墨片岩55点(14.6%)、輝緑岩54点(14.3%)、点紋緑泥片岩53点(14%)、点紋絹雲母緑泥片岩・砂岩各19点(各5%)、緑泥片岩15点(4%)、角閃岩11点(2.9%)、絹雲母緑泥片岩10点(2.6%)、熱変成岩8点(2.1%)、石墨絹雲母片岩・石墨片岩・紅藻絹雲母片岩・珪岩各4点(各1.1%)、輝岩・流紋岩・安山岩・点紋石墨緑泥片岩・千枚岩・珪石各3点(各0.8%)、絹雲母片岩2点(0.5%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑岩・チャート・石墨緑泥片岩・緑藻緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・玻璃質安山岩・石英閃緑岩・紅藻片岩・ノーライト各1点(各0.3%)であり、不明は18点(4.8%)を数えた。378点中242点(64%)の石は片岩類である。配石遺構(敷石住居跡は除外)を構成している石材は絹雲母石墨片岩が圧倒的に使用されているが、敷石住居跡ではその占める割合は高くなかった。

石材重量 重量の判明している石は357点である。その内訳は、500g未満の石184点(51.5%)、1kg～2.5kg未満の石61点(17.1%)、500g～1kg未満の石38点(10.6%)、2.5kg～5kg未満の石34点(9.5%)、5kg～7.5kg未満の石12点(3.4%)、7.5kg～10



第100図 36号配石遺構

kg未満の石12点 (3.4%)、10kg~20kg未満の石11点 (3.1%)、20kg~30kg未満の石4点 (1.1%)、30kg~40kg未満の石1点 (0.3%)である。主体部と張出し部の敷石は重量のある石が選定され、緑石は軽量の石が選定されている。

壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。

柱穴 検出できなかった。

炉 石囲い炉である。長径53cm・短径46cm・深さ9cm~14cmの楕円形を呈し、面積約0.18m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極微量含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。炭化物粒子を極微量含む。1層よりは明るい色調。

第3層 黄褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極微量含む。

各層とも炭化物粒子を極微量含んでいるが、焼土は含まれていなかった。

炉石は主体部の敷石が代用されているもので、規則的には組まれていない。

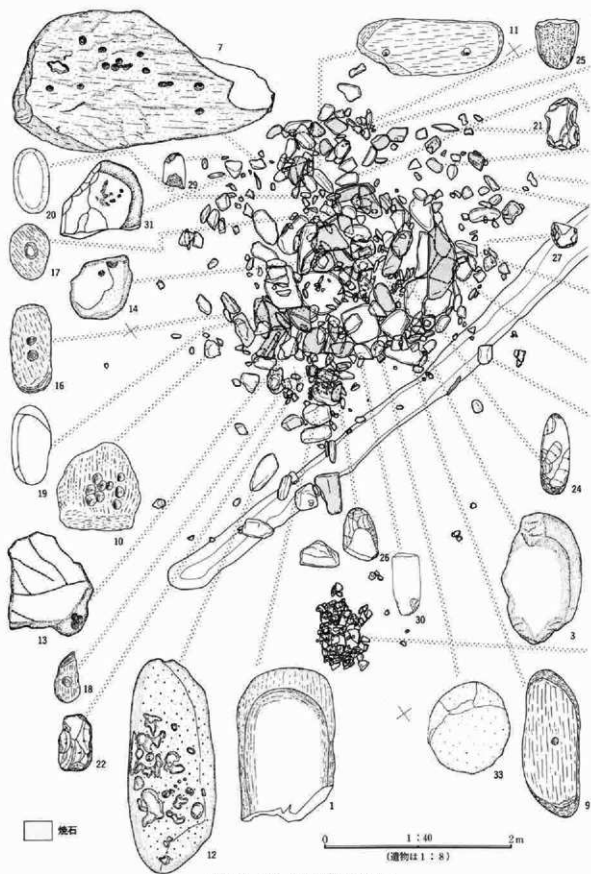
埋壘 主体部と張出し部の接続部に1点、張出し部の先端部に1点の計2点が出土している。接続部の埋壘は胴下半分を欠損した加曾利E3式土器で斜位状態で埋設されていた。埋設ピットは長径、短径とも30cm、深さ10cmを測る。覆土は暗褐色土層であり、固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極少量含んでいた。埋壘には2個の蓋石が伴っている。これらの蓋石は張出し部の敷石がその役割を果たしていたものであり、1点は石皿を伏せていた。なお、埋壘は脆弱であったために復元はできなかった。先端部の埋壘は口縁部を欠損した大型の加曾利E3式土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた (第104図 1)。土壌の規模は長径80cm・短径60cm・深さ13cmである。接続部埋壘と先端部埋壘の大きさは著しく異なっている。24号配石遺構の埋壘の在り方と共通している。

張出し部 新しい耕作溝によってその一部が壊されているが、残存状況は比較的良好い。10個の石と押さえの細かな石からなっている。10個の石の平均値は、長径32.3cm・短径20.1cm・厚さ8.4cm・重量9.8kgである。石皿1点、多孔石1点が含まれていた。

遺物出土状況 埋壘2個体の他に、口縁部23点、胴部84点、底部2点の計113点の土器片が主体部を中心に出土している。土器片の出土は多くはなかった。

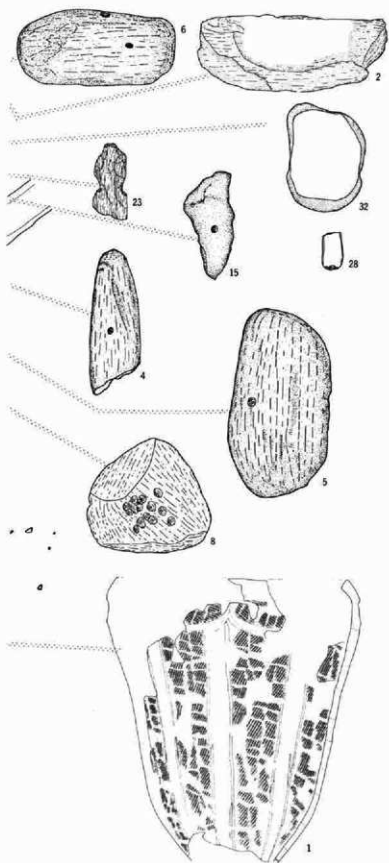
石器では石皿3点、多孔石10点、砥石3点、凹石3点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧7点、丸石1点それぞれ出土している。石皿1点は張出し部、2点は主体部から、多孔石1点は張出し部、4点は主体部、5点は緑石から、砥石は主体部から2点、緑石から1点、凹石は主体部1点、緑石1点、張出し部1点、磨石は主体部からそれぞれ出土している。石器の含有率は8.5%であり、焼石は378点中77点の出土で、20.4%を占めている。

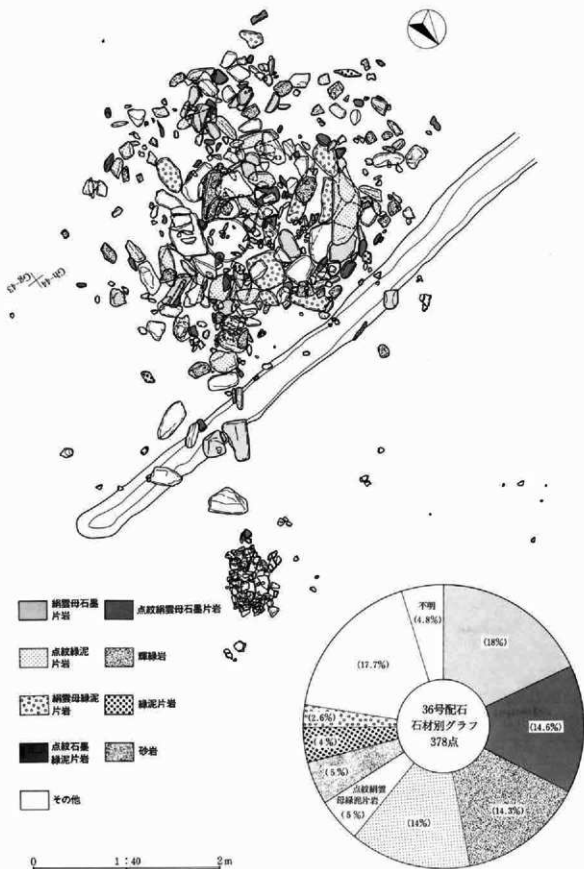
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の柄鏡形敷石住居跡である。該期の敷石住居跡には5号配石遺構に代表されるように張出し部を伴わないもの、当敷石住居跡のように確実に張出し部を伴うものの2者が併存している。主軸方向はN-148°-W。



第101図 36号配石遺構遺物出土状況

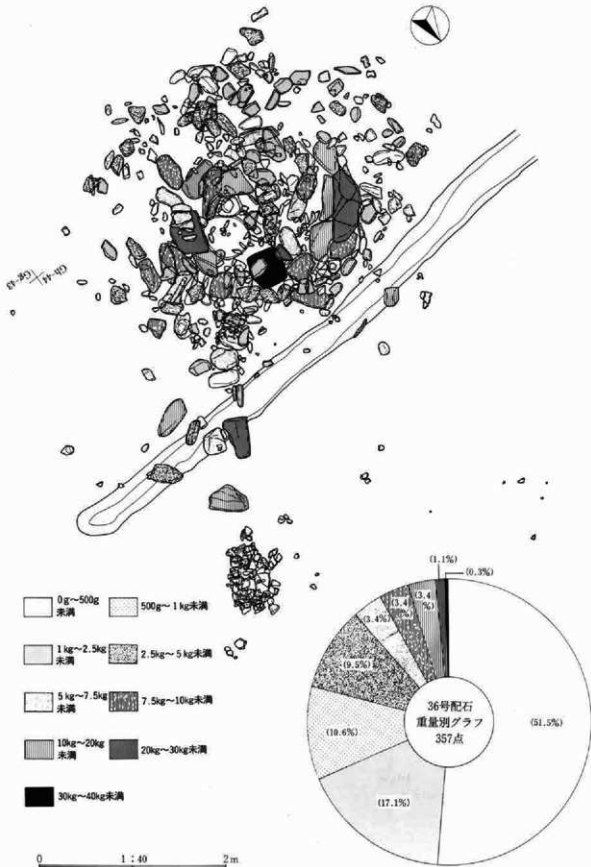
3 敷石住居跡〈36号配石遺構〉





第102図 36号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡〈36号配石遺構〉



第103図 36号配石遺構重量別分布

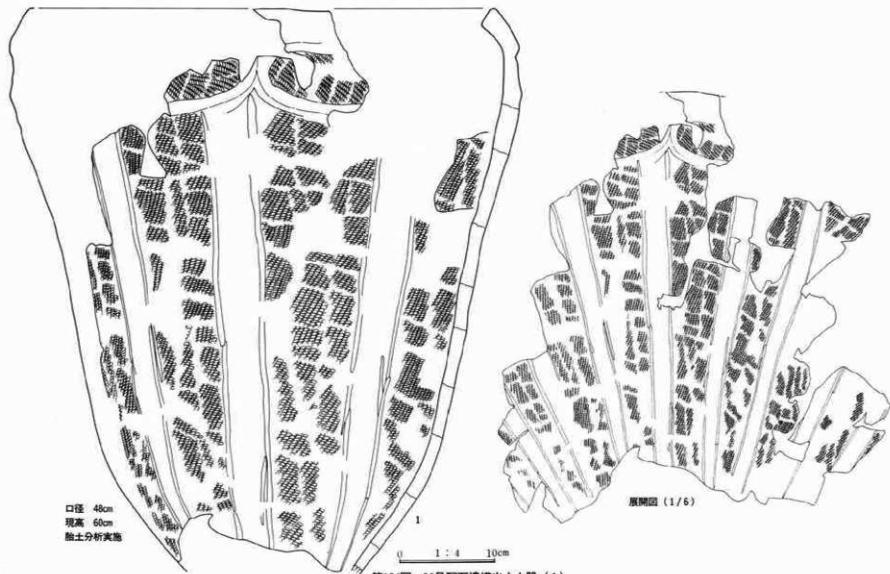
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

36号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
104-1 111	口縁 部と 底部 を欠 損	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部と底部を欠損。 器厚13~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口縁部に内湾する。口縁部に隆帯と沈線による 槽内等の文様を描き、原体はR(1)横転 がし。胴部は沈線を垂下し、R(1)縦転がし。 押圧が強い。	先端部埋没 (斜位状態)
105-2 111	口縁 部 割 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部割部片。器厚10mm。 内面は横方向のミゾキが行われている。 内外面の色調は明褐色。	口縁部に隆帯と沈線による槽内等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(1)横転がし。 胴部R(1)横転がし(0段多糸)横色施文。	主体部東部
105-3 111	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい黄褐色。	口縁部に内湾する。口縁部に隆帯と沈線に よる槽内等の文様を描かれ、縄文施文。 原体はR(1)横転がし。	突出し部
105-4 111	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に隆帯と沈線による槽内等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(1)横転がし。	主体部東部
105-5 111	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。	主体部内部
105-6 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗褐色。	縄文施文。原体はR(1)縦転がし。 外面は荒れている。	主体部南部
105-7 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面はよい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。	一括
105-8 111	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はよい黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。	主体部西部
105-9 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面はよい黄褐色。	縄文施文。原体はR(1)縦転がし。	主体部縁石
105-10 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	縄文施文。原体はL(1)器。土器面は柔軟。	主体部縁石
105-11 111	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(1)縦転がし。	主体部内部
105-12 111	底部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黄褐色。	全体的に荒れている。	突出し部北 部
105-13 111	底部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。底径78mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はL(1)器。 全体的に荒れている。	突出し部南 部
105-14 111	土製 円盤	①中粒の砂を混入 ②やや良	土製円盤の破片。厚さ10~14mm。 内外面は荒れている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は明黄褐色。	重量(32)g	主体部西部

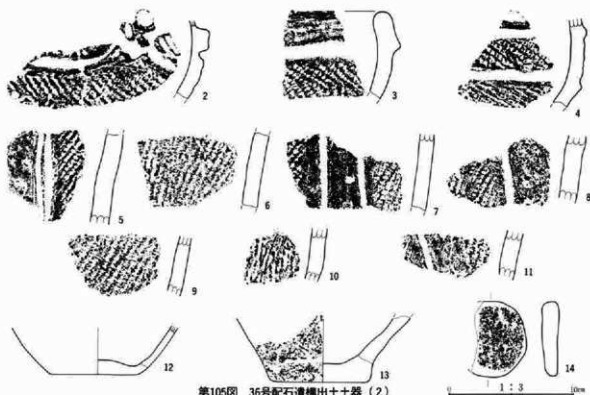
36号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
106-1 111	石 皿	瓦	点紋緑泥片岩	(32.4)	20.8	7.0	(7,500)	楕円形を呈す。裏面に12個の凹み。最大は長21mm、 短17mm、深9mm。最小は長10mm、短8mm、深3mm で、平均は長16mm、短13mm、深7mm。	接点部埋 没の配石
106-2 112	石 皿	瓦	点紋緑泥片岩	(40.5)	(15.9)	(6.2)	(5,900)	楕円形を呈している。	主体部
106-3 112	石 皿	瓦	点紋緑泥片岩	(27.1)	(16.9)	4.6	(2,050)	楕円形を呈す。裏面に5個の凹み。最大は長22mm、 短16mm、深6mm。最小は長12mm、短11mm、深3mm で、平均は長17mm、短15mm、深5mm。全面焼け。	主体部
106-4 112	多孔 石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(30.9)	10.9	6.3	(3,300)	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は13mm、短 径11mm、深さ3mmである。凹石の凹みとは異なる。	主体部



第104図 36号配石遺構出土土器 (1)

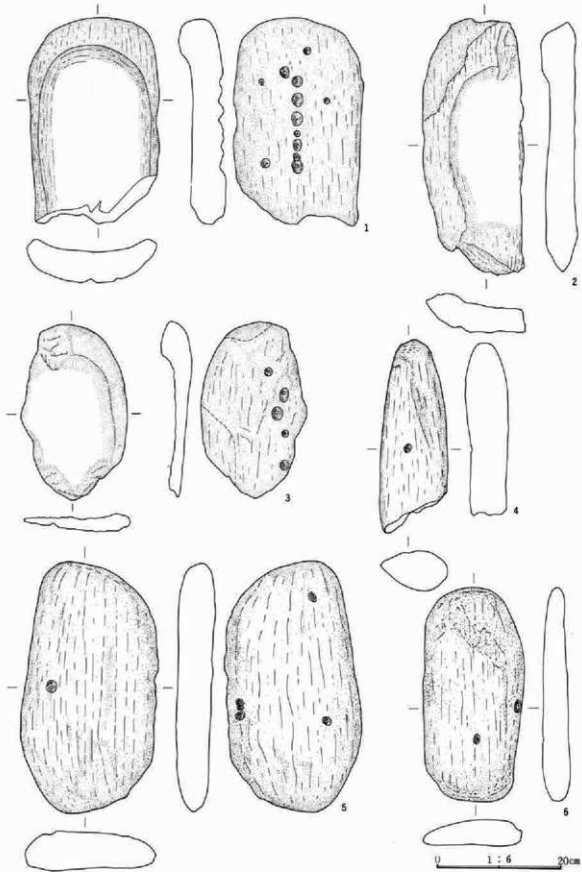
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



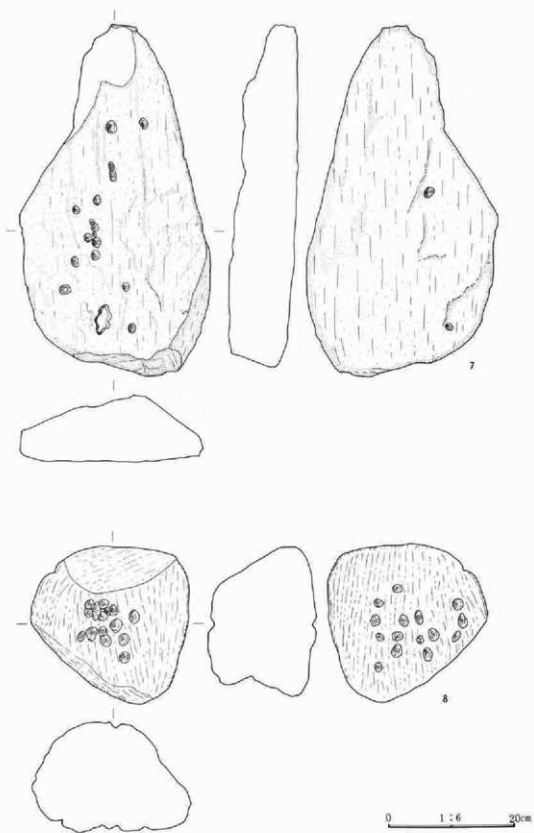
第105図 36号配石遺構出土土器(2)

36号配石遺構石群観察表

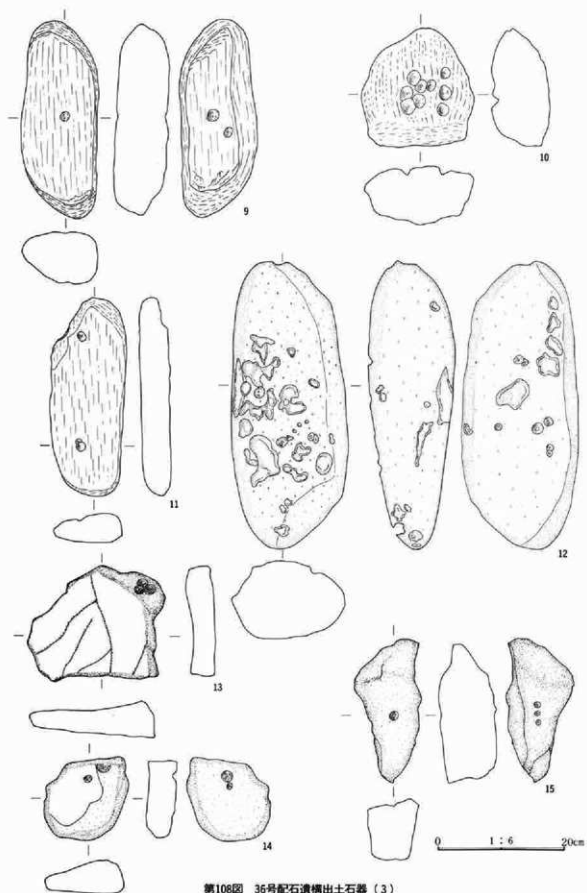
図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
106-5 112	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	39.6	21.8	6.4	9,000	両面に6個の凹み。最大の凹みは長13mm、短17mm、深5mm。最小は長10mm、短7mm、深1mmで、平均は長14mm、短12mm、深2mm。	主体部
106-6 112	多孔石	完形	点紋網雲母緑泥片岩	33.7	16.0	4.4	3,850	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径12mm、深3mm。ある。	縁石
107-7 112	多孔石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	55.3	30.4	10.5	21,800	両面に19個の凹み。最大の凹みは長径48mm、短径18mm、深2mm。最小は長8mm、短7mm、深1mmで、平均は長16mm、短11mm、深3mm。	縁石
107-8 113	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	24.9	25.4	17.0	13,500	両面に30個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深8mm。最小は長13mm、短7mm、深4mmで、平均は長18mm、短13mm、深7mm。	縁石
108-9 113	多孔石	完形	点紋網雲母石墨片岩	31.0	12.2	8.4	5,200	両面に3個の凹み。最大の凹みは長20mm、短17mm、深5mm。最小は長14mm、短13mm、深3mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。	主体部
108-10 113	多孔石	完形	網雲母緑泥片岩	18.9	17.8	9.3	4,100	片面に9個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深13mm。最小は長18mm、短15mm、深9mmで、平均は長22mm、短18mm、深11mm。	縁石
108-11 113	多孔石	一部欠損	網雲母石墨片岩	31.5	12.5	4.7	(2,800)	片面に3個の凹み。最大の凹みは長16mm、短15mm、深6mm。最小は長10mm、短6mm、深3mmで、平均は長13mm、短11mm、深4mm。	主体部
108-12 113	多孔石	完形	斑岩	45.4	18.5	12.5	18,000	全面に48個の凹みがあるが、凹みの製作途中のもののがかなりある。凹みの平均は長27mm、短16mm、深5mm。多孔石の未製品か。	張り出し部
108-13 113	砥石 (石皿)	部分	砂岩	(18.3)	(22.0)	5.5	(2,200)	石皿というよりは砥石として使用されたものか。片面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径16mm、深き4mm。	主体部
108-14 113	砥石 (石皿)	部分	砂岩	(13.1)	(13.2)	5.3	(1,600)	石皿というよりは砥石として使用されたものか。両面に4個の凹みがある。凹みの平均は長径17mm、短径14mm、深き7mm。	主体部



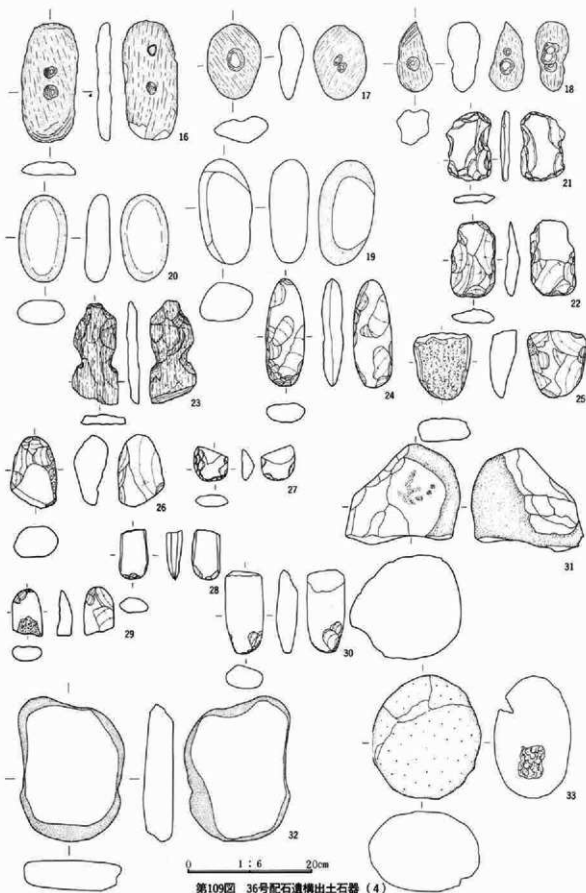
第106図 36号配石遺構出土石器(1)



第107図 36号配石遺構出土石器(2)



第108図 36号配石遺構出土石器(3)



第109図 36号配石遺構出土石器(4)

3 敷石住居跡 <37号配石遺構>

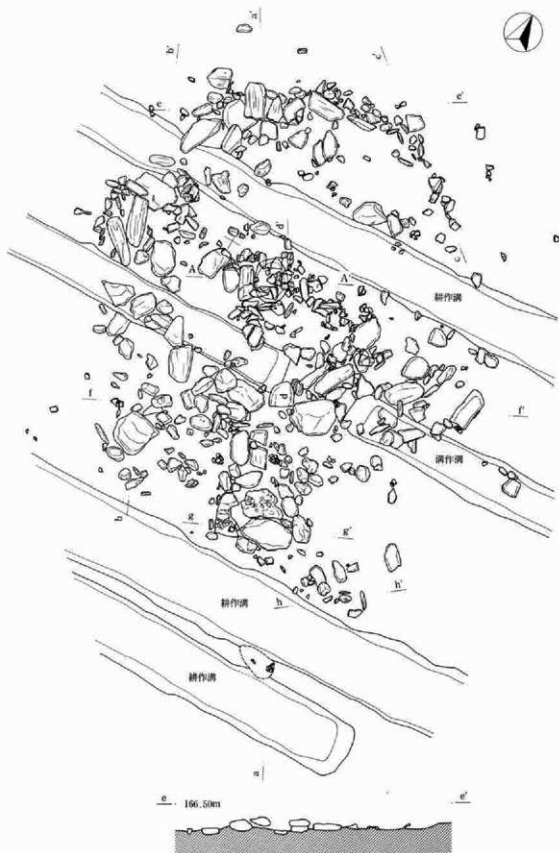
36号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
108-15 113	多孔石	部分	砂岩	(22.6)	(10.8)	9.2	(1,820)	両面に4個の凹み。最大の凹みは長14mm、短14mm、深4mm。最小は長8mm、短7mm、深1mmで、平均は長10mm、短9mm、深2mm。	緑石
109-16 113	凹石	完形	点紋網雲母石巻片岩	18.8	9.0	2.4	600	両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短18mm、深4mm。最小は長18mm、短15mm、深2mmで、平均は長20mm、短15mm、深3mm。	緑石
109-17 113	凹石	完形	点紋緑泥片岩	11.8	8.7	4.7	500	両面に3個の凹み。最大の凹みは長37mm、短28mm、深4mm。最小は長17mm、短13mm、深3mmで、平均は長24mm、短16mm、深2mm。	主体部
109-18 113	凹石	片	点紋緑泥片岩	10.9	5.7	5.5	(400)	全面に6個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深3mm。最小は長12mm、短12mm、深2mmで、平均は長17mm、短17mm、深3mm。	張出し部
109-19 113	磨石	完形	流紋岩	16.7	8.5	6.2	1,200	器面に磨耗痕がみられる。	主体部
109-20 113	磨石	完形	流紋岩	13.7	7.8	4.0	550	器面に磨耗痕がみられる。	主体部
109-21 113	打製石片	完形	熱変成岩	10.9	7.2	1.4	150	分割(1)。一方の刃部が軸に対して斜めに傾く。	主体部
109-22 113	打製石片	完形	輝岩	11.9	7.2	2.5	250	バチ(IIb)。	張出し部
109-23 113	打製石片	一部欠損	点紋網雲母石巻片岩	(16.0)	7.4	1.9	(240)	分割(1)。一部焼けている。	緑石
109-24 113	磨製石片	完形	輝緑岩	17.2	6.2	3.2	590	磨き途中。一部の磨ききりあり。	主体部
109-25 113		基部欠損	角閃岩	(10.6)	9.4	4.3	(560)	粗割り段階。	緑石
109-26 113		刃部欠損	輝緑岩	(11.4)	7.4	5.4	(580)	粗割り段階。	張出し部
109-27 113	磨製石片	基部欠損	輝緑岩	(5.4)	5.6	1.9	(90)	磨き途中。刺痕痕一部残す。	緑石
109-28 113	磨製石片	基部欠損	輝緑岩	(7.8)	4.6	2.5	(150)	磨き途中。一部に粗割り痕残す。	一括
109-29 113	磨製石片	刃部欠損	角閃岩	(7.5)	4.8	2.6	(145)	磨き途中。両面に敲打・粗割り痕残す。	緑石
109-30	磨製石片	基部欠損	輝緑岩	(10.0)	7.5	3.5	(620)	磨き途中。一部に粗割り痕残す。	
109-31 113		完形	安山岩	16.0	18.0	16.8	4,900	敲打痕と磨耗痕がみられる。	緑石
109-32 113	砥石	完形	砂岩	22.8	16.8	4.8	2,900	器面に磨耗痕がみられる。	緑石
109-33 113	丸石	完形	安山岩	19.3	17.8	12.3	4,700		緑石
113	磨製石片	刃部欠損	輝緑岩	(13.9)	5.9	3.5	(475)	磨き段階。刃部再生途中の可能性あり。	

37号配石遺構 (第110～117図、PL. 43～48、114・115)

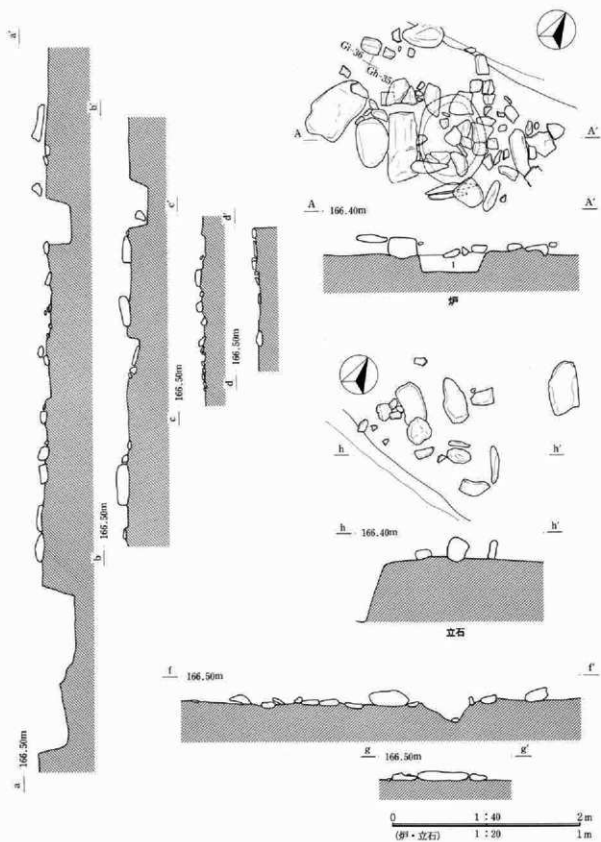
位置 Gh・Gi-35・36グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西118m(炉までの距離)、列石からは98m50cmの所、36号配石遺構の南41m50cmに位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月中旬から36号配石遺構とともに調査を開始した。多量の石が検出され、また重なり合っていたために、遺構の全容を把握するには時間がかかった。24日に全景写真と主体部敷石の部分写真、張出し部の写真撮影を実施し、実測作業に入った。以後、他の配石遺構の調査に移行し、調査を再開したのは36号配石遺構と同様に12月に入ってからである。遺物の取り上げを行い、さらに図面の追加をしながらか敷石をはずした。新しい耕作溝によって部分的に壊されているが、敷石の残存状況は比較的良かった。また南端からは、かろうじて先端部埋戻の一部が検出された。



第110図 37号配石道構

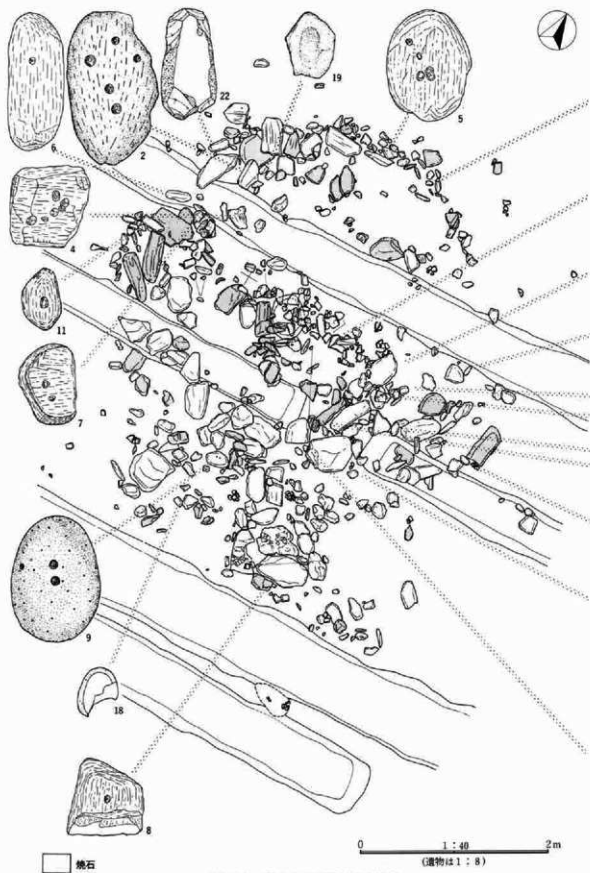
3 敷石住居跡 (37号配石遺構)



重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第111図 37号配石遺構遺物出土状況

3 敷石住居跡 (37号配石遺構)

の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

形状 柄鏡形敷石住居跡で全長6m40cmを測る。主体部の規模は長径4m、短径3m70cmで、面積約13.5㎡である。張出し部は、その一部を耕作溝で覆われているが、長径2m70cm、短径1m10cmで、面積約3㎡である。総面積は約16.5㎡となる。

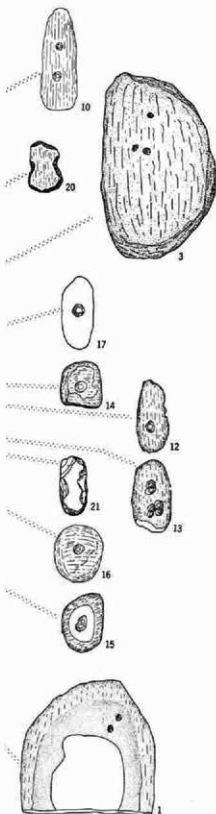
敷石状況 主体部の縁石と張出し部には敷石が施されているが、主体部内部には敷石は認められない。縁石は東縁では小さな石が選定されているが、西縁・南縁・北縁の3縁では比較的大きな石が選定されている。張出し部の敷石は耕作溝によって覆われているために全容は不明であるが、現状では1m50cmまで敷石が認められる。

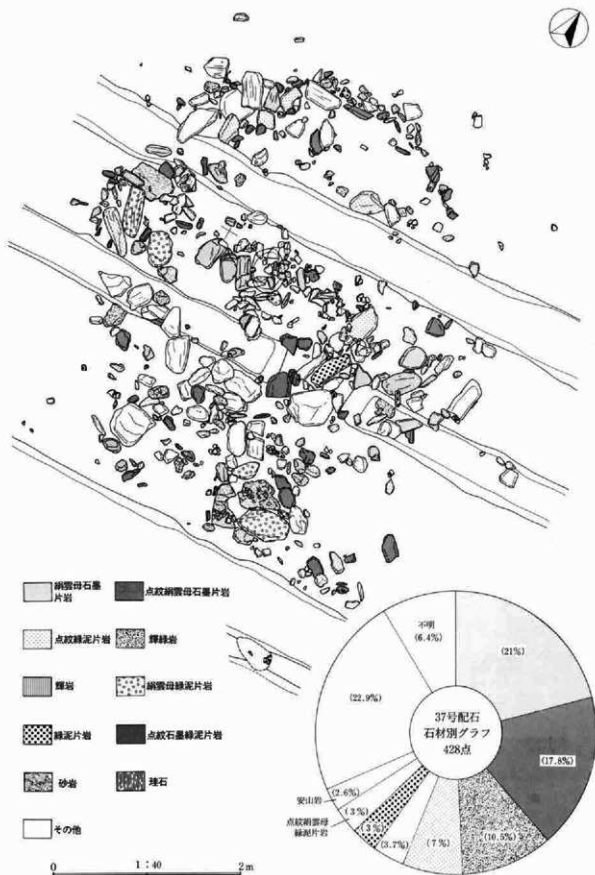
使用石材 41種類の石材が確認されている。428点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩90点(21%)、点紋絹雲母石墨片岩76点(17.8%)、輝緑岩45点(10.5%)、点紋緑泥片岩30点(7%)、紅簾絹雲母片岩16点(3.7%)、緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各13点(各3%)、安山岩11点(2.6%)、砂岩10点(2.3%)、石墨絹雲母片岩8点(1.9%)、絹雲母緑泥片岩・珪石各7点(各1.6%)、角閃岩6点(1.4%)、絹雲母緑泥石墨片岩5点(1.2%)、流紋岩・紅簾絹雲母石墨片岩各4点(各0.9%)、石墨片岩・絹雲母片岩・熱変成岩・硬砂岩・閃輝綠岩各3点(各0.7%)、輝岩・斑岩・チャート・石墨緑泥片岩・綠簾緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・石英安山岩・方散虫板岩各2点(各0.5%)、滑石片岩・緑泥石墨片岩・輝綠凝灰岩・変斑岩・花崗閃緑岩・緑泥絹雲母片岩・千枚岩・珪岩各1点(各0.2%)であり、不明は36点(8.4%)を数えた。不明の石を除いた392点中281点(71.7%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は390点である。その内訳は、500g未満の石169点(43.3%)、500g～1kg未満の石79点(20.3%)、1kg～2.5kg未満の石71点(18.2%)、2.5kg～5kg未満の石30点(7.7%)、5kg～7.5kg未満の石16点(4.1%)、10kg～20kg未満の石13点(3.3%)、7.5kg～10kg未満の石6点(1.5%)、20kg～30kg未満の石3点(0.8%)、30kg～40kg未満の石3点(0.8%)である。

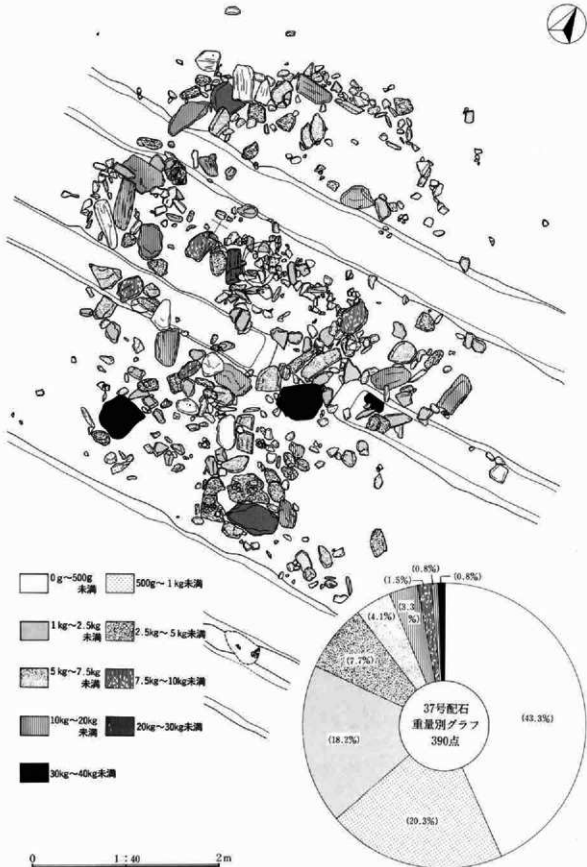
壁高 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

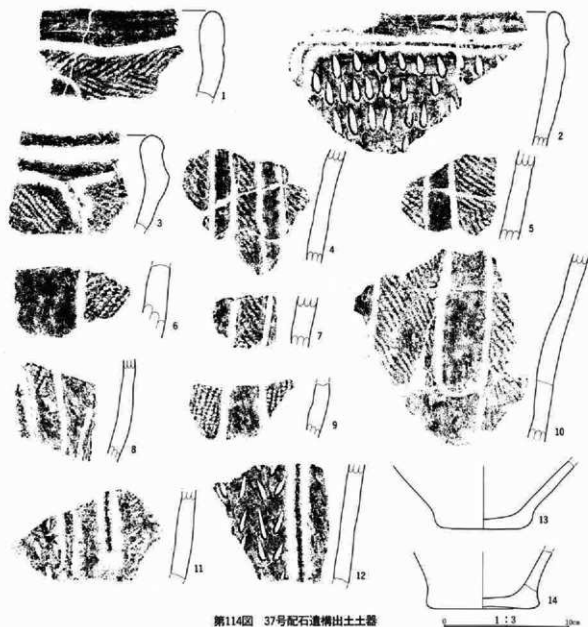




第112図 37号配石遺構石材別分布



第113図 37号配石遺構重量別分布



第114図 37号配石遺構出土土器

炉 石囲い炉である。長径52cm・短径36cm・深さ10cmの楕円形を呈し、面積は約0.15㎡である。覆土は暗褐色土層である。固く縮まり粘性が非常にある。焼土粒子・炭化物粒子を微量含んでいた。炉石は6個の石から構成されている。

埋壺 張出し部の先端部から検出されたが、耕作溝によって壊されていたために全容を知ることはできなかった。埋壺の破片は加曾利E3式土器であった。

張出し部 新しい耕作溝によってその一部が壊されている。この張出し部の東から小さな立石が検出された。この立石は周囲を石で囲われている。その規模は長径65cm、短径50cmであった。立石は長径16.5cm・短径12.5cm・厚さ7cm・重量2.2kgの点紋網雲母石墨片岩を使用していた。

遺物出土状況 埋壺の他には、口縁部13点、胴部93点、底部7点の計113点の土器片が、炉の東部分を中心に出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。

石器では石皿1点、多孔石8点、凹石8点、磨石2点、打製石斧2点、磨製石斧の未製品1点が出土して

3 敷石住居跡 <37号配石遺構>

いる。石皿1点は緑石として、多孔石6点は緑石、2点は張出し部から、凹石6点は伊東の緑石から集中的に出土し、2点は他の緑石から、磨石は張出し部の西からそれぞれ出土している。石器の含有率は5.1%であり、また焼石は428点中76点の出土で、17.8%を占めている。焼石は緑石を中心に認められた。

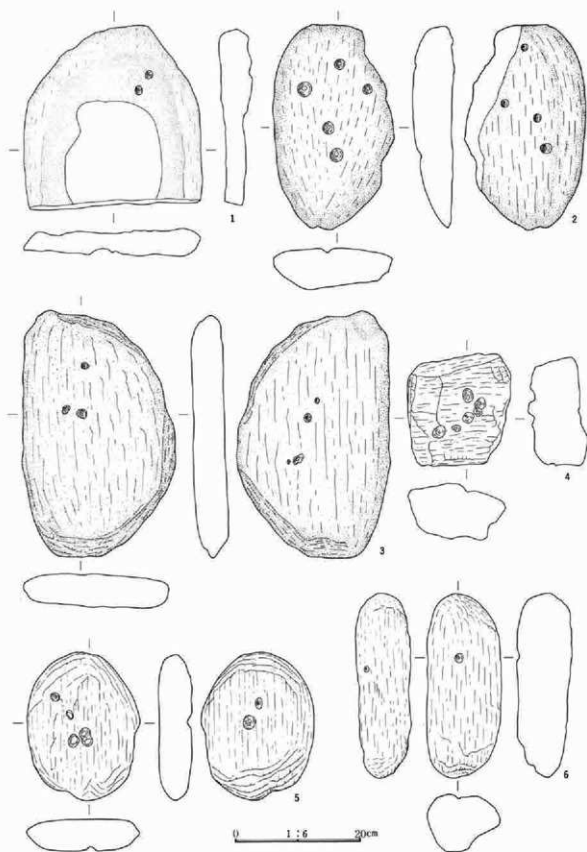
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の柄鏡形敷石住居跡である。

37号配石遺構土器観察表

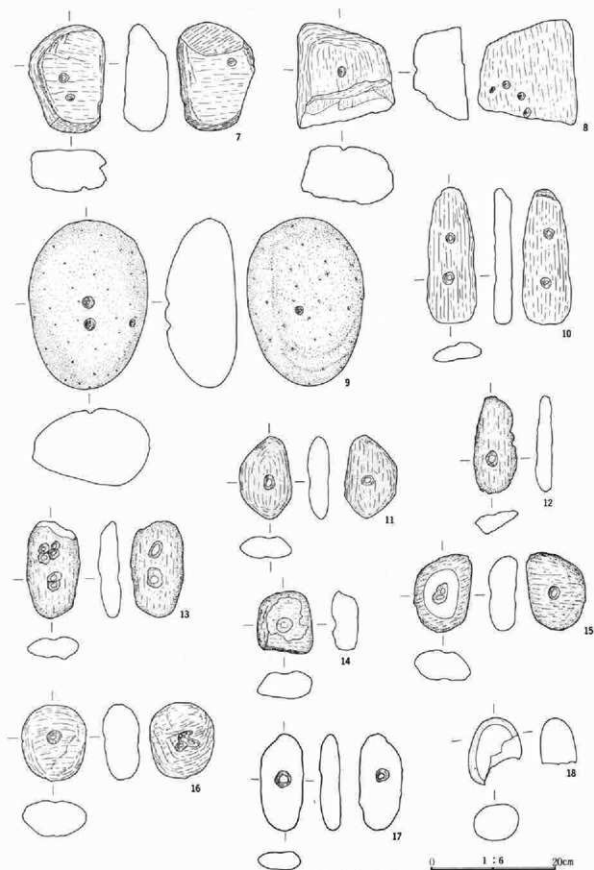
図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
114-1 114	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に無文帯をおき、 1条の沈線を通らせる。胴部には沈線による 文様が描かれ、縄文施文。原体はL(↑ 横・縦位)。	主体部緑石
114-2 114	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	口唇部に深い無文帯をおき、微隆起帯を 通らせる。区内に押し引き状の沈線が施さ れている。	主体部北東 部
114-3 114	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~19mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線 による文様が描かれ、縄文施文。原体はR(↑ 横転)がし。	主体部緑石
114-4 114	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 内外面の色調は褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 内面に條が付着している。	先端部埋 東部
114-5 114	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は荒れている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。	張出し部
114-6 114	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。	主体部東部
114-7 114	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は暗褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。	主体部緑石 内部
114-8 114	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は黒褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 外部に條が付着している。	張出し部南 部
114-9 114	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。	張出し部北 部
114-10 114	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。	張出し部
114-11 114	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい黄褐色。	微隆起帯を垂下させ、押し引き状の沈線が 施されている。	先端部埋 北部
114-12 114	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい黄褐色。	微隆起帯を垂下させ、押し引き状の沈線が 施されている。	先端部埋 南部
114-13 114	底部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。直径70mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	外面は荒れている。	主体部内部
114-14 114	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。直径69mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい褐色。	底部周縁は磨耗している。	先端部埋 北部

37号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
115-1 114	石皿	劣	点紋磨製母石 片岩	(29.4)	28.5	5.4	(5,700)	楕円形で底みは浅い。表面に2個の凹みがある。 凹みの平均は長径14mm、短径12mm、深さ1mmであ る。	南の緑石
115-2 114	多孔石	ほぼ完形	点紋磨製片岩	32.3	(19.5)	6.6	(6,000)	両面に9個の凹み。最大の凹みは長21mm、短20mm、 深6mm。最小は長11mm、短7mm、深3mmで、平均 は長17mm、短15mm、深5mm。	北の緑石

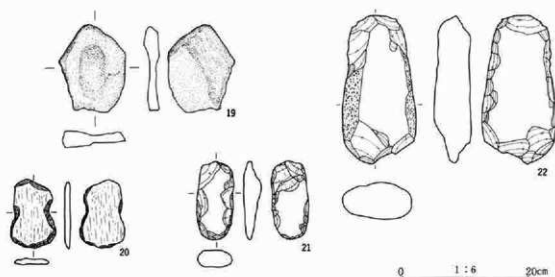


第115図 37号配石遺構出土石器(1)



第116図 37号配石遺構出土石器(2)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第117図 37号配石遺構出土石器(3)

37号配石遺構石器観察表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm-g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
115-3	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	38.8	24.5	5.5	9,200	両面に8個の凹み。最大の凹みは長19mm、短11mm、深1mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長12mm、短10mm、深1mm。	炉の東
115-4 114	多孔石	完形	石磨耐雲母片岩	16.0	16.4	9.1	3,850	片面に6個の凹み。最大の凹みは長24mm、短16mm、深15mm。最小は長15mm、短11mm、深8mmで、平均は長18mm、短15mm、深11mm。	西の縁石
115-5 114	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	23.3	18.0	5.1	3,250	両面に6個の凹み。最大の凹みは長30mm、短15mm、深2mm。最小は長14mm、短9mm、深1mmで、平均は長20mm、短14mm、深3mm。	北の縁石
115-6 114	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	29.0	11.8	8.9	4,500	2個の凹みがある。凹みの平均は長径12mm、短径11mm、深さ3mmである。	西の縁石
116-7 114	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	17.0	12.4	7.2	2,100	両面に3個の凹み。最大の凹みは長15mm、短14mm、深2mm。最小は長13mm、短10mm、深3mmで、平均は長14mm、短12mm、深4mm。	西の縁石
116-8 114	多孔石	片	網雲母石墨片岩	(16.5)	15.9	9.3	(3,700)	両面に6個の凹み。最大の凹みは長16mm、短14mm、深7mm。最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長11mm、短9mm、深2mm。一部焼けている。	張出し部
116-9 114	多孔石 (丸石)	完形	波紋岩	26.4	18.7	12.1	7,400	丸石に4個の凹み。最大の凹みは長18mm、短18mm、深9mm。最小は長11mm、短9mm、深3mmで、平均は長15mm、短14mm、深7mm。	張出し部 の西
116-10 115	凹石	完形	網雲母石墨片岩	21.7	7.8	3.2	700	両面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深3mm。最小は長16mm、短14mm、深2mmで、平均は長18mm、短16mm、深2mm。	北の縁石
116-11 115	凹石	完形	点紋緑泥片岩	13.1	8.5	3.5	550	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径23mm、短径16mm、深さ3mmである。側面に磨耗痕がみられる。	西の縁石
116-12 115	凹石	完形	点紋緑泥片岩	15.5	6.8	3.5	450	片面に1個の凹みがある。凹みは長径26mm、短径18mm、深さ2mmである。	東の縁石
116-13 115	凹石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	(15.2)	8.7	3.6	(700)	両面に8個の凹み。最大の凹みは長32mm、短24mm、深4mm。最小は長16mm、短13mm、深1mmで、平均は長22mm、短15mm、深2mm。	東の縁石
116-14 115	凹石	完形	点紋緑泥片岩	9.8	8.9	4.3	520	片面に1個の凹みがある。凹みの大きさは長径24mm、短径23mm、深さ5mmである。	東の縁石
116-15 115	凹石	完形	点紋緑泥片岩	12.2	9.4	4.8	820	両面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径7mm、深さ4mmである。片面に磨耗痕がみられる。	南の縁石

3 敷石住居跡〈38号配石遺構〉

37号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
116-16 115	凹石	完形	網雲母石墨片岩	11.9	10.3	5.9	1,000	両面に6個の凹み。最大の凹みは長30mm、短8mm、深2mm。最小は長5mm、短4mm、深1mmで、平均は長17mm、短9mm、深2mm。	東の緑石
116-17 115	凹石	完形	輝緑岩	15.4	6.9	3.1	600	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径23mm、深さ3mmである。全面に磨耗痕がみられる。	東の緑石
116-18 115	磨石	片	流紋岩	(10.5)	(8.6)	5.7	(500)	磨面に磨耗痕がみられる。	掘出し部西
117-19 115		一部欠損	砂岩	(13.8)	10.6	2.4	(400)	磨面に窪みがある。	北の緑石
117-20 115	打製石片	完形	網雲母片岩	10.8	7.1	1.1	120	分割(1)。	炉東
117-21 115	打製石片	完形	輝緑岩	12.4	6.0	2.9	300	短冊(III)。	南の緑石
117-22 115		完形	輝緑岩	23.4	11.9	5.9	2,510	粗割り途中。ほとんど原石の状態。	北の緑石

38号配石遺構 (第118～123図、PL. 49、115)

位置 Gj-47、Gk-47・48グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西115m(埋壘までの距離)、列石からは95m50cmの所、36号配石遺構の北西24mに位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。8月下旬から調査を開始した。24日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を実施し、実測作業に入った。南端から埋壘の検出、また敷石の残存を思わせる石の検出から判断して、当遺構は敷石住居跡になるものと考えられた。ただし、路線外に遺構が延びているために全体を把握することはできなかった。10月中旬から遺物の取りあげと敷石の取り上げを行い、調査を終了した。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。当敷石住居跡もまた他の敷石住居跡と同様に、当時の地表面に敷石を施したものであろう。

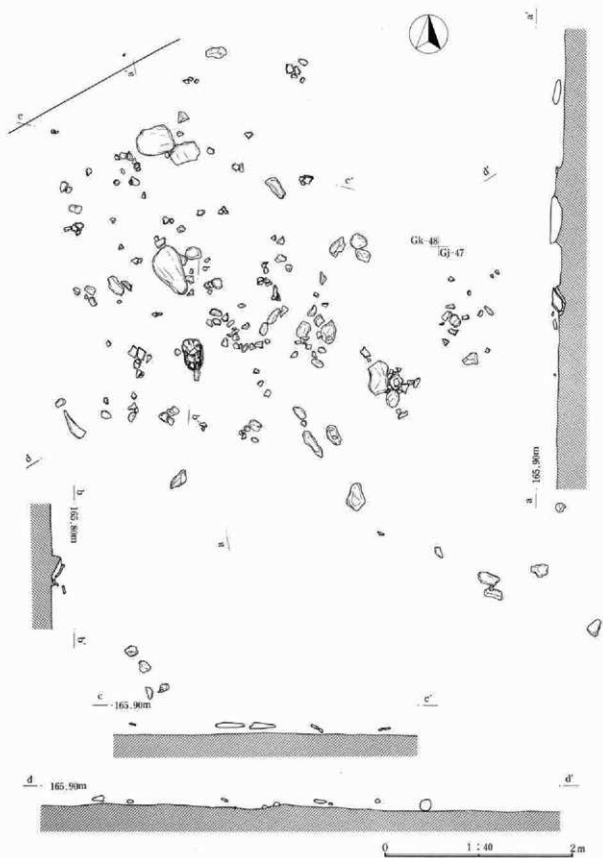
形状 路線外に遺構が延びていたり、残存敷石が不明瞭なために、概鏡形を呈するのかが円形であるのかが不明である。現状では長径4m60cm、短径4mの範囲に石と土器片の分布が認められる。面積は約18.7㎡である。

敷石状況 ころうじて敷石の一部が残っているが、全容は不明である。おそらく破壊を受けたものであろうが、この破壊は新しいものではなく、縄文時代にさかのぼるものである。

使用石材 19種類の石材が確認された。87点の石材別点数は、網雲母石墨片岩20点(23%)、輝緑岩13点(14.9%)、点紋緑泥片岩11点(12.6%)、輝岩9点(10.3%)、点紋石墨緑泥片岩6点(6.9%)、熱変成岩・砂岩各3点(各3.4%)、網雲母緑泥片岩・チャート・珪石各2点(各2.3%)、点紋網雲母石墨片岩・網雲母緑泥片岩・緑泥片岩・安山岩・石墨網雲母片岩・石墨片岩・閃緑岩・緑色珪質板岩・千枚岩各1点(各1.1%)であり、不明は7点(8%)を数えた。不明の石を除いた80点中44点(55%)の石が片岩類である。配石遺構(敷石住居跡は除外)を構成している石材は、網雲母石墨片岩が圧倒的に使用されていたが、敷石住居跡ではその占める割合は高くはなかった。この傾向は当遺構でも追認された。

石材重量 重量の判明している石は81点である。その内訳は、500g未満の石39点(48.1%)、1kg～2.5kg未満の石15点(18.5%)、500g～1kg未満の石14点(17.3%)、2.5kg～5kg未満の石6点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(3.7%)、10kg～20kg未満の石3点(3.7%)、20kg～30kg未満の石1点(1.2%)である。

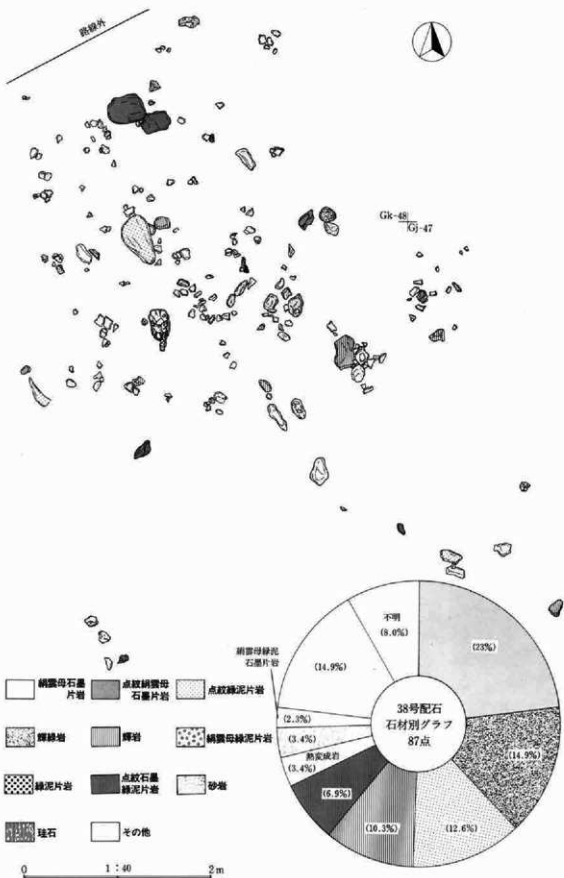
壁高 検出できなかった。構築当初より、掘り込みは存在しなかったものであろう。



第118図 38号配石遺構

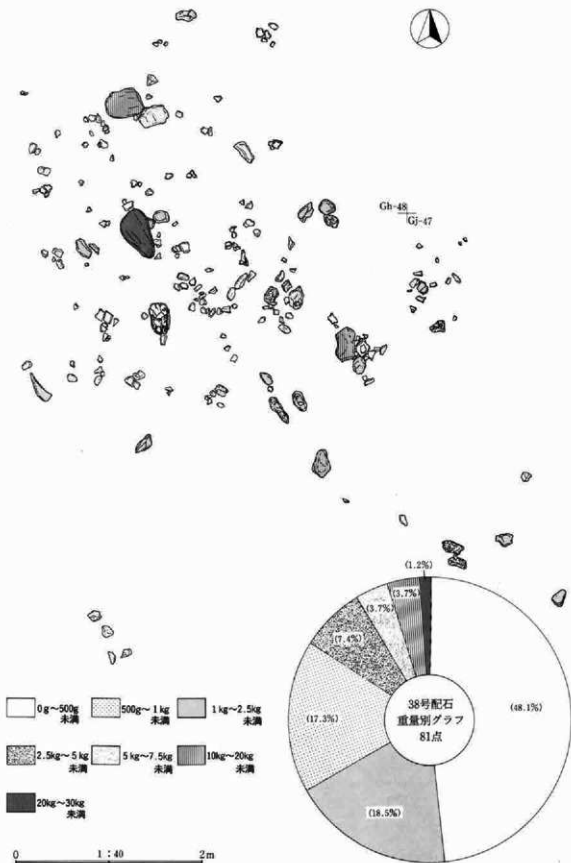


第119図 38号配石遺構遺物出土状況



第120図 38号配石遺構石材別分布

3 敷石住居跡〈38号配石遺構〉



第121図 38号配石遺構重量別分布

柱穴 検出できなかった。

炉 検出できなかった。路線外に存在しているものか。

埋壘 南端から1基検出された。この埋壘は胴下半分を欠損した加曾利E3式土器であり、斜位状態で埋設されていた(第122図1)。埋設ピットの覆土は暗褐色土層であった。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を多量に含み、炭化物粒子を極少量含んでいる。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を多量に含む。埋壘内覆土。

埋壘は北に向かって斜位状態で出土したことから判断して、主体部は埋壘の北に存在するものであろう。残存敷石の状態から検討すると、この埋壘は先端部埋壘に該当するものとなろう。

張出し部 埋壘の北2m30cmまでの範囲が、明瞭ではないが張出し部に該当するものであろうか。

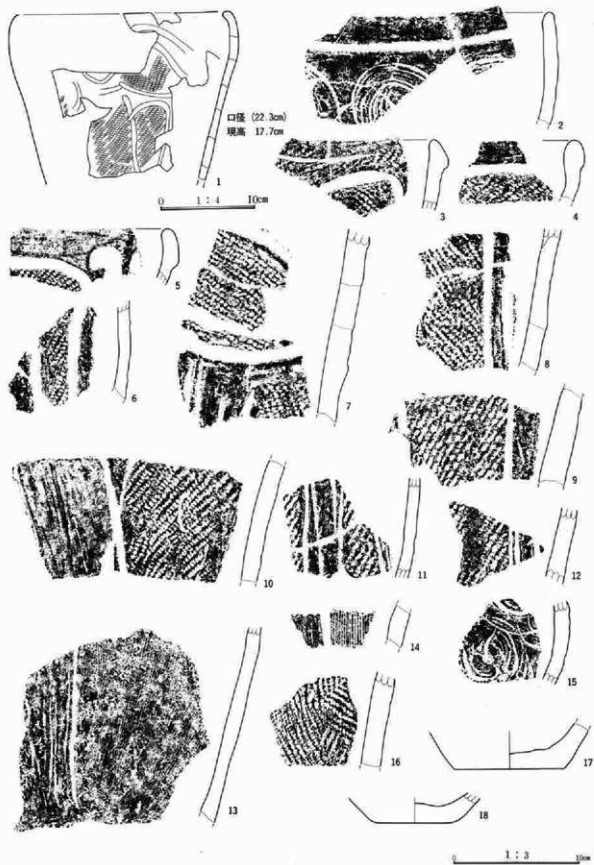
遺物出土状況 埋壘1個体の他に、口縁部13点、胴部91点、底部2点の計106点の土器片が出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。

石器では石皿1点が埋壘の南西から、凹石1点は埋壘の北東からそれぞれ出土している。石器含有率は2.3%である。また焼石は87点中10点の出土で、11.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡である。路線外に遺構が延びていることと、一部が破壊されているためにその全容をつかむことはできなかった。おそらく調査箇所は張出し部に該当する部分であろう。

38号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
122-1 115	口縁 ~胴 上半 部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴上半。器厚5~8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部は沈線による槽 内等の文様が描かれ、縄文施文。胴部には R(上)横筋がし。沈線による文様が描かれる。		埋壘 (斜位状態)
122-2 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を巡ら せる。胴部には沈線による文様が描かれて いる。		張出し部
122-3 115	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口縁部に隆帯と沈線による槽内等の文様が 描かれ、縄文施文。原形はR(上)。		主体部南側
122-4 115	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に沈線による槽 内等の文様が描かれ、縄文施文。原形は L(上)横筋がし。		主体部縁石
122-5 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい藍色、内面はにぶい赤褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に隆帯と沈線 による槽内、縦手状の文様が描かれ、縄文施 文。原形はL(上)。		主体部縁石



第122図 38号配石遺構出土土器

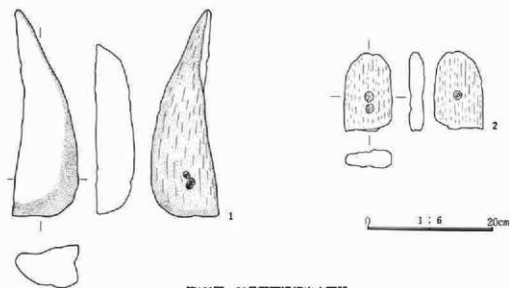
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

38号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
122-6 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面はぶい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL[1]縦転がし。	主体部内部
122-7 115	口縁 ~胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による栴円等の文様を 描き、縄文施文。原体はL[1]。胴部に沈線 を下下し、縄文施文。原体はL[1]。	張出し部北 部
122-8 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL[1]縦転がし。	張出し部
122-9 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17~21mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR[1]縦転がし。 押圧が強い。	張出し部
122-10 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR[1]縦転がし。土器は柔 軟で押圧が強い、内面に僅が付着している。	主体部北東 部
122-11 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR[1] (0段多糸) 縦転がし。	主体部縁石
122-12 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR[1]縦転がし。	主体部北東 部
122-13 115	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はぶい黄褐色。	沈線と糸線が施されている。	主体部内部
122-14 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒色。	沈線と糸線が施されている。 内面に炭化物が付着している。	張出し部
122-15 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は黄褐色。	沈線による文様が描かれている。	張出し部
122-16 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面はぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL[1]。	張出し部北 部
122-17 115	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径88mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	底面は荒れている。	主体部北東 部
122-18 115	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径60mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は明赤褐色。		張出し部南 部

38号配石遺構土器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
123-1 115	石 皿	片	点紋緑泥片岩	(32.6)	(10.7)	6.6	(2,500)	器面はあまり窪みがない。裏面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径11mm、短径9mm、深さ3mmである。	埋壁の南 西
123-2 115	凹 石	片	細雲母石片岩	(12.4)	7.8	2.9	(400)	両面に3個の凹みがある。凹みの平均は長径15mm、短径13mm、深さ3mmである。	埋壁の北 東



第123図 38号配石遺構出土石器

4 ————— 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第124～129図、PL. 115)

位置 Fm・Fn-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から34m50cm (炬までの距離)、列石からは15mの所に位置している。北東方向に土壌群が存在している。

経過 0区 (昭和162年度調査区) から検出。9月上旬に遺構を確認した。多量の石と土器片が出土し、周辺を精査して竪穴住居跡となることが判明した。覆土上層から多量の石が出土しているために、1/10実測図を作成しながら調査を進めた。11月19日までには土層ベルトを残して床面まで調査が及んだ。ベルト除去後は遺物の取り上げを継続して行い、12月11日に全景写真と部分写真の撮影を実施した。床面からの遺物の出土はなく、覆土上層に集中していた。

重複 なし。

覆土 砂礫層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は以下のとおりである。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり、粘性はあまりない。石と土器片を多量に含んでいた。意識的な投棄を思わせる。

第2層 黄褐色砂礫層 壁の崩れ。

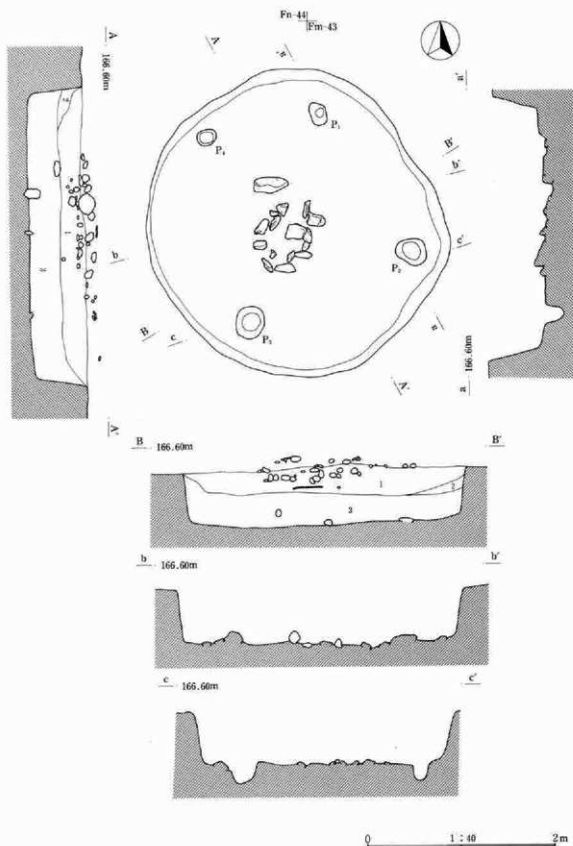
第3層 黒褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。石を混入。

覆土は自然堆積層であるが、覆土最上層から出土した多量の石と土器片は意識的な投棄と考えられる。

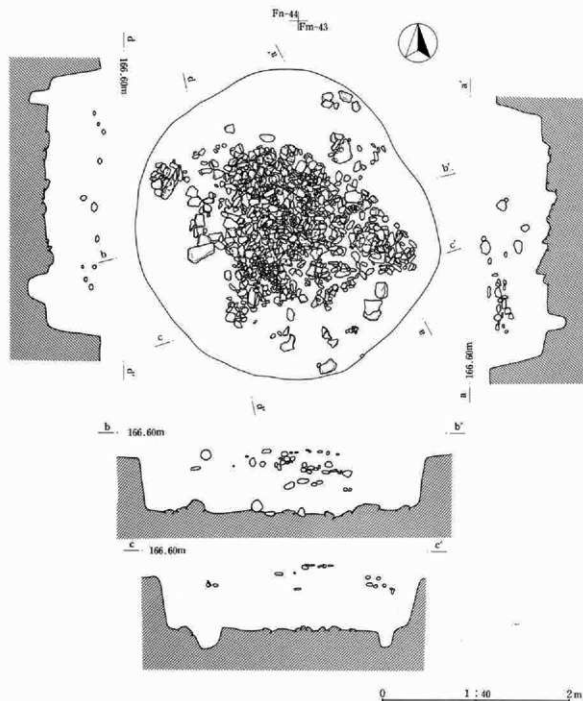
形状 竪穴住居跡であり、長径3m10cm、短径3mのほぼ円形を呈している。面積は約8㎡である。

盤高 確認面からの深さは60cm程であり、残存状況は比較的良かった。床面からほぼ垂直に立ち上がっている。

床面 砂礫層を7cm～10cmほど掘り込み、この部分に黒褐色土を埋めて床面としていた。また床面は全体的に凹凸が認められる。



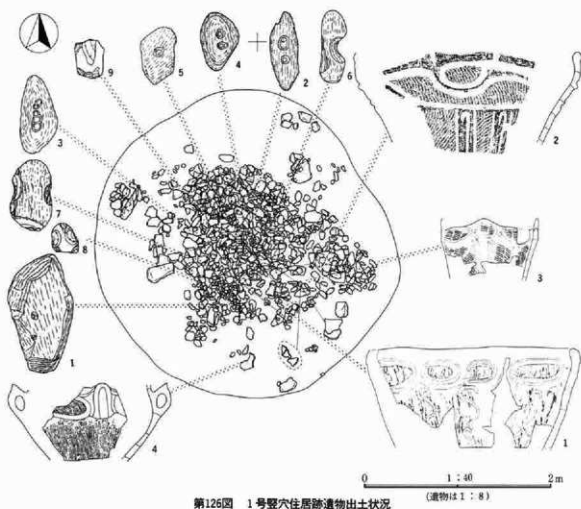
第124図 1号竪穴住居跡



第125図 1号竪穴住居跡

周溝 検出できなかった。

柱穴 4個のピットが検出された。P₁は長径25cm・短径18cm・深さ9cm。P₂は長径33cm・短径28cm・深さ22cm。P₃は長径35cm・短径31cm・深さ20cm。P₄は長径21cm・短径17cm・深さ16cmである。P₁とP₄が小さく浅いピットで、P₂とP₃が大きく深い。またピットの間隔もP₁・P₄間距離125cm、P₂・P₃間距離は190cmとP₁・P₄間距離よりも長いことから判断して、P₁とP₄の間が出入り口部に該当するものであろうか。ちなみにP₁とP₂間距離は175cm、P₃とP₄間距離は200cmを測る。



第126図 1号竪穴住居跡遺物出土状況

炉 石囲い炉であろう。床面のほぼ中央から検出された。長径80cm・短径60cmの規模であるが、明瞭な石囲い炉としてとらえることはできなかった。焼土、炭化物等は検出されていない。

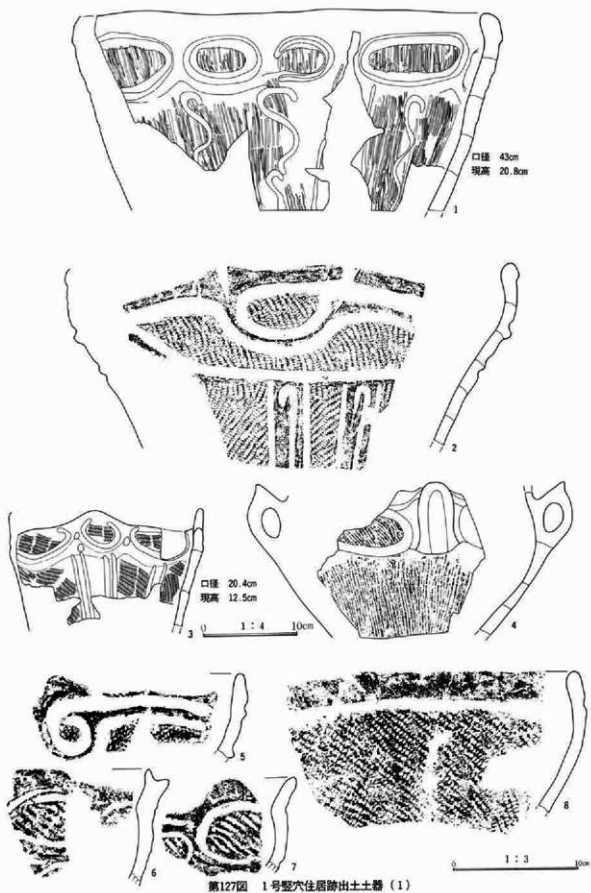
遺物出土状況 土器片は実個体4点と、口縁部22点、胴部132点、底部2点の計160点が覆土最上層から出土している。接合関係も認められる。加曾利E3式土器を主体としていた。

石器は多孔石1点、凹石4点、打製石斧2点、磨製石斧は未製品2点が出土している。土器片と同様に覆土最上層からの出土であった。このほかに749点の石が出土している。石材別点数は、網雲母石墨片岩214点(28.6%)、点紋網雲母石墨片岩84点(11.2%)、輝緑岩66点(8.8%)、珪石49点(6.5%)、点紋緑泥片岩・緑泥片岩各39点(各5.2%)、輝岩30点(4%)、点紋石墨緑泥片岩27点(3.6%)、その他の石材163点(21.8%)で、不明は38点(5.1%)を数えた。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形の竪穴住居跡である。

1号堅穴住居跡土器調査表

図番 Pl.	部位	①土質 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
127-1 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はぶい褐色。	口縁部に隆帯と沈線による楕円、円形等の文様が描かれ、赤線が施されている。 胴部には赤線と沈沈線が施されている。		覆土上層
127-2 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に4単位の突起が付けられる。口縁部に隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はR ↑横紋。胴部にはR ↑縦紋。沈線と煎手状の沈線が垂下している。土器面は柔軟で押圧が強い。		覆土上層
127-3 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は黒褐色。	口縁部に4単位の突起が付けられる。口縁部に隆帯と沈線による楕円、円形等の文様が描かれ、縄文施文。原形はR ↑横紋。胴部には沈線を垂下し、R ↑施文。		覆土上層
127-4 115	口縁 ~胴 部片	①細粒の砂を混入 ②良	浅鉢形土器の口縁~胴部。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に無文帯をおき、胴部に横紋把手をもつ。肩部に楕円の文様を描き、縄文施文。原形はR ↑横紋がし、胴部には縦位の赤線が施されている。土器面は柔軟。		覆土上層
127-5 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は褐色。	口縁部に突起を有する。口縁部に隆帯と沈線による褐色き、楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はL ↑。		覆土上層
127-6 115	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。	口縁部に突起を有する。口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はR ↑横紋がし。		覆土上層
127-7 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	口縁部に突起を有する。口縁部に沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はR ↑横紋がし。		覆土上層
127-8 115	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	口縁部に突起を有する。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線を垂下させる。以下縄文施文。原形はL ↑横紋がし。		覆土上層
128-9 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原形はL ↑。		覆土上層
128-10 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	縄文施文。原形はR ↑。		覆土上層
128-11 115	口縁 ~胴 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚5~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は黒褐色。	口縁部に沈線による文様が描かれ、原形はR ↑。胴部は沈線を垂下し、R ↑縦紋がし。押圧が強い。		覆土上層
128-12 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はぶい褐色。	隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はR ↑。		覆土上層
128-13 115	口縁 ~胴 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は灰黄褐色。	口縁部は隆帯と沈線による文様。胴部はR ↑縦紋がし。沈線を垂下している。 外面に煤が付着している。		覆土上層
128-14 115	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	隆帯と沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形はL ↑。		覆土上層
128-15 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。原形はL ↑縦紋がし。土器面は柔軟で押圧が強い。外面に煤が付着している。		覆土上層
128-16 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は明赤褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原形はR ↑縦紋がし。 押圧が強い。		覆土上層
128-17 115	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は荒れている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原形はR ↑。沈線と煎手状の沈線を垂下している。		覆土上層
128-18 115	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は暗褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原形はL ↑縦紋がし。		覆土上層





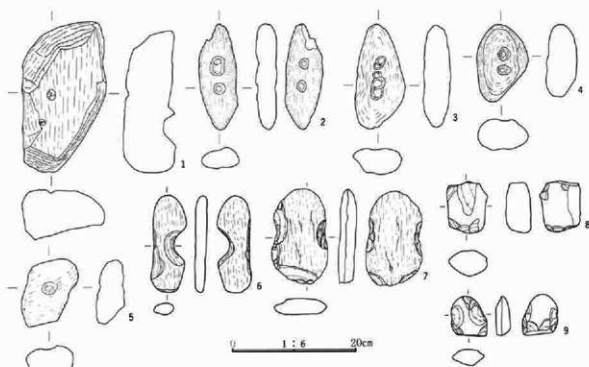
第128図 1号竪穴住居跡出土土器(2)

0 1:3 10cm

1号竪穴住居跡土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
128-19 115	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	沈線を下下。 縦文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 外面に煤が付着している。	覆土上層
128-20 115	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は褐色。	沈線を下下。 縦文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 外面に煤が付着している。	覆土上層
128-21 115	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚13~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は赤褐色。	沈線を下下。 縦文施文。原体はL〔下〕横転がし。 沈線による文様が描かれている。	覆土上層
128-22 115	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	沈線による文様が描かれ、縦文施文。原体 はL〔下〕縦転がし。	覆土上層
128-23 115	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は褐色。	縦文施文。原体はR〔上〕。	覆土上層

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第129図 1号壑穴住居跡出土石器

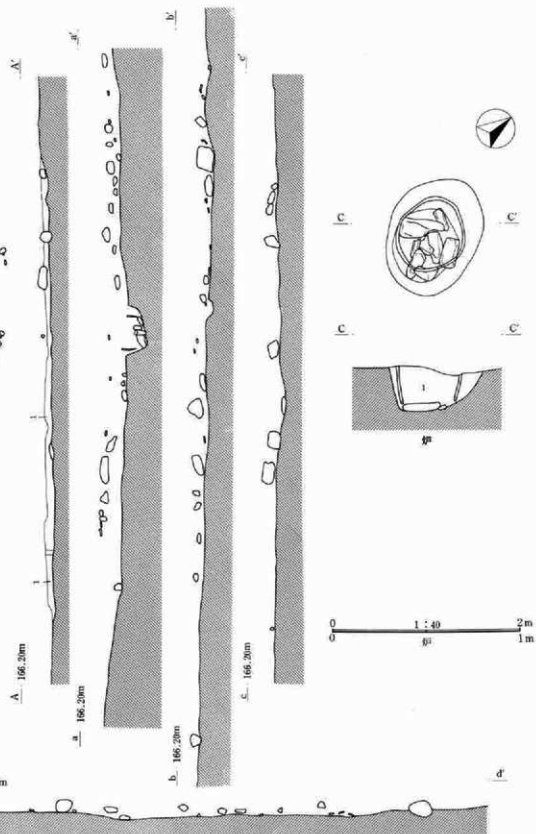
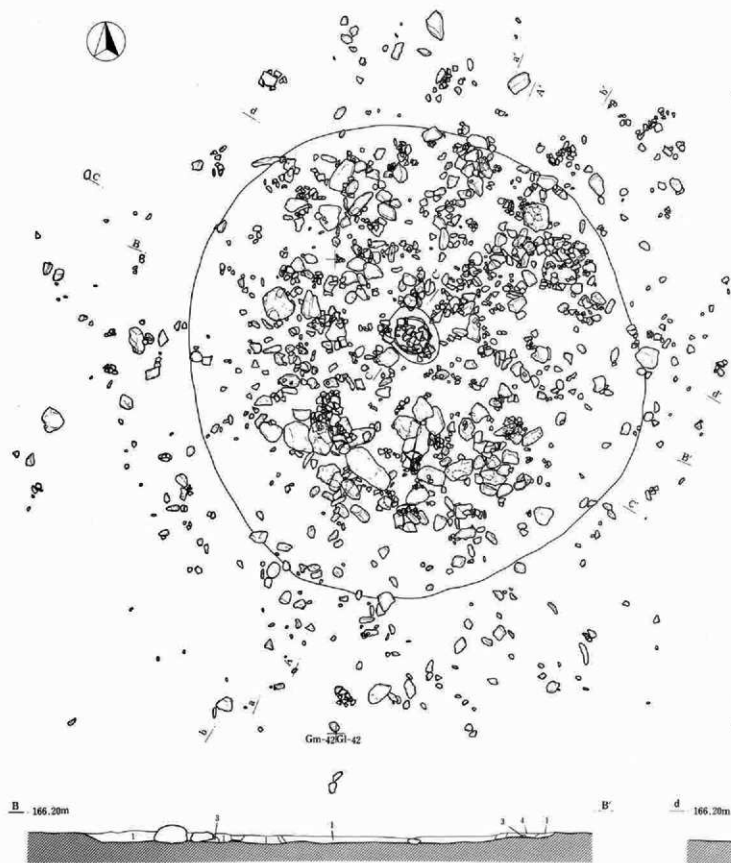
1号壑穴住居跡石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
129-1 115	多孔石	一部欠損	緑泥石塵片岩	24.1	(13.4)	(6.2)	(3,700)	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、短径12mm、深さ5mmである。	覆土最上層
129-2 115	凹石	ほぼ球形	点紋緑泥片岩	16.9	6.1	3.4	500	両面に4個の凹み。最大の凹みは長31mm、短23mm、深5mm。最小は長18mm、短15mm、深2mmで、平均は長22mm、短18mm、深3mm。	覆土最上層
129-3 115	凹石	完形	緑泥片岩	16.7	7.8	4.2	800	片面に5個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、深4mm。最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。	覆土最上層
129-4 115	凹石	完形	点紋緑泥片岩	12.1	8.3	4.9	700	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径22mm、短径17mm、深さ1mmである。	覆土最上層
129-5 115	凹石	完形	網雲母石塵片岩	10.8	9.0	4.2	510	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短径20mm、深さ4mmである。	覆土最上層
129-6 115	打製石片	完形	網雲母石塵片岩	15.3	5.6	1.8	236	分割(1)。一側縁のみ内湾。	覆土最上層
129-7 115	打製石片	完形	点紋網雲母石塵片岩	14.8	9.1	2.7	580	分割(1)。両側の内湾の度合小さい。	覆土最上層
129-8 115		両端欠損	角閃岩	(8.2)	6.5	4.1	(340)	粗削り途中(?)。	覆土最上層
129-9 115		刃部欠損	輝緑岩	(6.5)	5.7	2.4	(121)	粗削り途中。両面に一部自然面残る。	覆土最上層

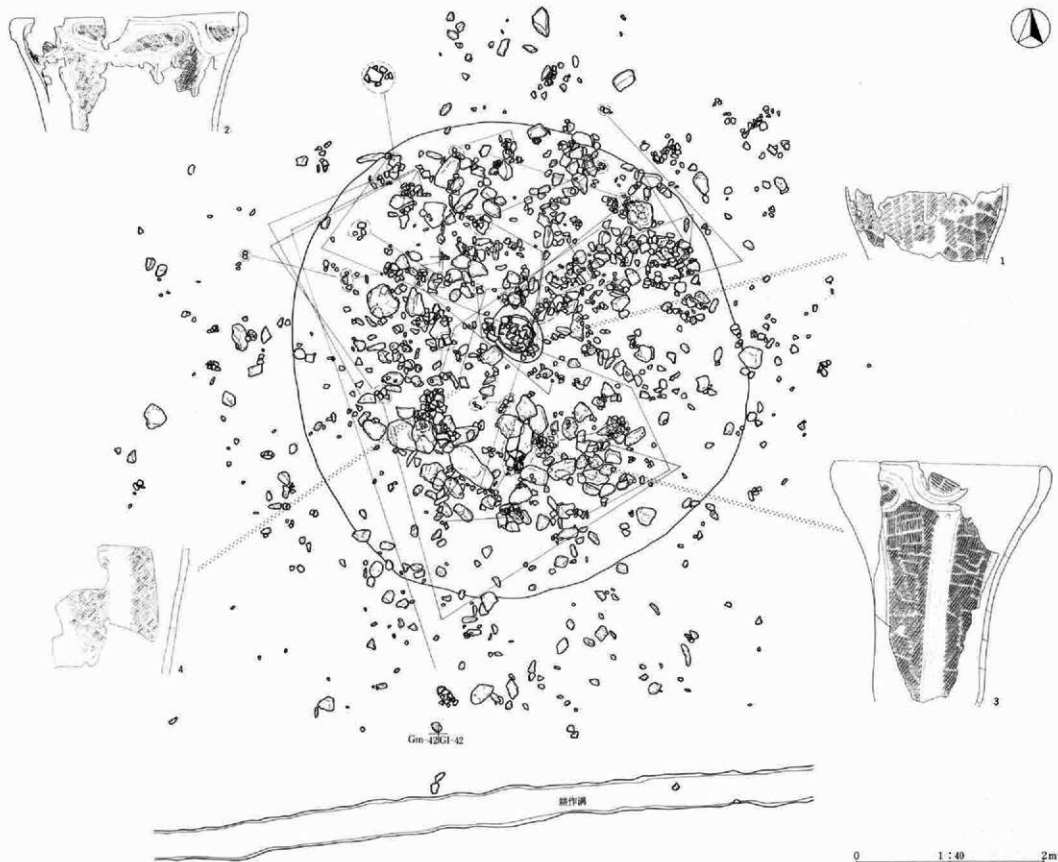
2号壑穴住居跡 (第130~140図、PL. 51~53、115~117)

位置 GI・Gm-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西123m (炉までの距離)、列石からは103mの所、36号配石遺構の西22mに位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月下旬から調査を開始した。多量の石と土器片が出土し、配石遺構として調査を始めた。多量の遺物のために1/10実測図を作成しながら掘り下げ、9月10日には遺物出



第130图 2号竖穴住居跡



第131图 2号整穴住居跡土器出土状況



第132图 2号整穴住居跡石器出土状况

土状況の写真撮影と部分写真撮影を実施した。遺物出土状況からの判断では、この遺構が竪穴住居跡になるものとは想像もつかなかった。その後、遺物を取り上げる過程で埋壺の検出と、土層観察から遺構全体に若干の掘り込みを有することが判明し、当遺構は竪穴住居跡となった。

重複 なし。

覆土 黄褐色土層を掘り込んで竪穴住居跡は構築され、そこに堆積した覆土は以下のとおりである。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を少量含む。

第2層 茶褐色土層 やや固く締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を少量含む。

第3層 黄褐色土層 黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。

第4層 黒褐色土層 締まり悪く、粘性はない（攪乱）。

覆土は自然堆積層であるが、出土した多量の遺物は意識的の投棄と考えられる。1号竪穴住居跡の遺物出土状況と共通している。

形状 竪穴住居跡であり、長さ5m、短径4m80cmのほぼ円形を呈している。面積は約19㎡である。

壁高 確認面からの深さは4cm～16cm程であり、残存状況は悪かった。

床面 凹凸が認められ全体的に軟弱である。踏み固められた良好な床面はほとんど検出できなかった。

周溝 なし。

柱穴 検出できなかった。

炉 埋壺炉であり、床面のほぼ中央から検出された。炉の規模は長さ65cm・短径49cm・深さ24cmであり、加曾利E3式土器の胴部が正位状態で埋設されていた（第133図1）。覆土は暗褐色土層であった。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりよい。粘性がある。黄褐色粘質土粒子とブロック、焼土粒子、炭化物粒子を含んでいる。

炉体土器の依存状況は悪かった。

遺物出土状況 炉体土器1個体、大形土器片3個体の他に、口縁部99点、胴部651点、底部10点の計760点の土器片が覆土中から満遍なく出土している。接合関係も広範囲に認められる。加曾利E3式土器を主体としていた。

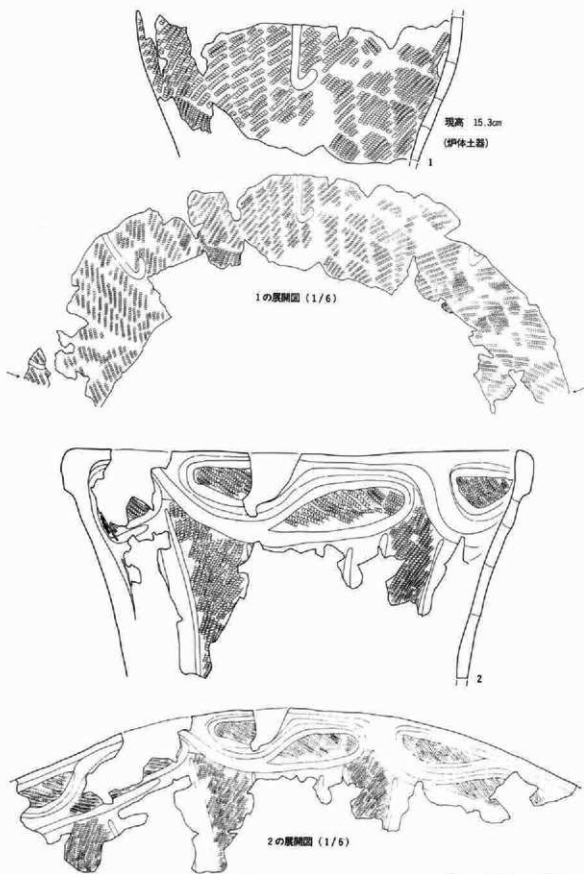
石器は石皿3点、多孔石11点、凹石5点、磨石1点、敲石1点、打製石斧3点、磨製石斧3点が出土している。このほかに、663点の石が出土している。石材別点数は、網雲母石墨片岩164点(24.7%)、輝緑岩97点(14.6%)、点紋網雲母石墨片岩89点(13.4%)、点紋緑泥片岩38点(5.7%)、緑泥片岩25点(3.8%)、珪石21点(3.2%)、網雲母緑泥石墨片岩15点(2.3%)、網雲母緑泥片岩13点(2%)、その他の石材140点(21.1%)であり、不明は61点(9.2%)を数えた。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形の竪穴住居跡である。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

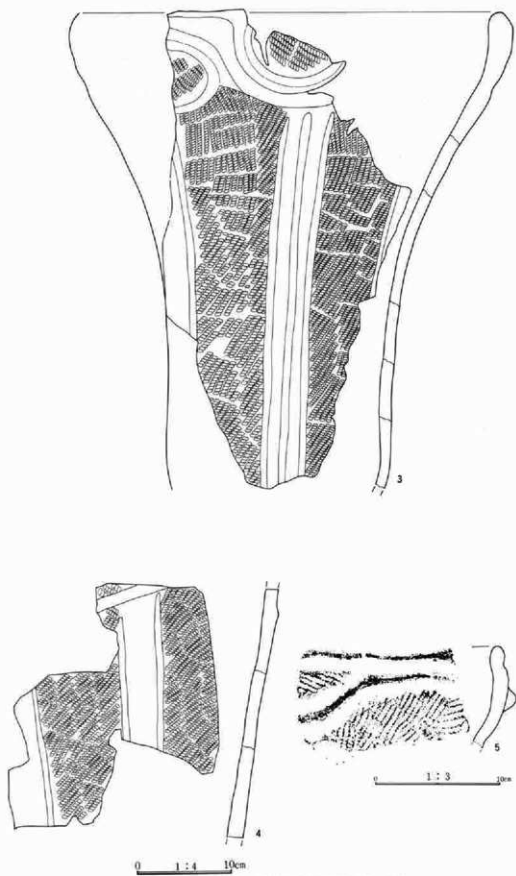
2号竪穴住居跡土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
133-1 115	胴部	①中粒の砂を混入 ②不良	深鉢形土器の胴部中央。両端を欠損。 器厚9~11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。	縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を通して。 内外面とも荒れている。		胴体土器 沈線を通して。
133-2 116	口縁 ~胴部	①粗粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁~胴部片。 器厚10~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による横円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。 胴部はR〔上〕縦転がし。 沈線を垂下している。		覆土
134-3 116	口縁 ~胴部	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の大形破片。器厚10~24mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。胴部はR〔上〕縦・横転がし。沈線を垂下している。		覆土
134-4 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴部片。器厚12~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は黒褐色。	縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。		覆土
134-5 116	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。	隆帯と沈線による横円等の文様が描かれ、縄文施文。原体R〔上〕。		覆土
135-6 116	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部に内湾する。口縁部に隆帯と沈線による横円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕横・斜め転がし。 胴部はR〔上〕横・斜め転がし。 沈線を垂下。		覆土
135-7 116	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に内湾する。口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。土器面は柔軟。		覆土
135-8 116	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縦手状の沈線が施されている。		覆土
135-9 116	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR〔上〕。		覆土
135-10 116	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR〔上〕縦転がし。		覆土
135-11 116	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明黄褐色。	口縁部に内湾する。口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕。条線も施されている。外面に煤が付着。		覆土
135-12 116	口縁 ~胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚12~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部にR〔上〕横転がし。胴部にR〔上〕横・縦転がし。沈線を垂下している。		覆土
135-13 116	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰褐色。	口縁部はやや内湾する。口縁部に隆帯と沈線による渦巻き等の文様を描き、縄文施文。原体R〔上〕横転がし。		覆土
135-14 116	口縁 ~胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に隆帯と沈線による横円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 胴部はR〔上〕縦転がし。沈線を垂下。		覆土
135-15 116	口縁 ~胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の口縁~胴部片。器厚14~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。	口縁部は沈線による横円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。		覆土
135-16 116	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。		覆土
135-17 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。		覆土
136-18 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面は明黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。		覆土



第133図 2号竪穴住居跡出土土器 (1)

0 1:4 10cm



第134図 2号竪穴住居跡出土土器(2)

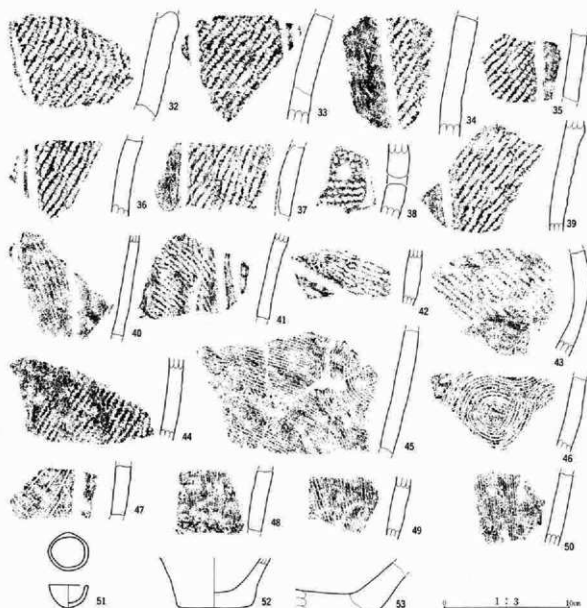


第135图 2号竖穴住居跡出土土器(3)

1 : 3



第136図 2号竪穴住居跡出土土器(4)



第137図 2号竪穴住居跡出土土器 (5)

2号竪穴住居跡土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
136-19	胴部 116	①中粒の砂を混入 ④やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	覆土
136-20	胴部 116	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	覆土
136-21	胴部 116	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-22	胴部 116	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

2号壜穴住居土器観察表

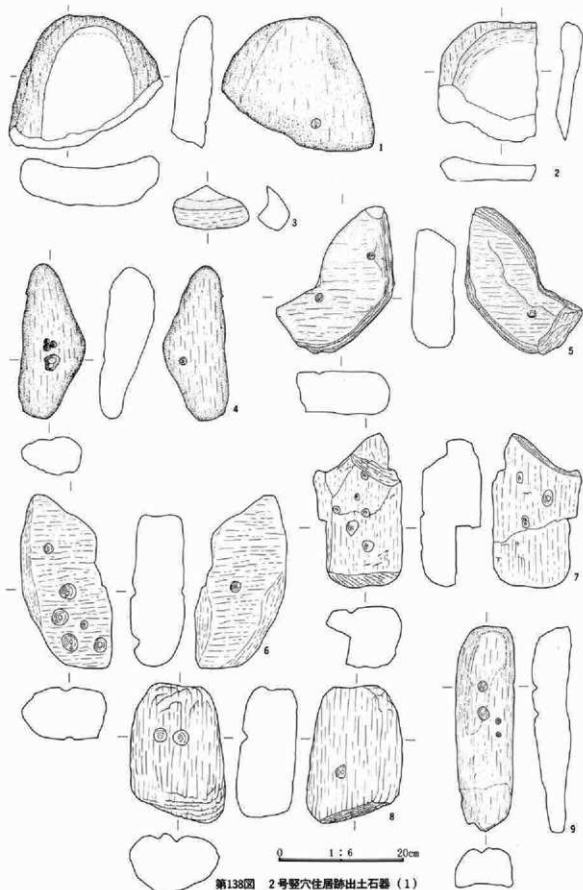
図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (塗 容状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
136-23	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm, 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい橙色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。外面に煤が付着している。	覆土
136-24	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm, 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-25	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm, 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-26	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm, 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-27	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm, 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面に煤が付着している。	覆土
136-28	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm, 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-29	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm, 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄灰褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-30	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm, 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
136-31	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17~20mm, 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟。	覆土
137-32	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚19mm, 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-33	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-34	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-35	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい橙色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-36	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-37	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm, 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-38	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm, 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 内外面から径9mmの補修孔が作られている。	覆土
137-39	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-40	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm, 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(下)縦転がし。	覆土
137-41	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm, 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は灰黄褐色。	沈線を下下。 縄文施文。原体はL(下)縦転がし。	覆土

2号竪穴住居跡土器観察表

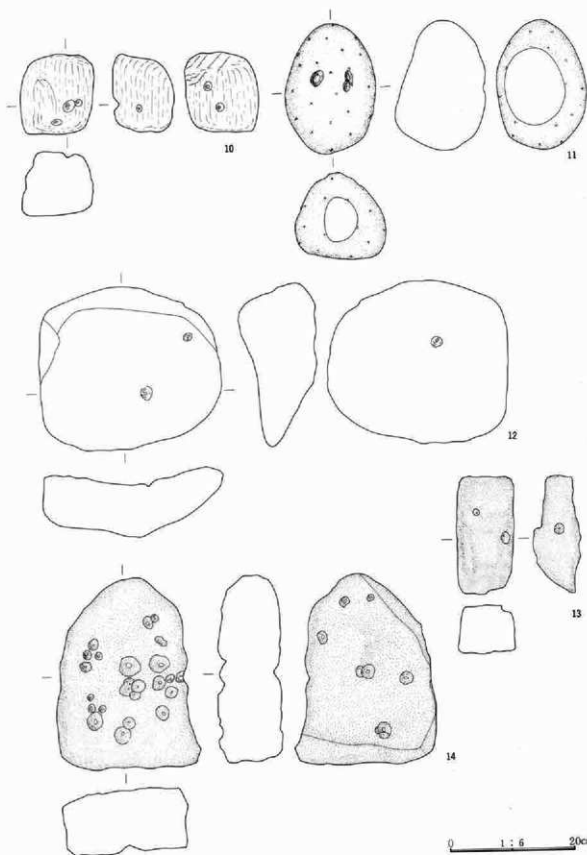
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (備 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
137-42 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。	縄文施文。原体はL(ノ)縦紋がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	覆土
137-43 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はよい褐色。	縄文施文。原体はR(ノ)横紋がし。	覆土
137-44 116	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色。内面はよい黄褐色。	縄文施文。原体はR(ノ)縦紋がし。	覆土
137-45 116	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面はよい黄褐色。	7本一単位の糸線による文様が描かれている。	覆土
137-46 116	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はよい黄褐色。	糸線による円形等の文様が描かれている。	覆土
137-47 116	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	沈線による文様が描かれている。	覆土
137-48 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はよい黄褐色。	糸線が描かれている。	覆土
137-49 116	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はよい褐色。	糸線が描かれている。	覆土
137-50 116	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	糸線が描かれている。	覆土
137-51 116	小型 土器	①細粒の砂を混入 ②良	口径3cm。器厚2.5cm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。		覆土
137-52 116	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径57mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面は灰褐色。	底部周縁が磨耗している。	覆土
137-53 116	底部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚15~19mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面はよい褐色。		覆土

2号竪穴住居跡石器観察表

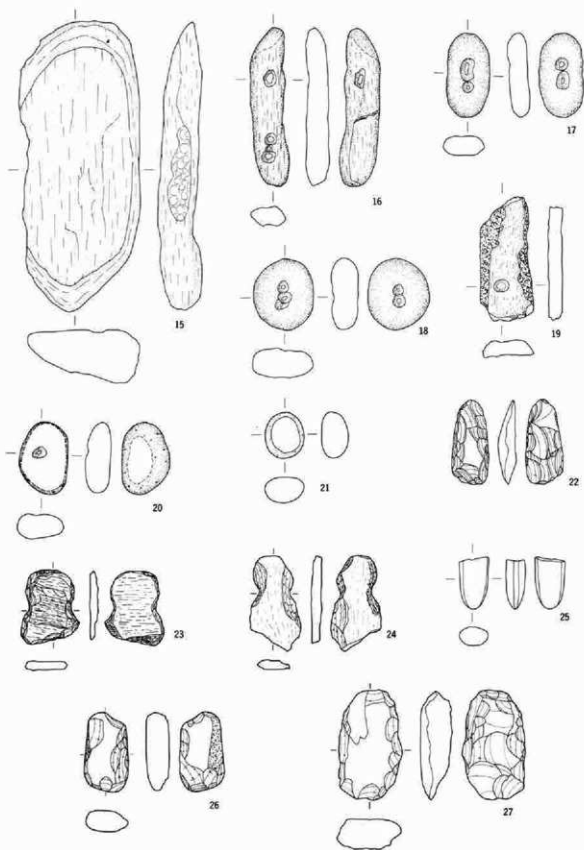
図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
138-1 116	石 皿 瓦	点紋緑泥片岩	点紋緑泥片岩	(21.1)	(24.3)	7.9	(4,900)	石皿の破片。窪みは浅い。裏面に多孔石と同様の凹み1個がある。凹みは長さ15mm、短径14mm、深さ5mm。裏面全体は焼けている。	遺構南
138-2 116	石 皿 瓦	点紋絹雲母石墨片岩	点紋絹雲母石墨片岩	(18.9)	(16.0)	3.7	(1,500)	石皿の破片。窪みは浅い。	南壁際
138-3 116	石 皿 部分	点紋緑泥片岩	点紋緑泥片岩	(12.1)	(6.9)	4.8	(400)	石皿の破片。	覆土
138-4 116	多 孔 石	完形	点紋緑泥片岩	24.5	10.6	6.0	2,300	両面に5個の凹み。最大の凹みは長さ25mm、短径22mm、深6mm。最小は長さ9mm、短径9mm、深2mmで、平均は長さ14mm、短径13mm、深4mm。	覆土
138-5 116	多 孔 石	完形	点紋絹雲母石墨片岩	23.2	18.2	7.0	3,600	両面に3個の凹み。最大の凹みは長さ12mm、短径11mm、深5mm。最小は長さ12mm、短径7mm、深2mmで、平均は長さ12mm、短径9mm、深3mm。	覆土北端
138-6 116	多 孔 石	完形	絹雲母綠泥片岩	27.1	14.0	8.4	5,000	両面に7個の凹み。最大の凹みは長さ30mm、短径24mm、深11mm。最小は長さ13mm、短径12mm、深3mmで、平均は長さ21mm、短径20mm、深7mm。	覆土東南



第138図 2号竪穴住居跡出土石器(1)



第139图 2号整穴住居跡出土石器(2)



第140図 2号竪穴住居跡出土石器(3)

4 竪穴住居跡〈2号〉

2号竪穴住居跡石器類表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
138-7 116	多孔石	一部欠損	網雲母石墨片岩	24.3	14.3	9.7	(3,800)	両面に10個の凹み。最大の凹みは長25mm、短16mm、深8mm。最小は長10mm、短7mm、深4mmで、平均は長15mm、短12mm、深6mm。	遺構南に接合関係あり
138-8 117	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	22.0	15.0	9.5	4,900	両面に3個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深10mm。最小は長22mm、短16mm、深7mmで、平均は長23mm、短20mm、深8mm。	甌土北端
138-9 117	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	32.2	9.3	5.8	3,100	片面に4個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深10mm。最小は長8mm、短7mm、深2mmで、平均は長14mm、短12mm、深6mm。一部被蝕。	遺構北東端と南西端で接合
139-10 117	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	12.5	11.8	10.2	2,400	全面に6個の凹み。最大の凹みは長21mm、短17mm、深8mm。最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は長15mm、短12mm、深3mm。	伊に近接
139-11 117	多孔石 (丸石)	完形	斑紋岩	20.5	14.6	14.0	5,200	丸石に3個の凹み。凹みの平均は長22mm、短14mm、深3mmである。一部に磨耗痕がみられる。	甌土南端
139-12 117	多孔石	完形	輝緑岩	28.7	29.0	12.4	13,800	両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深4mm。最小は長14mm、短12mm、深2mmで、平均は長18mm、短15mm、深3mm。	中央南寄り
139-13 117	多孔石	一部欠損	砂岩	18.6	9.4	(7.6)	(1,600)	3個の凹みがある。最大の凹みは長17mm、短14mm、深5mm。最小は長10mm、短10mm、深2mmで、平均は長14mm、短13mm、深4mm。	甌土西南端
139-14 117	多孔石	完形	砂岩	30.0	22.8	10.2	9,200	両面に34個の凹み。最大の凹みは長33mm、短33mm、深14mm。最小は長10mm、短9mm、深5mmで、平均は長19mm、短16mm、深9mm。	甌土北
140-15 117		完形	点紋緑泥片岩	45.8	19.3	8.4	10,300	側面に敲打痕がみられる。	甌土南西
140-16 117	凹石	完形	点紋緑泥片岩	25.4	6.3	3.8	900	両面に5個の凹み。最大の凹みは長28mm、短20mm、深1mm。最小は長14mm、短18mm、深1mmで、平均は長22mm、短16mm、深1mm。一部被蝕。	遺構外
140-17 117	凹石	完形	砂岩	13.3	7.2	3.1	400	両面に4個の凹み。最大の凹みは長32mm、短20mm、深1mm。最小は長18mm、短18mm、深1mmで、平均は長24mm、短19mm、深1mm。	甌土南西
140-18 117	凹石	完形	砂岩	11.3	9.8	4.7	600	両面に5個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、深4mm。最小は長17mm、短12mm、深2mmで、平均は長19mm、短17mm、深2mm。	甌土西
140-19 117	凹石	完形	点紋緑泥片岩	19.6	8.8	2.8	840	1個の凹みがある。凹みの大きさは長径24mm、短径19mm、深3mmである。側面に敲打痕がみられる。	遺構外
140-20 117	凹石	完形	斑紋岩	11.4	8.0	4.0	500	1個の凹み。全面に磨耗痕がみられる。	甌土北端
140-21 117	磨石	完形	安山岩	7.2	6.4	4.2	200	器面に磨耗痕がみられる。	甌土北端
140-22 117	打製石斧	完形	熱変成岩	13.3	6.0	2.8	260	バチ(IIb)。	遺構外
140-23 117	打製石斧	完形	紅泥片岩	11.7	9.3	1.5	230	分割(1)。一方の刃部が軸に対して斜めに傾く。刃部再生の結果か。	伊の西
140-24 117	打製石斧	一部欠損	網雲母石墨片岩	(15.0)	8.1	1.9	(230)	分割(1)。	遺構外
140-25 117	磨製石斧	一部欠損	閃緑岩	(8.1)	(4.8)	3.0	(200)	磨き片断。	遺構外
140-26 117		完形	輝緑岩	12.5	7.2	3.7	540	粗割り途中。両面にかかりの自然面残る。	遺構南端
140-27 117		完形	輝緑岩	17.1	10.2	4.7	1,450	粗割り途中。片面に大きく自然面残る。	遺構北端

5 配石遺構

3号配石遺構 (第141~144回, PL. 54, 118)

位置 Er-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東55m20cm (遺構の中心までの距離)、2号配石遺構の南4mの所に位置している。

経過 1区 (昭和61年度調査区) から検出。6月後半に入り、1・2号配石遺構とほぼ同時に検出した。その規模は1・2号配石遺構に比べて小規模なものであった。実測図の作成、写真撮影の後、石を取り上げ下部の調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 遺構の一部は新しい耕作溝によって壊されている。

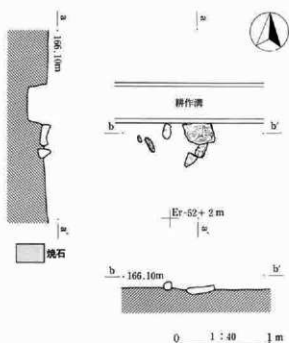
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 現状で6点の石が長径83cm、短径(47cm)の規模に配置されている。このなかには多孔石1点、凹石1点、砥石1点、焼石1点が含まれていた。配石の面積は0.33㎡である。小規模なために、これで配石が完結しているのかは判断しにくい。

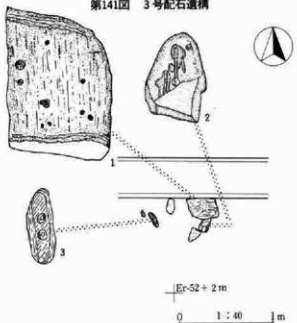
使用石材 5種類の石材が確認された。6点の石材別点数は、網雲母石片岩2点(33.3%)、点紋緑泥片岩1点(16.7%)、点紋網雲母緑泥片岩1点(16.7%)、斑岩1点(16.7%)、砂岩1点(16.7%)である。6点中4点(66.7%)が片岩類である。

石材重量 500g未満の石2点(33.3%)、1kg~2.5kg未満の石2点(33.3%)、500g~1kg未満の石1点(16.7%)、20kg~30kg未満の石1点(16.7%)である。

遺物出土状況 当遺構からは縄文土器の出土はないが、縄文時代の石器である多孔石・凹石・砥石が出土している。配石中の石器含有率50%、焼石は16.7%を占めている。



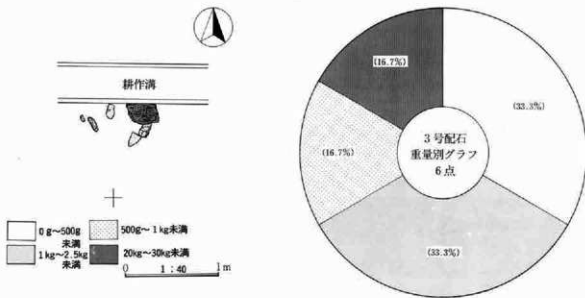
第141回 3号配石遺構



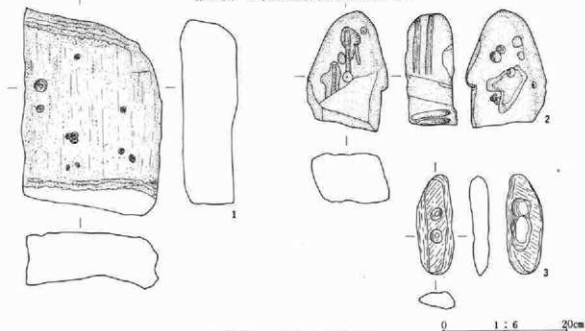
第142回 3号配石遺構遺物出土状況と石材別分布グラフ



5 配石遺構〈3号〉



第143図 3号配石遺構重量別分布とグラフ

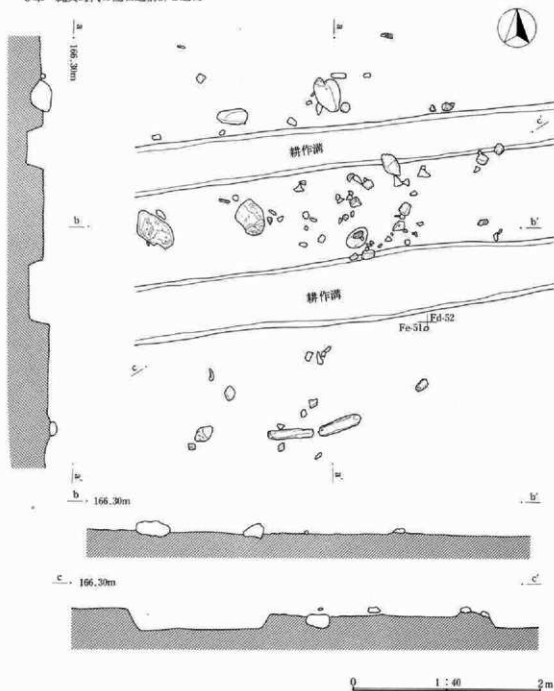


第144図 3号配石遺構出土石器

3号配石遺構石器明瞭表

図番 Pl.	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
144-1 118	多孔石	一部欠損	点紋網罟母緑花片岩	(32.7)	(22.1)	8.2	(10,300)	片面に11個の凹み。最大の凹みは長19mm、短17mm、深5mm。最小は長9mm、短7mm、深2mmで、平均は長11mm、短10mm、深3mm。 両面に13個の凹みがある。	配石の一部
144-2 118	砥石	完形	砂岩	18.8	13.1	8.2	2,000		配石の一部
144-3 118	凹石	完形	網罟母石黒片岩	15.8	6.0	3.0	600	両面に4個の凹み。最大の凹みは長55mm、短30mm、深2mm。最小は長20mm、短16mm、深2mmで、平均は長39mm、短23mm、深3mm。	配石の一部

所見 遺構周辺からは中期末の土器片が出土している。また多孔石等の在り方から判断して、縄文時代中期末の配石遺構であることは間違いない。



第145図 4号配石遺構

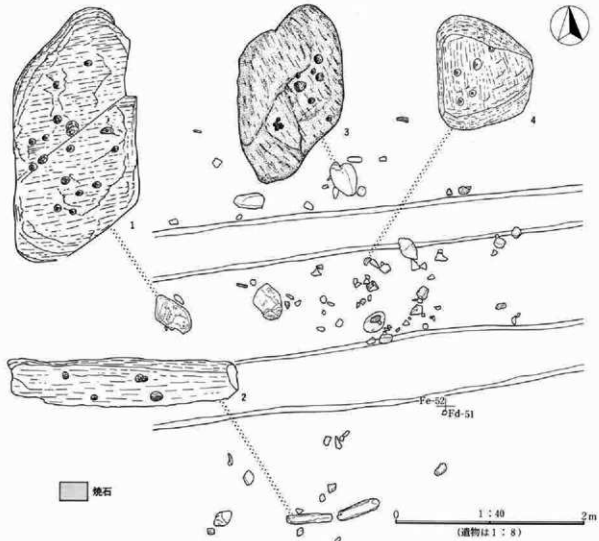
4号配石遺構 (第145～151図、PL. 54、118)

位置 Fd-52、Fe-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東28m (遺構の中心までの距離)、15号配石遺構の西7mの所に位置している。

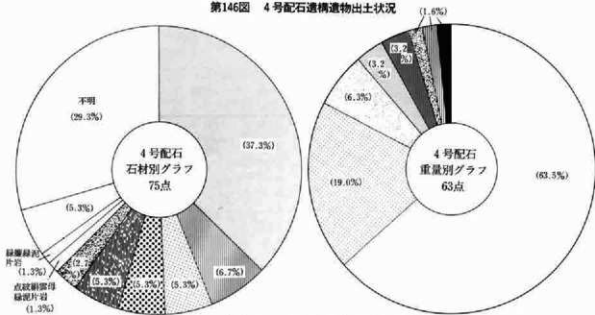
経過 Ⅰ区 (昭和61年度調査区) から検出。7月中旬に入って遺構を検出し、28日に写真撮影を実施した。遺構は新しい耕作溝によって壊されているが、この耕作溝の断面観察を行い、下部に遺構があるかどうかの確認を実施した。

重複 耕作溝によってその一部は壊されている。耕作溝は比較的最近のものである。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

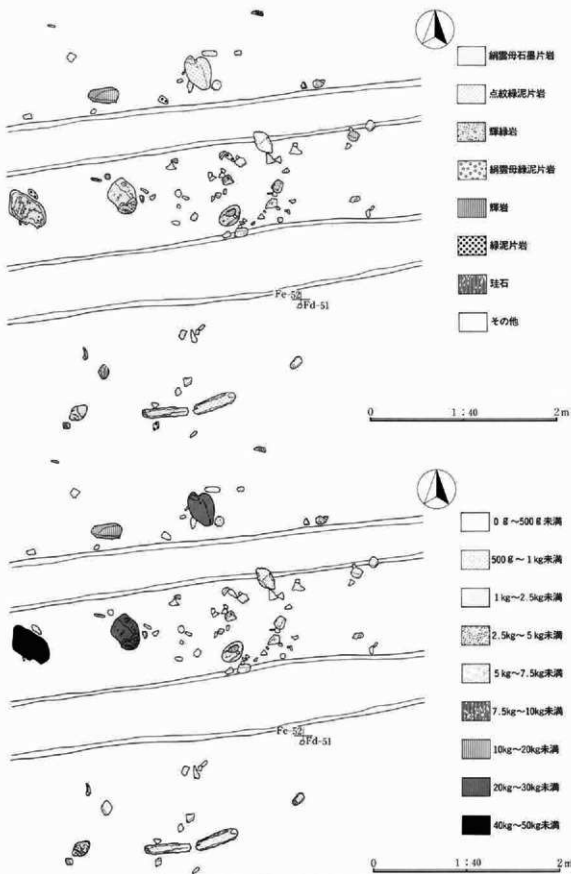


第146図 4号配石遺構遺物出土状況



第147図 4号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第148図 4号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

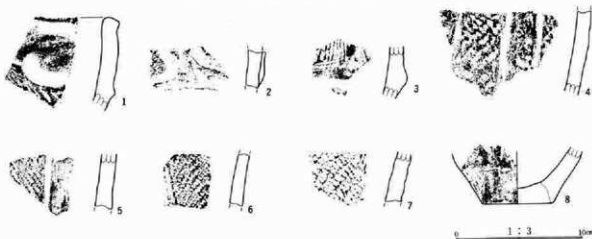
形状・配石状況 75点の石から構成されているが、その大きさは様々である。周囲をほぼ円形に石を配置しているが、その在り方はまばらであった。50号配石遺構と似ているが、その規模は長径4m、短径3m63cmである。また配石中心からやや北東よりに長径1m15cm、短径82cmの規模で石の集中する個所がある。配石の面積は約12.7㎡である。

使用石材 12種類の石材が確認された。75点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩28点(37.3%)、輝岩5点(6.7%)、点紋緑泥片岩・緑泥片岩・珪石各4点(各5.3%)、輝緑岩2点(2.7%)、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・変斑輝岩・閃輝緑岩各1点(各1.3%)である。不明は22点(29.3%)を数えた。不明の石を除いた53点中40点(75.5%)の石が片岩類である。多孔石4点のうち3点は絹雲母石墨片岩、1点が点紋緑泥片岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は63点である。その内訳は、500g未満の石40点(63.5%)、500g～1kg未満の石12点(19%)、5kg～7.5kg未満の石4点(6.3%)、1kg～2.5kg未満の石2点(3.2%)、20kg～30kg未満の石2点(3.2%)、2.5kg～5kg未満の石1点(1.6%)、10kg～20kg未満の石1点(1.6%)、40kg～50kg未満の石1点(1.6%)である。

遺物出土状況 縄文中期土器片が7点出土している。いずれも加曾利E3式土器である。また石器では多孔石4点のうち3点が周囲を区画する配石中からの出土であり、焼石5点のうち3点は内部の小配石中からの出土である。石器含有率は5.3%、焼石は6.7%を占めている。

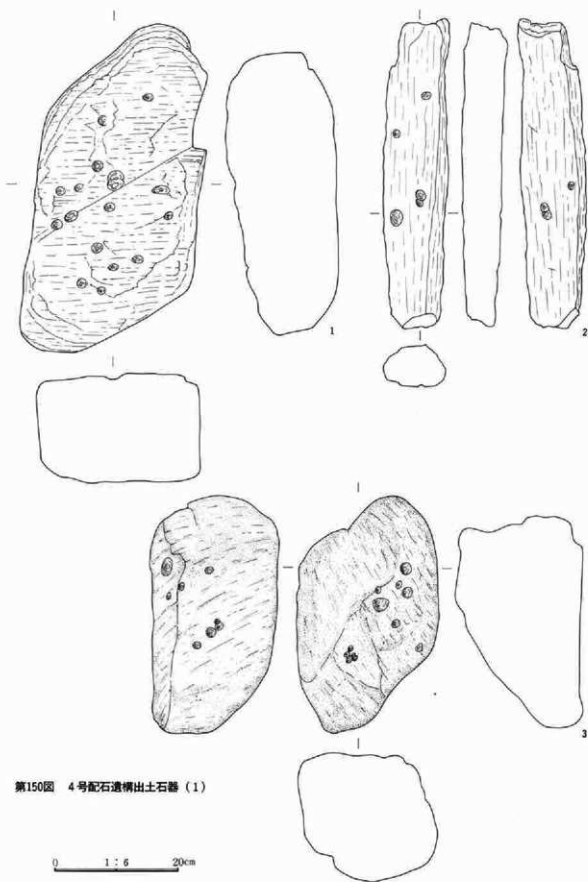
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



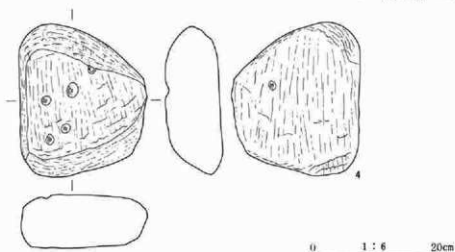
第149図 4号配石遺構出土土器

4号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
149-1 118	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に太い沈線による渦巻文を描く。	配石西部
149-2 118	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は黒褐色。	口縁部に太い沈線による渦巻文。地文に縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。	配石北部
149-3 118	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	原体はL〔?〕。	配石北部
149-4 118	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調は灰白色。内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。 配石中心部 沈線を垂下。	配石中心部



第150図 4号配石遺構出土石器(1)



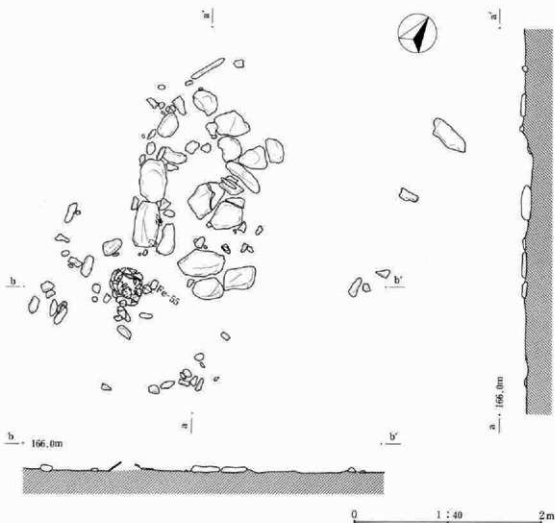
第151図 4号配石遺構出土石器(2)

4号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
149-5 118	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR 上縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
149-6 118	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	縄文施文。原体はR 上縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
149-7 118	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR 上縦転がし。 土器面は柔軟。	配石南部
149-8 118	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。直径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰白色。	外面に縦方向のミガキが行われている。	配石南部

4号配石遺構石器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
150-1 118	多 孔 石	完形	網雲母石墨片岩	51.4	29.5	17.6	40.100	片面に17個の凹み。最大の凹みは長27mm、短14mm、 深9mm。最小は長13mm、短10mm、深6mmで、平均 は長18mm、短13mm、深6mm。	配石西端
150-2 118	多 孔 石	完形	網雲母石墨片岩	48.6	11.6	7.4	5.600	両面に8個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、 深3mm。最小は長12mm、短9mm、深2mmで、平均 は長15mm、短12mm、深3mm。	配石南端
150-3 118	多 孔 石	完形	点紋緑泥片岩	37.3	22.6	20.2	26.100	両面に20個の凹み。最大の凹みは長25mm、短20mm、 深8mm。最小は長9mm、短6mm、深1mmで、平均 は長14mm、短11mm、深3mm。	配石北端
151-4 118	多 孔 石	完形	網雲母石墨片岩	24.2	20.4	9.2	6.800	両面に6個の凹み。最大の凹みは長23mm、短19mm、 深7mm。最小は長14mm、短12mm、深3mmで、平均は 長16mm、短14mm、深4mm。	配石中央 部付近



第152図 6号配石遺構

6号配石遺構 (第152～158図、PL. 55・56、119)

位置 Fe・Ff-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東40m（遺構の中心までの距離）、5号配石遺構の東に接して構築されていた。

経過 Ⅰ区（昭和61年度調査区）から検出。7月中旬に入り、5号配石遺構と同時に確認した。下旬までに遺構全体を検出。当初、5号配石遺構の一部と判断していたが、9月になり写真撮影と実測作業を行う過程で別遺構と判断せざるを得なかった。というのも当該遺構の配置が5号配石遺構の張り出し部とはなり得ないからであった。

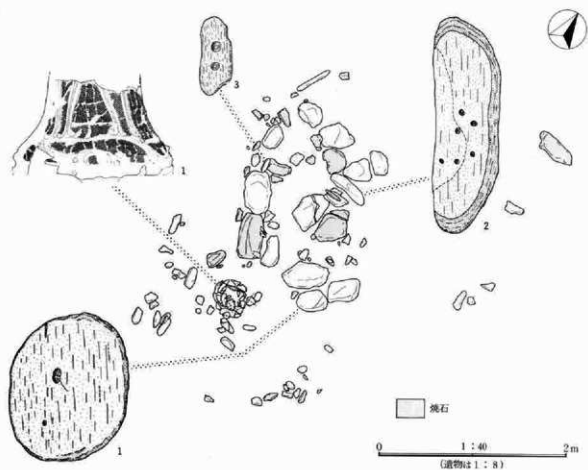
重複 5号配石遺構と接している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

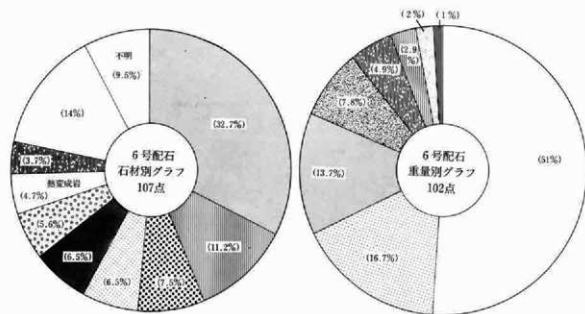
形状・配石状況 やや長方形に配石が施されている。その規模は長径2m20cm、短径1m30cmの範囲である。長方形の配石部分は比較的大きな石が使用され、その数は54点である。周辺の石を含めるとその数は107点になる。また南端の伏壘周辺には小石が配置されている。配石の面積は約10.7㎡である。

使用石材 19種類の石材が確認された。107点の石材別点数は、網雲母黒片岩35点(32.7%)、輝岩12点(11.2%)、緑泥片岩8点(7.5%)、点紋緑泥片岩・点紋網雲母緑泥片岩各7点(各6.5%)、網雲母緑泥片岩6点

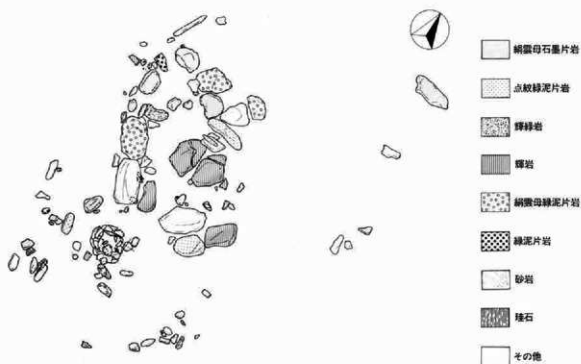
5 配石遺構〈6号〉



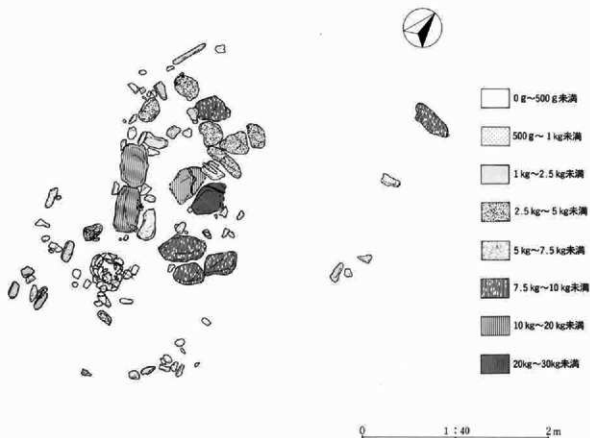
第153図 6号配石遺構遺物出土状況



第154図 6号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第155図 6号配石遺構石材別分布



第156図 6号配石遺構重量別分布

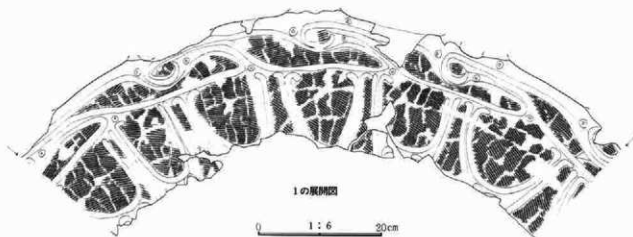
5 配石遺構 <6号>

(5.6%)、熱変成岩 5点 (4.7%)、珪石 4点 (3.7%)、斑輝岩 3点 (2.8%)、砂岩 2点 (1.9%)、絹雲母片岩・滑石片岩・角閃岩・紅簾絹雲母石墨片岩・ノーライト・熔結凝灰岩・黒曜石・絹雲母脆雲母片岩各 1点 (各0.9%) である。不明の石を除いた99点中67点 (67.7%) の石が片岩類である。多孔石 2点 は点紋緑泥片岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は102点である。その内訳は、500g未満の石52点 (51%)、500g～1kg未満の石17点 (16.7%)、1kg～2.5kg未満の石14点 (13.7%)、2.5kg～5kg未満の石 8点 (7.8%)、7.5kg～10kg未満の石 5点 (4.9%)、10kg～20kg未満の石 3点 (2.9%)、5kg～7.5kg未満の石 2点 (2%)、20kg～30kg未満の石 1点 (1%) である。全体的に重量のある石が使用されている。

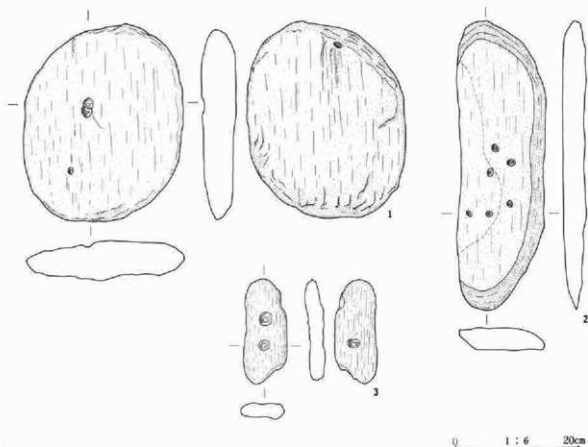
遺物出土状況 配石遺構の南端から加曾利 E 3 式の伏罨 (胴下半分欠損) が出土している (第157図 1)。また中期土器片 5点 も出土しているが、土器の出土は非常に少ない。石器では多孔石 2点、凹石 1点 が配石遺構を構成し、含有率2.8%である。また焼石は107点中17点の出土で15.9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利 E 3 式期の配石遺構である。



第157図 6号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



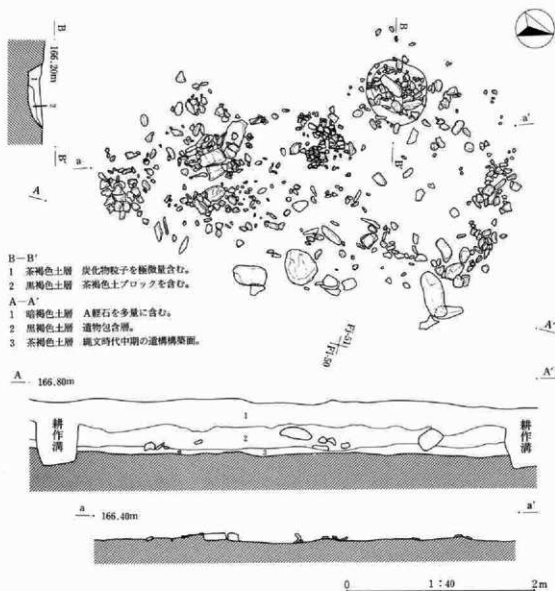
第158図 6号配石遺構出土石器

6号配石遺構土器観察表

国番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
157-1 119	胴下 半部 欠損	①細粒の砂を混入 ②良好	深鉢形土器の胴下半部欠損。 器厚10~15mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	口縁部は内湾し、口唇部に4単位の突起を 有する。口縁部に隆帯と比線による渦巻き、 横四等の文様が描かれ、縄文縷文。原体は LⅡ。胴部は比線による「U」字状の文様 が描かれ、LⅡは縦筋がし。	伏見 配石南西部

6号配石遺構石器観察表

国番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
158-1 119	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	31.1	25.5	6.7	7,450	両面に3個の凹み。最大の凹みは長17mm、短16mm、 深4mm、最小は長12mm、短8mm、深2mmで、平均 は長15mm、短12mm、深4mm。	配石南端
158-2 119	多孔石	残	点紋緑泥片岩	45.7	(14.3)	3.6	(4,500)	片面に6個の凹み。最大の凹みは長13mm、短11mm、 深2mm、最小は長10mm、短9mm、深2mmで、平均 は長12mm、短9mm、深2mm、一部被蝕。	配石中央
158-3 119	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	16.6	6.8	2.6	500	両面に3個の凹み。最大の凹みは長21mm、短19mm、 深1mm、最小は長18mm、短17mm、深2mmで、平均 は長20mm、短17mm、深2mm。	配石西端



第159図 7号配石遺構

7号配石遺構 (第159～166図、PL. 57・58、119)

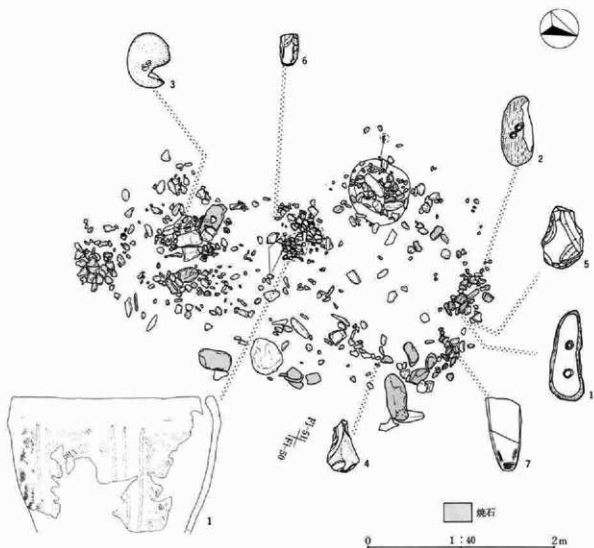
位置 Fj-50・51グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西18m (遺構の中心までの距離)、8号配石遺構の南東6mの所に位置している。20号配石遺構と同様に列石上に構築されている。

経過 Ⅰ区 (昭和61年度調査区) から検出。8月下旬から9月上旬にかけて、8号配石遺構とほぼ同時に確認された。9月中旬には遺構の実測作業を実施したが、その後、他遺構の調査に入ったために写真撮影は12月2日に行った。以後、12月の下旬まで遺物の取りあげ作業を実施した。

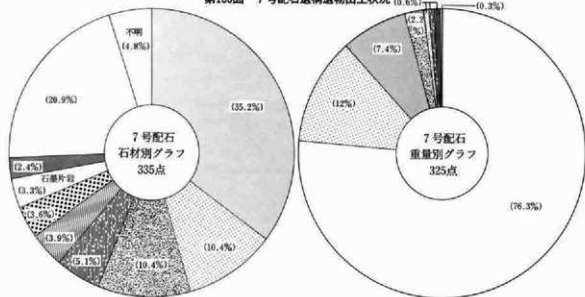
重複 当遺構は環状列石に組み込まれているものと思われる。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径4m50cm、短径2m30cmの柄鉢形を呈するようである。主体部は長径2m30cmの楕円形を呈するが、4個所の配石ブロックに分かれるようである。このうち1個所の配石下から土壌が検出された。土壌上面の規模は、長径70cm・短径68cm・深さ15cmである。他の配石下からは土壌は検出されていない。張

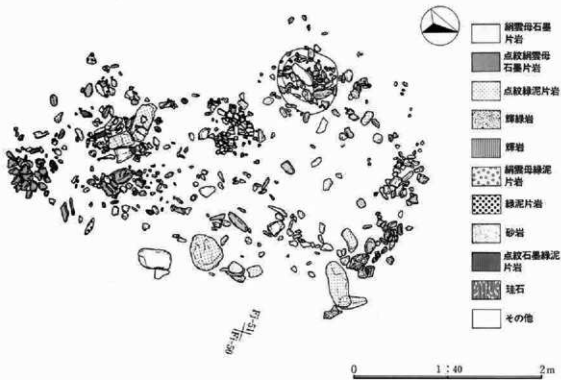


第160図 7号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1: 8)

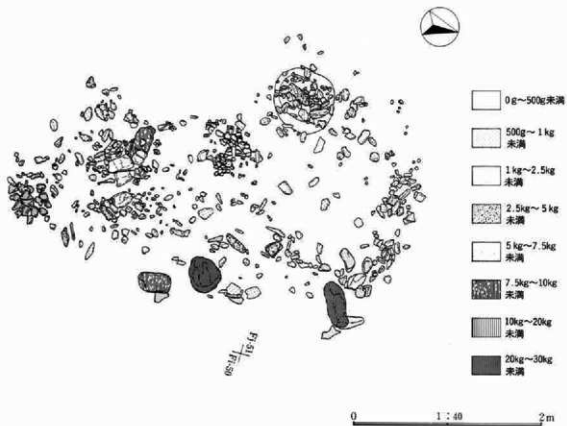


第161図 7号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

5 配石遺構〈7号〉



第162図 7号配石遺構石材別分布



第163図 7号配石遺構重量別分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

出し部は長径2m20cm、短径1m50cmである。この部分も3個所の配石ブロックに分かれるようであるが、配石下からは遺構の検出はない。当遺構は柄鏡形を呈するようであるが、主体部には炉はなく、また埋壘も存在しないことから判断して、住居にはならないと考えられる。配石の面積は約7.4㎡である。

使用石材 33種類以上の石材が確認された。335点の石材別点数は、網雲母石墨片岩118点(35.2%)、点紋緑泥片岩・輝緑岩各35点(各10.4%)、珪石17点(5.1%)、輝岩13点(3.9%)、緑泥片岩12点(3.6%)、石墨片岩11点(3.3%)、点紋網雲母石墨片岩・点紋石墨緑泥片岩各8点(各2.4%)、網雲母緑泥石墨片岩・胞雲母石墨片岩各7点(各2.1%)、チャート・網雲母石墨緑泥片岩・砂岩各6点(各1.8%)、熱変成岩4点(1.2%)、緑色珪質板岩3点(0.9%)、網雲母緑泥片岩・緑輝緑泥片岩・安山岩・紅輝網雲母片岩・点紋網雲母石墨緑泥片岩・珪岩各2点(各0.6%)、赤色珪質板岩・斑岩・滑石片岩・流紋岩・石墨緑泥片岩・網雲母片岩・閃緑岩・点紋網雲母緑泥片岩・石英安山岩・蛇紋岩・変斑珪岩各1点(各0.3%)であり、不明は16点(4.8%)を数えた。不明の石を除いた319点中224点(70.2%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は325点である。その内訳は、500g未満の石248点(76.3%)、500g～1kg未満の石39点(12%)、1kg～2.5kg未満の石24点(7.4%)、2.5kg～5kg未満の石7点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石2点(0.6%)、20kg～30kg未満の石2点(0.6%)、10kg～20kg未満の石1点(0.3%)である。500g未満の石の占める割合は高い。

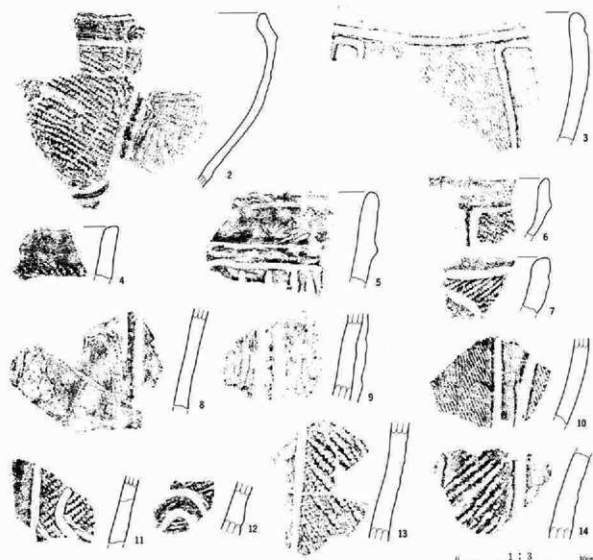
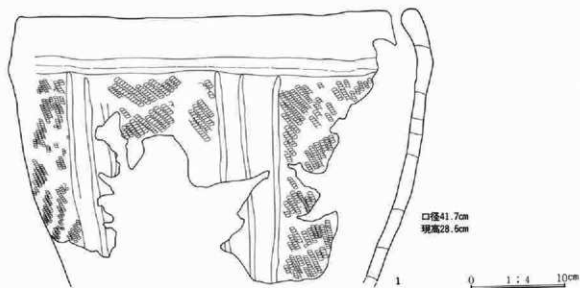
遺物出土状況 大形破片1点と89点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部11点、胴部77点、底部1点であり、配石の中心部から南端部にかけて出土している。加曾貝E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれている。石器では凹石3点、打製石斧2点、磨製石斧2点が出土しているが、多孔石の出土はない。配石中の石器含有率は2.1%である。また焼石は335点中78点の出土で、23.3%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾貝E4式期の配石遺構であり、環状列石の一部を構成するものであろう。

7号配石遺構土器調査表

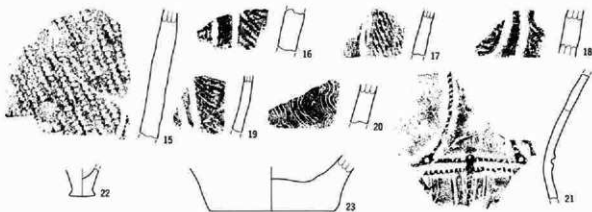
図番 PL	部位	①粒土 ②焼成(遺 体状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
164- 119	口縁 部～ 胴部	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁～胴部。器厚12～16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。それに接続する沈線を下下し、 区画内に縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦転がし。		配石中心部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、1条の微隆起帯を巡らせる。胴部 には微隆起帯による文様が描かれ、区画内に 縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦転がし。		配石南部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11～13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	口縁部に1条の沈線を通す。胴部には沈 線による「II」状の文様が描かれ、縄文 施文。原体はR(Ⅱ)縦転がし。器りは細かい。		配石中心部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部に無文帯、以下縄文施文。 原体はR(Ⅱ)横転がし。		配石西部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は濃い黄褐色。	口縁部が無文帯となり1条の隆帯を巡ら す。 胴部には沈線を下下し。		配石中心部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は暗赤褐色。	口縁部はやや内湾。口唇下に微隆起帯を巡 らせ、それに接続するように微隆起帯を下下 す。区画内にL(Ⅱ)を充塞。		配石南部
164- 119	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口唇下に沈線を通す。地文に縄文施文。 原体はL(Ⅱ)縦転がし。		配石北部

5 配石遺構〈7号〉



第164図 7号配石遺構出土土器(1)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

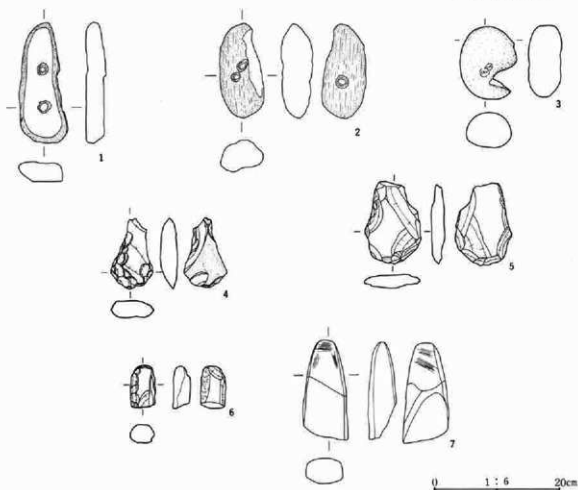


第165図 7号配石遺構出土土器(2)

7号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
164-8 119	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色。内面はぶい赤褐色。	微隆起帯を垂下させる。	配石南部
164-9 119	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。	隆帯を垂下させる。	配石南西部
164-10 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色。内面は黒褐色。	地文に縄文施文。沈線を垂下。 原体はL ;縦転がし。盛りは細い。 外面に隆帯を垂下。	配石中心部
164-11 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	11・12は同一個体。深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。内面は縦方向の調整。 外面の色調はぶい褐色。内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR ;縦転がし。 蛇行沈線を垂下。	配石中心部
164-13 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR ;縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
164-14 119	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色。内面は赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR ;縦転がし。 土器面は柔軟。 沈線を垂下。	一括
165-15 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はL ;縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
165-16 119	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL ;縦転がし。 沈線を垂下。 粘土接合面に刻目を施している。	配石中心部
165-17 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色。内面は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL ;縦転がし。 隆帯を垂下。	配石南西部
165-18 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや荒れている。 外面の色調は赤褐色。内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はL ;縦転がし。 沈線を垂下。	一括
165-19 119	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はL ;縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
165-20 119	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色。内面は灰褐色。	赤線を施している。	配石中心部
165-21 119	頸部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の頸部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面はぶい褐色。	口縁部が外反し頸部がくの字に折れる。刻 みを施した隆帯。胴部に沈線で文様を描き、 L ;縦転がし。縦之内式土器。	配石南西部
165-22 119	小型 土器	①細粒の砂を混入 ②良	底径20mm。 内外面の色調はぶい褐色。	土製品か?	配石南部
165-23 119	底部	①細粒の砂を混入 ②良	底径99mm。内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面は明赤褐色。	沈線を垂下。	配石中心部

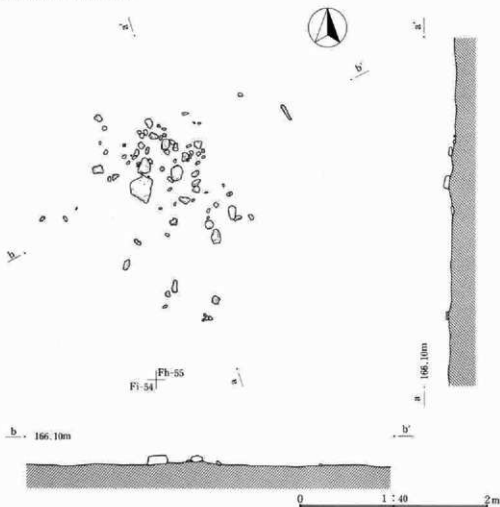
5 配石遺構〈7号〉



第166図 7号配石遺構出土石器

7号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
166-1 119	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	19.0	7.9	3.3	700	片面に2個の凹みがある。その平均は長径20mm、短径18mm、深さ1mmである。凹みのある面は磨耗している。	配石北端
166-2 119	凹 石	一部欠損	点紋緑泥片岩	14.9	(7.3)	5.0	(800)	両面に3個の凹みがある。最大凹みは長21mm、短20mm、深5mm。最小は長16mm、短15mm、深4mmで、平均は長20mm、短17mm、深4mm。全面赤化。	配石北端
166-3 119	凹 石	一部欠損	石英安山岩	11.6	8.6	5.5	(500)	片面に2個の凹みがある。その平均は長径12.5mm、短径12mm、深さ2mmである。	配石南端
166-4 119	打製石斧	完形	熟変成岩	10.9	7.0	2.7	188	バチ(II a)。背面に自然面を持つ。横長削片を素材とする。	配石東端
166-5 119	打製石斧	基部欠損	輝岩	(13.0)	8.9	2.3	(320)	バチ(II b)。	配石北端
166-6 119	磨製石斧	刃部欠損	輝緑岩	(6.7)	4.0	2.7	(130)	敲打途中。片面一部に敲打痕あり。	配石西端
166-7 119	磨製石斧	刃部欠損	輝緑岩	(15.7)	7.3	4.5	(610)	磨き段階。	配石北端



第167図 9号配石遺構

9号配石遺構（第167～172図，PL. 59、119・120）

位置 Fh・Fi-55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西39m30cm（遺構の中心までの距離）、10号配石遺構の南西3m50cmの所に位置している。

経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。8月下旬から9月上旬にかけて10・11号配石遺構とともに調査を開始した。10号配石遺構と同様に小規模な遺構である。写真撮影・実測作業終了後、石の取り上げを行い下部の調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

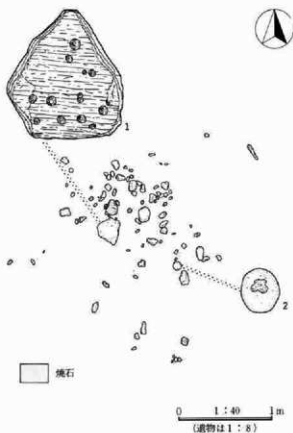
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径2m、短径1m10cmの範囲に石66点と土器片が散在しているが、多孔石を中心としたまとまりが認められる。配石の面積は約1.9㎡である。

使用石材 10種類の石材が確認された。66点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩34点（51.5%）、珪石3点（4.5%）、点紋緑泥片岩・輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点（各3%）、点紋絹雲母石墨片岩・安山岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点（各1.5%）であり、不明は17点（25.8%）を数えた。不明の石を除いた49点中44点（89.8%）の石が片岩類である。多孔石は絹雲母石墨片岩、敲石は安山岩を使用している。

石材重量 重量の判明している石は56点である。その内訳は、500g未満の石46点（82.1%）、500g～1kg未

5 配石遺構〈9号〉

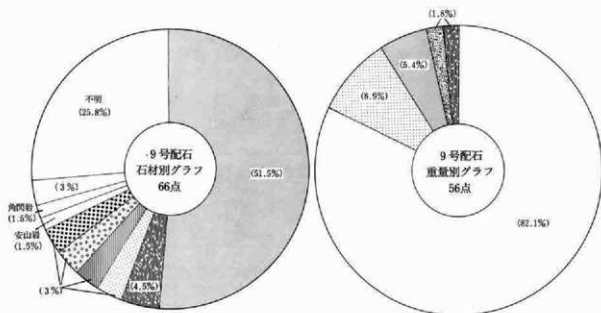


第168図 9号配石遺構遺物出土状況

満の石5点(8.9%)、1kg~2.5kg未満の石3点(5.4%)、2.5kg~5kg未満の石1点(1.8%)、7.5kg~10kg未満の石1点(1.8%)である。小規模な配石遺構であるために、500g未満の石の占める割合が他の配石遺構よりも高い。

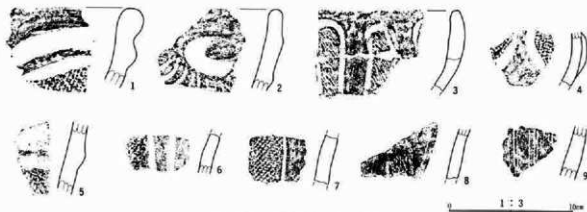
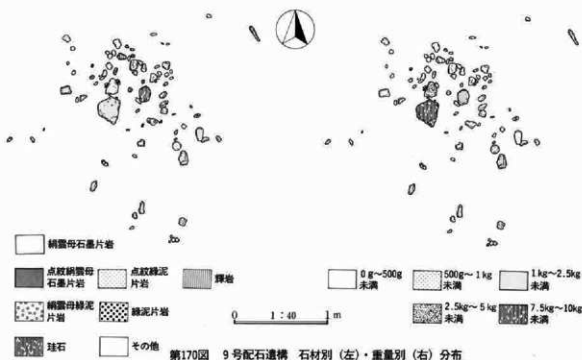
遺物出土状況 多孔石を中心に遺構が構成されている。43点の土器片が出土しているが、その部位別点数は口縁部12点、胴部31点である。加曾利E3式土器を主体としている。石器では多孔石1点、敲石1点が出土し、配石中の石器含有率は3%である。また焼石は66点中2点の出土であり、3%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第169図 9号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

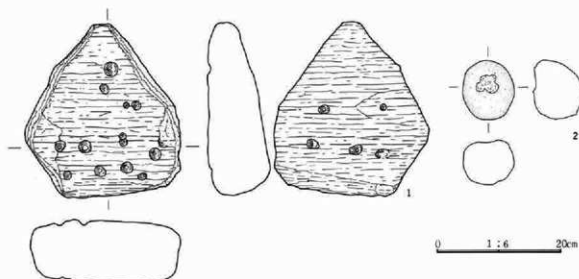


9号配石遺構土器観察表

図番	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
171-1	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。	口縁部に横帯及び太い沈線による渦巻き等の文様を描き、地文に縄文施文。 原体はR↑上横転がし。押圧が強い。	配石中心部
171-2	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に太い沈線による渦巻文を描く。	配石東南部
171-3	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は黒褐色。	口縁部は内湾する。沈線で「U」状の文様を配し、区画内にL↑↓縦転がし。縄の頭端を別の帯で縛る。	配石北東部
171-4	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい橙色。	口縁部はやや内湾し、沈線で文様を描く。 地文に縄文施文。原体はR↑上。	配石東南部
171-5	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は褐色。	口縁部が無文となり、1条の微細配帯を添らせる。以下、縄文を施文。 原体はL↑↓縦転がし。	一括

9号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位 ①粘土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)	出土状況
171-6 119	胴部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。	地に縄文施文。原体はR〔上〕板軀がし。 沈線を垂下。	一括
171-7 119	胴部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は赤褐色。	地に縄文施文。 原体はR〔上〕板軀がし。 沈線を垂下。	一括
171-8 119	胴部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。	胴部に沈線による「U」状の区画内に縄文を施す。原体はR〔上〕板軀がし。	一括
171-9 119	胴部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。	胴部に縦位の条線を施す。	一括



第172図 9号配石遺構出土石器

9号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
172-1 120	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	27.5	24.8	9.5	9,400	両面に19個の凹みがある。最大の凹みは長23mm、短22mm、深7mm。最小は長10mm、短9mm、深3mmで、平均は長17mm、短14mm、深5mm。	配石の一部
172-2 120	敲石	完形	安山岩	9.3	8.3	6.9	800	器面に著しい敲打痕がみられる。	配石東南端

10号配石遺構(第173~176図、PL. 59、120)

位置 Fh-55・56グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北41m80cm(遺構の中心までの距離)、11号配石遺構の南西約3m50cm、9号配石遺構の北東3m50cmの所に位置している。

経過 1区(昭和61年度調査区)から検出。8月下旬から9月上旬にかけて9・11号配石遺構とともに調査を開始した。小規模な配石遺構である。10・11号配石遺構とともに写真撮影、実測作業を行い石の取り上げを実施した。下部の調査も実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められない。

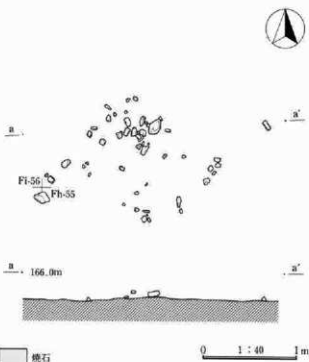
形状・配石状況 配石の規模は長径1m40cm、短径1m10cm程の規模であり、37点の石と19点の土器片から構成されていた。配石の面積は約1.9m²である。

使用石材 9種類の石材が確認された。37点の石材別点数は、網雲母石墨片岩19点(51.4%)、珪石6点(16.2%)、緑泥片岩3点(8.1%)、点紋緑泥片岩・点紋網雲母緑泥片岩各2点(各5.4%)、赤色珪質板岩・斑柵岩・流紋岩・蛇紋岩各1点(各2.7%)であり、不明は1点(2.7%)を数えた。不明の石を除いた36点中26点(72.2%)の石が片岩類である。

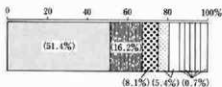
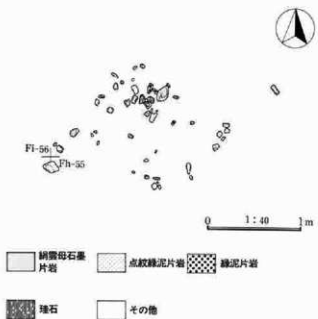
石材重量 37点の重量別点数は、500g未満の石33点(89.2%)、500g~1kg未満の石4点(10.8%)である。

遺物出土状況 縄文中期加曾利E3式土器を主体とした19点は配石遺構の周辺から出土している。また石器の出土はないが、焼石1点(2.7%)が出土した。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は

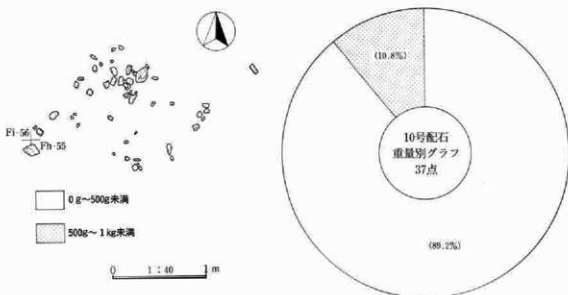


第173図 10号配石遺構



第174図 10号配石遺構石材別分布とグラフ

縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構である。



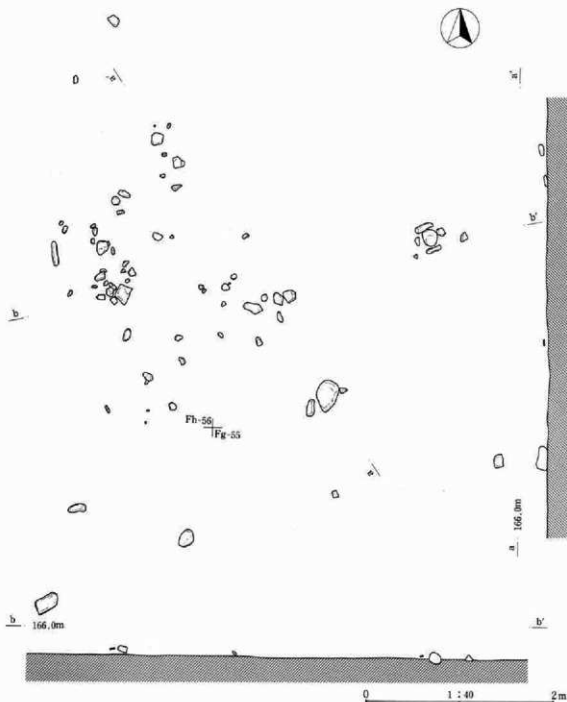
第175図 10号配石遺構重量別分布とグラフ



第176図 10号配石遺構出土器

10号配石遺構出土器観察表

図番 PL	部位	①熟土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
176-1 120	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。	波状口縁となり、口縁にそって太い沈線による渦巻文を描く。	配石北東部
176-2 120	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。	口縁部が無文となり1条の沈線を巡らす。 以下に縄文施文。原体はR(↑) (0段多条か) 縦転がし。	配石東端
176-3 120	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面はぶい褐色。	やや内湾する口縁部片。地文に縄文施文。 原体はR(↑)横転がし。沈線を垂下。	一括
176-4 120	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい橙色。	口縁部に沈線による文様を描き、地文に縄文施文。 原体はL(↑)横転がし。	配石東端
176-5 120	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 隆帯と沈線を垂下。	一括
176-6 120	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色、内面は褐灰色。	地文に縄文施文。原体はR(↑)縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。	一括



第177図 11号配石遺構

11号配石遺構 (第177～183図、PL. 60、120)

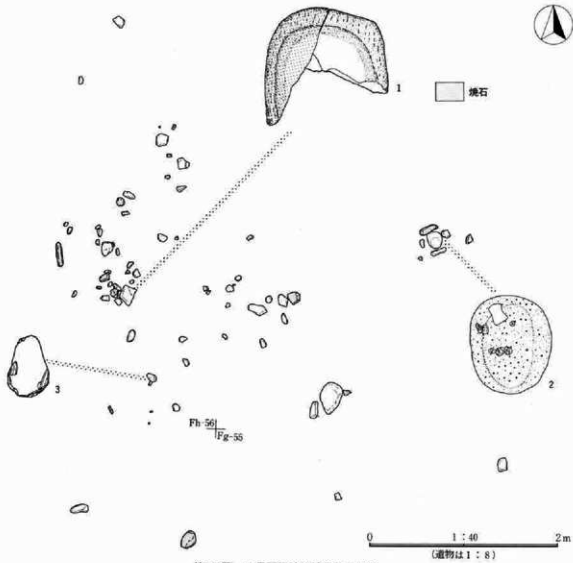
位置 Fg・Fh-55・56グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北東43m（遺構の中心までの距離）、16号配石遺構の北5m50cm、10号配石遺構の南西3m50cmの所に位置している。

経過 I区（昭和61年度調査区）から検出。9月上旬に10号配石遺構とともに調査を開始した。写真撮影、実測図の作成終了後、遺物取り上げを行い下部調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

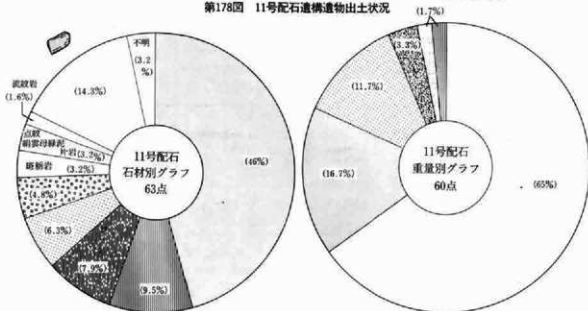
重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

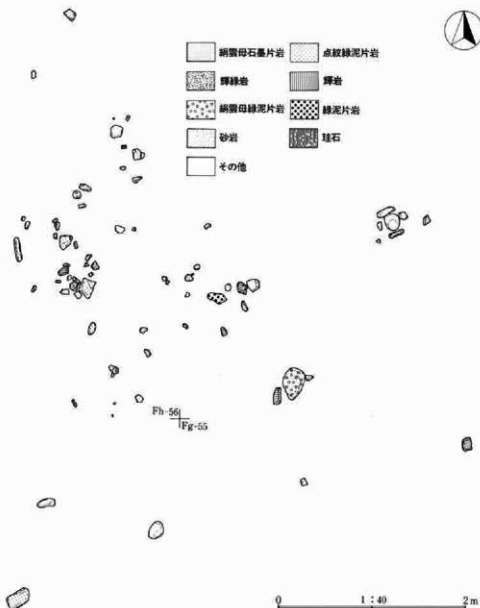
5 配石遺構 <11号>



第178図 11号配石遺構遺物出土状況



第179図 11号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

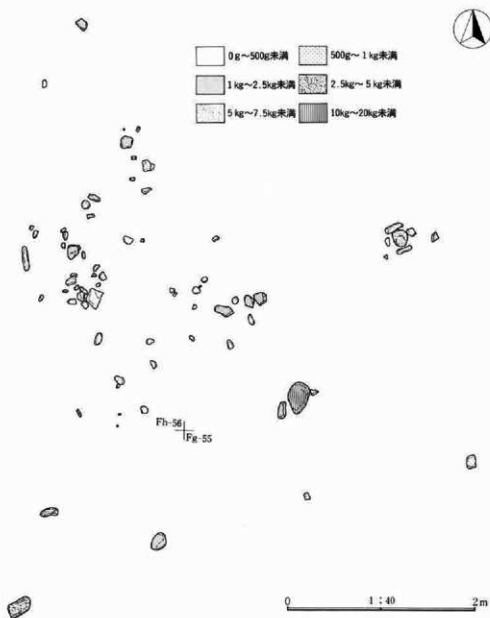


第180図 11号配石遺構石材別分布

形状・配石状況 長径約6m、短径約5mの範囲に散漫的に石が配置されているが、ややまとまって分布している範囲は、長径2m50cm、短径2m30cmの範囲である。63点の石と22点の土器片から構成されていた。配石の面積は約11.2㎡である。

使用石材 17種類の石材が確認された。63点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩29点(46%)、輝岩6点(9.5%)、珪石5点(7.9%)、点紋緑泥片岩4点(6.3%)、絹雲母緑泥片岩3点(4.8%)、斑輝岩・点紋絹雲母緑泥片岩各2点(各3.2%)、輝緑岩・緑泥片岩・赤色珪質板岩・流紋岩・砂岩・変斑輝岩・紅糜絹雲母石墨片岩・方散虫板岩・珩岩・赤鉄鉱珪岩各1点(各1.6%)であり、不明は2点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた61点中40点(65.6%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は60点である。その内訳は、500g未満の石39点(65%)、1kg～2.5kg未満の石10点(16.7%)、500g～1kg未満の石7点(11.7%)、2.5kg～5kg未満の石2点(3.3%)、5kg～7.5kg



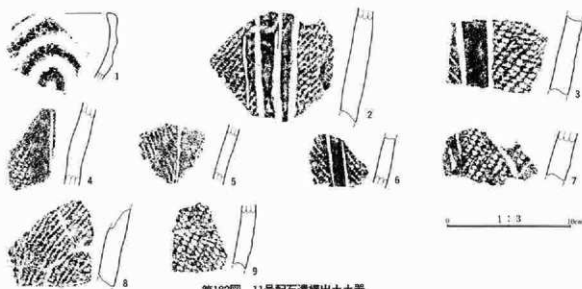
第181図 11号配石遺構重量別分布

未満の石1点(1.7%)、10kg~20kg未満の石1点(1.7%)である。

遺物出土状況 22点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部2点、胴部20点であり、石と同様に散漫的な出土である。加曾利E3式土器を主体としている。石器では配石西端から東約3m50cmの所に、多孔石(丸石)1点が出土した。この多孔石は石2点と土器片で回りを囲われており、4号屋外埋設土器の丸石と共通した出土状況である。また石皿1点(16号配石遺構の石皿と接合)、打製石斧1点も出土している。配石中の石器の含有率は4.8%である。また焼石は63点中8点の出土で、12.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

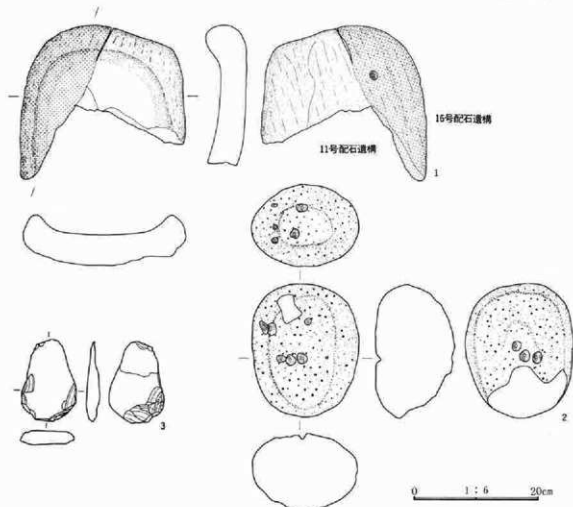
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第182図 11号配石遺構出土土器

11号配石遺構出土器観察表

図番 PL.	部位 ①土質 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
182-1 120	口縁 部片 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。	波状口縁部片。沈線による網目文が描かれて いる。	配石中心部
182-2 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線を垂下。	配石東端
182-3 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線を垂下。	配石西部
182-4 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線を垂下。	配石北部
182-5 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL()縦転がし。 沈線を垂下。	一括
182-6 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はL()縦転がし。 沈線を垂下。	配石西部
182-7 120	胴部 片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線を垂下。	配石北西端
182-8 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面は赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石東端
182-9 120	胴部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐灰色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。	一括



第183図 11号配石遺構出土石器

11号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
183-1 120	石 皿	片	点紋緑泥片岩	(25.2)	26.5	8.1	(4,700)	楕円形で窪みが深く、湾曲している。裏面に多孔石と同様の凹みが1個ある。長径13cm、短径11cm、深さ3mm。	11号配石と16号配石から出土
183-2 120	多孔石 (丸石)	一部欠損	凝灰岩	21.3	17.3	12.7	(5,400)	丸石に凹みが15個ある。最大の凹みは長18mm、短17mm、深10mm、最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長15mm、短12mm、深5mm。	配石東端
183-3 120	打製石斧	完形	輝緑岩	13.0	8.7	2.2	300	バネ (II b)。裏面に自然面を残し礫素材と思われる。	配石南西

12号配石遺構 (第184～189図、PL. 61、120)

位置 Fig-57グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東49m50cm (遺構の中心までの距離)、17号配石遺構の南西12mの所に位置している。また北東方向3m50cmの所に風倒木がある。

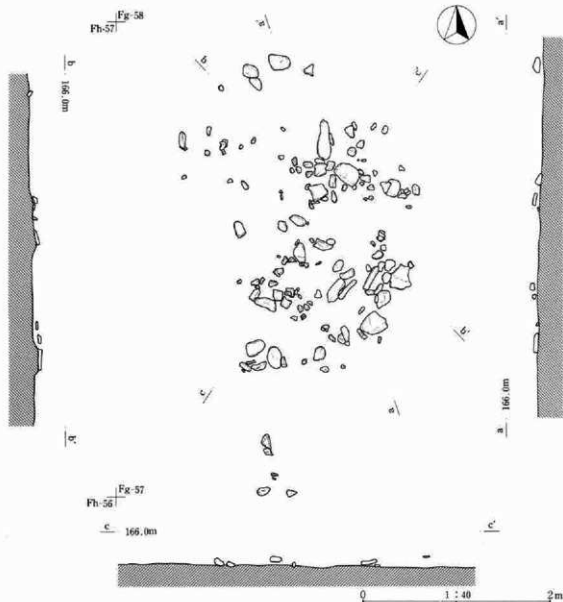
経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。11月上旬に遺構の図面作成、下旬から遺物取り上げ作業を実施。遺物取り上げ後は、下部に遺構があるかどうかの確認調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 ほぼ半円状に配石が認められる。その規模は長径3m40cm、短径2mである。石の分布密度

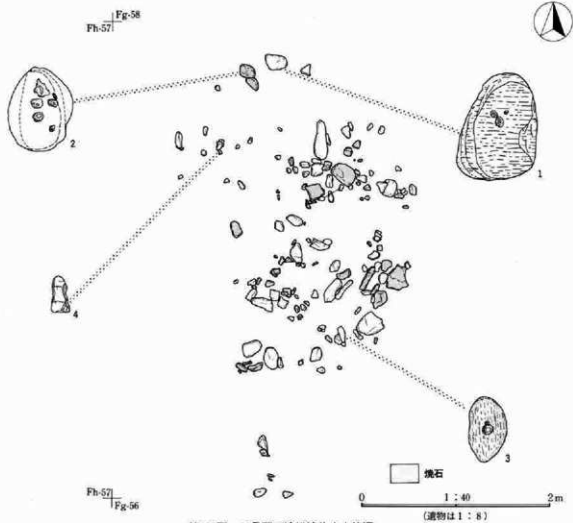
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



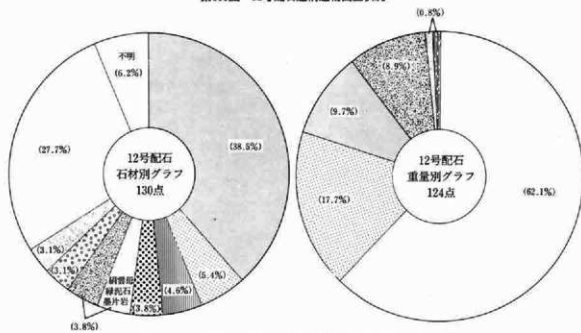
第184図 12号配石遺構

は他の配石遺構よりも高い。130点の石と18点の土器片から構成されていた。配石の面積は約7.3㎡である。
使用石材 28種類の石材が認められた。130点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩50点（38.5%）、点紋緑泥片岩7点（5.4%）、輝岩6点（4.6%）、輝緑岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩各5点（各3.8%）、絹雲母緑泥片岩・砂岩各4点（各3.1%）、斑岩・絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩各3点（各2.3%）、点紋石墨緑泥片岩・石墨片岩・輝緑凝灰岩・絹雲母脆雲母片岩・脆雲母石墨片岩・赤色珪質板岩各2点（各1.5%）、点紋絹雲母石墨片岩・滑石片岩・チャート・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・角閃岩・緑色珪質板岩・変斑岩・閃輝緑岩・珪石各1点（各0.8%）であり、不明は8点（6.2%）を数えた。不明の石を除いた122点中91点（74.6%）の石が片岩類である。

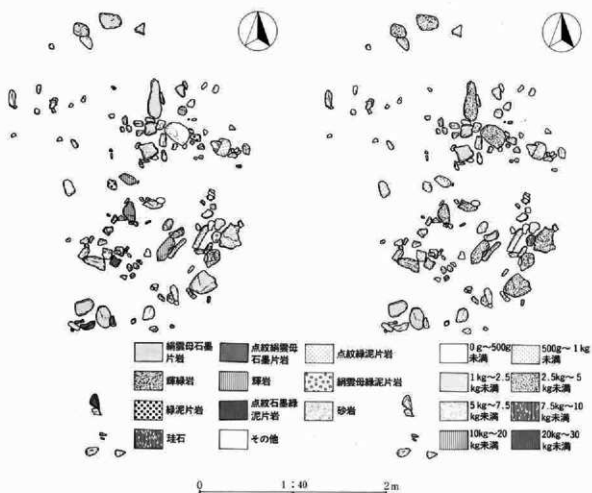
石材重量 重量の判明している石は124点である。その内訳は、500g未満の石77点（62.1%）、500g～1kg未満の石22点（17.7%）、1kg～2.5kg未満の石12点（9.7%）、2.5kg～5kg未満の石11点（8.9%）、5kg～7.5kg未満の石1点（0.8%）、7.5kg～10kg未満の石1点（0.8%）である。



第185図 12号配石遺構遺物出土状況



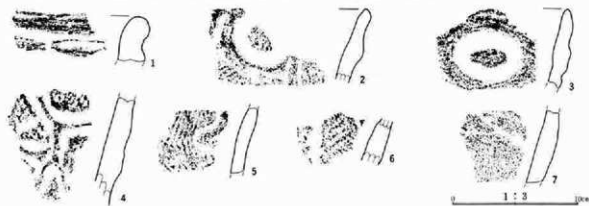
第186図 12号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



第187図 12号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布

遺物出土状況 18点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部3点、胴部15点であり、配石とともに出土している。加曾利E3式土器を主体としていた。石器では配石遺構北端から多孔石2点が出土している。このほかに凹石1点が南端から、打製石斧1点も出土している。配石中の石器含有率は3.1%である。また焼石は130点中24点の出土で、18.5%を占めている。焼石の比率は他の配石遺構よりも高い。

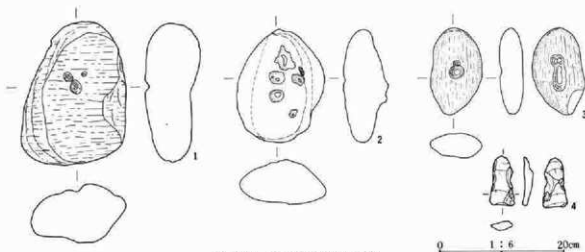
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第188図 12号配石遺構出土石器

12号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位 (①輪土 ②焼成 ③遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	標(その他)	出土状況
188-1 120	口縁 ①粗粒の砂を混入 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚19mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明赤褐色。		口縁部に1条の沈線を通らす。	配石北東部
188-2 120	口縁 ①粗粒の砂を混入 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は赤褐色。		波状口縁部片。沈線による褐色文を描き、 以下、縄文施文。原体R(上)縦転がし。	配石東部
188-3 120	口縁 ①粗粒の砂を混入 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は赤褐色。		波状口縁部片。沈線による槽門文等を描く。	配石北東部
188-4 120	胴部 ①粗粒の砂を混入 部片 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~18mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。		隆帯による区画内に縄文施文。原体はR(上) 横転がし。	配石南部
188-5 120	胴部 ①粗粒の砂を混入 部片 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。		地文に縄文施文。原体はR(上)。 蛇行沈線を通らす。	一括
188-6 120	胴部 ①中粒の砂を混入 部片 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。		地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を通らす。	一括
188-7 120	胴部 ①中粒の砂を混入 部片 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。		細い赤線を通らす。	配石中心部

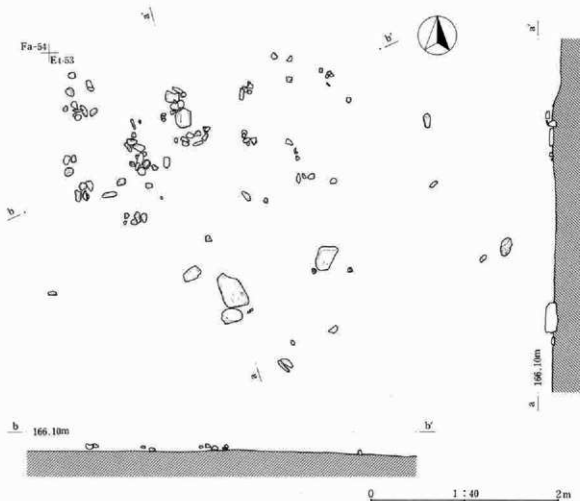


第189図 12号配石遺構出土石器

12号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
189-1 120	多孔石	完形	副露母石黒片岩	22.5	16.8	9.2	4,350	片面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短18mm、 深7mm。最小は長9mm、短6mm、深2mmで、平均 は長16mm、短12mm、深5mm。	配石北端
189-2 120	多孔石	ほぼ完形	砂岩	17.9	14.0	7.0	2,500	片面に7個の凹み。最大の凹みは長40mm、短22mm、 深2mm。最小は長7mm、短7mm、深1mmで、平均 は長20mm、短15mm、深2mm。劣位被熱。	配石北端
189-3 120	凹 石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	13.8	8.2	4.0	700	両面に5個の凹み。最大の凹みは長40mm、短20mm、 深2mm。最小は長10mm、短7mm、深1mmで、平均 は長21mm、短14mm、深2mm。	配石南端
189-4 120	打製石斧	刃部欠損	熟変成岩	(7.3)	4.0	1.8	(50)	バチ(II B)。縦長の切片を素材とする。	配石西端

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第190図 14号配石遺構

14号配石遺構 (第190～196図, PL. 62, 120)

位置 E1-53グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東49m50cmの所に位置し(遺構の中心までの距離)、2号土壇が南西方向に接して存在している。

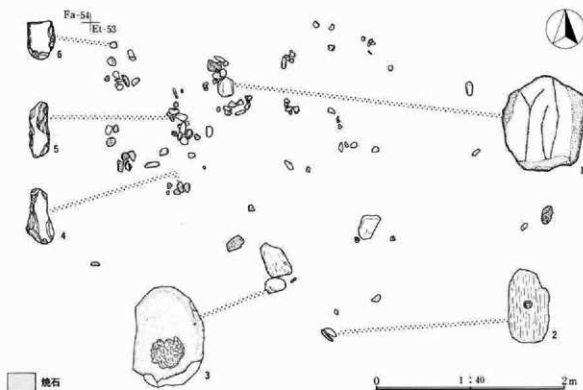
経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。9月上旬に遺構を確認し、写真撮影、実測作業を行い、遺物取り上げを実施した。遺物取り上げ後は下部調査を実施したが、土壇等は存在しなかった。

重複 なし。

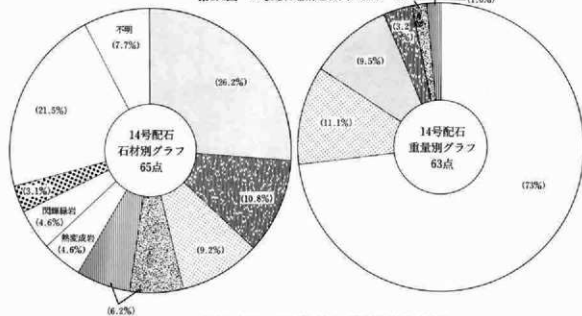
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m、短径3mの範囲に石が散在しているが、遺構の西部分の長径1m80cm、短径1m70cmの範囲は石の分布密度が高い。65点の石と41点の土器片から構成されていた。配石の面積は約10.9㎡である。

使用石材 21種類の石材が確認された。65点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩17点(26.2%)、珪石7点(10.8%)、点紋緑泥片岩6点(9.2%)、輝緑岩・輝岩各4点(各6.2%)、熱変成岩・閃輝緑岩各3点(各4.6%)、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点(各3.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩・斑粉岩・安山岩・点紋石墨泥片岩・紅簾絹雲母片岩・角閃岩・砂岩・石英閃緑岩・変斑岩・紅簾絹雲母石墨片岩・絹雲母脆雲母片岩・珪岩各



第191図 14号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1:8)



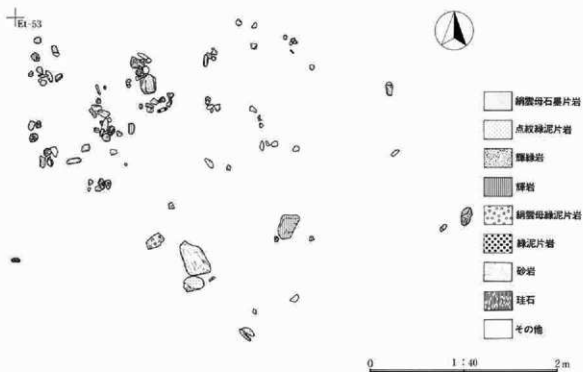
第192図 14号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

1点(各1.5%)であり、不明は5点(7.7%)を数えた。不明の石を除いた60点中32点(53.3%)の石が片岩類である。

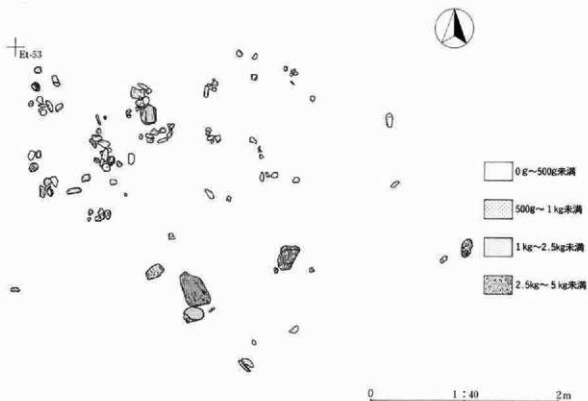
石材重量 重量の判明している石は63点である。その内訳は、500g未満の石46点(73%)、500g~1kg未満の石7点(11.1%)、1kg~2.5kg未満の石6点(9.5%)、7.5kg~10kg未満の石2点(3.2%)、2.5kg~5kg未満の石1点(1.6%)、10kg~20kg未満の石1点(1.6%)である。

遺物出土状況 41点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部14点、胴部26点、底部1点であり

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



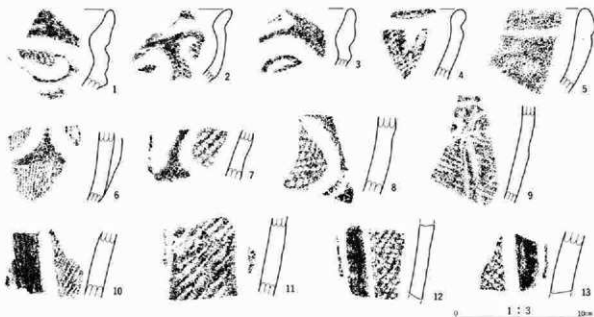
第193図 14号配石遺構石材別分布



第194図 14号配石遺構重量別分布

配石とともに出土している。加曾利E 3式土器を主体としていた。石器では石皿1点が配石遺構の中心部から、凹石1点、台石1点が配石遺構南端から、打製石斧3点は配石遺構の中心部付近から出土している。配石中の石器含有率は9.2%である。また炭石は65点中9点の出土で、13.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の配石遺構である。



第195図 14号配石遺構出土土器

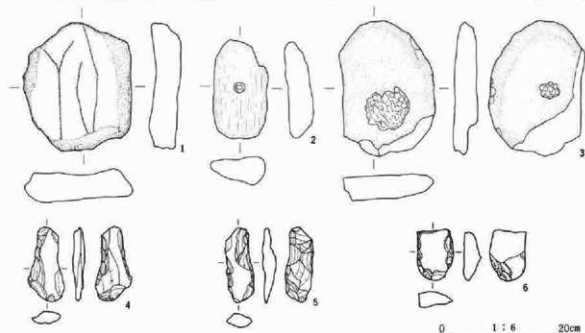
14号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②構成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
195-1	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は褐色。	波状口縁部片。沈線による渦巻文が描かれている。地文に縄文施文。原体はR(1)横転がし。		配石北西部
195-2	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は明赤褐色。	波状口縁部片。沈線による渦巻文等を描く。地文に縄文施文。原体はR(1)横転がし。		配石西部
195-3	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は黒褐色。	波状口縁部片。沈線による渦巻文等を描く。		配石南東部
195-4	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は明赤褐色。	口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下、縄文施文。原体はL(1)直。土器面は柔軟。		配石東部
195-5	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。	口縁部に1条の沈線を巡らせ、以下、縄文施文。磨滅しているため原体は不明。		配石北東部
195-6	口縁部片 120	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	隆帯及び沈線で文様を描き、区画内には糸線を施している。		配石南西部
195-7	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面はふい黄褐色。	沈線で隅円を描き、地文に縄文施文。原体はR(1)横転がし。		配石中心部
195-8	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい褐色。	隆帯及び沈線による隅円を描き、地文に縄文施文。原体はL(1)直転がし。		配石中心部
195-9	口縁部片 120	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	口縁部に沈線を1条巡らす。胴部にも沈線で文様を描き、地文に縄文施文。原体はR(1)横転がし。		配石東部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

14号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①軸土 ②埋成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)		出土状況
				文	様 (その他)	
195-10 120	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色色、内面はよい褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を下下。		配石南西部
195-11 120	割部 片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 内外面の色調はよい黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を下下。		配石北西部
195-12 120	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を下下。 内面に煤が付着している。		配石北西部
195-13 120	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	地文に縄文施文。原体はL(長)縦転がし。 沈線を下下。		配石西部



第196図 14号配石遺構出土土器

14号配石遺構土器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
196-1 120	石 皿	欠形	砂岩	20.4	17.2	4.6	2,200	石皿であり、また砥石として使用されたもの。	配石中央部
196-2 120	凹 石	欠形	点紋緑泥片岩	15.9	8.9	4.5	800	片面に1個の凹みがある。長径18mm、短径16mm、深さ4mm。	配石南端
196-3 120	台 石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(21.5)	15.4	3.7	(2,100)	偏平な石の両面に集合打痕がある。	配石南端
196-4 120	打製石斧	欠形	輝緑岩	11.8	5.8	1.9	130	バチ(IIa)。刃部が軸に対し斜めに傾く。	配石中央部
196-5 120	打製石斧	欠形	熱変成岩	11.9	4.5	2.2	115	バチ(IIa)。1個のみ内湾。	配石中央部
196-6 120	打製石斧	基部欠損	凝灰岩	(8.1)	5.8	2.8	(193)	短冊(III?)。片面がほとんど未加工の未成品か。	配石西北端

15号配石遺構 (第197~199図、PL. 62、120)

位置 Fc・Fd-51・52グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東31m50cm(遺構の中心までの距離)、4号配石遺構の東7mの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。11月上旬に遺構の写真撮影を実施。土器片の出土はなく、小規

横な配石遺構である。下部には土墳等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

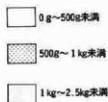
形状・配石状況 長径1m40cm、短径1m20cmの範囲に石が集中している。配石の面積は約1.5㎡である。

使用石材 14種類の石材が確認された。27点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩12点(44.4%)、輝緑岩2点(7.4%)、輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・赤色珪質板岩・斑板岩・石墨絹雲母片岩・石墨片岩・紅縷絹雲母片岩・砂岩・綠色珪質板岩・閃輝綠岩・珪石各1点(各3.7%)で、不明は1点(3.7%)。65.4%が片岩類。

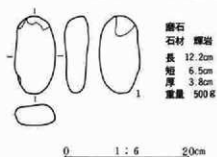
石材重量 27点の重量別点数は、500g未満の石20点(74.1%)、500g～1kg未満の石4点(14.8%)、1kg～2.5kg未満の石3点(11.1%)である。

遺物出土状況 縄文土器の出土はないが、石器として磨石1点が出土している。石器の含有率は3.7%。また焼石は1点の出土で、3.7%を占めている。

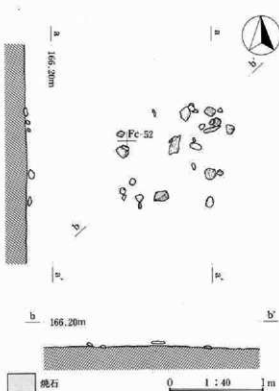
所見 縄文時代の磨石が出土し、また周辺からは加曾利E3式土器片も出土している。当遺構は縄文時代中期末の配石遺構であろう。



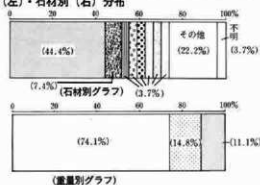
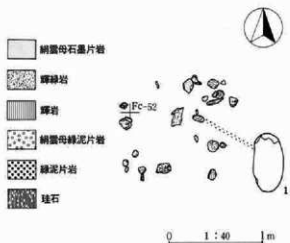
第198図 15号配石遺構 重量別(左)・石材別(右)分布

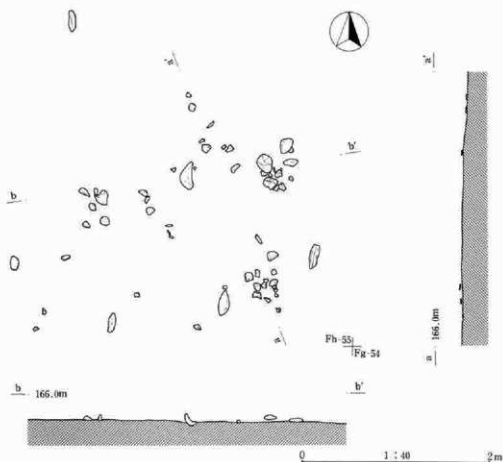


第199図 15号配石遺構出土石器



第197図 15号配石遺構





第200図 16号配石遺構

16号配石遺構 (第200～206図、PL. 63、121)

位置 Fh-55グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北37m70cm(遺構の中心までの距離)、9号配石遺構の東南4mの所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。62年3月になって遺構を検出した。3月9日に写真撮影、翌日に実測作業を実施した。遺物の取り上げ後は下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

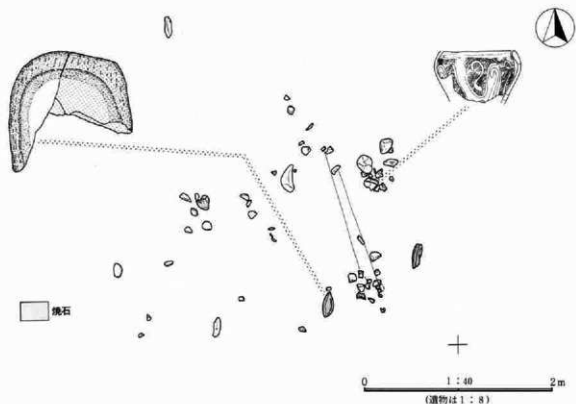
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m、短径2mの範囲に石が配置されている。41点の石と23点の土器片から構成されている。配石の面積は約6.4㎡である。

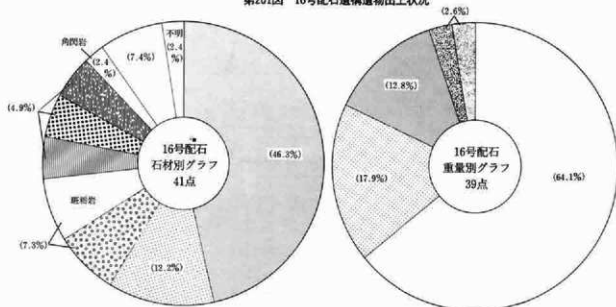
使用石材 11種類の石材が確認された。41点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩19点(46.3%)、点紋緑泥片岩5点(12.2%)、絹雲母緑泥片岩・斑岩各3点(各7.3%)、輝岩・緑泥片岩・珪石各2点(各4.9%)、紅崖絹雲母片岩・角閃岩・点紋絹雲母緑泥片岩・変斑岩各1点(各2.4%)であり、不明は1点(2.4%)を数えた。不明の石を除いた40点中31点(77.5%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は39点である。その内訳は、500g未満の石25点(64.1%)、500g～1kg未満の石7点(17.9%)、1kg～2.5kg未満の石5点(12.8%)、2.5kg～5kg未満の石1点(2.6%)、5kg～7.5kg未満の石1点(2.6%)である。

遺物出土状況 23点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部2点、胴部19点、底部2点である。



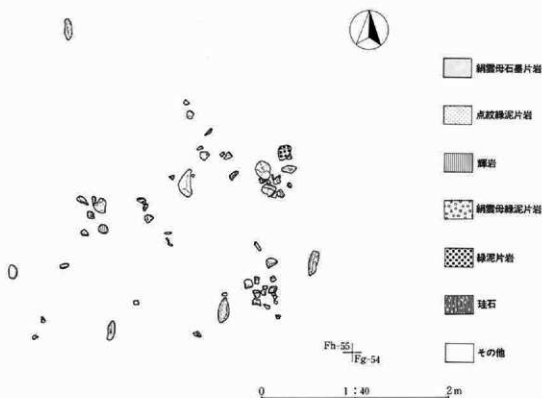
第201図 16号配石遺構遺物出土状況



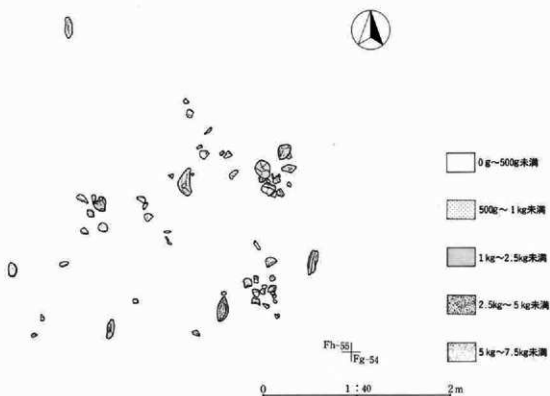
第202図 16号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

また小型深鉢の口縁部片が配石の北東部分から出土している。加曾利E 3式土器を主体に、E 4式土器片も少量含まれていた。石器では石皿の破片1点が出土。この石皿片は11号配石遺構出土の石皿と同一個体であり、接合関係を有している。また焼石は4点出土し9.8%を占める。

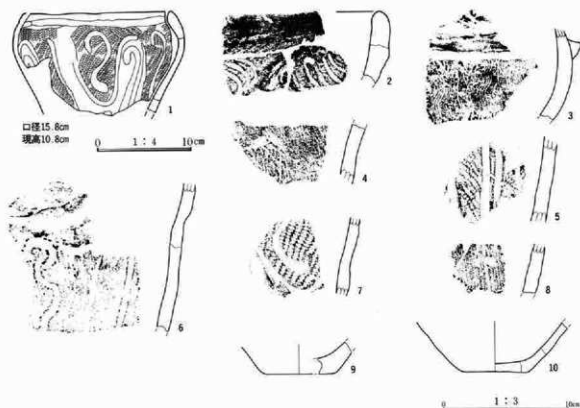
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E 3式期の配石遺構である。11号配石遺構と同時期のものであろう。



第203図 16号配石遺構石材別分布



第204図 16号配石遺構重量別分布



第205図 16号配石遺構出土土器

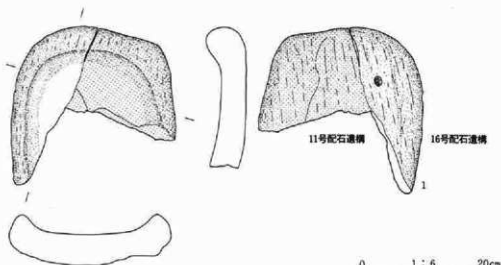
16号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
205-1 121	口縁 部～ 胴部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。	口縁部は内湾し、胴部で括れる器形。口唇 部に狭い無文帯をおき、1条の幅広の沈線 を巡らせる。胴部は沈線による波状文を施 し、地文に縄文施文。原体はR(上)横・縦位。 垂手状の沈線が施されている。外面に煤が 付着している。	配石北東部
205-2 121	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。	口縁部はやや内湾し、垂帯による区画を施 す。区画内には沈線による文様を描く。	配石南東部 と北部
205-3 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。	垂帯を1条巡らし、以下細い垂線を描す。	配石北部
205-4 121	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰褐色。	垂線を描す。	配石南東部
205-5 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は黒褐色。	地文に縄文施文。原体はL(上)縦転がし。沈 線を垂下。	配石北部
205-6 121	口縁 部～ 胴部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部～胴部。器厚10mm。 内面はミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	口縁部に沈線による栴円区画。胴部は垂線 を施し、蛇行沈線を垂下。	配石南東部 と北部
205-7 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8～10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線による文様を描く。	配石北部
205-8 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面は灰褐色。	垂線を描す。	配石南部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

16号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様 (その他)	出土状況
205-9 121	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい橙色。			配石北東部
205-10 121	底部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径53mm。 内面はミガキが行われている。 内外面の色調はよい黄橙色。	外面は荒れている。		配石北東部



第206図 16号配石遺構出土土器

16号配石遺構土器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
206-1 120	石 皿	片	点紋緑泥片岩	(25.2)	26.5	8.1	(4,700)	楕円形で窪みが深く、両曲している。裏面に多孔 石と同様の凹みが1個ある。長径13mm、短径11mm、 深さ3mm。	16号配石 と11号配 石から出 土

19号配石遺構 (第207～210回、PL. 83、121)

位置 Fi・Fj-56・57グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西49m(遺構の中心までの距離)、7号土壇に近接した所に位置している。

経過 I区(昭和61年度調査区)から検出。9月9日に遺構の写真撮影。3号屋外埋設土器は当遺構内から検出されている。遺物取り上げ後、下部調査を実施したが遺構は存在しなかった。当遺構は、調査過程では集石群として把握していたが、配石遺構と明確に分離することができないために、整理段階で配石遺構名称を使用。19号が欠番となっていたために、この番号を使用した。

重複 なし。3号屋外埋設土器が当遺構の南東隅に存在している。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 路線外に遺構は続くものと考えられるが、現状での規模は長径8m、短径4m50cm程である。他の配石遺構と異なり、小さな石を無数に使用し、そして広範囲に配置している。この配石遺構の南東隅から石蓋を伴う加曾利E3式土器が伏せられた状態で出土した。配石の面積は約30.7㎡である。



FI-58
FI-57

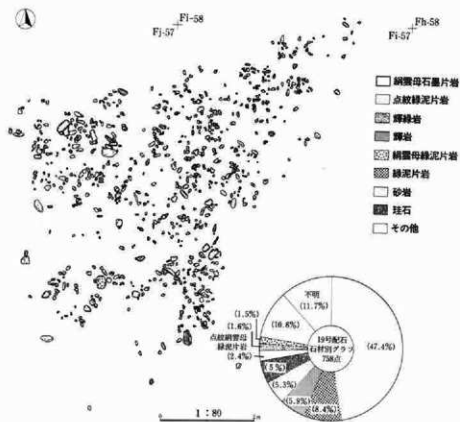
FI-58
FI-57

路縁外

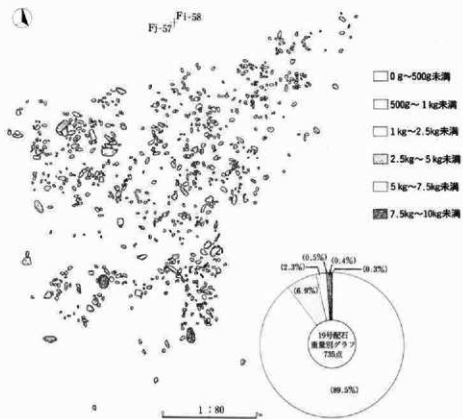


165.90m

第20図 19号配石遺構



第208図 19号配石遺構石材別分布



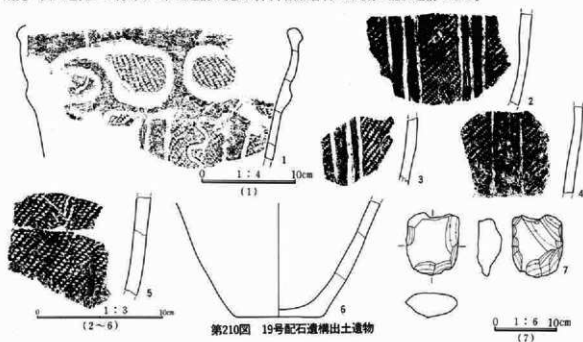
第209図 19号配石遺構重量別分布

使用石材 31種類の石材が確認された。758点の石材別点数は、網雲母石墨片岩359点(47.4%)、緑泥片岩64点(8.4%)、輝岩45点(5.9%)、点紋緑泥片岩40点(5.3%)、珪石38点(5%)、点紋網雲母緑泥片岩18点(2.4%)、輝緑岩12点(1.6%)、網雲母緑泥片岩11点(1.5%)、その他の石材は82点(10.8%)であり、不明は89点(11.7%)を数えた。不明の石を除いた669点中537点(80.3%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は735点である。その内訳は、500g未満の石658点(89.5%)、500g～1kg未満の石51点(6.9%)、1kg～2.5kg未満の石17点(2.3%)、2.5kg～5kg未満の石4点(0.5%)、5kg～7.5kg未満の石3点(0.4%)、10kg～20kg未満の石2点(0.3%)である。500g未満の石が実に90%ちかくを占めている。

遺物出土状況 屋外埋設土器1基と、この土器の周辺から口縁部1点、胴部29点の計30点の加曾利E3式土器を主体とした土器片が出土している。石器では磨製石斧の未製品1点が出土し、また焼石は758点中5点の出土で、0.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第210図 19号配石遺構出土遺物

19号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
210-1 121	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外部の色調は暗赤褐色。	口縁部に隆帯及び沈線により巻巻き、横内 等が描かれ、区画内に縄文施文。原体は R(上縦転がし、胴部は内部磨り消しとなる 無施文と蛇行沈線をもちR(上縦転がし。	3号屋外埋 設土器に近 接
210-2 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7～9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はによい赤褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 外面に煤が付着している。	一括
210-3 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 外面に煤が付着している。	配石南部
210-4 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上縦転がし。 沈線を垂下。 外面に煤が付着している。	一括
210-5 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はによい褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上縦転がし。	配石南部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

19号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
210・6 121	基部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の基部片。底径67mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を垂下。		配石中心部

19号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)	特 徴	出土状況
				全長 幅 厚 重量		
210・7 121		一端欠損	輝岩	(9.9) 8.2 3.9 (430)	横溝り途中。内面に自然面を残す。	配石中央部東

20号配石遺構 (第211～216図、PL. 65、121)

位置 Fl・Fm-48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西22m(遺構の中心までの距離)、列石から突出したかたちで存在している。7号配石遺構と同様に環状列石の一部を構成するものであろう。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。5月21日から21号配石遺構とともに調査を開始した。6月に入り遺構の写真撮影、図面の作成を実施したが、図面作成は7月までかかった。以後の調査は、当遺構が環状列石を構成する一部であることから、環状列石の調査とともに進めた。

重複 なし。環状列石の一部を構成している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

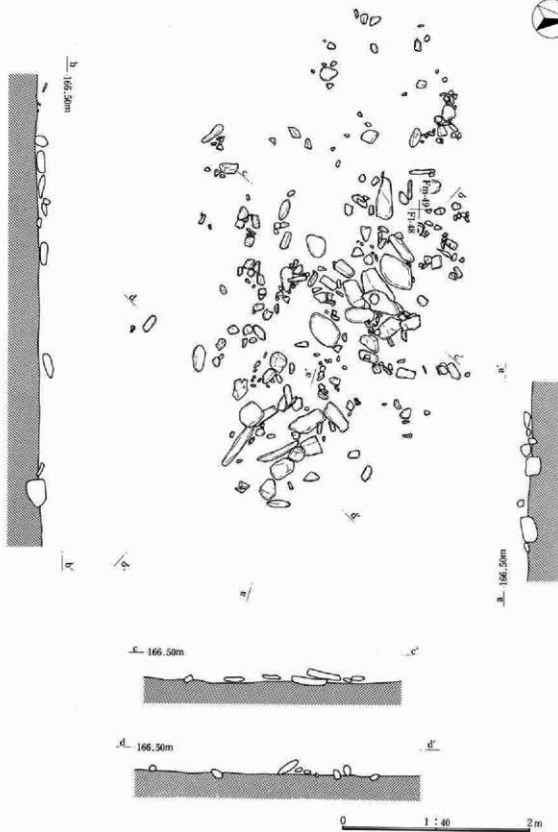
形状・配石状況 長径5m、短径2m30cmの範囲に石が配置されている。中心部にやや大きな石を使用しているが、列石内部に通じる通路のような役割を果たしていたものであろうか。配石の面積は約12.7㎡である。

使用石材 29種類の石材が確認された。244点の石材別点数は、網雲母石墨片岩79点(32.4%)、点紋緑泥片岩24点(9.8%)、輝緑岩18点(7.4%)、点紋石墨緑泥片岩14点(5.7%)、輝岩13点(5.3%)、緑泥片岩13点(5.3%)、石墨片岩6点(2.5%)、珪石6点(2.5%)、その他の石材71点(21.7%)であり、不明は18点(7.4%)を数えた。不明の石を除いた226点中169点(74.8%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は233点である。その内訳は、500g未満の石126点(54.1%)、500g～1kg未満の石40点(17.2%)、1kg～2.5kg未満の石34点(14.6%)、2.5kg～5kg未満の石14点(6%)、10kg～20kg未満の石8点(3.4%)、5kg～7.5kg未満の石7点(3%)、7.5kg～10kg未満の石3点(1.3%)、20kg～30kg未満の石1点(0.4%)である。列石から北西に向かい、帯状に重量のある石が使用されている。

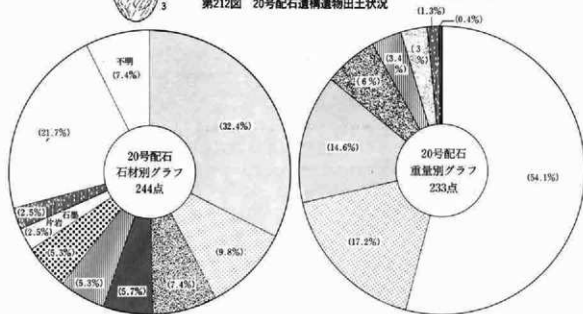
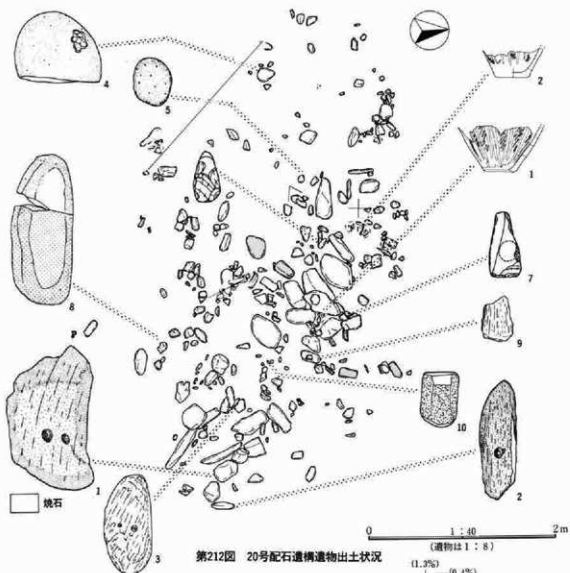
遺物出土状況 50点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部8点、胴部38点、底部4点であり、このうち底部1点は配石のほぼ中心部から出土している。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。石器では多孔石3点、丸石1点、磨石2点、打製石斧3点、磨製石斧1点が出土している。多孔石3点は列石近くから、また配石の南西端から丸石がそれぞれ出土し、磨石1点は24号配石遺構の磨石と接合関係があった。配石中の石器含有率は4.1%であり、また焼石は244点中15点の出土で、6.1%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構であり、環状列石の張り出し部になるものと判断される。7号配石遺構と同様の遺構である。

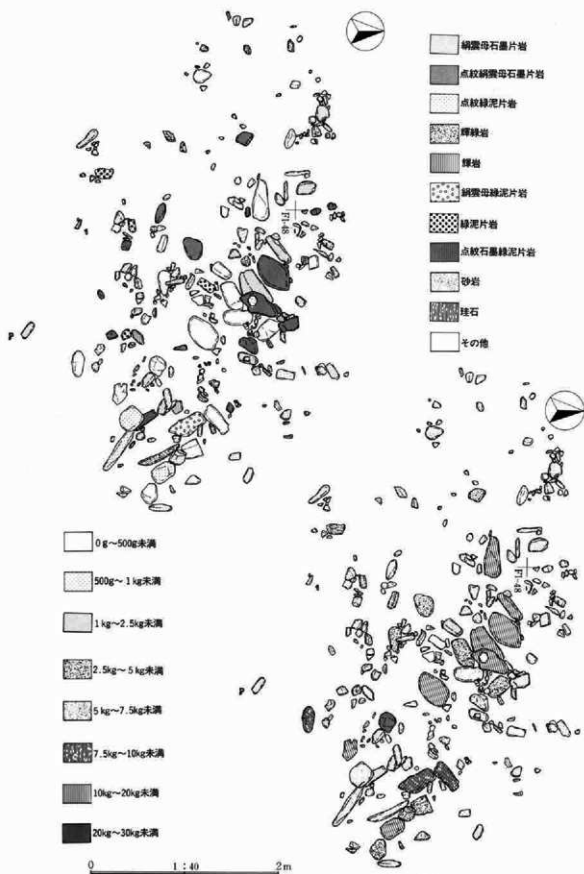


第211図 20号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



5 配石遺構 (20号)

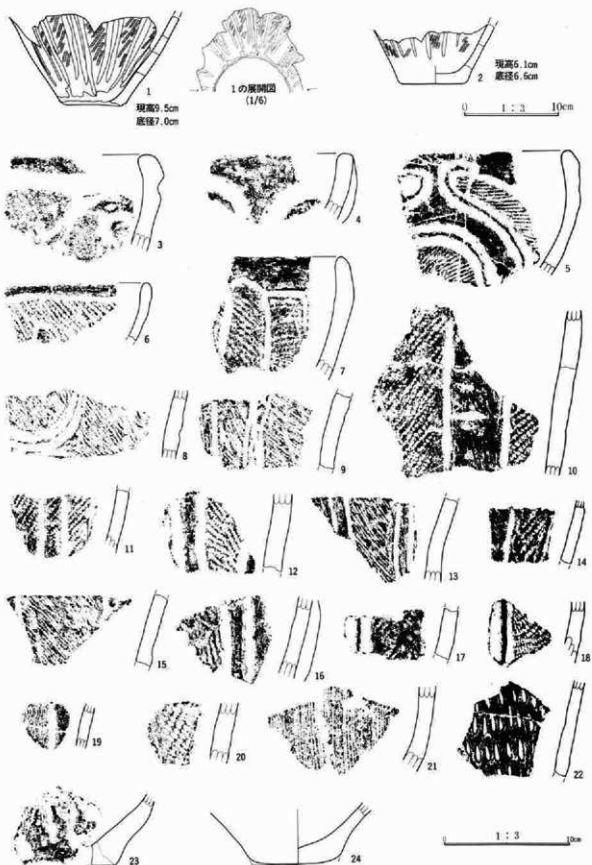


第214図 20号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

20号配石遺構土器調査表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
215-1 121	底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。器厚7~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を書下。土器面は柔軟。 内面に灰化物が付着している。	配石中心部
215-2 121	底部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部。器厚8~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を書下。底面に磨耗痕が認められる。	配石北西部
215-3 121	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい褐色。	波状口縁部片。沈線による褐色文等を描く。 区画内に縄文施文。原体はR〔上〕横転がし。	配石南部と 西部
215-4 121	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。	口縁部に隆帯及び沈線による文様が描かれる。 る。	配石南部
215-5 121	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	口縁部にやや内湾し、微隆起帯による文様が描かれ、磨り消し及び縄文施文。 原体はL〔上〕。外面に隆帯付着。	配石南部
215-6 121	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はふい褐色。	口縁部に1条の沈線を送らせ、以下縄文施文。 原体はR〔上〕縦転がし。太い糸と細い糸 を使用。外面に隆帯付着。	配石北部
215-7 121	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。	やや内湾する口縁部片。沈線による「口」 状の文様を描く。区画内に縄文施文。 原体はL〔上〕縦転がし。	配石南部
215-8 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はふい褐色。	微隆起帯と沈線による文様が描かれ、地文 に縄文施文。原体はL〔上〕縦転がし。土器面 は柔軟で、外面に煤が付着している。	配石中心部
215-9 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はふい褐色。	地文に縄文施文。原体はL〔上〕縦転がし。 沈線を書下。	配石中心部
215-10 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は磨り調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面は灰黄色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を書下。 土器面は柔軟。	配石中心部
215-11 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を書下。 内面に煤が付着している。	配石中心部
215-12 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はふい褐色。	地文に縄文施文。原体はL〔上〕(0段多糸 か?)縦転がし。 沈線を書下。	配石北西部
215-13 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	地文に縄文施文。原体はL〔上〕縦転がし。 磨り非常に強い。沈線を書下。 外面に煤が付着している。	配石中心部
215-14 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面は黒褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 沈線を書下。 内面に煤が付着している。	配石北部
215-15 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はL〔上〕縦転がし。 沈線を書下。 土器面は柔軟。	配石南部
215-16 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はふい褐色、内面は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL〔上〕縦転がし。 隆帯を書下。	配石北西部
215-17 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 隆帯を書下。	配石北部
215-18 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はふい黄褐色、内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔上〕縦転がし。 隆帯を書下。	一括
215-19 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰黄色。	地文に糸線を描す。 沈線を書下。	配石南部



第215図 20号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

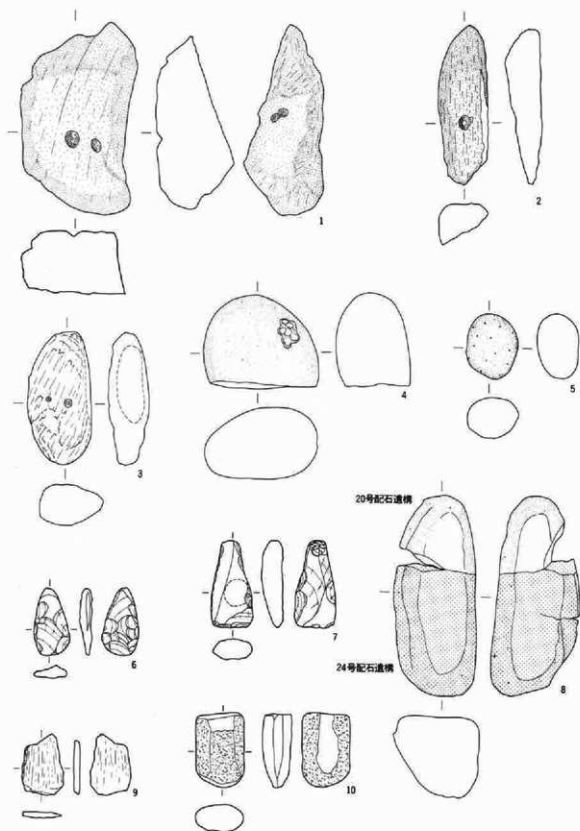
20号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
215-20 121	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR(+)縦転がし。	配石西端
215-21 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色。内面は褐色。	条線を施す。	配石南部
215-22 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面は黒褐色。	刺突を施す。	配石北西端
215-23 121	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚11~17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR(+)縦転がし。 枕線を画下。	配石中心部
215-24 121	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径70mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	底面は荒れている。	配石北部

20号配石遺構石器観察表

図番 Pl.	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
216-1 121	多 孔 石	完形	点紋緑泥片岩	31.0	18.5	12.5	8,900	両面に4個の凹み。最大の凹みは長28mm、短20mm、 深9mm。最小は長15mm、短11mm、深4mmで、平均 は長19mm、短14mm、深7mm。一部磨耗。	列石近く から出土
216-2 121	多 孔 石	一部欠損	点紋緑泥片岩	25.4	7.9	(6.4)	(1,700)	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短 径19mm、深さ7mmである。凹石の凹みとは異なる。	列石近く から出土
216-3 121	多 孔 石	完形	緑泥片岩	21.1	10.3	6.6	1,900	片面に2個の凹み。凹みの平均は長径11mm、短径 10mm、深さ3mmである。側面に磨耗痕がみられる。	列石近く から出土
216-4 121	丸 石	完形	安山岩	14.8	18.4	11.9	4,900	6個の凹みがみられる。	配石南西 端
216-5 121	磨 石	完形	安山岩	10.4	8.8	6.6	800	磨耗痕がみられる。	配石西寄 り
216-6 121	打製石斧	完形	輝緑岩	10.7	5.8	2.1	155	バチ (II b)。	配石中央 部
216-7 121	打製石斧	完形	輝岩	13.8	6.8	3.5	420	バチ (II b)。	配石中央 部
216-8 121	磨 石	ほぼ完形	安山岩	31.7	13.2	13.1	8,950	両面に磨耗痕がみられる。	24号配石 と接合
216-9 121	打製石斧	両端欠損	胡堂母石墨片岩	(9.6)	6.6	1.0	(88)	バチ (II b)。	配石中央 部
216-10 121	磨製石斧	基部欠損	輝緑岩	(11.7)	7.4	4.8	(850)	敲打痕跡。	配石中央 部

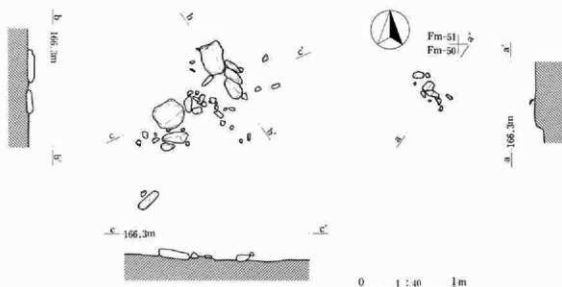
5 配石遺構〈20号〉



第216図 20号配石遺構出土石器

0 1:6 20cm

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第217図 21号配石遺構

21号配石遺構 (第217～222図, PL. 66, 121)

位置 Fm-50グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西30m(遺構の中心までの距離)、23号配石遺構の東12mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。5月21日に20号配石遺構とともに調査を開始した。6月8日に遺構の写真撮影を実施。以後、遺物の取り上げ、下部の調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって遺構の一部は壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

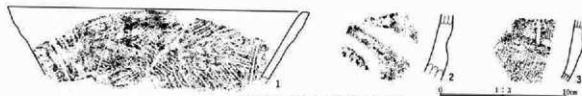
形状・配石状況 長径1m70cm、短径1m10cmの範囲に配石が認められ、また配石の中心から東2m40cmのところから伏罨が検出された。配石の面積は約2.7㎡で、非常に小規模なものである。

使用石材 15種類の石材が確認された。44点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩17点(38.6%)、点紋石墨片岩・珪石各5点(各11.4%)、点紋緑泥片岩4点(9.1%)、石墨片岩3点(6.8%)、点紋絹雲母石墨片岩・輝緑岩・輝岩・緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・斑岩・石墨緑泥片岩・角閃岩・緑色珪質板岩・頁岩各1点(各2.3%)である。44点中33点(75%)の石が片岩類である。

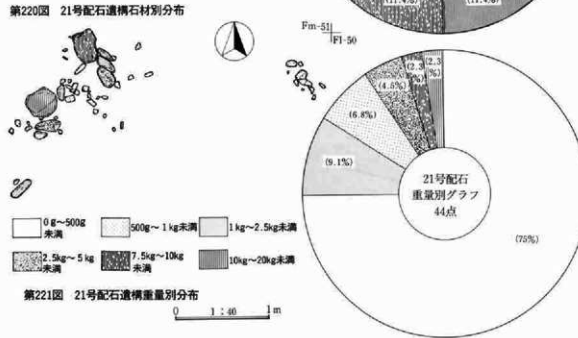
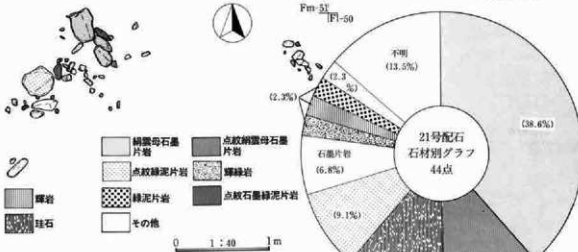
石材重量 44点の重量の内訳は、500g未満の石33点(75%)、1kg～2.5kg未満の石4点(9.1%)、500g～1kg未満の石3点(6.8%)、2.5kg～5kg未満の石2点(4.5%)、7.5kg～10kg未満の石1点(2.3%)、10kg～20kg未満の石1点(2.3%)である。

遺物出土状況 伏罨(口縁部)1点と6点の土器片が出土している。石器では多孔石1点、凹石1点、打製石斧1点が出土し、石器含有率は6.8%である。また焼石は44点中3点の出土で、6.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



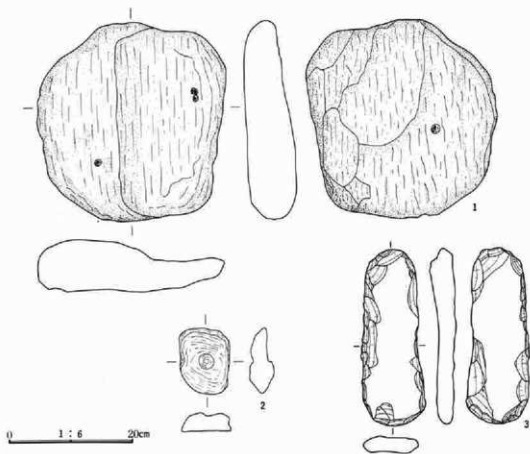
第218図 21号配石遺構出土土器



3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

21号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
218-1 121	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は暗褐色。	地文に縄文施文。原体はL(横・縦転がし。 沈線を垂下。	配石東端
218-2 121	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい黄褐色。	縹帯と沈線による横内等の文様。区画内に 縄文施文。原体はR(横転がし。	配石中心部
218-3 121	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~9mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰黄褐色。	朱線を施す。	配石西部



第222図 21号配石遺構出土石器

21号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
222-1 121	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	31.3	30.0	8.3	12,300	両面に5個の凹み。最大の凹みは長15mm、短13mm、 深3mm。最小は長9mm、短6mm、深1mmで、平均 は長11mm、短9mm、深2mm。	配石西南 端
222-2 121	凹石	完形	網罟母石黒片岩	10.5	8.0	3.9	400	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は25mm、短 径24mm、深さ5mmである。	配石中央 部
222-3 121	打製石斧	完形	珉礫岩	28.2	10.2	4.0	1,570	バネ(IIa)。1個がわずかに内溝。大型で細身。	配石南端

22号配石遺構 (第223~230図、PL. 67・68、122)

位置 Fm-46・47グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西26m (遺構の中心までの距離)、列石からは西13mの所、7号屋外埋設土器の北西3mに位置している。

経過 0区 (昭和162年度調査区) から検出。環状列石の周辺に調査が及んだ6月上旬に遺構を確認した。4日に遺構全景の写真撮影を実施。以後、7月8日まで図面の作製に入った。遺物取り上げ後、配石下に埋裏を検出した。この埋裏の存在で、当遺構は敷石住居跡の可能性が考えられたが、炉は存在せず、また配石状態も不規則であるために敷石住居跡からは除外して調査を進めた。

重複 なし。環状列石に近接して構築されている。

覆土 竅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径4m50cm、短径3mの範囲に配石が施されている。集中する範囲は狭く、長径2m50cm、短径2m程である。配石の面積は約11.7㎡である。

使用石材 19種類の石材が確認された。140点の石材別点数は、砂岩54点(38.6%)、絹雲母石墨片岩20点(14.3%)、点紋緑泥片岩11点(7.9%)、点紋石墨緑泥片岩7点(5%)、緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩各5点(各3.6%)、点紋絹雲母石墨片岩・輝岩・斑板岩各4点(各2.9%)、輝緑岩3点(2.1%)、石墨緑泥片岩・石墨片岩・絹雲母片岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・脆雲母石墨片岩・凝灰岩・礫岩・千枚岩各1点(各0.7%)であり、不明は15点(10%)を数えた。不明の石を除いた126点中56点(44.4%)の石が片岩類、42.9%の石が砂岩であった。他の配石遺構よりも、砂岩の使用が多いのが当遺構の大きな特色である。また、配石南端に点紋石墨緑泥片岩が比較的多く使用されていた。

石材重量 重量の判明している石は127点である。その内訳は、500g未満の石68点(53.5%)、500g~1kg未満の石26点(20.5%)、1kg~2.5kg未満の石20点(15.7%)、2.5kg~5kg未満の石5点(3.9%)、5kg~7.5kg未満の石3点(2.4%)、10kg~20kg未満の石3点(2.4%)、7.5kg~10kg未満の石2点(1.6%)である。重量のある石と軽量の石とが乱雑に混ざりあっている。

埋裏 配石下から胴下半部を欠損した埋裏(加曾利E4式土器)が出土した(第227図1)。この埋裏は長径46cm、短径37cmのピット内に正位状態で埋設されていたものである。埋設土壌の覆土は暗褐色土層である。

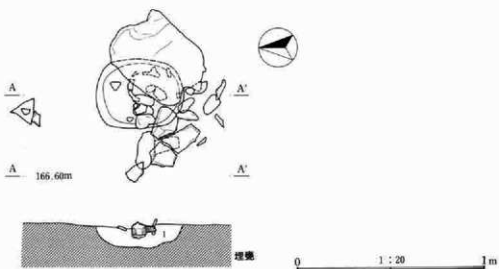
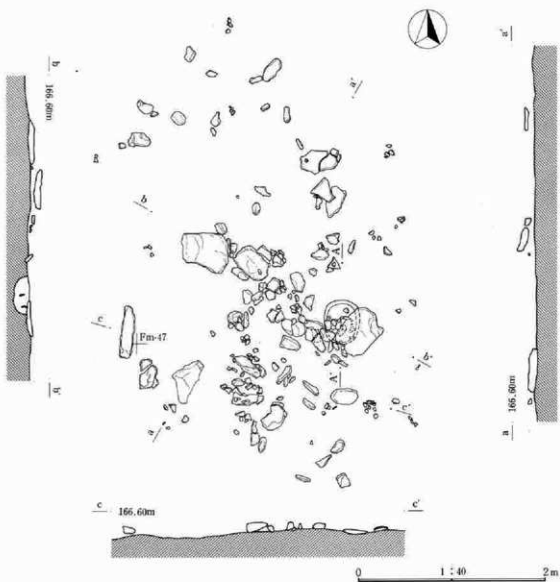
第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。小石を多量に含む、人為的埋土である。

埋裏は土壌内に小石で押さえられていた。また長径50cm・短径37cm・重量13.6kgの扁平な砂岩が埋設ピットを1/2程覆っているが、当初はこのピットを完全に覆っていたのもので、蓋石として使用されたものであろう。

遺物出土状況 埋裏のほかに土器片58点が出土している。その部位別点数は、口縁部10点、胴部48点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片を少量含んでいる。

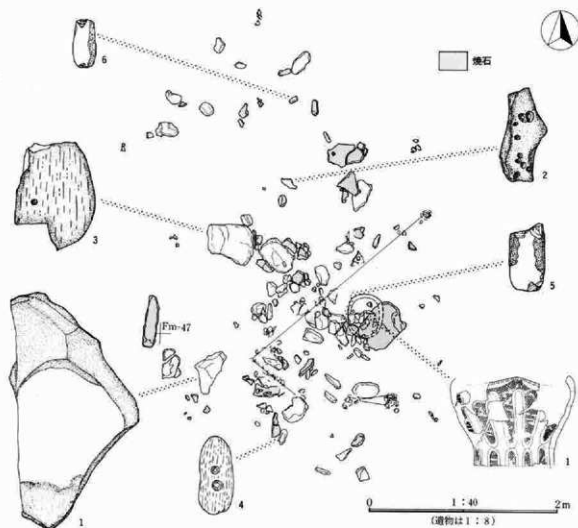
石器では石皿1点、多孔石2点、凹石1点、磨製石斧2点が出土している。石皿の破片は遺構南西部から、多孔石2点は遺構北部、凹石1点は南端、磨製石斧1点は埋裏の周囲、もう1点は北端からそれぞれ出土している。石器含有率は4.3%であり、また焼石は140点中43点の出土で、30.7%を占めている。焼石の占める割合は他の配石遺構よりも異常に高い。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であるが、他の配石遺構と異なり、砂岩が多量に使用され、焼石が多く、また埋裏を伴うことから、異質な感じを受ける。

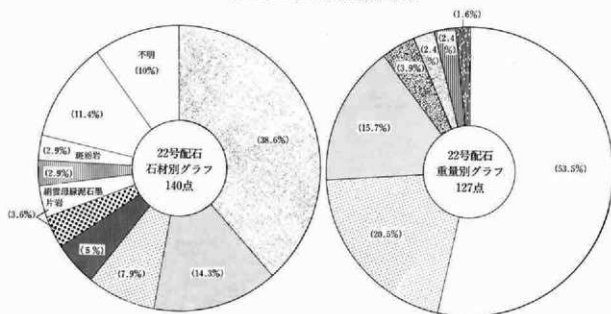


第223図 22号配石遺構

5 配石遺構 <22号>

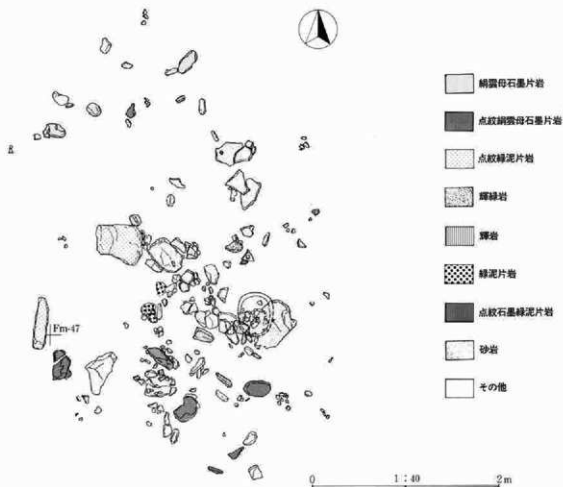


第224図 22号配石遺構遺物出土状況



第225図 22号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

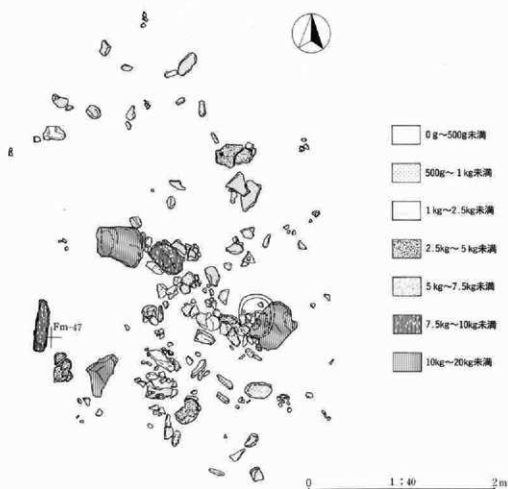
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第226図 22号配石遺構石材別分布



第227図 22号配石遺構出土石器



第228図 22号配石遺構重量別分布

22号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
227-1 122	口縁 部～ 胴部	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁～胴部片。器厚7～10mm。 内面は横・縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	口縁部は内湾し、波状を呈する。口唇部に 衝突を施し、1条の幅広い沈線を通らせる。 胴部上半は沈線による波状を描き、区画内 に縄文施文。原体はR(↑)横・縦位。胴下半 部は沈線による「目」状の文様を配し、区 画内にR(↑)縦位。 外面に煤が付着している。	埋設土器 (正位状態)
227-2 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10～14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい橙色、内面はよい黄褐色。	口縁部はやや内湾し、狭い無文となる。胴 部には微隆起帯による文様が描かれ、磨り 消し及び縄文施文。原体はR(↑)縦位がし。	配石南部
227-3 122	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15～20mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は赤褐色。	口縁部が狭い無文となり、1条の微隆起帯 を通らす。	配石南部
227-4 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい橙色、内面は灰褐色。	口縁部は内湾する。隆帯と沈線による波 文等の文様を描き、区画内に縄文施文。原 体はR(↑)横位がし。	配石北端
227-5 122	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい橙色、内面は明赤褐色。	隆帯と沈線による横内等の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はR(↑)横位がし。	配石北東部 画内に縄文施文。

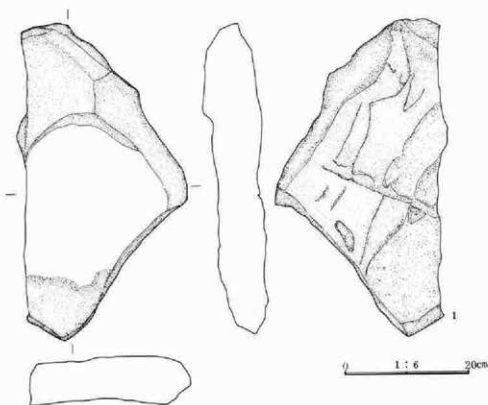
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

22号配石遺構土器観察表

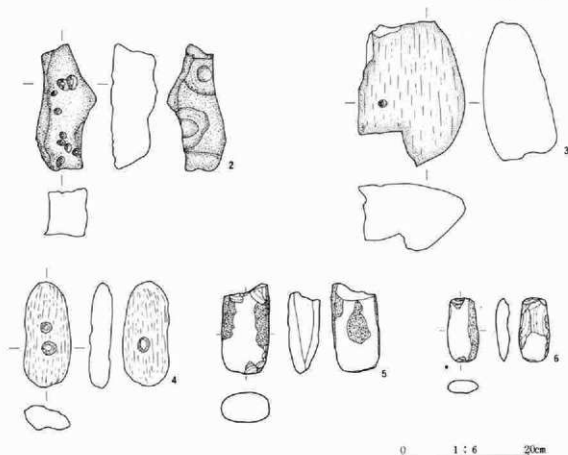
図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
227-6 122	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい橙色。	縄文と多線を施文。縄文原体はR1上縦転がし。沈線を施す。	配石南部と東端
227-7 122	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色。内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR1上縦転がし。漆帯を垂下。 土器面は柔軟。	配石中心部
227-8 122	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はふい黄橙色。内面は灰黄褐色。	糸線を施文後、縄文施文。 原体はR1上縦転がし。	配石北西部

22号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
229-1 122	石 皿 部分	砂岩		(50.0)	(27.1)	7.5	(18,000)	未製品の可能性がある。	配石南西部
230-2 122	多 孔 石 部分	砂岩		(19.9)	(9.5)	7.3	(1,200)	両面に11個の凹み。最大の凹みは長23mm、短15mm、深3mm。最小は長11mm、短8mm、深1mmで、平均は長15mm、短11mm、深3mm。一部被熱。	配石北部
230-3 122	多 孔 石 部分	点紋緑泥片岩		(22.8)	(16.9)	11.6	(4,980)	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は14mm、短径12mm、深さ4mmである。凹みの凹みとは異なっている。	配石中央部
230-4 122	凹 石 完形	胡荽母石黒片岩		16.6	7.7	3.8	650	両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短21mm、深1mm。最小は長18mm、短17mm、深3mmで、平均は長21mm、短18mm、深2mm。全面焼けている。	配石南端
230-5 122	磨製石斧 基部欠損	輝緑岩		(15.0)	7.0	4.5	(870)	組打段階。	埋礎近く
230-6 122	磨製石斧 完形	輝緑岩		10.1	5.0	2.2	160	磨き途中。片面に大きく粗削り痕残す。	配石北端



第229図 22号配石遺構出土石器 (1)



第230図 22号配石遺構出土石器 (2)

25号配石遺構 (第231~237図、PL. 122)

位置 Fp-53・54グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西46m (遺構の中心までの距離)、24号配石遺構の北北西4m50cmの所に位置している。

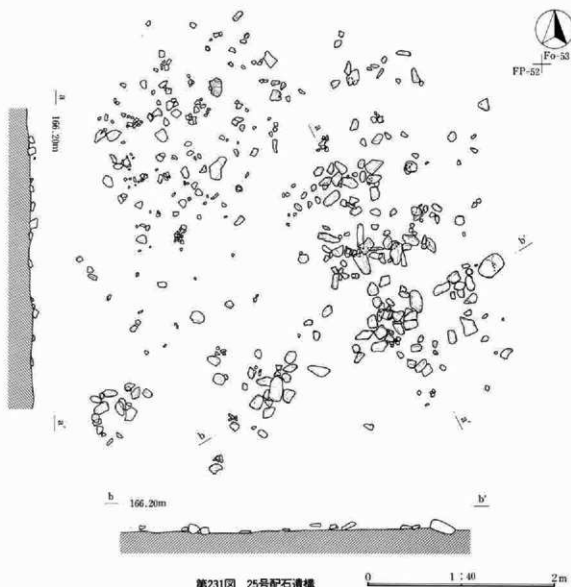
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。7月上旬に23~27号配石遺構を連続して検出し、8日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を行った。9日に実測作業を行い、遺物取り上げ作業を実施した。配石遺構下には土壌等の遺構は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m50cm、短径4m80cmの範囲に配石が施されているが、中心となる配石は、遺構北東から南西に直線的に配置される3ブロックと、遺構北西から南東に配置されるブロックになろう。これらを仮に1~6ブロックに分類した場合、それぞれの配石ブロックの規模は次のとおりである。1ブロックは長径80cm、短径40cmで石10点、2ブロックは長径1m、短径60cmで石22点、3ブロックは長径80cm、短径50cmで石14点、4ブロックは長径1m20cm、短径50cmで石31点、5ブロックは長径1m、短径60cmで石24点、6ブロックは長径70cm、短径50cmで石18点となり、それぞれ小規模な配石である。配石の総面積は約18.6㎡となる。

使用石材 27種類の石材が確認された。234点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩72点 (30.8%)、珪石23点 (9.8%)、点紋緑泥片岩19点 (8.1%)、絹雲母緑泥石墨片岩16点 (6.8%)、輝緑岩13点 (5.6%)、輝岩10点 (4.3%)、緑泥片岩10点 (4.3%)、点紋石墨緑泥片岩10点 (4.3%)、石墨片岩9点 (3.8%)、点紋絹雲母石墨片



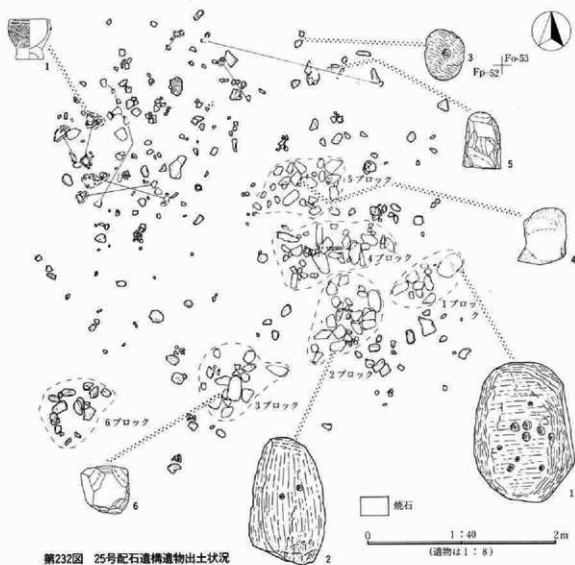
第231図 25号配石遺構

岩7点(3%)、赤色珪質板岩4点(1.7%)、斑岩3点(1.3%)、石墨緑泥片岩・緑泥石墨片岩・角閃岩・熱変成岩・砂岩・千枚岩各2点(各0.9%)、絹雲母緑泥片岩・チャート・絹雲母片岩・紅泥片岩・綠色珪質板岩・変斑岩・蛇紋岩・緑糜石英片岩各1点(各0.4%)であり、不明は17点(7.3%)を数えた。不明の石を除いた217点中152点(70%)の石が片岩類である。

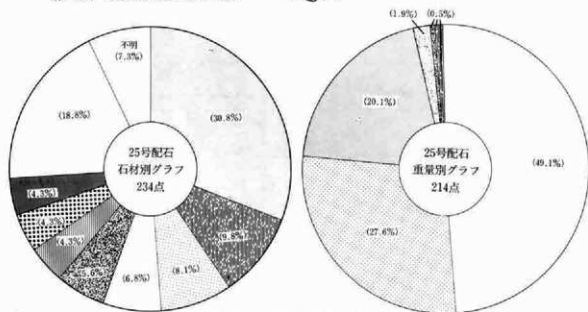
石材重量 重量の判明している石は214点である。その内訳は、500g未満の石105点(49.1%)、500g～1kg未満の石59点(27.6%)、1kg～2.5kg未満の石43点(20.1%)、2.5kg～5kg未満の石1点(0.5%)、5kg～7.5kg未満の石4点(1.9%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.5%)、10kg～20kg未満の石1点(0.5%)である。

遺物出土状況 小型土器1点を含め、土器片197点が出土している。その部位別点数は、口縁部41点、胴部154点、底部2点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。配石遺構の北西部に土器片が集中して出土し、接合関係も認められる。石器では多孔石2点が1ブロックと2ブロック、石皿の破片は5ブロック、凹石1点は遺構北端、磨製石斧は3ブロックから1点、北端から1点が出土している。石器含有率は2.7%であり、また焼石は234点中8点の出土で、3.4%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

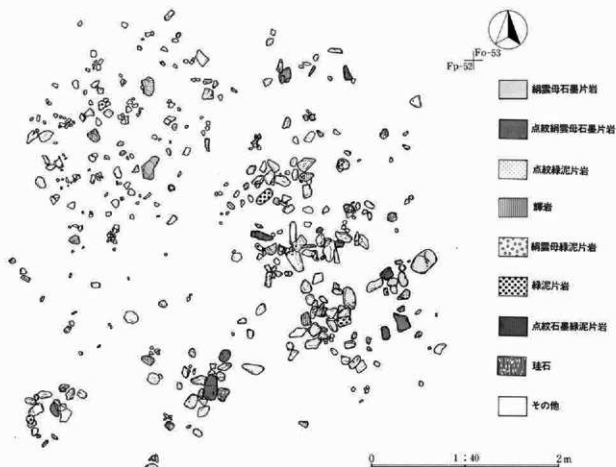


第232図 25号配石遺構遺物出土状況



第233図 25号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

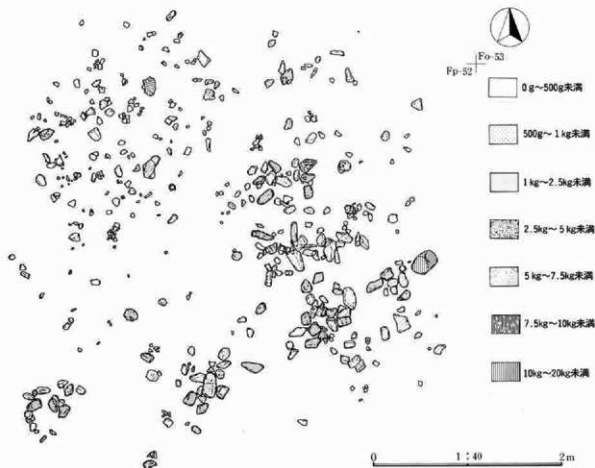
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第234図 25号配石遺構石材別分布

25号配石遺構土器観察表

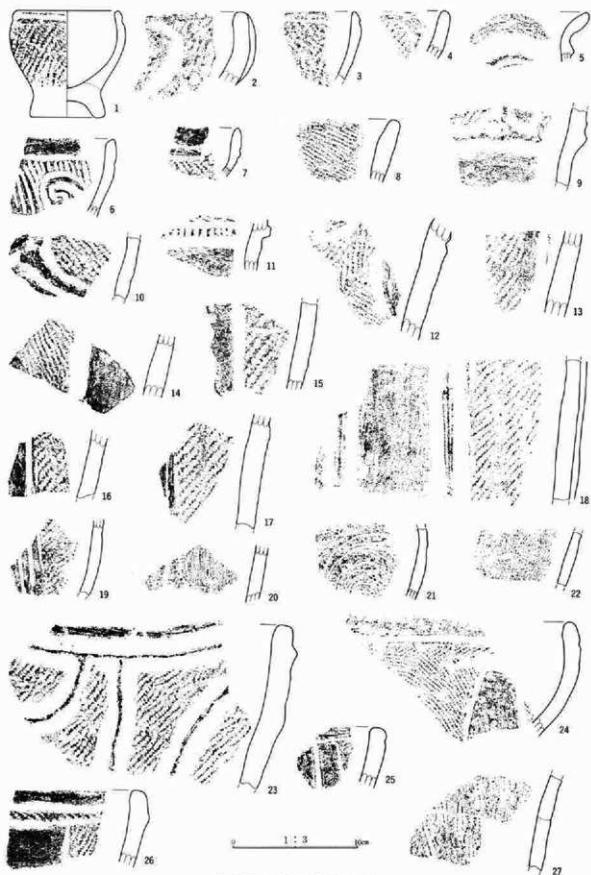
図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
236-1 122	小型 土器	①中粒の砂を混入 ②良	小型土器の突起品。口径82mm、器高84mm、底径58mm。内面は横方向の調整。 外面の色調は明黄褐色。内面はにぶい黄褐色。	口縁部には1条の沈線を巡らせ、以下縄文施文。原体はR(上)縦転がし。底部付近には縦・横方向のミガキ。	配石北西部
236-2	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面は褐色。	口縁部はやや内湾する。沈線による槽円等の文様を描き、縄文施文。 原体はL(上)横転がし。	配石北西部
236-3	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はにぶい黄褐色。	口縁部はやや内湾する。1条の沈線を巡らせ、縄文施文。原体はR(上)横・縦転がし。	配石中心部
236-4	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は黒褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)横・縦転がし。沈線による文様を描く。	配石南西部
236-5	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面はにぶい褐色。	波状口縁部片。太い沈線による槽円等の文様を描く。	配石東部
236-6	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	口縁部に1条の沈線を巡らす。隆帯による溝巻き等の文様が描かれる。区内内には縦位の沈線を描く。	配石北端
236-7	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は褐色。	口縁部に狭い無文部。隆帯に沿って2条の円形刺突文を施す。以下縄文施文。 原体はR(上)横転がし。	配石西部



第235図 25号配石遺構重量別分布

25号配石遺構土器観察表

調査 PL	①土器 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
236-8 122	口縁 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	小型土器の口縁部片。器厚11~14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は上より褐色、内面は明褐色。	地文に縄文施文。原体はR()横転がし。	配石東部
236-9 122	口縁 部片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は上より黄褐色、内面は褐色。	縄帯と沈線による箱内等の文様を描く。 区画内に縄文施文。原体はL()横転がし。	配石北東部
236-10 122	口縁 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は淡黄色。	沈線による箱内等の文様を描く。区画内に 縄文施文。原体はR()横転がし。	配石北西部
236-11 122	口縁 部片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	縄帯に刺突が施されている。	配石東端
236-12 122	割部 片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚16~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	地文に縄文施文。原体はL()横・縦転がし。 沈線による文様を描かれている。	配石北部
236-13 122	割部 片 ①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚14~16mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は上より褐色。	地文に縄文施文。原体はR()縦転がし。 沈線による文様を描かれている。外面に縄が付着している。	配石北部
236-14 122	割部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚12~15mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は上より黄褐色、内面は明褐色。	縄束起帯による文様を描かれ、磨り消し及び 縄文を描す。原体はL()縦転がし。	配石北西部



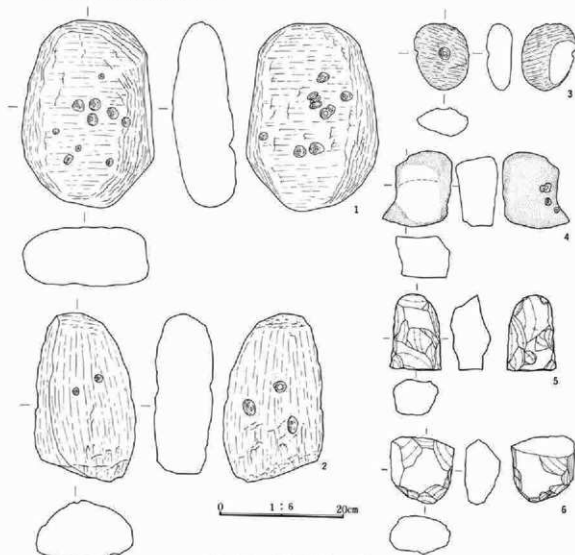
第236図 25号配石遺構出土土器

25号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位 ①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
236-15 122	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	地に縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 沈線を下垂。	配石北西端
236-16 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。	地に縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 沈線を下垂。	配石西部
236-17 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	地に縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 沈線を下垂。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石中心部
236-18 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい黄褐色。	微隆起の巻垂文によって区画している。 地に縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北部
236-19 122	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。	地に縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 沈線を下垂。	配石中心部
236-20 122	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	条線を施している。	配石中心部
236-21 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線による文様が描かれている。	配石北西部
236-22 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は明褐色。	条線が施されている。	配石北西部
236-23 122	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	波状口縁部片。微隆起等による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR(土)縦紋がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北部
236-24 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗褐色。	口縁部は内高し。1条の沈線を通らせる。 「U」状の沈線による文様が描かれ、磨り 消し及び縄文施文。原体はL(土)横・縦紋。 口縁部に1条の沈線を通らせる。沈線を下垂 している。	配石北西部
236-25 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	口縁部に1条の沈線を通らせる。沈線を下垂 している。	配石北西部
236-26 122	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。	口唇下に微隆起帯を横位に通らせる。これと 接続させて沈線を下垂させる。区画内には R(土)縦紋し。微隆起帯上にはR(土)横位。	配石西部
236-27 122	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は明赤褐色。	押し引き状の沈線を施している。	配石西部

25号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
237-1 122	多孔石	完形	胡荽母石黒片岩	29.5	29.9	10.3	9,500	両面に20個の凹み。最大の凹みは長25mm、短19mm、 深8mm。最小は長10mm、短9mm、深3mmで、平均 は長10mm、短13mm、深5mm。	1ブロック
237-2 122	多孔石	完形	胡荽母石黒片岩	26.5	16.0	9.5	5,400	両面に5個の凹み。最大の凹みは長25mm、短20mm、 深7mm。最小は長11mm、短9mm、深3mmで、平均 は長19mm、短15mm、深5mm。	2ブロック
237-3 122	凹石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	10.5	8.8	4.5	550	片面に1個の凹みがある。長径20mm、短径18mm、 深さ3mmである。	配石北端
237-4 122	石	皿部分	砂岩	(12.1)	(10.8)	6.6	(990)	破片。裏面に3個の凹みがある。凹みの平均は長・ 短径ともに1cm、深さ2mmである。	5ブロック
237-5 122		刃部欠損	角閃岩	(12.0)	8.1	6.1	(160)	粗割り途中。	配石北端
237-6 122		一端欠損	輝緑岩	(10.5)	10.1	6.0	(1,000)	粗割り途中。両面に自然面を残す。	3ブロック



第237図 25号配石遺構出土石器

27号配石遺構 (第238～244図、PL. 69、122・123)

位置 Fq-48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西44m (遺構の中心までの距離)、26号配石遺構の南南東6mの所に位置している。

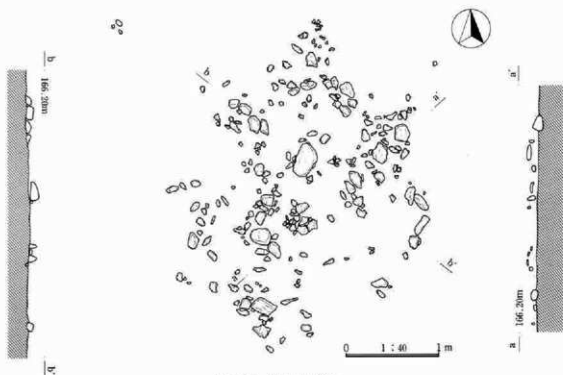
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。7月上旬に23～27号配石遺構を連続して検出し、10日に写真撮影を行った。その後、他遺構の調査を実施し、9月下旬に遺物の取り上げを行った。11月に入って配石遺構の石の取り上げを実施し下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。26号配石遺構に近接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m、短径2m50cmの範囲に配石が施されている。中心に大きな多孔石を配置し、それを囲うように石の分布が認められる。配石の面積は約7.1㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。169点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩46点(27.2%)、輝岩15点(8.9%)、輝緑岩13点(7.7%)、点紋石墨緑泥片岩12点(7.1%)、珪石9点(5.3%)、緑泥片岩8点(4.7%)、絹雲母緑泥石墨片岩7点(4.1%)、点紋緑泥片岩・チャート・緑色建築板岩各5点(各3%)、斑岩4点(2.4%)、



第238図 27号配石遺構

4%)、点紋絹雲母石墨片岩・石墨片岩各3点(各1.8%)、絹雲母緑泥片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・角閃岩・熱変成岩・砂岩各2点(各1.2%)、赤色珪質板岩・石墨緑泥片岩・緑簾緑泥片岩・石墨絹雲母片岩・角内石石墨片岩・点紋石墨絹雲母片岩各1点(各0.6%)であり、不明は18点を数えた。不明の石を除いた151点中93点(61.6%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は159点である。その内訳は、500g未満の石95点(59.7%)、500g～1kg未満の石31点(19.5%)、1kg～2.5kg未満の石26点(16.4%)、2.5kg～5kg未満の石5点(3.1%)、5kg～7.5kg未満の石1点(0.6%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.6%)である。

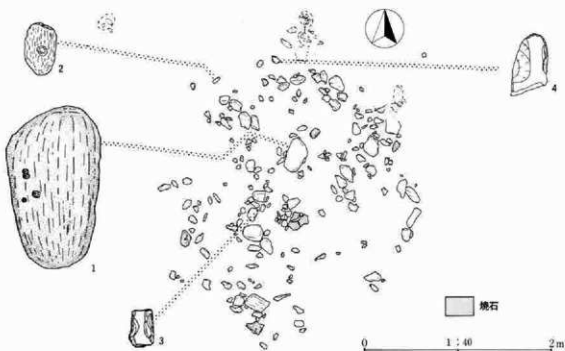
遺物出土状況 配石の中心に点紋緑泥片岩の多孔石が出土している。遺構はこの多孔石中心に構築され、このほかに凹石1点が遺構西北端から、打製石斧1点は中心部から、磨製石斧の未製品1点は北端からそれぞれ出土している。石器含有率は2.4%である。また焼石は169点中7点の出土で、4.1%を占めていた。土器片は口縁部11点、胴部58点、底部2点の計71点が出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

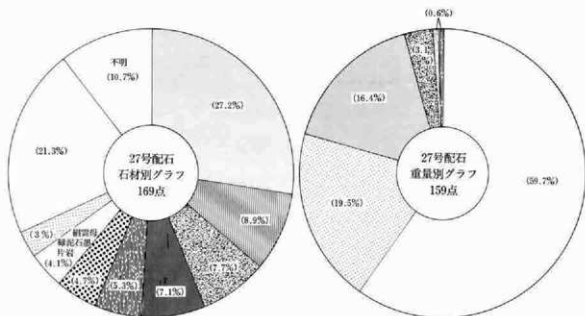
27号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①軸土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
243-1 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい灰黄褐色、内面は黒褐色。	口唇下に狭い無文帯をおき、1条の比線を通らせる。以下に縄文施文。原体はR()縦転がし。	配石北西部
243-2 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13～16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい赤褐色。	口唇下に狭い無文帯をおき、微隆起帯を横位に通らせる。以下縄文施文。原体はR()。微隆起帯上は横位、以下縦位。	配石中心部
243-3 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい赤褐色。	口縁部はやや内湾し、幅広い無文帯をおく。以下縄文施文。原体はR()縦転がし。	配石北東端

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第239図 27号配石遺構遺物出土状況

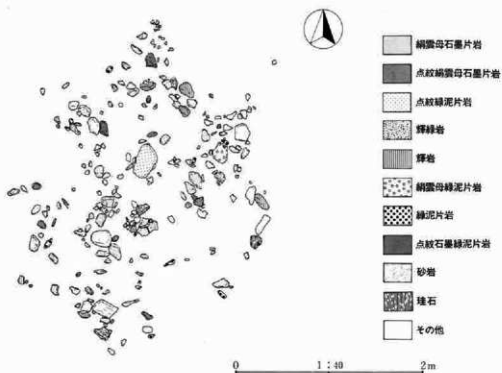


第240図 27号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

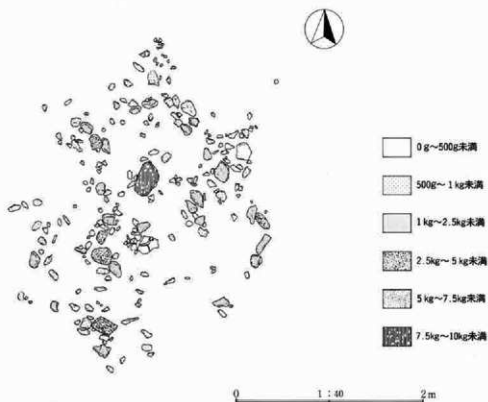
27号配石遺構土層観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
243-4 122	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。	口縁部は内押し、狭い無文帯をおく。1条 の沈線を通らせ、以下縄文施文。 原体はL(1)回転がし。	配石南部
243-5 122	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	隆帯による横内等の文様を描き、区画内に 縄文施文。原体はR(1)回転がし。	配石中心部

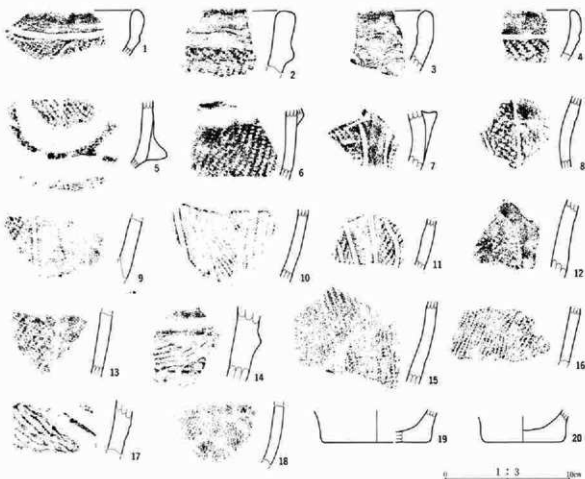
5 配石遺構 (27号)



第241図 27号配石遺構石材別分布



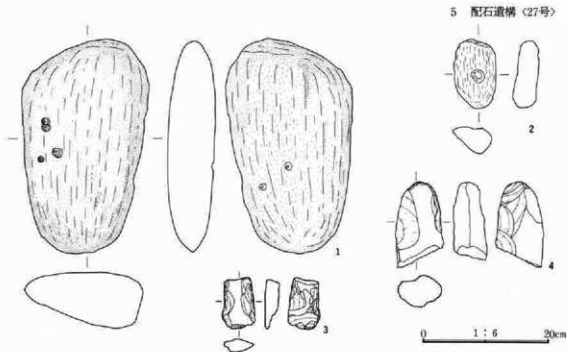
第242図 27号配石遺構重量別分布



第243図 27号配石遺構出土土器

27号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 交焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
243-6 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は褐色。	微隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石中心部
243-7 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。	沈線による区画を施し、縄文施文。 原体はL(上)縦転がし。	配石北端
243-8 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。	沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石南西部
243-9 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。	沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石中心部
243-10 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。	沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はL(上)縦転がし。 外面に傷が付着している。	配石中心部
243-11 122	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を下下。	配石南部
243-12 122	胴部 片	①細粒の砂を混入。 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい褐色。	細沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。 外面は荒れている。	配石東部



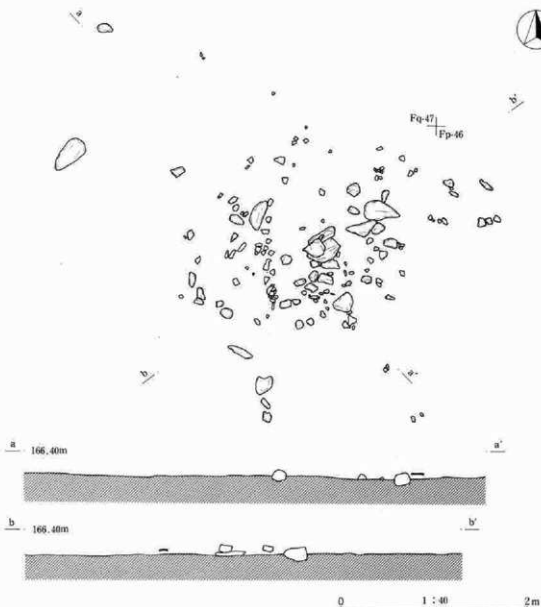
第244図 27号配石遺構出土石器

27号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様 (その他)	出土状況
243-13 122	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線による文様が描かれ、内部に縄文施文。 原体はR(Ⅰ)縦転がし。 外面は荒れている。	配石中心部
243-14 122	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚16~18mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい褐色。	微隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR(Ⅰ)縦転がし。	配石北西端
243-15 122	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚8~10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦転がし。	配石北部
243-16 122	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR(Ⅰ)縦転がし。	配石北西端
243-17 122	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚11~13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。	溝帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文施文。原体はR(Ⅰ)横転がし。	配石西部
243-18 122	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	糸線が描かれている。	配石中心部
243-19 122	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径86mm。 外面の色調は灰褐色、内面は黒灰色。	内外面は丁寧な調整が行われている。 内面に傷が付着している。	配石南東部
243-20 122	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径62mm。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。	内外面は丁寧な調整が行われている。	配石北東端

27号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
244-1 123	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	33.8	20.3	8.3	8,600	両面に6個の凹み。最大の凹みは長15mm、短13mm、深5mm、最小は長11mm、短10mm、深2mmで、平均は長13mm、短11mm、深3mm。	配石中央部
244-2 123	凹石	完形	網雲母石墨片岩	11.0	6.8	4.2	450	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は22mm、短径19mm、深さ2mmである。	配石西北端
244-3 123	打製石斧	基部欠損	熱変成岩	(8.1)	5.2	2.3	(100)	バチ(H b)。基部と比較して非常に薄手の刃部を持つ。	配石中央部
244-4 123		刃部欠損	輝緑岩	(13.4)	7.6	5.2	(740)	破打途中、両面に割裂り痕状。	配石北端



第245図 28号配石遺構

28号配石遺構 (第245～250図, PL. 69, 123)

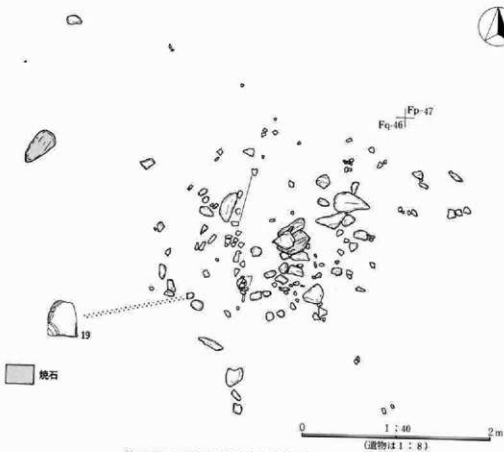
位置 Fq-46グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南西44m(遺構の中心までの距離)、27号配石遺構の南11mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に遺構を確認、13日に写真撮影を実施した。1/10実測図を作成後、遺物の取り上げ作業を実施。当遺構は27号配石遺構と同様に自然の疎層上に構築されていたために、その把握は困難を極めた。配石遺構の石の取り上げを実施し下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

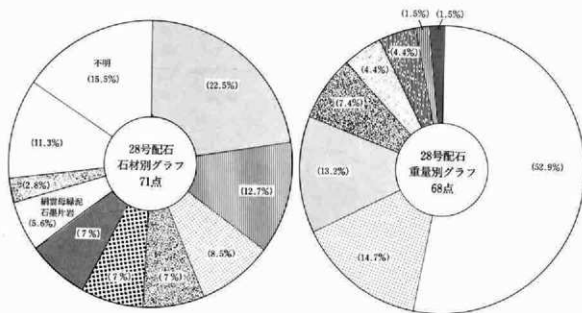
重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

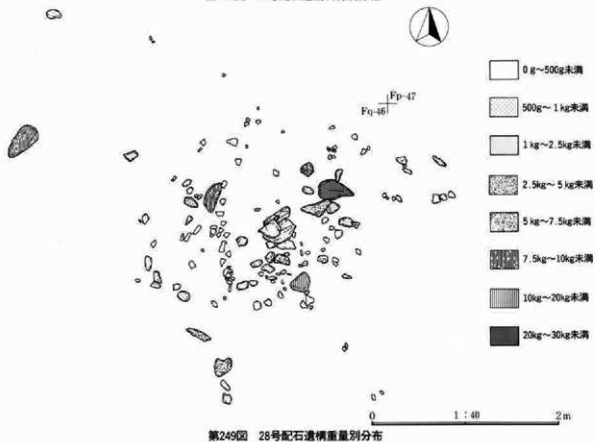
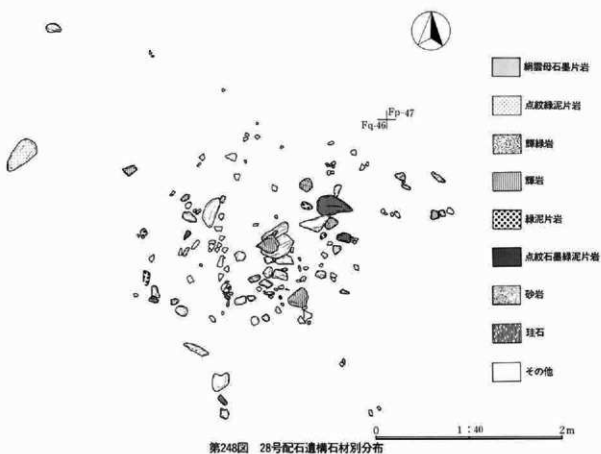
形状・配石状況 長径3m、短径2m30cmの半円状の範囲に石の集中と土器片の分布が認められる。71点の石から構成され、中心部にやや大きな石を配置している。配石の中心に大きな石を配置するのは27号配石遺構



第246図 28号配石遺構遺物出土状況



第247図 28号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



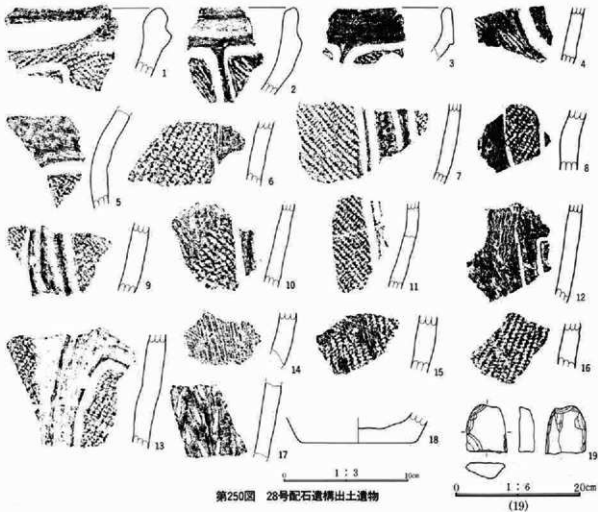
と同じである。配石の面積は約6.9㎡である。

使用石材 14種類の石材が確認された。71点の石材別点数は網雲母石墨片岩16点(22.5%)、輝岩9点(12.7%)、点紋緑泥片岩6点(8.5%)、輝緑岩・緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各5点(各7%)、網雲母緑泥石墨片岩4点(5.6%)、網雲母石墨緑泥片岩・砂岩・珪石各2点(各2.8%)、石墨緑泥片岩・紅麿網雲母片岩・角閃岩・変斑輝岩各1点(各1.4%)であり、不明は11点(15.5%)を数えた。不明の石を除いた60点中40点(66.7%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は68点である。その内訳は、500g未満の石36点(52.9%)、500g～1kg未満の石10点(14.7%)、1kg～2.5kg未満の石9点(13.2%)、2.5kg～5kg未満の石5点(7.4%)、5kg～7.5kg未満の石3点(4.4%)、7.5kg～10kg未満の石3点(4.4%)、10kg～20kg未満の石1点(1.5%)、20kg～30kg未満の石1点(1.5%)である。

遺物出土状況 縄文土器片82点(口縁部10点、胴部71点、底部1点)が配石中心のやや大きな石を囲うように分布している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。磨製石斧の未製品1点が出土し、焼石は71点中4点で、5.6%を占めている。

所見 出土遺物から判断して当遺構は、縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



第250図 28号配石遺構出土遺物

(19)

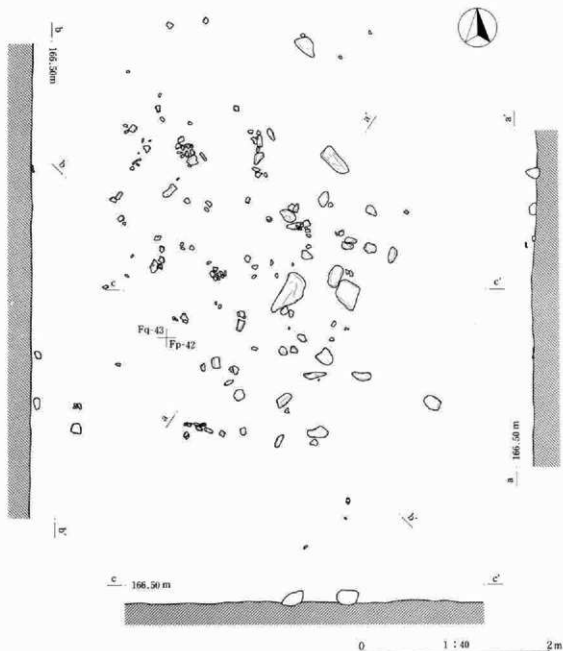
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

28号配石遺構石器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
250-1 123	口縁 部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は灰褐色。	波状口縁部片。太い沈線による文様が描かれ、地文に縄文施文。 原体はL〔〕縦転がし。	配石西部
250-2 123	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は明褐色。	口縁部はやや内湾。口唇下に狭い無文帯をおき、1条の微隆起帯を巡らす。それと連続する微隆起帯を垂下。区画内にL〔〕縦転がし。	配石東部
250-3 123	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	沈線により横内帯の文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石南西部
250-4 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい赤褐色。	微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文施文。原体はL〔〕縦転がし。	配石東部
250-5 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はぶい黄褐色。	微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 内面に縦がけが着いている。	配石西部
250-6 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石西部
250-7 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。	微隆起帯を巡らせ、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石北西部
250-8 123	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石中心部
250-9 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石南西部
250-10 123	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は黒色。	地文に縄文施文。原体はL〔〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北東部
250-11 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL〔〕縦転がし。	配石北西部
250-12 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。	沈線と糸線が施される。	配石東端
250-13 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石南東部
250-14 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい褐色。	糸線を施している。	配石東南端
250-15 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい赤褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石西端
250-16 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石西部
250-17 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はぶい褐色。	押し引き状の沈線を施している。	配石東部
250-18 123	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底厚90mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はぶい黄褐色。	底面はやや荒れている。	配石南西部

28号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)	特 徴	出土状況			
250-19 123	刃部欠損	輝緑岩		全長 7.7	幅 6.7	厚 2.5	重量 (190)	削割り段階。	配石南西



第251図 29号配石遺構

29号配石遺構 (第251～257図、PL. 70、123)

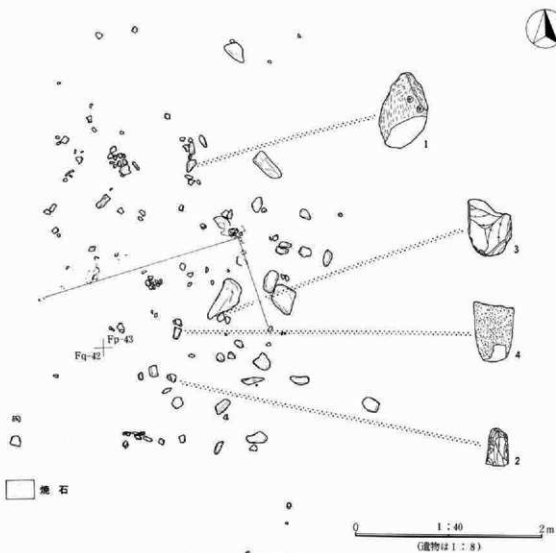
位置 Fp・Fq-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南42m (遺構の中心までの距離)、47号配石遺構の南南東5m50cmの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月13日に28・30号配石遺構と同時に写真撮影を実施した。1/10実測図作成の後、遺物取り上げ作業を実施した。その後、配石遺構の石を取り上げ、下部の調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

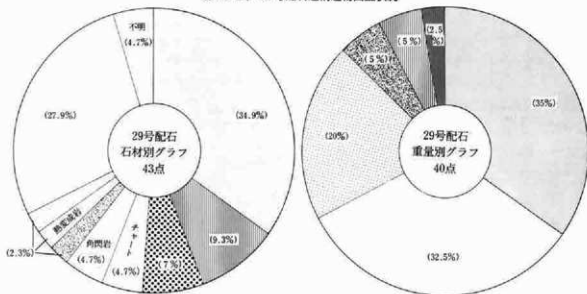
重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m90cm、短径3m50cmの範囲に配石が施されている。43点の石と106点の土器片から

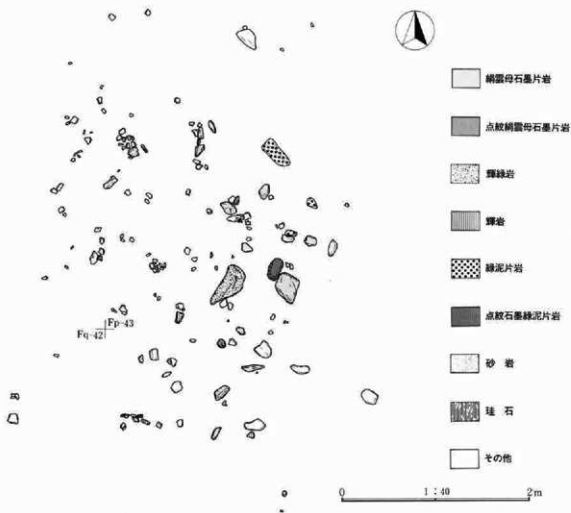


第252図 29号配石遺構遺物出土状況



第253図 29号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ

5 配石遺構 (29号)



第254図 29号配石遺構石材別分布

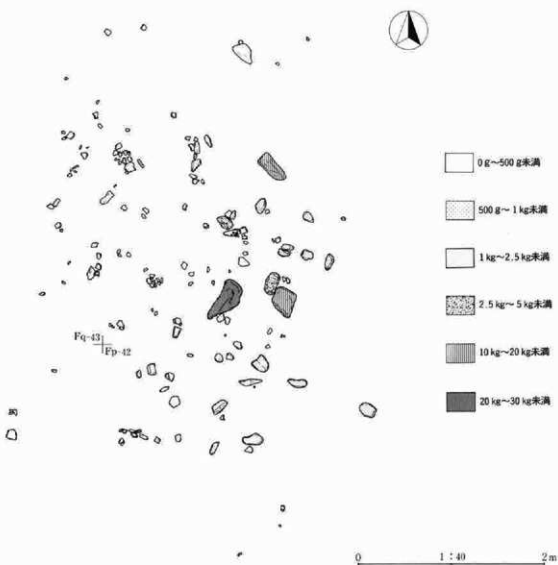
構成されていた。遺構東部にやや大きな石を使用している。配石の面積は約11.7㎡である。

使用石材 20種類の石材が確認された。43点の石材別点数は網雲母石墨片岩15点(34.9%)、輝岩4点(9.3%)、緑泥片岩3点(7%)、チャート・角閃岩各2点(各4.7%)、輝綠岩・点紋網雲母石墨片岩・網雲母綠泥石墨片岩・綠雲綠泥片岩・石墨網雲母片岩・点紋石墨綠泥片岩・石墨片岩・綠泥石墨片岩・紅雲網雲母片岩・網雲母片岩・点紋網雲母石墨綠泥片岩・熱変成岩・砂岩・綠色珪質板岩・珪石各1点(各2.3%)であり、不明は2点(4.7%)を数えた。不明の石を除いた41点中28点(68.3%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は40点である。その内訳は、1kg~2.5kg未満の石14点(35%)、500g未満の石13点(32.5%)、500g~1kg未満の石8点(20%)、2.5kg~5kg未満の石2点(5%)、10kg~20kg未満の石2点(5%)、20kg~30kg未満の石1点(2.5%)である。

遺物出土状況 106点の縄文土器片が遺構周辺から満遍なく出土している。土器片の部位別点数は、口縁部9点、胴部93点、底部4点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も含まれていた。石器では多孔石1点が遺構北部から、未製品を含めた磨製石斧2点は南西部から、打製石斧1点は南端から出土し、また石皿(未掲載)が立石として転用されていた。石器含有率は11.6%である。また焼石は43点中3点の出土で、7%を占めている。

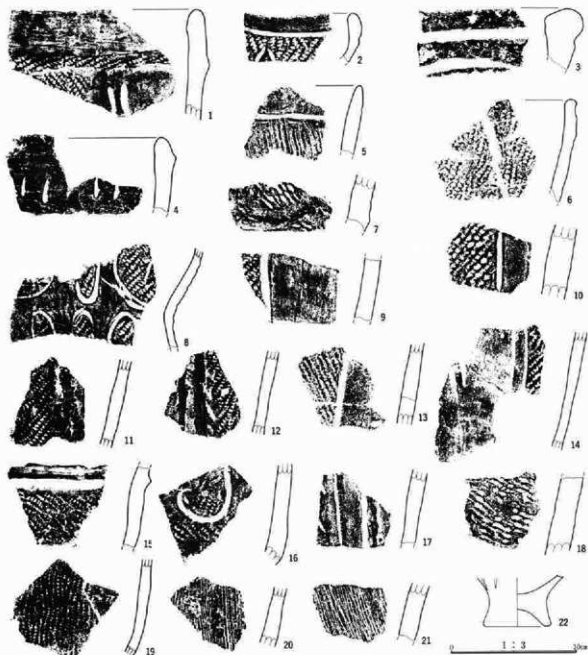
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



第 255 図 29号配石遺構重量別分布

29号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①土器 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
256-1 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。	口唇部に無文帯をおいて、1条の微隆起帯 を巡らす。それと接続するように微隆起帯 を垂下。区画内にしじ目文。	配石西部
256-2 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。	内湾する波状口縁部片。口唇部は無文で1 条の沈線を通らせる。胴部は沈線による文 様が描かれ縄文施文。原体はR17横・縦位。	配石北西部
256-3 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚20~30mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面はにぶい褐色。	隆帯と沈線による積円等の文様が描かれて いる。	配石北西部 いる。
256-4 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らす。以下押し引き状の沈線を施文。	配石中心部
256-5 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線 を巡らせる。以下条線を描している。	配石北西部



第 256 図 29 号配石遺構出土土器

29号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位 ①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
256-6 123	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 紋線は施している。 土器面は染紋。	配石北東部
256-7 123	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明褐色。	踏跡による指内等の文様を描いている。 区画内に縄文施文。原体はR(下)横転がし。	配石北端
256-8 123	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚5~8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色。	口縁部は内湾し、胴部で折れる器形と推定 される。文様は指線跡によって描かれ、区 画内に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石西部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

29号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
256-9 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。	沈線により区画され、区画内に縄文施文。 原体はR1(±)縦転がし。	配石北部
256-10 123	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。	細沈線により区画され、区画内に縄文施文。 原体はR1(±) (0段多乘) 縦転がし。	配石北部
256-11 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面はにぶい褐色。	隆帯を垂下させ縄文施文。 原体はR1(±)縦転がし。 土器面は柔軟。	配石南部
256-12 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	隆帯を垂下させ縄文施文。 原体はR1(±)縦転がし。 土器面は柔軟。	配石北東部
256-13 123	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL1(±)縦転がし。 沈線を垂下。	配石南東端
256-14 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚7~9mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	ナデつけによる微隆起帯を垂下させ、縄文 施文。原体はR1(±)縦転がし。	配石北西部
256-15 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の割部片。器厚10~12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐灰色。	1条の無隆起帯を巡らせ、以下縄文施文。 原体はR1(±)。	配石北部
256-16 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚11~14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR1(±)。 沈線。	配石北西部
256-17 123	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は灰赤色。	微隆起帯を垂下させ、押し引き状沈線を施 している。	配石東部
256-18 123	割部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚18mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は褐灰色。	縄文施文。原体はL1(±)縦転がし。 土器面は柔軟。	配石中心部
256-19 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。	縄文施文。原体はR1(±)。 外面は荒れている。	配石北部
256-20 123	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。	糸線を施している。 内面に窪が付き着している。	配石中心部
256-21 123	割部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は褐色。	糸線を施している。	配石南部
256-22 123	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	底径55mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は黒褐色。	細沈線が施されている。	配石北東部

29号配石遺構土器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
257-1 123	多孔石	%	網罟母石片岩	(15.3)	10.3	6.9	(900)	両面に3個の凹み。最大の凹みは長14mm、短14mm、深5mm、最小は長11mm、短10mm、深3mmで、平均は長13mm、短12mm、深4mm。	配石北端
257-2 123	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(8.0)	4.7	1.5	(100)	バチ (II b)。	配石南端
257-3 123		基部欠損	角閃岩	(12.3)	9.3	6.1	(900)	粗割り段階。	配石中央部
257-4 123	磨製石斧	基部欠損	緑泥片岩	(12.5)	8.7	5.7	(1,050)	敲打途中。片面に自然面を残す。	配石中央部



第257図 29号配石遺構出土石器

30号配石遺構 (第258～264図, PL. 71, 123)

位置 Fs-42グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南60m(遺構の中心までの距離)、31号配石遺構の南南東5mの所に位置している。

経過 0区(昭和162年度調査区)から検出。7月上旬に遺構を検出し、13日に写真撮影を実施した。その後、図面の作成、遺物取り上げを行い、下部調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。31号配石遺構に近接している。

覆土 竅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

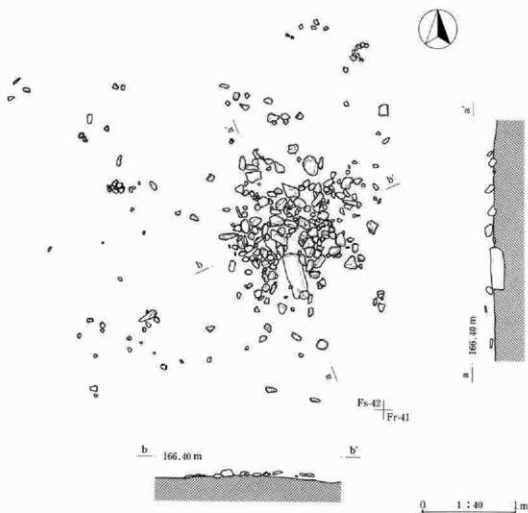
形状・配石状況 長径1m60cm、短径1m50cmの範囲に集中して石が配置されている。この配石の南端には、長径49cm・短径20cm・厚さ19cm・重量28.8kgの大石が配置されているが、当初は立石として機能していたものであろうか。配石の面積は約2.6㎡である。またこの配石の周囲にも散漫的な石の分布が認められる。

使用石材 27種類の石材が確認された。197点の石材別点数は絹雲母石墨片岩58点(29.4%)、珪石20点(10.2%)、緑泥片岩16点(8.1%)、点紋緑泥片岩15点(7.6%)、輝岩12点(6.1%)、輝緑岩10点(5.1%)、点紋石墨片岩9点(4.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩6点(3%)、点紋絹雲母石墨片岩5点(2.5%)、斑岩4点(2%)、絹雲母緑泥片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩各3点(各1.5%)、赤色珪質板岩・チャート・緑泥片岩・紅泥片岩各2点(各1%)、石墨絹雲母片岩・絹雲母石墨片岩・角閃岩・点紋絹雲母片岩・輝緑板岩・熱変成岩・綠色珪質板岩・石英安山岩・石英斑岩各1点(各0.5%)であり、不明は13点(6.6%)を数えた。不明の石を除いた184点中128点(70%)の石が片岩類である。立石の可能性のある石の石材は点紋絹雲母石墨片岩である。

石材重量 重量の判明している石は189点である。その内訳は、500g未満の石139点(73.5%)、500g～1kg未満の石26点(13.8%)、1kg～2.5kg未満の石19点(10.1%)、2.5kg～5kg未満の石4点(2.1%)、20kg～30kg未満の石1点(0.5%)である。最大重量は立石の可能性のある石であった。

遺物出土状況 94点の土器片が出土している。その部位別点数は口縁部10点、胴部81点、底部3点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石2点、凹石2点、敲石1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器含有率は3%である。また焼石は197点中17点の出土で、8.6%を占めている。

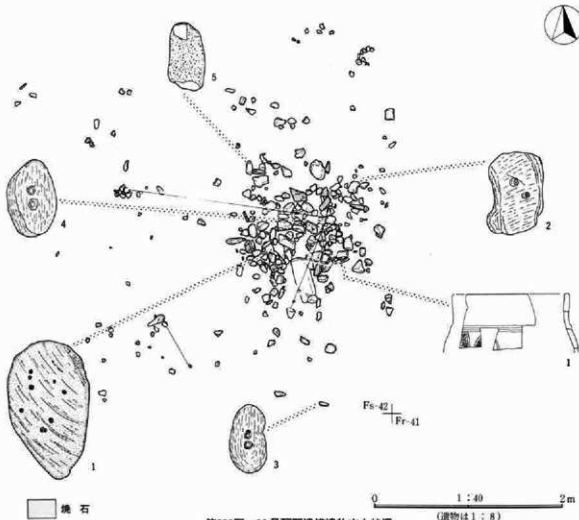
所見 当遺構は立石を有する配石遺構の可能性が高いが、下部には土壌は存在しなかった。出土遺物から判断して、縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



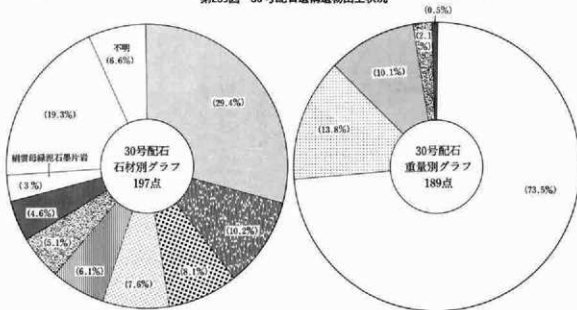
第258図 30号配石遺構

30号配石遺構土器観察表

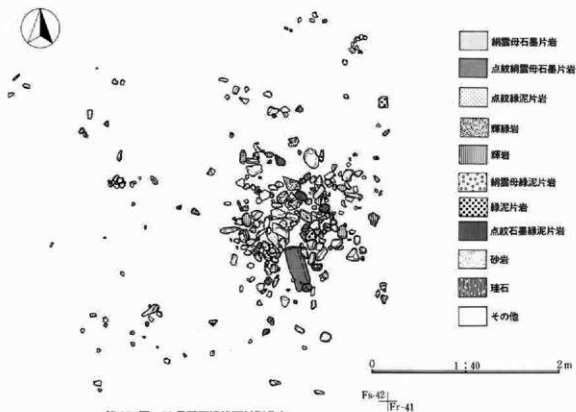
図番 PL	①出土 部位 ②構成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
263-1 123	①細粒の砂を混入 部 ②良	浅鉢形土器(陶耳型)の破片。器厚11mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	口唇下に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らせる。胴部には沈線で「V」字 状や「口」状の区画文を施す。 区画内にL を縦転がし。	配石中心部
263-2 123	①細粒の砂を混入 部 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	口縁部はやや内湾する。隆帯と沈線による 楕円等の文様を描く。地文に縄文施文。原 体はR を横転がし。	配石北西部
263-3 123	①細粒の砂を混入 部 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。	口縁部はやや内湾する。1条の沈線を通ら せ、垂下する。区画内に縄文施文。原体は L を縦転がし。土器面は柔軟。	配石北東部
263-4 123	①中粒の砂を混入 部 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~16mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	隆帯と沈線による楕円等の文様の描かれ、 地文に縄文施文。原体はR を横転がし。 外面は荒れている。	配石北西部
263-5 123	①細粒の砂を混入 部 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~17mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	1条の微隆起帯を巡らせ、垂下。区画内に 縄文施文。原体はL を縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北西部
263-6 123	①細粒の砂を混入 部 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はR を縦転がし。	配石北東部



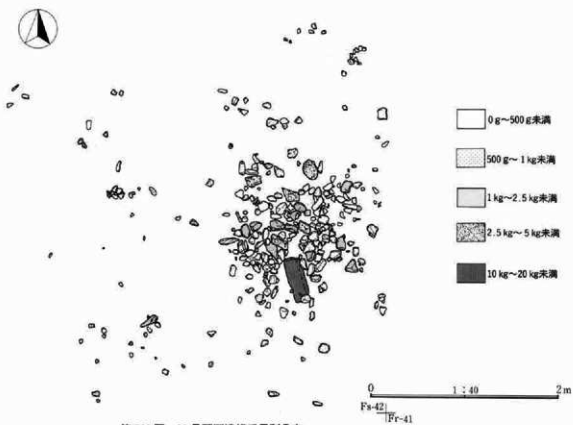
第259図 30号配石遺構遺物出土状況



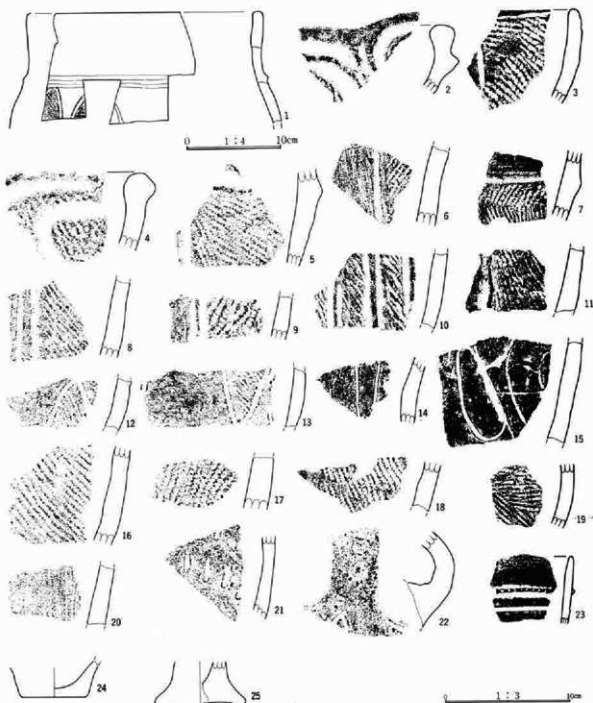
第260図 30号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第 261 図 30号配石遺構石材別分布



第 262 図 30号配石遺構重量別分布



第263図 30号配石遺構出土土器

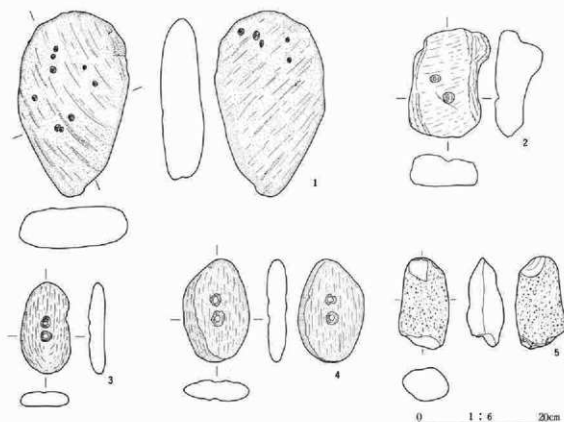
30号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
263-7 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面はよい赤褐色。	口縁部は無文帯となり、微隆起帯を帯らせ る。以下縄文施文。原体はL(長楎)・縦帯が し。	配石中心面
263-8 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい橙色。	地文に縄文施文。原体はL(長楎)がし。太 い糸と細い糸を使用。沈線を垂下。 外面は荒れている。	配石南西面

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

30号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
263-9 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄色、内面は褐色。	微隆起帯を垂下させ、区内内に縄文施文。 原形はR〔土〕縦転がし。	配石南東部
263-10 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい褐色。	微隆起帯を垂下させ、区内内に縄文施文。 原形はL〔土〕縦転がし。 土器面は柔軟。	配石北東部
263-11 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。	微隆起帯を垂下させ、区内内に縄文施文。 原形はL〔土〕縦転がし。 土器面は柔軟。	配石南西部
263-12 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	細沈線による「V」字状の文様を並び、区 面内に縄文施文。原形はL〔土〕縦転がし。	配石中心部
263-13 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	細沈線による「V」字状の文様を並び、区 面内に縄文施文。原形はL〔土〕縦転がし。	配石北西部
263-14 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は灰褐色。	細沈線による文様が描かれている。	配石西部
263-15 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は稍い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。	細沈線による文様が描かれている。	配石中心部
263-16 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原形はL〔土〕縦転がし。	配石南西部
263-17 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色。	縄文施文。原形はR〔土〕縦転がし。	配石中心部
263-18 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は明赤褐色。	縄文施文。原形はL〔土〕縦転がし。	配石北東部
263-19 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縄文施文。原形はL〔土〕。	配石北西部
263-20 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は灰褐色。	条線を加している。	配石北東部
263-21 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい橙色。	押し引き状の沈線を加している。	配石南西部
263-22 123	把手 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	楕状把手。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	細沈線を加している。	配石中心部
263-23 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい橙色、内面は灰褐色。	口唇部に突起が付く。1条の隆線を巡らし 刻みが施されている。形之内2式土器片。	配石南西部
263-24 123	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径52mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は橙色。		配石中心部
263-25 123	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	底径70mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面は灰褐色。		配石南西部



第264図 30号配石遺構出土石器

30号配石遺構石器観察表

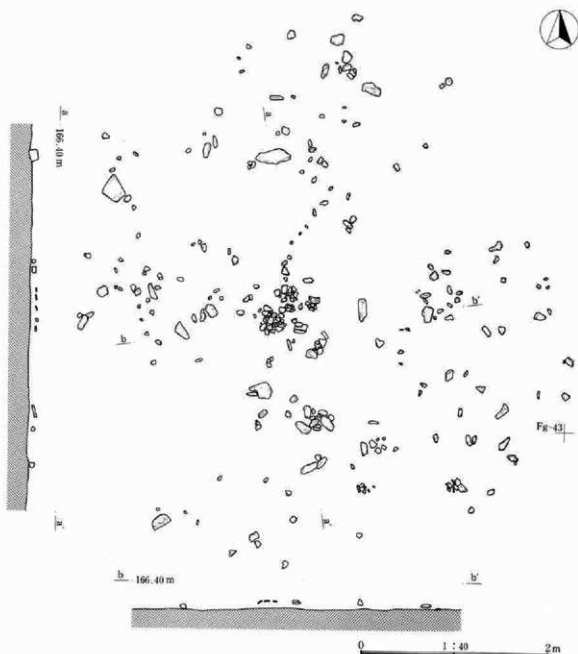
図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
264-1 123	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	27.7	19.7	6.9	5,200	両面に14個の凹み。最大の凹みは長13mm、短10mm、深3mm。最小は長7mm、短7mm、深1mmで、平均は長9mm、短8mm、深2mm。	配石中央部
264-2 123	多孔石	完形	網雲母石黒片岩	17.3	13.0	7.5	2,000	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径15mm、深さ5mmである。	配石北東部
264-3 123	凹石	完形	点紋緑泥片岩	14.7	7.9	2.7	500	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径16mm、深さ3mmである。全面磨けている。	配石南端
264-4 123	凹石	完形	点紋緑泥片岩	16.3	10.7	3.3	800	両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、深3mm。最小は長17mm、短14mm、深1mmで、平均は長20mm、短17mm、深2mm。	配石中央部
264-5 123	磨製石斧	刃部欠損	輝緑岩	(14.6)	8.1	6.8	(980)	敲打途中。一部に自然面を残す。	配石北西部

31号配石遺構 (第265～270図、PL. 72、123・124)

位置 F_s-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西60m (遺構の中心までの距離)、30号配石遺構の北北西5mの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に遺構を検出し、14日に全景写真と部分写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げと配石遺構の石の取り上げを行い、11月に入って下部調査を実施したが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。30号配石遺構に近接している。

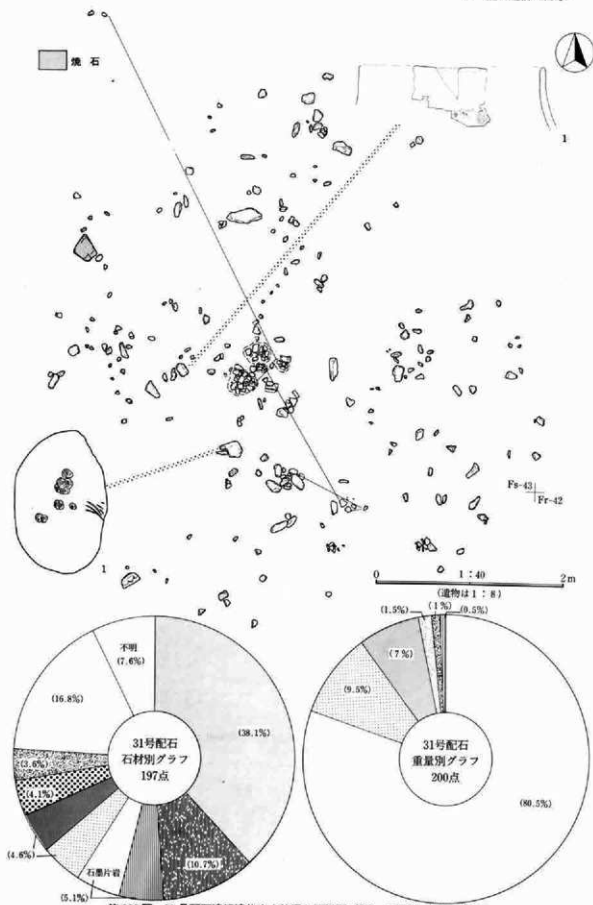


第265図 31号配石遺構

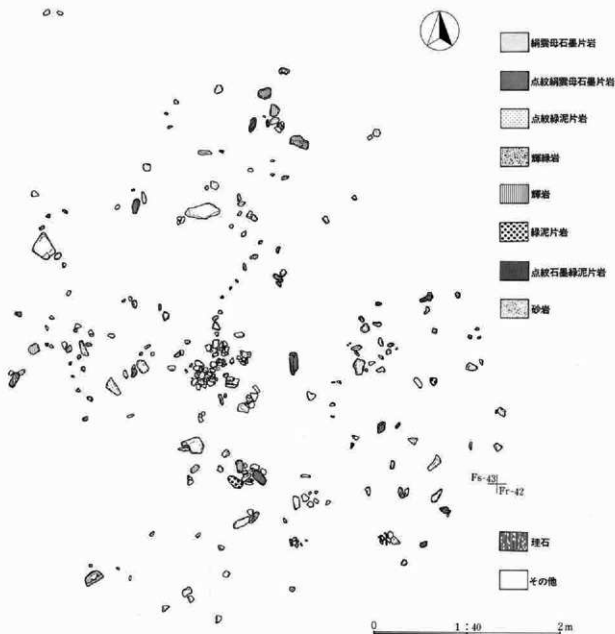
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m、短径4m50cmの範囲に散漫的に石が分布している。隣接している30号配石遺構の石の配置とは非常に異なっている。配石の中心には土器片が集中している。配石の面積は約24.3㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。197点の石材別点数は、網雲母石墨片岩75点(38.1%)、珪石21点(10.7%)、輝岩・石墨片岩各10点(各5.1%)、点紋緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩各9点(各4.6%)、緑泥片岩8点(4.1%)、輝緑岩・点紋網雲母石墨片岩各7点(各3.6%)、網雲母緑泥石墨片岩5点(2.5%)、変斑岩3点(1.5%)、赤色珪質板岩・チャート・緑簾緑泥片岩・紅簾網雲母片岩・綠色珪質板岩各2点(各1.2%)、網雲母片岩・点紋網雲母緑泥石墨片岩・角閃岩・輝緑凝灰岩・砂岩・凝灰岩・千枚岩・珪岩各1点(各0.5%)であり、不明は15点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた182点中128点(70.3%)の石が片岩類である。



第 266 図 31 号配石遺構遺物出土状況と石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



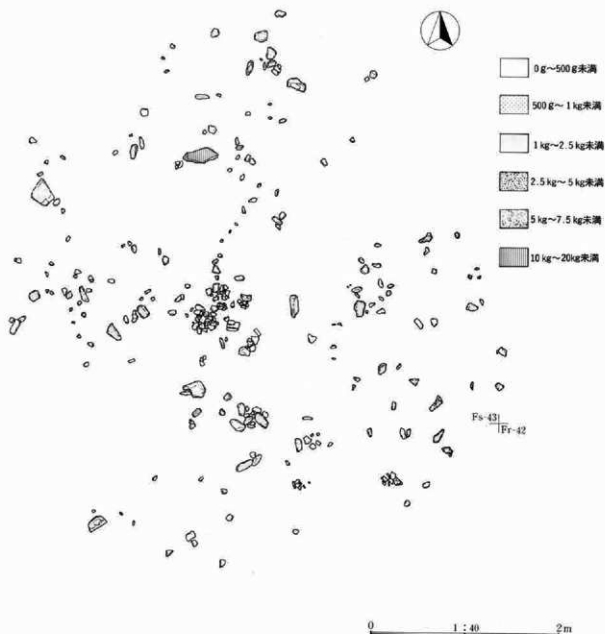
第 267 図 31 号配石遺構石材別分布

石材重量 重量の判明している石は200点である。その内訳は、500g未満の石161点(80.5%)、500g～1kg未満の石19点(9.5%)、1kg～2.5kg未満の石14点(7%)、5kg～7.5kg未満の石3点(1.5%)、2.5kg～5kg未満の石2点(1%)、10kg～20kg未満の石1点(0.5%)である。

遺物出土状況 71点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部6点、胴部64点、底部1点であり、配石の中心に集中して出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石1点が配石中心から南寄りに出土し、石器含有率は0.5%であり、また焼石は200点中5点の出土で、2.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

5 配石遺構 (31号)

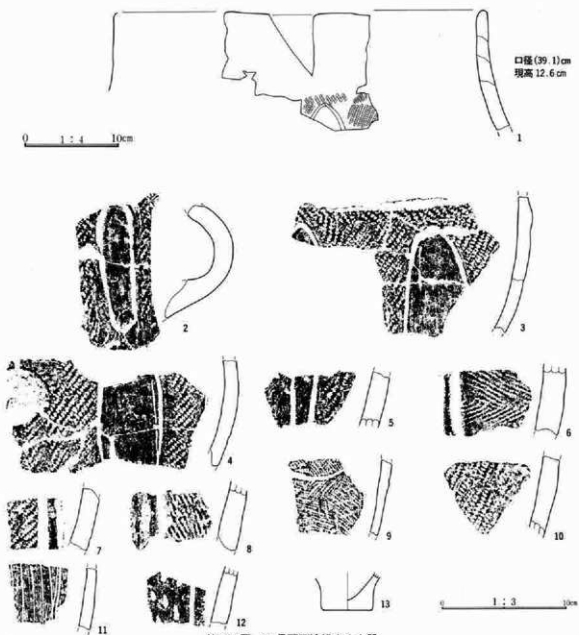


第268図 31号配石遺構重量別分布

31号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
269-1 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	器厚11~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を巡らす。微隆起帯上にはR(上)横転が し。以下細沈線による「∩」状の文様とR (上)縦位。	配石中心部
269-2 123	把手	①細粒の砂を混入 ②良	両耳型の把手部分。器厚20mm。 粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	沈線による横内文を描き、縦文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石中心部
269-3 123	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄色。	口縁部は無文帯となり、1条の微隆起帯を 巡らす。胴部は細沈線による「∩」状の文 様を描き、縦文施文。原体はR(上)横・縦 転がし。	配石中心部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



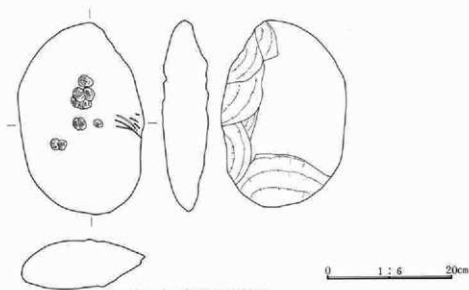
第269図 31号配石遺構出土土器

31号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位 ①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
269-4 123	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はよい褐色。	細沈線による文様を編み、区内内に縄文施文。原体はR1上縦転がし。	配石中心部
269-5 123	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明褐色。	縄文施文。原体はR1上縦転がし。 沈線を垂下。	配石南端
269-6 123	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色、内面は明赤褐色。	微隆起帯を垂下。区内内に縄文施文。 部体はL1上縦・横転がし。 外面に傷が付着している。	配石中心部
269-7 123	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はR1上縦転がし。 隆帯を垂下。	配石南東部

31号配石遺構土器観察表

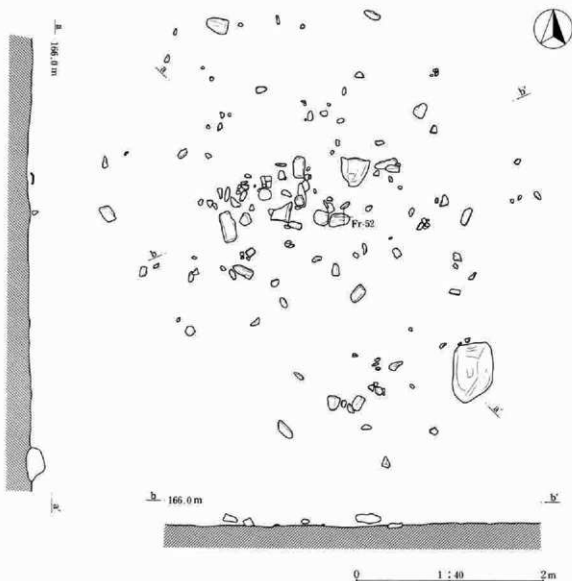
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
269-8 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。	微隆起帯による文様を描き、区画内に隅文 施文。原体はL1; 縦転がし。 押圧が強い。	配石南西部
269-9 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰黄褐色。	地文に隅文施文。原体はL1; 縦転がし。 比線による文様を描く。 土着面は柔軟。	配石中心部
269-10 123	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。	隅文施文。原体はR1; 縦転がし。	配石中心部
269-11 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~9mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はにぶい褐色。	条線を施している。	配石中心部
269-12 123	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。	沈線を垂下、区画内に刺突文を施している。	配石南東部
269-13 123	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	小型土器の底部片。底径13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はにぶい赤褐色。		配石中心部



第270図 31号配石遺構出土土器

31号配石遺構土器観察表

図番 PL	器 種	遺 存 状 況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全 長	幅	厚	重 量		
270-1 124	多 孔 石	ほぼ完形	網雲母石墨片岩	30.0	19.8	7.6	5.800	片面に10個の凹み。最大の凹みは長24mm、短19mm、 深6mm。最小は長16mm、短12mm、深1mmで、平均 は長20mm、短14mm、深3mm。全面に磨耗痕がみら れる。	配石の中 央から南



第271図 32号配石遺構

32号配石遺構 (第271～277図、PL. 73、124)

位置 Fr・Fs—52・53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西59m (遺構の中心までの距離)、25号配石遺構の西北西14mの所に位置している。

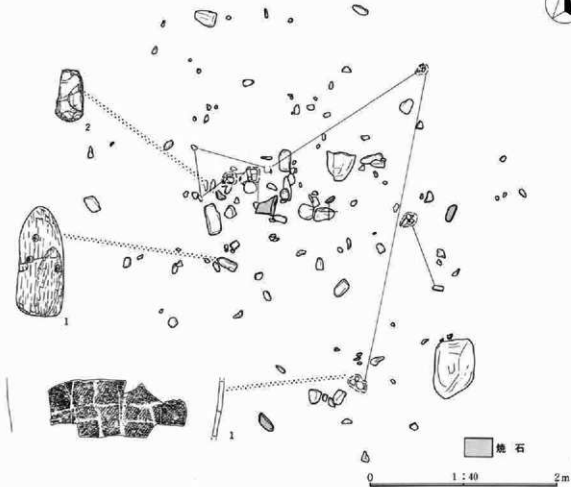
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月に入り調査を開始。10日に遺構の全景写真と部分写真の撮影を行い、実測作業に入った。遺物の取り上げは9月下旬に、配石遺構の石の取り上げは11月上旬に実施した。その後、下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

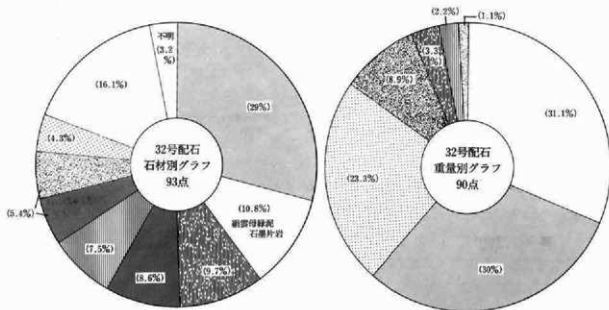
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径5m、短径4mの楕円形の範囲に石の分布が認められるが、集中する範囲は長径2m、短径80cmの配石の中心部である。配石全体の面積は約16.9㎡である。

使用石材 17種類の石材が確認された。93点の石材別点数は、網雲母石墨片岩27点(29%)、網雲母緑泥石石墨片岩10点(10.8%)、珪石9点(9.7%)、点紋石墨緑泥石片岩8点(8.6%)、輝岩7点(7.5%)、点紋網雲母石

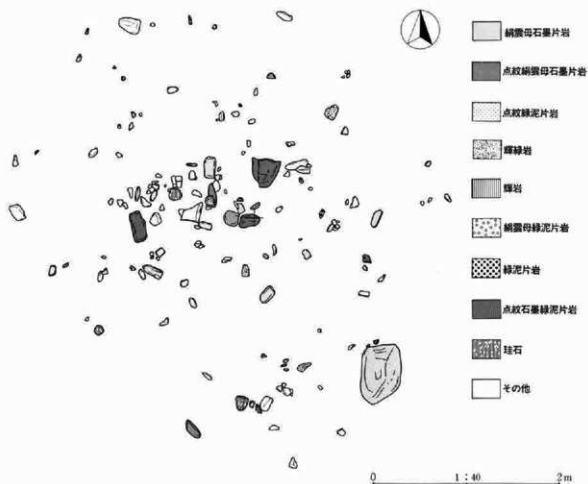


第272図 32号配石遺構遺物出土状況 (遺物は1:8)



第273図 32号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



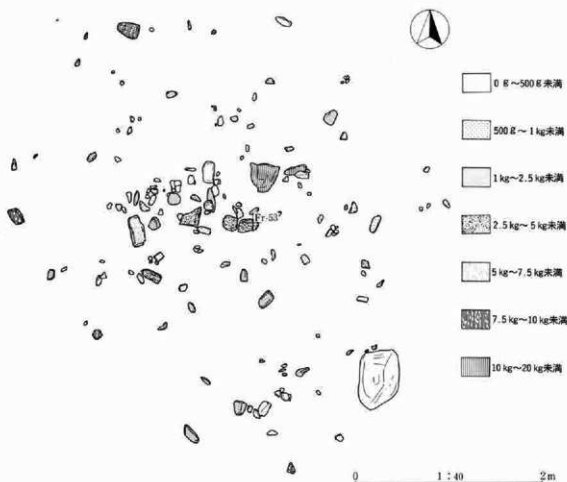
第274図 32号配石遺構石材別分布

墨片岩・輝緑岩各5点(各5.4%)、点紋緑泥片岩・チャート各4点(各4.3%)、緑泥片岩・石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩各2点(各2.2%)、点紋絹雲母緑泥片岩・綠色珪質板岩・熱変成岩・石英安山岩・珪岩各1点(各1.1%)であり、不明は3点(3.2%)を数えた。不明の石を除いた90点中61点(67.8%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は90点である。その内訳は、500g未満の石28点(31.1%)、1kg～2.5kg未満の石27点(30%)、500g～1kg未満の石21点(23.3%)、2.5kg～5kg未満の石8点(8.9%)、7.5kg～10kg未満の石3点(3.3%)、10kg～20kg未満の石2点(2.2%)、5kg～7.5kg未満の石1点(1.1%)である。

遺物出土状況 51点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部2点、胴部48点、底部1点であり、配石中心部に集中して出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では多孔石1点が中心部のやや南から、打製石斧1点は中心部の配石から出土している。石器含有率は2.2%である。また焼石は93点中7点の出土で、7.5%を占めている。

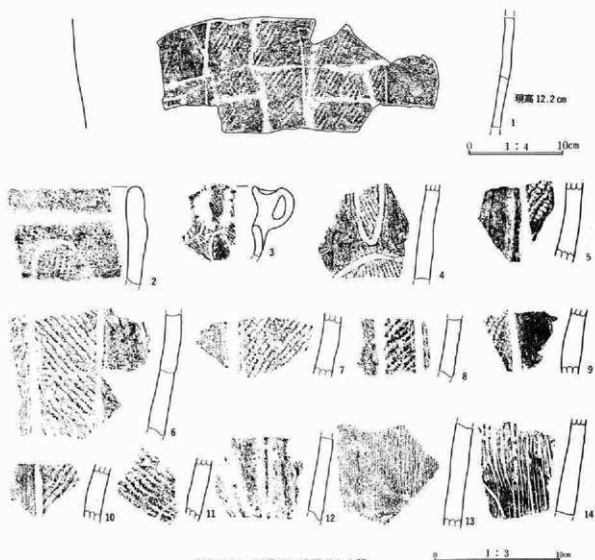
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



第 275 図 32 号配石遺構重量別分布

32号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
276-1 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は明褐色、内面はぶい赤褐色。	細沈線による区画が施され、区画内に縄文 施文。原体はR(上)腹転がし。 外面は荒れている。	配石中心部
276-2 124	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11~15mm。 内面は丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	口唇部に縄文帯、1条の微細起帯を巡らし、 胴部には細沈線による「U」状の文様。区 画内にR(上)腹転がし。 外面は荒れて、内面に煤付着。	配石中心部
276-3 124	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は褐色。	波状口縁。波頂部に橋状把手。口唇下に1 条の細沈線。刺突。胴上半に細沈線による 「U」状の文様。R(上)腹位。内面に煤付着。	配石北西部
276-4 124	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色。	沈線による「U」字状の文様が描かれ、区 画内に縄文施文。原体はL(上)腹転がし。 土器面は柔軟。	配石中心部
276-5 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	隆形を垂下させ、縄文施文。原体はR(上)腹 転がし。 土器面は柔軟。	配石南端
276-6 124	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい褐色。	沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はL(上)腹転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石南東部
276-7 124	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい黄褐色、内面は灰白色。	地に縄文と条線を描す。原体はR(上)腹転 がし。沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石南端



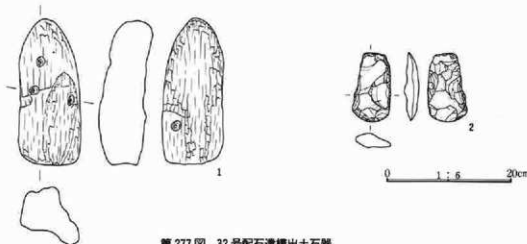
第276図 32号配石遺構出土土器

32号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
276-8 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は灰黄褐色。	縦比線を下下し、区内内に縄文施文。 原体はR(+)縦転がし。	配石中心部
276-9 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい橙褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原体はR(+);縦転がし。 比線を下下。	配石北西部
276-10 124	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はよい橙褐色。	縄文施文。原体はR(+);縦転がし。 比線を下下。	配石中心部
276-11 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR(+);(0段多糸)横転がし。	配石北東部
276-12 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい橙褐色、内面はよい赤褐色。	微縁起帯を下下させる。	配石中心部
276-13 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は褐色。	糸線が施されている。	配石南西部

32号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
276-14 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm、内面は横方向の調整が行われている。外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。		条線が施されている。土器面は柔軟。	配石南西部



第277図 32号配石遺構出土石器

32号配石遺構土器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特	徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量			
277-1 124	多孔石	突形	網雲母石墨片岩	23.1	9.8	9.0	2,700	周囲に4個の凹み。最大の凹みは長19mm、短14mm、深6mm。最小は長17mm、短14mm、深5mmで、平均は長18mm、短16mm、深6mm。全面磨けている。		配石の中
277-2 124	打製石斧	突形	熱変成岩	10.7	5.8	2.4	152	バチ(Hb)。片面に大きく自然面残る。		配石中央

33号配石遺構 (第278~283図、PL. 74・75、124)

位置 Gd-40・41・42、Ge-40・41・42グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西86m (遺構の中心までの距離)、34号配石遺構の北東に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月12日から34号配石遺構とともに調査を開始した。広範囲に土器片と石が分布しているために、遺構として把握することには疑問があった。しかし、当遺構の北側には土器片と石の分布はほとんど認められないために、配石遺構として調査を進めることになった。写真撮影と実測図の作成後、他遺構の調査を進め、遺物の取り上げを実施したのは12月に入ってからである。そして12月9日に配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査を実施したが遺構は検出できなかった。

重複 なし。34号配石遺構と接している。

覆土 竅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径10m、短径7mの広範囲に多量の石と土器片が分布している。この分布の北側には石と土器片の分布はほとんど認められないことから、配石遺構として把握した。この配石の面積は約62.9m²である。

使用石材 34種類の石材が確認された。641点の石材別点数は、網雲母石墨片岩221点(34.5%)、輝緑岩66点(10.3%)、点紋緑泥片岩52点(8.1%)、緑泥片岩41点(6.4%)、点紋網雲母石墨片岩32点(5%)、珪石27点(4.2%)、網雲母緑泥片岩23点(3.6%)、輝岩・石墨網雲母片岩各18点(各2.8%)、点紋網雲母緑泥片岩13点(2%)、網雲母緑泥石墨片岩・チャート各12点(各1.9%)、紅雲網雲母片岩9点(1.4%)、斑岩7点(1.1%)、輝緑岩6点(0.9%)、角閃岩各6点(各0.9%)、石墨片岩・綠色珪質板岩各5点(各0.8%)、珪岩4点

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

(0.6%)、石墨緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥石墨片岩・熱変成岩・砂岩各3点(各0.5%)、赤色珪質板岩・絹雲母片岩・変斑岩各2点(各0.3%)、滑石片岩・安山岩・緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・輝緑凝灰岩・硬砂岩・点紋絹雲母片岩・閃輝緑岩各1点(各0.16%)であり、不明は38点(5.9%)を数えた。不明の石を除いた603点中444点(73.6%)の石が片岩類である。

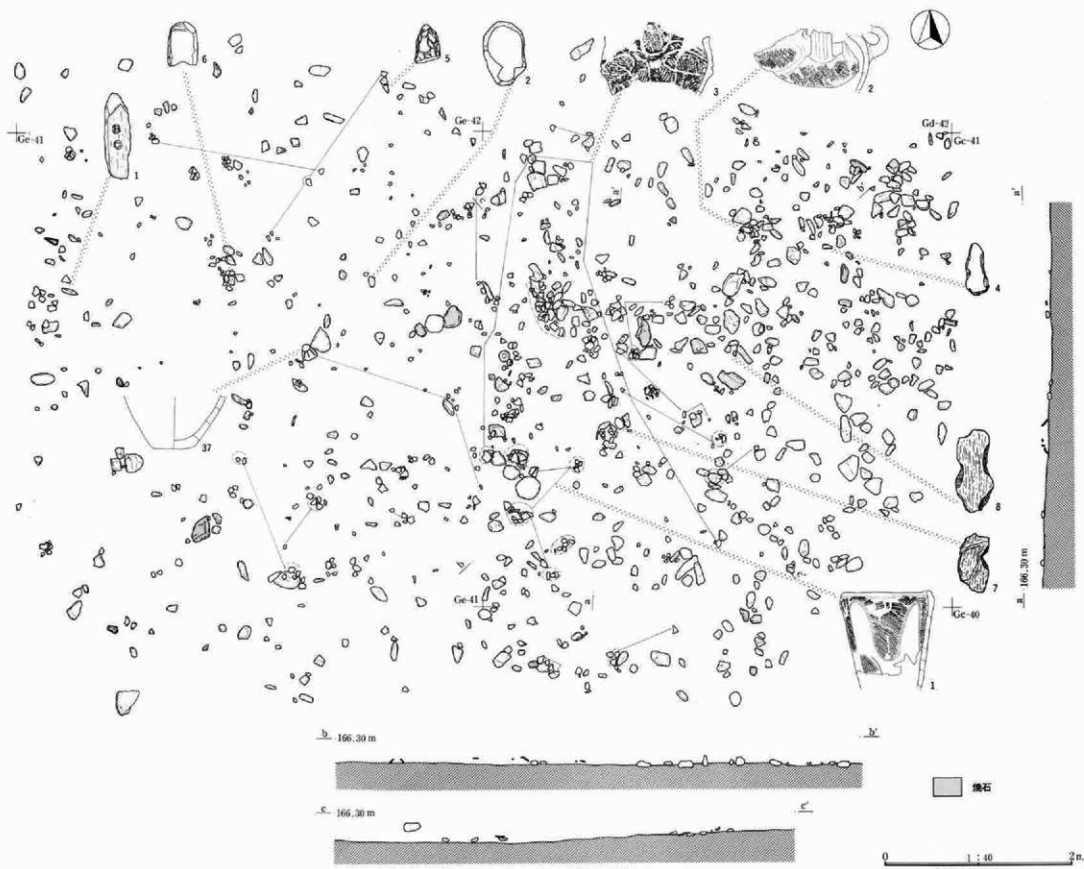
石材重量 重量の判明している石は634点である。その内訳は、500g未満の石350点(55.2%)、500g～1kg未満の石120点(18.9%)、1kg～2.5kg未満の石114点(18%)、2.5kg～5kg未満の石35点(5.5%)、5kg～7.5kg未満の石6点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石5点(0.8%)、10kg～20kg未満の石4点(0.6%)である。

遺物出土状況 533点の土器片が遺構内から満遍なく出土しているが、とりわけ中央部分に集中している。接合関係は広範囲に認められる。部位別点数は、口縁部86点、胴部427点、底部20点である。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も出土している。石器では凹石1点が西端から、磨石は2点のうち1点は中央西寄りに出土し、打製石斧4点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器の含有率は1.2%であり、また焼石は641点中29点の出土で、4.5%を占めている。

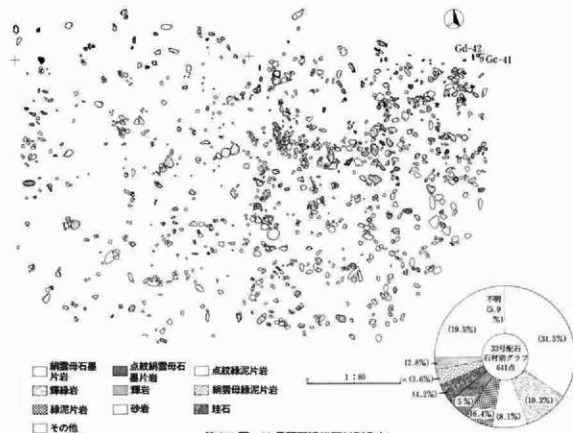
所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。

33号配石遺構土器観察表

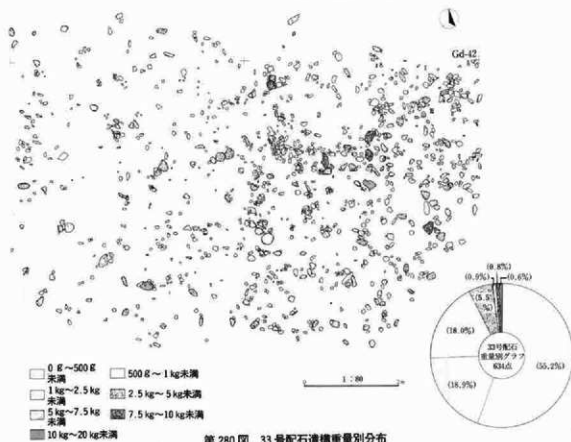
図番 PL	部位 ①軸土 ②構成(遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
281-1 124	胴下 半部 欠損 ②やや良	深鉢形土器の胴下半部欠損。器厚10mm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は褐色。	口縁部はやや内湾。口唇部に狭い無文帯をおき、1条の縦沈線を送らせる。胴上半部に縦沈線による波状文を描き、区画内に縄文施文。原形はL[]。胴下半部は「U」状の文様。区画内L[]。	配石中心部
281-2 124	口縁 部～ 胴上 半	浅鉢形土器(内耳付)の口縁部～胴上半。 器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	口縁部に無文帯。胴部に横状把手。隆起配帯による横内区画を施し、区画内に縄文施文。原形はR[](0段多条)横位。胴上半R[](0段多条)縦・横位。 土器面は柔軟で、硬直が強い。	配石北東部
281-3 124	口縁 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10～12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面はにぶい黄褐色。	口唇部に突起。口縁部は隆帯と沈線による横内等の文様を描き、内部に縄文施文。原形はR[]横位。胴部はR[]縦位。沈線を下下。	配石中心部 ～北部
281-4 124	口縁 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12～24mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	口縁部は内湾する。隆帯と沈線による渦巻き等の文様を描き、地文に縄文施文。原形はR[]横・縦転がし。	配石北端
281-5 124	口縁 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は褐色。	口縁部は内湾する。隆帯と沈線による横内等の文様を描き、地文に縄文施文。原形はR[]横転がし。内外面に横付着。	配石西部
281-6 124	口縁 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6～12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は褐色。	口縁部は内湾する。沈線による文様を描き、地文に縄文施文。原形はR[]縦・横転がし。	配石北部
281-7 124	口縁 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰黄褐色。内面は褐色。	口縁部は内湾する。沈線による文様を描き、縄文施文。原形はR[]縦転がし。	配石西部
281-8 124	口縁 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は明赤褐色。	口縁部はやや内湾する。口唇部に1条の沈線を送らせ、以下沈線で「U」状の文様を描き区画内に縄文施文。原形はR[]縦・斜位。	配石南西部
281-9 124	口縁 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12～15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面は明赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、沈線により文様を描き、区画内に縄文施文。原形はR[]横転がし。	配石南西部
281-10 124	口縁 部片 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は褐色。	内湾する波状口縁部片。口縁部に1条の沈線を送らせ、以下「U」状の沈線を送る。地文に縄文施文。原形はL[]縦位。 内外面に横が付着している。	配石南部
281-11 124	口縁 部片 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色。内面は明赤褐色。	沈線による「U」状の文様を描き、縄文施文。原形はR[]横転がし。	配石東部



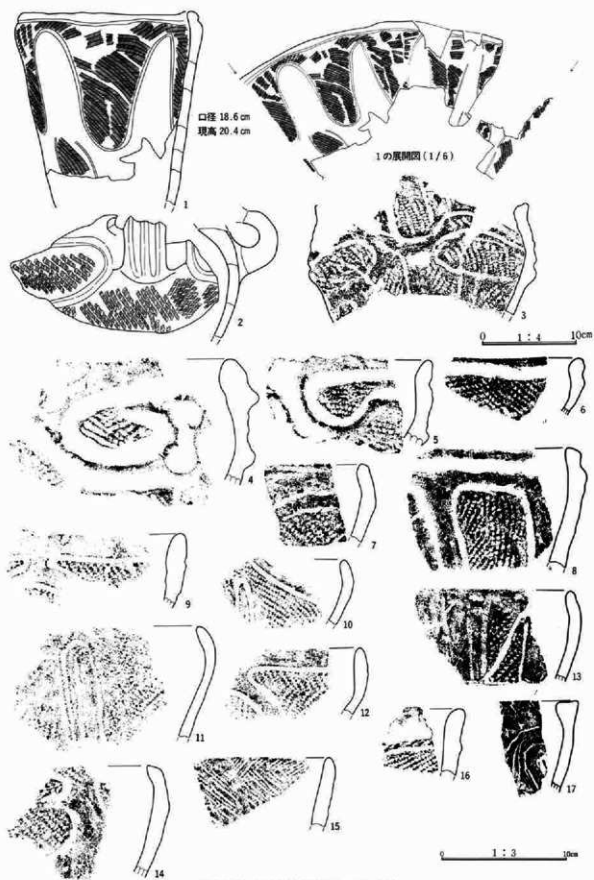
第278図 33号配石遺構



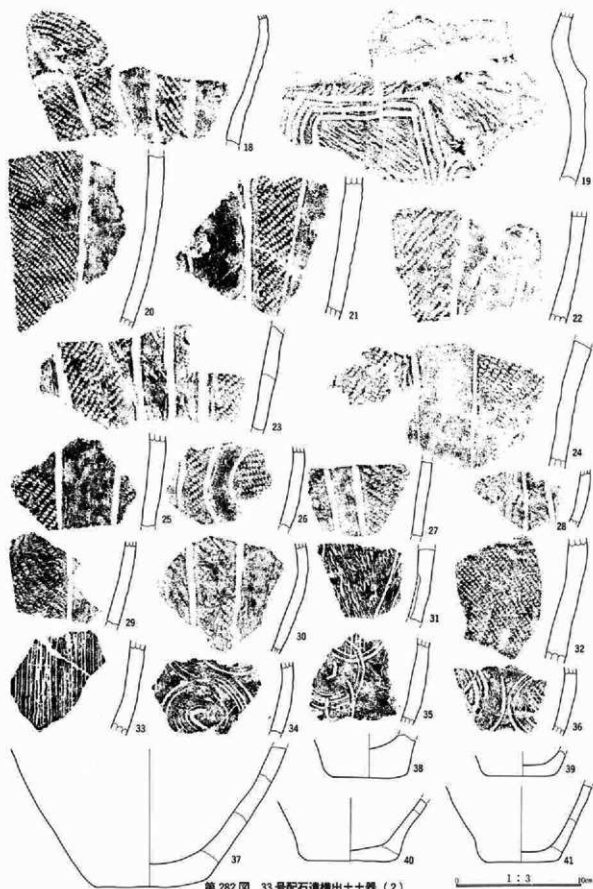
第 279 図 33号配石道構石材別分布



第 280 図 33号配石道構重量別分布



第 281 図 33号配石遺構出土土器 (1)



第282図 33号配石遺構出土土器(2)

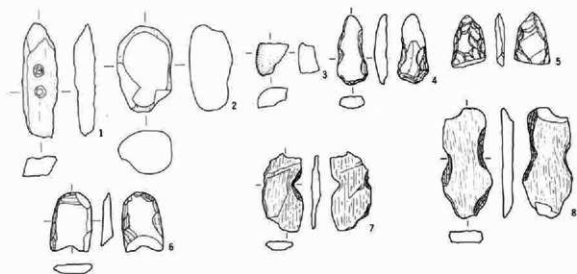
33号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
281-12 124	口縁 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい褐色。	口縁部は内湾する。口唇部に狭い無文帯を おき、沈線による文様を描く。区画内に縄 文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石南西部	
281-13 124	口縁 部片 ②やや良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は明褐色。	口縁部は内湾する。沈線による文様が描か れ、内部に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面は荒れている。	配石北東部	
281-14 124	口縁 部片 ②やや良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	口縁部は内湾する。沈線による横内等の文 様が描かれ、地文に縄文施文。原体はR(上) 横転がし。	配石南西部	
281-15 124	口縁 部片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚10~12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はL(上)横・縦転がし。 外面に煤が付着している。	配石北部	
281-16 124	口縁 部片 ②良	①中粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の散列帯を 巡らせる。以下縄文施文。原体はR(上)。	配石東部	
281-17 124	口縁 部片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は黒褐色。	口縁部に突起を有する。沈線による文様が 描かれている。	配石西部	
281-18 124	胴部 片 ②やや良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	口縁部は内湾。胴部に括れる器形と推定さ れる。沈線による「目」状の文様を描き、 縄文施文。原体はR(上)縦位。 土器面は柔軟で、押圧が強い。	配石北部	
281-19 124	口縁 部 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器(両耳型)の口縁-胴部片。 器厚13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。	口縁部に無文帯。肩部の橋状把手剥落。橋 状把手上端に微隆起帯を巡らせ、以下沈線 による文様を描く。区画内に縄文施文。原 体はL(上)縦位。	配石東部	
281-20 124	胴部 片 ②良	①中粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚11~12mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はL(上)縦転がし。	配石東部	
281-21 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はよい黄褐色。	沈線による文様を描き、区画内に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。 内面に煤が付着している。	配石南端	
281-22 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚は10~13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい黄褐色。	沈線を垂下。区画内に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石中心部	
281-23 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面に煤が付着している。	配石中心部	
281-24 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面はよい黄褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石中心部	
281-25 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石北西部	
281-26 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は暗赤褐色。	沈線による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石南西部	
281-27 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい赤褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	配石南端	
281-28 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	配石南端	
281-29 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	配石南端	
281-30 124	胴部 片 ②良	①細粒の砂を混入	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(上)縦転がし。	配石南端	

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

33号配石遺構土器調査表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
282-31 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	細沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(丁)縦転がし。 土器面は柔軟。	配石南側
282-32 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ③良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石北西部
282-33 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色。	朱線を施している。	配石北東部
282-34 124	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線による渦巻き等の文様が描かれている。	配石西側
282-35 124	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい褐色。	沈線による円形等の文様が描かれている。	配石西側
282-36 124	胴部 片	①粗粒の砂を混入 ③良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	沈線による円形等の文様が描かれている。	配石西側
282-37 124	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径86mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	細沈線を垂下している。	配石西部
282-38 124	底部 片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄褐色。	底周縁線が磨耗している。	配石南西部
282-39 124	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径56mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。		配石中心部
282-40 124	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径78mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(背)縦転がし。	配石南部
282-41 124	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径62mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。		配石中心部



第283図 33号配石遺構出土石器

33号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
283-1 124	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	18.4	5.8	3.2	500	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径20mm、短径18mm、深さ4mmである。	配石西端
283-2 124	磨 石	一部欠損	流紋岩	(13.6)	8.7	7.0	(1,050)	器面に磨耗痕がみられる。	配石中央 西寄り
283-3 124	磨 石	部分	流紋岩	(5.2)	(5.2)	3.3	(100)	器面に磨耗痕がみられる。	
283-4 124	打製石斧	完形	輝緑岩	11.0	4.9	2.1	130	バチ (II*)。片面に大きく自然面残す。	配石東端
283-5 124	打製石斧	局部欠損	熱変成岩	(6.2)	5.7	1.6	(82)	バチ (II b)。	配石北端
283-6 124	打製石斧	局部欠損	輝緑岩	(9.4)	6.5	1.9	(180)	短冊 (III)。両面に大きく節理面残る。	配石西寄り
283-7 124	打製石斧	一部欠損	網雲母緑泥片岩	(12.5)	6.4	1.4	(140)	分銅 (I)。1個は内側の度合い小さい。	配石中央
283-8 124	打製石斧	一部欠損	石黒網雲母片岩	(17.5)	8.0	2.0	(360)	分銅 (I)。	配石中央

34号配石遺構 (第284～289図、PL. 76、125)

位置 Gd-40、Ge-39・40グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西92m (遺構の中心までの距離)、35号配石遺構の東に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月12日に33号配石遺構とともに調査を開始した。翌日に全景写真と部分写真の撮影を行い、実測作業に入った。遺物の取り上げは9月下旬に実施し、その後さらに掘り下げを行った。以後、他の配石遺構の調査を継続しつつ、12月上旬に最終面の全景写真撮影を行い、遺物取り上げを実施した。配石遺構の石の取り上げは12月中旬に実施し、その後下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。35号配石遺構と接している。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

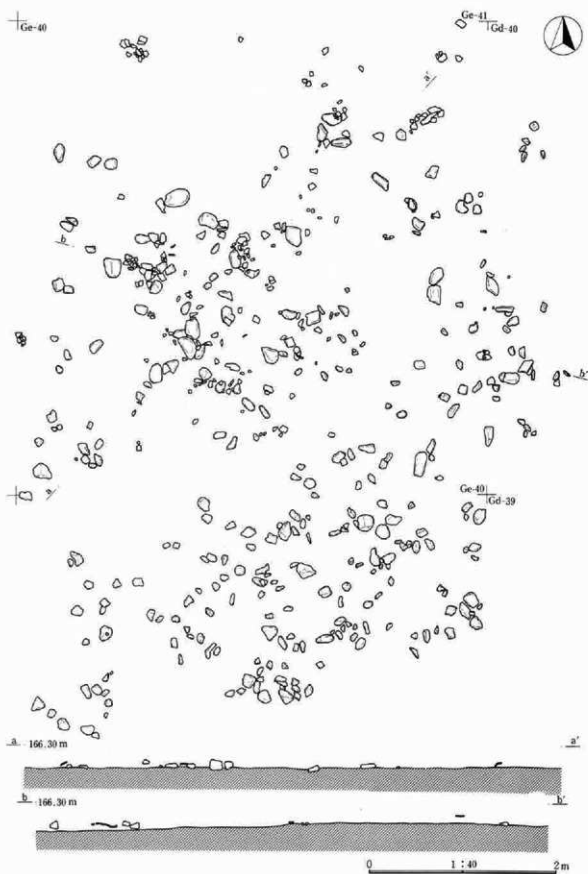
形状・配石状況 長径8m50cm、短径6mの楕円形の範囲に配石が認められる。その中で集中している部分は3箇所認められる。1ブロックは長径160cm、短径110cm、面積は約2㎡。2ブロックは長径280cm、短径250cm、面積は約5.9㎡。3ブロックは長径360cm、短径250cm、面積は約8.5㎡である。配石の総面積は約37.1㎡となる。

使用石材 36種類の石材が確認された。306点の石材別点数は、網雲母石黒片岩106点 (34.6%)、輝緑岩34点 (11.1%)、点紋網雲母石黒片岩18点 (5.9%)、点紋緑泥片岩15点 (4.9%)、珪石14点 (4.6%)、輝岩13点 (4.2%)、網雲母緑泥片岩・緑泥片岩各9点 (各2.9%)、チャート・石黒網雲母片岩各6点 (各2%)、網雲母緑泥片岩・斑岩・紅麻網雲母片岩・点紋網雲母緑泥片岩各5点 (各1.6%)、角閃岩・珪岩各4点 (各1.3%)、石黒片岩3点 (0.9%)、緑泥片岩・緑泥石黒片岩・輝緑凝灰岩・砂岩・緑色珪質板岩・変斑岩各2点 (各0.7%)、赤色珪質板岩・滑石片岩・石黒緑泥片岩・網雲母片岩・点紋網雲母緑泥石黒片岩・閃緑岩・熱変成岩・脆雲母石黒片岩・紅麻片岩・方散虫板岩・頁岩・点紋網雲母片岩・千枚岩各1点 (各0.3%) であり、不明は20点 (6.5%) を数えた。不明の石を除いた286点中192点 (67.1%) の石が片岩類である。

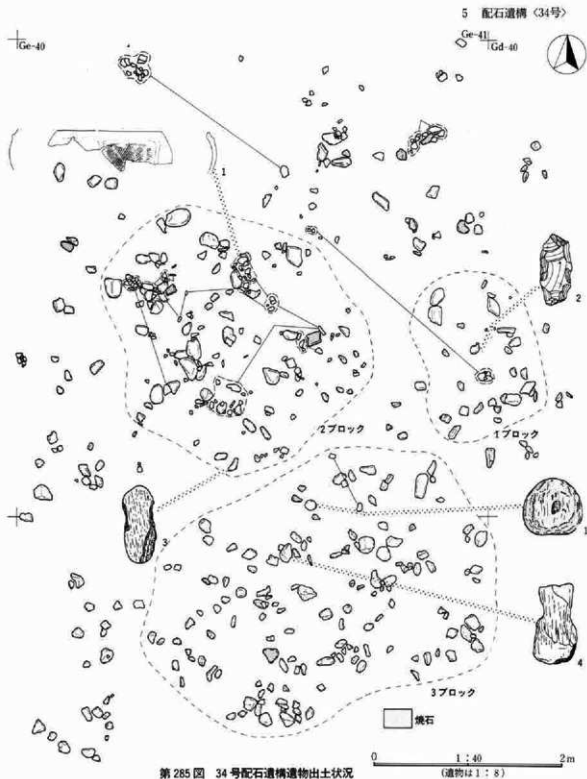
石材重量 重量の判明している石は286点である。その内訳は、500g未満の石113点 (39.5%)、500g～1kg未満の石82点 (28.7%)、1kg～2.5kg未満の石62点 (21.7%)、2.5kg～5kg未満の石24点 (8.4%)、5kg～7.5kg未満の石2点 (0.7%)、7.5kg～10kg未満の石2点 (0.7%)、10kg～20kg未満の石1点 (0.3%) である。

遺物出土状況 197点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部25点、胴部167点、底部5点であ

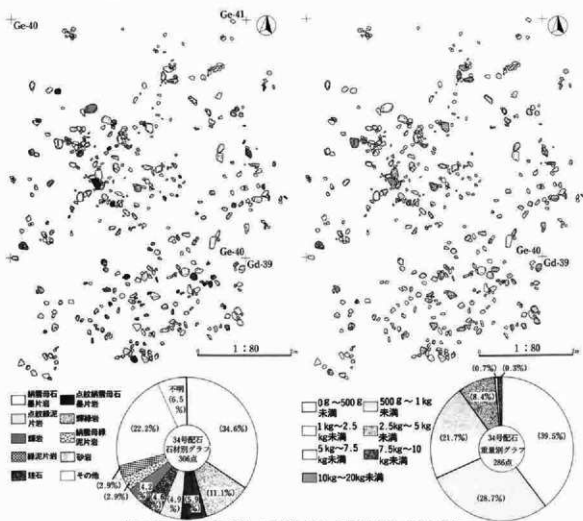
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第284図 34号配石遺構



り、3ブロックに集中して出土している。1・2ブロックには土器片はほとんど出土していない。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では1ブロックから打製石斧1点、2ブロックから打製石斧1点、3ブロックから多孔石1点と打製石斧各1点が出土している。各ブロックとも打製石斧の出土が共通している。石器の含有率は1.3%であり、また焼石は306点中12点の出土で、3.9%を占めている。所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であり、配石ブロック下には土壌等は存在しなかった。

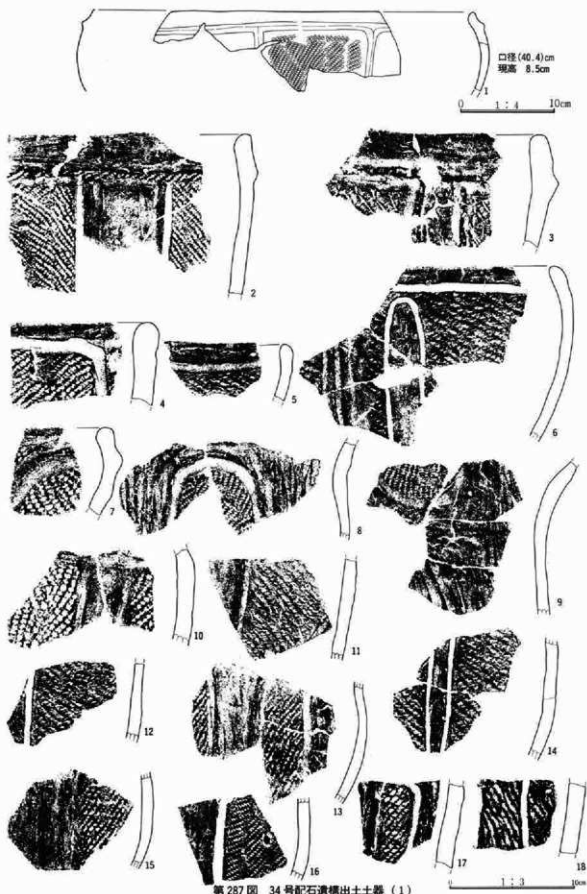


第286図 34号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布とグラフ

34号配石遺構土器観察表

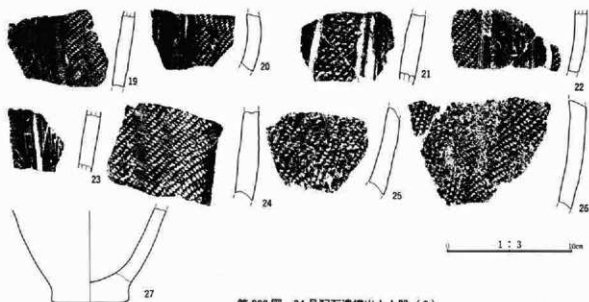
図番 Pl.	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
287-1 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面はよい赤褐色。	口縁部は内湾。口唇部に狭い無文帯をおき 1条の微隆起帯を巡らす。それと接続する 微隆起帯を垂下。区画内にR(上横・縦位)施文。		配石北西部
287-2 125	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らし、それに接続する微隆起帯を垂下。 微隆起帯と区画内にL(上横・縦位)施文。 土器面は柔軟。		一括
287-3 125	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12~18mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らし、それに接続する微隆起帯を垂下。 区画内にR(上縦位)。太い条と細い条を 使用。		配石北東部
287-4 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②非常に良	深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	口縁部に幅広い沈線による横門等の文様 が描かれ、内部に縄文施文。原体はL(上横 位)施文がし。土器面は柔軟で押圧が強い。		配石南西部
287-5 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	波状口縁部片。口唇部に狭い無文帯をおき、 1条の沈線を巡らせる。以下縄文施文。原 体はL(上縦位)施文がし。		配石東端
287-6 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	口縁部は内湾。口唇部に狭い無文帯をおき 幅広い沈線を巡らせる。胴部には「[]」状 の沈線による区画。内部磨り消し。縄文は L(上縦位)。		配石北西端

5 配石遺構〈34号〉



第287图 34号配石遺構出土土器(1)

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



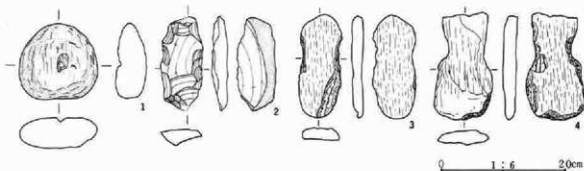
第288図 34号配石遺構出土土器(2)

34号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
287-7 125	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。	口縁部は内高する。隆帯による楕円等の 文様を描き、地文に縄文施文。原体はR(↑横 転がし。	配石西部
287-8 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	微隆起帯による「 」状の文様を描き、区 画内に縄文施文。原体はR(↑縦転がし。	配石西部
287-9 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面は褐色。	胴部に拵れを有する。微隆起帯による「U」 字状の文様を描き、区画内に縄文施文。原 体はR(↑縦転がし。	配石北西部
287-10 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色。内面はにぶい黄褐色。	地文に縄文施文。 原体はR(↑縦転がし。	配石中心部
287-11 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	沈線による文様を描き、区画内に縄文施文。 原体はL(↓縦転がし。	配石北東端
287-12 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面はにぶい赤褐色。	沈線を垂下。 縄文施文。原体はL(↓縦転がし。	配石中心部
287-13 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は灰褐色。	胴部に拵れを有する。微隆起帯による「 」 状の文様を描き、区画内に縄文施文。原体 はR(↑縦転がし。	配石北西部
287-14 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色。内面はにぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL(↓縦転がし。 沈線を垂下。	配石北部
287-15 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7~9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は褐色。	微隆起帯による文様を描き、区画内に縄文 施文。原体はR(↑縦転がし。押圧が強い。	配石西部
287-16 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰赤色。内面はにぶい褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はR(↑縦転がし。	配石北部
287-17 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色。内面はにぶい赤褐色。	沈線による「 」状の文様が描かれ、区画 内に縄文施文。原体はR(↑(0段多条か?) 縦転がし。	配石北西部
287-18 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	縄文施文。 原体はR(↓縦転がし。沈線を垂下。 土器部は柔くて押圧が強い。	配石南西部 と北部

34号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①粘土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
288-19	胴部 125	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、区画内に縄 文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石北西部
288-20	胴部 125	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、内部に縄文 施文。原体はR(上)横・縦転がし。	配石北部
288-21	胴部 125	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	比線を下下。 内部に縄文施文。原体はR(上)縦転がし。	配石北部
288-22	胴部 125	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒色。	微隆起帯を垂下させ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石北西部
288-23	胴部 125	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は明赤褐色。	条線を施し、沈線を垂下。	配石西部
288-24	胴部 125	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	微隆起帯を垂下させ、内部に縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石中心部
288-25	胴部 125	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~14mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色。	底部に近い部分。縄文施文。原体はR(上)縦 転がし。外面は荒れている。	配石北東部
288-26	胴部 125	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 外面は荒れている。	配石北東部
288-27	底部 125	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。底径62mm。 内面はや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	比線を下下。 内面は條が付着している。	配石中心部



第 289 図 34号配石遺構出土土器

34号配石遺構石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
289-1	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	12.5	11.9	4.9	1,100	片面に1個の凹みがある。凹みの長径は30mm、短 径16mm、深さ8mmである。凹石の凹みとは異なる。	3プロ ック
289-2	打製石斧	完形	熱変成岩	14.9	6.8	2.5	263	短冊(III?)。片面が未調整の未成品と思われる。	1プロ ック
289-3	打製石斧	完形	絹雲母石墨片岩	16.3	6.9	2.0	350	分割(I)。裏面の内湾の度合い小さい。	2プロ ック
289-4	打製石斧	一部欠損	点紋絹雲母石墨 片岩	(17.0)	9.1	2.3	(430)	分割(I)。	3プロ ック

35号配石遺構 (第290～294図, PL. 76, 125)

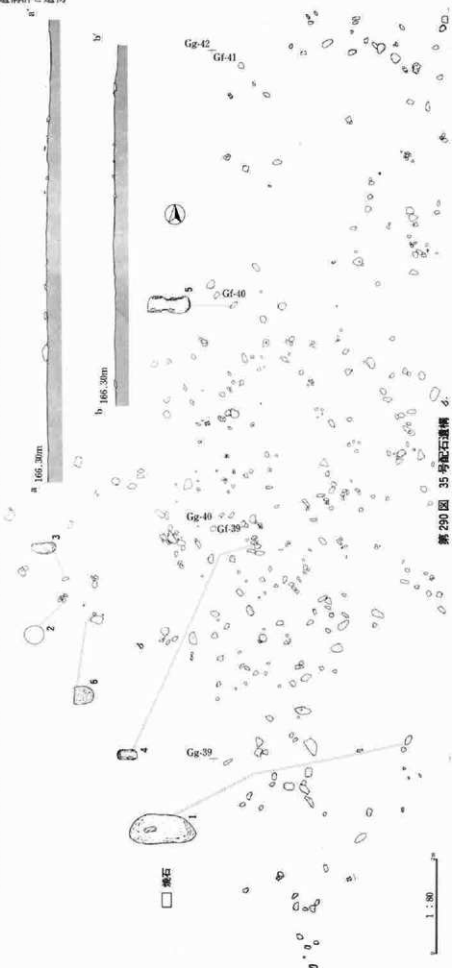
位置 Gf-38～42, Gg-39・40グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西99m (遺構の中心までの距離)、34号配石遺構の西に接した所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。8月中旬から33号・34号配石遺構とともに調査を開始した。17日に遺構の全景写真の撮影を行い、実測作業に入った。27日までに実測を終了し、遺物の取り上げは9月下旬から実施。その後さらに掘り下げを行った。以後、他の配石遺構の調査に移り、12月になって遺物の取り上げと配石の取り上げを実施し、下部の調査を行ったが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。34号配石遺構と接している。

覆土 竅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径20m、短径8mの範囲に石と土器片が散在しているが、集中しているのは長径8m、短径6mの楕円形を呈した範囲である。



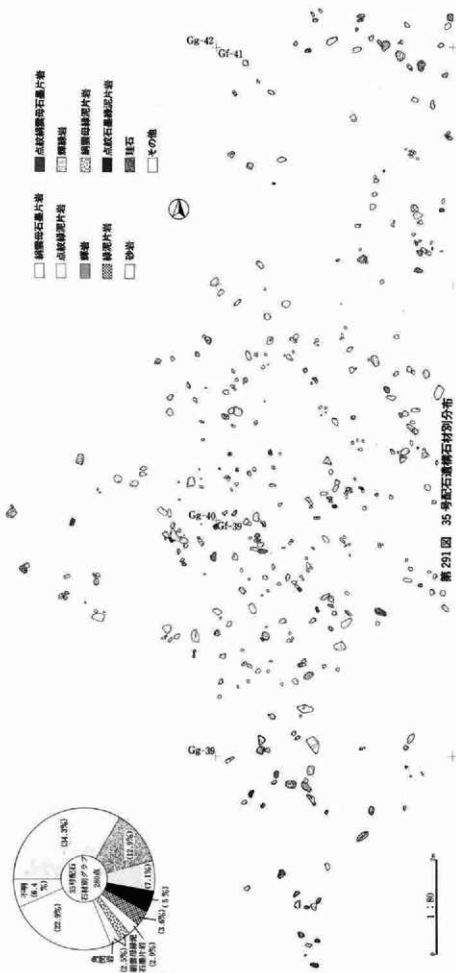
5 配石遺構 (35号)

この部分の配石の面積は約20.8㎡である。

使用石材 28種類の石材が確認された。280点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩96点(34.3%)、輝緑岩36点(12.9%)、点紋緑泥片岩20点(7.1%)、点紋絹雲母石墨片岩14点(5.0%)、緑泥片岩10点(3.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩8点(2.9%)、絹雲母緑泥片岩・角閃岩・石墨絹雲母片岩・珪石各7点(各2.5%)、輝岩6点(2.1%)、点紋絹雲母緑泥片岩・珪岩各5点(各1.8%)、斑板岩・紅糜絹雲母片岩・熱変成岩・砂岩各4点(各1.4%)、チャート・安山岩・絹雲母片岩各3点(各1.1%)、閃輝緑岩2点(0.7%)、赤色珪質板岩・緑糜緑泥片岩・石墨片岩・緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・方散虫板岩各1点(各0.4%)であり、不明は18点(6.4%)を数えた。不明の石を除いた262点中178点(67.9%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は280点である。その内訳は、500g未満の石85点(30.4%)、1kg～2.5kg未満の石75点

323



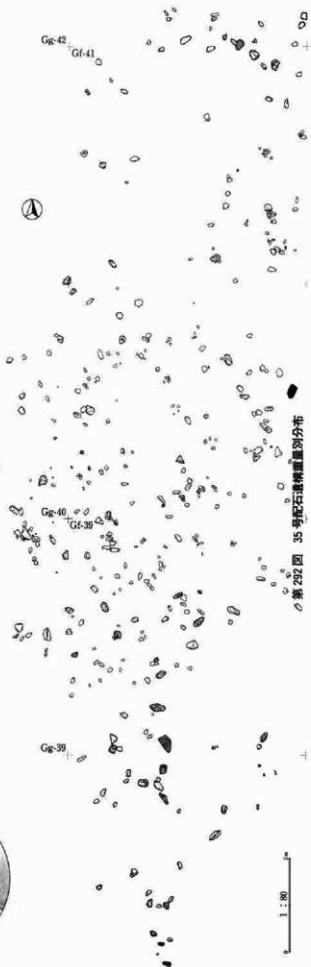
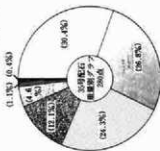
- 点紋絹雲母石墨片岩
 輝緑岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩
 絹雲母緑泥片岩
 点紋石墨泥片岩
 緑泥片岩
 砂岩
 絹雲母石墨片岩
 点紋緑泥片岩
 輝岩

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

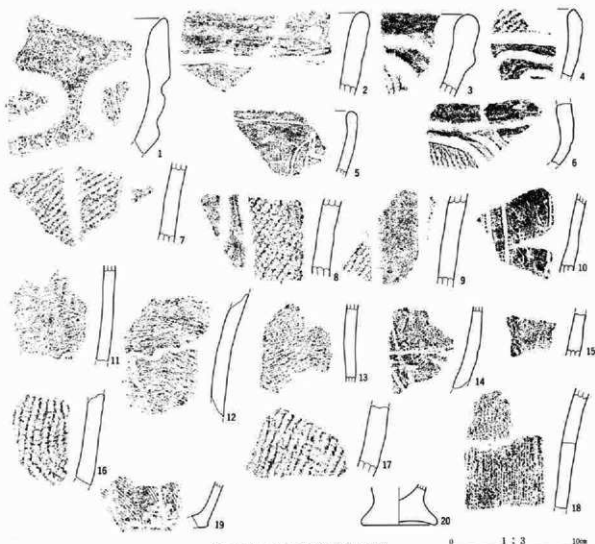
(26.8%)、500g～1kg未満の石68点(24.3%)、2.5kg～5kg未満の石34点(12.1%)、5kg～7.5kg未満の石13点(4.6%)、10kg～20kg未満の石3点(1.1%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)、40kg～50kg未満の石1点(0.4%)である。

遺物出土状況 196点の土器片が出土している。部位別点数は、口縁部25点、胴部163点、底部8点であり、配石の中心部からの出土が多い。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も含まれていた。石器では多孔石1点が遺構の南端から、磨石1点は遺構の西端、打製石斧3点はほぼ中心部近くから、磨製石斧1点は遺構西端からそれぞれ出土している。石器含有率は2.1%であり、また焼石は280点中31点で、11%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構であるが、広範囲に遺物が分布しているために、明確に遺構として把握することにたいしては若干の疑問が残る。



第292図 35号配石遺構重量別分布



第293図 35号配石遺構出土土器

35号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位 ①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
293-1 125	口縁 部片 ①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は粗い横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	内湾する波状口縁部片。太い沈線による楕円等の文様が描かれ、地文に条線が施されている。	配石中心部
293-2 125	口縁 部片 ①中粒の砂を混入 ②非常に良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の沈線を通らせる。以下条線を施している。	配石中心部
293-3 125	口縁 部片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~20mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	口縁部に隆帯による楕円等の文様が描かれ、地文に縄文施文。原体はR(長横転)がし。	配石南部
293-4 125	口縁 部片 ①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい褐色。	口唇部に縄文施文。原体はL(長横転)がし。 以下沈線により文様が施されている。	配石中心部
293-5 125	口縁 部片 ①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面はよい褐色。	口唇部に1条の沈線を通らせ、以下沈線による文様と条線による文様が施されている。	配石中心部
293-6 125	口縁 部片 ①中粒の砂を混入 ②非常に良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8~13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	口縁部は内湾する。沈線による楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原体はL(長横転)がし。	配石北西部

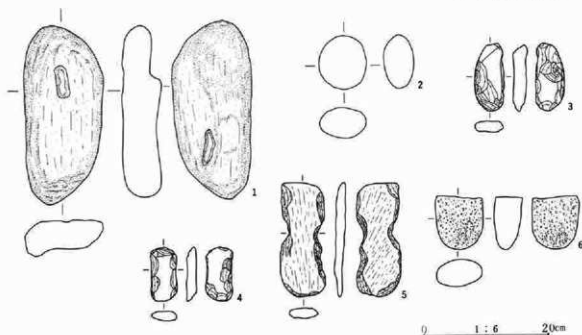
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

35号配石遺構土器総表

図番 Pl.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	種(その他)	出土状況
293-7 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。		配石中心部
293-8 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は荒れている。 外面の色調はよい褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。		配石南東部
293-9 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。 沈線を垂下。		配石西部
293-10 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は黒褐色。	条線を施している。沈線を垂下。		配石中心部
293-11 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	縄文施文。原体はL(下)縦転がし。		配石南部
293-12 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原体はL(下)縦転がし。		配石南部
293-13 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。		配石東部
293-14 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。	条線による文様が施されている。 内面に煤が付着している。		配石中心部
293-15 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	条線による文様が施されている。		配石中心部
293-16 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦・横転がし。		配石南部
293-17 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	縄文施文。原体はR(上)縦転がし。		配石南部
293-18 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はよい黄褐色。	条線が施されている。		配石南東部
293-19 125	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚6~11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい赤褐色。	縄文施文。原体はL(下)縦転がし。 沈線を垂下。		配石中心部
293-20 125	底部 片	①中粒の砂を混入 ②やや良	底径60mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい褐色。			配石南部

35号配石遺構石器総表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石材	計測値 (cm・g)				特徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
294-1 125	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	28.0	12.7	6.5	3,800	両面に2個の大きな凹みがある。凹みの平均は長径52mm、短径17mm、深さ5mmである。一部壊れている。	配石の南端ちかく
294-2 125	磨石	完形	輝緑岩	8.5	7.6	4.9	500	器面に磨耗痕がみられる。	配石西端
294-3 125	打製石斧	完形	熱変成岩	17.0	7.1	2.2	140	バチ(IIb)。片面刃部付近に磨耗痕が見られる。	配石西端
294-4 125	打製石斧	完形	熱変成岩	8.5	4.3	1.6	80	短冊(III)。両側がわずかに内湾気味。	配石中央
294-5 125	打製石斧	完形	絹糸母石礫片岩	18.1	7.2	1.8	170	分刺(1)。	中央北寄り
294-6 125	磨製石斧	基部欠損	斑岩	8.4	7.5	4.6	450	磨き途中。ほぼ全面に敲打痕残る。	配石西端



第294図 35号配石遺構出土石器

40号配石遺構 (第295～299図, PL. 77, 125)

位置 Gm-34・35、Gn-34グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西142m (遺構の中心までの距離)、37号配石遺構の西南西25mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) 最西端からの検出。8月下旬から調査を開始し、9月1日に全景写真と部分写真撮影を実施した。その後、実測と遺物取り上げ作業を、10月中旬には配石遺構の石の取り上げを行った。配石遺構の下部には土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって遺構の一部が壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 現状で長径2m50cm、短径2mの範囲に配石が施されているが、集中しているのは配石の東側部分である。また配石の周囲にも散漫的に石の分布が認められる。配石の面積は約17.4m²である。

使用石材 22種類の石材が確認された。148点の石材別点数は、網雲母石墨片岩50点 (33.8%)、輝緑岩12点 (8.1%)、点紋緑泥片岩11点 (7.4%)、輝岩10点 (6.8%)、点紋石墨泥片岩9点 (6.1%)、緑泥片岩7点 (4.7%)、珪石6点 (4.1%)、砂岩・点紋網雲母石墨片岩・斑岩各4点 (各2.7%)、網雲母緑泥石墨片岩・熱変成岩各3点 (各2%)、チャート・緑泥片岩・石墨片岩各2点 (各1.4%)、網雲母緑泥片岩・安山岩・網雲母石墨泥片岩・閃緑岩・角閃岩・点紋網雲母緑泥片岩・変斑岩各1点 (各0.7%) であり、不明は12点 (8.1%) を数えた。不明の石を除いた136点中91点 (66.9%) の石が片岩類である。

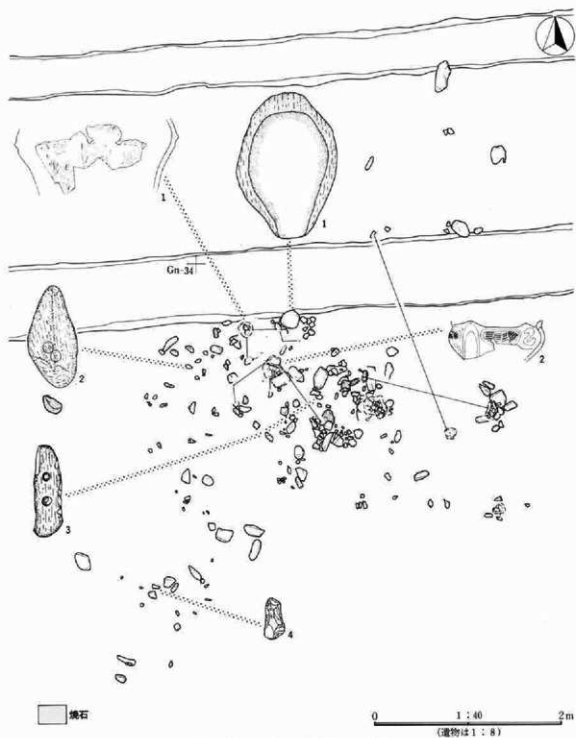
石材重量 重量の判明している石は137点である。その内訳は、500g未満の石74点 (54%)、500g～1kg未満の石31点 (22.6%)、1kg～2.5kg未満の石21点 (15.3%)、2.5kg～5kg未満の石9点 (6.6%)、5kg～7.5kg未満の石1点 (0.7%)、7.5kg～10kg未満の石1点 (0.7%) である。

遺物出土状況 130点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部29点、胴部100点、底部1点であり、配石にともなうもので周辺からの出土はほとんどなかった。加曾利E3式を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。石器では石皿1点が配石の北端から出土し、また多孔石1点は西端から、凹石1点は中央

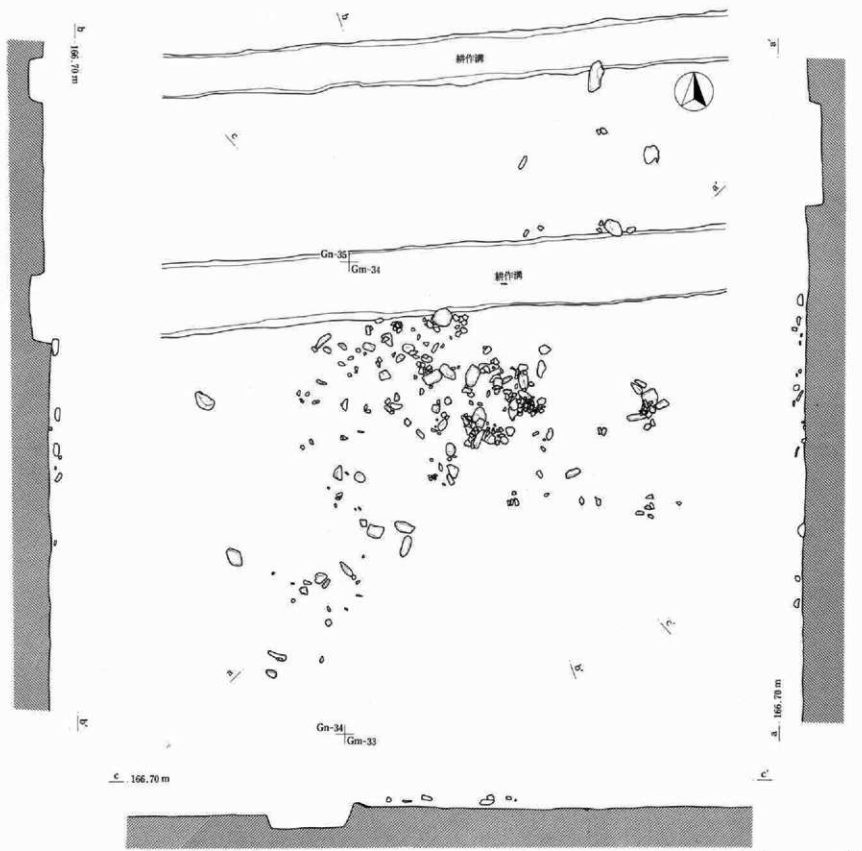
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

部から、打製石斧1点は配石の西南端からそれぞれ出土している。石器の含有率は2%であり、また焼石は148点中10点の出土で、6.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

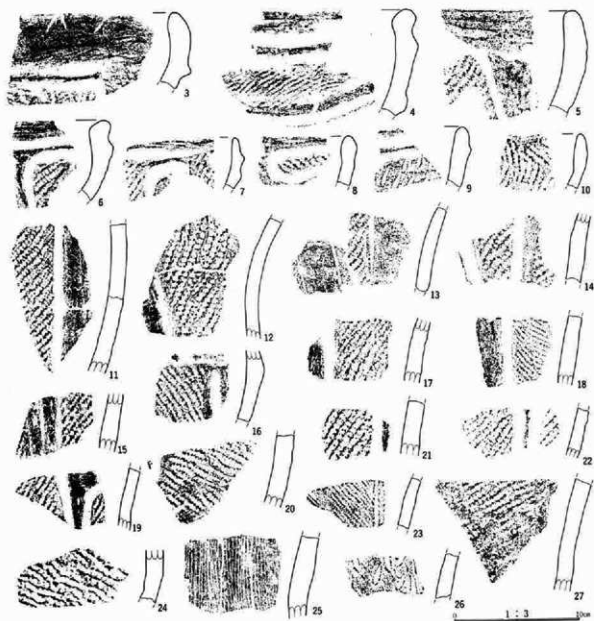
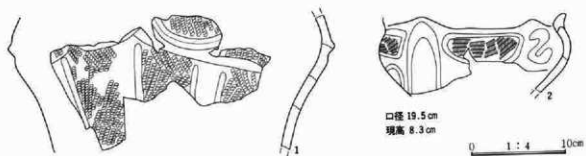


第295図 40号配石遺構遺物出土状況



第 296 図 40 号配石遺構

5 配石遺構〈40号〉

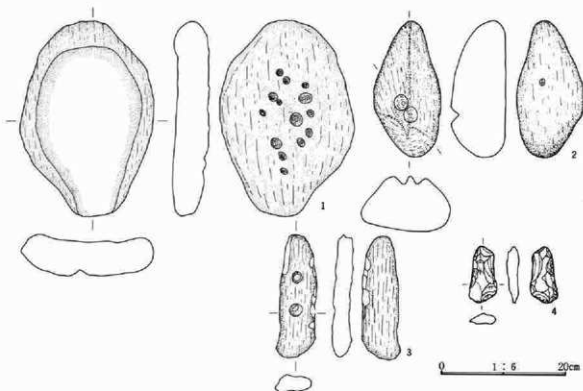


第 298 图 40号配石遺構出土土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

40号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (産 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
298-9 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らす。以下押し引き状の沈線を描し ている。	配石中心部
298-10 125	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	口縁部に内湾する。縄文施文。原体はR〔〕 横・縦転がし。 外面に産が付着している。	配石中心部
298-11 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は黒褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。	配石北側
298-12 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北西部
298-13 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8～11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縦沈線による文様を描き、区画内に縄文施 文。原体はR〔〕 縦転がし。	配石中心部
298-14 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
298-15 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。	配石中心部
298-16 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10～14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は明赤褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 。沈線を垂下。	配石北西部
298-17 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色。内面はにぶい黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。	配石北西部
298-18 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟。	配石中心部
298-19 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は縦方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は褐灰色。	沈線による文様を描き、縄文施文。 原体はR〔〕 縦転がし。	配石西部
298-20 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は灰褐色。	縄文施文。原体はR〔〕 横転がし。	配石南東部
298-21 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は灰黄褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北西部
298-22 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黒褐色。内面はにぶい褐色。	地文に縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石南西部
298-23 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は灰褐色。	縄文施文。原体はL〔〕 縦転がし。 沈線を垂下。 内面に産が付着している。	配石北部
298-24 125	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12～14mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR〔〕 横転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北西部
298-25 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は明赤褐色。	条線が施されている。	配石中心部
298-26 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	押し引き状の沈線が施されている。	配石東部
298-27 125	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色。内面は褐灰色。	縄文施文。原体はR〔〕 縦転がし。	配石中心部



第299図 40号配石遺構出土石器 (観察表はP348に掲載)

13号配石遺構 (第300図、PL. 83、120)

位置 Et-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東46m30cmの所に位置。

経過 I区 (昭和61年度調査区) から検出。他の配石遺構と異なり小規模であり、またほぼ同一の石材から構成されていた。1/10実測図作成の後、石を取り上げ、下部の調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

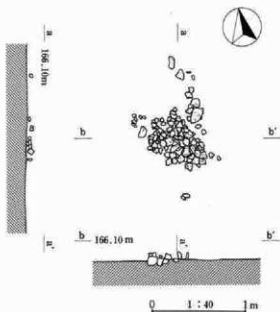
形状・配石状況 長径1m、短径70cmの範囲に石の集積が認められる。配石面積は約0.66m²である。

使用石材 100点の石材別点数は、凝灰岩54点、砂岩35点、絹雲母石墨片岩3点、斑岩・安山岩・珪石各2点、緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩各1点であった。圧倒的多数

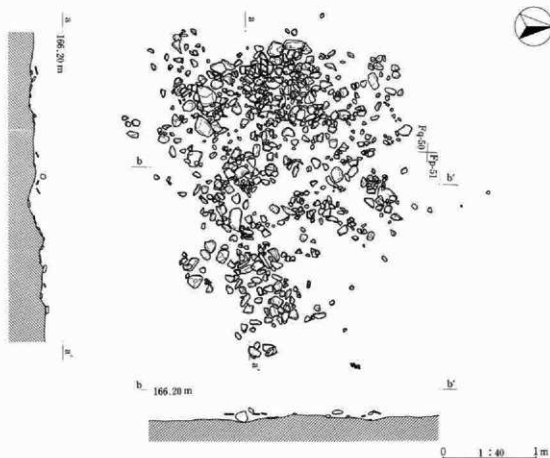
(89%)は凝灰岩と砂岩で占められ、これらは同一の石材を細かく打ち欠いたものを使用し、焼けていた。

遺物出土状況 土器片は3点出土している。石器の出土はなかった。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構であるが、集石遺構としてとらえた方が良くもしいない。



第300図 13号配石遺構



第301図 41号配石遺構

41号配石遺構 (第301～308図、PL. 78、126)

位置 Fp・Fq-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西45m(遺構の中心までの距離)、23号配石遺構と26号配石遺構のほぼ中間に位置している。

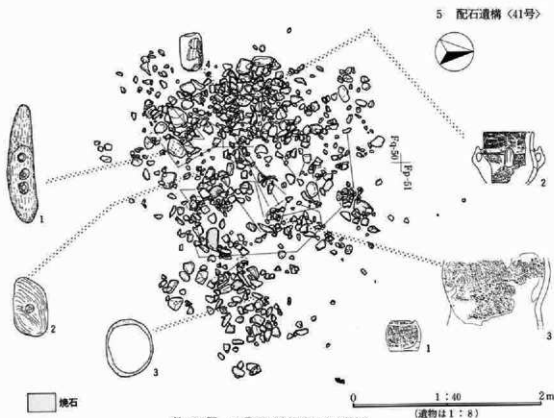
経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。7月上旬に23号配石遺構から26号配石遺構の調査を進めて行く過程で確認された。周囲の敷石住居跡の調査と並行しながら調査を進め、10月12日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、敷石住居跡の調査を先行させ、11月下旬に遺物の取りあげを行った。多量の石と土器片が集中して出土していたが、下部には土壌等は存在しなかった。

重複 なし。23号・26号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡)に近接している。

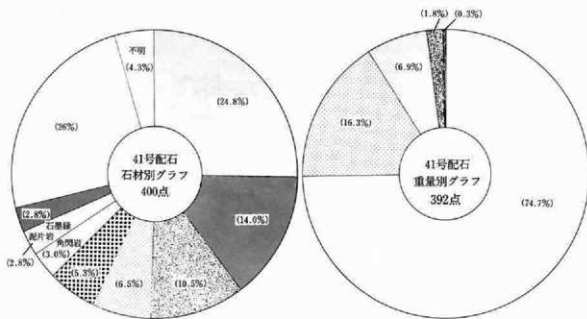
覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m10cm、短径2m70cmの範囲に配石が施されている。狭い範囲に392点の石が集中しており、他の配石遺構と趣を異にしている。配石の面積は約8.2㎡である。

使用石材 36種類の石材が確認された。400点の石材別点数は、網雲母石墨片岩99点(24.8%)、点紋網雲母石墨片岩56点(14%)、輝緑岩42点(10.5%)、点紋緑泥片岩26点(6.5%)、緑泥片岩21点(5.3%)、角閃岩12点(3%)、石墨緑泥片岩・点紋石墨緑泥片岩・珪石各11点(各2.8%)、石墨片岩10点(2.5%)、輝岩9点(2.3%)、砂岩8点(2%)、チャート7点(1.8%)、網雲母緑泥石墨片岩・網雲母石墨緑泥片岩各6点(各1.5%)、珪岩5点(1.3%)、網雲母緑泥片岩・斑岩・緑泥石墨片岩・綠色珪質板岩・斑斑岩各4点(各

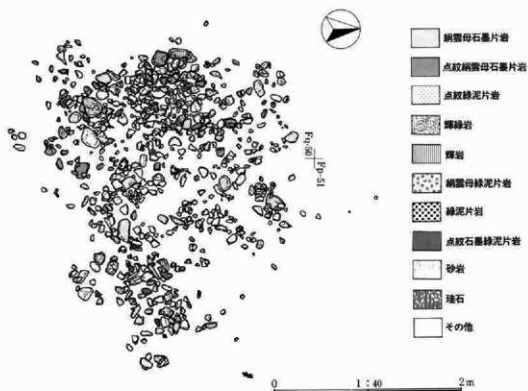


第302図 41号配石遺構遺物出土状況

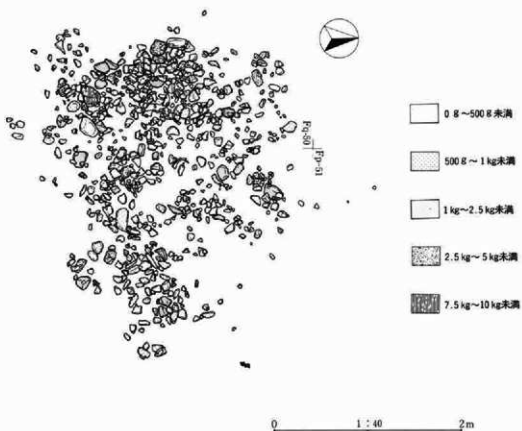


第303図 41号配石遺構 石材別(左)・重量別グラフ(右)

1%)、赤色球頁板岩3点(0.8%)、石墨網雲母片岩・点紋網雲母石墨緑泥片岩・点紋網雲母緑泥片岩・輝綠凝灰岩・方散虫板岩・頁岩各2点(各0.5%)、流紋岩・紅簾網雲母片岩・網雲母片岩・閃綠岩・熱変成岩・脆雲母石墨片岩・紅簾片岩・緑泥網雲母片岩各1点(各0.3%)であり、不明は17点(4.3%)を数えた。不明の石を除いた383点中265点(69.2%)の石が片岩類である。



第 304 図 41号配石遺構石材別分布



第 305 図 41号配石遺構重量別分布

石材重量 重量の判明している石は392点である。その内訳は、500g未満の石293点(74.7%)、500g～1kg未満の石64点(16.3%)、1kg～2.5kg未満の石27点(6.9%)、2.5kg～5kg未満の石7点(1.8%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.3%)である。1kg未満の石が実に91%で、他の配石遺構より高い比率を占めている。

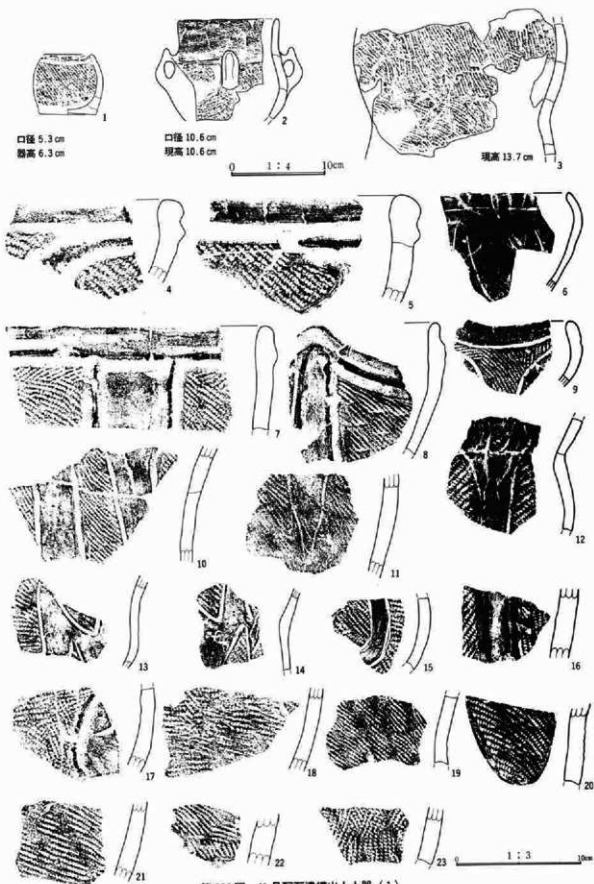
遺物出土状況 小型土器2点を含め、口縁部38点、胴部274点、底部10点の土器片が出土している。接合も配石の中心部に集中して認められる。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。石器では凹石2点、磨石1点、磨製石斧1点がそれぞれ出土している。石器の含有率は1%であり、また焼石は400点中39点の出土で、9.8%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であり、小型土器の出土等から判断して祭祀の様相が強い。

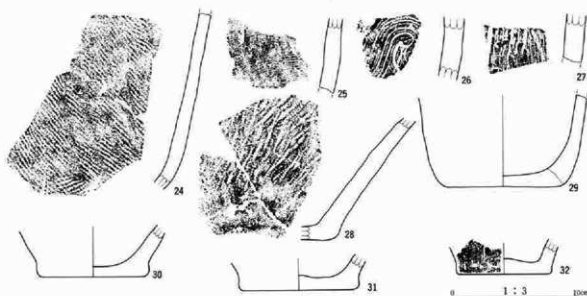
41号配石遺構土器観察表

図番 P.L.	部位	①軸土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
306-1 126	小型 土器	①細粒の砂を混入 ②良	小型土器の口縁～底部部。器厚5～7mm。 内面・底面ともミガキが行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	口唇部に幅の狭い無文帯をおき、1条の沈 線を送らせている。以下縄文施文。原体は L(↑)縦転がし。	配石北部
306-2 126	口縁 部	①細粒の砂を混入 ②良	小型の浅鉢形土器(阿耳器)約6g。器厚5～7mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。	口縁部に幅広い無文帯をおき、1条の微隆 起帯を送らす。肩部に輪状把手をもつ。胴 部に縄文施文。原体はL(↑)縦・斜位。	配石西部
306-3 126	口縁 部	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部で括れる器形。器厚9～12mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。(太い糸 と細い糸を使用)。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北東部
306-4 126	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい褐色。	口縁部は隆部と沈線による橋脚等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(↑)横転がし。	配石南西端
306-5 126	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚18mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	口縁部は隆部と沈線による橋脚等の文様が 描かれ、縄文施文。原体はR(↑)横転がし。	配石北東部
306-6 126	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚6mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は橙色、内面はぶい橙色。	口縁部は内面。口唇部に狭い無文帯をおき 1条の沈線を送らせる。胴部には細沈線に よる波状文を施す。区画内にはL(↑)縦位。 外面に帯が付着している。	配石西部
306-7 126	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい赤褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を送らす。それに接続する微隆起帯を垂 下させ、区画内にL(↑)横・縦位施文。	配石西部
306-8 126	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8～13mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	内両する波状口縁部片。口唇部に狭い無文 帯をおき、1条の微隆起帯を送らす。それ に接続する「U」状の微隆起帯を垂下。区 画内にL(↑)縦位。	配石南西部
306-9 126	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は橙色。	内両する波状口縁部片。口唇部に狭い無文 帯をおき、1条の沈線を送らせる。胴部 には沈線による文様が描かれ、L(↑)縦・横位。	配石北西部
306-10 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	沈線による文様が描かれ、区画内に縄文施 文。原体はL(↑)縦転がし。	配石中心部
306-11 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。	細沈線による「V」字状の文様が描かれ、 縄文施文。原体はL(↑)縦転がし。 内面に帯が付着している。	配石東部
306-12 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6～10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。	胴部で括れる器形。細沈線による「U」字 状、「U」状の文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR(↑)縦転がし。内面に帯付着。 内面に帯が付着している。	配石東南部
306-13 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6～8mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。	胴部で括れる器形。細沈線による波状文 が描かれ、区画内に縄文施文。原体はL(↑)縦 転がし。	配石北部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第 306 図 41 号配石遺構出土土器 (1)

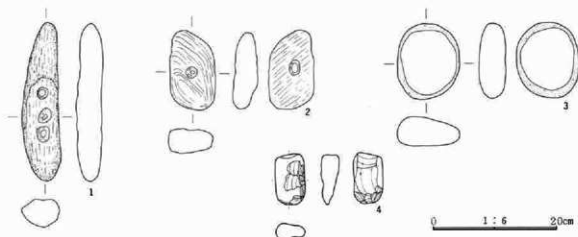


第307図 41号配石遺構出土土器(2)

41号配石遺構土器観察表

図番 PL	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
306-14 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6~9mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はぶい橙色。内面は灰黄褐色。	胴部で括れる帯形。細沈線による「V」字 状等の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はL(長)縦転がし。	配石中心部
306-15 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は暗赤褐色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はL(長)縦転がし。	配石北西部
306-16 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色。内面は灰褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR(上)縦転がし。	配石北端
306-17 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は寬れている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はL(長)縦・横位。	配石北東部
306-18 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はぶい橙色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。	配石北西部
306-19 126 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面はぶい橙色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。	配石北西部
306-20 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は褐色。内面はぶい褐色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。	配石西部
306-21 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色。内面は黒褐色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。	配石北部
306-22 126 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色。内面はぶい褐色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。	配石北東部
306-23 126 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL(長)縦・斜位。	配石北部
307-24 126 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はぶい赤褐色。内面は褐色。	縄文施文。原体はL(長)縦転がし。括りが細 かい。	配石北部
307-25 126 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	条線が施されている。土器面は硬い。	配石中心部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第308図 41号配石遺構出土石器

41号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①土質 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
307-26 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	赤線に文様が描かれている。	配石中心部
307-27 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色。	赤線と沈線が施されている。	配石南西部
307-28 126	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚10～15mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は赤褐色。	縄文文。原体は良(土)製がし。粗い縄文。	配石中心部
307-29 126	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	内面に塚が付着している。	配石南西部
307-30 126	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径85mm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。		配石西部
307-31 126	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径90mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色。	底面はよくミガキが行われている。	配石北西部
307-32 126	底部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径72mm。 内面はや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	細沈線が施されている。	配石南西部

41号配石遺構石器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
308-1 126	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	25.4	6.0	4.5	1,050	片面に3個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深2mm。最小は長19mm、短17mm、深2mmで、平均は長24mm、短19mm、深2mm。	配石南端
308-2 126	凹 石	完形	緑泥片岩	12.5	7.5	3.9	600	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径22mm、短径18mm、深さ2mmである。	配石の中央南寄り
308-3 126	磨 石	完形	流紋岩	12.0	10.1	4.6	800	器面に磨耗痕がみられる。	配石東端
308-4 126	磨製石斧	完形	角閃岩	8.0	4.3	3.0	190	磨き途中。両面に粗磨り痕残る。	配石西端

43号配石遺構 (第309~311図、PL. 78、126)

位置 Fo-49グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西34m (遺構の中心までの距離)、23号配石遺構の南東7m50cmの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬に44号配石遺構とともに調査を開始した。11月30日に遺構の全景写真を撮影。耕作溝によって一部が壊されているが、非常に小規模な配石遺構である。他の配石遺構と同様に下部調査を実施したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

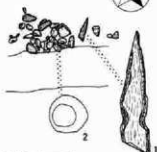
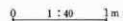
形状・配石状況 現状で長径50cm、短径40cmの小規模な配石遺構である。一部を新しい耕作溝で壊されているが、推定で長径50cm、短径50cm程の円形を呈していたものであろうか。配石の面積は約0.42㎡である。3号配石遺構と同様に小規模な遺構である。

使用石材 13種類の石材が確認された。30点の石材別点数は、網雲母石墨片岩10点 (33.3%)、点紋網雲母石墨片岩・輝緑岩各4点 (各13.3%)、緑泥片岩・珪石各2点 (各6.7%)、角閃岩・砂岩・網雲母緑泥石墨片岩・赤色珪質板岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・緑色珪質板岩・頁岩各1点 (各3.3%) である。30点中19点 (63.3%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は40点である。その内訳は、500g未満の石21点 (52.5%)、500g~1kg未満の石18点 (45%)、1kg~2.5kg未満の石1点 (2.5%) である。小規模な配石遺構のためか、1kg未満の石が97.5%を占めている。

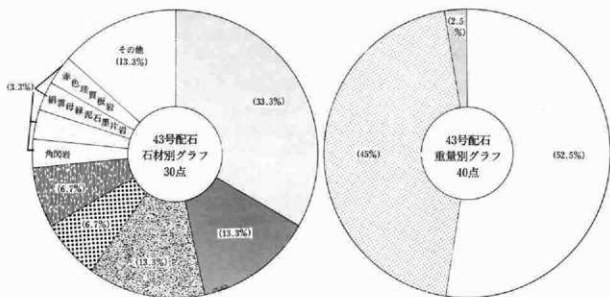
遺物出土状況 土器片は胴部1点のみの出土である。石器では磨石1点、打製石斧1点が出土している。石器の含有率は5%であり、また焼石は40点中1点の出土で、2.5%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

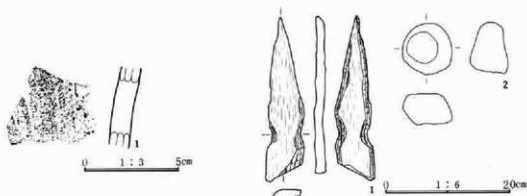


第309図 43号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第310図 43号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)グラフ



第311図 43号配石遺構出土遺物

43号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①粘土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
311-1 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色。内面は黒褐色。	沈線が施されている。	配石東部

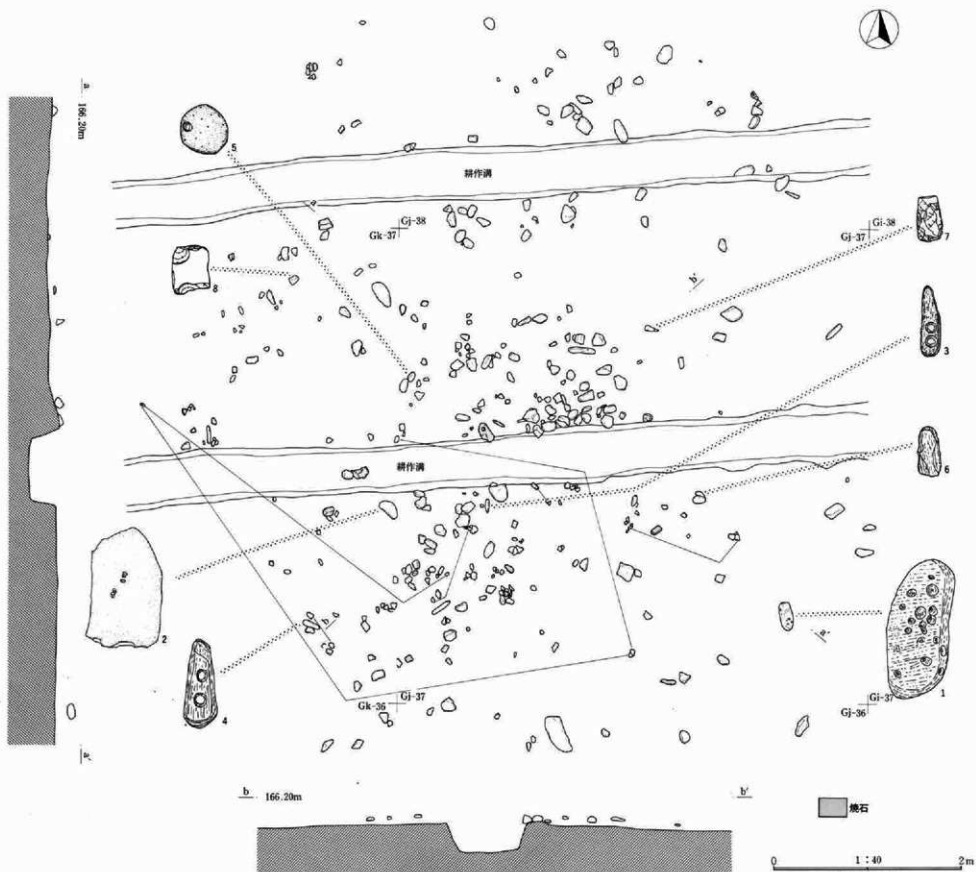
43号配石遺構土器観察表

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)			特 徴	出土状況
				全長	幅	厚 量		
311-1 126	打製石斧	一端欠損	点紋網罟母石巻 片岩	(25.9)	6.3	2.0 (320)	分割(1)。未成品。	配石東端
311-2 126	磨 石	一部欠損	輝緑岩	8.1	8.0	6.1 (570)	器面に磨耗痕がみられる。全面焼けている。	配石中央

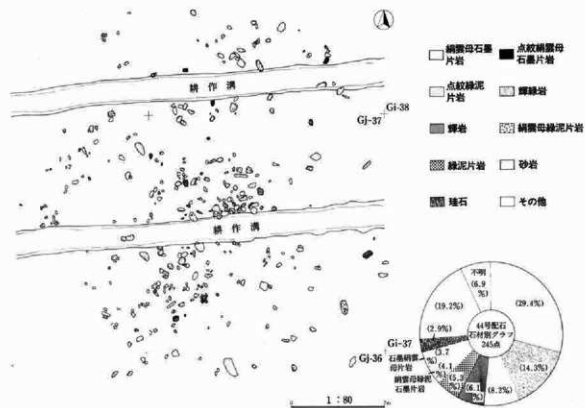
44号配石遺構 (第312~316図、PL. 79、126)

位置 Gj・Gk-36・37・38グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西122m (遺構の中心までの距離)、37号配石遺構の北西12m50cmの所に位置している。

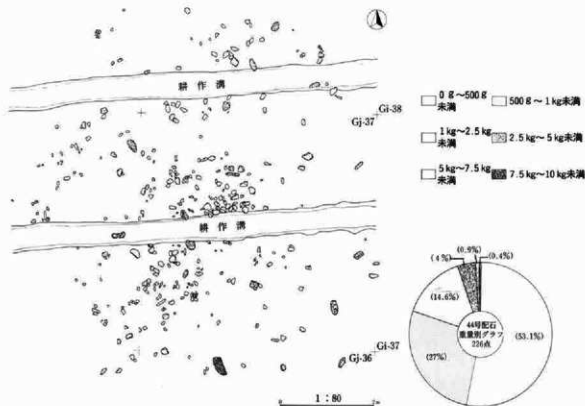
経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。11月下旬に43号配石遺構とともに調査を開始した。12月9日に遺



第 312 図 44 号配石遺構



第 313 図 44 号配石遺構石材別分布



第 314 図 44 号配石遺構重量別分布

構の全景写真撮影を実施。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 二重の環状構造を呈していると考えられる。配石の中心部に長径3m、短径2m50cmの規模で配石が施され、それを取り囲むように長径7m70cm、短径7m50cmの規模で配石が認められる。小規模な環状列石として把握してよいものであろうか。ただし石の配置は乱雑であるために断定することは危険である。このような配石状況は規模は異なるが4号配石遺構と共通するものである。配石の総面積は約47㎡であり、中心部の配石は約8.7㎡である。

使用石材 30種類の石材が確認された。245点の石材別点数は、網雲母石墨片岩72点(29.4%)、輝綠岩35点(14.3%)、点紋緑泥片岩20点(8.2%)、点紋網雲母石墨片岩15点(6.1%)、緑泥片岩13点(5.3%)、網雲母緑泥石墨片岩10点(4.1%)、石墨網雲母片岩9点(3.7%)、珪石7点(2.9%)、輝岩・熱変成岩各4点(各1.6%)、網雲母緑泥片岩・斑岩・紅網雲母片岩・閃綠岩・砂岩各3点(各1.2%)、チャート・緑簾綠泥片岩・安山岩・緑泥石墨片岩・角閃岩・輝綠凝灰岩・紅泥片岩・綠色珪質板岩・閃輝綠岩各2点(各0.8%)、赤色珪質板岩・網雲母片岩・点紋網雲母緑泥片岩・蛇紋岩・珪岩・脆雲母網雲母片岩各1点(各0.4%)であり、不明は17点(6.9%)を数えた。不明の石を除いた228点中154点(67.5%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は226点である。その内訳は、500g未満の石120点(53.1%)、500g～1kg未満の石61点(27%)、1kg～2.5kg未満の石33点(14.6%)、2.5kg～5kg未満の石9点(4%)、5kg～7.5kg未満の石2点(0.9%)、7.5kg～10kg未満の石1点(0.4%)である。1kg未満の石は全体の80.1%を占めている。

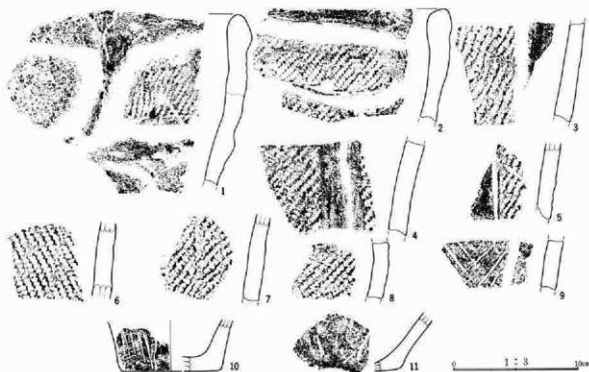
遺物出土状況 124点の土器片が遺構中心部から南部分にかけて出土し、接合関係もこの部分を中心に認められる。部位別点数は、口縁部18点、胴部102点、底部4点である。加曾利E3式土器を主体に、E4式土器片も少量含まれていた。

石器では多孔石2点、凹石3点、打製石斧2点、磨製石斧1点が出土している。多孔石1点は外側の配石から、もう1点は内側の配石から出土し、凹石2点は内側の配石、もう1点は外側の配石からの出土であった。打製石斧2点は内側の配石、磨製石斧の未製品は外側の配石からの出土である。石器の含有率は3.3%であり、また焼石は245点中14点の出土で、5.7%を占めている。

所見 小規模な環状列石の可能性はあるが、配石下には土壌等は存在していない。出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構である。

44号配石遺構土器観察表

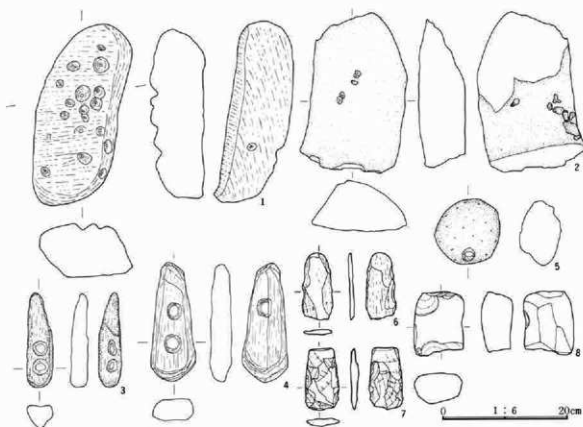
図番 PL	①軸土 部位	②焼成(遺 存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
315-1 126	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13～17mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は赤褐色。	口縁部に隆帯と沈線による帯内等の文様を描き、縄文施文。原体はR〔土〕模範がし。 外面は荒れている。	配石中心部
315-2 126	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚11～17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。	口縁部に幅広い沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR〔土〕(調り合う節)の植きが 異なる部位。 土表面は柔軟で押圧が強い。	一拵
315-3 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12～14mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はこげ褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR〔土〕模範がし。 沈線を垂下。 土表面は柔軟で押圧が強い。	配石西部



第315図 44号配石遺構出土土器

44号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位 ①胎土 ②模成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
315-4 126	割部 片 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の割部片。器厚14mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は橙色。	縄文施文。原形はR[]縦転がし。 沈線を垂下。 外面は荒れている。	配石中心部
315-5 126	割部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は褐色。	縄文施文。原形はR[]縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石北西端
315-6 126	割部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚12~15mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい褐色。	縄文施文。 原形はL[R] [L] [R]縦転がし。	配石南西端
315-7 126	割部 片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚11~13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	縄文施文。原形はR[]縦転がし。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石南西端
315-8 126	割部 片 ①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は明赤褐色。	縄文施文。原形はR[L] [L] [R]縦転がし。	一括
315-9 126	割部 片 ①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	細沈線による「V」字状の文様を描き、沈 線を垂下している。	配石北西端
315-10 126	底部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径80mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面はぶい橙色。	沈線を垂下。 底部周囲に磨耗がみられる。	配石中心部
315-11 126	底部 片 ①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。器厚7~9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい橙色、内面は灰褐色。	沈線が施されている。	配石西部



第 316 図 44号配石遺構出土石器

44号配石遺構石器観覧表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
316-1 126	多孔石	完形	網雲母片岩	28.4	15.8	8.7	5,500	両面に18個の凹み。最大の凹みは長26mm、短24mm、深9mm。最小は長11mm、短11mm、深4mmで、平均は長16mm、短15mm、深7mm。	外側の配石
316-2 126	多孔石	一部欠損	輝緑岩	(25.3)	17.1	8.1	(5,250)	片面に4個の凹み。最大の凹みは長12mm、短11mm、深4mm。最小は長7mm、短6mm、深3mmで、平均は長10mm、短8mm、深3mm。	内側の配石
316-3 126	凹石	完形	点紋緑泥片岩	14.9	4.3	3.5	300	両面に4個の凹み。最大の凹みは長27mm、短26mm、深1mm。最小は長22mm、短16mm、深2mmで、平均は長25mm、短19mm、深1mm。	内側の配石
316-4 216	凹石	完形	石墨絹雲母片岩	18.8	7.2	3.4	700	両面に3個の凹み。最大の凹みは長29mm、短26mm、深3mm。最小は25mm、短23mm、深2mmで、平均は長27mm、短24mm、深2mm。	外側の配石
316-5 126	凹石	完形	安山岩	10.4	10.4	6.6	750	1個の凹みがある。凹みの大きさは長径20mm、短径18mm、深さ7mmである。	内側の配石
316-6 126	打製石斧	刃部欠損	紅糜絹雲母片岩	10.6	5.1	0.9	120	バチ (II b)。非常に薄手。	内側の配石
316-7 126	打製石斧	基部欠損	熱変成岩	9.9	5.4	1.3	90	バチ (II b)。	内側の配石
316-8 126		一部欠損	閃緑岩	(10.0)	8.0	4.9	(740)	粗削り途中。ほとんど原石のままの状態。	外側の配石

45号配石遺構 (第317~321図、PL. 79、126)

位置 Gj-35、Gh+Gl-35・36グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西131m (遺構の中心までの距離)、44号配石遺構の南西11mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬に44号配石遺構とともに調査を開始し、12月上旬に遺構の全景写真撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径7m50cm、短径5m50cmの範囲に配石が施されているが、明瞭な部分は遺構北東から南西に延びる列状の配石である。この列状配石はその一部を新しい耕作溝で壊されているが、長さ約4mであり、ほぼ大きさの統一された石12点で構成されている。この中には多孔石2点が含まれていた。12点の石の平均は、長径22cm・短径13cm・厚さ8.5cm・重量3.5kgである。配石の面積は約41.5㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。108点の石材別点数は、絹雲母緑泥石片岩37点 (34.3%)、輝緑岩15点 (13.9%)、点紋緑泥石片岩7点 (6.5%)、絹雲母緑泥石片岩・緑泥石片岩各5点 (各4.6%)、点紋絹雲母緑泥石片岩・珠石各4点 (各3.7%)、紅簾絹雲母片岩3点 (2.8%)、輝岩・赤色珪質板岩・凝灰岩・チャート・石黒絹雲母片岩各2点 (各1.9%)、絹雲母緑泥石片岩・石黒緑泥石片岩・緑簾緑泥石片岩・安山岩・点紋絹雲母緑泥石片岩・角閃岩・輝緑凝灰岩・熱変成岩・緑色珪質板岩・熔結凝灰岩・珪岩各1点 (各0.9%) であり、不明は7点 (6.5%) を数えた。不明の石を除いた101点中67点 (66.3%) の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は105点である。その内訳は、500g未満の石43点 (41%)、1kg~2.5kg未満の石20点 (19%)、500g~1kg未満の石18点 (17.1%)、2.5kg~5kg未満の石18点 (17.1%)、10kg~20kg未満の石3点 (2.9%)、7.5kg~10kg未満の石2点 (1.9%)、5kg~7.5kg未満の石1点 (1%) である。

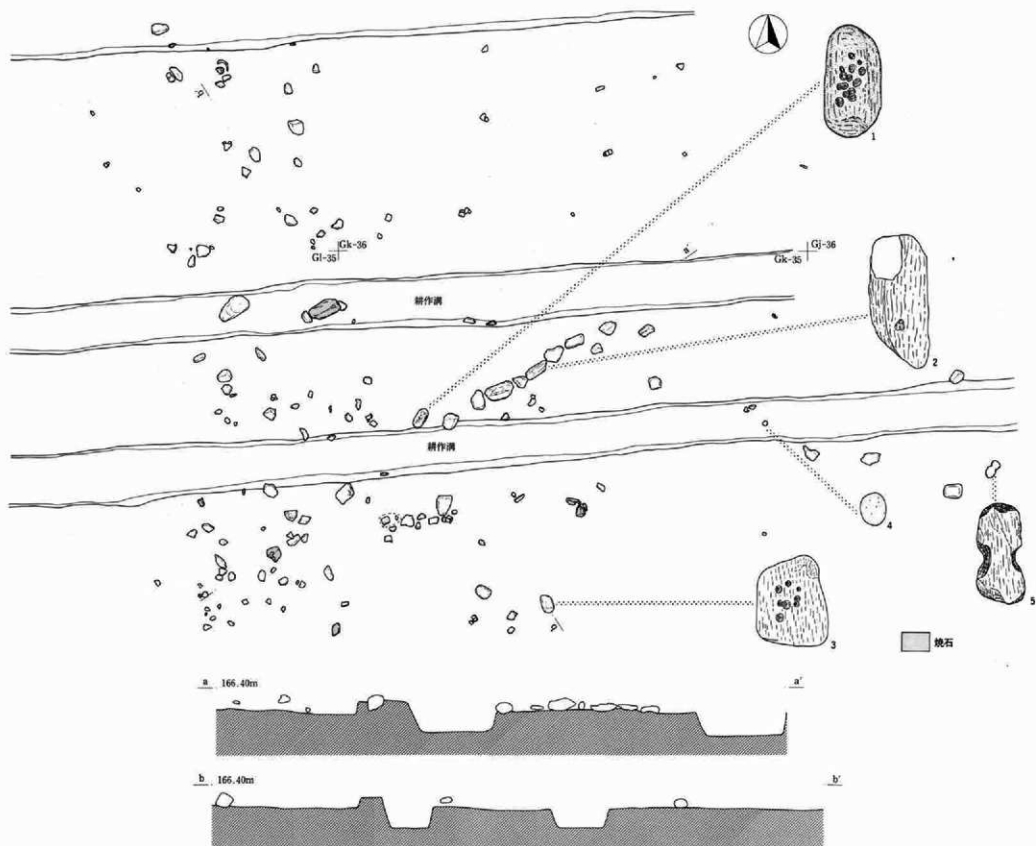
遺物出土状況 66点の土器片が遺構内から出土している。その部位別点数は、口縁部7点、胴部58点、底部1点であり、遺構の北から西にかけて出土している。加曾利E3式土器を主体としている。

石器は多孔石3点、磨石1点、打製石斧1点が出土している。多孔石2点は列状配石内から、1点は遺構南端から出土している。磨石は耕作溝内から、また打製石斧1点は遺構東端からそれぞれ出土している。石器の含有率は4.6%であり、また焼石は108点中8点の出土で、7.4%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

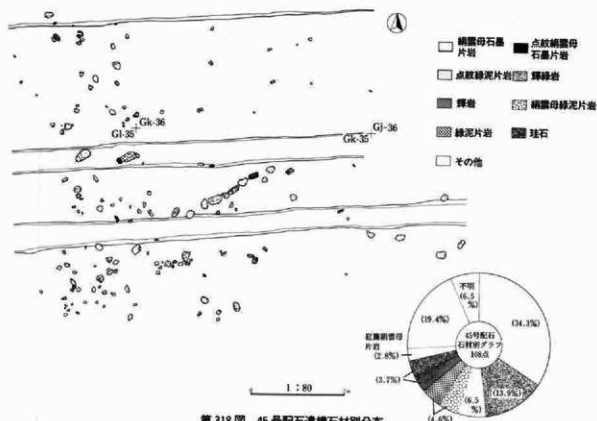
40号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
299-125	石 皿	完形	点紋緑泥石片岩	30.6	21.4	6.5	6,000	楕円形を呈し窪みは浅い。裏面に14個の凹み。最大は長21mm、短19mm、深8mm。最小は長11mm、短6mm、深2mmで、平均長14mm、短11mm、深4mm。	配石北端
299-125	多 孔 石	完形	点紋緑泥石片岩	21.3	10.6	8.5	2,600	両面に3個の凹み。最大の凹みは長24mm、短23mm、深12mm。最小は長11mm、短8mm、深2mmで、平均は長20mm、短18mm、深8mm。	配石西端
299-125	凹 石	完形	点紋緑泥石片岩	19.8	6.3	2.8	550	片面に2個の凹み。凹みの平均は長徑20mm、短徑19mm、深さ4mmである。側面に敲打痕がみられる。	配石中央部
299-125	打製石斧	完形	熱変成岩	8.9	4.3	2.1	84	バネ (IIa)。刃部が軸に対し斜めに傾く。	配石西端

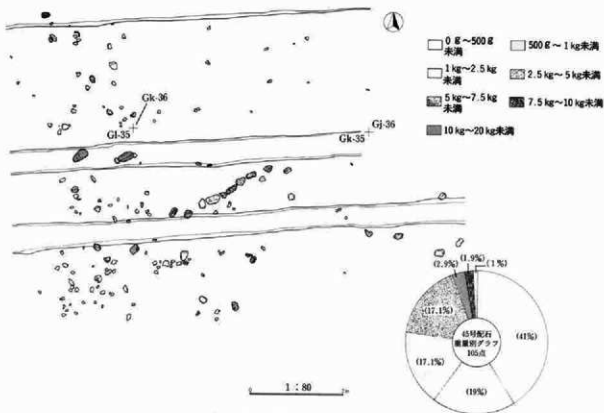


第 317 図 45 号配石遺構

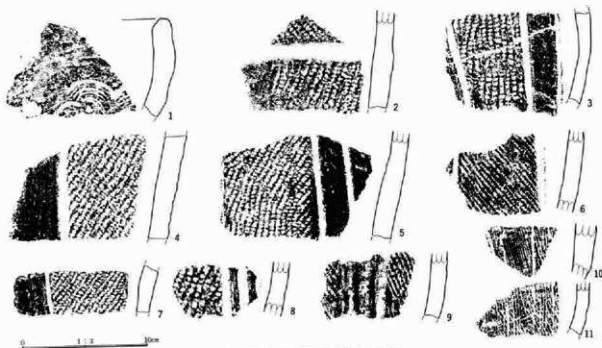
0 1 : 40 2m
 (遺物は 1 : 8)



第 318 図 45 号配石遺構石材別分布



第 319 図 45 号配石遺構重量別分布

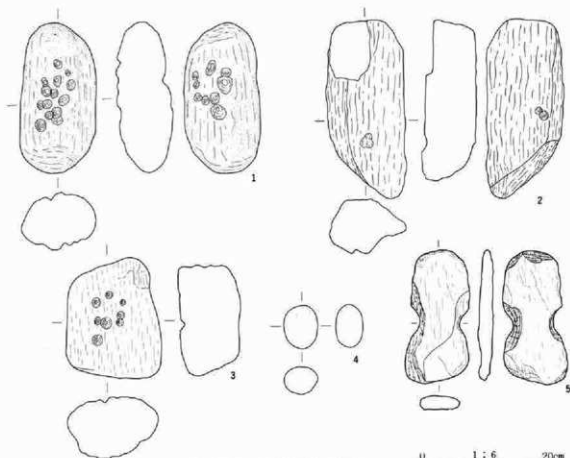


第320図 45号配石遺構出土土器

45号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①土質 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
320-1 126	口縁 部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はぶい黄褐色。	口縁部は内湾する。口縁部に陰帯による文 様が描かれ、内部に糸線による文様が施さ れている。	配石北西部
320-2 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調は黒褐色、内面は灰褐色。	口縁部は陰帯と杖線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR〔±〕縦転がし。胴部は R〔±〕縦転がし。	配石北西部
320-3 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	縄文施文。原体はR〔±〕縦・斜転がし。 沈線を垂下。	配石南部
320-4 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	縄文施文。原体はR〔±〕縦転がし。 沈線を垂下。 土器面は柔軟で押圧が強い。	配石南西部
320-5 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	縄文施文。原体はR〔±〕縦・斜転がし。 沈線を垂下。	配石南部
320-6 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は灰黄褐色。	縄文施文。原体はL〔±〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北西部
320-7 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。	縄文施文。原体はR〔±〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北端
320-8 126	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はぶい褐色。	縄文施文。原体はR〔±〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北東端
320-9 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原体はL〔±〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石西部
320-10 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14~17mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は灰褐色。	糸線と沈線が施されている。	配石北西端
320-11 126	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。	糸線が施されている。	配石中心部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



第321図 45号配石遺構出土石器

45号配石遺構石器観察表

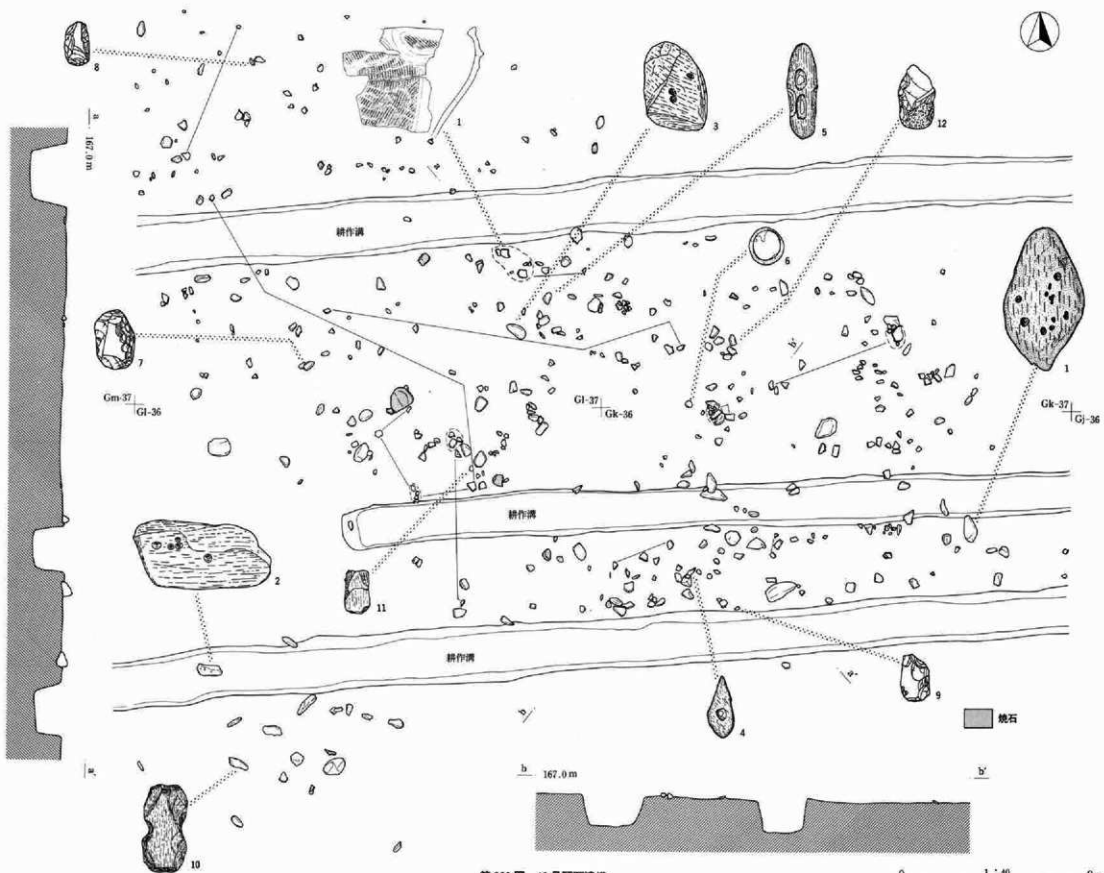
図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
321-1 126	多孔石	完形	点紋胡堂母石磨片岩	23.7	12.0	9.0	3,800	両面に23個の凹み。最大の凹みは長28mm、短22mm、深13mm。最小は長10mm、短8mm、深2mmで、平均は長17mm、短13mm、深5mm。	列状配石
321-2 126	多孔石	ほぼ完形	胡堂母石磨片岩	28.2	12.6	8.5	3,700	両面に5個の凹み。最大の凹みは長16mm、短10mm、深4mm。最小は長12mm、短10mm、深3mmで、平均は長14mm、短11mm、深4mm。	列状配石
321-3 126	多孔石	完形	胡堂母石磨片岩	19.2	13.2	9.7	4,000	片面に8個の凹み。最大の凹みは長18mm、短18mm、深9mm。最小は長11mm、短11mm、深2mmで、平均は長13mm、短13mm、深5mm。	配石南端
321-4 126	磨石	完形	安山岩	6.8	5.5	4.4	200	器面に磨耗痕がみられる。	耕作溝内
321-5 126	打製石斧	完形	胡堂母石磨片岩	21.2	10.5	2.5	800	分割(1)。	配石東端

46号配石遺構 (第322～327回、PL. 80、127)

位置 Gk・G1-36・37グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西131m (遺構の中心までの距離)、44号配石遺構の南西に接した所に位置している。

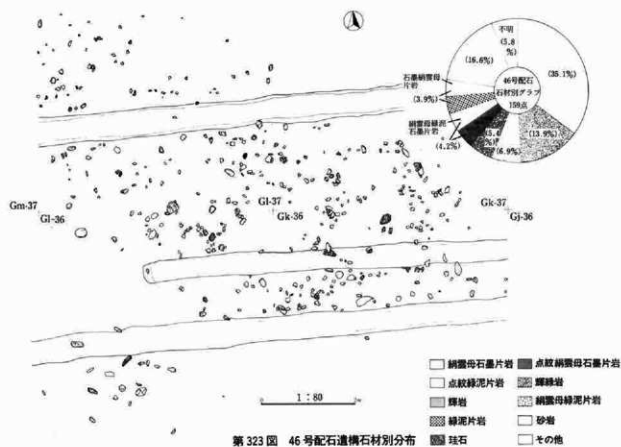
経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。11月下旬から12月上旬にかけて遺構の調査を行い、10日に全景写真の撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査に入った。この調査では新しい耕作溝の断面観察も利用したが、土壌等は存在しなかった。

重複 新しい耕作溝によって壊されている。

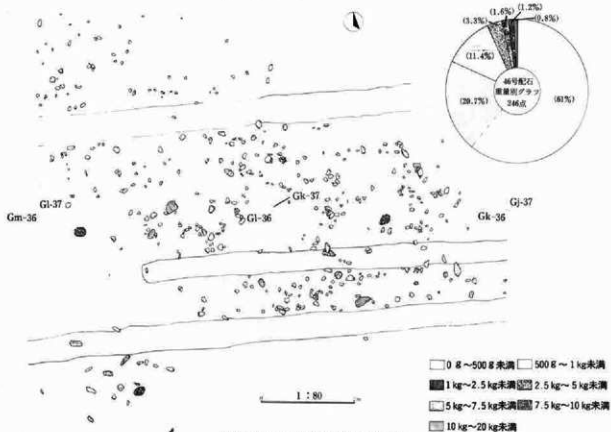


第 322 図 46 号配石遺構

0 1:40 2m
(遺物は 1:8)



第 323 図 46 号配石遺構石材別分布



第 324 図 46 号配石遺構重量別分布

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径約10m、短径約7mの範囲に石と土器片が分布している。この分布も子細に検討すると、遺構の東端に長径3m60cm、短径3m40cmの楕円形に、また中央部に長径2m80cm、短径2m50cmの楕円形に分布のまとまりが認められる。東端の配石の面積は約9.8㎡、中央部の配石面積は約6.5㎡であり、総面積は約16.3㎡となる。

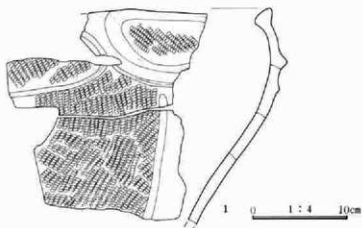
使用石材 29種類の石材が確認された。259点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩91点(35.1%)、輝緑岩36点(13.9%)、点紋緑泥片岩18点(6.9%)、珪石14点(5.4%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥石墨片岩各11点(各4.2%)、緑泥片岩・石墨絹雲母片岩各10点(各3.9%)、チャート6点(2.3%)、輝岩5点(1.9%)、緑色珪質板岩4点(1.5%)、絹雲母緑泥片岩・斑岩・閃輝緑岩各3点(各1.2%)、緑泥片岩・紅絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩各2点(各0.8%)、安山岩・石墨片岩・点紋絹雲母石墨片岩・閃輝緑岩・輝緑凝灰岩・砂岩・変斑岩・千枚岩・珪岩・脆雲母絹雲母片岩・雲母片岩各1点(各0.4%)であり、不明は15点(5.8%)を数えた。不明の石を除いた244点中164点(67.2%)の石が片岩類である。

石材重量 重量の判明している石は246点である。その内訳は、500g未満の石150点(61%)、500g～1kg未満の石51点(20.7%)、1kg～2.5kg未満の石28点(11.4%)、2.5kg～5kg未満の石8点(3.3%)、5kg～7.5kg未満の石4点(1.6%)、7.5kg～10kg未満の石3点(1.2%)、10kg～20kg未満の石2点(0.8%)である。

遺物出土状況 大形土器片1点を含め、土器片218点が出土している。部位別点数は、口縁部21点、胴部196点、底部1点であり、遺構東端から中央部にかけて出土している。加曾利E3式土器を主体としている。

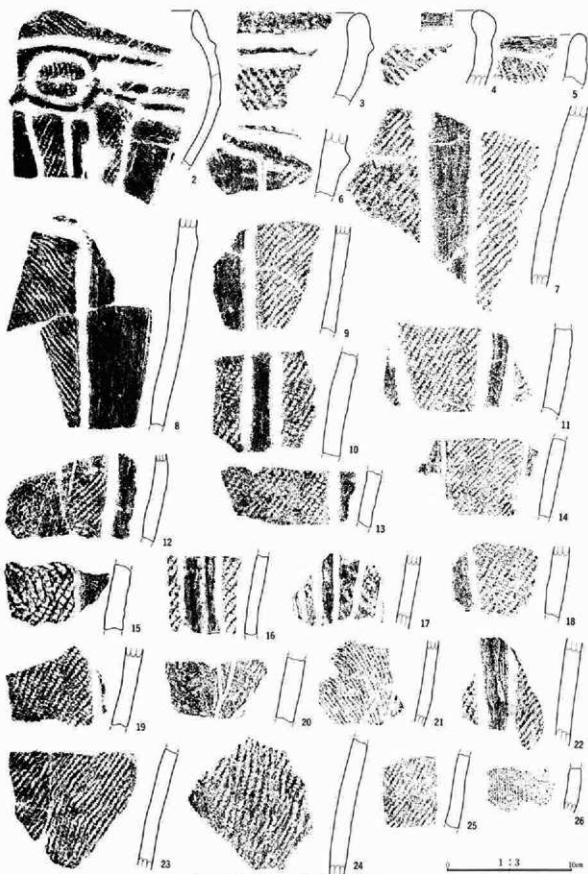
石器は多孔石3点、凹石2点、磨石2点、打製石斧5点、磨製石斧1点が出土している。多孔石1点は東端の配石から、1点は中央部の配石、1点は耕作溝内からそれぞれ出土している。凹石は東端と中央部の配石から、磨石は東端の配石、打製石斧は東端の配石から1点、中央部の配石から2点、遺構北端と南端からそれぞれ1点、磨製石斧は東端の配石からの出土であった。石器の含有率は5%であり、また焼石は259点中12点の出土で、4.6%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。



第325図 46号配石遺構出土土器(1)

図番 PL.		①出土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
325-1	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の大形破片。器厚12~15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 内外面の色調は褐色。	口縁部は内湾。口縁部に隆帯と沈線による 楕円等の文様が描かれ、縄文施文。原形は R1+機。胴部にR1+産・斜。沈線直下。	配石中心部



第326図 46号配石遺構出土土器(2)

46号配石遺構土器調査表

図番 PL	部位	①粘土・造模成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
326-2 127	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚8mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は黒褐色。		内湾する波状口縁部片。口唇部にR(上横)・ 口縁部に隆帯と沈線による内形・角円形の 文様を描きR(上横)・胴部R(上横)。沈線面 下。	配石南東部
326-3 127	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚14~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。		口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR(上横)がし。	配石西部
326-4 127	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~19mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい赤褐色。		口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(上横)がし。	配石東部
326-5 127	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~17mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい赤褐色。		口縁部に沈線による文様が描かれ、縄文施 文。原体はR(上横)がし。	配石南東部
326-6 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16~18mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。		口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、 胴部にR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石南東部
326-7 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は灰褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石南部
326-8 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面はぶい黄褐色。		縄文施文。原体はL(上横)がし。 沈線を垂下。	配石南西部
326-9 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は荒れている。 外面の色調は明褐色、内面は灰褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石東部
326-10 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚16mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石中心部
326-11 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧なミガキが行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は黒褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。 内面に張が付着している。	配石東部
326-12 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は荒れている。 外面の色調はぶい赤褐色、内面は褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。 外面は荒れ、張が付着している。	配石南東部
326-13 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は暗赤褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石東部
326-14 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はぶい赤褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。土器面は柔軟で押圧が強い。 外面に張が付着している。	配石南端
326-15 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はぶい黄褐色。		縄文施文。原体はR(上横)・横帯がし。 沈線を垂下。土器面は柔軟で押圧が強い。	配石東部
326-16 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はぶい赤褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。土器面は柔軟で押圧が強い。	配石西部
326-17 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面はぶい褐色。		縄文施文。原体はL(上横)がし。 沈線を垂下。	配石中心部
326-18 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~14mm。 内面は荒れている。 外面の色調は灰褐色、内面はぶい褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石西部
326-19 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色、内面は黒褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線を垂下。	配石南東部
326-20 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい赤褐色。		縄文施文。原体はR(上横)がし。 沈線が施されている。	配石東部

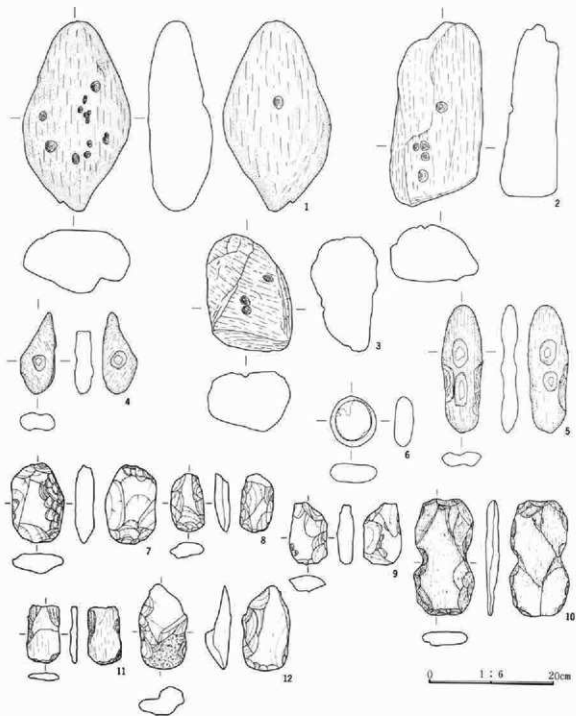
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

46号配石遺構土器観察表

図番 PL.	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文	様(その他)	出土状況
326-21 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚9mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はL(直線)がし。 沈線を下。		配石北端
326-22 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚13mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面は灰褐色。	縄文施文。原体はR(上線)がし。 沈線を下。		配石中心部
326-23 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR(直線)がし。 土器面は柔軟。		配石南西部
326-24 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は黒褐色、内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR(上線)がし。		一括
326-25 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の割部片。器厚9~11mm。 内面は縦方向の調整が行われている。 外面の色調は暗褐色、内面はにぶい褐色。	縄文施文。原体はR(直線)がし。		配石西部
326-26 127	割部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の割部片。器厚10mm。 内面は荒れている。 外面の色調は黒褐色、内面は褐色。	条線が施されている。		配石北端

46号配石遺構石器観察表

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
327-1 127	多孔石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	30.0	17.2	10.2	6,650	両面に15個の凹み。最大の凹みは長20mm、短14mm、深4mm、最小は長5mm、短4mm、深2mmで、平均は長11mm、短9mm、深2mm。	東端の配石
327-2 127	多孔石	完形	粗雲母石黒片岩	29.5	14.5	9.0	5,250	片面に5個の凹み。最大の凹みは長20mm、短15mm、深4mm、最小は長11mm、短9mm、深4mmで、平均は長15mm、短13mm、深4mm。	耕作溝内
327-3 127	多孔石	ほぼ完形	粗雲母石黒片岩	18.5	13.6	9.5	3,700	片面に3個の凹み。最大の凹みは長17mm、短12mm、深5mm、最小は長14mm、短12mm、深5mmで、平均は長16mm、短11mm、深5mm。	中央部の配石
327-4 127	凹石	瓦	点紋緑泥片岩	(12.8)	5.9	3.0	(300)	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径27mm、短径22mm、深さ2mmである。	東端の配石
327-5 127	凹石	完形	点紋網雲母石黒片岩	20.4	6.4	2.6	500	両面に4個の凹み。最大の凹みは長51mm、短20mm、深3mm、最小は長32mm、短23mm、深3mmで、平均は長43mm、短24mm、深4mm。	中央部の配石
327-6 127	磨石	完形	安山岩	7.9	7.5	3.2	200	器面に磨耗痕と燻の付着がみられる。	東端の配石
327-7 127	打製石斧	完形	閃緑岩	12.5	8.5	3.1	500	バチ(II b 7)。片面に素材割片の痕跡大きく残す。	中央部の配石
327-8 127	打製石斧	基部欠損	熱変成岩	(9.2)	5.4	2.5	(150)	短冊(III)。片面の一部に自然面残る。	配石北端
327-9 127	打製石斧	基部欠損	千枚岩	(9.7)	6.0	2.7	(170)	バチ(II b)。	東端の配石
327-10 127	打製石斧	完形	点紋網雲母石黒片岩	18.3	9.7	2.1	600	分割(1)。	配石南端
327-11 127	打製石斧	基部欠損	粗雲母石黒片岩	(9.1)	5.3	1.2	(90)	短冊(III)。	中央部の配石
327-12 127	磨製石斧	基部欠損	輝緑岩	(13.3)	7.6	4.4	(470)	磨打途中。片面ほとんど粗磨り痕残る。	東端の配石

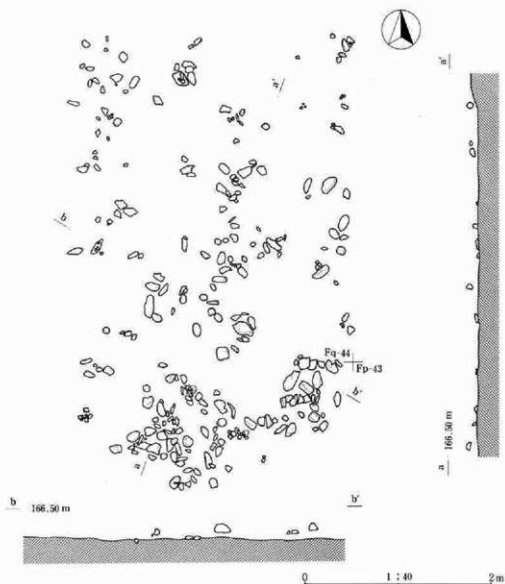


第 327 図 46号配石遺構出土石器

47号配石遺構 (第328～333図、PL. 80、127)

位置 Fq-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西47m50cm(遺構の中心までの距離)、29号配石遺構の北北西5m50cmの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。12月上旬から遺構の調査に入り、11日に全景写真の撮影を実施した。中旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い下部調査を行ったが、土壌等は存在



第 328 図 47 号配石遺構

しなかった。

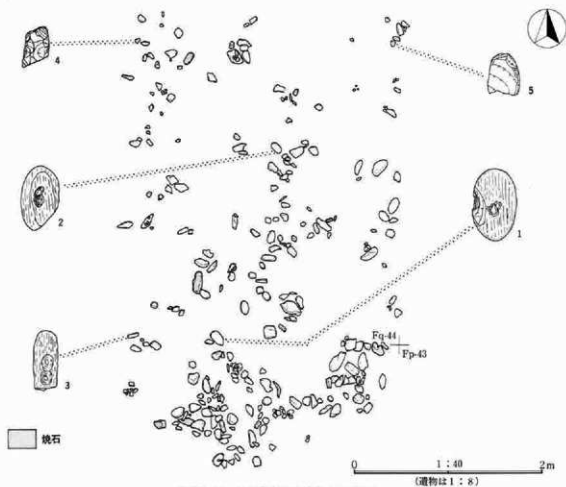
重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

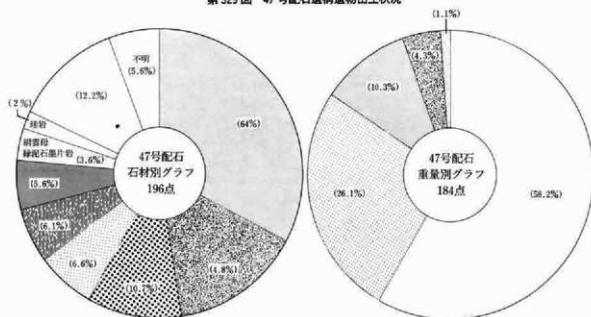
形状・配石状況 長径 4 m80cm、短径 3 mの範囲に配石が施されているが、南部分にやや集中している。配石の面積は約13.9㎡である。

使用石材 24種類の石材が確認された。196点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩64点 (32.7%)、輝緑岩29点 (14.8%)、緑泥片岩21点 (10.7%)、点紋緑泥片岩13点 (6.6%)、珪石12点 (6.1%)、点紋絹雲母石墨片岩11点 (5.6%)、絹雲母緑泥石墨片岩7点 (3.6%)、珪岩4点 (2%)、石墨絹雲母片岩・角閃岩各3点 (各1.5%)、チャート・点紋絹雲母緑泥片岩・熱変成岩・緑色珪質板岩各2点 (各1%)、輝岩・絹雲母緑泥片岩・赤色珪質板岩・安山岩・閃緑岩・輝緑凝灰岩・方散虫板岩・石英斑岩・閃輝緑岩・雲母片岩各1点 (各0.5%) であり、不明は11点 (5.6%) を数えた。不明の石を除いた185点中123点 (66.5%) の石が片岩類である。

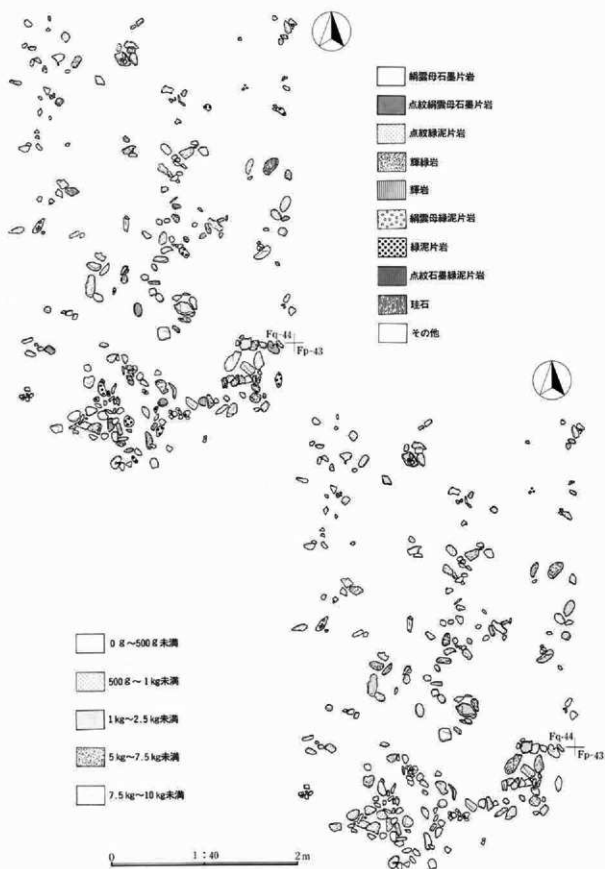
石材重量 重量の判明している石は184点である。その内訳は、500g未満の石107点(58.2%)、500g～1kg



第 329 図 47号配石遺構遺物出土状況



第 330 図 47号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ



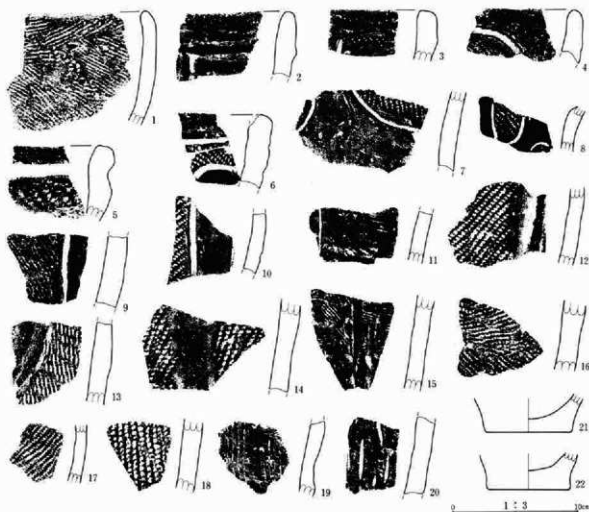
第331図 47号配石遺構 石材別(上)・重量別(下)分布

未満の石48点(26.1%)、1kg~2.5kg未満の石19点(10.3%)、2.5kg~5kg未満の石8点(4.3%)、5kg~7.5kg未満の石2点(1.1%)である。

遺物出土状況 95点の土器片が出土している。その部位別点数は、口縁部13点、胴部76点、底部6点であり、遺構中心部は少なく、周辺から出土している。加曾利E4式土器を主体に、E3式土器片も少量含まれていた。

石器では凹石3点、打製石斧1点、磨製石斧の未製品1点が出土している。打製石斧と磨製石斧は配石の北端から、凹石は中央部と南端近くからの出土である。石器の含有率は2.6%であり、また焼石は196点中15点の出土で、7.7%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。



第332図 47号配石遺構出土土器

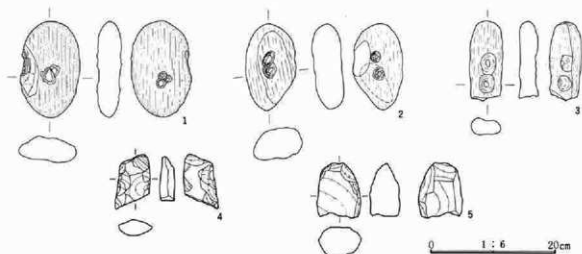
47号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位 ①触土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
332-1 127	口縁 部片 ①細粒の砂を混入 ②欠	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は赤褐色、内面はよい赤褐色。	口縁部はやや内湾する。縄文黒文。器体は L(↑)横・縦転がし。	配石北東部

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

47号配石遺構土器調査表

図番 PL	部位	①胎土 ②構成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
332-2	口縁 127	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚15mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。それに接続する微隆起帯を垂下 している。	配石北西部
332-3	口縁 127	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の微隆起 帯を巡らせる。それに接続する沈線を描下 している。微隆起帯上にR〔〕横転がし。	配石東南部
332-4	口縁 127	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚13~16mm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	口唇部に沈線による文様の描かれ、縄文施 文。原体はR〔〕。	配石北部
332-5	口縁 127	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の口縁部片。器厚16mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい褐色。	口縁部に幅広い沈線による文様が描かれ、 縄文施文。原体はR〔〕横転がし。	配石東南部
332-6	口縁 127	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚19mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は褐色。	口唇部に狭い無文帯をおき、1条の沈線 を巡らせる。胴部には沈線による「U」状の文 様を描き、縄文施文。原体はR〔〕。	配石東部
332-7	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	細沈線による文様が描かれ、区画内に縄文 施文。原体はR〔〕。	配石南部
332-8	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は灰黄褐色。	胴部で括れる器形。細沈線による「U」字 状の文様が描かれ、区画内に縄文施文。 原体はL〔〕縦転がし。	配石北東部
332-9	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚17mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は赤褐色。	縄文施文。原体はL〔〕縦転がし。 微隆起帯を垂下させている。	配石南部
332-10	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面はぶい褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 沈線を垂下。 内面に煤が付着している。	配石北西部
332-11	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黄褐色。	縄文施文。原体はL〔〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北東部
332-12	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 外面の色調は黄褐色、内面はぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石北東部
332-13	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 外面の色調は褐色、内面はぶい褐色。	微隆起帯による文様が描かれ、縄文施文。 原体はR〔〕。	配石南部
332-14	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明黄褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 沈線を垂下。	配石西側
332-15	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は褐色。	微隆起帯を垂下させている。縄文施文。 原体はL〔〕縦転がし。	配石北西部
332-16	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15~17mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はL〔〕縦・斜転がし。	配石北東部
332-17	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。	配石西部
332-18	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚15mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は褐色。	縄文施文。原体はR〔〕縦転がし。 押圧が強い。	配石東部
332-19	胴部 片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9~12mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は暗褐色。	糸線が施されている。 内面に煤が付着している。	配石中心部
332-20	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調はぶい褐色、内面は明褐色。	押し引き状の沈線が施されている。	配石西部



第333図 47号配石遺構出土石器

47号配石遺構土器観察表

図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
332-21 127	底部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の底部片。底径68mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は黒褐色。	内面に傷が付着している。	配石東部
332-22 127	底部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径65mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明赤褐色、内面は黒褐色。	内面に炭化物が付着している。	配石南西部

47号配石遺構石器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
333-1 127	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	15.2	9.8	4.2	900	両面に5個の凹み。最大の凹みは長27mm、短20mm、深3mm。最小は長12mm、短12mm、深3mmで、平均は長17mm、短16mm、深3mm。	配石の南端近く
333-2 127	凹 石	完形	緑泥片岩	13.6	8.2	5.1	900	両面に4個の凹み。最大の凹みは長24mm、短22mm、深2mm。最小は長18mm、短16mm、深3mmで、平均は長21mm、短18mm、深3mm。一部焼熱。	配石中央部
333-3 127	凹 石	片	前富母石黒片岩	(12.8)	5.2	3.1	(300)	両面に4個の凹み。最大の凹みは長35mm、短24mm、深4mm。最小は長25mm、短18mm、深2mmで、平均は長29mm、短22mm、深3mm。	配石南西端
333-4 127	打製石斧	刃部欠損	熱変成岩	(8.6)	5.7	2.6	(130)	バチ (II b)。	配石北西端
333-5 127		刃部欠損	角閃岩	(8.7)	7.0	4.9	(410)	粗顆粒段層。	配石北東端

48号配石遺構 (第334～338図、PL. 81、127)

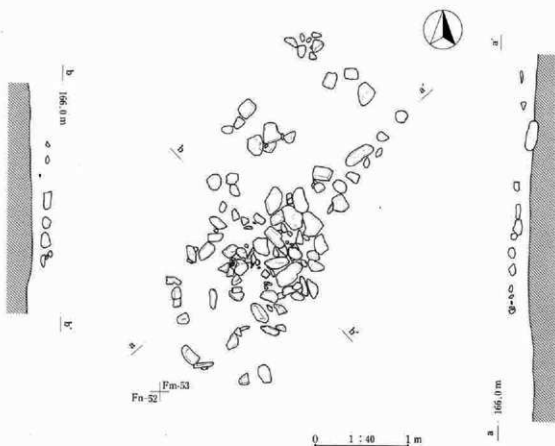
位置 Fm-53グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西38m50cm (遺構の中心までの距離)、49号配石遺構の南南東9mの所に位置している。

経過 0区 (昭和62年度調査区) から検出。12月上旬から調査を開始した。18日に遺構の全景写真撮影を実施した。下旬には遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い、下部調査を行ったが土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 竪穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径3m50cm、短径1m70cmの範囲に配石が集中的に施されている。配石の面積は約6.1m²



第334図 48号配石遺構

である。

使用石材 25種類の石材が確認された。114点の石材別点数は、網雲母石墨片岩24点(21.1%)、輝緑岩22点(19.3%)、緑泥片岩9点(7.9%)、点紋網雲母石墨片岩・点紋緑泥片岩各7点(各6.1%)、網雲母緑泥石墨片岩5点(4.4%)、斑輝岩・チャート各4点(各3.5%)、網雲母緑泥片岩・珪石各3点(各2.6%)、輝岩・角閃岩・変斑輝岩・点紋網雲母片岩・珪石各2点(各1.8%)、赤色珪質板岩・滑石片岩・石墨緑泥片岩・石墨網雲母片岩・緑泥石墨片岩・網雲母片岩・点紋網雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・熱変成岩・綠色珪質板岩各1点(各0.9%)であり、不明は6点(5.3%)を数えた。不明の石を除いた108点中53点(49.1%)の石が片岩類である。

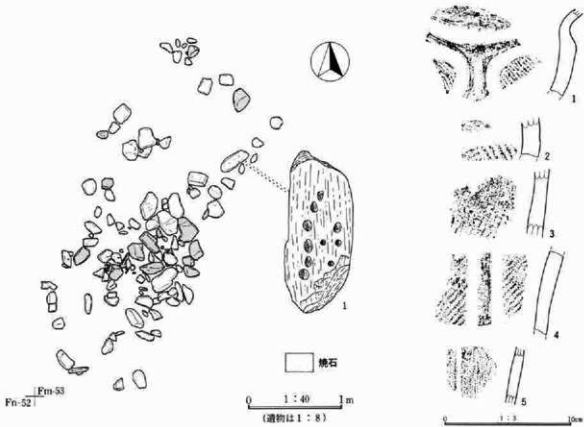
石材重量 重量の判明している石は108点である。その内訳は、500g未満の石36点(33.3%)、1kg～2.5kg未満の石32点(29.6%)、500g～1kg未満の石22点(20.4%)、2.5kg～5kg未満の石11点(10.2%)、5kg～7.5kg未満の石4点(3.7%)、7.5kg～10kg未満の石3点(2.8%)である。

遺物出土状況 土器片は9点の出土で非常に少ない。部位別点数は口縁部2点、胴部7点であり、配石の中心部からの出土である。加曾利E3式土器を主体としている。

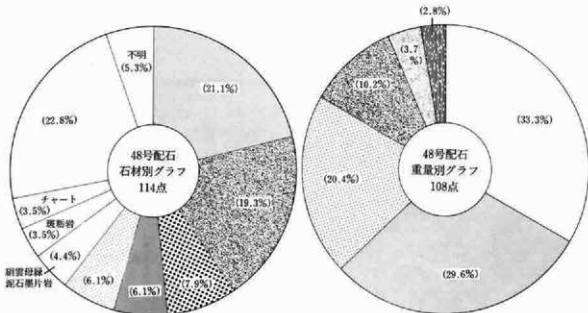
石器では多孔石1点が配石の北東から出土している。石器の含有率は0.9%であり、また焼石は114点中9点の出土で、7.9%を占めている。

所見 出土遺物から判断して、当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

5 配石遺構 (48号)

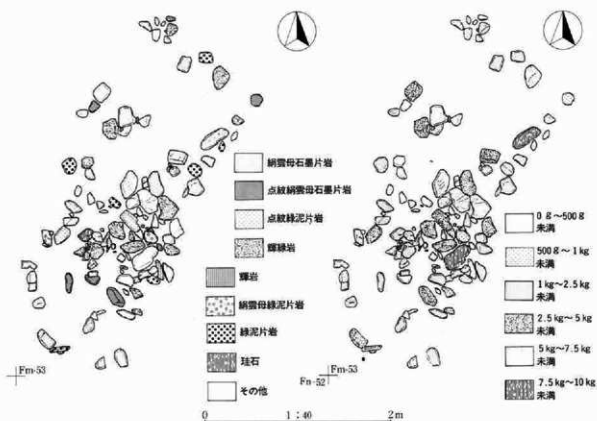


第 335 図 48号配石遺構遺物出土状況と出土土器



第 336 図 48号配石遺構 石材別 (左)・重量別 (右) グラフ

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



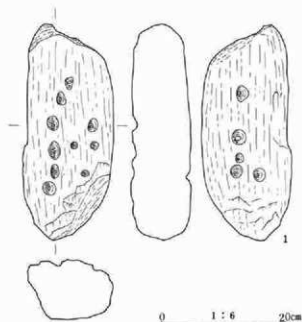
第337図 48号配石遺構 石材別(左)・重量別(右)分布

48号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
335-1 127	口縁 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚7~12mm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	口唇部に無文帯。口縁部は幾何と沈線による 楕円等の文様を描き、縄文施文。 原体はR(上)横転がし。	配石南西部
335-2 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚14mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明赤褐色。	縄文施文。原体はR(上)(0段多条か?)縦・ 横転がし。	配石西部
335-3 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	縄文施文。原体はR(上)(0段多条)。	配石南部
335-4 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は縦方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐色。	縄文施文。原体はR(上)横転がし。 沈線を垂下。	配石南部
335-5 127	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい黄褐色、内面は黒褐色。	条線と沈線が施されている。 内面に煤が付着している。	配石南部

48号配石遺構土器観察表

図番 Pl.	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
338-1 127	多孔石	完形	網罟母石塵片岩	34.0	14.6	9.6	7,500	両面に15個の凹み。最大の凹みは長28mm、短18mm、 深10mm。最小は長10mm、短9mm、深4mmで、平均 は長17mm、短15mm、深5mm。一部焼けている。	配石北東端



第338図 48号配石遺構出土石器

49号配石遺構 (第339~341図、PL. 82)

位置 Fn-54・55グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西47m (遺構の中心までの距離)、48号配石遺構の北北西9mの所に位置している。

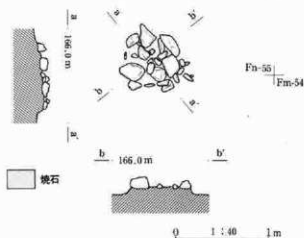
経過 0区 (昭和162年度調査区) から検出。12月上旬から調査を開始した。18日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げ、配石遺構の石の取り上げ作業を行い下部調査を行ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径75cm、短径70cmの小規模な配石である。配石の面積は約0.5m²である。

使用石材 11種類の石材が確認された。27点の石材別点数は、絹雲母石墨片岩10点 (37%)、輝緑岩・輝岩各3点 (各11.1%)、点紋緑泥片岩・紅簾絹雲母片岩各2点 (各7.4%)、緑泥片岩・絹雲母緑泥片岩・角閃岩・絹雲母緑泥石墨片岩・石墨絹雲母片岩・緑泥石墨片岩各1点 (各3.7%) であり、不明は1点 (3.7%) を数えた。不明の石を除いた26点中19点 (73.1%) の石が片岩類である。



第339図 49号配石遺構

絹雲母石墨片岩

点紋緑泥片岩

輝緑岩

絹雲母緑泥片岩

その他

0g~500g未満

500g~1kg未満

1kg~2.5kg未満

2.5kg~5kg未満

5kg~7.5kg未満



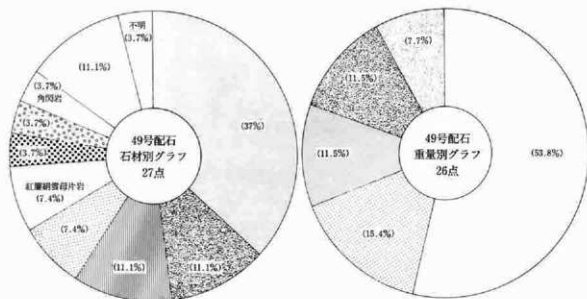
Fn-55
|
Fm-54



Fn-55
|
Fm-54

0 1:40 1m

第340図 49号配石遺構
石材別 (上)・重量別 (下) 分布



第341図 49号配石遺構 石材別(左)・重量別(右) グラフ

石材重量 重量の判明している石は26点である。その内訳は、500g未満の石14点(53.8%)、500g～1kg未満の石4点(15.4%)、1kg～2.5kg未満の石3点(11.5%)、2.5kg～5kg未満の石3点(11.5%)、5kg～7.5kg未満の石2点(7.7%)である。

遺物出土状況 土器片や石器は出土していない。

所見 遺物の出土はないが、配石状況から判断して縄文時代中期の配石遺構であることにはまちがいない。

50号配石遺構 (第342～344図、PL. 82、127)

位置 Gi・Gj-42・43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西110m(遺構の中心までの距離)、36号配石遺構の南西9m50cmの所に位置している。

経過 0区(昭和62年度調査区)から検出。12月上旬から調査を開始し、19日に遺構の全景写真撮影を実施した。その後、遺物の取り上げ、さらに配石遺構の石の取り上げを行い下部調査に入ったが、土壌等は存在しなかった。

重複 なし。

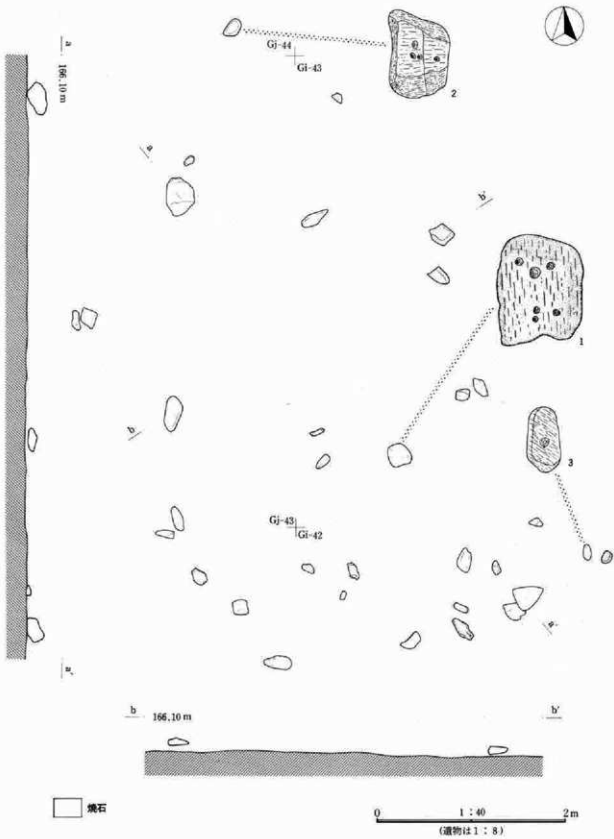
覆土 堅穴としての掘り込みが存在しないために、遺構内覆土は認められなかった。

形状・配石状況 長径6m、短径4mの楕円形に配石が施されている。小規模な環状構造と判断して良いものであろうか。配石の中心からやや東南寄りから多孔石1点が出土している。配石の面積は約26.2㎡である。

使用石材 12種類の石材が確認された。32点の石材別点数は、輝緑岩6点(18.8%)、絹雲母石墨片岩5点(15.6%)、点紋緑泥片岩・石墨絹雲母片岩各4点(各12.5%)、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩各2点(各6.3%)、砂岩・絹雲母緑泥石墨片岩・紅縹絹雲母片岩・絹雲母片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点(各3.1%)であり、不明は2点(6.3%)を数えた。不明の石を除いた30点中23点(76.7%)の石が片岩類である。

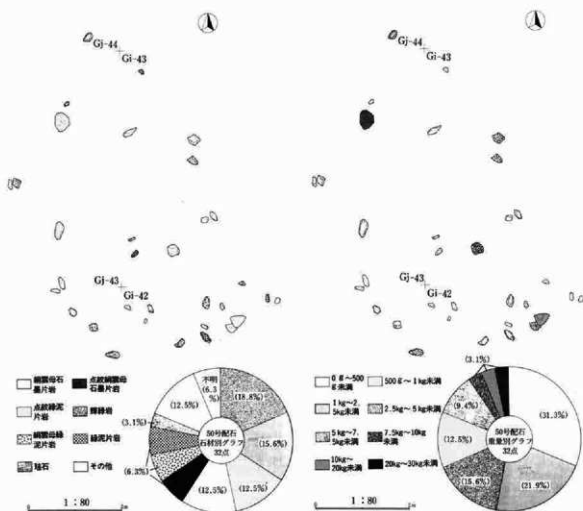
石材重量 重量の判明している石は32点である。その内訳は、500g未満の石10点(31.3%)、1kg～2.5kg未満の石7点(21.9%)、2.5kg～5kg未満の石5点(15.6%)、500g～1kg未満の石4点(12.5%)、5kg～7.

5 配石遺構 (50号)



第 342 図 50 号配石遺構

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

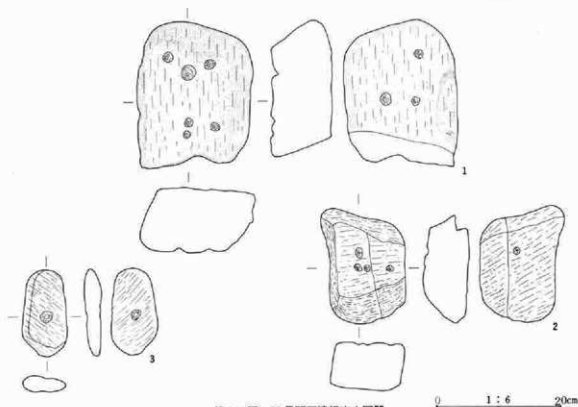


第343図 50号配石遺構石材別(左)・重量別(右)分布

5kg未満の石3点(9.4%)、7.5kg~10kg未満の石1点(3.1%)、10kg~20kg未満の石1点(3.1%)、20kg~30kg未満の石1点(3.1%)である。

遺物出土状況 土器片の出土はなく、石器として多孔石2点、凹石1点が出土している。多孔石1点は遺構の北端から、1点は中央やや南よりの出土である。凹石は東南端から出土している。石器の含有率は9.4%であり、また焼石は32点中8点の出土で、25%を占めている。焼石の占める割合は、他の配石遺構よりも高い。

所見 土器片の出土はないが、多孔石等の出土から考えて縄文時代中期の配石遺構であることには間違いない事実であろう。



第344図 50号配石遺構出土石器

50号配石遺構石器観察表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
344-1 127	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(23.2)	18.4	10.1	(7,850)	両面に9個の凹み。最大の凹みは長25mm、短23mm、深12mm。最小は長12mm、短10mm、深5mmで、平均は長17mm、短14mm、深8mm。全周壊れている。	配石の中 尖南寄り
344-2 127	多孔石	ほぼ完形	胡雲母石黒片岩	18.2	13.6	7.6	2,600	両面に5個の凹み。最大の凹みは長15mm、短11mm、深5mm。最小は長10mm、短9mm、深3mmで、平均は長12mm、短10mm、深3mm。	配石北端
344-3 127	凹石	完形	緑泥片岩	13.7	7.4	2.5	500	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径18mm、短径17mm、深さ4mmである。	配石東南 端

6 屋外埋設土器

屋外埋設土器は12基検出された。環状列石に組み込まれているもの3基、列石内部から検出されたもの1基、列石周辺から検出されたもの2基、廃棄場所から検出されたもの1基、配石遺構の周辺から検出されたもの5基である。12基の屋外埋設土器のうち4基については、残存脂肪分析を実施した。

環状列石に組み込まれているもの	1・6・12号屋外埋設土器
列石内部から検出されたもの	2号屋外埋設土器
列石周辺から検出されたもの	7・11号屋外埋設土器
廃棄場所から検出されたもの	5号屋外埋設土器
配石遺構周辺から検出されたもの	3・4・8・9・10号屋外埋設土器
残存脂肪分析を実施した屋外埋設土器	1・3・4・6号屋外埋設土器（4章 自然科学的分析〔1〕参照）

1号屋外埋設土器（第345・350・353図、PL. 84、128）

Fd・Fe-47グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東17m50cm、列石下に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は94×80cm、底面は74×58cm、深さ25cmの楕円形を呈し、面積約0.34m²である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が非常にある。炭化物粒子を極少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。埋設土器固定のための人為的埋土。

埋設土器は胴下半分を欠損した加曾利E3式土器で、逆位状態で埋設され土圧によりやや南に傾いていた。埋設土器内部土壌は残存脂肪分析を、土器は胎土分析を実施した。

土壌の南部分に11点の石があるが、これらは列石の一部を構成するものであろう。6種類の石材が確認され、石材別点数は絹雲母石墨片岩・輝緑岩各3点、絹雲母緑泥石墨片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・凝灰岩・珪石各1点であり、不明は1点であった。

2号屋外埋設土器（第345・350・353・354図、PL. 84・85、128）

Fi・Fj-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北北西14m50cm、列石から3m50cm内側の所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は74×69cm、底面は49×43cm、深さ25cmのほぼ円形を呈し、面積0.17m²である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。土器固定のための人為的埋土。

第2層 黄褐色砂礫層 粘性があまりなくサラサラしている。土壌掘りあげ土で、土器固定のための人為的埋土である。

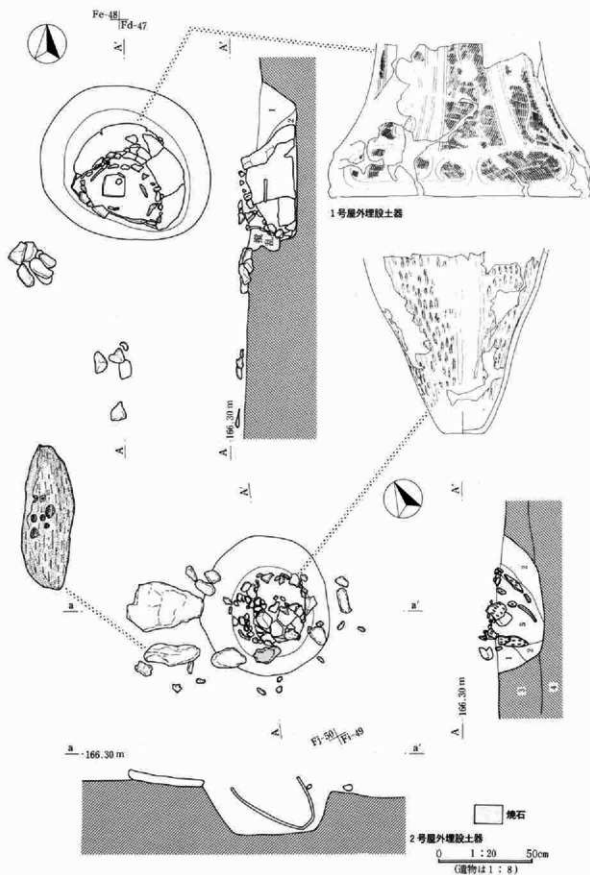
第3層・第4層は地山である。

第3層 茶褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。

第4層 黄褐色砂礫層

埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。埋設土器の覆土は暗褐色土層である。

第5層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。



第345図 1・2号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

埋設土器の覆土層からは蓋石が出土している。蓋石は長径16cm・短径11cm・厚さ4cm・重量1,350gの斑岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。また土壌上面には埋設土器を囲うように多孔石1点、焼石1点を含む26点の石が配置されている。石材の種類は13種類で、石材別点数は点紋絹雲母石墨片岩5点、絹雲母石墨片岩3点、点紋緑泥片岩・絹雲母緑泥石墨片岩・緑泥片岩・斑岩各2点、輝緑岩・石墨片岩・紅糜絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩・綠色珪質板岩・方虫甲板岩各1点であり、不明は3点を数えた。

3号屋外埋設土器（第346・350・353図、PL. 128）

F1-57グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西46m90cm、19号配石遺構内に構築されている。土器を埋設するピット上面の規模は38×34cm、底面は27×25cm、深さ17cmのほぼ円形を呈し、面積0.06㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。

埋設土器は胴部を欠損した加曾利E3式土器が、逆位状態で出土した。埋設土器の覆土は暗褐色土層であり、残存脂肪分析を実施した。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。

埋設土器の上部からは蓋石が出土している。蓋石は長径26.3cm・短径14.4cm・厚さ3.8cm・重量2,300gの点紋緑泥片岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。またピット上面には埋設土器を囲うように石が配置されている。

4号屋外埋設土器（第346・351・354図、PL. 87、128）

Fa-55グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東50m20cmの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は38×37cm、底面は30×27cm、深さ15cmのほぼ円形を呈し、面積0.06㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で逆位状態で埋設されていた。覆土は暗褐色土層であり、残存脂肪分析を実施した。

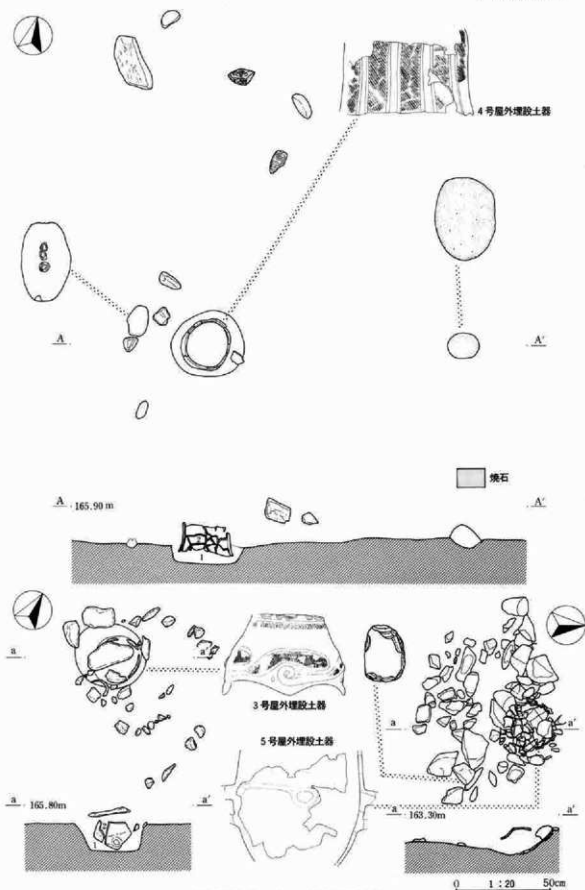
第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はほとんどない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

ピット周囲には12点の石が配置され、墓標になると思われる丸石が北東135cmの所から出土した。この丸石は長径17.5cm・短径12.9cm・厚さ10.8cm・重量3,100gの安山岩を使用している。また凹石1点、焼石1点が含まれている。石材の種類は4種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩5点、点紋緑泥片岩3点、輝岩2点、斑岩1点であり、不明は1点であった。

5号屋外埋設土器（第346・351・354図、PL. 88、128）

Ej・Ek-64グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東120m80cm、廃棄場所からの出土である。土器を埋設するピット上面の規模は33×32cm、底面は20×20cm、深さ15cmの楕円形を呈し、面積0.07㎡である。

埋設土器は加曾利E4式土器で斜位状態の出土であった。また蓋石を伴って出土した。蓋石は長径8.7cm・短径8.4cm・厚さ6.8cm・重量810gの輝岩を使用している。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。周囲からは打製石斧1点を含む67点の石が出土している。石材の種類は9種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩29点、輝岩10点、緑泥片岩7点、珪石4点、点紋緑泥片岩・綠色珪質板岩各2点、絹雲母緑泥片岩・緑糜緑泥片岩・石墨緑泥片岩各1点であり、不明は10点を数えた。



第346图 3·4·5号屋外埋設土器

6号屋外埋設土器 (第347・351・353・354図、PL. 88、128)

F1-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西19m50cm、列石下からの出土である。土器を埋設する土壌上面の規模は78×70cm、底面は75×66cm、深さ10cmのほぼ円形を呈し、面積0.39m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。炭化物粒子を極少量含む。

埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で斜位状態で出土した。環状列石の構築時期を考えるうえで貴重な資料である。また土器内覆土は残存脂肪分析を実施した。土壌上面には環状列石の石が蓋石として配置されている。この蓋石は長径43cm・短径29cm・厚さ19cm・重量44kgで、輝岩を使用している。周辺からは多量の石が出土しているが、これらは環状列石を構成する石である。この中には多孔石・凹石・打製石斧各1点も含まれていた。

7号屋外埋設土器 (第347・351図、PL. 89、128)

Fm-46グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西南西24mの所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は71×68cm、底面は57×49cm、深さ20cmの楕円形を呈し、面積0.21m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性は少しある。小礫を含む。

埋設土器は加曾利E3式土器の両耳壺が正位状態で出土した。土器の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性が少しある。小礫を含む。

土壌周囲には埋設土器を囲うように27点の石が配置されている。石材の種類は10種類で、石材別点数は網雲母石墨片岩15点、点紋緑泥片岩3点、斑岩2点、輝緑岩・輝岩・網雲母緑泥片岩・緑泥片岩・角閃岩・砂岩・珪石各1点である。

8号屋外埋設土器 (第348・352・354図、PL. 89、128)

Fm-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西31m50cm、1号竪穴住居跡の北東3mの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は56×53cm、底面は41×34cm、深さ22cmの楕円形を呈し、面積0.09m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。

埋設土器は土器片を利用したもので、蓋石を伴っていた。蓋石は長径13cm・短径7cm・厚さ6cm・重量830gの網雲母石墨片岩の焼石が使用されていた。蓋石と土器周辺の凹石1点を含め19点の石が出土している。石材の種類は8種類で、石材別点数は網雲母石墨片岩8点、点紋網雲母石墨片岩・珪石各2点、輝緑岩・輝岩・緑泥片岩・斑岩・石墨泥片岩各1点であり、不明は2点である。

9号屋外埋設土器 (第348・351・353・354図、PL. 89、128)

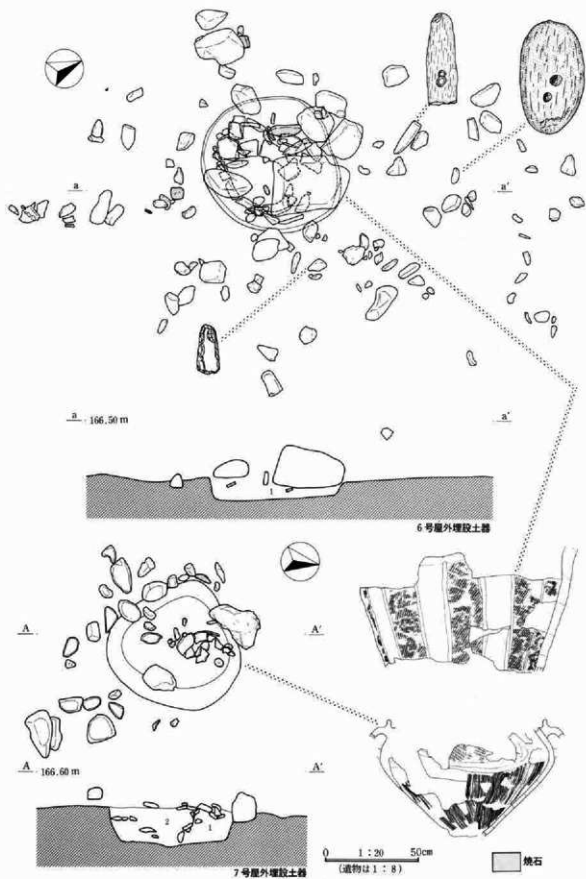
Fq-48・49、Fr-48・49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西47m50cm、26号配石遺構の南5mの所に位置している。埋設ピット上面の規模は41×38cm、底面は18×17cm、深さ20cmのほぼ円形を呈し、面積0.02m²である。覆土は黒褐色土層である。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。小礫を含む。

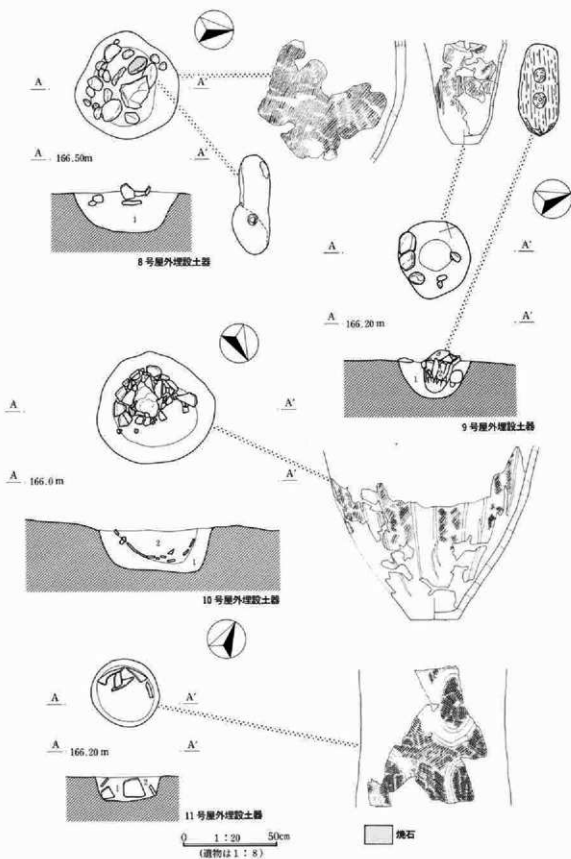
埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、正位状態で埋設されていた。土器内覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。小礫を含む。

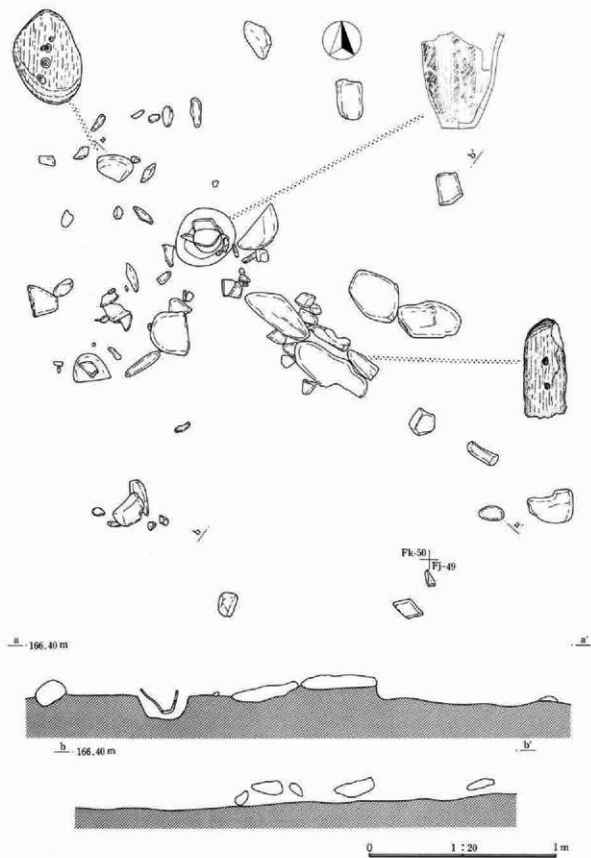
土器上には蓋石として凹石が出土した。おそらくは木製蓋の重しの役割を果たしていたものであろう。ま



第347図 6・7号屋外埋設土器



第348図 8・9・10・11号屋外埋設土器



第 349 图 12 号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

た土器の押さえの石が6点出土している。

10号屋外埋設土器 (第348・352図、PL. 89、128)

Go・Gp-44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西南西139m、2号竪穴住居跡の西16m50cmの所に位置している。土器を埋設する土壌上面の規模は63×59cm、底面は44×35cm、深さ23cmの楕円形を呈し、面積0.12㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く、締まり悪い。粘性はあまりない。小礫を含む。

埋設土器は加曾利E3式土器の胴下半部で、正位状態で埋設されていた。土器内覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 固く締まり粘性はあまりない。炭化物粒子を少量含む。

11号屋外埋設土器 (第348・352図、PL. 89、128)

Fi-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西19m、7号配石遺構の東2m50cmの所に位置している。土器を埋設するピット上面の規模は37×34cm、底面は31×27cm、深さ13cmの円形を呈し、面積0.05㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりはあまりない。粘性がある。

埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で、逆位状態で埋設されていた。土器の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性もあまりない。

12号屋外埋設土器 (第349・352～354図、PL. 128)

Fj・Fk-50グリッドにかけて検出された。環状列石の北西18m70cm、列石下からの出土である。土器を埋設するピット上面の規模は34×30cm、底面は22×19cm、深さ18cmのほぼ円形を呈し、面積0.03㎡である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。地山との区別は非常に困難であった。おそらくは掘り上げた土で埋め戻したものであろう。人為的埋土である。

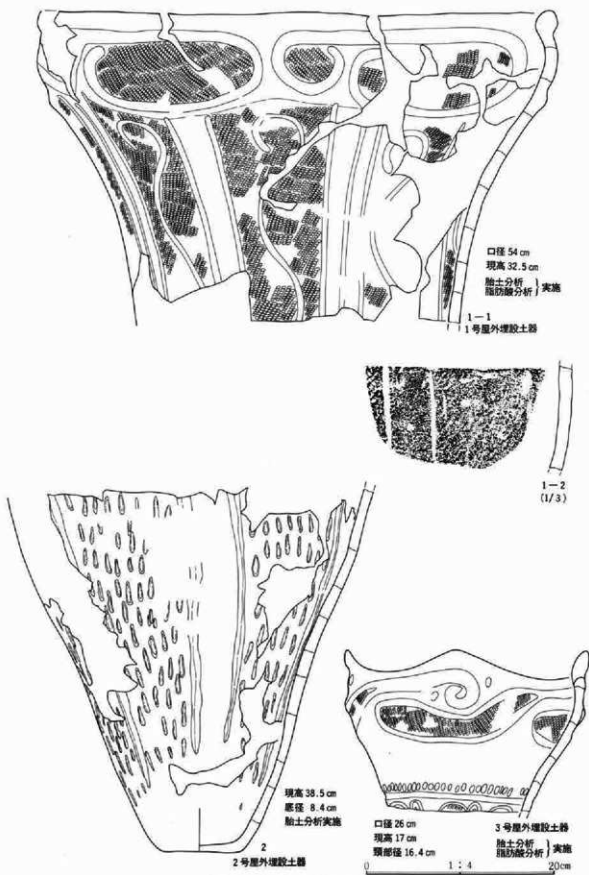
埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、北西にやや傾く斜位状態で検出された。土器内部の覆土は暗褐色土層である。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が少しある。炭化物粒子、小礫を少量含む。

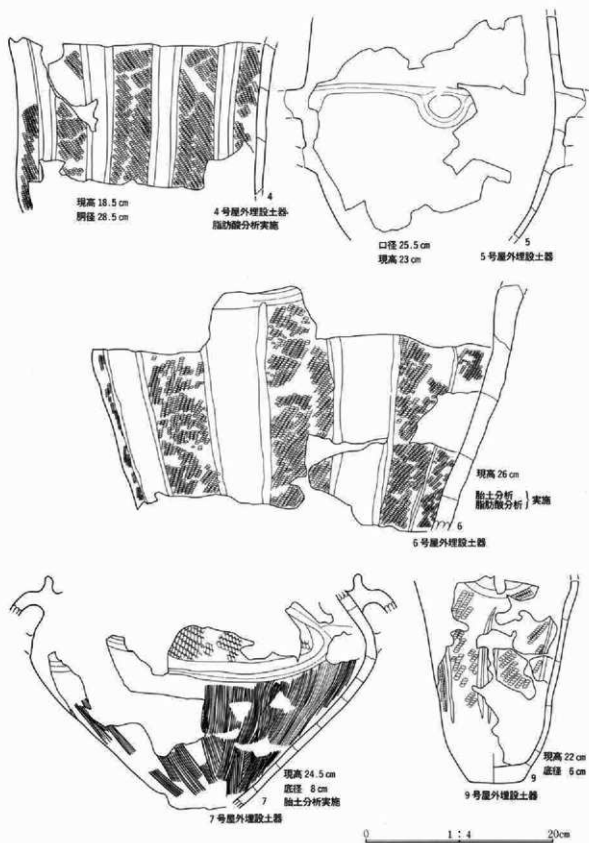
埋設土器周辺からは石が出土しているが、これらは環状列石を構成する石である。このなかには多孔石1点が含まれていた。

屋外埋設土器観察表

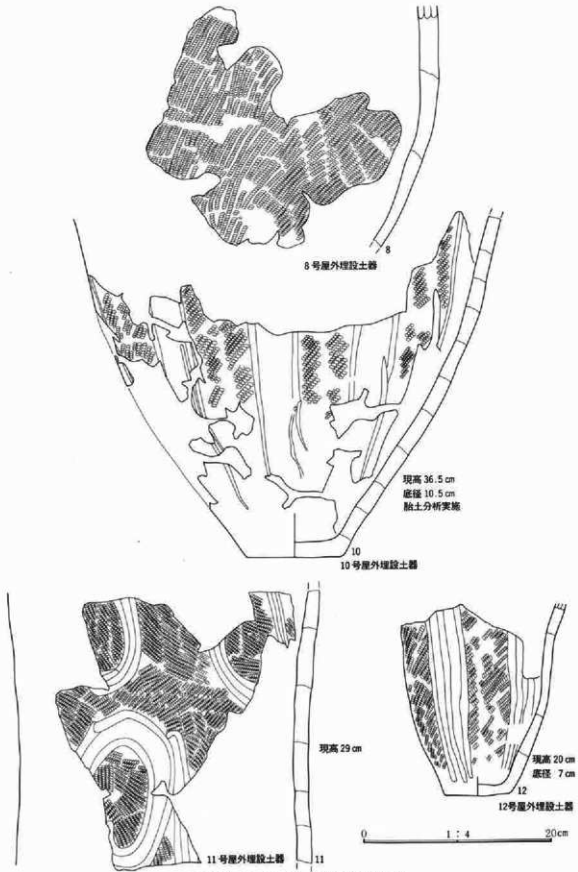
図番 PL.	図種	①軸土 ②壊成 (遺 存状況) ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様(その他)	出土状況
図-1-1 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい褐色	胴下半部を意図的欠損。口縁部は内押し、胴部 中位にくびれを有する。器厚12～22mm。 内面は横方向の調整が行われている。	口縁部文様帯は縁帯と巾広沈線の楕円区画 と染巻文5単位で構成され、区画内はR(上 横位施文。胴部は2本・3本(1本は上部 が断手状)の平行沈線と波状沈線を交互に 垂下。R(上縦位施文。	1号屋外埋 設土器 (斜位状態)
図-1-2 128	胴部 片	①細粒の砂を混入 ②やや良③外面に ④外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚10～12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。	平行沈線を垂下。溝文はR(上を縦位施文。	1号屋外埋 設土器内部
350-2 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい褐色	口縁部を意図的欠損。器厚7～12mm。内面は横 方向の丁寧な調整。また炭化物が付着している。	2本と1本の単位の縁帯を垂下し、胴部を 7区画に区分。区画内は斜交文が施されて いる。	2号屋外埋 設土器 (斜位状態)



第 350 图 1・2・3号屋外埋設土器



第351図 4・5・6・7・9号屋外埋設土器



第 352 图 8・10・11・12号屋外埋設土器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

屋外埋設土器観察表

図番 Pl.	器種	①粘土 ②焼成 存状況 ③色調	成形・器面調整の特徴	文 様(その他)	出土状況
350-3 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 褐色 内面 にお赤褐色	口縁部内面は肥厚し、明瞭な段を有する。胴部は意図的欠損。器厚9~15mm。 内面は横方向のミガキが行われている。	口縁部は4個の突起がつく波状口縁。突起下には隆帯と巾広のナデで小渦巻文を施し、渦巻帯を帯帯で弧状に連絡し、椀区画文を構成する。区画内はR 上を縦位施文。胴部括弧部に楕円刺突文を有する沈線を一糸めぐらし、口縁部文様帯との間に無文帯を形成する。	3号屋外埋設土器 (正位状態)
351-4 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②やや良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色	深鉢形土器の胴部片。両端を輪づみ部分から意図的欠損。内面は横と縦方向の調整が行われている。	2本単位の平行沈線を垂下。縄文はL 上を縦位施文。	4号屋外埋設土器 (正位状態)
351-5 128	浅鉢	①中粒の砂を混入 ②やや良 ③外面 におい褐色 内面 におい褐色	口縁部の一部と底面を意図的欠損。口縁部はやや内傾する。器厚7~10mm。 内面は横方向の調整が行われているが、荒れている。	口縁部は無文で、胴部に隆帯による内形区画文を施している。楕円把手が付されている。	5号屋外埋設土器 (斜位状態)
351-6 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい黄褐色 内面 におい褐色	深鉢形土器の胴部片。口縁部と胴下半部を意図的欠損。器厚18~20mm。内面は横方向の調整が行われている。	2本単位の沈線を9単位垂下。 区画内はR 上を縦位施文。	6号屋外埋設土器 (斜位状態)
351-7 128	浅鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい褐色 内面 におい黄褐色	口縁部と底面を欠損。残存胴部短。胴部上半に強い張りをする。器厚7~12mm。内面は横方向の丁寧な調整が行われている。	胴部上半には隆帯とナデによる椀区画文が施され、区画内にはR 上を縦位施文。また楕円把手が付されている。胴下半は7本一単位の糸線を縦位施文。	7号屋外埋設土器 (正位状態)
352-8 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 褐色 内面 におい褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚10~21mm。 内面は横方向の調整が行われている。	R 上を縦位施文。 土器面は柔軟で押圧が強い。	8号屋外埋設土器
351-9 128	小型深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 におい赤褐色 内面 灰褐色	小型深鉢形土器の口縁部を意図的欠損。器厚6~18mm。内面は粗い調整で、灰化物が一部付着している。	口縁部文様帯は巾広の沈線で椀区画文を施し、区画内縄文不明。胴部は2本単位の平行沈線を垂下。縄文はR 上(粗い)を縦位施文。	9号屋外埋設土器 (正位状態)
352-10 128	深鉢	①中粒の砂を混入 ②良③外面 灰褐色 内面 におい褐色	胴部がかなり膨らむ大型の深鉢形土器の胴下半部。器厚13~17mm。内面は横方向の調整が行われている。	2本単位の平行沈線を垂下。区画内はR 上を縦位施文。	10号屋外埋設土器 (正位状態)
352-11 128	深鉢	①細粒の砂を混入 ②良 ③外面 褐色 内面 褐色	深鉢形土器の胴部片。器厚13~18mm。内面は横方向の調整が行われているが、荒れている。	L 上(太い糸と細い糸)を縦位施文後(一部は横方向の施文)、沈線による椀区画文。土器面は柔軟で押圧が強い。	11号屋外埋設土器
352-12 128	深鉢	①中粒の砂を混入 ②良 ③外面 褐色 内面 褐色	胴部上半~口縁部を意図的欠損。胴部中位で括弧を有する。器厚9~13mm。内面は丁寧な調整。灰化物付着。	3本単位の平行沈線を垂下し、6区画に区分。区画内はR 上(太い糸と細い糸)を縦位施文。土器面は柔軟で押圧が強い。	12号屋外埋設土器 (斜位状態)



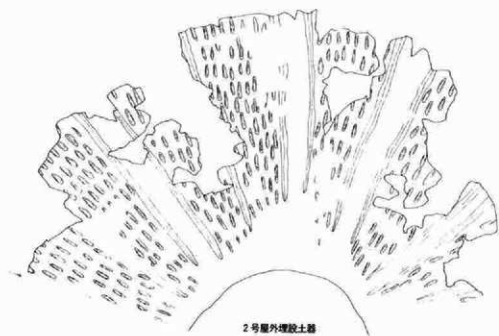
1号屋外埋設土器



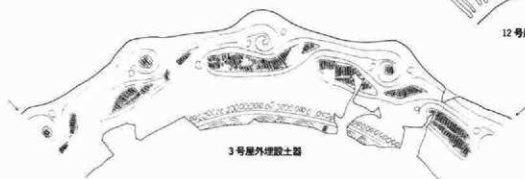
9号屋外埋設土器



12号屋外埋設土器



2号屋外埋設土器



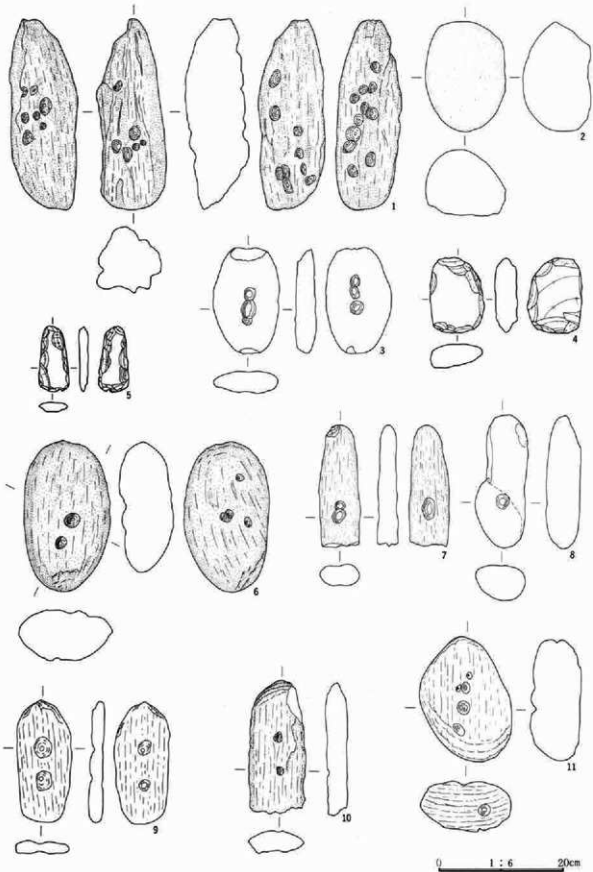
3号屋外埋設土器



6号屋外埋設土器

0 1:6 20cm

第353图 屋外埋設土器展開図(1・2・3・6・9・12号)



第 354 図 屋外埋設土器出土石器

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

屋外埋設土器石器観察表

図番 Pl.	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
354-1 128	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	30	10.2	9.7	3,900	全面に凹み。数は33個で、最大は長23mm、短23mm、深12mm、最小は長11mm、短11mm、深6mmで、平均は長19mm、短14mm、深7mm。	2号屋外埋設土器
354-2 128	丸石	完形	安山岩	17.5	12.9	10.8	3,100	丸い石。	4号屋外埋設土器
354-3 128	凹石	一部欠損	輝岩	(16.7)	10.7	3.5	(1,000)	両面に6個の凹み。最大は長28mm、短28mm、深1mm、最小は長15mm、短11mm、深0.5mmで、平均は長20mm、短20mm、深0.8mm。	4号屋外埋設土器
354-4 128	打製石片	完形	輝岩	11.9	8.8	3.7	640	バチ (IIb)。	5号屋外埋設土器
354-5 128	打製石片	完形	輝緑岩	10.4	4.9	1.5	120	バチ (IIb)。両面の周辺のみ調整加工を施す。	6号屋外埋設土器
354-6 128	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	22.4	16.4	9.2	3,600	両面に凹み。数は6個で、最大は長23mm、短22mm、深7mm、最小は長12mm、短10mm、深3mmで、平均は長17mm、短14mm、深5mm、焼けている。	6号屋外埋設土器
354-7 128	凹石	欠	点紋緑泥片岩	(22.3)	6.7	3.4	(720)	両面に凹み。数は3個で、最大は長35mm、短21mm、深1mm、最小は長17mm、短13mm、深1mmで、平均は長25mm、短17mm、深1mm。	6号屋外埋設土器
354-8 128	凹石	完形	輝岩	21.3	8.2	5.4	1,500	片面に凹み1個。長径23mm、短径21mm、深さ1mm。	8号屋外埋設土器
354-9 128	凹石	完形	網雲母石墨片岩	19.2	8.8	2.4	550	両面に凹み。数は4個で、最大は長33mm、短29mm、深6mm、最小は長19mm、短17mm、深1mmで、平均は長27mm、短23mm、深5mm。	9号屋外埋設土器
354-10 128	多孔石	欠	点紋網雲母石墨片岩	(21.0)	9.1	4.0	(1,000)	片面に凹み。数は2個で大きい凹みは長15mm、短13mm、深1mm、小さい凹みは長13mm、短10mm、深1mm。	12号屋外埋設土器
354-11 128	多孔石	完形	網雲母石墨片岩	19.8	14.7	8.7	3,200	6個の凹みがある。最大は長22mm、短21mm、深9mm、最小は長12mm、短7mm、深3mmで、平均は長17mm、短13mm、深5mm。	12号屋外埋設土器

7 配石墓・土墳墓・土坑

土墳は22基検出された。このうちⅠ区からは10基、Ⅱ区からは12基である。土墳上面に石を配置した、いわゆる配石（土墳）墓は9基、上面に石を配置しない単なる土墳墓は9基、墓として認定困難な土坑は4基である。22基の土墳のうち7基については、残存脂肪分析を実施した。

配石（土墳）墓 1・3・7・8・11・12・18・19・22号土墳

土 墳 墓 2・4・6・9・10・13・14・15・20号土墳

土 坑 5・16・17・21号土墳

残存脂肪分析を実施した土墳 2・3・4・5・6・9・10号土墳（4章 自然科学的分析〔1〕参照）

1号土墳（第355図、PL. 90）

En-52グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東72m50cm、1号配石遺構の東南14m20cmの所に位置している。上面の規模は108×105cm、底面は79×75cm、深さ49cmのほぼ円形を呈するが、その一部は耕作溝によって壊されていた。底面はほぼ平坦であり、面積約0.5m²である。覆土は暗褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 ややく締まり粘性が少しある。

土墳上面の石は墓標になるものと思われる。焼石3点を含む大小35個の石が配置されていた。石材の種類は13種類で、石材別点数は網雲母石墨片岩11点、輝岩3点、網雲母緑泥片岩・緑泥片岩・石墨網雲母片岩・砂岩各2点、点紋緑泥片岩・輝緑岩・チャート・緑葉緑泥片岩・網雲母片岩・点紋網雲母石墨緑泥片岩・緑色珪質板岩各1点であり、不明は6点を数えた。

2号土墳（第355図、PL. 90）

Fa-Fb-53グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東46m80cm、14号配石遺構の南西に近接している。上面の規模は70×51cm、底面は42×31cm、深さ25cmの楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、面積約0.1m²である。覆土は5層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 黒褐色土層 ややく締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 茶褐色土層 ややく締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土粒子を多量に含む。

第3層 暗褐色土層 ややく締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土粒子・同ブロックを多量に含む。

第4層 暗褐色土層 ややく締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子を含む。

第5層 黄褐色土層 ややく締まり粘性がある。黄褐色粘質土粒子・同ブロックを中心とした層。

当土墳は現状よりもさらに上面から確認されていた。土墳中央から検出されている石（網雲母石墨片岩：長径29.8cm・短径16.3cm・厚さ9.4cm・重量6.1kg）は、本来覆土中にあったもので墓標とはなり得ない。抱石葬と考えられるものである。

なお、当土墳は残存脂肪分析を実施している。

3号土墳（第355・364図、PL. 90・91、129）

Et-Fa-51グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東40m80cm、4号土墳の西に接して構築されている。上面の規模は100×95cm、底面は78×75cm、深さ35cmのほぼ円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.5m²である。覆土は暗褐色土層で統一され、縄文時代中期土器片1点が出土している。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。

土壌上面からは、墓標になると考えられる多孔石3点と焼石3点を含む石10点が出土している。石材の種類は5種類で、石材別点数は点紋緑泥片岩4点、絹雲母石墨片岩3点、絹雲母緑泥片岩・点紋絹雲母石墨泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点である。

4号土壌と接して構築されており、また覆土もほとんど同一であることから、ほぼ同時期構築と思われる。なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

4号土壌 (第356図、PL. 90)

Et-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から東北東42m10cm、3号土壌の東に接して構築されている。上面の規模は124×105cm、底面は103×95cm、深さ39cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.8㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 固く締まり粘性が少しある。

第2層 黄褐色土層 固く締まり粘性が少しある。第1層よりも締まり良い。

3号土壌とほぼ接して検出された。覆土は3号土壌のそれとほぼ同一であり、同時期の構築と考えられる。ただし当土壌上には墓標になる石は検出されていない。また規模も大きい。

なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

5号土壌 (第356図、PL. 91)

Eo-56グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東75m20cm、1号配石遺構の北北東11mの所に位置している。上面の規模は100×85cm、底面は95×75cm、深さ5～20cmの楕円形を呈する。底面は東にむかって深くなり、面積約0.6㎡である。覆土は黒褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。炭化物粒子、黄褐色粘質土ブロックを多量に含。土壌上面からは焼石6点を含む59点の石が出土している。石材の種類は7種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩36点、輝石・緑泥片岩各4点、点紋緑泥片岩2点、輝緑岩・絹雲母緑泥片岩・点紋絹雲母緑泥片岩各1点であり、不明は10点を数えた。

当土壌は確認面から底面までが浅い。また覆土中に炭化物粒子が多量に認められることから、墓標と考えられるよりは別な用途を考えたほうが良いかもしれない。

なお、当土壌も残存脂肪分析を実施している。

6号土壌 (第356図、PL. 92)

Es-Et-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東44m30cm、4号土壌の東南4m50cmの所に位置している。上面の規模は80×72cm、底面は61×54cm、深さ15cmの楕円形を呈する。底面はやや皿状を呈し、面積約0.2㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まるが、粘性はあまりない。黄褐色土粒子を少量含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まるが粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

当土壌は他土壌と比較して小規模である。覆土は残存脂肪分析を実施した。

7号土壌 (第356・364図、PL. 129)

Fi-56グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北北西44m30cm、3号屋外埋設土器の南東150cmの所に位置している。上面の規模は129×81cm、底面は105×62cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5㎡である。覆土は暗褐色土層であり、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性がある。

土坑上面からは、墓標となる丸石1点と焼石4点を含む46点の石が配置されていた。石材の種類は16種類で、石材別点数は絹雲母石墨片岩11点、点紋緑泥片岩5点、砂岩・珪岩各3点、点紋絹雲母石墨片岩・輝岩・絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・珪石各2点、チャート・石墨緑泥片岩・安山岩・石墨絹雲母片岩・点紋石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・閃緑岩各1点であり、不明は7点を数えた。

8号土坑 (第357・363・364図、PL. 92、129)

Fj-50グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北西18m、列石上に位置している。環状列石を構成する配石墓である。上面の規模は197×65cm、底面は170×40cm、深さ18cmの長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.6㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器片4点が出土している。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良くない。粘性もあまりない。小石を多量に含む。

第2層 黄褐色粘質土層 固く締まり粘性はほとんどない(人為的埋土)。

第3層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。

土坑上には墓標となる倒れている石(点紋緑泥片岩:長径49.7cm・短径22.7cm・厚さ8.2cm・重量14.7kg)と、ほぼ全面に小石が多量に配置されていた。小石を除いたやや大きな石は焼石2点を含む41点で、16種類の石材が確認された。石材別点数は絹雲母石墨片岩13点、輝岩・点紋石墨緑泥片岩各3点、点紋緑泥片岩・輝緑岩・緑泥片岩・チャート・点紋絹雲母石墨緑泥片岩各2点、点紋絹雲母石墨片岩・絹雲母緑泥片岩・斑縞岩・石墨絹雲母片岩・絹雲母石墨緑泥片岩・緑色珪質板岩・硬砂岩・珪石各1点であり、不明は4点を数えた。

9号土坑 (第357・363図、PL. 93、129)

Er・Es-50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から東北東49m20cm、6号土坑の東5m20cmの所に位置している。上面の規模は128×95cm、底面は91×51cm、深さ28cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.4㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器片2点が出土している。

第1層 暗褐色土層 6号土坑の第1層と同じ。

第2層 黄褐色土層 固く締まり粘性はあまりない。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に、炭化物粒子を極少量含む。

なお、当土坑は残存脂肪分析を実施している。

10号土坑 (第358図、PL. 93)

Fa-51グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から北東38m20cm、3号土坑の西北西3m30cmの所に位置している。上面の規模は103×98cm、底面は91×78cm、深さ18cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5㎡である。覆土は2層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて粘性はあまりない。黄褐色粘質土粒子を含む。

第2層 黄褐色土層 やや固く締まり粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

なお、当土坑も残存脂肪分析を実施している。

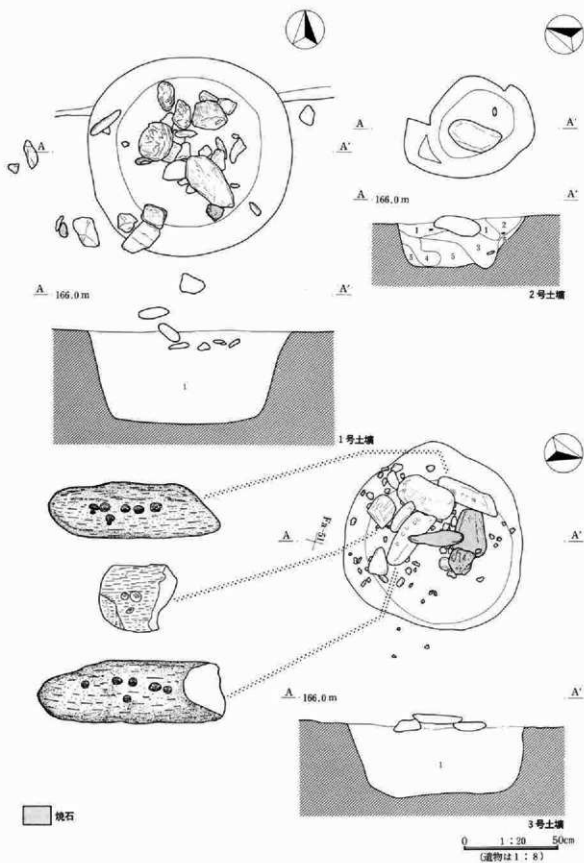
11号土坑 (第358図、PL. 93)

Fo-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西34m70cm、12号土坑の東5mの所に位置している。上面の規模は74×70cm、底面は49×47cm、深さ33cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.2㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まるが、粘性はあまりない。

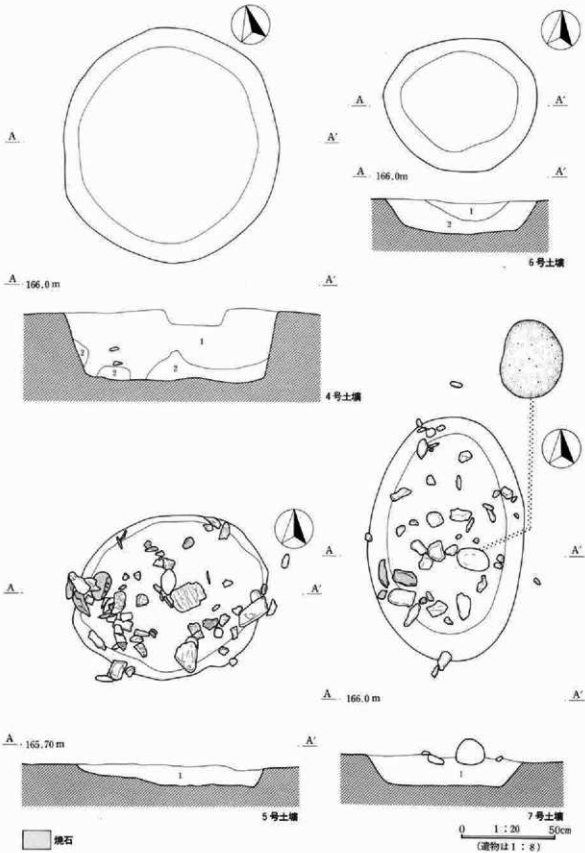
第2層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性がある。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

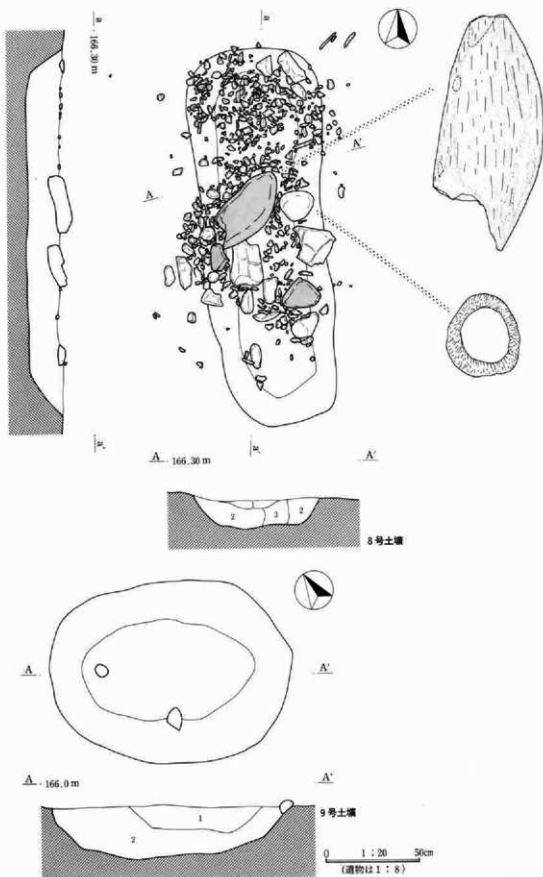


第355図 土壇(1・2・3号)

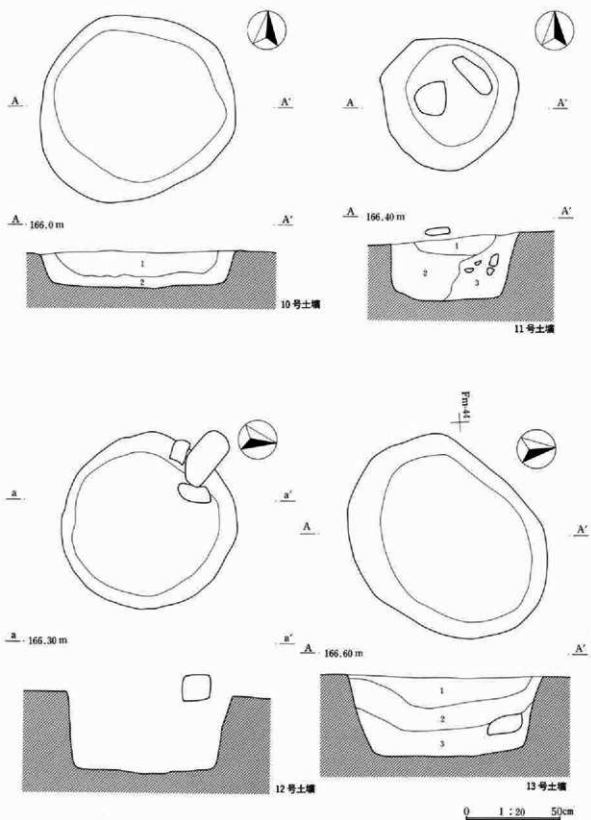
7 配石墓・土壇墓・土坑



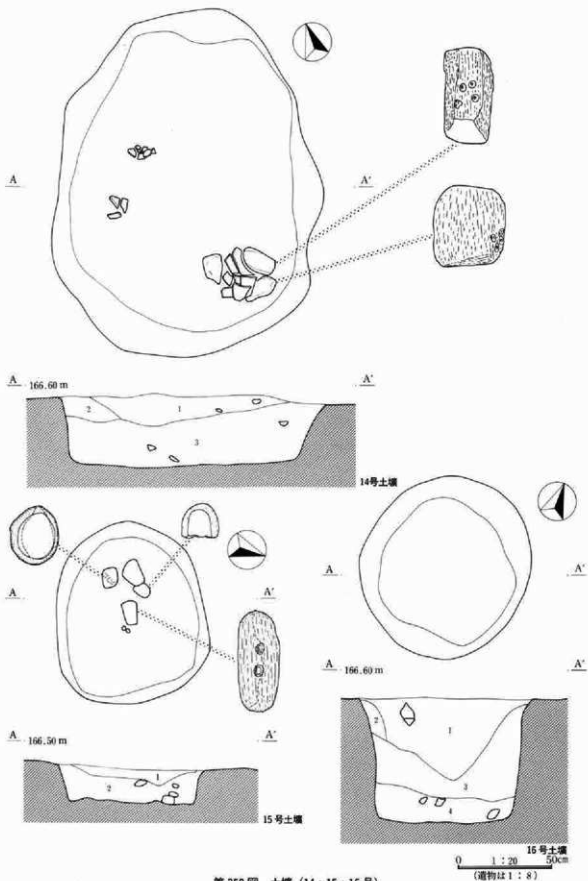
第356図 土壇(4・5・6・7号)



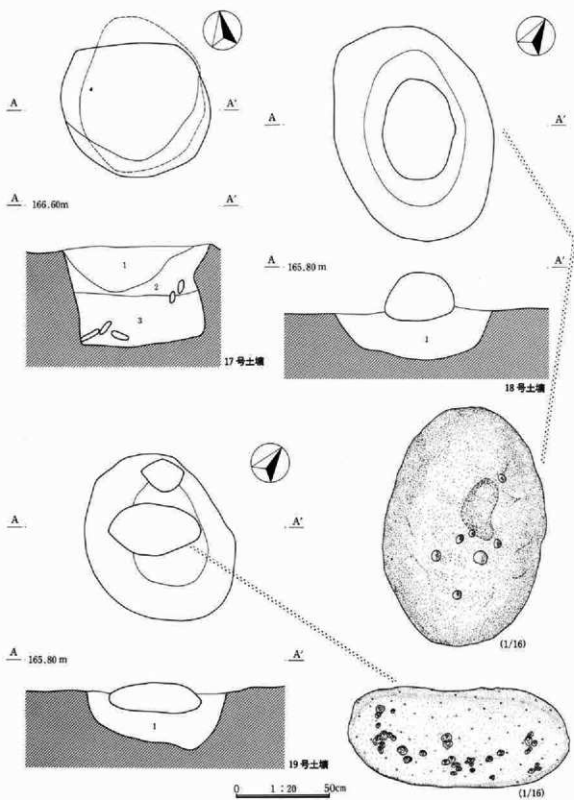
第357図 土坑(8・9号)



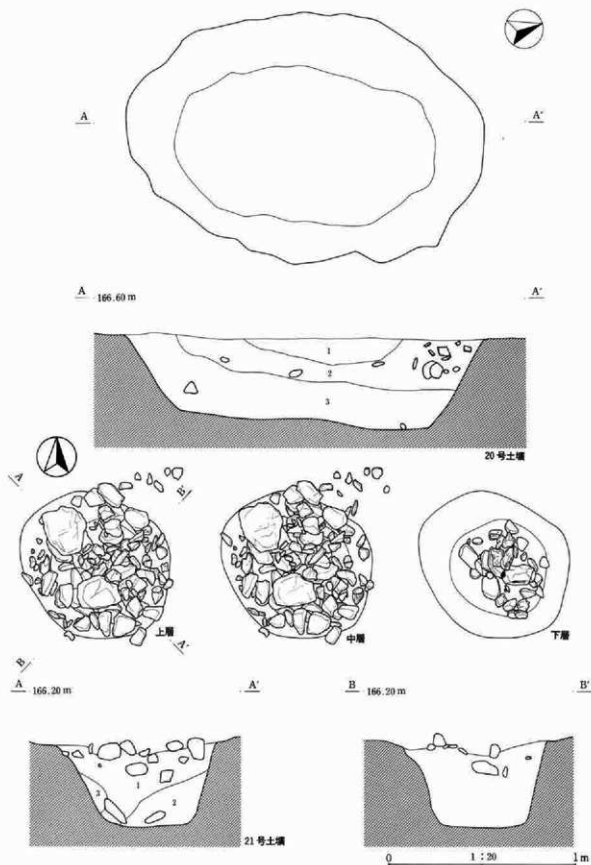
第358图 土壇 (10・11・12・13号)



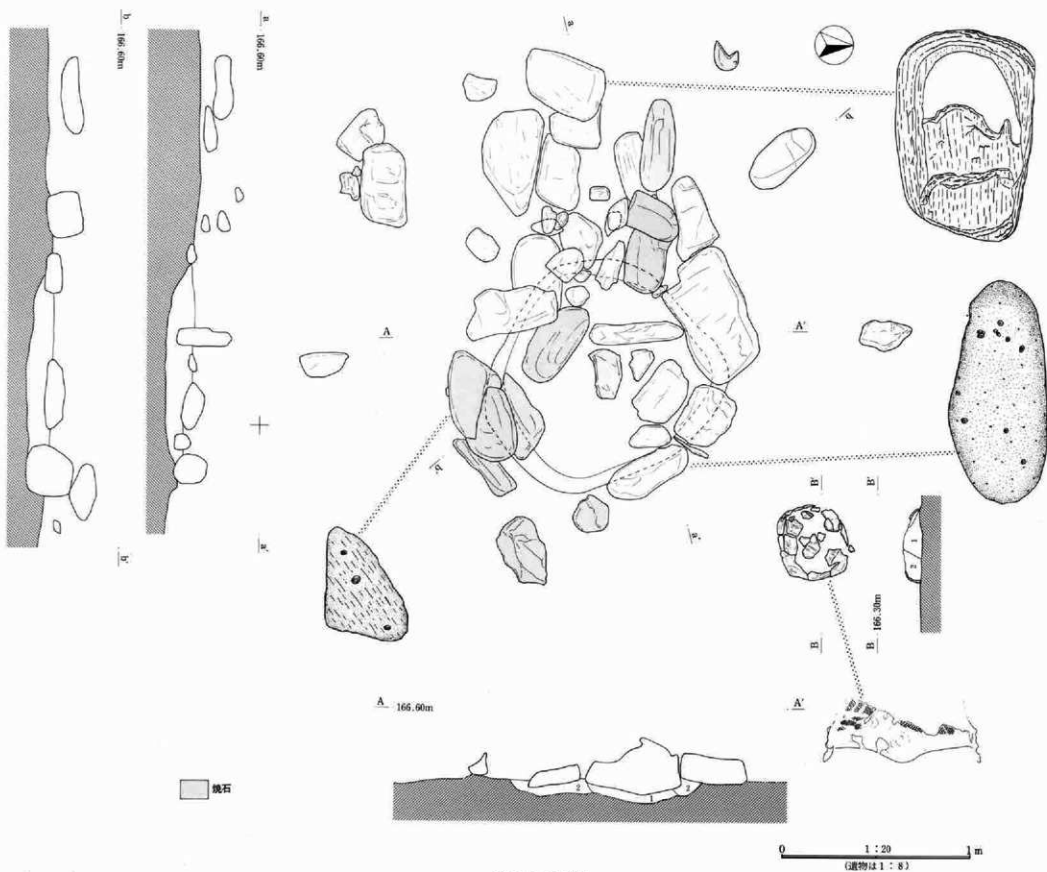
第359図 土壇(14・15・16号)



第 360 图 土坑 (17・18・19号)



第361図 20・21号土壇



第362図 22号土壇

第3層 茶褐色土層 固く締まり粘性が少しある。小礫を混入。

土壇上面に2個の石が配置されている。墓標となるものであろうか。

12号土壇 (第358図、PL. 93)

Fp-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西北西39m70cm、11号土壇の西5mの所に位置している。上面の規模は93×91cm、底面は75×73cm、深さ40cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.4㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器の出土はない。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性はあまりない。第1層より暗い色調である。

第3層 黄褐色砂質土層 粘性はない。小礫を多量に混入。

土壇上面には墓標1点とその押さええの石2点が出土している。墓標の石材は絹雲母石墨片岩、他は輝岩と点紋絹雲母緑泥石墨片岩である。

13号土壇 (第358・363図、PL. 93、129)

F1-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西28m70cm、17号土壇の東に接して構築されている。上面の規模は117×90cm、底面は96×70cm、深さ42cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.5㎡である。覆土は3層に分かれ、縄文土器片17点が出土している。

第1層 茶褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性があり、小礫を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小礫を含む。

第3層 黒褐色土層 やわらかくて粘性が非常にある。小礫を含む。

土壇上面からややまとまって土器片が出土している。

14号土壇 (第359・363～365図、PL. 94、129)

F1・Fm-43グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西31m30cm、15号土壇の南東2mの所に位置している。上面の規模は183×142cm、底面は150×120cm、深さ38cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約1.5㎡である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり粘性がある。小礫を混入。

第2層 黄褐色砂礫土層 壁の崩れ。

第3層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。小礫を多量に含む。

覆土からは縄文土器片16点と多孔石2点が出土している。石材はいずれも絹雲母石墨片岩である。

15号土壇 (第359・363・365図、PL. 94、129)

Fm-43グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から南西31m30cm、17号土壇の南南西2mの所に位置している。上面の規模は145×80cm、底面は80×70cm、深さ18cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積約0.5㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まりが悪い。粘性があり、小礫を含む。

第2層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。小礫を含む。

覆土からは縄文土器片2点と凹石1点、磨石2点が出土している。

16号土壇 (第359図、PL. 94)

F1-44グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から南西26m80cm、17号土壇の北東3mの所に位置している。上面の規模は96×88cm、底面は71×70cm、深さ65cmのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積約0.4㎡である。覆土は4層に分かれた。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が少しある。小礫を含む。

第2層 黄褐色砂質土層 壁の崩れ。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性が非常にある。黄褐色砂質土、小礫を混入。

第4層 黄褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。小礫を含む。

17号土壌 (第360図、PL. 94)

Fm-43・44グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から南西29m70cm、13号土壌に接して構築されている。上面の規模は83×75cm、底面は76×63cm、深さ52cmのほぼ円形を呈し、断面はやや袋状である。底面はやや凹凸があり、面積約0.3m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やわらかくて締まり悪いが、粘性はある。小礫を混入。

第2層 黄褐色土層 やわらかくて締まり悪いが、粘性はある。黄褐色砂質土を含む。

第3層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。礫を含む。

18号土壌 (第360・365図、PL. 94、129)

Gf-47グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西89m40cm、19号土壌の西南西5mの所に位置している。上面の規模は115×84cm、底面は82×54cm、深さ25cmの楕円形を呈する。底面は皿状を呈し、面積約0.3m²である。覆土は暗褐色土層である。

第1層 暗褐色土層 やや固く締まり、粘性が非常にある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。

土壌上面には砂岩の多孔石（長径50.3cm・短径34.3cm・厚さ25cm・重量56.5kg）が出土している。基標になるものと思われる。

19号土壌 (第360・363・365図、PL. 95、130)

Ge-48グリッドにおいて検出された。環状列石の中心から西85m20cm、18号土壌の東北東5mの所に位置している。上面の規模は92×73cm、底面は60×40cm、深さ18～30cmの楕円形を呈する。底面は東部分が深く、面積約0.2m²である。覆土は暗褐色土層で、縄文土器片24点が出土している。

第1層 暗褐色土層 やや固いが締まりは悪い。粘性が少しある。黄褐色粘質土ブロック・同粒子を含む。18号土壌の覆土とほぼ同一である。

土壌上面には流紋岩の多孔石（長径46.8cm・短径21.1cm・厚さ18cm・重量25.4kg）が出土している。基標になるものと思われる。18号土壌と同一であるが、規模は小さい。

20号土壌 (第361図、PL. 95)

Fm-44グリッドにおいて検出された。上面の規模は191×131cm、底面は139×81cm、深さ40～47cmの楕円形を呈する。底面は北に向かって深くなり、面積約0.9m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 暗褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性はあまりない。

第2層 茶褐色土層 やわらかくて締まり悪い。粘性がある。第1層よりやや明るい色調である。縄文土器片を含む。

第3層 黒褐色土層 やや固く締まり粘性が非常にある。

21号土壌 (第361図、PL. 96)

Fp-49・50グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から西北西42m80cm、26号配石遺構の東南1.5mの所に位置する。上面の規模は86×72cm、底面は54×49cm、深さ45cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、面積0.2m²である。覆土は3層に分かれた。

第1層 黒褐色土層 やや固いが締まりは良くない。粘性が非常にある。炭化物粒子と黄褐色土粒子を多

量を含む。

第2層 暗褐色土層 やや固いが締まりは良くない。粘性がある。炭化物粒子を多量に、黄褐色粘質土ブロック・同粒子を多量に含む。

第3層 黄褐色砂礫層 壁の崩れ。壁際は焼けている。

土壌上面から覆土第1層にかけて多量の石が出土した。

22号土壇 (第362・363・366図、PL. 97、130)

Fj・Fk-49グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北西15m、列石内部に構築されている。土壇上面の規模は120×115cm、底面は103×103cm、深さ15cmの楕円形を呈する。底面は凹凸があり、面積0.9㎡である。覆土は2層に分かれた。

第1層 茶褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が非常にある。

第2層 暗褐色土層 やわらかくて締まり良い。粘性が第1層よりもある。

土壇西よりには立石がある。この立石は長径50cm・短径29.5cm・厚さ9cm・重量18.8kgを測り、点紋緑泥片岩が使用されていた。また土壇の周囲から西にかけて配石を施し、その数は54点を数えた。このなかには石皿1点、多孔石2点、焼石13点が含まれている。15種類の石材が確認され、石材別点数は絹雲母石墨片岩12点、輝緑岩8点、点紋緑泥片岩6点、点紋石墨片岩5点、輝岩4点、安山岩・紅縹絹雲母片岩・絹雲母石墨片岩各2点、絹雲母緑泥片岩・緑泥片岩・石墨緑泥片岩・点紋絹雲母石墨緑泥片岩・砂岩・脆雲母石墨片岩・紅縹絹雲母石墨片岩各1点であり、不明は7点を数えた。配石中最大の石は長径65cm・短径39.5cm・厚さ17cm・重量75.9kgを測り、絹雲母石墨緑泥片岩を使用していた。

この配石墓の北東70cmの所から加曾利E3式土器の伏壺(胴部欠損)が出土している。

土壇一覧表

No.	グリッド	上面cm (長径×短径)	底面cm (長径×短径)	上面 長径/短径	底面積(m ²)	底面 長径/短径	深さ(cm)	備 考
1	E n-52	(108×105)	(79×75)	1.03	0.5	1.05	49	配石墓
2	F a・F b-53	(70×51)	(42×31)	1.37	0.1	1.35	25	土壇墓
3	E t・F a-51	(100×95)	(78×75)	1.05	0.5	1.04	35	配石墓
4	E t-51	(124×105)	(103×95)	1.18	0.8	1.08	39	土壇墓
5	E o-56	(100×85)	(95×75)	1.18	0.6	1.27	5~20	土 坑
6	E s・E t-56	(80×72)	(61×54)	1.11	0.2	1.13	15	土壇墓
7	F l-56	(129×81)	(105×62)	1.59	0.5	1.69	15	配石墓
8	F j-56	(197×65)	(170×40)	3.03	0.6	4.25	18	配石墓
9	E r・E s-50	(128×95)	(91×51)	1.35	0.4	1.78	28	土壇墓
10	F a-51	(103×98)	(91×78)	1.05	0.5	1.17	18	土壇墓
11	F o-48	(74×70)	(49×47)	1.06	0.2	1.04	33	配石墓
12	F p-48	(93×91)	(75×73)	1.02	0.4	1.03	40	配石墓
13	F l-43・44	(117×90)	(95×70)	1.3	0.5	1.37	42	土壇墓
14	F l・F m-43	(183×142)	(150×120)	1.29	1.5	1.25	38	土壇墓
15	F m-43	(145×80)	(80×70)	1.81	0.5	1.14	18	土壇墓
16	F l-44	(96×88)	(71×70)	1.09	0.4	1.01	65	土 坑
17	F m-43・44	(83×75)	(76×63)	1.11	0.3	1.21	52	土 坑
18	G t-47	(115×84)	(82×54)	1.37	0.3	1.52	25	配石墓
19	G e-48	(92×73)	(60×40)	1.26	0.2	1.5	18~30	配石墓
20	F m-44	(191×131)	(139×81)	1.46	0.9	1.72	40~47	土壇墓
21	F p-49・50	(86×72)	(54×49)	1.19	0.2	1.10	45	土 坑
22	F j・F k-49	(120×115)	(103×103)	1.04	0.9	1.0	15	配石墓

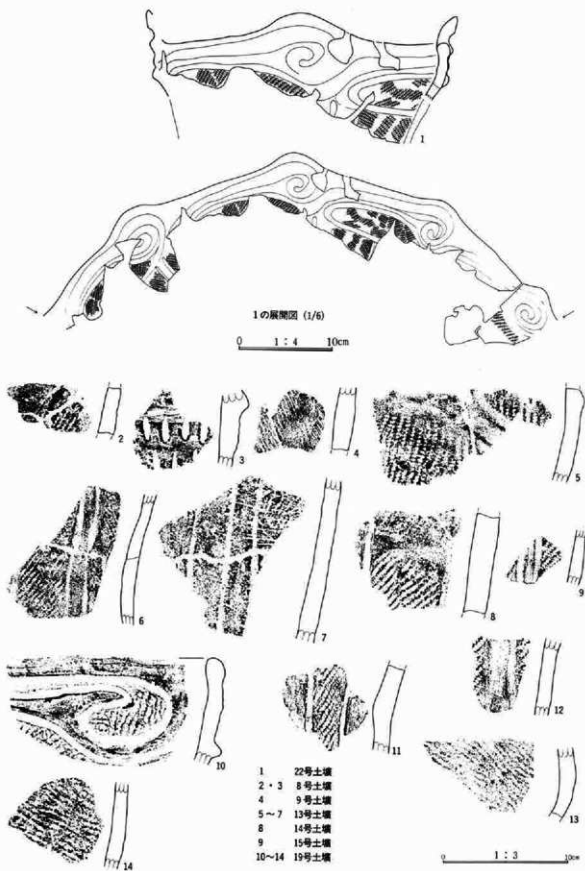
3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

土壌出土土器観察表

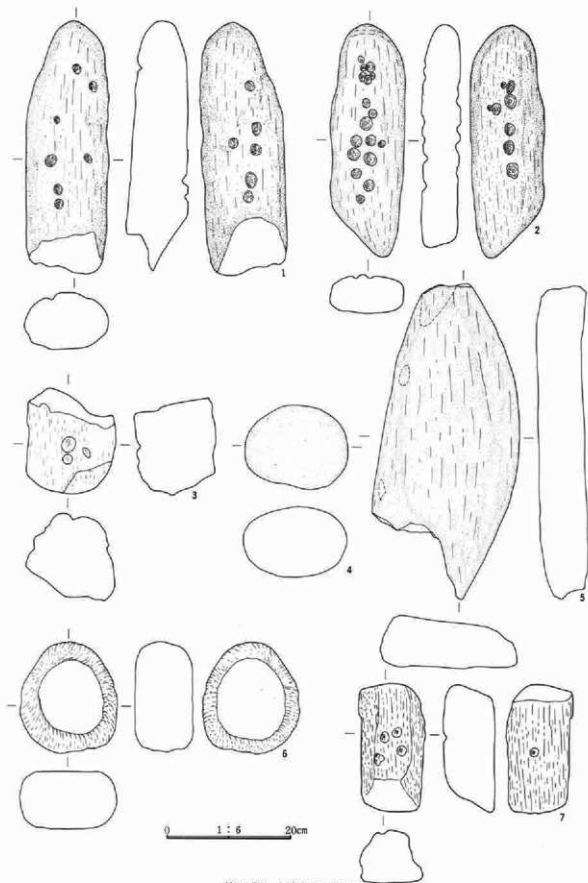
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成(遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様(その他)	出土状況
363-1 130	口縁部	①細粒の砂を混入 ②良	口縁部内面は肥厚し、明瞭な段を有す。 内面は横方向のミガキ。 内外面の色調は褐色色。	口縁部に4個の突起。突起下に隆帯と幅広いナゲで渦文を施し、渦間を横円区画文で構成する。区画円はL(Ⅱ) (0段多条)を横位施文。胴部はL(Ⅱ)を縦位施文。	22号土壌 伏塚
363-2 128	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚10~12mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は明褐色、内面は褐色色。	縄文施文。原体はR(Ⅱ)縦位がし。	8号土壌 覆土
363-3 128	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11~21mm。 内面は丁寧な調整。 外面の色調はよい褐色、内面はよい黄褐色。	隆帯下に刺突文を施している。	8号土壌 覆土
363-4 128	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片(底部にちかい)。器厚15mm。 内外面ともザラザラ。 外面の色調は明赤褐色、内面はよい褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦位がし。	9号土壌 覆土
363-5 129	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12mm。 内面は丁寧な調整。 外面の色調はよい赤褐色、内面はよい黄褐色。	隆帯を巡らす。縄文原体はR(Ⅱ)。	13号土壌
363-6 129	胴部片	①細粒の砂を混入 ②不良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~11mm。 内外面ともザラザラしている。 内外面の色調は褐色。	R(Ⅱ)縦位施文後、平行沈線を下す。	13号土壌
363-7 129	胴部片	①粗粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚12~15mm。 外面は荒れているが、内面は丁寧な調整。 外面の色調はよい黄褐色、内面は褐色。	R(Ⅱ)縦位施文後、3本の平行沈線を下す。	13号土壌
363-8 129	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚19mm。内面は丁寧な調整。外面の色調はよい褐色、内面は褐色色。	R(Ⅱ) (0段多条?) 縦位施文後、沈線を下す。	14号土壌
363-9 129	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8~10mm。 内面は粗い調整。 外面の色調は灰黄色、内面は褐色色。	R(Ⅱ)縦位施文後、2本の平行沈線を下す。	15号土壌
363-10 130	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚12mm。 内面は横方向の調整。 内外面の色調はよい黄褐色。	口縁部には内湾する。	19号土壌
363-11 130	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚13~16mm。 内面は縦方向の調整。 外面の色調は灰黄褐色、内面は褐色色。	R(Ⅱ)縦位施文後、2本の平行沈線を下す。	19号土壌 覆土
363-12 130	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は縦方向の調整。 外面の色調は暗赤褐色、内面はよい黄褐色。	R(Ⅱ)縦位施文後、2本の平行沈線を下す。	19号土壌 覆土
363-13 130	胴部片	①細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚13mm。 内面は丁寧な調整。内外面の色調は褐色色。	L(Ⅱ)縦位施文。	19号土壌 覆土
363-14 130	胴部片	①中粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚11mm。 内面は横方向の丁寧な調整。 外面の色調は明黄褐色、内面はよい黄褐色。	L(Ⅱ)縦位施文。	19号土壌 覆土

土壌石群観察表

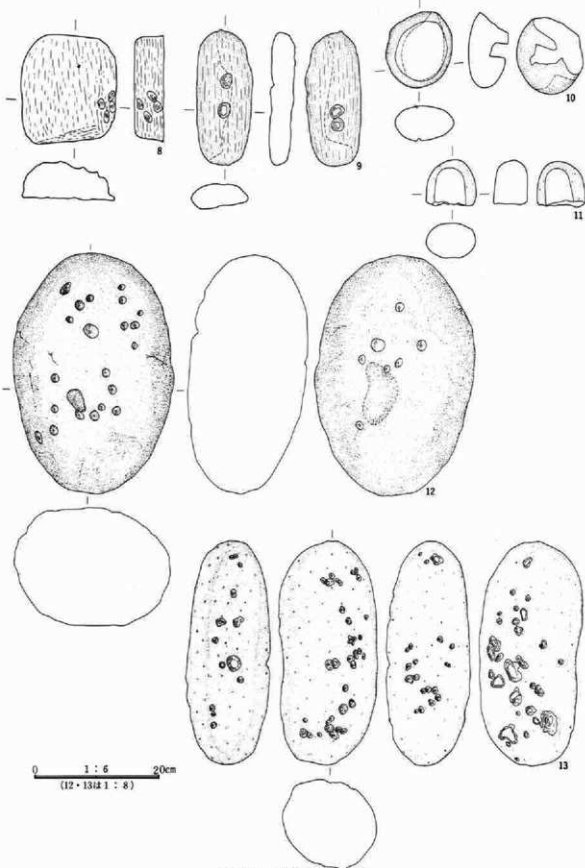
図番 PL	群 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
364-1 129	多孔石	一部欠損	点紋緑泥片岩	(38.8)	13.1	9.5	(7,600)	両面に凹み。数は13個で、最大は長25mm、短19mm、深9mm、最小は長12mm、短8mm、深5mmで、平均は長23mm、短19mm、深9mm。	3号土壌 基層
364-2 129	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	36.6	11.8	6.3	4,900	両面に凹み。数は27個で、最大は長22mm、短18mm、深7mm、最小は長7mm、短6mm、深1mmで、平均は長15mm、短13mm、深5mm。	3号土壌 基層
364-3 129	多孔石	完	網雲母石層片岩	(16.7)	14.2	13.7	(4,000)	片面に凹み。数は3個で、最大は長25mm、短23mm、深9mm、最小は長15mm、短10mm、深2mmで、平均は長18mm、短14mm、深5mm。	3号土壌 基層
364-4 129	丸 石	完形	安山岩	16.7	13.3	11.4	3,300	基層として使用された丸石。	7号土壌 基層



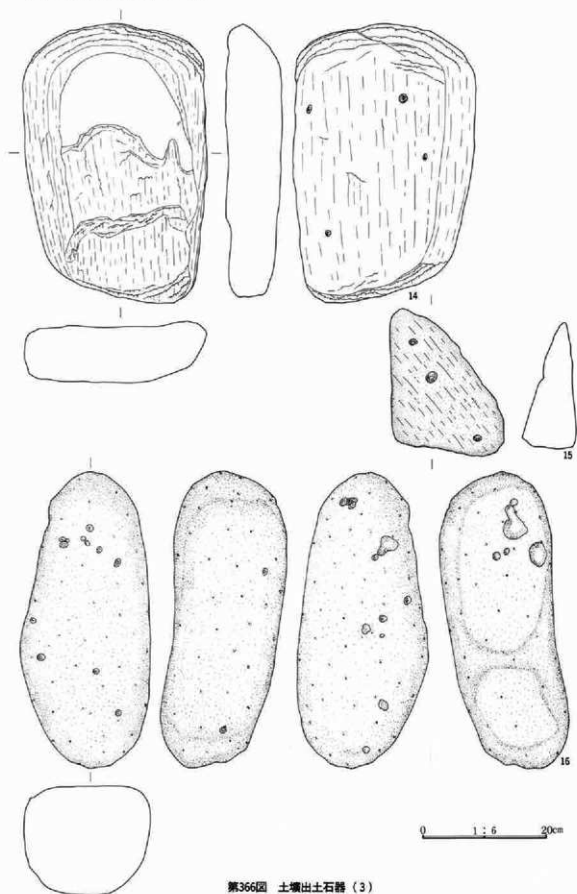
第363図 土壇出土土器



第364図 土壙出土石器(1)



第365図 土壙出土石器(2)



第366図 土壌出土石器(3)

土曜石器観察表

図番 PL	器種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
364-5 129		ほぼ完形	点紋緑泥片岩	49.7	22.7	8.2	14,700	部分的に焼けている。基標として使用。両面に加工痕が認められる。	8号土壌 基標
364-6	磨 石	完形	石黒絹雲母片岩	17.5	15.5	9.2	4,300	両面に磨耗痕が認められる。	8号土壌
364-7 129	多 孔 石	一部欠損	絹雲母石黒片岩	(20.1)	10.6	8.3	(2,900)	両面に凹み。数は5個で、最大は長17mm、短14mm、深4mm、最小は長14mm、短13mm、深3mmで、平均は長16mm、短14mm、深3mm。	14号土壌
365-8 129	多 孔 石	欠損	絹雲母石黒片岩	17.5	15.2	(5.1)	(2,200)	側面に凹み。数は4個で、最大は長20mm、短14mm、深5mm、最小は長17mm、短15mm、深7mmで、平均は長19mm、短15mm、深6mm。	14号土壌
365-9 129	凹 石	完形	点紋緑泥片岩	21.6	8.9	4.1	1,300	両面に凹み。数は4個で、最大は長25mm、短19mm、深2mm、最小は長21mm、短20mm、深1mmで、平均は長24mm、短20mm、深3mm、約5割焼けている。	15号土壌
365-10 129	磨 石	片	安山岩	8.0	7.1	5.4	(420)	両面に磨耗痕が認められる。	15号土壌
365-11 129	磨 石	一部欠損	砂岩	(12.0)	10.6	6.4	(800)	片面に磨耗痕が認められ、また焼けている。	15号土壌
365-12 129	多 孔 石	完形	砂岩	50.3	34.3	25.0	56,500	両面に凹み。数は28個で、最大は長55mm、短30mm、深6mm、最小は長14mm、短12mm、深9mmで、平均は長22mm、短17mm、深7mm、部分的に焼けている。基標として使用。	18号土壌 基標
365-13 130	多 孔 石	完形	流紋岩	46.8	21.1	18.0	25,400	全面に凹み。数は102個で、最大は長54mm、短33mm、深5mm、最小は長7mm、短5mm、深1mmで、平均は長17mm、短12mm、深2mm、基標として使用された。	19号土壌 基標
366-14 130	石 皿	完形	絹雲母石黒片岩	43.8	29.1	9.6	21,000	長方形を呈し窪みは浅い。裏面に4個の凹み。最大の凹みは長14mm、短11mm、深5mm、最小は長9mm、短7mm、深3mmで、平均は長12mm、短8mm、深3mm。	22号土壌
366-15 130	多 孔 石	部分	点紋緑泥片岩	(23.1)	(18.1)	(8.4)	(3,100)	片面に凹み。数は3個で、最大は長19mm、短5mm、深5mm、最小は長13mm、短9mm、深4mmで、平均は長15mm、短11mm、深4mm。	22号土壌
366-16 130	多 孔 石	完形	流紋岩	46.5	20.7	20.2	25,400	全面に凹み。数は31個で、最大は長52mm、短15mm、深3mm、最小は長5mm、短5mm、深1mmで、平均は長14mm、短9mm、深2mm。	22号土壌

8 廃棄場所

位置 Ej-61~64、Ek-61~64、E1-62・63グリッドにかけて検出された。環状列石の中心から北東約120m（廃棄場所の中心）の所、1号配石遺構からは北東約50mに位置している。標高は163.20m~164mである。

I区の遺構構築面がだいたい166m程であるので、約2m~2.8m程低い場所にあたる。

経過 I区（昭和161年度調査区）から検出。62年1月上旬から調査を開始した。上記グリッドから多量の土器片が出土し、また多孔石も多数出土した。図面の作成と遺物を取り上げて行く過程で、Ej・Ek-64グリッドにおいて5号屋外埋設土器が検出された。自然営力による遺物の流れ込みも当然考えられるが、意図的に土器が埋設されていること等から判断して、集落の廃棄場所として認識したものである。

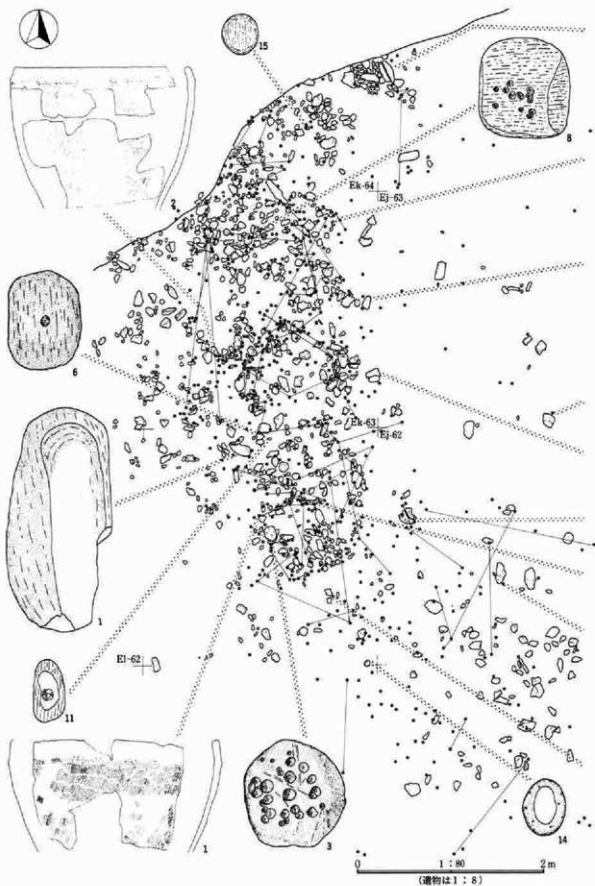
規模 路線外に延びているために全体の規模は不明であるが、現状での面積は約125㎡である。

遺物出土状況 該当する各グリッドからの出土土器片の点数は以下のとおりである。

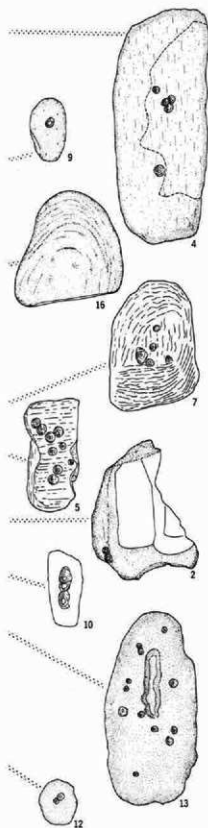
Ej-61グリッド 口縁部15点、胴部97点、底部2点、計114点。

Ej-62グリッド 口縁部17点、胴部117点、底部2点、計136点。

Ej-63グリッド 口縁部7点、胴部38点、底部1点、計46点。



第367図 廃棄場所遺物出土状況



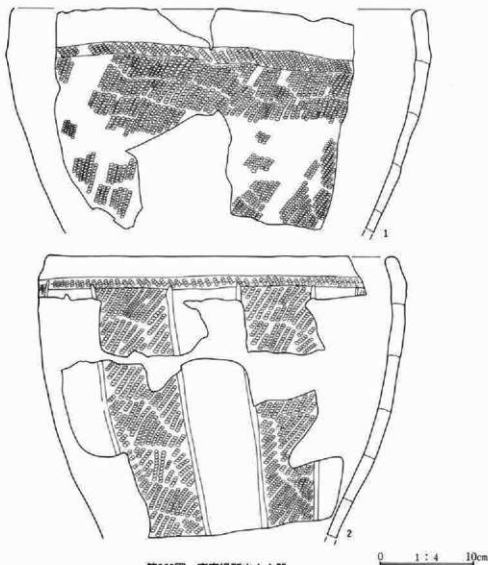
● 土器片

Ej-64グリッド 口縁部1点、胴部29点、底部1点、計31点。
 Ek-61グリッド 口縁部5点、胴部23点、底部1点、計29点。
 Ek-62グリッド 口縁部58点、胴部352点、底部13点、計423点。
 Ek-63グリッド 口縁部53点、胴部322点、底部16点、計391点。
 Ek-64グリッド 口縁部16点、胴部134点、底部7点、計157点。
 グリッドの総計は口縁部172点、胴部1112点、底部43点の計1327点であった。加曾利E3式土器片からE4式土器片が出土しているが、加曾利E4式土器片がEk-62グリッドでは多かった。またこのグリッドでは縄文時代前期土器片1点も含まれていた。土器片の接合関係は比較的広範囲に認められる。

石器では石皿2点、多孔石7点、凹石4点、磨石2点等が出土している。石皿2点はEj-62、Ek-62グリッドからの出土であり、多孔石7点はEj-62グリッド1点、Ej-63グリッド1点、Ej-64グリッド1点、Ek-62グリッド2点、Ek-63グリッド2点であった。凹石はEk-62グリッド3点、Ek-63グリッド1点である。磨石はEk-62、Ek-64グリッドからの出土である。これら石器のほかにも多量の石が出土している。

所見 集落の北東端にあたる場所から検出されたが、さらに路線外に延びている。廃棄場所の一角を調査したものである。集落の存続期間（加曾利E3式期～E4式期）中、廃棄され続けたものであろう。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物



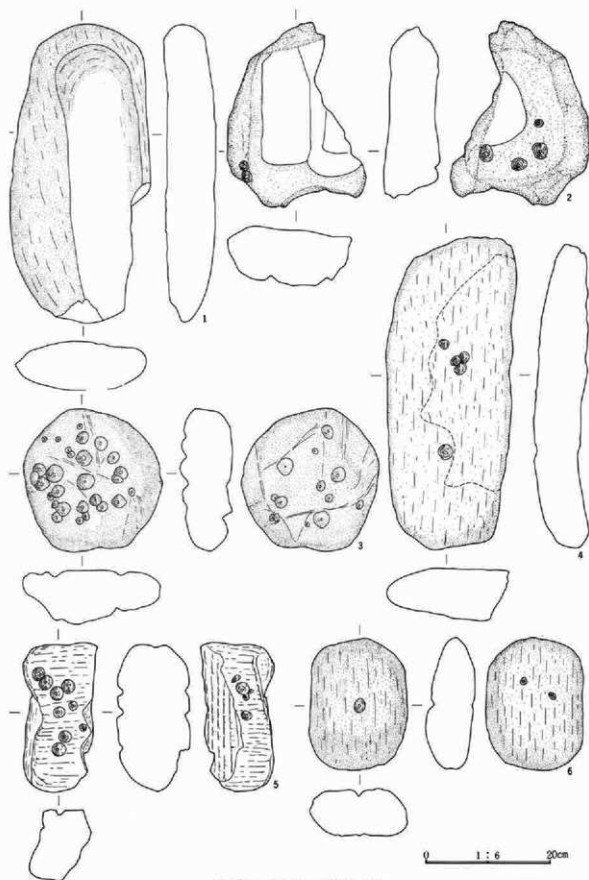
第368図 鹿野場所出土土器

鹿野場所土器観察表

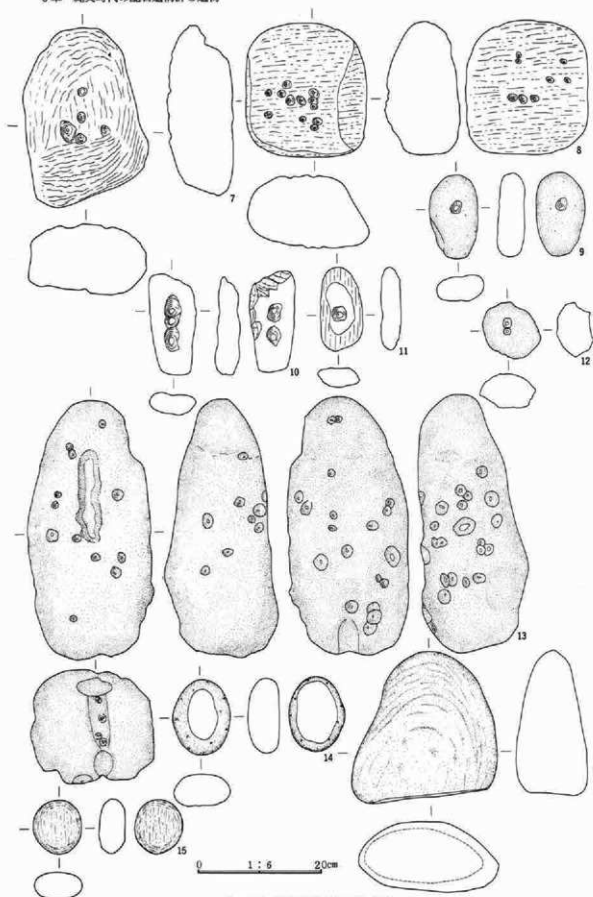
図番 PL	部位	①胎土 ②焼成 (遺 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文 様 (その他)	出土状況
368-1 131	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の大形破片。器厚9~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は明褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせる。以下縄文施文。微隆起帯上に R(↑)横位。胴部にR(↑)縦位。 外面は荒れている。	E k-62 グリッド
368-2 131	口縁 ~割 部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の平完形品。器厚10~16mm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調は褐色、内面は明赤褐色。	口唇部に無文帯をおき、1条の微隆起帯を 巡らせ、それに接続する沈線を描下。区画 内に縄文施文。微隆起帯上にR(↑)横位。胴 部はR(↑)縦位。	E k-63 グリッド

鹿野場所石器観察表

図番 PL	器 種	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
369-1 131	石 皿	一部欠損	点紋緑泥片岩	(47.1)	22.3	8.0	(13,900)	長方形を呈し、窪みは浅い。	E k-62 グリッド
369-2 131	石 皿	瓦	砂岩	29.1	(22.2)	9.3	(5,400)	両面に磨面と凹みがみられる。凹みは6個で、最 大は長30mm、短25mm、深14mm、最小は長15mm、短 14mm、深4mmで、平均は長22mm、短19mm、深8mm。	E j-62 グリッド



第369図 廃棄場所出土石器(1)



第370図 鹿嶋場所出土石器(2)

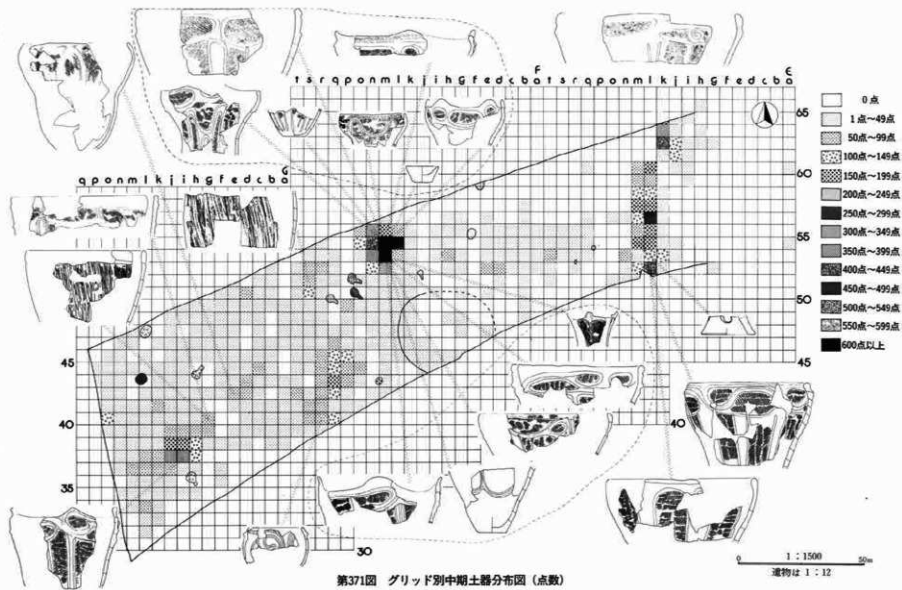
遺棄場所石器観察表

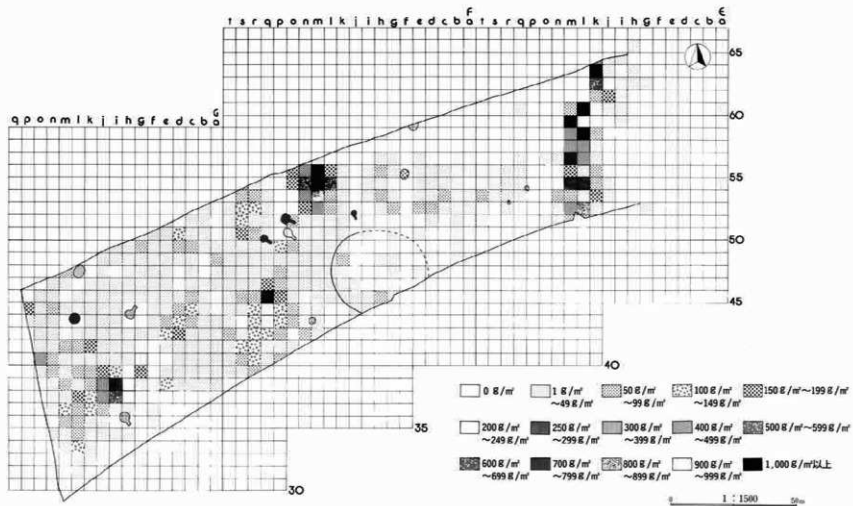
図番 PL.	種類	遺存状況	石 材	計 測 値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
369-3 131	多孔石	完形	砂岩	22.5	22.0	8.4	4,400	両面に41個の凹み。最大の凹みは長28mm、短28mm、深3mm、最小は長10mm、短8mm、深3mmで、平均は長18mm、短15mm、深7mm。	Ek-62 グリッド
369-4 131	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	49.6	29.7	8.2	14,100	片面に5個の凹み。最大の凹みは長23mm、短23mm、深3mm、最小は長15mm、短15mm、深1mmで、平均は長19mm、短16mm、深2mm、一部被熱。	Ej-64 グリッド
369-5 131	多孔石	一部欠損	絹雲母石墨片岩	23.5	(11.9)	11.6	(4,400)	両面に14個の凹み。最大の凹みは長23mm、短21mm、深10mm、最小は長6mm、短5mm、深1mmで、平均は長17mm、短15mm、深7mm。	Ek-63 グリッド
369-6 131	多孔石	完形	点紋緑泥片岩	20.8	15.2	7.4	4,000	両面に3個の凹み。最大の凹みは長22mm、短19mm、深8mm、最小は長11mm、短8mm、深4mmで、平均は長15mm、短12mm、深6mm。	Ek-62 グリッド
370-7 131	多孔石	完形	絹雲母石墨片岩	28.1	19.5	10.8	8,500	片面に5個の凹み。最大の凹みは長31mm、短20mm、深6mm、最小は長16mm、短12mm、深5mmで、平均は長20mm、短15mm、深5mm。	Ej-63 グリッド
370-8 131	多孔石	完形	絹雲母石墨片岩	21.0	19.3	11.5	7,600	両面に20個の凹み。最大の凹みは長16mm、短14mm、深5mm、最小は長7mm、短7mm、深3mmで、平均は長13mm、短11mm、深4mm。	Ek-63 グリッド
370-9 131	凹石	完形	流紋岩	13.2	8.0	4.1	700	両面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径19mm、短径19mm、深さ2mmである。	Ek-63 グリッド
370-10 131	凹石	完形	緑泥片岩	16.1	7.4	3.7	700	両面に5個の凹み。最大の凹みは長36mm、短23mm、深6mm、最小は長23mm、短17mm、深3mmで、平均は長31mm、短22mm、深4mm。	Ek-62 グリッド
370-11 131	凹石	完形	緑雲緑泥片岩	13.4	6.6	3.2	500	片面に1個の凹みがある。凹みの長径22mm、短径22mm、深さ1mmである。器面に磨耗痕がみられる。	Ek-62 グリッド
370-12 131	凹石	完形	砂岩	9.2	9.0	(5.4)	(450)	片面に2個の凹みがある。凹みの平均は長径14mm、短径13mm、深さ3mmである。全面磨けている。	Ek-62 グリッド
370-13 131	多孔石	完形	砂岩	40.7	20.1	17.8	15,150	全面に62個の凹み。最大の凹みは長36mm、短32mm、深16mm、最小は長16mm、短9mm、深7mmで、平均は長18mm、短15mm、深9mm。	Ej-62 グリッド
370-14 132	磨石	完形	流紋岩	11.8	9.3	5.1	750	器面に磨耗痕がみられる。	Ek-62 グリッド
370-15 132	磨石	完形	点紋緑泥片岩	8.5	7.7	4.3	450	器面に磨耗痕がみられる。	Ek-64 グリッド
370-16 132		完形	点紋緑泥片岩	24.0	23.2	11.4	9,000	器面に磨耗痕がみられる。	Ek-63 グリッド

9 グリッド

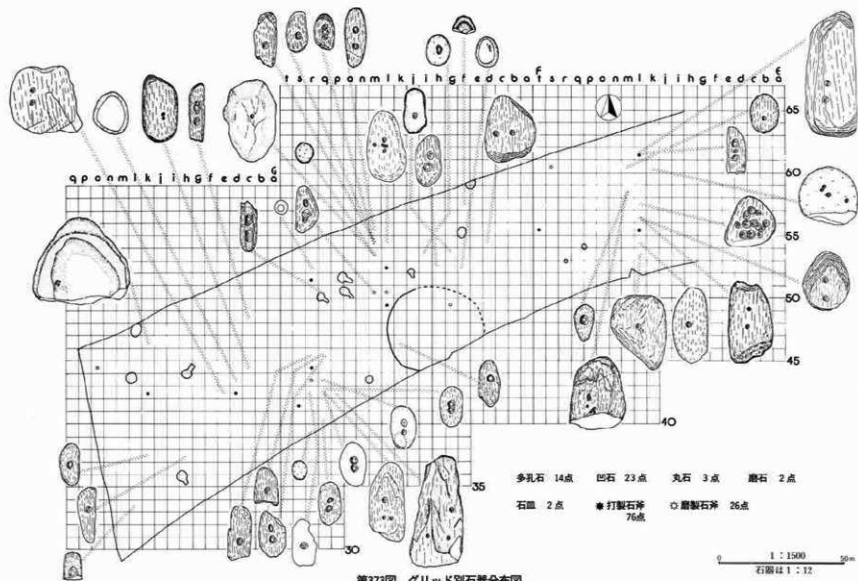
田篠中原遺跡からは縄文時代中期の環状列石、敷石住居跡、配石遺構群が検出されている。各遺構からは多量の土器片と石器類が出土しており、また周辺グリッド（遺構外）からも同様に多量の遺物が出土している。遺構出土物の具体的な数値は、各遺構説明の出土遺物項目中に、土器片については総点数・部位別点数、石器類（配石遺構を構成する石を含む）については器種別点数・石材別点数を記載し、その詳細なグラフを作成してある。遺構外出土物については、一覧表を掲載し、これをもとに分布図を作成してみた。この分布図作成にあたっては次の方法によっている。

遺構外出土土器片の数量的把握を行うために、出土した土器片の総量をおさえ、さらに時期別に分類し、総破片数、口縁部・胴部・底部等の部位別点数とともに重量の測定を行った。遺構外の遺物は基本的に5×5mのグリッドを単位として取り上げられているために、グリッドを最小単位として、このなかにおける時期別・部位別点数を把握し、1㎡あたりの重量を算出した。そして分布図作成には、この点数別・重量別の2通りを作成してみた。土器片の総量はその遺跡の規模（居住人員×継続年数）を反映すると考えられ、時期





第372図 グリッド別中期土器分布図(重量)



別の量的変化は、遺跡の居住人口の変化、いわば盛衰を反映すると思われるが、調査が路線幅という限定された範囲内で実施されているために、問題点は多々ある。しかしながらある程度の把握は可能と思われる。

* * * *

田篠中原遺跡からは縄文時代早期の土器片の出土はなく、前期の土器片42点がグリッドから出土している。このうち胎土に繊維を含んだ前期中葉の土器片は34点(口縁部3点、胴部26点、底部5点)であり、Fc-55・56グリッドにかけて集中して出土した。前期後半の諸磯式土器片は8点の出土、中期前半の土器片は2点の出土であった。こうした土器片の出土は当遺跡の盛衰を考えるうえで非常に興味深いものがある。この地に縄文人が活動の痕跡を残したのは前期中葉段階に求められる。しかしこの段階では、当地は居住不可能な湿地状態であった。前期後半段階になっては縄文人の活動痕跡を認めることはできない。諸磯式土器片の出土は前期中葉の土器片と異なり、集中する出土ではなく、グリッドに分散的に出土しているからである。居住が可能になったのは中期加曾利E 3式期であり、大規模な集落を構成できるようになった。この段階で当地は湿地状態から居住可能な地になっていった。その後、加曾利E 4式期まで集落が営まれるが、この期で集落は断絶し、以後、集落は廃絶されてしまう。これを裏づけるかのように廃棄場所からは加曾利E 4式土器片の出土が多かった。後期の土器片はわずかに2点の出土であり、もちろん遺構の構築はない。後期になって集落立地を異にしている。内匠丘陵(上位段丘)上に集落移動が行われたものと考えられる。

なお、ページ数の関係から中期土器片については、点数分布図(大形破片については実測図を併用)、重量別分布図を作成し、一覧表にまとめた。石器については実測図を併用した分布図を作成し、打製石斧と磨製石斧については点数と出土グリッドを表示したにとどめた。

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

グリッド別出土土器 (縄文中期) 一覧表

グリッド No	層 No	層 名	E/N	経 緯	面 積	容 積	出 土 品	検出遺構	E/N	層 No	層 名	E/N	容 積	検出遺構
F R-50	114	25	44.0						F R-50	114	25	44.0		
F R-52	1935	25	77.4						F R-52	1935	25	77.4		
F R-53	539	25	29.4						F R-53	539	25	29.4		
F R-55	235	25	9.4						F R-55	235	25	9.4		
F R-56	188	25	7.0						F R-56	188	25	7.0		
F R-45	2132	25.8	90.4						F R-45	2132	25.8	90.4		
F R-48	14	25	0.6						F R-48	14	25	0.6		
F R-42	660	25	26.4						F R-42	660	25	26.4		
F R-53	3399	25	97.6						F R-53	3399	25	97.6		
F R-54	427	25	17.1						F R-54	427	25	17.1		
F R-55	1427	25	23.3						F R-55	1427	25	23.3		
F R-56	725	25	29						F R-56	725	25	29		
F R-58	209	7.3	27.9						F R-58	209	7.3	27.9		
F R-44	122	16.3	7.5						F R-44	122	16.3	7.5		
F R-45	21	25	0.8						F R-45	21	25	0.8		
F R-50	1296	25	48.2						F R-50	1296	25	48.2		
F R-52	460	25	18.4						F R-52	460	25	18.4		
F R-54	564	25	22.6						F R-54	564	25	22.6		
F R-55	536	25	20.8						F R-55	536	25	20.8		
F R-44	352	22.5	15.6						F R-44	352	22.5	15.6		
F R-45	158	25	6.2						F R-45	158	25	6.2		
F R-46	639	25	25.6						F R-46	639	25	25.6		
F R-45	164	25	4.4						F R-45	164	25	4.4		
F R-46	347	25	13.9						F R-46	347	25	13.9		
F R-47	415	25	16.6						F R-47	415	25	16.6		
F R-48	1867	25	42.3						F R-48	1867	25	42.3		
F R-49	179	6	6.6						F R-49	179	6	6.6		
F R-50	2157	25	86.3						F R-50	2157	25	86.3		
F R-51	1536	25	6.3						F R-51	1536	25	6.3		
F R-52	494	25	19.4						F R-52	494	25	19.4		
F R-53	1150	25	46						F R-53	1150	25	46		
F R-54	1163	25	4.4						F R-54	1163	25	4.4		
F R-55	690	25	21						F R-55	690	25	21		
F R-45	672	25	36.9						F R-45	672	25	36.9		
F R-46	194	25	7.8						F R-46	194	25	7.8		
F R-47	243	25	8.7						F R-47	243	25	8.7		
F R-48	915	25	20.6						F R-48	915	25	20.6		
F R-49	374	25	10.9						F R-49	374	25	10.9		
F R-50	526	25	21						F R-50	526	25	21		
F R-51	482	25	19.3						F R-51	482	25	19.3		
F R-52	2220	25	48.8						F R-52	2220	25	48.8		
F R-53	2120	25	84.8						F R-53	2120	25	84.8		
F R-54	17165	25	686.6						F R-54	17165	25	686.6		
F R-55	5880	25	155.2						F R-55	5880	25	155.2		
F R-47	460	22.5	20.4						F R-47	460	22.5	20.4		
F R-48	165	25	6.6						F R-48	165	25	6.6		
F R-44	442	25	17.7						F R-44	442	25	17.7		
F R-45	856	25	34.2						F R-45	856	25	34.2		
F R-46	229	25	9.2						F R-46	229	25	9.2		
F R-47	225	25	9						F R-47	225	25	9		
F R-48	240	25	9.6						F R-48	240	25	9.6		
F R-49	199	25	7.6						F R-49	199	25	7.6		
F R-50	908	25	38.3						F R-50	908	25	38.3		
F R-51	2140	25	45.6						F R-51	2140	25	45.6		
F R-52	8994	25	399.8						F R-52	8994	25	399.8		
F R-53	32664	25	986.6						F R-53	32664	25	986.6		
F R-54	20252	25	1211.7						F R-54	20252	25	1211.7		
F R-55	6416	25	256.6						F R-55	6416	25	256.6		
F R-56	315	12.5	25.2						F R-56	315	12.5	25.2		
F R-45	1790	22.5	29.6						F R-45	1790	22.5	29.6		
F R-46	114	25	4.6						F R-46	114	25	4.6		
F R-47	657	25	26.3						F R-47	657	25	26.3		
F R-48	518	25	20.7						F R-48	518	25	20.7		
F R-49	174	25	10.9						F R-49	174	25	10.9		
F R-50	453	25	16.9						F R-50	453	25	16.9		
F R-51	679	25	27.2						F R-51	679	25	27.2		
F R-52	4429	25	77.2						F R-52	4429	25	77.2		
F R-53	11927	25	414.3						F R-53	11927	25	414.3		
F R-54	16773	25	620.9						F R-54	16773	25	620.9		
F R-55	9222	25	368.9						F R-55	9222	25	368.9		
F R-41	161	26	5.1						F R-41	161	26	5.1		
F R-42	1263	25	54.5						F R-42	1263	25	54.5		
F R-44	1692	25	47.7						F R-44	1692	25	47.7		
F R-45	1185	25	47.9						F R-45	1185	25	47.9		
F R-46	379	25	14.8						F R-46	379	25	14.8		
F R-48	1106	25	44.2						F R-48	1106	25	44.2		
F R-49	1423	25	56.9						F R-49	1423	25	56.9		
F R-50	2655	25	82.2						F R-50	2655	25	82.2		
F R-53	315	25	12.8						F R-53	315	25	12.8		
F R-54	3933	25	152.4						F R-54	3933	25	152.4		
F R-55	3399	25.7	136.9						F R-55	3399	25.7	136.9		
F R-40	1207	12.5	96.8						F R-40	1207	12.5	96.8		
F R-41	175	25	7						F R-41	175	25	7		
F R-42	2138	25	85.3						F R-42	2138	25	85.3		
F R-43	2928	25	117.1						F R-43	2928	25	117.1		
F R-44	2695	25	167.8						F R-44	2695	25	167.8		
F R-45	4384	25	185.4						F R-45	4384	25	185.4		
F R-46	1463	25	58.5						F R-46	1463	25	58.5		
F R-47	279	25	8.8						F R-47	279	25	8.8		
F R-48	866	25	33.4						F R-48	866	25	33.4		
F R-49	2655	25	106.2						F R-49	2655	25	106.2		
F R-50	9264	25	320.6						F R-50	9264	25	320.6		
F R-41	771	25	30.4						F R-41	771	25	30.4		
F R-42	4003	25	160.1						F R-42	4003	25	160.1		
F R-43	5462	25	218.5						F R-43	5462	25	218.5		
F R-44	5764	25	230.6						F R-44	5764	25	230.6		
F R-45	6478	25	259.1						F R-45	6478	25	259.1		
F R-46	2980	25	119.2						F R-46	2980	25	119.2		
F R-47	1130	25	38						F R-47	1130	25	38		
F R-51	360	25	14.4						F R-51	360	25	14.4		
F R-52	818	25	32.7						F R-52	818	25	32.7		
F R-53	180	25	6						F R-53	180	25	6		
F R-39	1432	15	35.5						F R-39	1432				

9 グリッド

グリッド	東経 (度)	北緯 (度)	経度 (分)	緯度 (分)	経度 (秒)	緯度 (秒)	位置	標高 (m)
F-1-31	3477	25	139.1	84	5	79	1	
F-1-32	3449	25	139.1	83	19	26	1	
F-1-33	3495	25	139.4	83	5	92	1	
F-1-34	3345	25	101.8	75	9	60	6	
F-1-35	3133	25	85.5	39	11	45	3	
F-1-36	3221	25	92.1	21	14	39	3	
F-1-37	391	25	11.8	10	1	9	3	
F-1-38	45	25	3	3	1	9	3	
F-1-39	1140	25	47.1	39	7	32	2	9号特別地域
F-1-40	1286	25	54.4	30	2	26	2	
F-1-41	1440	25	63.5	39	7	25	2	
F-1-42	3880	25	133.2	39	7	25	2	22号配電
F-1-43	2384	25	95.9	40	4	32	4	22号配電
F-1-44	239	25	15.9	3	1	5	1	
F-1-45	249	25	8.3	3	1	5	1	
F-1-46	2349	25	86.7	35	5	49	1	
F-1-47	3024	25	126.2	82	17	61	4	
F-1-48	1042	25	41.7	25	2	23	1	30・31号配電
F-1-49	418	25	16.7	30	2	18	1	
F-1-50	1271	25	94.8	35	8	26	2	
F-1-51	486	25	27.7	9	1	8	1	
F-1-52	182	25	0.7	4	1	4	1	
F-1-53	96	25	3.6	4	1	4	1	
F-1-54	570	25	22.8	19	1	18	1	
F-1-55	4947	25	197.9	115	17	94	4	
F-1-56	2698	25	146.8	64	11	48	4	
F-1-57	3692	25	145.2	80	11	66	3	22号配電
F-1-58	1699	25	56	36	5	31	4	22号配電
F-1-59	255	25	9.1	4	1	4	1	
F-1-60	113	25	4.5	1	1	4	1	
F-1-61	992	25	39.7	23	3	18	2	
F-1-62	1234	25	59	29	3	18	2	
F-1-63	142	25	82.7	61	10	81	3	
F-1-64	98	25	3.9	3	1	3	1	
F-1-65	8	25	0.6	1	1	3	1	
F-1-66	364	25	14.6	13	1	14	3	
F-1-67	436	25	17.9	9	2	6	2	
F-1-68	473	25	18	13	1	15	3	
F-1-69	640	25	25.6	18	2	16	1	
F-1-70	105	25	4.2	1	1	4	1	
F-1-71	245	25	9.8	9	1	9	1	
F-1-72	1194	25	47.8	29	5	22	2	
F-1-73	285	25	11.4	10	1	10	2	
F-1-74	81	25	4	3	1	3	1	
F-1-75	910	25	36.4	20	4	15	1	
F-1-76	290	25	8	7	2	7	2	
F-1-77	530	25	20.8	12	3	9	4	
F-1-78	42	25	4.7	4	1	4	1	
F-1-79	43	25	22.4	10	1	10	1	
F-1-80	316	25	12	1	1	11	1	
F-1-81	47	25	1.2	1	1	24	1	
F-1-82	273	25	96.3	21	1	11	1	
F-1-83	48	25	2.4	2	1	12	1	
F-1-84	778	25	38.9	12	1	12	1	
F-1-85	1093	25	43.7	18	1	17	1	
F-1-86	149	25	8	3	1	3	1	
F-1-87	108	25	4.2	3	1	3	1	
F-1-88	149	25	8	3	1	3	1	
F-1-89	104	25	4.8	25	3	19	1	
F-1-90	749	25	29.6	17	1	17	1	
F-1-91	482	25	19.9	9	1	8	1	
F-1-92	429	25	18.3	9	1	8	1	
F-1-93	58	25	2	2	1	1	1	
F-1-94	295	25	8.2	6	1	5	1	
F-1-95	29	25	1.7	1	1	1	1	
F-1-96	249	25	10	11	3	8	1	
F-1-97	99	25	4	4	1	4	1	
F-1-98	16	25	0.6	1	1	1	1	
F-1-99	479	25	18.8	12	2	16	1	
F-1-100	1924	25	77	41	6	35	1	
F-1-101	2875	25	107	51	10	41	1	
F-1-102	413	25	95.6	69	6	42	1	
F-1-103	815	25	24.6	15	1	14	1	
F-1-104	30	25	1.3	1	1	1	1	
F-1-105	32	25	1.3	1	1	1	1	
F-1-106	2869	25	96.4	62	9	31	1	
F-1-107	619	25	34.8	17	4	13	1	
F-1-108	18	25	0.7	2	2	2	1	
F-1-109	38	25	1.5	1	1	1	1	
F-1-110	115	25	4.6	4	1	4	1	
F-1-111	425	25	17	9	2	7	1	30・34号配電
F-1-112	286	25	8.2	8	2	8	1	
F-1-113	4112	25	164.5	60	7	59	2	23号配電
F-1-114	2873	25	114.9	30	7	44	4	
F-1-115	1875	25	69.4	42	7	42	7	
F-1-116	97	25	3.5	2	1	1	1	
F-1-117	87	25	3.5	4	1	1	1	
F-1-118	1290	25	53.1	19	3	15	1	
F-1-119	450	25	162.8	54	8	46	1	
F-1-120	2668	25	114.7	39	8	30	1	34号配電
F-1-121	435	25	17.4	7	5	5	1	30号配電
F-1-122	133	25	5.3	10	1	5	1	30号配電
F-1-123	2548	25	101.9	53	13	39	1	30号配電
F-1-124	1961	25	72.2	29	5	29	6	
F-1-125	865	25	34.6	22	3	19	6	
F-1-126	215	25	12.6	6	1	6	1	
F-1-127	178	25	7.2	5	1	6	1	
F-1-128	126	25	4	1	1	3	1	
F-1-129	386	25	18.2	9	7	7	9	19号土壌
F-1-130	257	25	10.3	7	7	9	7	
F-1-131	912	25	41.3	19	1	19	1	
F-1-132	213	25	18.4	4	1	3	1	
F-1-133	146	25	5.4	4	1	4	1	
F-1-134	95	25	3.8	2	1	2	1	
F-1-135	1524	25	69.6	16	4	12	6	23号配電
F-1-136	324	25	13.4	11	2	8	1	23号配電
F-1-137	364	25	14.6	16	4	9	3	
F-1-138	180	25	4.2	4	1	3	1	

グリッド	東経 (度)	北緯 (度)	経度 (分)	緯度 (分)	経度 (秒)	緯度 (秒)	位置	標高 (m)
G-1-31	83	25	3.3	3	3	3	3	
G-1-32	277	25	11.1	8	1	6	1	18号土壌
G-1-33	395	25	15.8	11	7	3	7	
G-1-34	296	25	12.2	10	1	9	1	
G-1-35	443	25	22.3	10	1	9	1	
G-1-36	979	25	38.8	23	4	19	4	23号配電
G-1-37	803	25	30.1	18	3	9	5	23号配電
G-1-38	5047	25	203.5	78	14	60	4	
G-1-39	806	25	33	26	3	17	1	
G-1-40	490	25	16	9	1	7	1	
G-1-41	65	25	3	2	2	2	1	
G-1-42	39	25	1.2	1	1	1	1	
G-1-43	182	25	5.9	6	1	6	1	
G-1-44	1365	25	54.6	33	5	27	1	
G-1-45	28	25	1.2	1	1	1	1	
G-1-46	1189	25	47.2	19	1	18	1	
G-1-47	5193	25	207.7	139	14	123	2	
G-1-48	5187	25	206.7	130	16	113	1	
G-1-49	1911	25	78	51	10	40	4	
G-1-50	549	25	37.6	30	4	25	1	
G-1-51	96	25	3.8	2	1	2	1	
G-1-52	138	25	5.1	7	1	6	1	
G-1-53	826	25	38.8	16	3	12	1	
G-1-54	78	25	3.1	2	1	1	1	
G-1-55	339	25	20.4	9	4	9	4	
G-1-56	226	25	9	10	2	8	1	
G-1-57	409	25	17.2	10	2	10	2	
G-1-58	877	25	35.9	9	2	16	1	
G-1-59	801	25	32	22	5	17	1	37号配電
G-1-60	1367	25	546.7	203	21	172	10	
G-1-61	988	25	39.6	20	13	19	3	
G-1-62	3216	25	138.7	87	15	79	2	
G-1-63	1044	25	41.8	18	3	18	3	
G-1-64	86	25	3	3	3	3	1	
G-1-65	372	25	14.9	7	1	6	1	
G-1-66	698	25	19.9	11	2	9	1	
G-1-67	44	25	0.4	1	1	1	1	
G-1-68	145	25	5.8	5	1	4	1	
G-1-69	365	25	6.6	6	1	6	1	
G-1-70	68	25	0.4	3	1	3	1	
G-1-71	5	25	0.3	1	2	2	1	
G-1-72	413	25	16.5	4	1	7	1	
G-1-73	843	25	35.3	4	1	7	1	
G-1-74	2326	25	92.8	54	6	48	5	
G-1-75	1151	25	46.2	229	36	187	2	
G-1-76	1691	25	70.3	153	82	133	5	
G-1-77	4475	25	179	91	10	29	2	
G-1-78	848	25	34	22	2	22	2	
G-1-79	113	25	28.6	13	5	18	2	
G-1-80	915	25	36.6	17	2	15	1	
G-1-81	697	25	28.2	11	1	11	1	
G-1-82	1017	25	40.7	14	1	11	1	
G-1-83	344	25	9.8	7	1	6	1	
G-1-84	191	25	7.6	5	1	5	1	
G-1-85	67	25	1.2	1	1	1	1	
G-1-86	136	25	6.2	3	2	1	1	
G-1-87	432	25	18.5	9	5	8	1	
G-1-88	1033	25	43.3	19	6	21	6	
G-1-89	34	25	15.3	7	1	6	1	
G-1-90	182	25	4.1	2	1	6	1	
G-1-91	118.9	25	61	10	5	3	1	44・44号配電
G-1-92	2545	25	101.8	67	8	57	3	44・44号配電
G-1-93	1458	25	65.9	40	4	32	4	
G-1-94	2306	25	88.2	49	7	41	1	
G-1-95	988	25	39.5	25	5	29	2	
G-1-96	1848	25	75.7	45	5	29	2	
G-1-97	855	25	38.2	19	2	15	2	

3章 縄文時代の配石遺構群と遺物

グリッド	長さ (m)	幅 (m)	面積 (㎡)	総数	開口部	位置	構造	備考
G R-45	67	25	2.7	3	1	2		
G R-46	175	25	7	2		2		
G O-39	1005	22.5	44.4	32		32		
G O-40	10066	24.1	417.7	174	31	141	2	
G O-41	36	25	1.4	2				
G O-42	531	25	29.4	17	1	16		
G O-43	265	25	19.6	8		8		
G O-44	495	25	27.8	17	1	16		10号屋外埋設
G O-45	45	25	1.6	1		1		
G P-43	445	45	29.7	13	2	11		
G P-44	3096	18.8	191.8	45	1	28	1	10号屋外埋設

4章 自然科学的分析

- 〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析
- 〔2〕 田篠中原遺跡の縄文土器胎土分析
- 〔3〕 田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定
- 〔4〕 田篠中原遺跡でみられる石材の種類と地質的関連
- 〔5〕 遺跡調査における地中レーダの活用

5章 成果と問題点

- 〔1〕 田篠中原遺跡の提起する諸問題
- 〔2〕 出土石器の検討
- 〔3〕 田篠中原遺跡出土石斧について

〔1〕 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設 土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男
鶴巣コーシャ・総合科学研究所 福島道広、中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は、長期間地下に埋藏されると圧力、水分などの物理的な作用や、土の中に分布する種々の微生物の作用を受けて崩壊していく。従って、遺物を構成していた生体成分も、次々と分解し、千年・万年という長い年月の間にはすっかりなくなるものとこれまで考えられてきた。

最近、生体成分の一部、特に脂肪は微量ながら比較的安定した状態で遺存することが^{(1)・(2)}判明した。もともと脂肪は、空気さらされると酸化分解してしまう性質をもっている。表面に露出している脂質は、長期間おぼろげに酸化分解を受け、酸化皮膜を形成する。この皮膜のため、多孔質の土器内部に浸透した脂肪は、もとの脂肪のまま保存されることがわかってきた。

R.C.A. Rottlander や D.A. Priestley らは、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子⁽³⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸組成は安定した状態で保持されていることなどを報告している。また佐原らは奈良県平城京跡より出土した灯明皿からエルシン酸を多く含むナタネ油を検出した⁽⁴⁾。このような脂肪を構成する脂肪酸およびステロールの組成は、動物種によってすべて少しずつ化学組成が異なっている。従って、現生動物試料の脂肪の化学組成を基準にして、これと出土試料に保存されていた脂肪の化学組成を照合することで、“脂肪の持主”を特定することができる。出土遺物の脂肪の性質から、かつて存在していた動物の種類をわからせるとともに、その遺物が何に使われ、それを使っていた古代人がどんな生活をしていたかなど、原始時代の環境復原、衣・食・住の生活復原が可能になる。この「残存脂肪分析法」を用いて、田篠中原遺跡の遺構群および埋設土器の性格、用途を解明しようとした。

1 土壌および埋設土器試料

田篠中原遺跡は縄文時代中期後半のものとして推定されている。遺構配置状況(付図1)と試料採取地点を図1-1~1-19に示す。1号配石遺構埋設土器3試料(No 1 HP-1~No 1 HP-3)および土壌4試料(No 1 HS-1~No 1 HS-4)、1号屋外埋設土器16試料(No 1 YP-1~No 1 YP-16)および土器付着土壌13試料(No 1 YS-1~No 1 YS-13)、2号配石遺構埋設土器3試料(No 2 HP-1

参考文献

- (1) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp 124。
- (2) 中野益男：「残存脂肪酸による古代復元」、『講談収録集—新しい研究法は考古学になにもたらしたか』、第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、1989、pp 114。
- (3) R.C.A. Rottlander and H. Schlichterle：「Food identification of samples from archaeological sites」、『Archaeo. Physika.』、10巻、1979、pp 260。
- (4) D.A. Priestley, W.C. Gallinat and A.C. Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」、『Nature』、296巻、1981、pp 146。
- (5) R.C.A. Rottlander and H. Schlichterle：「Analyse Frühgeschichtlichen Gefäßinhalte」、『Naturwissenschaften』、70巻、pp 33。
- (6) 佐原 真：「原始古代の残存脂肪成分の研究」、『奈良国立文化財研究所報告』、1983、pp 56。

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

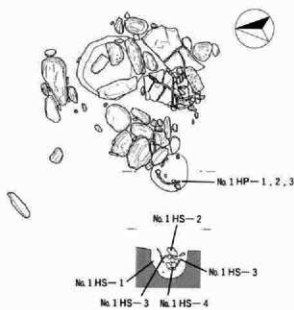


図1-1 1号配石遺構(敷石住居跡)埋設土器(埋壘)
-土壌試料採取地点

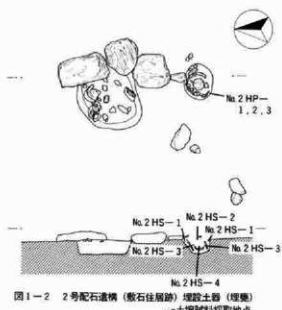


図1-2 2号配石遺構(敷石住居跡)埋設土器(埋壘)
-土壌試料採取地点



図1-3 6号配石遺構伏壘-土壌試料採取地点

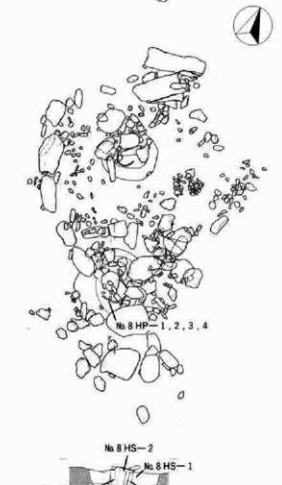


図1-4 8号配石遺構(納鏡形敷石住居跡)
埋壘-土壌試料採取地点

図1 土壌試料採取地点(1-1~4)

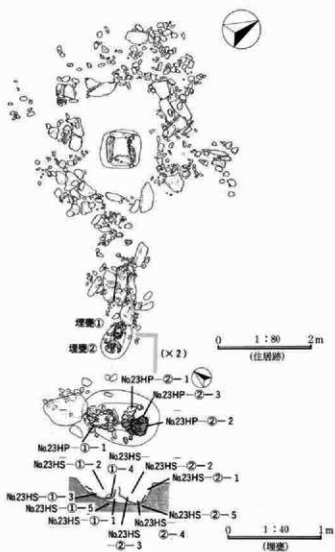


図1-5 23号配石遺構(栲鏡形敷石住居跡)埋藏①・埋藏②
土壌試料採取地点

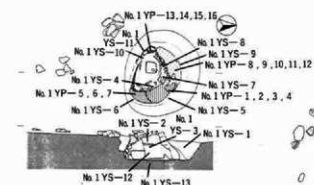


図1-7 1号屋外埋設土器-土壌試料採取地点

図1 土壌試料採取地点(1-5~9)

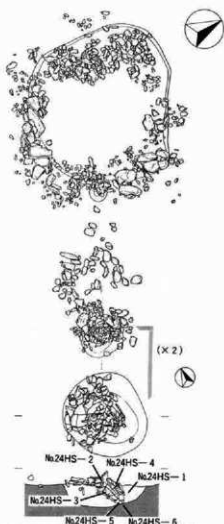


図1-6 24号配石遺構(栲鏡形敷石住居跡)
先端部埋藏-土壌試料採取地点

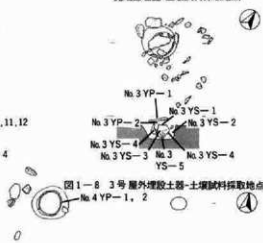


図1-8 3号屋外埋設土器-土壌試料採取地点



図1-9 4号屋外埋設土器-土壌試料採取地点

[1] 田原中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

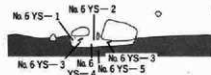
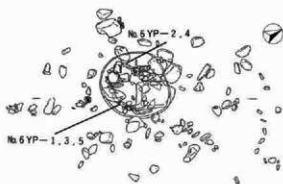


図1-10 6号屋外埋設土器-土壌試料採取地点

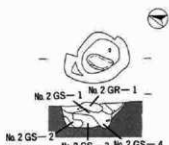


図1-11 2号土壺-土壌試料採取地点

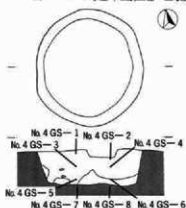


図1-13 4号土壺-土壌試料採取地点

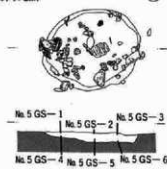


図1-14 5号土壺-土壌試料採取地点

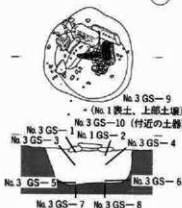


図1-12 3号土壺-土壌試料採取地点

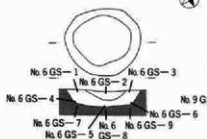


図1-15 6号土壺-土壌試料採取地点

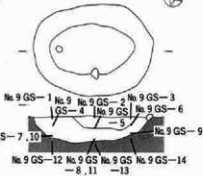


図1-16 9号土壺-土壌試料採取地点

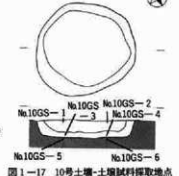


図1-17 10号土壺-土壌試料採取地点

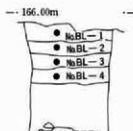


図1-18 標準土壌採取地点(2号土壺周辺)

標準土壌試料はこの他に
1号屋外埋設土器周辺か
ら、No.9~No.12までを採
取している。

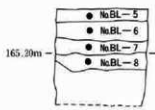


図1-19 標準土壌採取地点(3号屋外埋設土器周辺)

図1 土壌試料採取地点(1-10~19)

0 1:40 1m

～No 2 HP - 3) および土壌 4 試料 (No 2 HS - 1～No 2 HS - 4)、2号土壌土壌 4 試料 (No 2 GS - 1～No 2 GS - 4)、および礫 1 試料 (No 2 GR - 1)、3号屋外埋設土器 2 試料 (No 3 YP - 1～No 3 YP - 2) および土器付着土壌 5 試料 (No 3 YS - 1～No 3 YS - 5)、3号土壌土壌10試料 (No 3 GS - 1～No 3 GS - 10)、4号屋外埋設土器 2 試料 (No 4 YP - 1～No 4 YP - 2) および土器付着土壌 5 試料 (No 4 YS - 1～No 4 YS - 5)、4号土壌土壌 8 試料 (No 4 GS - 1～No 4 GS - 8)、5号土壌土壌 7 試料 (No 5 GS - 1～No 5 GS - 7)、6号配石遺構伏壁 5 試料 (No 6 HP - 1～No 6 HP - 5) および土壌 6 試料 (No 6 HS - 1～No 6 HS - 6)、6号屋外埋設土器 6 試料 (No 6 YP - 1～No 6 YP - 6) および土器付着土壌 5 試料 (No 6 YS - 1～No 6 YS - 5)、6号土壌土壌 9 試料 (No 6 GS - 1～No 6 GS - 9)、8号配石遺構埋壁 4 試料 (No 8 HP - 1～No 8 HP - 4) および土壌 5 試料 (No 8 HS - 1～No 8 HS - 5)、9号土壌土壌14試料 (No 9 GS - 1～No 9 GS - 14)、10号土壌土壌 6 試料 (No 10 GS - 1～No 10 GS - 6)、23号配石遺構埋壁① 1 試料 (No 23 HP -①-1) および土壌 5 試料 (No 23 HS -①-1～No 23 HS -①-5)、23号配石遺構埋壁② 3 試料 (No 23 HP -②-1～No 23 HP -②-3) および土壌 5 試料 (No 23 HS -②-1～No 23 HS -②-5)、24号配石遺構先端部埋壁付着土壌 6 試料 (No 24 HS - 1～No 24 HS - 6)、対照区土壌12試料 (No BL - 1～No BL - 12)、計179試料について残存脂肪分析をした。

2 土壌試料の無機成分

土壌試料中の無機成分を調べ遺構および埋設土器の性格の解明を試みた。試料の分析は次のようにして行った。乾燥土壌試料をメノウ乳鉢で細粉し、それを正確に磁製ルツボにとり、500°Cの電気炉で4時間加熱して有機物を分解、冷却後テフロンビーカーに移し、フッ化水素および硝酸-過塩素酸 (3 : 1) を加え、200°Cで加熱分解した。これを蒸発乾固後、残渣に塩酸を加え、加温溶解し、一定容にしてから、原子吸光法により鉄 (Fe)、マンガン (Mn)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、カリウム (K) の主要元素および銅 (Cu)、亜鉛 (Zn) の微量元素を分析した。リン (P) は比色法により定量した。遺構および埋設土器内外土壌試料、対照区土壌試料の重金属分布を図 2-1～2-10に示す。

各遺構、埋設土器試料ともに主要元素のうちMg、Ca、NaおよびK含量にそれほど大きな差は認められなかった。しかしその中でも1号配石遺構、1号屋外埋設土器および3号土壌ではCaおよびMgがわずかではあるが対照区土壌より高い値を示した。このうちCa、Naは動物体に多く含まれている元素であることから、動物体の痕跡が認められた。また微量元素についても同様の傾向がみられた。

基壤の認定に広く利用されているP分布を図3に示す。図に見られるように、対照区土壌に比べ各遺構および土壌とも高い値を示した。その中でも1号屋外

(7) 土壌成分測定法委員会編：「土壌成分分析法」、復賢堂、東京、1970、pp 430。

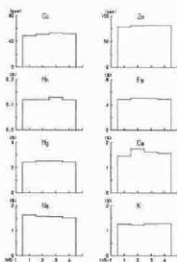


図2-1 1号配石遺構埋設土器の重金属分布

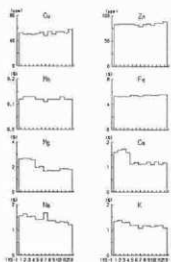


図2-2 1号屋外埋設土器の重金属分布

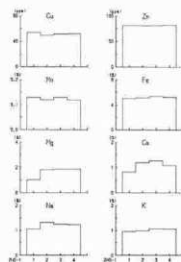


図2-3 2号配石遺構埋設土器の重金属分布

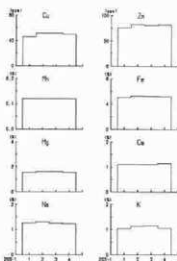


図2-4 2号土壌の重金属分布

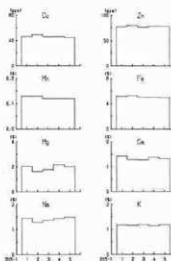


図2-5 3号屋外埋設土器の重金属分布

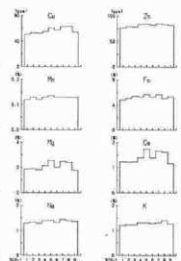


図2-6 3号土壌の重金属分布

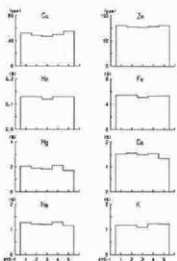


図2-7 4号屋外埋設土器の重金属分布

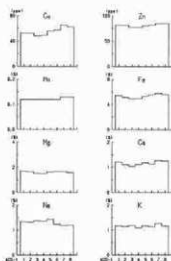


図2-8 4号土壌の重金属分布

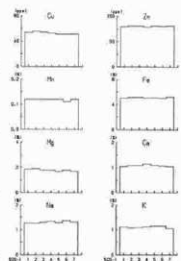


図2-9 5号土壌の重金属分布

図2 重金属分布 (2-1~9)

4章 自然科学的分析

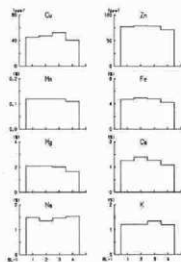


図2-10 標準土壌の重金属分布

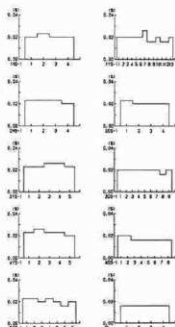


図3 各遺構から採取した土壌のリンド分布

表1-1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料	採取地点	試料量	抽出量 (mg)	抽出率 (%)	
1号発掘遺構 埋没土壌	№1土壌中層中心	11P-1	403.14	16.1	0.3699
	№1土壌中層中心	11P-2	723.25	26.9	0.2642
	№1土壌中層中心	11P-3	486.82	15.4	0.2521
	№1土壌内層土壌	11S-1	364.52	48.9	0.2549
	№2土壌中層中心	11S-2	479.55	222.2	0.4636
	№3土壌中層土壌	11S-3	198.73	53.7	0.2697
	№4土壌表層土壌	11S-4	182.38	87.8	0.4816
	№5土壌内中心	11P-1	626.36	34.1	0.0543
	№5土壌内中心	11P-2	302.10	5.8	0.0191
	№5土壌内中心	11P-3	348.58	8.9	0.0253
1号埋没層上層土壌	№6土壌内中心	11P-4	408.88	32.9	0.0808
	№6土壌内中心	11P-5	497.26	30.0	0.0602
	№6土壌内中心	11P-6	626.69	22.0	0.0351
	№6土壌内中心	11P-7	619.22	17.7	0.0286
	№6土壌内中心	11P-8	761.07	26.5	0.0348
	№6土壌内中心	11P-9	412.24	18.4	0.0445
	№6土壌内中心	11P-10	722.77	32.4	0.0447
	№6土壌内中心	11P-11	479.75	22.7	0.0474
	№6土壌内中心	11P-12	222.88	27.9	0.1248
	№6土壌内中心	11P-13	484.79	7.2	0.0148
1号埋没層下層土壌	№6土壌内中心	11P-14	162.30	12.5	0.0768
	№6土壌内中心	11P-15	402.21	20.0	0.0496
	№6土壌内中心	11P-16	461.81	22.4	0.0483
	№7土壌表層土壌	11S-1	706.29	18.4	0.0262
	№7土壌中層(上)土壌	11S-2	423.22	48.8	0.0949
	№7土壌中層(下)土壌	11S-3	402.24	18.9	0.0469
	№8土壌埋没層上土壌	11S-4	408.18	18.5	0.0452
	№8土壌埋没層上土壌	11S-5	497.68	18.5	0.0371
	№8土壌埋没層上土壌	11S-6	483.34	9.0	0.0186
	№8土壌埋没層下土壌	11S-7	451.09	14.9	0.0329
1号埋没層中心土壌	№8土壌埋没層中心土壌	11S-8	468.81	11.7	0.0250
	№8土壌埋没層中心土壌	11S-9	461.81	42.3	0.0913
	№8土壌埋没層中心土壌	11S-10	461.11	44.3	0.0959
	№8土壌埋没層中心土壌	11S-11	461.20	18.7	0.0401
	№8土壌埋没層中心土壌	11S-12	468.24	22.0	0.0471
	№8土壌埋没層下-中央土壌	11S-13	460.87	9.1	0.0196

表1-2 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料	採取地点	試料量	抽出量 (mg)	抽出率 (%)		
2号埋没層 埋没土壌	№1土壌中層中心	21P-1	262.65	12.7	0.0297	
	№1土壌中層中心	21P-2	426.49	18.0	0.0236	
	№1土壌中層中心	21P-3	285.88	4.5	0.0157	
	№1土壌中層土壌	21S-1	477.81	41.8	0.0873	
	№1土壌中層土壌	21S-2	477.58	243.5	0.5098	
	№1土壌中層土壌	21S-3	722.11	38.8	0.0536	
	№1土壌表層土壌	21S-4	344.97	31.2	0.0904	
	№1土壌	21G-1	426.65	54.5	0.1280	
	№1土壌下土壌	21G-2	481.14	17.9	0.0371	
	№1土壌表土	21G-3	481.41	11.8	0.0244	
2号土壌	№1土壌表土	21G-4	442.98	17.1	0.0383	
	№1土壌表土	21G-5	444.97	18.4	0.0414	
	上	21P-4	442.97	18.2	0.0411	
	下	21P-5	442.97	17.4	0.0392	
	2号埋没層中心土壌	№1土壌中心	21P-1	426.17	20.4	0.0478
		№2土壌埋没層中心	21P-2	442.29	28.1	0.0633
		№2土壌埋没層中心	21P-3	726.28	14.8	0.0203
		№2土壌埋没層中心	21P-4	461.23	20.8	0.0451
		№2土壌埋没層中心	21P-5	461.20	20.8	0.0450
		№2土壌埋没層中心	21G-1	442.72	11.8	0.0262
№2土壌埋没層中心		21G-2	442.50	5.4	0.0121	
№2土壌埋没層中心		21G-3	442.97	4.2	0.0094	
№2土壌埋没層中心		21G-4	442.27	5.8	0.0130	
№2土壌埋没層中心		21G-5	442.97	5.2	0.0116	
2号土壌	№2土壌埋没層土壌	21G-6	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-7	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-8	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-9	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-10	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-11	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-12	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-13	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-14	442.97	5.2	0.0116	
	№2土壌埋没層土壌	21G-15	442.97	5.2	0.0116	
2号埋没層中心土壌	№2土壌埋没層中心	21P-1	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-2	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-3	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-4	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-5	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-6	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-7	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-8	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-9	426.17	18.5	0.0432	
	№2土壌埋没層中心	21P-10	426.17	18.5	0.0432	

表1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率 (1-1・2)

埋設土器、3号屋外埋設土器および4号屋外埋設土器で約0.026%と対照区土壌の0.005%に比べ5倍近く高い値であった。しかし基壇と認定する際のPの値は、対照区土壌に比べ100倍以上高い必要がある。

これらの結果を総合すると、土壌の無機成分から埋設土器を裏棺と認定する有力な情報は得られなかった。

3 残存脂肪の抽出

各試料に3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波発生浴槽中で30分間処理する。石器および石製品は、予めクロロホルム-メタノール混液で表面を洗浄してから抽出溶液に浸漬して超音波処理した。超音波抽出を3回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶剤に1%塩化バリウムを全抽出溶剤の4分の1容量加えて、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1-1~1-5に示す。抽出率は1号配石遺構埋設土器で0.0031~0.0259%、平均0.0082%、1号屋外埋設土器で0.0008~0.0263%、平均0.0031%、2号配石遺構埋設土器で0.0012~0.0421%、平均0.0088%、2号土壌で0.0009~0.0019%、平均0.0015%、3号屋外埋設土器で0.0018~0.0117%、平均0.0039%、3号土壌で0.0005~0.0079%、平均0.0015%、4号屋外埋設土器で0.0015~0.0032%、平均0.0026%、4号土壌で0.0003~0.0036%、平均0.0014%、5号土壌で0.0014~0.0057%、平均0.0029%、6号配石遺構伏壘で0.0012~0.0032%、平均0.0020%、6号屋外埋設土器で0.0006~0.0016%、平均0.0011%、6号土壌で0.0007~0.0030%、平均0.0015%、8号配石遺構埋壘で0.0008~0.0178%、平均0.0033%、9号土壌で0.0005~0.0030%、平均0.0016%、10号土壌で0.0008~0.0021%、平均0.0014%、23号配石遺構埋壘①で0.0015~0.0226%、平均0.0078%、23号配石遺構埋壘②で0.0021~0.0048%、平均0.0029%、24号配石遺構先端部埋壘で0.0013~0.0032%、平均0.0021%、対照区土壌で0.0002~0.0025%、平均0.0010%であった。全遺構の抽出率の平均は0.0010~0.0088%であり、この値は、秋田県大湯環状列石周辺遺跡から出土した裏棺⁽⁹⁾の平均0.0360%や静岡県原川遺跡から出土した土器⁽⁹⁾の平均0.0570%と比較して約0.05~0.09倍低かったが、分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。脂質クラスはグリセロールと脂肪酸が結合したトリグリセリドから誘導されると推定される遊離脂肪酸が最も多く、次いでトリグリセリド、ステロールの順に多かった。この他に微量のステロールエステル、長鎖炭化水素も検出した。

4 残存脂肪の脂肪酸組成

埋設土器、標およびその制壁土、並びに土壌の残存脂肪から調製した脂肪酸⁽¹⁰⁾メチルエステルをガスクロマトグラフィーで分析した。脂肪酸メチルエステル

- (8) 中野益男、中国利壽：「配石遺構の土壌および裏棺土器に残存する脂肪の分析」、『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』、鹿角市教育委員会、1986、pp.113。
- (9) 中野益男、堀口 剛、福島道広、中野寛子、長田正実：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡』、制壁岡遺跡文化財調査研究所、1988、pp.79。
- (10) M.Nakano and W.Fischer:『The Glycolipids of (*Lactobacillus casei*) DSM 20021』、『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem. J. 358巻、1977、pp.1439。

表 1-3 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料	産地	試料 No.	重量 (g)	抽出量 (mg)	抽出率 (%)
1号土壌	№1土壌抽出土壌	1-GS-1	338.20	23.0	0.008
	№2土壌抽出土壌	1-GS-2	305.30	33.5	0.009
	№3土壌抽出土壌	1-GS-3	495.20	8.6	0.002
	№4土壌抽出土壌	1-GS-4	361.57	11.9	0.003
	№5土壌抽出土壌	1-GS-5	478.54	42.0	0.009
	№6土壌抽出土壌	1-GS-6	348.28	41.7	0.012
	№7土壌抽出土壌	1-GS-7	391.20	4.5	0.001
2号土壌	№8土壌抽出土壌	1-GS-8	395.58	3.8	0.001
	№9土壌抽出土壌	1-GS-9	484.20	24.0	0.005
	№10土壌抽出土壌	1-GS-10	487.27	26.9	0.006
	№11土壌抽出土壌	1-GS-11	399.80	26.8	0.007
	№12土壌抽出土壌	1-GS-12	362.85	22.5	0.006
	№13土壌抽出土壌	1-GS-13	361.28	26.2	0.007
	№14土壌抽出土壌	1-GS-14	302.26	24.2	0.008
3号土壌	№15土壌抽出土壌	1-GS-15	469.20	58.5	0.012
	№16土壌抽出土壌	1-GS-16	477.24	6.9	0.001
	№17土壌抽出土壌	1-GS-17	489.78	7.3	0.001
	№18土壌抽出土壌	1-GS-18	400.58	8.4	0.002
	№19土壌抽出土壌	1-GS-19	428.26	8.5	0.002
	№20土壌抽出土壌	1-GS-20	481.70	7.5	0.001
	№21土壌抽出土壌	1-GS-21	388.97	48.9	0.012
4号土壌	№22土壌抽出土壌	1-GS-22	477.88	21.0	0.004
	№23土壌抽出土壌	1-GS-23	374.18	18.6	0.005
	№24土壌抽出土壌	1-GS-24	527.80	17.0	0.003
	№25土壌抽出土壌	1-GS-25	392.48	30.5	0.008
	№26土壌抽出土壌	1-GS-26	380.88	33.0	0.009
	№27土壌抽出土壌	1-GS-27	513.80	40.5	0.008
	№28土壌抽出土壌	1-GS-28	361.88	9.0	0.002
5号土壌	№29土壌抽出土壌	1-GS-29	409.12	28.8	0.007
	№30土壌抽出土壌	1-GS-30	310.71	4.5	0.001
	№31土壌抽出土壌	1-GS-31	488.48	6.7	0.001
	№32土壌抽出土壌	1-GS-32	394.61	9.2	0.002
	№33土壌抽出土壌	1-GS-33	406.63	9.7	0.002
	№34土壌抽出土壌	1-GS-34	424.88	32.4	0.008
	№35土壌抽出土壌	1-GS-35	408.26	14.7	0.004
6号土壌	№36土壌抽出土壌	1-GS-36	482.80	42.0	0.009

表 1-4 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料	産地	試料 No.	重量 (g)	抽出量 (mg)	抽出率 (%)
1号土壌	№1土壌抽出土壌	1-GS-1	337.48	12.8	0.004
	№2土壌抽出土壌	1-GS-2	307.47	14.7	0.005
	№3土壌抽出土壌	1-GS-3	479.20	16.4	0.004
	№4土壌抽出土壌	1-GS-4	481.28	20.4	0.005
	№5土壌抽出土壌	1-GS-5	484.80	10.3	0.003
	№6土壌抽出土壌	1-GS-6	348.28	41.7	0.012
	№7土壌抽出土壌	1-GS-7	391.20	4.5	0.001
2号土壌	№8土壌抽出土壌	1-GS-8	395.58	3.8	0.001
	№9土壌抽出土壌	1-GS-9	484.20	24.0	0.005
	№10土壌抽出土壌	1-GS-10	487.27	26.9	0.006
	№11土壌抽出土壌	1-GS-11	399.80	26.8	0.007
	№12土壌抽出土壌	1-GS-12	362.85	22.5	0.006
	№13土壌抽出土壌	1-GS-13	361.28	26.2	0.007
	№14土壌抽出土壌	1-GS-14	302.26	24.2	0.008
3号土壌	№15土壌抽出土壌	1-GS-15	469.20	58.5	0.012
	№16土壌抽出土壌	1-GS-16	477.24	6.9	0.001
	№17土壌抽出土壌	1-GS-17	489.78	7.3	0.001
	№18土壌抽出土壌	1-GS-18	400.58	8.4	0.002
	№19土壌抽出土壌	1-GS-19	428.26	8.5	0.002
	№20土壌抽出土壌	1-GS-20	481.70	7.5	0.001
	№21土壌抽出土壌	1-GS-21	388.97	48.9	0.012
4号土壌	№22土壌抽出土壌	1-GS-22	477.88	21.0	0.004
	№23土壌抽出土壌	1-GS-23	374.18	18.6	0.005
	№24土壌抽出土壌	1-GS-24	527.80	17.0	0.003
	№25土壌抽出土壌	1-GS-25	392.48	30.5	0.008
	№26土壌抽出土壌	1-GS-26	380.88	33.0	0.009
	№27土壌抽出土壌	1-GS-27	513.80	40.5	0.008
	№28土壌抽出土壌	1-GS-28	361.88	9.0	0.002
5号土壌	№29土壌抽出土壌	1-GS-29	409.12	28.8	0.007
	№30土壌抽出土壌	1-GS-30	310.71	4.5	0.001
	№31土壌抽出土壌	1-GS-31	488.48	6.7	0.001
	№32土壌抽出土壌	1-GS-32	394.61	9.2	0.002
	№33土壌抽出土壌	1-GS-33	406.63	9.7	0.002
	№34土壌抽出土壌	1-GS-34	424.88	32.4	0.008
	№35土壌抽出土壌	1-GS-35	408.26	14.7	0.004
6号土壌	№36土壌抽出土壌	1-GS-36	482.80	42.0	0.009

表 1-5 試料の残存脂肪抽出量および抽出率

試料	産地	試料 No.	重量 (g)	抽出量 (mg)	抽出率 (%)
1号土壌	№1土壌抽出土壌	1-GS-1	337.48	12.8	0.004
	№2土壌抽出土壌	1-GS-2	307.47	14.7	0.005
	№3土壌抽出土壌	1-GS-3	479.20	16.4	0.004
	№4土壌抽出土壌	1-GS-4	481.28	20.4	0.005
	№5土壌抽出土壌	1-GS-5	484.80	10.3	0.003
	№6土壌抽出土壌	1-GS-6	348.28	41.7	0.012
	№7土壌抽出土壌	1-GS-7	391.20	4.5	0.001
2号土壌	№8土壌抽出土壌	1-GS-8	395.58	3.8	0.001
	№9土壌抽出土壌	1-GS-9	484.20	24.0	0.005
	№10土壌抽出土壌	1-GS-10	487.27	26.9	0.006
	№11土壌抽出土壌	1-GS-11	399.80	26.8	0.007
	№12土壌抽出土壌	1-GS-12	362.85	22.5	0.006
	№13土壌抽出土壌	1-GS-13	361.28	26.2	0.007
	№14土壌抽出土壌	1-GS-14	302.26	24.2	0.008
3号土壌	№15土壌抽出土壌	1-GS-15	469.20	58.5	0.012
	№16土壌抽出土壌	1-GS-16	477.24	6.9	0.001
	№17土壌抽出土壌	1-GS-17	489.78	7.3	0.001
	№18土壌抽出土壌	1-GS-18	400.58	8.4	0.002
	№19土壌抽出土壌	1-GS-19	428.26	8.5	0.002
	№20土壌抽出土壌	1-GS-20	481.70	7.5	0.001
	№21土壌抽出土壌	1-GS-21	388.97	48.9	0.012
4号土壌	№22土壌抽出土壌	1-GS-22	477.88	21.0	0.004
	№23土壌抽出土壌	1-GS-23	374.18	18.6	0.005
	№24土壌抽出土壌	1-GS-24	527.80	17.0	0.003
	№25土壌抽出土壌	1-GS-25	392.48	30.5	0.008
	№26土壌抽出土壌	1-GS-26	380.88	33.0	0.009
	№27土壌抽出土壌	1-GS-27	513.80	40.5	0.008
	№28土壌抽出土壌	1-GS-28	361.88	9.0	0.002
5号土壌	№29土壌抽出土壌	1-GS-29	409.12	28.8	0.007
	№30土壌抽出土壌	1-GS-30	310.71	4.5	0.001
	№31土壌抽出土壌	1-GS-31	488.48	6.7	0.001
	№32土壌抽出土壌	1-GS-32	394.61	9.2	0.002
	№33土壌抽出土壌	1-GS-33	406.63	9.7	0.002
	№34土壌抽出土壌	1-GS-34	424.88	32.4	0.008
	№35土壌抽出土壌	1-GS-35	408.26	14.7	0.004
6号土壌	№36土壌抽出土壌	1-GS-36	482.80	42.0	0.009

表 1 試料の残存脂肪抽出量および抽出率 (1-3~5)

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

表2-1 1号配石遺構埋設土器に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1YF-1	8.32	34.37	0.242
1YF-2	11.94	34.24	0.348
1YF-3	12.58	44.40	0.283
1YF-4	1.39	46.80	0.297
1YF-5	2.32	34.54	0.207
1YF-6	0.47	41.88	0.110
1YF-7	0.58	17.81	0.258

表2-3 2号配石遺構埋設土器および2号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
2号配石遺構埋設土器			
2YF-1	14.58	36.77	0.396
2YF-2	5.91	31.85	0.182
2YF-3	24.42	39.28	0.620
2YF-4	10.36	7.76	1.333
2YF-5	8.98	31.18	0.422
2YF-6	4.18	46.79	0.120
2YF-7	8.43	46.77	0.180
2号土壌			
2GS-1	14.18	40.71	0.640
2GS-2	36.55	19.16	1.906
2GS-3	21.80	36.70	1.248
2GS-4	46.40	40.70	0.267
2GS-5	14.77	36.70	0.402

表2-4 3号埋外埋設土器および3号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
3号埋外埋設土器			
3YF-1	16.85	14.85	1.136
3YF-2	25.56	18.96	1.349
3YF-3	7.25	53.40	0.137
3YF-4	22.37	14.54	1.540
3YF-5	6.51	45.42	0.142
3YF-6	14.11	18.54	0.699
3YF-7	15.08	42.96	0.350
3号土壌			
3GS-1	6.25	46.47	0.135
3GS-2	8.47	42.86	0.207
3GS-3	16.81	10.26	1.609
3GS-4	22.37	16.76	1.337
3GS-5	10.36	12.39	0.837
3GS-6	11.51	16.13	0.714
3GS-7	16.80	16.24	1.034
3GS-8	42.81	21.42	1.996
3GS-9	16.71	10.20	1.637
3GS-10	16.43	4.70	3.500

表2-6 5号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
5GS-1	7.80	46.51	0.167
5GS-2	10.74	14.49	0.741
5GS-3	14.82	44.11	0.336
5GS-4	12.19	43.42	0.281
5GS-5	16.25	19.74	0.824
5GS-6	10.32	45.29	0.228
5GS-7	3.38	71.70	0.047

表2-2 1号埋外埋設土器に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1YF-1	13.98	36.80	0.379
1YF-2	15.92	36.70	0.434
1YF-3	17.33	36.90	0.469
1YF-4	17.47	37.30	0.468
1YF-5	6.30	46.70	0.135
1YF-6	2.30	46.90	0.049
1YF-7	4.30	34.18	0.126
1YF-8	12.88	36.90	0.349
1YF-9	42.11	11.69	3.607
1YF-10	4.43	42.38	0.105
1YF-11	10.16	34.13	0.298
1YF-12	15.52	36.47	0.426
1YF-13	1.70	46.40	0.037
1YF-14	7.22	34.17	0.212
1YF-15	4.54	34.18	0.133
1YF-16	21.22	44.45	0.280
1YF-17	4.42	41.19	0.108
1YF-18	15.20	34.27	0.444
1YF-19	3.43	34.30	0.100
1YF-20	7.40	41.42	0.179
1YF-21	6.58	41.41	0.159
1YF-22	4.73	44.30	0.107
1YF-23	10.33	41.40	0.250
1YF-24	12.13	34.88	0.348
1YF-25	7.48	37.37	0.200
1YF-26	4.46	46.80	0.095
1YF-27	5.75	41.92	0.137
1YF-28	7.95	40.93	0.194
1YF-29	10.45	44.58	0.234

表2-5 4号埋外埋設土器および4号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
4号埋外埋設土器			
4YF-1	22.22	44.40	0.500
4YF-2	0.48	42.57	0.011
4YF-3	14.84	42.27	0.351
4YF-4	7.80	34.11	0.229
4YF-5	20.23	44.80	0.451
4YF-6	2.26	35.74	0.063
4YF-7	14.55	41.33	0.352
4号土壌			
4GS-1	46.25	11.84	3.906
4GS-2	46.02	10.28	4.500
4GS-3	16.76	37.58	0.446
4GS-4	10.81	31.74	0.340
4GS-5	11.97	36.81	0.325
4GS-6	11.81	46.48	0.254
4GS-7	43.25	46.61	0.928
4GS-8	26.83	32.59	0.823

表2-7 6号配石遺構に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試品名	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
6YF-1	5.30	48.80	0.109
6YF-2	15.73	42.18	0.373
6YF-3	1.50	34.49	0.044
6YF-4	4.40	37.30	0.118
6YF-5	14.70	33.48	0.439
6YF-6	1.72	46.42	0.037
6YF-7	1.70	36.38	0.047
6YF-8	5.21	36.54	0.143
6YF-9	4.18	34.19	0.120
6YF-10	7.81	44.45	0.176
6YF-11	16.45	52.23	0.315

表2 コレステロールとシトステロールの割合 (2-1~7)

4章 自然科学的分析

表2-8 6号層外埋設土器および6号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
4号層外埋設土器			
4YF-1	15.22	24.29	0.444
4YF-2	15.44	24.89	0.382
4YF-3	5.80	22.51	0.182
4YF-4	4.76	25.41	0.264
4YF-5	5.71	21.12	0.249
4YF-6	5.71	20.37	0.192
4Y5-1	5.50	22.47	0.185
4Y5-2	2.52	45.39	0.054
4Y5-3	14.76	41.47	0.340
4Y5-4	14.54	40.37	0.360
4Y5-5	5.22	38.17	0.078
6号土壌			
6GS-1	7.26	30.59	0.141
6GS-2	4.42	27.20	0.162
6GS-3	5.97	32.41	0.090
6GS-4	22.20	40.30	0.398
6GS-5	11.49	35.29	0.197
6GS-6	2.74	26.40	0.072
6GS-7	19.49	41.76	0.224
6GS-8	23.20	38.76	0.994
6GS-9	14.12	25.18	0.560

表2-10 9号土壌および10号土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
9号土壌			
9GS-1	11.12	42.84	0.260
9GS-2	17.26	28.91	0.444
9GS-3	8.88	41.20	0.214
9GS-4	4.05	48.28	0.084
9GS-5	4.29	28.09	0.267
9GS-6	15.02	41.90	0.259
9GS-7	4.26	42.03	0.122
9GS-8	8.14	44.65	0.180
9GS-9	7.12	27.22	0.121
9GS-10	8.25	48.77	0.166
9GS-11	5.96	37.70	0.159
9GS-12	15.21	36.81	0.380
9GS-13	14.43	35.34	0.261
9GS-14	8.12	43.69	0.189
10号土壌			
10GS-1	4.12	47.45	0.081
10GS-2	11.20	44.29	0.250
10GS-3	5.54	44.41	0.124
10GS-4	12.20	45.22	0.198
10GS-5	5.97	34.94	0.086
10GS-6	10.14	25.14	0.200

表2-12 24号配石遺構先端部埋込に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
24IS-1	4.26	26.72	0.111
24IS-2	5.96	30.12	0.090
24IS-3	4.26	24.51	0.250
24IS-4	5.09	22.53	0.091
24IS-5	4.52	26.51	0.167
24IS-6	2.91	40.54	0.060

表2-9 8号配石遺構埋込に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
8YF-1	13.18	24.77	0.530
8YF-2	15.40	30.49	0.386
8YF-3	12.22	24.26	0.267
8YF-4	11.87	25.54	0.472
8Y5-1	4.49	20.54	0.092
8Y5-2	5.82	42.10	0.137
8Y5-3	8.92	40.49	0.220
8Y5-4	5.11	20.25	0.108
8Y5-5	6.76	41.18	0.118

表2-11 23号配石遺構埋込①および埋込②に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
埋込①			
23D-1	8.24	24.11	0.373
23D-2	1.28	44.82	0.024
23D-3	2.26	34.84	0.065
23D-4	4.26	49.24	0.080
23D-5	4.42	46.51	0.090
23D-6	3.42	39.24	0.080
埋込②			
23D-7	7.24	44.20	0.164
23D-8	7.42	41.20	0.180
23D-9	8.80	24.96	0.240
23D-10	9.14	45.05	0.200
23D-11	9.74	42.24	0.230
23D-12	4.17	36.20	0.074
23D-13	5.21	45.74	0.110
23D-14	4.49	30.18	0.091

表2-13 1号層外埋設土器・2号土壌・3号層外埋設土器周辺標準土壌に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1号層外埋設土器周辺標準土壌			
1SL-9	8.01	21.24	0.384
1SL-10	13.89	41.21	0.231
1SL-11	11.49	42.71	0.240
1SL-12	7.24	35.43	0.227
2号土壌周辺標準土壌			
2SL-1	27.06	21.98	1.234
2SL-2	22.18	14.42	0.815
2SL-3	15.02	4.26	0.354
2SL-4	3.12	1.87	0.264
3号層外埋設土器周辺標準土壌			
3SL-5	4.52	42.42	0.104
3SL-6	12.26	24.22	0.213
3SL-7	24.20	17.79	1.360
3SL-8	42.41	12.42	2.443

表2 コレステロールとシトステロールの割合 (2-8~13)

は次のようにして調製した。残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図4-1～4-31に示す。残存脂肪から13種類の脂肪酸を抽出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ペヘン酸(C22:0)、エルシン酸(C22:1)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)の11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

1号配石遺構出土土器試料および土壌試料(No.1 HP-1～No.1 HP-3、No.1 HS-1～No.1 HS-4)では主要な脂肪酸はパルミチン酸、オレイン酸およびパルミトレイン酸であった。特に、中級飽和脂肪酸は、約26～43%分布していた(図4-1)。試料No.1 HP-1では、高等動物の脳、臓器、胎盤、神経組織、血液中に多量に含まれている高級脂肪酸のペヘン酸、リグノセリン酸が約17%分布し、高等動物の存在を示唆した(図4-1)。1号屋外埋設土器および土壌試料(No.1 YP-1～No.1 YP-16、No.1 YS-1～No.1 YS-13)では、先に示した1号配石遺構の脂肪酸組成とほぼ同様の脂肪酸組成パターンを示した(図4-2～4-6)。しかし試料No.1 YP-3～No.1 YP-9およびNo.1 YP-11～No.1 YP-13では、パルミチン酸、オレイン酸の他にステアリン酸も主要脂肪酸として高い分布割合を示した。また高級脂肪酸の分布割合が高く、特に試料No.1 YP-3で約27%分布しており、他の試料でも約10～15%と全般的に高い値であった。2号配石遺構試料No.2 HS-1～No.2 HS-4とNo.2 HP-1～No.2 HP-3では主要な残存脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸およびオレイン酸であった。その中でパルミトレイン酸は土壌試料No.2 HS-1～No.2 HS-4で約26～30%近くを占めていた(図4-7)。2号土壌試料No.2 GS-1～No.2 GS-4とNo.2 GR-1についても同様なパターンを示した(図4-8)。また試料No.2 GS-1～No.2 GS-4でパルミトレイン酸が25%以上と比較的高い値にあり、前記した遺構および土壌と同様であった。パルミトレイン酸はオレイン酸が地下埋蔵中に一部酸化分解を受けて生成したと考えられる。従って周辺遺構にはオレイン酸が多く分布していたと考えられ、オレイン酸は動物体に多く含まれることから、これらの遺構、土壌には動物性遺体が存在していた可能性が高い。試料No.2 GR-1の礫ではパルミトレイン酸が約12%分布しており、土壌試料とは異なっていた。3号屋外埋設土器についてみると、土器試料No.3 YP-1およびNo.3 YP-2ではパルミチン酸が主成分であるのに対して、土壌試料No.3 YS-1およびNo.3 YS-2ではパルミトレイン酸が約33%以上分布していた。また試料No.3 YS-1～No.3 YS-5では高級脂肪酸が約8～14%分布していた(図4-9)。3号土壌土壌10試料ではNo.3 GS-6を除いてパルミチン酸が主要成分であった。土壌試料No.3 GS-6ではパルミトレイン酸が主成分であった(図4

-10・11)。4号屋外埋設土器試料No.4 YP-1およびNo.4 YP-2はステアリン酸、パルミチン酸が主成分であるのに対し、土壌試料No.4 YS-1～No.4 YS-5ではパルミチン酸、パルミトレイン酸およびオレイン酸が主であった(図4-12)。4号土壌についてもオレイン酸、パルミチン酸が主成分で全脂肪酸の約60～70%近く分布していた。また高級脂肪酸はほとんど検出されなかった(図4-13)。5号土壌土壌7試料(No.5 GS-1～No.5 GS-7)では、主にパルミチン酸が約25～40%と多く分布しており、その他に高級脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸が約10～17%と比較的高い分布値を示し、動物性遺体の存在を示唆した(図4-14)。6号配石遺構伏室では土器5試料(No.6 HP-1～No.6 HP-5)でパルミチン酸が約40%前後分布し、主成分を占めた。土壌6試料(No.6 HS-1～No.6 HS-6)では、パルミトレイン酸、パルミチン酸、オレイン酸の順に分布していた(図4-15・16)。高級脂肪酸についてはほとんど検出されなかった。6号屋外埋設土器では土壌4試料(No.6 YS-1、No.6 YS-2、No.6 YS-4、No.6 YS-5)でパルミチン酸、パルミトレイン酸が主要脂肪酸であったが、土器試料では高級脂肪酸が多く、とくにNo.6 YS-3、No.6 YP-4およびNo.6 YP-5では約24～34%分布していた(図4-17・18)。6号土壌もすべての試料でパルミチン酸が最も多く分布していた。その他に、とくに土壌上面から底面の土壌試料No.6 GS-1～No.6 GS-6は高級脂肪酸であるベヘン酸、リグノセリン酸が約13～16%分布し、土壌中に高等動物が存在していた可能性を示唆した(図4-19・20)。8号配石遺構についてみると、土壌試料(No.8 HS-1～No.8 HS-5)ではパルミチン酸、パルミトレイン酸が主成分であったのに対し、土器試料(No.8 HP-1～No.8 HP-4)ではパルミチン酸が約40～60%と高い分布値を示した(図4-21・22)。9号土壌14試料(No.9 GS-1～No.9 GS-14)および10号土壌6試料(No.10 GS-1～No.10 GS-6)についても同様な脂肪酸組成を示し、その中で9号土壌中面土壌No.9 GS-4、No.9 GS-5および底部面土壌No.9 GS-8、No.9 GS-10は高級脂肪酸が約15%前後とかなり高い割合で検出された(図4-23～25)。23号配石遺構埋室①および②でもパルミチン酸が主成分の同様な脂肪酸パターンを示したが、高級脂肪酸が約20%前後と全体的に高く、動物脂肪が付着していた可能性が高い(図4-26・27)。24号配石遺構・先端部埋室土壌試料(No.24 HS-1～No.24 HS-6)でも23号配石遺構と同様なパターンであった(図4-28)。対照区土壌12試料(No. BL-1～No. BL-12)では、No. BL-6、No. BL-9を除いてパルミチン酸が主成分を占め、次いでパルミトレイン酸、オレイン酸の順であった。高級脂肪酸はほとんど検出されなかった(図4-29～31)。

以上、脂肪酸組成を比較すると、対照区土壌と同様に各遺構および土壌では、パルミチン酸が多く分布していた。土壌試料中にパルミチン酸が多いのは脂肪の分解が進んでいる遺跡や加熱の影響を受けている遺跡でよく見られる現象である。本遺構の場合は焼土が見られないことから熱変性よりも脂肪酸の分解が

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

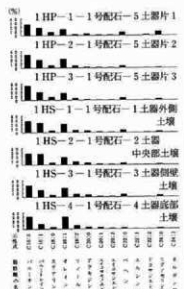


図4-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

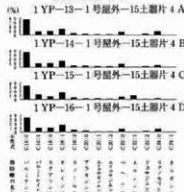


図4-4 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

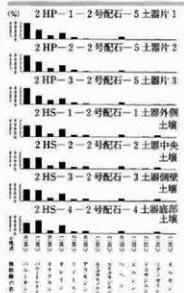


図4-7 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

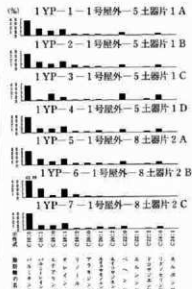


図4-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

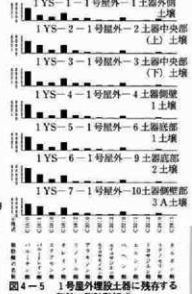


図4-5 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

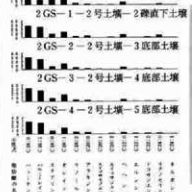


図4-8 2号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成

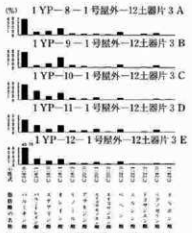


図4-3 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

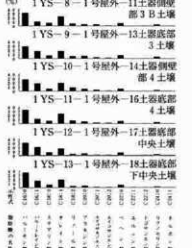


図4-6 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

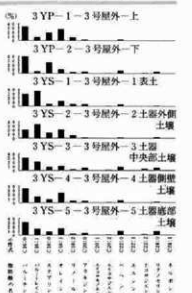


図4-9 3号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-1~9)

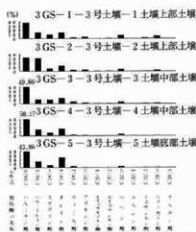


図4-10 3号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

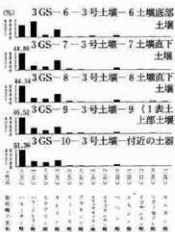


図4-11 3号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

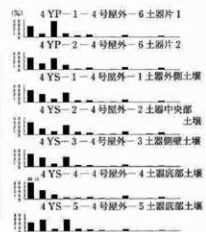


図4-12 4号屋外埋設土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

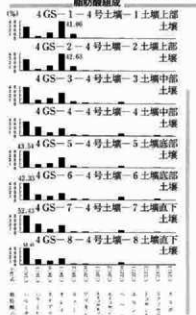


図4-13 4号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

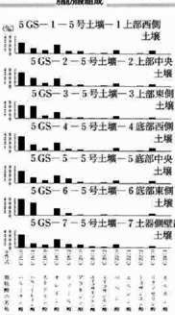


図4-14 5号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

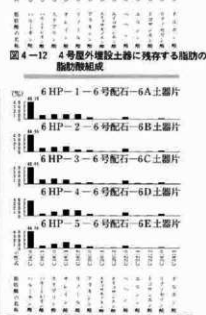


図4-15 6号配石遺構伏壁に残存する脂肪の脂肪酸組成

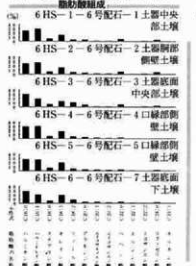


図4-16 6号配石遺構伏壁に残存する脂肪の脂肪酸組成

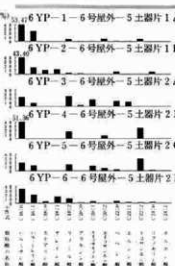


図4-17 6号屋外埋設土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

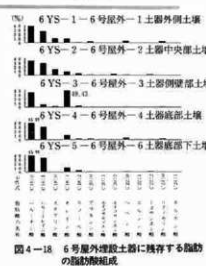


図4-18 6号屋外埋設土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-10~18)

(1) 田原中原道跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

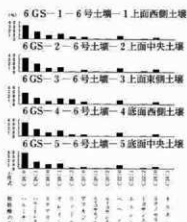


図4-19 6号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成

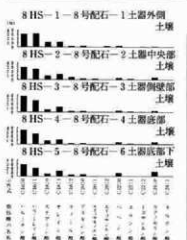


図4-22 8号配石遺構埋設に残存する脂肪の脂肪酸組成

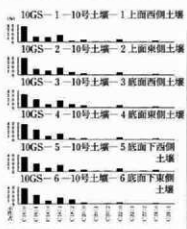


図4-25 10号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成

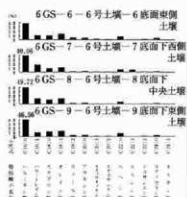


図4-20 6号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成

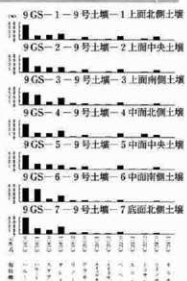


図4-23 9号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成



図4-26 23号配石遺構埋設①に残存する脂肪の脂肪酸組成

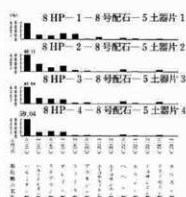


図4-21 8号配石遺構埋設に残存する脂肪の脂肪酸組成

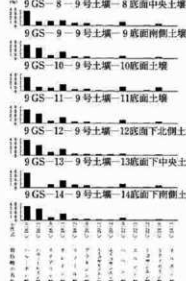


図4-24 9号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成

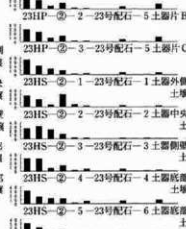


図4-27 23号配石遺構埋設②に残存する脂肪の脂肪酸組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-19~27)

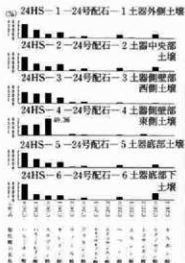


図4-28 24号配石遺構先端部壁面に残存する脂肪の脂肪酸組成

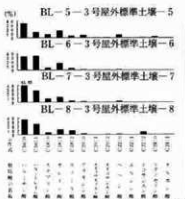


図4-31 3号屋外埋設土器周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

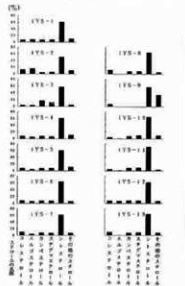


図4-3 1号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

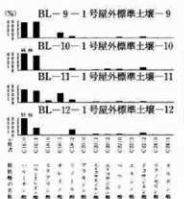


図4-29 1号屋外埋設土器周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

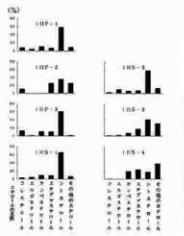


図5-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

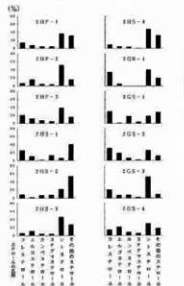


図5-4 2号配石遺構埋設土器および2号土壌に残存する脂肪のステロール組成

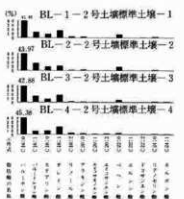


図4-30 2号土壌周辺標準土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

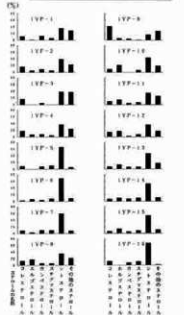


図5-2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

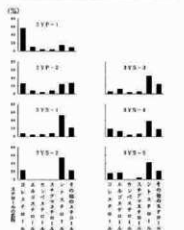


図5-5 3号屋外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

図4 残存する脂肪の脂肪酸組成 (4-28~31)

図5 残存する脂肪のステロール組成 (5-1~5)

進んでいる可能性が高い。しかし、脂肪酸の分解が進んでいる遺構であっても、埋設土器周辺および土壌土壌の残存脂肪酸組成は明確に遺構外土壌のそれと様相を異にしていた。

5 残存脂肪のステロール組成

土器および土壌に残存する脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセチート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーおよびガスクロマトグラフィー—質量分析で分析、同定した。

試料の残存ステロール組成を図5-1～5-16に示す。残存脂肪から7～11種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールを同定した。コレステロールは動物、エルゴステロールは微生物、カンベステロールは穀類、シトステロールは植物一般に特異的にみられるステロールである。従って、これらのステロールの占める相対比は、動物植物起源の指標となる。コレステロールの分布割合が比較的高い値を示したのは、1号屋外埋設土器試料No.1 YP-9 (約43%)、2号配石遺構、2号土壌、3号屋外埋設土器、3号土壌中部土壌試料 (約30～60%)、4号屋外埋設土器試料No.4 YP-1および土器内付着土壌試料No.4 YS-3、No.4 YS-5 (約20～35%)、4号土壌上部および底部直下土壌 (約20～60%)、10号土壌底部土壌試料No.10 GS-6 (約51%)であり、動物性遺体の存在を示唆した。また、1号配石遺構土器 (No.1 HP-2およびNo.1 HP-3)、6号屋外埋設土器3試料 (No.6 YS-3～No.6 YS-5)、6号土壌内土壌試料 (No.6 GS-4、No.6 GS-5、No.6 GS-7～No.6 GS-9)、8号配石遺構埋壘 (No.8 HP-1～No.8 HP-4) および9号土壌内土壌 (No.9 GS-2、No.9 GS-6、No.9 GS-12、No.9 GS-13) では、コレステロールが約10～15%前後と通常の土壌中に分布するコレステロール含量5%前後にくらべて2～3倍高い値を示した。このことは、動物脂肪がわずかではあるが残存していた可能性を示す。その他の遺構、屋外埋設土器および土壌では、コレステロールが5～10%前後分布していたが、シトステロールが約40～60%近く分布し、植物腐植の傾向を示した。対照区土壌試料では一部コレステロールが約40%前後と高い分布値を示したが、これは遺構周辺土壌の攪乱により異種脂肪が混入してきた可能性が高く、元来土壌中に存在していた成分とは考え難い。

一般に墓塚試料から得られた動物遺物の存在を示唆するコレステロールとシトステロール比の指標値は0.6以上である^(11・12・13)。従って、表2に見られるように、先に示したコレステロールの分布割合の高い試料では、ステロール比も0.525～5.459と高い値で分布していた。動物脂肪の痕跡がみられる1号配石遺構、5号土壌、6号屋外埋設土器、6号土壌、8号配石遺構および9号土壌では、ステロール比0.316～0.7133と動物脂肪または動物脂肪と植物脂肪が混合している値を示した。それ以外の6号配石遺構、23号配石遺構および24号配石遺構ではステ

60 中野益男、伊賀 啓、根岸季、安本敦博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 輝：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質化学研究』、第26巻、1984、pp 40。

61 中野益男、有賀裕子、根岸季、安本敦博、佐原 真。

- 田中 輝：「動物分析と考古学—その活用と問題点について—」、『動物化学研究』、第27巻、1985、pp.41。
- 03 中野益男、伊賀 啓、和気清彦、櫻原 孝、安本教博、西本豊弘、佐原 真、田中輝：「古代遺跡から出土した獣骨、骨角器に遺存する脂質について」、『動物化学研究』、第25巻、1983、pp.256。
- 04 中野益男、中岡利幸、福島道広、中野寛子、長田正宏：「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胎衣の残存脂質について」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』、奈良市教育委員会、1989、pp.5。

ロール比0.078~1.784と低い値であった。対照区土壌では一部のステロール比が1.386~10.690と動物遺体の存在を示す値を検出した。これは周辺遺構の擾乱による異種脂肪の混入によるものと推測される。

6 脂肪組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、その相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って、各試料間の類似度を調べた。その際、平城京跡出土胎衣壺とも比較した。各遺構、屋外埋設土器および土壇の樹状構造図を図6-1~6-17に示す。

1号配石遺構の樹状構造図(図6-1)を見ると、対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5およびNo. 1 HP-3は相関行列距離0.05以下でA₁群を、対照区土壌試料No. BL-11、No. 1 HP-1~No. 1 HP-2およびNo. 1 HS-1~No. 1 HS-3はA₂群、対照区土壌試料No. BL-6~No. BL-10およびNo. BL-12は、それぞれA₃、A₄群を形成した。土器底部土壌試料No. 1 HS-4は、平城京出土胎衣壺と相関行列距離0.1以下でA₅群を形成した。これは1号配石遺構出土土器に動物性の脂肪が微量ながら存在していた可能性を示す。

1号屋外埋設土器の樹状構造図(図6-2)を見ると、埋設土器土壌試料では、対照区土壌試料と相関行列距離0.05以下でB₁群、B₂群を形成し、同じ系統樹に属していたのに対して、埋設土器試料No. 1 YP-9およびNo. 1 YP-3は、それぞれ平城京跡胎衣壺とB₂群、B₃群を形成した。

2号配石遺構の樹状構造図(図6-3)を見ると、出土土器試料No. 2 HP-1~No. 2 HP-3は対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5およびNo. BL-7とC₁群を形成し、土壌試料No. 2 HS-1~No. 2 HS-4は対照区土壌試料No. BL-9およびNo. BL-11とC₂群を形成した。C₁群~C₂群は相関距離0.1で高い類似度を示し、平城京跡出土胎衣壺とは別種のものであった。

2号土壇の樹状構造図(図6-4)を見ると、土壇内土壌試料No. 2 GS-1~No. 2 GS-4はD₁群を形成した。礫試料No. 2 GR-1は対照区土壌試料No. BL-1~No. BL-5と非常に近い距離でコロニーを形成した。しかし平城京跡出土胎衣壺とも相関行列距離0.1と近い相関を示し、D₁群を形成した。従って、礫には動物脂肪が付着していたことを示唆する。また、対照区土壌が同じ系統樹に属していたことから、異種脂肪が混入していた可能性が高い。

3号屋外埋設土器および3号土壇の樹状構造図(図6-5・6)を見ると、2号土壇の結果と同様、土壌試料は平城京跡出土胎衣壺とそれぞれE₁、F₁群を形成し、動物脂肪が存在していた可能性を示した。

4号屋外埋設土器の樹状構造図(図6-7)を見ると、対照区土壌はそれぞれG₁、G₂およびG₃群を形成し、埋設土器土壌はG₄群を形成した。しかし、いずれの群とも相関距離0.2以下と比較的近く、同種の系統樹に属していたのに対して、埋設土器試料No. 4 YP-1およびNo. 4 YP-2では他の群とは相関距離0.3以

[1] 田原中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

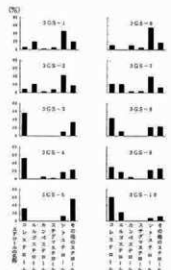


図5-6 3号土器に残存する脂肪のステロール組成

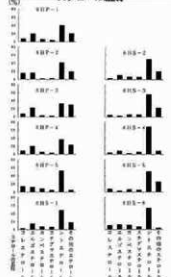


図5-9 6号配石遺構伏壁に残存する脂肪のステロール組成

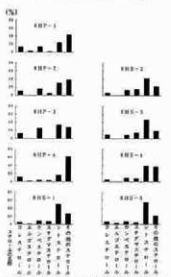


図5-12 8号配石遺構埋壁に残存する脂肪のステロール組成

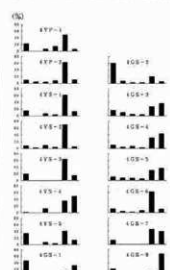


図5-7 4号層外埋設土器及び4号土器に残存する脂肪のステロール組成

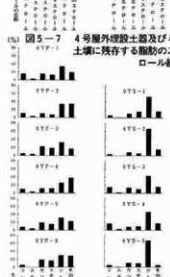


図5-10 6号層外埋設土器に残存する脂肪のステロール組成

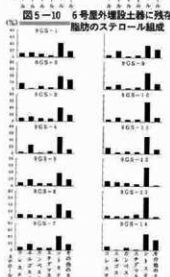


図5-13 9号土器に残存する脂肪のステロール組成

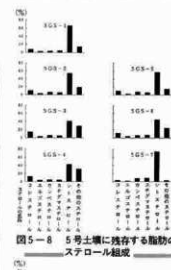


図5-8 5号土器に残存する脂肪のステロール組成

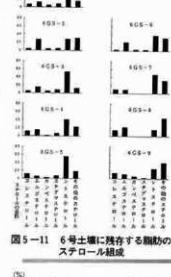


図5-11 6号土器に残存する脂肪のステロール組成

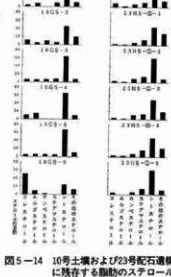


図5-14 10号土器および23号配石遺構埋壁①に残存する脂肪のステロール組成

4章 自然科学的分析

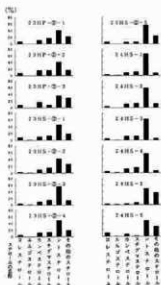


図5-15 23号配石遺構埋土および24号配石遺構先端部埋土に残存する脂肪のステロール組成

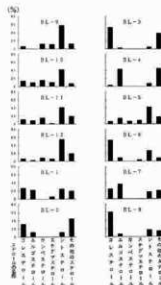


図5-16 1号壘外埋設土器、2号土墳および3号壘外埋設土器両辺埋土に残存する脂肪のステロール組成

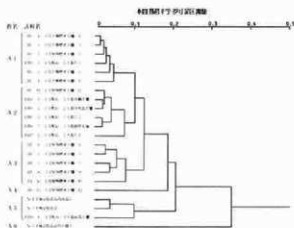


図6-1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

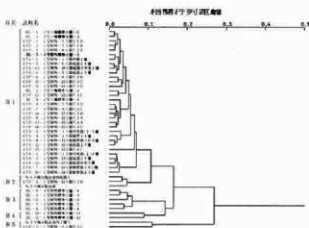


図6-2 1号壘外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

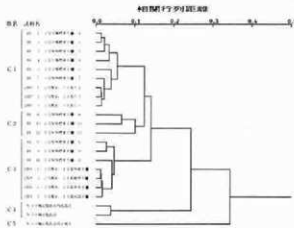


図6-3 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

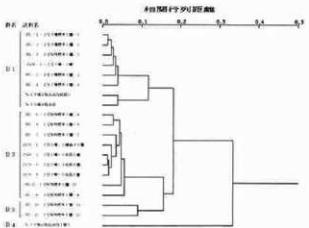


図6-4 2号土墳に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図5 残存する脂肪のステロール組成 (5-15・16)

図6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6-1~4)

[1] 田篠中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

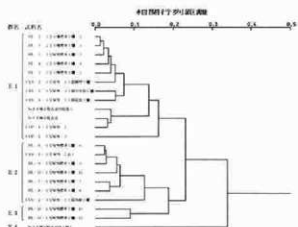


図6-5 3号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

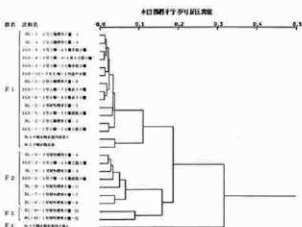


図6-6 3号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

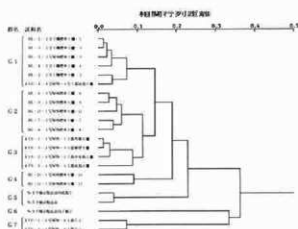


図6-7 4号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

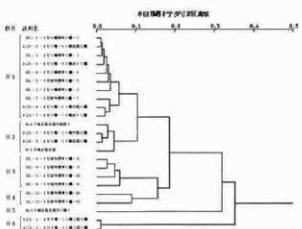


図6-8 4号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

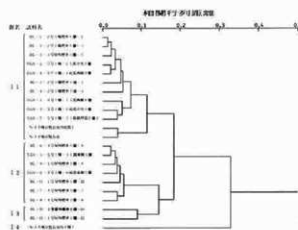


図6-9 5号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

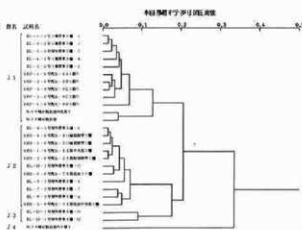


図6-10 5号配石遺構に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図6 残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 (6-5~10)

4章 自然科学的分析

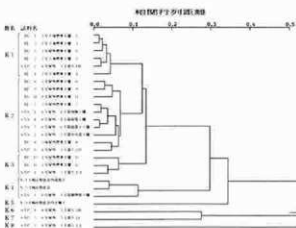


図 6-11 6号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

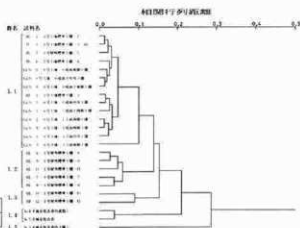


図 6-12 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

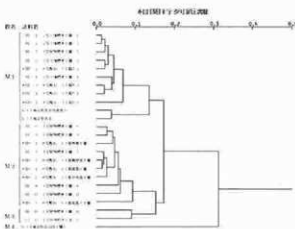


図 6-13 8号配石遺構埋壁に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

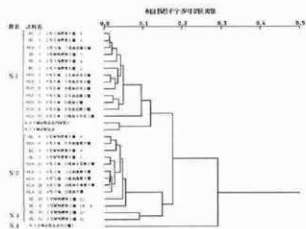


図 6-14 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

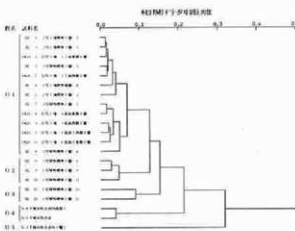


図 6-15 10号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

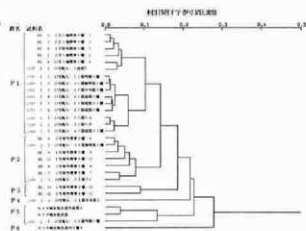


図 6-16 23号配石遺構埋壁に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

図 6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6-11~16)

上と離れてG₂群を形成し、別種の脂肪が付着していたことを示唆した。

4号土壌の樹状構造図(図6-8)を見ると、土壌試料№4GS-4及び№4GS-5は胞衣殻と相関距離0.05以下と非常に短く、H₂群を形成した。このことは土壌中に動物脂肪が存在していることを示唆する。また土壌上部土壌試料である№4GS-1および№4GS-2は、別の系統樹に属するH₁群を形成した。これは、土壌の層の違いにより、土壌の性質がかなり異なっていることを意味する。

1号配石遺構から4号土壌のクラスター分析の結果、平城京跡出土胞衣殻と類似度が高く、同質の脂肪酸組成をもつ1号配石遺構、1号屋外埋設土器、2号土壌、3号屋外埋設土器、3号土壌および4号土壌、胞衣殻と類似度が低く、異質の脂肪酸組成をもつ2号配石遺構および4号屋外埋設土器の2通りに分かれた。他の配石遺構、屋外埋設土器および土壌の樹状構造図(図6-9~6-17)について見ると、5号土壌、6号配石遺構、8号配石遺構、9号土壌および24号配石遺構では土壌試料および土器試料の脂肪が胞衣殻と同質の脂肪酸組成であり、6号屋外埋設土器、6号土壌、10号土壌および23号配石遺構は胞衣殻と異質の脂肪酸組成であった。しかし、その中で6号屋外埋設土器では土器側壁土壌試料№6YS-3だけが胞衣殻と相関行列距離0.1と類似性の高いコロニーを形成し、動物脂肪が残存していた傾向を示したが、土器試料№6YP-3~№6YP-5とは遠い距離にあり、土器には別種の脂肪が付着していた可能性がある。23号配石遺構についても№23HS-②-1だけが胞衣殻と近い距離にあった。また、各試料とも対照区土壌と近い距離にあり、遺跡周辺の土壌がかなり混在している可能性がある。従って、平城京胞衣殻と同じコロニーを形成した土器試料の1号屋外埋設土器、2号土壌出土際、6号配石遺構出土土器および8号配石遺構出土土器については、土器使用目的由来の脂肪が付着していた可能性が高い。

7 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪・骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

各配石遺構、屋外埋設土器および土壌の残存脂肪から求めた相関図を図7-1~7-17に示す。1号配石遺構について見ると、土器試料№1HP-3を含むA₁群が第2象限に分布し、動物脂肪の存在を示した(図7-1)。1号屋外埋設土

器では、B₅群が第1象限から第2象限にかけて分布した。埋設土器No.1 YP-3はB₅群を形成し第1象限の原点から離れた位置に分布した(図7-2)。2号配石遺構では出土土器No.2 HP-1~No.2 HP-3が第2象限に分布した。また土壌試料No.2 HS-1~No.2 HS-4については第2象限から第3象限にかけて分布し、植物腐植土を示した(図7-3)。2号土壌では、出土した鏝No.2 GR-1が第2象限に分布した以外、土壌試料No.2 GS-1~No.2 GS-4は植物腐植を示す位置に分布した(図7-4)。

その他の各遺構、屋外埋設土器および土壌について見ると(図7-5~7-17)、3号屋外埋設土器ではE₁群、3号土壌ではF₁群、4号屋外埋設土器ではG₁およびG₂群、4号土壌ではH₁およびH₂群が、それぞれ第2象限の原点から離れた位置に分布した。5号土壌ではI₁およびI₂群のすべての試料とも第2象限の原点に近い位置に分布し、植物腐植土が混流している可能性を示した。6号配石遺構では、すべての土器試料を含むJ₁群が第2象限に分布した。6号屋外埋設土器では土器試料が第2象限(K₁群)、第1象限の原点付近(K₂群)、第4象限(K₃群、K₄群)にそれぞれ分布していた。6号土壌および8号配石遺構ではL₁群およびM₁群が第2象限に分布していた。10号土壌のO₁群は第2象限から第3象限にかけて分布していた。9号土壌、23号配石遺構および24号配石遺構ではN₁群、P₁群およびQ₁群が第1象限から第2象限にかけて分布していた。この位置は奈良県平城京跡から出土した甕衣壺によく類似していた。これらの成績とクラスター分析およびステロール分析の結果を総合すると、1号配石遺構、2号土壌、3号土壌、4号土壌、6号土壌、8号配石遺構、9号土壌および10号土壌には動物遺体が埋納されていたと推測される。しかし、1号配石遺構、6号土壌、8号配石遺構、9号土壌および10号土壌では動物由来のコレステロールが約10%前後と低いことや、宮城県栗沢遺跡の再葬墓の脂肪酸分布とかなり高い類似性をもつことから、人体そのものを直接埋納した可能性は低い。とくに配石遺構群では第2象限に土器試料が分布していることから、土器内に高等動物由来の遺物を埋納した可能性も推察される。1号屋外埋設土器、2号配石遺構、3号屋外埋設土器、4号屋外埋設土器、6号配石遺構、23号配石遺構および24号配石遺構では、平城京跡出土甕衣壺と非常によく類似しており、埋設土器には動物由来の遺物が埋納されていたと推測される。5号土壌は動物脂肪の痕跡はみられたが、コレステロール含量が低いことから動物遺体の存在を断定することは困難であった。6号屋外埋設土器では、種特異性相関で第4象限に分布しており、動物性ステロールが少ないことから、異種の脂肪が混入した可能性が高い。しかし、その脂肪種については解明できなかった。

④ 中野益男、福島道広、長田正宏、中野寛子：「遺跡遺物の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。

〔1〕 田籾中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

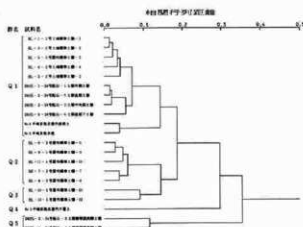


図6—17 24号配石遺構先端部埋設に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

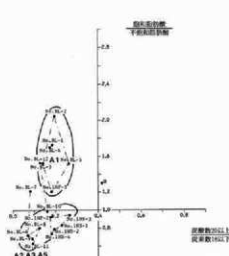


図7—1 1号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

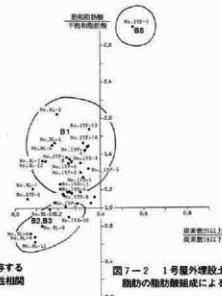


図7—2 1号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

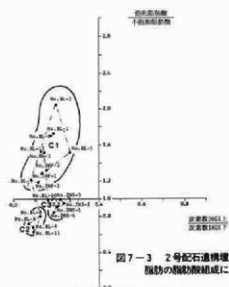


図7—3 2号配石遺構埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

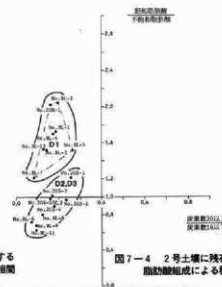


図7—4 2号土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

図6 残存する脂肪酸組成樹状構造図 (6—17)

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関 (7—1~4)

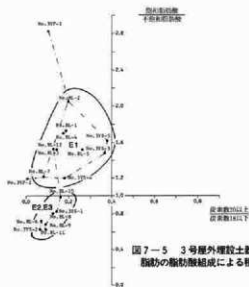


図7-5 3号層外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

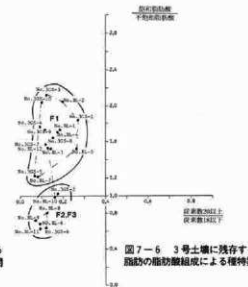


図7-6 3号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

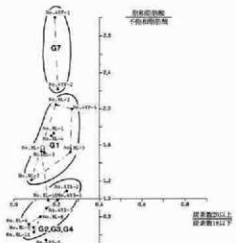


図7-7 4号層外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

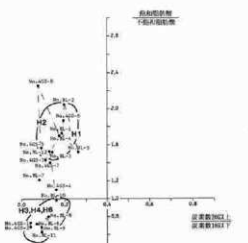


図7-8 4号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

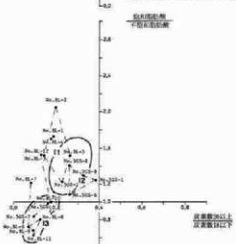


図7-9 5号土層に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

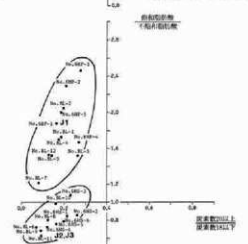


図7-10 6号配石遺構伏壁に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関 (7-5~10)

〔1〕 田羅中原遺跡の配石遺構群および埋設土器に残存する脂肪の分析

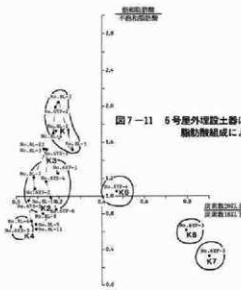


図7-11 6号屋外埋設土器に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



図7-12 6号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

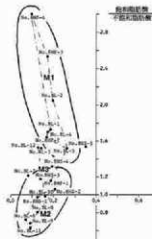


図7-13 8号配石遺構埋壁に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

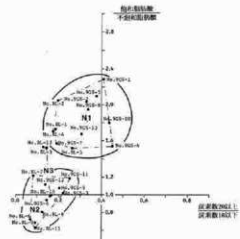


図7-14 9号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

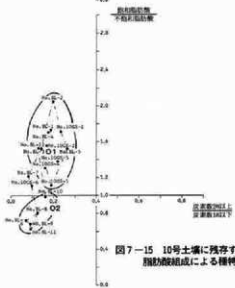


図7-15 10号土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関



図7-16 23号配石遺構埋壁に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 (7-11~16)

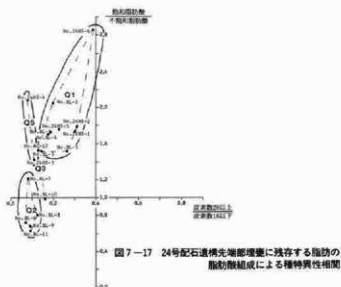


図7-17 24号配石遺構先端部埋壙に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

図7 残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関 (7-17)

8 総括

田篠中原道跡遺構群、屋外埋設土器および土壌試料に残存する脂肪を分析した。その結果、1号配石遺構、2号土壙、3号土壙、4号土壙、6号土壙、8号配石遺構、9号土壙および10号土壙は動物遺体が埋葬されていたと推測される。その中で6号土壙および10号土壙については、コレステロール含量が低く、土壌の流動または宮城県摺鉢遺跡から出土した再葬墓の脂肪酸分布とかなり高い類似性をもつことから、人体そのものを直接埋葬した可能性は低く、再葬墓の可能性が高い。

1号屋外埋設土器、2号配石遺構、3号屋外埋設土器、4号屋外埋設土器、6号配石遺構、23号配石遺構埋設土器①および24号配石遺構は平城京跡出土惣衣壺と非常によく類似していた。このことから埋設土器に高等動物の胎盤由来の遺物が存在していた可能性が高い。その他の土壙および埋設土器からは動物性脂肪を検出できなかった。土壙墓および埋設土器に埋葬、埋納されている動物種とくにヒトの認定については、この成績からだけでは判定できなかった。

現在、胎盤については哺乳動物の胎盤由来の糖脂質群の糖鎖を抗原抗体反応を用いる免疫学的手法により読み取って確認中である。

〔2〕田篠中原遺跡の縄文土器胎土分析

—X線回析試験及び電子顕微鏡観察—

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとうりである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10$ m/mの試料台にシルバーペーストで固定し、イオンズバックリング装置で定着した。

1-2 X線回析試験

土器胎土に含まれる粘度鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°, 計数時間: 0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35, 350, 750, 1500, 5000, の5段階で行い、写真撮影した。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとうりである。

第1表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に見える各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第1図(左)に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/Mo + Mi + Hb \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

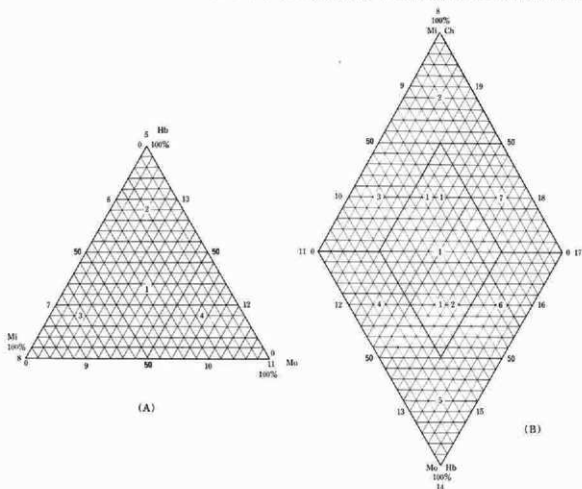
三角ダイアグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図(A)に示すとうりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第1図(B)に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)、



第1図 三角(A)・菱形(B)ダイアグラム位置図

のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Ch、の2成分が含まれない、
c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムは Mont-Ch、Mica-Hb の組み合わせを表示するものである。Mont-Ch、Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch \times 100と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺は Mo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第1図(B)に示すとうりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト(Mullite)は、磁気、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じである。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大きい文字を使用し、同

第1表 胎土性状表

90. 田羅中原遺跡 (群馬)

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物										ガラス	備考			
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch-Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	CH(Fe)	Ch(Mg)	Kaol	K-fels	Qt	Pl	Cr			Mu		
田羅中原-1	G	III~IV	14	20										1285	599			細粒	中粒の砂を混入する砕屑性粘土
2	E	III	7	20		146	98							2604	702			中粒	粗粒の砂を混入する砕屑性粘土
3	D	III~IV	7	9		244	203	177						2491	1319			細粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
4	D	III	7	9		307	162	410	205					2669	607			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
5	F	III~IV	8	20		144								1372	529			細粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
6	D	III	7	9		197	142	216						3655	718			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
7	D	III~IV	7	9		179	121	271	79					1994	511			細粒	粗粒の砂を混入する砕屑性粘土
8	A	III~IV	1	1	182	147	148	193						1598	797			細粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
9	C	III	9	10		136	163	141	74					2039	880			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
10	B	III	5	11				211	311					2338	888			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
11	D	III	7	9		222	123	428	100					1570	1785			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
12	E	III	7	20		250	143							2299	1103			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
13	D	III~IV	7	9		134	100	163						2335	811			細粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
14	D	III	7	9		257	170	302	84					1846	346			中粒	中粒の砂を混入する砕屑性粘土
15	D	III	7	9		192	105	322	104					2871	484			中粒	細粒の砂を混入する砕屑性粘土
16	D	III	7	9		307	172	336	101					2487	1177			中粒	粗粒の砂を混入する砕屑性粘土
原土-上層	D		7	9		332	280	356	665					2555	1359				
原土-下層	D		7	9		458	290	410	838					2767	1495				

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト Ha: ハロイサイト Au: 普通輝石

Hy: 葉綠輝石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cr: クリソプラーライト Mu: ムライト

じ組み合わせのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイヤグラムの1と菱形ダイヤグラムの1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの2と菱形ダイヤグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第2図(A)三角ダイヤグラム、第2図B菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Gの7タイプに分類された。

分析した土器は加曽利E3式とE4式の深鉢を主体とするもので、隣接する善慶寺早道場遺跡の土層断面より採取した原土と対比した。

分析結果によれば、土器16個のうち9個がDタイプの土器であり、全体の55%を占めている。個体数の多いことから推察して在地あるいは在地近傍の可能性が最も高いと判断される。事実、土層断面より採取した原土2個もDタイプであり、組成は一致しており、在地の可能性が高いことを裏付けている。Eタイプは2個、その他は各1個で構成されている。

電子顕微鏡によるガラスの分析では中粒のガラスが生成している焼成ランクがⅢのものは10個、細粒なガラスが生成している焼成ランクがⅢ～Ⅳのものが6個で、全体に焼成ランクⅢのものが多く、やや高い焼成環境を示している。次に各タイプについて述べる。

Aタイプ……田篠中原遺跡-8

Mont, Mica, Hb, Chの4成分を含む。個体数は1個である。
組成的にはCタイプに近いものである。

Bタイプ……田篠中原遺跡-10

Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。個体数は1個である。

Cタイプ……田篠中原遺跡-9

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。個体数は1個である。組成的にはDタイプと類似するがピーク強度が違うために、位置分類が異なっている。

Dタイプ……田篠中原遺跡-3、4、6、7、11、13、14、15、16

原土—上層、下層

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。個体数は9個で、原土とも同じ組成をしており、個体数の多いことから判断して在地あるいは在地近傍の可能性が最も高い。

Eタイプ……田篠中原遺跡-2、12

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。個体数は2個である。

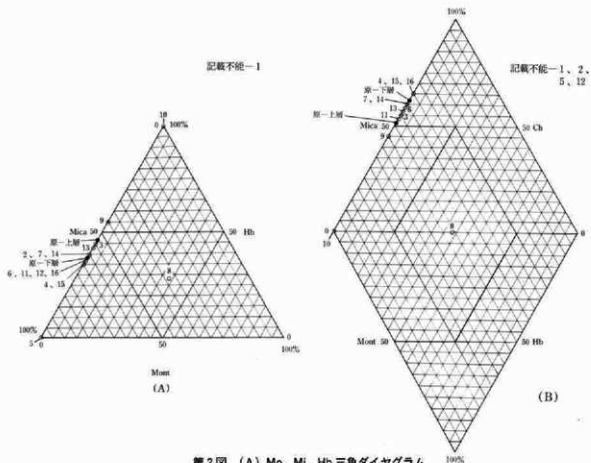
Fタイプ……田篠中原遺跡-5

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。個体数は1個である。胎土的には田篠中原遺跡においては異質のものである。

Gタイプ……田篠中原遺跡-1

Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。おもに、アルミナゲル ($n\text{Al}_2\text{O}_3\text{m}\cdot\text{SiO}_2\cdot\text{IH}_2\text{O}$) で構成される。個体数は1個であるが、他のものと比較して組成的には異質である。

分析した土器と原土を比較対比すると、組成的にはDタイプの土器が原土と一致し、在地あるいは在地近傍の可能性が最も高いと判断された。組成的に異質なものはFとGタイプであり、田篠中原遺跡-1、5は異質のものではなからうか。石英と斜長石の相関では田篠中原遺跡-1と5は共にグループを形成しており、このようなことから推察すると、田篠中原遺跡-1と5は他からの



第2図 (A) Mo, Mi, Hb 三角ダイヤグラム
(B) Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

搬入品である可能性が高い。これらの組成は埼玉県で比較的多く認められるものである。

3-2 石英(Qt)―斜長石(P1)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器製作上の個々の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えば、各地域における砂は各々個々の石英―斜長石比を有しているといえる。

この個々の比率を有する砂を、どの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する技術の一端である。

第3図石英―斜長石相関図には田篠中原遺跡の土器と埼玉県の将監塚遺跡の土器が記載してある。図からも明らかのように、I～VIIの7グループと“その他”に分類された。次に各グループについて述べる。

Iグループ……田篠中原遺跡-11、将監塚遺跡-11、24

斜長石の強度が高いことが特徴で、田篠中原遺跡の土器はDタイプの胎土で、将監塚遺跡の土器はこれに類似するタイプで構成されている。

IIグループ……田篠中原遺跡-3、12、16 将監塚遺跡-9、14、16、20、23

このグループは7個が集中するもので、田篠中原遺跡の土器は加曾利E3タイプで、胎土はDタイプのもので構成されるのが特徴である。原土に近く、直接原土を使用している可能性もある。また、将監塚遺跡の土器もDタイプの胎土で構成されている。

IIIグループ……将監塚遺跡-1、5、10、18、19

将監塚遺跡の土器だけで構成されるグループで、個体数は5個で、集中度もいい。

IVグループ……田篠中原遺跡-8、9、10

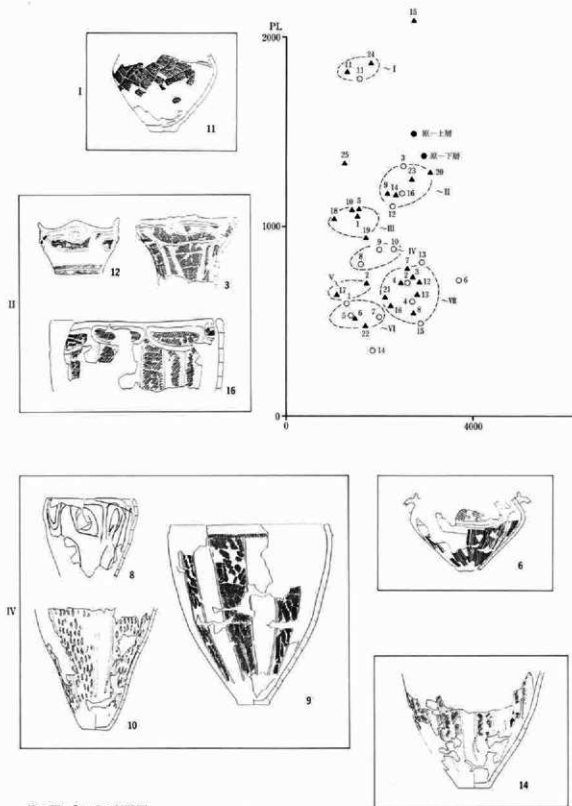
田篠中原遺跡の土器だけで構成されるグループで、加曾利E4式の土器が集中し、この土器で特徴づけられる。田篠中原遺跡-8はA、9はC、10はBと組成的な統一性に欠ける。

Vグループ……将監塚遺跡-2、17

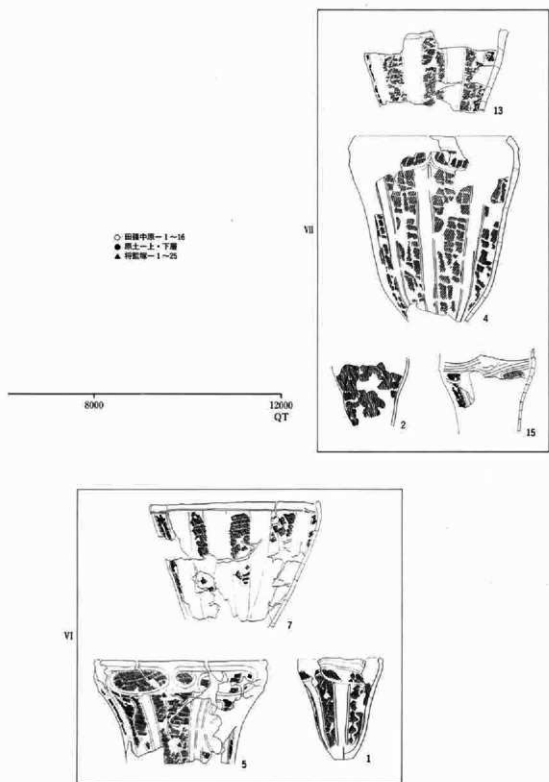
将監塚遺跡の土器だけで構成される。

VIグループ……田篠中原遺跡-1、5、7 将監塚遺跡-6、22

田篠中原遺跡の土器と将監塚遺跡の土器が共存するグループで、田篠中原遺跡-1、3はともに加曾利E3タイプで、接



第3図 Qt-P1相関図



近しているが、田篠中原遺跡-7は加曾利E4タイプで少し離れており、このグループには入らないのかもしれない。田篠中原遺跡-1は組成的には異質であり、田篠中原遺跡-5も同じく異質であることからすれば、このグループの加曾利E3タイプは異質、すなわち、搬入品の可能性がある。この2個の土器胎土の組成は埼玉県で比較的多く認められるものである。

VIIグループ……田篠中原遺跡-2、4、13、15 将監塚遺跡-3、4、7、8、12、16、21

田篠中原遺跡の土器と将監塚遺跡の土器が混在するグループである。このグループでの田篠中原遺跡の土器は加曾利E3の土器が集中し、土器胎土はDタイプが主体となる。

“その他”……田篠中原遺跡-6、14 将監塚遺跡-15、25 原土-上層下層

田篠中原遺跡-6、14は加曾利E3の土器で、土器胎土はDタイプであり、在地的な組成をしている。この2個が使用している原土は在地のものであるが、砂の混合比が異なっており、これらはそれぞれ1つのグループを代表している可能性がある。

田篠中原遺跡の土器についていえば、II、VI、VIIグループには加曾利E3タイプの土器、IVグループには加曾利E4タイプの土器が集中し、明らかに砂の混合比が異なっている。

将監塚遺跡との関連性からいえば、II、VI、VIIの3つのグループは田篠中原遺跡と将監塚遺跡の土器が混在し、加曾利E3が集中する傾向と一致していることになる。このような2つの現象が一致することが何を意味するのかはよくわからないが、なんらかの関連性がありそうである。Iグループは加曾利E4の土器と将監塚遺跡の土器が混在するもので、斜長石の強度が高いという特殊な条件で一致している点は注目値する。“その他”の土器はいずれも加曾利E3の土器で、土器胎土がDタイプで、胎土としては在地であるが、砂の混合比が他のものとは異なり、どのグループにも属していない。この土器は各々が1つのグループを代表しているようである。IIグループは原土の組成とも近く、原土を直接使用している可能性も考えられる。

4 まとめ

- i) 土器胎土は分析した土器16個に対して7タイプに分類された。最も多く検出されたタイプはDタイプで、9個あり、全体の55%を占めている。隣接する善慶寺早道場遺跡の土層断面から採取した原土の組成はともにDタイプであり、個体数の多いこと、原土と組成が一致することから判断して、

- Dタイプの土器は在地あるいは在地近傍の可能性が高い。
- ii) FとGタイプの土器はともに組成が異質であり、この異質の土器はVIグループに属するのが特徴である。
- iii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、中粒のガラスが生成する焼成ランクがIIIのものが多く、ついで細粒のガラスが生成する焼成ランクがIII～IVのものとなっている。
- iv) 石英と斜長石の相関では加曾利E 3タイプはII、VI、VIIグループに集中する。このグループは将監塚遺跡の土器と混在することでも特徴づけられる。加曾利E 4タイプの土器はIVグループに集中し、明らかに加曾利E 3の土器とは違うグループを形成している。
- v) Iグループは斜長石の強度が高い特殊なグループであるが、このグループでは加曾利E 4タイプの土器が将監塚遺跡の土器と混在している。
- vi) *その他⁶⁾の土器はいずれも加曾利E 3タイプの土器で、ともにDタイプの胎土であり、素地土は在地であるが、砂の混合比が他と異なり、各々が1つのグループを代表しているようである。

執筆者紹介

氏名：井上 巖
所属：第4期 地質研究所
住所：〒273千葉県船橋市古作 3-13-5-206
Tel：本社 0473 (33) 1788
試験室0474 (24) 9855

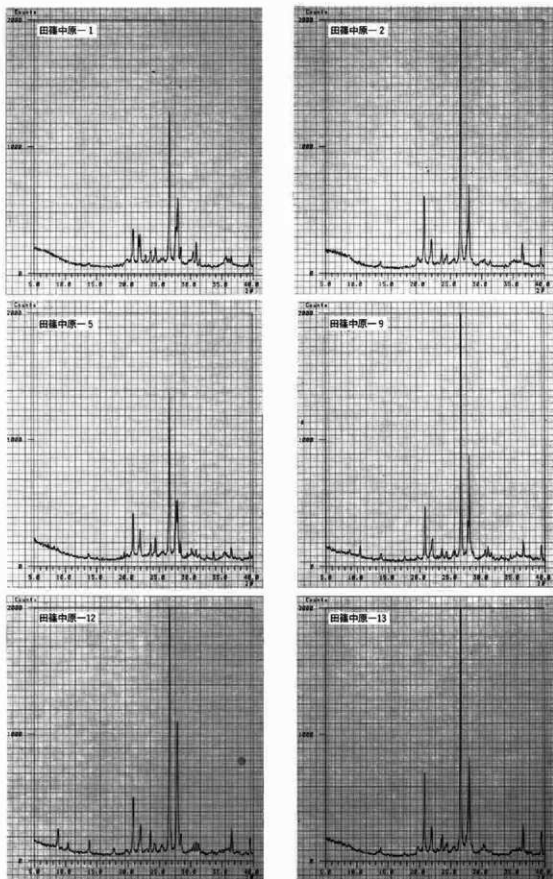
分析報告事例

〔大阪文化財センター〕

美濃遺跡出土土器胎土分析報告書
龍井北遺跡（その1）出土土器胎土分析報告書
久宝寺遺跡出土織式土器の胎土分析報告書
久宝寺南遺跡出土土器胎土分析報告書
太井遺跡出土銅滓の化学分析報告書
真福寺遺跡出土鉄滓の化学分析報告書
日置荘遺跡（その5）出土銅輪の胎土分析報告書
〔埼玉県埋蔵文化財調査事業団〕
北遺跡出土土器胎土分析報告書
北遺跡出土阿玉台式土器に含まれる雲母類の化学分析報告書
児玉工業団地遺跡出土土器胎土分析報告書
将監塚遺跡出土土器胎土分析報告書
御伊勢原遺跡出土鉄滓の化学分析報告書
稲荷前遺跡出土土器胎土分析報告書
古瀬遺跡出土土器胎土分析報告書

〔東北新幹線赤羽地区遺跡調査会〕

袋低地遺跡出土土器胎土分析報告書
八幡原遺跡出土土器胎土分析報告書
赤羽地区八幡神社一星美字園地区出土縄文土器胎土分析報告書
赤羽台遺跡出土銅輪胎土分析報告書
赤羽台古墳群出土ガラス玉の化学分析報告書
赤羽台遺跡星美字園地区出土弥生～古墳時代土器胎土分析報告書
〔群馬県企業局〕
三原田遺跡出土土器胎土分析報告書
〔群馬県埋蔵文化財調査事業団〕
厚谷戸遺跡出土土器胎土分析報告書
田窪中原遺跡出土土器胎土分析報告書
〔渋川市教育委員会〕
御幸田山遺跡出土土器胎土分析報告書
〔北橋村教育委員会〕
分郷八崎遺跡出土土器胎土分析報告書
〔昭和村教育委員会〕
中郷遺跡出土土器胎土分析報告書
〔松井田町教育委員会〕
松井田工業団地遺跡出土土器胎土分析報告書
〔富岡市教育委員会〕
横瀬古墳群出土土器胎土分析報告書



第4図 縄文土器X線回折図型

〔3〕田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定

二宮 修治 (東京学芸大学教育学部)
 藁科 実 (東京学芸大学教育学部)
 網干 守 (成城学園高等学校)
 大沢 眞澄 (東京学芸大学教育学部)

(1) はじめに

群馬県田篠中原遺跡(富岡市田篠)から出土した縄文時代中期の黒曜石6資料の原産地推定を行った。本研究は、これまで筆者らのすすめている関東地方およびその周辺地域の先史時代文化層出土黒曜石石器の原産地推定に関する基礎的研究の一環である。

現在、黒曜石石器の原産地推定は、フィッシュトラック法¹⁾、水和層年代法²⁾、晶形形態法³⁾、蛍光X線法⁴⁾、放射化分析法⁵⁾などによりすすめられている。これらの方法は、それぞれに特徴を有するが、微量成分元素存在量にもとづく原産地推定も極めて有効な方法の一つである。諸種微量成分元素の定量には、多元素同時定量が可能であり、検出感度が高く、さらに分析精度の高い機器中性子放射化分析が用いられている。この機器中性子放射化分析は、適応範囲が広いために、多岐にわたる考古学関係資料に応用され、有効な成果をもたらしている。なお、この機器中性子放射化分析とは、広義の放射化分析のうち、放射化したのちに化学的分離操作を行わず、生成核種の γ 線スペクトロメトリーによる諸種元素の定量分析を行うことである。

日本各地に産出する黒曜石は、比較的限定されており、多くの原産地について研究がなされている^{6,7)}。代表的な本邦産黒曜石の微量成分元素存在量はすでに報告されており、これらの微量成分元素存在量により、原産地黒曜石の識別・分類が可能である。従って、遺跡出土黒曜石石器の原産地推定は、基本的には、遺跡出土黒曜石の微量成分元素を原産地黒曜石の微量成分元素存在量と対比することにより達成される⁸⁾。

これまでの研究によれば、関東地方における先史時代文化層より出土した黒曜石石器の原産地として、和田峠、星ヶ塔(霧ヶ峰)、変草峠(ハケ岳)、畑宿(箱根)、柏峠(伊豆)、神津島などが知られている⁹⁻¹³⁾。また、栃木県内¹⁰⁾、千葉県内¹⁴⁾では、栃木県高麗山産の黒曜石の使用頻度も高い。

一方、群馬県内の遺跡出土黒曜石の原産地推定は、数例のみで鈴木らのグループにより行われている¹⁵⁻¹⁸⁾。

本研究では、田篠中原遺跡出土黒曜石資料の原産地推定を目的として、本遺跡出土黒曜石資料6片について、機器中性子放射化分析により諸種微量成分元素の定量を行った。つぎに、定量された微量成分元素存在量によりこれら遺跡

参考文献

- 1) 例えば、
M. Suzuki (1977) Fission Track Ages and Uranium Contents, 人類学雑誌, 78 (1): 50-58
- 2) 例えば、
松浦秀治・山下秀樹 (1983) 「はひうえ遺跡出土黒曜石の産地推定と水相年代」 「はひうえ遺跡・研究編1」 国際基督教大学考古学研究会 センター Occasional Paper 5: 112-121
- 3) 例えば、
高橋 豊(1983) 「黒曜石の2・3の岩石学的特徴—遺跡出土黒曜石の原産地推定のために」 沼津市歴史民俗資料紀要 7: 151-174
- 4) 例えば、
藁科野男・東村武信 (1983) 石器原料の産地分析, 考古学と自然科学 16: 50-87
- 5) 例えば、
M. Osawa・H. Kasuya・Y. Sakakibara (1977) Trace element abundances in stone artifacts and related materials from Japan by neutron activation analysis. An approach to archaeological provenience studies, J. Radioanal. Chem., 39: 137-167
- 6) 小田静夫 (1982) 「黒曜石」 『縄文文化の研究・8 社会・文化』 権山園出版: 168-179
- 7) 近堂祐弘・藤井義雄・戸村健光・町田 章・鈴木正男・小野 昭(1980) 「黒曜石の年代測定と産地分析」 『考古学・美術史の自然科学的研究』 古文化財編集委員会編, 日本学術振興会: 168-179
- 8) 二宮修治 (1984) 考古学と周辺学 6 鉱物学, 季刊考古学, 雄山閣出版 8: 86-90

- 9) M. Suzuki (1973) Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, Part I, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V, 4: 241-318
- 10) M. Suzuki (1974) Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan, Part II, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V, 4: 397-469
- 11) 二宮修治 (1983) 「黒曜石の産地特定」『はけうえ道跡・研究編11』国際基督教大学考古学研究所センター Occasional Paper 5: 122-127
- 12) 二宮修治・網千守・大沢真澄 (1985) 「向ノ原道跡出土黒曜石産地の推定」『向ノ原道跡』国際基督教大学考古学研究所センター Occasional Paper 6: 112-118
- 13) 上野修一・二宮修治・網千守・大沢真澄 (1986) 石器時代の本州域における黒曜石の利用について—栃木県高野山産黒曜石を中心に、栃木県立博物館研究紀要 3: 91-115
- 14) 二宮修治・田村隆・澤野弘 (1987) 「黒曜石、黒色緻密質安山岩、メノウの機器中性子放射化分析による産地推定」『千葉県文化財センター研究紀要』11: 57-72
- 15) 二宮修治・大沢真澄 (1988) 「月見野道跡群上野道跡第1地点出土黒曜石産地の産地推定」『大和のあけぼの』11 大和市長教育委員会: 137-154
- 16) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・関根健二 (1986) 「糸井宮前道跡の黒曜石分析」『糸井宮前道跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県歴史文化財調査事業団: 204-209
- 17) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・麻生城隍 (1986) 「本道跡出土黒曜石産地特定」『上野道跡群・尼寺中間地域』群馬県教育委員会・財団法人群馬県歴史文化財調査事業団: 578
- 18) 鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・菊池実 (1986) 「黒曜石分析」『三夜沢

出土黒曜石の産地を推定した。

(2) 資料

本研究に供した、田篠中原道跡出土黒曜石資料を第1表に示す。遺構別には、6号配石S-108の2片、Ej-62グリッドの3片、Ej-61グリッドの1片、計6片である。

第1表 分析資料一覧表 (田篠中原道跡出土黒曜石資料)

試料番号	遺構名	備考
87282	GNTN-01-01 6号配石 S-108	縄文時代中期遺構
87283	GNTN-01-02 6号配石 S-108	縄文時代中期遺構
87284	GNTN-01-03 グリッド Ej-62	S-27
87285	GNTN-01-04 グリッド Ej-62	S-27
87286	GNTN-01-05 グリッド Ej-62	S-27
87287	GNTN-01-06 グリッド Ej-61	S-16

(3) 実験方法

諸種微量元素 [主成分元素であるナトリウム (Na)、鉄 (Fe) を含む] の定量には、機器中性子放射化分析²⁾を用いた。

一般に、化学分析においては、岩石のようなケイ酸塩物質の場合、通例としてその存在量が0.01%以上の元素を主成分元素、それ以下の元素を微量元素と称する。微量元素系は、その存在量の単位として ppm (parts per million, 1 ppm = 1 μg/g) を用いる。

一方、ケイ酸塩物質のような地球化学的固体試料の微量元素の定量には、分析感度が高く、かつ分析の信頼性の高い放射化分析が用いられることが多い。

試料を中性子、高エネルギーの荷電粒子 (陽子、α粒子など) あるいはγ線などで照射すると、試料中の目的元素の核種はその核特性に従って核反応を起こし、放射性核種を生成する。この放射性核種から放出されるβ線、γ線などの放射線のスペクトルや放射能強度を測定することにより定性分析や定量分析を行うことができる。これを放射化分析という。誘起される放射能は、分析試料中の元素の存在量に比例する。

最も一般的に利用される核反応は、原子炉内での熱中性子による (n, γ) 反応である。なお、放射化した後、放射化学分離を伴うか否かにより、破壊法と非破壊法とに大別される。機器中性子放射化分析は、熱中性子による放射化、および非破壊的なγ線スペクトロメトリーにもとづく定量法である。高感度で非破壊的に多元素の同時定量が可能であり、適当な照射時間、冷却時間、計測時間などの組合せによる実験条件の選定により効果的な定量分析が可能である。

機器中性子放射化分析に供した黒曜石資料は、純水一超音波洗浄後、水和層

部分を取り除き、再度、純水一超音波洗浄し、ステンレス・スチール製エリス型粉砕器で粉砕し、メノウ乳鉢で細粉化（粒径約0.04mm程度）した。なお、分析に供した細粉試料はすべて風乾試料である。分析試料を粉末試料とするのは、機器中性子放射化分析の際に、熱中性子照射により生成する人工放射性核種の γ 線の測定時のジオメトリーを一定にするためである。

細粉化試料約50mgを精秤し、ポリエチレン袋に二重に封入（約1cm×1cm）する。標準試料とともに20~25試料を照射キャプセルに入れ、立教大学原子力研究所 TRIGA Mark II 原子炉回転試料槽（熱中性子束 $5.0 \times 10^{11} \text{ n/cm}^2 \cdot \text{sec}$ ）にて熱中性子を24時間連続照射（1日6時間×4日間）した。

本法の測定条件（測定した生成核種の γ 線の測定条件および測定核種）を第2表に示す。 γ 線測定は、生成核種の半減期の違いにより、測定条件を変え、各試料について3回（それぞれ、短寿命核種、中寿命核種、長寿命核種を中心に測定）を行った。短寿命核種の測定は、照射終了時から4~5日間冷却後、1,000秒間計測した。中寿命核種の測定は、1~2週間冷却後、5,000秒間計測した。長寿命核種の測定は、1~2ヶ月間冷却後、10,000秒間計測した。 γ 線の測定にはGe(Li)半導体検出器—マルチチャンネル波高分析装置を用い、生成核種の γ 線スペクトロメトリーを行った。

定量は、同時照射した合衆国地質調査所標準岩石（AGV-1, GSP-1.G-2）¹⁹を比較標準とする方法（比較法）により行った。さらに定量性の検討は、同時照射

跡・十二原遺跡 群馬県教育委員会・財団法人群馬県歴史文化財調査事業団：366-367

- 19) F. J. Flanagan (1973) 1972 values for international geochemical reference samples. *Geo chim. Cosmochim. Acta.* 37: 1189-1200

第2表 機器中性子放射化分析の測定条件

測定	冷却時間	測定時間	定		量	
			元素	核種	半減期	γ 線のエネルギー (keV)
① 短寿命核種	4~6日間	1,000秒間	Na	²⁴ Na	14.659 h	1368, 2754
			La	¹⁴⁰ La	1.6780 d	487, 1595
			Sm	¹⁵³ Sm	1.946 d	103
② 中寿命核種	1~2週間	5,000秒間	La	¹⁴⁰ La	1.6780 d	487, 1596
			Sm	¹⁵³ Sm	1.946 d	103
			Lu	¹⁷⁷ Lu	6.71 d	208
			Rb	⁸⁷ Rb	18.66 d	1077
			Th*	²³² Pa	27.0 d	312
			Cr	⁵¹ Cr	27.704 d	320
			Ce	¹⁴¹ Ce	32.50 d	145
			Fe	⁵⁹ Fe	44.496 d	1099, 1292
Sc	⁴⁶ Sc	83.83 d	889, 1120			
③ 長寿命核種	1~2ヶ月間	10,000秒間	Rb	⁸⁷ Rb	18.66 d	1077
			Th*	²³² Pa	27.0 d	312
			Cr	⁵¹ Cr	27.704 d	320
			Yb	¹⁸⁹ Yb	32.022 d	198
			Ce	¹⁴¹ Ce	32.50 d	145
			Hf	¹⁸¹ Hf	42.39 d	133, 482
			Fe	⁵⁹ Fe	44.496 d	1099, 1292
			Sc	⁴⁶ Sc	83.83 d	889, 1120
			Ca	⁴⁵ Ca	2.062 y	606, 796
			Co	⁶⁰ Co	5.271 y	1173, 1332
			Eu	¹⁵² Eu	13.33 y	122, 1408

*: ¹⁸⁰Th $\frac{\beta}{22.1m}$ ¹⁸⁰Pa

した地質調査所標準岩石 (JR-1, JR-2)²⁰⁾の定量結果により評価した。

本法では、主成分元素である Na と Fe、微量元素成分元素であるルビジウム (Rb)、セシウム (Cs)、ランタン (La)、セリウム (Ce)、サマリウム (Sm)、ユロビウム (Eu)、イッテルビウム (Yb)、ルテチウム (Lu)、トリウム (Th)、ハフニウム (Hf)、コバルト (Co)、スカンジウム (Sc)、クロム (Cr) の15元素の定量が可能であった。

(4) 結果および考察

機器中性子放射化分析による同時照射した地質調査所標準岩石 (JR-1, JR-2) の定量結果を第3表に示す。本法により得られた値は文献値²⁰⁾とよく一致した。

田篠中原遺跡出土黒曜石6資料の定量結果を第4表に示す。各元素の存在量(濃度)の単位は、主成分元素である Na および Fe が%であり、微量元素成分元素が ppm である。

諸種微量元素存在量(以下、ここでは、微量元素成分元素に主成分元素の Na と Fe を含めて論議する)を比較すると、田篠中原遺跡より出土した黒曜石6資料は、大きく2系等に分類される。

さらに、分類を明確にするために、多変量解析(クラスター分析)による検討を行った。ここでは、定量された微量元素存在量を変数とする多変量解析[拡張統計計算プログラム・パッケージ BMDP (Biomedical Computer programs-P) 2Mクラスター分析²¹⁾]を用いた。

田篠中原遺跡出土黒曜石6試料のクラスター分析の変数には、黒曜石によっては、その元素存在量が検出限界に近く、比較的定量が困難とされている Yb、Co、Cr の3元素を除く12元素を用いた。クラスター分析の結果、大きく GMTN-01-01、-02、-03、-04、-05の5資料と GMTN-01-06の1資料との2群に分類された。

クラスター分析による2グループの黒曜石をこれまで報告されている原産地黒曜石の諸種微量元素存在量(東日本の主な原産地について第5表に示してある)との比較により原産地推定が可能である。

原産地推定の結果を第6表にまとめた。GMTN-01-01、-02、-03、-04、-05の5資料は星ヶ塔、GMTN-01-06の1資料は和田峠・小深沢周辺(和田峠北とする)が原産地と推定された。

20) A. Ando・N. Mita・S. Terashima (1987) 1989 values for fifteen GSJ rock reference samples, "Igneous rock series.. Geostandards News letter, 11: 159-166

21) 日立製作所 (1979) HITAC VOS 2/VOS 3 拡張統計計算プログラム・パッケージ BMDP 機能編—第2分冊—Mシリーズ(多変量解析)

第3表 機器中性子放射化分析による標準岩石 JR-1、JR-2の定量結果

(Na, Fe 以外は ppm)

試料	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Co	Sc	Cr
JR-1															
01034 (8901)	2.88	0.54	240	20	20	42	5.7	0.31	4.4	0.68	25	4.6	0.7	5.3	4
文献値	3.04	0.67	257	29.2	21	49	6.2	0.31	4.6	0.68	26.5	4.7	0.65	5.2	2.3
JR-2															
01035 (8901)	3.10	0.55	310	28	17	39	7.1	0.68	5.5	0.85	33	5.4	n.d.	6.0	n.d.
文献値	2.99	0.60	297	28	17.5	38	6.2	0.13	5.4	0.92	32.2	5.2	0.4	5.4	2.6

n.d.: 検出せず

参考までに、同時に分析した群馬県内の遺跡（国分寺中間地域遺跡、下牧小竹遺跡）から出土した黒曜石の諸微量元素成分元素存在量を第7表に示す（未発表データ。詳細は下牧小竹遺跡の調査報告書で述べる予定である）。国分寺中間地域遺跡の資料は主に縄文時代中期の遺構、下牧小竹遺跡の資料は縄文時代前期の遺構から出土したものである。

第4表 田篠中原遺跡出土黒曜石の元素存在量一機器中性子放射分析 (Na, Fe 以外は ppm)

試料	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Co	Sc	Cr
89282 GMTN-01-01	2.99	0.48	130	7.7	15	33	5.0	0.61	3.0	0.38	10	3.3	n.d.	2.9	4
89283 GMTN-01-02	3.04	0.49	140	7.8	15	34	4.9	0.66	2.8	0.40	10	3.4	n.d.	2.9	4
89284 GMTN-01-03	3.08	0.48	130	7.8	15	34	5.0	0.66	2.7	0.41	10	3.4	n.d.	2.9	3
89285 GMTN-01-04	3.07	0.52	140	8.0	16	34	5.0	0.63	2.8	0.35	10	3.4	n.d.	2.9	6
89286 GMTN-01-05	3.09	0.52	130	7.8	15	32	5.0	0.63	2.8	0.44	10	3.4	n.d.	2.9	6
89287 GMTN-01-06	3.00	0.62	230	18	26	51	6.3	0.27	3.9	0.58	26	4.5	n.d.	4.4	5

nd:検出せず

第5表 東日本の主な黒曜石原産地の化学組成（平均値）一機器中性子放射分析 (Na, Fe 以外は ppm)

試料	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Sc
屋ヶ塔	2.90	0.46	160	6.6	16	32	4.8	0.62	2.2	0.41	10	3.4	2.9
和田峠・小深沢	2.91	0.55	270	21	21	45	6.8	0.23	4.3	0.83	27	4.8	5.6
和田峠・丁子御園	2.80	0.56	320	27	17	35	6.6	0.11	3.9	0.96	31	5.2	6.0
男女倉	2.83	0.70	170	7.8	27	48	4.9	0.65	2.3	0.29	15	4.5	3.1
史ヶ塔	2.93	0.67	100	5.0	25	44	4.0	0.68	1.4	0.33	8.9	3.9	2.3
新発田・鞍山	2.56	0.52	150	5.8	18	35	3.6	0.46	2.9	0.45	11	2.3	3.2
高野山	2.79	1.37	110	5.6	26	48	5.9	0.99	3.9	0.56	12	5.2	8.0
増穂・畑留	3.74	1.87	20	2.2	8.6	21	5.1	1.1	3.3	0.68	1.0	4.7	15
伊豆・柏崎	3.13	1.29	50	3.3	13	27	5.2	0.90	3.3	0.63	3.0	3.7	8.1
神津島・忠船島	3.31	0.64	70	2.7	20	37	3.6	0.61	2.2	0.41	4.8	2.6	3.6

第6表 田篠中原遺跡出土黒曜石の原産地推定の結果

試料番号	遺構名	備考	推定原産地
87282	GNTN-01-01	6号配石	S-108 縄文中期 屋ヶ塔
87283	GNTN-01-02	6号配石	S-108 縄文中期 屋ヶ塔
87284	GNTN-01-03	グリッド	EJ-62 S-27 屋ヶ塔
87285	GNTN-01-04	グリッド	EJ-62 S-27 屋ヶ塔
87286	GNTN-01-05	グリッド	EJ-62 S-27 屋ヶ塔
87287	GNTN-01-06	グリッド	EJ-61 S-16 和田峠北*

*：和田峠において北側の小深沢周辺と南側の丁子御園付近とに識別・分類され、この資料は北側の小深沢周辺が採取地と考えられる。

第7表 国分寺中間地域遺跡、下牧小竹遺跡出土黒曜石の元素存在量一機器中性子放射分析 (Na, Fe 以外は ppm)

試料	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Co	Sc	Cr
国分寺中間地域遺跡 (AK)															
89277 GMKT-01-01	2.95	0.47	140	7.5	15	33	4.8	0.67	2.7	0.37	10	3.4	n.d.	2.8	4
89278 GMKT-01-02	2.91	0.46	140	7.8	14	32	4.7	0.62	2.5	0.37	9.8	3.3	n.d.	2.8	3
89281 GMKT-01-03	3.00	0.49	140	8.1	15	33	5.0	0.68	3.0	0.43	10	3.5	n.d.	2.9	4
国分寺中間地域遺跡 (JK)															
89279 GMKT-02-01	2.97	0.49	130	7.7	15	32	4.8	0.64	2.8	0.38	9.9	3.3	n.d.	2.8	4
89280 GMKT-02-02	2.96	0.47	140	7.8	14	32	4.8	0.65	2.5	0.38	9.7	3.3	n.d.	2.8	4
下牧小竹遺跡															
89273 GMTN-01-01	2.91	0.50	250	22	20	44	6.9	0.19	4.6	0.72	26	4.5	n.d.	5.0	6
89274 GMTN-01-02	3.00	0.51	260	22	20	45	7.0	0.17	4.7	0.72	27	4.9	n.d.	5.1	5
89275 GMTN-01-03	2.89	0.50	250	22	20	44	6.8	0.14	4.6	0.70	27	4.4	n.d.	5.1	5
89276 GMTN-01-04	3.04	0.55	280	23	21	46	7.2	0.16	4.9	0.74	28	4.7	n.d.	5.3	5

国分寺中間地域遺跡出土黒曜石5資料は、A区、J区ともに星ヶ塔産、下牧小竹遺跡出土黒曜石は、4資料すべて和田峠北（小深沢周辺）産のものと推定された。

(5) まとめ

群馬県内の田舎中原遺跡から出土した黒曜石6資料の原産地としては、5資料が星ヶ塔、1資料が和田峠北であった。

さらに、同時に分析した同県内の国分寺中間地域遺跡出土黒曜石5資料の原産地としては、A区、J区ともに星ヶ塔であり、また、下牧小竹遺跡出土黒曜石4資料の原産地としては、すべて和田峠北であった。

今回分析した群馬県内の遺跡から出土した黒曜石では、鈴木らの報告¹⁸⁻¹⁹⁾と同様に星ヶ塔と和田峠北の原産地のものが使われていた。しかし、三後沢遺跡¹⁹⁾で認められた神津島産の黒曜石の使用は、今回の遺跡では認められなかった。

これらの黒曜石の原産地推定の結果が意味する考古学的解釈については、現段階ではあまりにも遺跡数ならびに出土黒曜石の分析例が少ないために解明される問題ではないであろう。今後、さらに、同地域ならびに周辺地域での遺跡出土黒曜石の原産地に関する研究に期待するとともに、問題解明にあたっては多くの考古学的研究が基本となると思われる。

謝 辞

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団・菊池 実主任調査研究員、同・桜岡正信主任調査研究員には、貴重な資料を提供していただき、さらに、考古学に関する有益なご教示をいただいた。また、立教大学原子力研究所戸村健児教授ならびに所員の方々には、原子力等利用に関してお世話いただいた。記して深く感謝いたします。

〔4〕田篠中原遺跡でみられる石材の種類 と地質的関連

陣内 圭一

I 当遺跡の地形及び地質的特徴

田篠中原遺跡は、富岡市大字田篠地内で、南部は甘楽郡甘楽町大字善慶寺地内に接する地点に位置する。地形上からみると、全体的には南高北低の扇状地地盤上に支えられて分布しているものである。

標高は、凡そ166～167m付近に広がりをもっている状態で、東部は雄川方面へと、西部は下川方向へと、極僅かに下向傾斜する地形をみせている。これは、雄川と下川との両河川の間には挟まれた地点にあり、両河川の河川動力による少なからざる影響を受けている証差である。また当地点から北方に向かって脊稜的な地形をなしている状態である。なお、当遺跡の西部凡そ400mを南から北へ貫流する下川は、高瀬南部丘陵を、その地点において侵食切断して、扇状地形成に一段担って、箭川に流入している状態である。

以上のような地形的特徴をもった当地は、先住民の生活の場として選択されるにふさわしい好条件を充たしていたものであると思われる。

第1に、湿け地でないことである。現在は、砂質シルトで、いわゆる農耕土で、遺跡の上部を数10cm程被覆していて、裸泥りの耕土で桑園や野菜畑となっていたものである。この農耕土の下層は透水性の極めて良好な扇状地礫層を基盤として、先住民は住居を構えている。このことは、基本的な生活の知恵の表現である。

第2は、生活用水が得やすいことである。このことは、当地点は小形ではあるが、扇状地であるので当地形の末端や側端には、非常に奇麗なこんこんと湧き出る不滅の泉が存在するのである。その状態は当遺跡東部の雄川にほどちかい傾斜地で観察されるし、雄川及び下川に接近しているが、洪水の憂にはさらされていない地点である。さらに、付近の井戸水の水位は高く安定していることがあげられる。

第3に、日照条件は、これを避るものはない地点で、非常に良好である。

以上の地形及び地質的観点から、当地点は生活の拠点とし最も重要な条件は必要にして充分に充たされた、絶好な居住地点であったと考えられるのである。

II 当遺跡の石材に関連する地質的環境

1 石材の数量と成因別分類

当遺跡で、石材として取り扱われた数量は、実に17,255個という莫大なものであった。これを成因別に分けると、火成岩類が799個であり、全体の4.6%に当たり、堆積岩類が1,116個であり、全体の6.5%に当たる。変成岩類は15,340

4章 自然科学的分析

個で、全体の88.9%を占めるという特異な状況である。このことは、当地点が変成岩の分布する地域に隣接していることと、その物が入手しやすい地質的な環境に位置しているという、特異性が存在することであると考えられる。

以下当地点にかかわりをもつ主な岩石の分類表を掲げて、成因別を考慮したよりどころとして、掲げることとする。

(1) 火成岩の分類表

産出状況	石英		斜長石		アルカリ長石		輝石		かんらん石
	石英	石英	斜長石	斜長石	アルカリ長石	アルカリ長石	輝石	輝石	
深成岩的	花崗岩	花崗閃緑岩	閃緑岩	閃緑岩	斑岩	斑岩	超塩基性岩		
半深成岩的	花崗斑岩	花崗斑岩	ひん岩	ひん岩	輝緑岩	輝緑岩	(角閃岩 蛇紋岩)		
火山岩的	流紋岩	石英安山岩	安山岩	粗面岩	玄武岩	玄武岩			

(2) 堆積岩の分類表

未固結	泥	粘土	砂	礫	火山灰	軽石	岩屑
固結	シルト岩	泥岩	頁岩	砂岩	礫岩	凝灰岩	集塊岩
甚固結	粘板岩	粘板岩	硬砂岩	珪岩	雑色珪岩	角礫凝灰岩	輝緑凝灰岩

(3) 沈澱岩の分類表

鹹質溶液	珪質溶液	石灰質溶液	鉄質溶液
岩塩	カリ塩類	珪華	チャート
		角岩	灰華
		絹状石灰岩	鉄華
			黄土

(4) 変成岩の分類表

原岩	接触変成岩	広域変成岩		
		低度変成	中低度変成	強度変成
砂質岩	ホルンヘルス	珪質千枚岩	石英片岩 絹雲母片岩 紅鱗片岩	準片麻岩
粘土質岩	ホルンヘルス 重晶石ホルンヘルス	千枚岩 石炭千枚岩	黒雲母片岩 雲母片岩 透輝石片岩	準片麻岩
凝灰質岩	ホルンヘルス 陽起石ホルンヘルス	所謂「輝岩」 オプトレライト千枚岩 藍閃片岩	緑泥片岩 緑簾片岩	燧閃岩
蛇紋岩			滑石片岩	
石灰岩			石灰片岩	
鉄質岩			赤鉄鉱片岩	

参考文献

- 『地質学ハンドブック』(1966) 朝倉書店
- 『地学辞典』(1983) 平凡社
- 陣内圭一編 『かぶらの自然』(1972) かぶら理研研究会
- 『富岡市史』自然編 原始・古代・中世編(1987) 富岡市
- 『関東地方』『日本地方地質誌』(1980) 朝倉書店
- 『関東地方』『日本の地質3』(1988) 共立出版

2 石材の種類、産地、特徴の一端

石材の鑑定は、肉眼によって観察を実施し、ルーペや小刀のみで、薄片による造岩鉱物までの検鏡を加えなかったため、大まかな種類別であったと思うが、以下、その産地をも想定しながら簡単な説明を加える。

(1) 火成岩類についてみると、深成岩的な岩石が多量であった。

①**斑岩** (214) 野上川の上流黒内山付近、西牧川上流に分布あり。塩基性の深成岩で結晶質中粒ないし粗粒の暗黒灰色の岩石である。

②**閃緑岩** (59) 野上川上流及び下仁田付近に分布する。深成岩で黒味多い角閃石の細い結晶がみえる暗緑灰色の岩石である。

③**角閃岩** (196) 産地は野上川上流黒内山付近である。この岩石は、他の岩石と比べて、特に重さが大きく角閃石の集合体で、割れ口はやや繊維状で、暗緑色であるので他と区別しやすい。

④**石英閃緑岩** (10) 下仁田町川井付近に大きな岩体があるが、そのものは鍋川によって運ばれるので、小形になってしまう。おそらく、下仁田町馬山地域の産出で、野上川の運搬したものである。閃緑岩に比して、石英が多く白味がかっている。

⑤**変斑岩** (90) 産地は、斑岩などの付近であろうが、やや接触変成作用を受けているもので、白味がかっている。

⑥**蛇紋岩** (12) 産地は、野上川上流付近から横瀬川上流にあるが、横瀬川上流地域では採掘されているが、当道跡で石材としてのものは、甘楽町雄川の upstream 河振付近の岩体からの産品であろう。暗緑色の緻密な岩石で脂感があるのが特長で細工にも使われる。

⑦**ノーライト** (6) 産地は、野上川上流地域であろう。風化変質の状態である。

⑧**平滑花崗岩** (3) 産地は、下仁田町小坂付近から神成、田島、更に高瀬地域で第3紀層に覆われて姿を消すまで分布がみえる。岩質は圧砕形であり、優白色の花崗岩である。有色鉱物はほとんどみられない状態であり、部分的には風化の進んだ所が多いものである。

⑨**花崗斑岩** (1) 産地は、富岡市神農原付近から下仁田町に至る鍋川岸によく発達している神農原礫岩層を形成している礫中に多いのが花崗斑岩である。石基が有色鉱物に乏しいので白っぽいのが、酸化鉄の影響を受けて、表面は灰褐色を呈する場合が多い。

⑩**花崗閃緑岩** (2) 花崗岩と閃緑岩との中間の深成岩の仲間であり、前橋の県民会館の立ち上がっている部分に使用されている石材と同じもので、それは産地から沢入花崗岩と呼ばれる程花崗岩に似ている。造岩鉱物も同じようであるが角閃石が加わる状態が異なる。産地は下仁田付近であろう。鍋川から運ばれたものであると思う。

⑪**閃緑岩** (37) 産地は野上川上流であり、閃緑岩質石基に角閃石を混在

石材名の右に記した数字は、当道跡で取扱った点数を示す。

する比較的細粒組織で暗緑灰色の深成岩類である。

⑬**石英斑岩**(7) 花崗斑岩によく似た岩石で、石英が細かく、有色鉱物が少ないので灰白色を呈する。斑晶に石英がみえる。産地は田島付近でもみられるが、鍋川に転入散在している蹟である。

⑭**玢岩**(2) 産地は鍋川上流の火成岩地帯であり、石英玢岩状であり、成分からは、石英安山岩質である。灰緑色で細粒組織である。

⑮**熔結凝灰岩**(6) 神農原礫岩層の中に存在するもので、鍋川の礫中に散在する岩石である。火山砕せつ物がガラス質の熔岩の小破片で膠結されたものであり、灰白色や灰褐色のものがある。

⑯**流紋岩**(38) 産地は南牧川の上流、砥沢付近が江戸時代から有名な産地である。中には、縞状の流紋構造をもつものがある。虎のような斑があり、虎砥と称せられ、刃物の研磨に貴重な石材とされた。砥石としては、中砥の価値の高いものである。小坂付近でも産出する。

⑰**安山岩**(96) 産地は鍋川上流、及び南牧川の上流の火成岩地帯であり、輝石安山岩や両輝石安山岩等の仲間が多く、いわゆる「ま石」といわれるもので、鍋川に散在する灰色石英に輝石の目立つものがある。

⑱**玻璃質安山岩**(7) 産地は鍋川上流であり、黒灰色でガラス質である。硬さもややあり、貝殻状断口のみえるものさもある。

⑲**石英安山岩**(7) 産地は南牧川支流の們沢川流域に分布し石材として搬出され、們石という。石英・斜長石が多く灰白色で石段等に使われる。

⑳**黒曜石**(6) 黒曜石については、東京学芸大学の二宮修治先生に産地同定を依頼しているのでそちらを参照してください。

㉑**正長石岩**(1) 正長石の集合体であり、氷長石といわれる状態のものでありその産地は不明である。花崗斑岩から分離した姿でもあるが小形のものである。

(2) 次に堆積岩類について記すに当たり、堆積岩分類表の項立てによって、固結度の低いものから高いものへと、すなわち、新生代第三紀層のものから中生層のもの、古生層のものへと列記することとする。

①**砂岩**(312) 新生代第三紀層産のもので数量も多く種類も多いが、ここで多くみられるものは、花崗岩質の牛伏砂岩であり、多胡石といわれる仲間のものである。当地点の南部で三波川結晶片岩と断層で接する地域に分布するのが顕著で主な産地である。雄川にも転石が得やすく、下川上流域でも分布しているものである。甘楽町の町谷付近雄川左岸の山地では、往時、落下したものを古墳造りに利用するため、搬出されたものと、想定される。砂岩の中には細粒で、やや青灰色のものもみられるが、これは、下川中・下流域に分布する富岡層中に泥岩と互層する状態で分布しているものである。砂岩の中で粗粒の灰褐色のものは、砥石や物を擦り減らす石材として使用されたものではないかと思う。

②凝灰岩(51) 当地点西部の丘陵、下川岸にも露頭が存在する第三紀の堆積岩類であり、灰白色のものが多く。火山灰の堆積したものであるが質は、付近のものはやや緻密で火力には耐える力のある岩石であるが、節理もよく発達しているものがある。

③泥岩(2) 第三紀層のもので、当地点では下川岸に分布している砂質の泥岩である。砂質でない泥岩は、風化が非常に速いので、極めて短い時間で崩壊して粉泥化してしまうものである。

④頁岩(11) 中生代の地層を形成している泥岩で、粘板岩程の固結度がないうものであり、一般的に暗灰黒色である。産地は下仁田町付近に分布する中生代の南蛇井層や跡倉層のものが鍋川に転石で、きている。

⑤礫岩(3) 中生代の堆積岩類である。当地に運び込まれているものは、下仁田町に分布する中生層の跡倉層と中之萱層のものである。

⑥チャート(267) 古生代の堆積岩類である。灰色や赤色、白色で非常に硬く、ハンマーで打つと火花が出るし、チャート自体を打ち合わせるとカチカチと音を出したり火花を散らしたりする。銭形平次の奥方が使うのもこれであろう。雄川上流や南牧川に分布のある秩父古生層中によく発達する。硬度もあり緻密であるので、河川作用によく耐えて、鍋川の河岸段丘礫層中に、また鍋川河川礫としても数多くみられるものである。当遺跡にも多量に持ち込まれている。

⑦輝緑凝灰岩(79) 古生代の堆積岩類であり、チャート同様秩父古生層中に分布するもので、暗赤紫色や緑色を呈し、石灰岩の斑紋を混在することが多い岩石である。硬度は低いものである。風化が進んでいると、片状に剝離をみせるものもある。産地は、秩父古生層地帯特に南牧川域によく発達し、鍋川や雄川に転石としてみられる。

⑧硬砂岩(16) 古生代の堆積岩であり、表面が風化の進んだものであると、褐灰色で安山岩とよく似ているので見違ふことがある。安山岩の造岩鉱物は結晶形であるが、硬砂岩では細円形粒状である。新しい面は暗灰色であり、硬質な岩石である。産地は南牧川沿岸にある。

⑨粘板岩(3) 古生代秩父古生層地帯に分布する岩石であり、粘土の強固結した、黒灰色であるのが一般的で、やや板状に、堆積当時の葉理構造をもったものもある。仙台石のように石碑に用いられている粘板岩があるが、南牧川域を産地とするものは、節理が発達し、硬度も低いのでハンマーや針などで容易に傷が付く。安い墓石は粘板岩で作られている。高価な墓石は那智黒のようなホルンヘルスなどで作られていて、小刀でも傷が付かないものである。粘板岩の層間異状でもめている部分では、石墨が観察されることがある。

⑩石灰岩(2) 産地は下仁田・南牧地域に分布する秩父古生層地帯である。さきに記した輝緑凝灰岩や粘板岩の地層中に、大きな塊や板状になって挟まれていることが多い。下仁田町の白石工場や南牧村の青倉石灰工場では、

石灰岩の採鉱製品化が盛んにおこなわれている。

石灰岩は方解石からなり硬度は低く、酸性の溶液に対しては、弱いので、自然界における鍾乳洞の形成がみられる。

当遺跡に持ち込まれた石灰岩は、極めて少量であるが、鏡川や南牧川で産地付近の河川敷では、大形のがみられるが、河川作用による磨耗度が大きいので、下流では採取し難い岩石である。

①**珪岩**(106) 産地は南牧川流域の秩父古生層中の狭谷美がみられる輝の橋付近によく発達している。硬度の高い、多くは白っぽい岩石であり、なお、河川作用にもよく耐え下流まで運ばれている。雄川上流稲倉山付近にも産出されるので、当遺跡でみられるものは、雄川の流域産のものが多いのかと思う。

②**緑色珪質板岩**(140) 古生代秩父古生層の分布する雄川上流、稲倉山付近に発達する露頭が観察される岩石である。チャートに近いような硬度をもつ、淡緑色で平板状に劈開する岩石である。緑簾石、石英や曹長石よりなり、緑色珪質頁岩ともいう。

③**赤色珪質板岩**(90) 前者と同様な地域に分布する、淡赤色の岩石である。硬度や、平板状に劈開するようすなども前者と同様なものである。

④**放射虫板岩**(32) 古生代秩父古生層の分布地域に産出する岩石で、放射虫などを多く混在する放射虫軟泥などが固結した板状の岩石である。色は、赤紫色であり、肉眼では化石のようすは見えない。

⑤**赤鉄鉱珪岩**(2) 赤褐色を呈する珪岩で、節理など発達している部分の多い岩石で、古生層の分布する地帯に産出する。数量は少量しか持ち込まれていない。硬度は珪岩類と同じく高く、呈色は赤鉄鉱による。

(3) **変成岩類**について、まず接触変成岩類、ついで広域変成岩類について記すこととし、その低度変成のものから、中程度変成のものへ、さらに、砂質岩から粘土質岩へと、分類表の項に添って記述することとする。

①**熱変成岩**(198) 富岡付近の鏡川で多くみられる熱変成岩(ホルンヘルス)は下仁田町東部に分布する中生代の南蛇井層が、花崗岩の貫入などによってホルンヘルス化されたもので、黒色で質は珪化し、硬度を増して、貝殻状断口のみられるものもある。なお、下仁田の川井山西部の南牧川沿岸でも、石英閃緑岩の貫入によるホルンヘルス化がみられ、ザクロ石の点在するものが観察される。

②**千枚岩**(40) 細粒堆積岩源の変成岩であり、粘板岩と結晶片岩の中間的な低変成度変成のもので、板状の片理構造がよく発達している。産地は古生層分布地帯縁辺部で多くみられる。

③**輝岩**(2375) 分類表中いわゆる輝岩に属する変成度の低い緑色変成岩で三波川結晶片岩類であるが、片理の発達がそれほど顕著でない岩石である。やや風化の進んだものと、否なるものとは差異があり、輝緑岩状の石基をみ

せるものを区別したが、変成度によるものとして同種のものとした。産地と分布状態は、下仁田構造帯の北側に分布するもので、景勝地青岩付近に露頭がよく観察され野上川、雄川流域にも、さらに御荷鉢山付近まで産地は分布する。

④**珪石 (891)** 分類表による砂質岩の中程度変成岩類であり、石英片岩である。なお、硬度は付近で採集できる岩石では、最高(モースの硬度目盛で8)である。産地としては、雄川上流域結晶片岩層中である。来波付近で採掘輸出があった。純度の高いSiO₂であった為とか。

⑤**絹雲母片岩 (71)** 砂質岩の中程度変成岩類である。結晶片岩類は多種多様な目につく造岩鉱物が、多量に、また少量混在して形成されている。この場合、その岩石名を呼ぶとき、普通に識別する時には、その岩石を形成する造岩鉱物が少なくみえる鉱物名をさきに呼び、順次多量に混在する鉱物名を連ね、石英の呼び名は加えないのが普通の習わしである。絹雲母片岩も、絹雲母と石英が多量で形成されているが、絹雲母片岩と呼ぶ、以下その例に準拠する。

絹雲母片岩の産地は雄川流域梅ノ木平付近のものが目に付く。

⑥**紅簾片岩 (18)** 同上の中程度変成岩類であり、紅簾石が特に多量で紅色の様子である。産地は梅ノ木平の下流、雄川に美しい露頭がある。

⑦**紅簾絹雲母片岩 (158)** 砂質岩の中程度変成岩類で、紅簾石が僅かに、混入する淡紅色の絹雲母片岩である。産地は雄川の流域である。

⑧**点紋絹雲母片岩 (8)** 同上と同類の中程度変成岩類で、きれいな絹絲光沢の絹雲母片岩に、曹長石の点紋を有する岩石で片理構造は全上共々によく発達している。産地は、雄川流域及び野上川流域にも分布する。

⑨**白雲母片岩 (11)** 同上と同類の中程度変成岩類で、白雲母の真珠光沢のある板状の結晶面からの光は、ことに美しい。産地は雄川流域であろう。

⑩**緑泥絹雲母片岩 (5)** 絹絲光沢のある絹雲母片岩に、僅かに、緑泥石が混入する、淡緑色の交じったつやをみせる岩石で、片理の発達はおなじである。産地は雄川中上流及び下川上流地域である。

⑪**石墨絹雲母片岩 (267)** 絹雲母片岩に石墨がわずかに混入する岩石で、前者同様な変成岩類であり、産地も雄川や野上川流域にある。

⑫**脆雲母絹雲母片岩 (10)** 前者と同類の中程度変成岩であるが、絹雲母片岩にわずかに脆雲母の暗褐色で鈍い光沢をもつ片状鉱物が混入する岩石である。産地は、雄川や下川上流域にある。

⑬**点紋緑泥絹雲母片岩 (5)** 前者と同類の中程度変成岩であり、絹雲母片岩に緑泥石を混在し、ごくわずかに白色でぼつぼつ点紋のみえる岩石である。産地は、前者同様である。

⑭**点紋石墨絹雲母片岩 (2)** 石墨絹雲母片岩の石基に、白いぼつぼつの曹長石の点紋のみえる岩石で、産地は前者同様である。

①⑨点紋絹雲母片岩(1) 絹雲母片岩に、点紋をわずかに混在する岩石であり、産地は前者と同様である。

①⑩雲母片岩(8) 粘土質岩の中程度変成岩類である。雲母の金色絹絲光沢があり美しく、片理構造は前者と同様であり、産地も同地域である。

①⑪絹雲母雲母片岩(57) 前者と同様の変成岩であり、雲母片岩に絹雲母を少々交えている岩石であり、産地は前者同様である。

①⑫点紋石墨雲母片岩(2) 前者と同様の変成岩であり産地も同様であるが、石墨を混在する雲母片岩で暗灰色であり、わずかに点紋を混在する。

①⑬絹雲母脆雲母片岩(18) 前者と同様な変成岩であるが、脆雲母片岩に絹雲母の絹絲光沢が目立つ様子の岩石である。片理構造も前者と同様であり、産地も同様である。

①⑭石墨片岩(181) 前者同様に粘土質岩の変成岩であり、その代表的な岩石である。暗黒灰色で節理がよく発達し、やや風化の進んだものは、石墨が指先で検知できるものあり。産地は前者と同様であるが、特に下川上流の国峰や岩染付近では顕著な露頭が観察できる。

①⑮絹雲母石墨片岩(5,613) 前者同様な変成岩類である。石墨片岩であるが絹雲母の混入がよくみられ、中には石英質が多量であるものがある。前者同様節理がよく発達していて、こん棒状で長短ある石材は生活に好都合に役立ったであろう。産地は前者同様な地域である。

①⑯点紋絹雲母石墨片岩(1,116) 前者同様な変成岩類である。絹雲母石墨片岩にばつばつの曹長石の点紋をもつものであり、産地は、前者同様で、雄川の河原、下川河川敷には特に多産する。

①⑰緑泥石石墨片岩(63) 前者同様な変成岩であり、石墨片岩に緑泥石をわずかに混入するもので、産地は前者同様である。黒と緑の混色である。

①⑱脆雲母石墨片岩(29) 前者同様な変成岩である。石墨片岩にわずかに脆雲母を混在するもので、産地は前者同様である。

①⑲紅塵絹雲母石墨片岩(30) 前者同類の変成岩であり、絹雲母石墨片岩に紅塵石をわずかに混入する状態の岩石である。産地は前者と同じ。

①⑳絹雲母赤鉄鉱石墨片岩(12) 前者同類の変成岩である。赤鉄鉱石墨片岩で赤褐色を呈する母岩に、ごくわずかな絹絲光沢をみせる絹雲母が混入する岩石である。産地は、前者同様の地域である。

㉑角閃石石墨片岩(2) 前者同類の変成岩である。石墨片岩に角閃石がちらりばめられた状態の岩石であり、産地は下川上流域であろう。

㉒絹雲母緑泥石石墨片岩(365) 前者と同類の変成岩であり、緑泥石を混入する石墨片岩に微量の絹雲母を包含する岩石で、産地は前者と同じ。

㉓点紋絹雲母緑泥石石墨片岩(21) 前者と同類の変成岩である。絹雲母緑泥石石墨片岩に点紋を散在混入する岩石であり、産地は前者と同じである。

㉔緑泥片岩(981) 凝灰質岩の中程度変成作用を受けた岩石である。以下、

同類の変成岩について列記を続ける。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造がよく発達し、薄くまた厚く板状であるので、板碑などにも活用されたり、その他遺物にも利用されたようである。

産地は、三波川結晶片岩の分布する地域に、石墨片岩類と接して産出するもので、雄川、下川、野上川、銅川の流域にみられる。緑色の結晶片岩の代表的な岩石である。

⑩点紋緑泥片岩 (1,301) 前者と同類の変成岩である。緑泥片岩に曹長石の白っぽい点紋を混在する岩石である。産地は前者と同じ地域である。

⑪絹雲母緑泥片岩 (306) 前者と同類の変成岩であり、緑泥片岩にわずかに絹絲光沢をみせる絹雲母を混入する岩石である。産地は前者同様に結晶片岩分布地域で雄川流域が多いと思う。

⑫石墨緑泥片岩 (181) 前者と同類の変成岩であり、緑泥片岩にわずかに石墨を混入する岩石である。産地も前者と同じ地域である。

⑬綠簾緑泥片岩 (117) 前者と同類の変成岩であり、緑泥石に綠簾石が混在するもので、緑泥石は深緑色であり、そこへやや黄緑色が交じり、更に石英の白色が交錯すると実に美しい模様を織り成す。鑑賞石材として、珍重される三波石こそ、この岩石である。産地は前者と同地域である。下久保ダム下流の浜谷美はこの岩石で造られる。

⑭点紋石墨緑泥片岩 (296) 石墨緑泥片岩にぼつぼつと白色の点紋を散在する岩石で、前者と同類の変成岩であり、産地も前者同様の地域である。

⑮絹雲母石墨緑泥片岩 (66) 石墨緑泥片岩に絹雲母をわずかに混在する岩石で前者同類の変成岩であり、また産地も前者同様の地域である。

⑯点紋絹雲母緑泥片岩 (205) 絹雲母緑泥片岩に白っぽい点紋が散在する岩石であり、前者同類の変成岩で、産地も前者同様の地域である。

⑰点紋絹雲母石墨緑泥片岩 (91) 石墨緑泥片岩にわずかに絹雲母を混入し、更に、白っぽい点紋を散在する岩石である。前者と同類の変成岩であり、産地も前者と同様の地域である。

⑱石墨絹雲母緑泥片岩 (1) 絹雲母緑泥片岩に、黒色の石墨の筋が入る珍しい状態の岩石である。前者と同類の変成岩であり、また産地も前者と同じ地域である。

⑲綠簾片岩 (2) 綠簾石が石英の石基に混入するものであり、緑泥片岩より明るい黄緑色の岩石で、数が少ない。産地も前者と同じである。

⑳絹雲母綠簾片岩 (1) 綠簾片岩に絹雲母をわずかに混入する岩石であり、前者と同類の変成岩である。産地も同じ地域である。

㉑滑石片岩 (27) 蛇紋岩が中程度変成作用を受けたもので、片理構造をもつ岩石である。非常に軟らかく、爪で傷付く、最も硬度の低い鉱物である。白色ないし淡褐色で蠟のような質感があり真珠光沢がある。細工に都合のよい石材であり、潤滑剤としても役立つものである。特産地は、甘楽町河振の

雄川右岸にあり、良質のものを採鉱していたが、現在は鉱道も閉鎖されてしまっている。

3 鍋川及び雄川の石材概説

当遺跡に関係をもった石材が、鍋川や雄川の流域のいずれの地層から産出したのかを、その地域の地質分布に関係づけて概況を記述する。

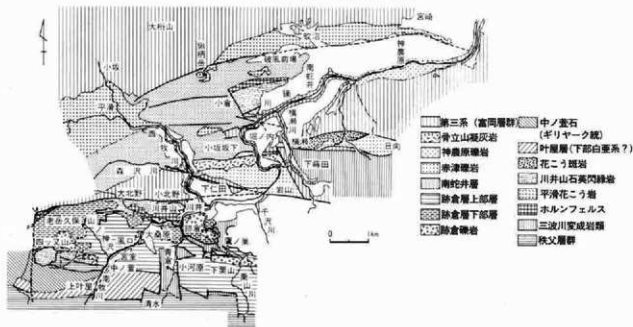
当遺跡の石材の産地については、前項で個々に記載した所であるが、この項では、石材を岩石分類表で括った態様に従って、その石材を産出した地層の分布状態と特徴を、地質図等と併せて略述する。

(1) 秩父古生層

鍋川の支流である南牧川流域、下仁田町南部から甘楽町南部の稲倉山地域にわたって分布し、更に南東へ秩父地方へと延びる地層である。この地層を形成している岩石は、堆積岩分類表中の基固結している部分に該当するものである。関東山地、秩父地方を模式とするもので、石炭～二畳紀の海成層であり、粘板岩、硬砂岩、輝緑凝灰岩、チャート、石灰岩などからなる地層であるので、当遺跡の石材で古生代（基固結）の堆積岩は全部のものが、秩父古生層からの産物であった。

(2) 三波川結晶片岩

三波川変成帯の結晶片岩類は変成岩の分類表に基づいて、当遺跡の石材についての分類を実施した。三波川変成帯は、下仁田構造帯として、東方へ埼玉県まで延長分布しているものであり、当地域では、秩父古生層地帯を南側に置いて、併走する状態で、南北約6km位の幅で分布している。変成作用を受け、全体としては片理構造の発達した岩石帯である。



第1図 下仁田町付近の地質図（『かぶらの自然』から）

〔4〕田圃中原遺跡でみられる石材の種類と地質的関連

(3) 中生代の地層

当遺跡の石材では、跡倉層や中之萱層、南蛇井層、神農原礫岩層が特に関係する地層で分布状態は（第1図）の如くである。

(4) 第三紀の地層

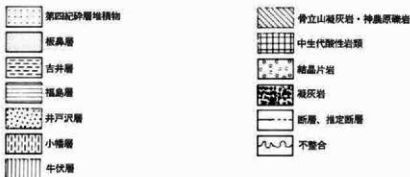
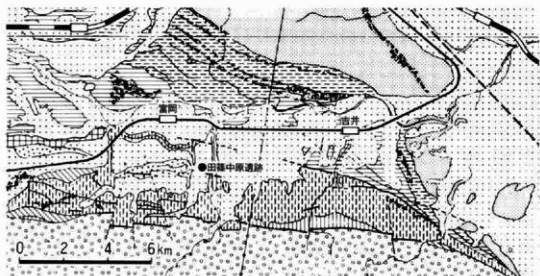
当遺跡の石材としては、富岡層群中、井戸沢層、小幡層、牛伏層の堆積岩層に深い関係がある。（第2図）の如くである。

(5) 火成岩層と熱変成岩

鍋川の上流地域に発達する火成岩層及び下仁田付近の火成岩層と南牧川上流域を産地とする火成岩類がある。

火成岩の貫入現象による接触熱変成作用を受けたホルンヘルス等が下仁田町川井山西部付近及び、南蛇井層が滑花崗岩層との接点に見られる。

以上、簡略に走り、意を尽くせませんが、縄文時代の住人が、石材の特徴を活かして生活された姿に対して、敬意を表してこの稿を終わります。



第2図 富岡市付近の地質図（『かよらの自然』から）

4章 自然科学的分析

執筆者紹介

氏名：陣内 圭一
生年月日：明治44年6月27日
最終学歴：群馬師範、専攻科卒
職歴：昭和6年3月教職に就き、教職・行政職等40年間
昭和46年3月退職
現職：県立自然科学資料館(解説員)当時
富岡市・妙義町文化財調査員
執筆関係文献：富岡市史、南牧村誌、
妙義町誌、かぶらの自然、
資料館自然観察コース案内等

〔5〕遺跡調査における地中レーダの活用

渡 辺 広 勝

(テラ・インフォメーション・エンジニアリング)

Ⅰ 田篠中原遺跡での地中レーダの活用

関越自動車道上越線工事に伴う遺跡調査において、大規模な環状列石が出現した田篠中原遺跡では、道路範囲外まで列なると見られる列石の確認を必要とした。道路外を試掘することは、多種の事情から、不可能であるため、物理探査による確認が望まれ、特に地中レーダの活用を行った。

ただし、この測定には、次の2つの問題が発生した。

問題点1として、道路外は、畑地で桑畑がほとんどであり、一部、野菜などが作られている。地主と立ち入りのみの話し合いはしているが、野菜畑への調査は出来ない。

問題点2として、環状列石の一部が発掘範囲で攪乱されており、北東側の環状の規模がわからない。

問題点1は、この様な探査の場合に常に起りうる状況であり、地中レーダの成果は、この時点での測線設定の良否にかかわるため、慎重に対処し、測線を設定しなければならない。

問題点2は、多くのデータを収集出来る場合は良いが、少い測線だとデータの目的とは関係ない転石を求めてしまうことも考慮しなければならない。そのため、次の様に打ち合わせした。

1. 考古学的に推測される環状列石のラインを定め、その位置を交差又は縦断する測線を設定する。
2. データを即読し、可能性ある場合、ボーリングステッキで確認する。転石が確認された場合は、印をつける。

準備結果としては、1については、結局、2本のラインが想定された。2については、桑畑が意外に狭いため、要求された測線が設定されたとはいえない。また、測線量も少くなった。

以上に基づいて、測定した。

発掘では、環状の西側に、はっきりした遺構面が見られるので、南西側付近に測線を置き、データを求めたところ、固体状のデータが得られ、ボーリングステッキで確認したところ、転石の反応を得た。

それ等の位置は、図1の円内になる。それ等は、ほぼ想定ライン1に沿って存在している。想定ライン2にも転石は確認されているが、数は少ない。北東側は、「問題点1」に該当し、調査は不十分となった。他に遺構データも何通りか収集されたが、主目的と離れるため、整理から除外した。

シュミレーション図の作成

調査に当たって提供された遺構平面図には、発掘区域外は白紙である。記入された遺構状況図、特に石の状況から、これによる発掘区域外の探查結果によるシュミレーションを行った。

これは、地中レーダのパターン解析により、物の形態をおおまかにとらえてみようとする試みと、遺構平面図から、類似する遺構図を取り出し、地中レーダデータにあてはめようとする考え方である。

作業としては、データに取り出されたパターンを解析し、石の大きさ、形などを決め、遺構平面図から、その状況に近似する石群を選び出し(図2)、測線上に転写してみた。(従って、細かい石の状況が、まったくその様になっているというわけではない)

この手法は、今後、使い方により、発掘前におおよその遺跡状況把握に利用できる。また、本件のように発掘出来ない区域の状況確認として、シュミレーション図作成は、効果があると考えられる。(図1参照)

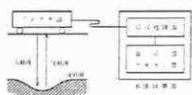
以上は、田塚中原遺跡での調査結果の状況である。この発掘できない区域での調査では、同様、高速道工事において発見された中世遺構(堀)の区域外探查を行い、その状況を解明している。(大阪府近畿道余部城郭跡 資料1)

資料1

近畿道和歌山線、府道松原泉
大津線国道 第2回発掘遺跡展
主催 財団法人大阪文化財センター、大阪府教育委員会、大阪府立泉北考古資料館
オペレーション協力
資料提供 株式会社バスコ

レーダー探査による調査

最近では、考古学的調査にもいろいろのハイテク技術が導入されています。発掘調査で、地中の地下部を抽出していただくため、今回は発掘調査によらず、空中写真画像処理技術を使って、地盤断面の横断面の図を調べてみました。調査結果を、このように移動するアンテナから地中の電波を放射し、反射した電波をアンテナで捉え、その電波の強弱をコンピューター処理して見ることが出来るため、発掘をせずに調査することが出来ます。堀や溝や柱などの埋め込みは、明確にできずとも、大規模なものは、明確に把握することが出来ます。城郭の範囲を把握することが出来ます。



レーダー探査のしくみ



レーダー探査風景



城郭跡簡略実図 (1/1,000)

図式の通りには、発掘調査で確認された部分です。また、レーダー探査によって確認した部分の図も示されています。

図の下部、厚さ約15cmの石を並べた堀の跡が確認されています。また、その中にあり地中に埋め込まれた、円筒形の土管が確認されています。また、堀の跡は、長さ約10m、幅約1.5m、深さ約0.5m、形状はほぼ直線ですが、入り口は急カーブしていますが、発掘には発掘方向による影響があります。

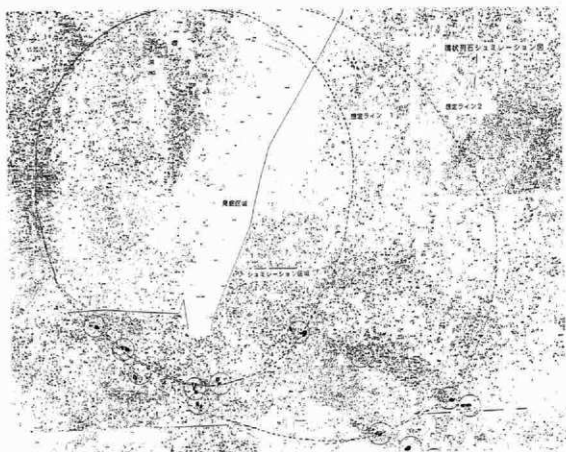


図1 環状列石シュミレーション図



図2

II 遺跡調査での地中レーダ

1. 地中レーダに表現された遺跡

地中レーダのデータ映像画面には、地中物体のそのものの形が現われるわけではない。映像面には、地中における電波の反射状況が表現される。この反射状況をパターンと称し、複雑な土中の状態の解明を行う。この作業を解析または判読と称している。多くのデータと発掘実証などにより、すでに、「この様なデータの場合は、この様な遺構である」という、代表パターン認識は出来つつある。

今後発掘担当者と地中レーダ作業の組合せにより、このパターン認識が、より一般的になれば、発掘作業の合理化も進められるものと考えられる。

以下は、その代表的データの一部である。

図3は、関東ローム層上部黒土中の住居跡である。自然堆積された黒土に比べ、住居跡の黒土は、成分的にも大きく異なるものとみられる。有機成分の違いは、電波の反射にも大きく影響を与える。

データは、発掘により確認され、古墳前期頃のものとして報告されている。

この様なデータを見る場合、水平方向と深さ方向の縮尺の違いから、錯覚を起こしやすいが、黒いライン部だけが住居跡ではないので注意する必要がある。

図4は、住居跡

図5の溝の、データは、対象遺構の置かれている状況により、様々な表現の違いを見せている。

それは、単に遺構の構造の違いだけでなく、旧地形、土質、堆積状況、攪乱状況などの遺構の置かれている環境も影響する。

図5左上から周溝、周溝、左下から溝、堀跡などのデータである。

図6は、データにより確認された横穴。

輪切りのデータをとることにより、横穴の形態を推測することができる。

以上のように地中レーダデータは、多くのデータパターンの認識により、データを読みとっていく。

図7、図8は、読み取りの一例である。

地中レーダデータには、遺構だけが表現されるのではない。様々な土質構造の中には、まったく人工的なパターンを見せるものもある。このため、判断の誤りは、大きな間違いとなる。また、地中レーダの電波は、どの土質にも通ずるとは限らない。これも、また、使用するうえで考慮しなければならない問題である。

このため、遺跡調査については、地中レーダのオペレータが、遺跡に興味を持ち、遺跡保護に関心を持ち、現地の踏査調査をよく行い、その時点から、遺構発見への準備を持たなければならない。しかし、遺跡による「性格」の違いは、レーダパターンにも現われるため、数少ない地中オペレータにすべてをゆだねるのは、遺跡保護の上からも安全とはいえない。出来れば、各担当者が、

地中レーダの内容を知り、活用にあたっては、お互いに情報を交換しあって、利用することが望ましいと考える。

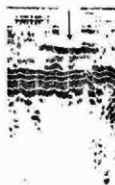


図3 住居跡

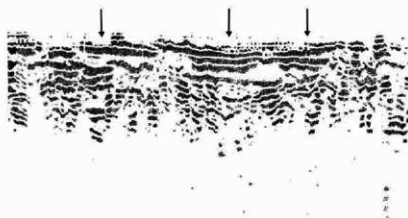


図4 住居跡

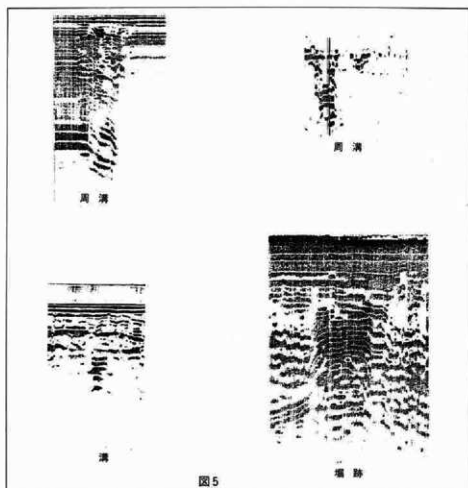
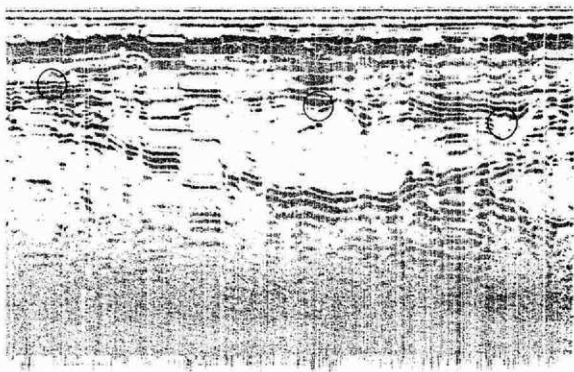
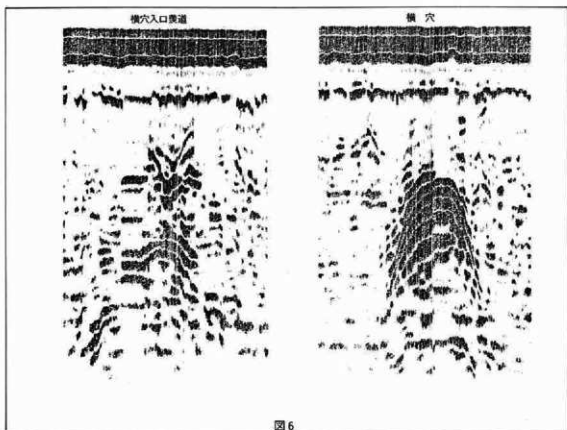


図5



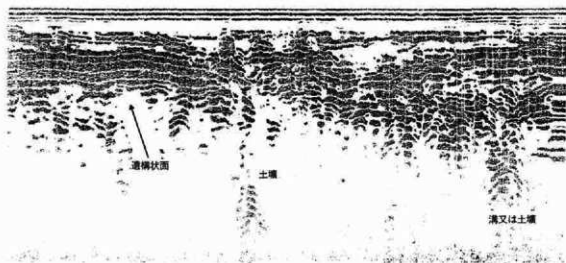


図8

2. 遺跡調査探査状況

地中レーダは、地中の各種の情報を一括取得する。従って、そのなかから、必要な情報を得なければならない。特に、遺跡については、探査前に担当者とは十分な協議をし、指導を受け、目的遺跡の基礎的な知識を持たなければならない。

遺跡調査について、現状の地中レーダでの探査状況を以下に述べる。

1. 旧地形の探査

各種の要因による自然堆積などや、貝塚、埋められた遺跡などを探査するとき、データの中から旧地形線を探し出すことが出来る。但し、旧地形の持つ傾斜角は、地表面より20度程度までである。また、礫層などに積重なった貝塚などは、これを分離認識することは、大変難しい。複雑な地層構造の土地では、遺跡に関係無いデータを遺跡データとして見てしまう場合もある。(このような場合のため遺跡専門家の指導がある。)

2. 溝、堀の探査

古墳の周溝をはじめ、埋没している堀や溝跡の探査は、地中レーダの探査テーマとしては、比較的データを多く求めることができる。また、遺跡の情報処理のためにも、最も大切なデータといえる。作業は、目的の溝の歴史的背景による状況情報により、測線設定をおこなう。一般に古墳周溝は、古墳中心側から、放射線状にとる。匣形跡などの周溝などは、現地形などを考慮しながら行うと効果がある。

測定に関しては、耕作上の制約が起きやすい。測線は、放射状に取れる範囲が制限される。このため、データへの安全を含め、出来るだけ多くの測線を設定する必要がある。

古墳周溝のような円周形のもの、やはり放射線状に求めることが望ましい。

但し、これは古墳の中心部が、明らかに確認されている場合に限られる。従って中心部の不明な場合、網目状に測線を設定し、この結果をもとに、放射線状に確認測線を設定しなければならず、作業量は多くなる。

一般的な溝は、注意深くデータを判読しないと溝として不明な点が多い。平面図に書込んで溝として判断出来た場合もある。これは、土質、その地区の歴史的背景などにより溝の埋没してゆく成立ちが、それぞれ異なり、データにもそれぞれのパターンの違いが生じるからである。最初に述べた、当該遺跡担当者との各種の協議をし、指導を受け、遺跡への基礎的な知識を持つことは、このためにも必要である。

3. 住居跡

竪穴式住居跡については、比較的よく表現され、すでに多くの実証データが公表されている。

4. 礎石、石群

石、一つの直径30cm以上、または、小石でも集まって、直径が30cm以上の場合、顕著に表現される。平石、丸石、敷石、積み重ね石、角ばった石などで表現が異なり、平面図にその配置状況などを記入しやすい。ただ、自然堆積の礫群が、近くに存在すると、データへ介入し、判読を誤るので、注意しなければならない。

5. その他

古竪跡、古墳(埋没も含む)、その他の埋没遺跡について地中レーダの活用は、有効的である。但し、次の様な条件では、データの判読は難しいか、不可能である。

粘土質の多い土地、または粘土地質と他の地質の互層。全域礫層の中の物体、土質変化の乏しい遺跡、細い柱穴、急傾斜面の横穴、直径30cm以下の単体物体、深さ2m以上の遺跡(掘られた溝は除く)等。

都市遺跡の探査の場合、舗装面下の遺跡は、舗装の種類、厚さ、埋設物の有無または量による影響を受け、判断しがたい場合がある。

III 地中レーダパターンの見方

1. 地中レーダの概要

一般に使用されている地中レーダに利用される電波は、サイクルが、6ナノセック(Nsec)のパルス波(モノパルス波)を利用する。このパルス波を、約20マイクロ間隔に発射し、地中からの反射回帰波を求め、発射時間との同期をとり、反射の発生位置までの時間を計測する。

このため、同期の時間間隔と、電波の透過能力を考慮すると、一般に、反射

回帰の有効範囲は、一般使用機器の電波で、200Nsec前後であるとみられる。

この深さは、一般土質で、2mから3m、よほど乾燥した砂地でも、8mから10mとみられる。

一般に、電波を使用しているため、周波数を求めようとするが、このパルス波は、一般使用電波のように、搬送波を持つ電波の周波数と同じ考え方はあてはまらない。

このパルス波は、広帯域波と称し、有る一定の周波数帯域を包括した電波の束と思えばよい。テレビ、ラジオなどの電波を、なわとびの縄にたとえた場合、地中レーダのパルス波は、投げあうボールのようなものである。

しかし、周波数の考えの基準を定める為に、パルス波の振幅ピーク点での周波数の位置を求めて、公称周波数としている。

電波の周波数の送信は、周波数に相当した、アンテナの長さに関係する。

アンテナの長いほど低い周波数帯に、短いほど高い周波数帯のものとなる。

一般に使用される60cmアンテナは、150MHz前後である。

ただし、パルス波の振幅ピーク点の調整は、機器の構造上とくに難しいことも有り、調整時点で、その周波数も、微妙に異なる場合がある。このため、一般波のように正確な周波数表現は出来ない。

さて、電波が地中を透過するとき、地中の物質的特性においてさまざまな変化がある。その一つとして、地中に透過するとき、深さに応じた周波数の減衰が起こり、このため深さごとの反射波の周波数が異なるということである。

この電波の特徴として、深さにより、回帰周波数が異なる。これは、深さ方向に、高い成分の周波数から、減衰していくためである。

高い帯域の周波数は、地中の浅い場所の解像度（分解能）をよくするが、地中深くまで達することは出来ない。低い帯域の周波数は、深い場所、または遠くの場所に届くが、大まかな解像度しか持たない。

このようなパルス波のことを広帯域波ともいう。

つまり、広帯域波は、150MHz付近をピークとした30MHzから1GHz付近までの、無限の周波数を包みこんで、地中に送り込まれる。地中では広帯域波に含まれた周波数が、その周波数の、能力に応じた深さまで透過する。これは、電波が、地中から、その深さに応じた、その深さまでの周波数が、その深さでの物体の、反射波をもたらしていることになる。

従って、収集されたデータは、電波の問題だけに関しても、深さ方向にたいし、すべて同じ条件の表現ではない。さらに、ここに土質、物質の各種条件を加味すれば、より複雑なデータ内容となる。とくに電波は、電気的エネルギーであり、物質によっては、エネルギーとしての、保有と放出という、電気的特性が発生する。この電気的特性が発生した反射波は、データを乱し、解析上やっかいなこととなる。しかし、最近、一部の作業には、物質特性の判断に役立つことがあることがわかり、これを利用するようになった。

2. データとパターン

1. データは、横断データとして収集する。これは、埋設物などは、同一放射時間内の、反射面積が広くとれるからで、縦断した場合、その面積は、小さいので表現されにくい。

ある物体の反射面積が、その存在する深さで、電波の透過面積に比べ、どの程度の割合を持つかで、データへの表現は異なる。浅く太い管は、縦断でも求められるが、細い管や、太くても深いものは、データの求められるチャンスは、限られる。反射面の広さは、各種の要因が有り、決定は出来ないが、150MHzアンテナ使用の場合、深さ1mで、空洞では、平面積30×30cm、厚さ5cm以上、対直線物では、100φの鋼管で長さ50cm以上を必要とする。

2. データの基本は円弧状である。

データは、一般に円弧状に表現される。そのため、ある割線に表現された円弧状のデータは、求める物、そのものとは限らない。

たとえば、埋設物と空洞との間違い。石などと、空洞、埋設物との間違いなどである。

遺跡調査では、データは複雑なため、このような注意をしなければならない。図10は、地中における表現例である。

3. パターンラインとリアルラインの分離。

データは、パターンによって表わされるが、このパターンの合成によっては、パターンの連続による一体化した、地中状態と整合性の有るデータが求められる。これは、リアルデータとして、パターンデータと区別して、データの解析に役立てることができる。そのようなものには、地層、土層、構造物平面等がある。

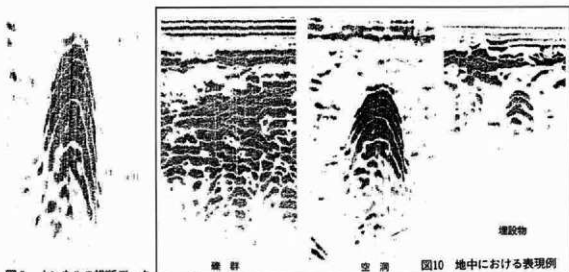


図9 トンネルの横断データ

図10 地中における表現例

4. パターンの解析

地中レーダの使用は、パターン解析手法の理解が必要である。

地中レーダのデータを見ると、あたかもセンサーから、一本の細いビームが、地中の断面データを収集しているように見られる。これは、図形がもたらす錯覚で、実際には、電波は、広い範囲の地中透過を行い、表現される反射図形は、広い範囲の反射波の状況であり、絶対にセンサーの真下のものばかりではないので、解析に注意しなければならない。

センサーを移動させると、画面上に、地中での電波の、反射量、反射状況による図形が出来る。この図形をパターンと称する。地中レーダの利用は、このパターンの成立を解明し、地中の様子を分析するパターン解析が、重要な作業である。



図11 A パターンデータ
B リアルデータ

5. パターンの成立

1) 電波の広がり。(図12-1)

電波は、楕円錐状に地中に透過していく。(これは、多くのデータを分析した結果、求められた考え方である。)

2) 反射の強さ。(図12-2)

深さ方向では、1mから2m付近が最も効果がよい。(これは多くの反射物体の実験から、導きだされた。)

この効果をレンズ状放射ともいい、普通の空間レーダにもみられる現象である。

レンズ状範囲は、回帰周波数帯の、効率のよい範囲として考えられる。

3) パターンの発生。

反射波は、回帰した時間によって、その時間の場所に、その強さに応じた色で表される。電波の広がり、1) のようになっているので、有る一点はセンサーの移動にともない、円弧状に表現される。このようなことをパターンという。

図13は、円弧状表現の成立ちである。

4) パターン図形の合成。

地中データは、反射物体が複雑な場合、パターンも複雑になる。従って、先ずデータを見る時は、パターンが正常に発生したかどうか、注目することが大切である。

資料2は、パターン発生の結果図である。

5) 以下は、データ収集の不可能なものである。

- ・垂直方向は、表現されない。

(杭、矢板、垂直断層の割れ目ラインなど)

- ・電波を通過させないものや、電波の減衰の大きい物質、障害物の下方デー

図12-1

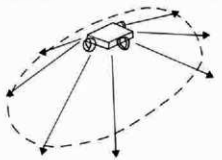
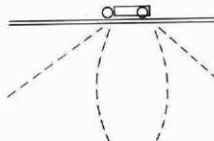
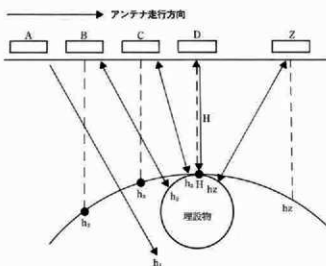


図12-2



タは収集出来ない。

(空調、暗渠、側溝、中空埋設物、金属板)



Aでは、埋設物をとらえていない。

Bでとらえた埋設物は、Hの時間に対し h_2 の時間位置に表示される。

C、DとH時間まで連続する。

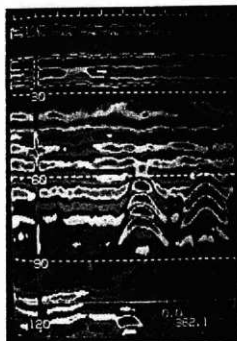
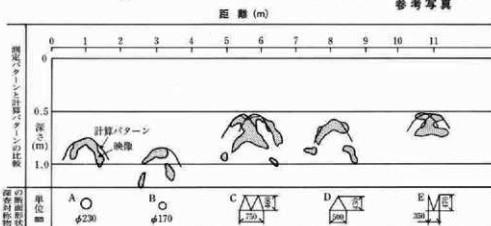


図13



野外確認実験による測定結果及び計算により求めたパターン
(Comparison of Experimental and Calculated Echo Curve)

資料2 鹿島建設技術研究所 (結果図)

●このようなデータ解析上の問題が有るため、パターンは、つねに正しい形態が要求される。距離エンコーダーと直結されるCRTモニター使用の地中レーダは、データスケールが、つねに一定に保てるため、パターン表現に信頼がおけることとなる。

IV 遺跡調査でのパターン解析

パターンとは、電波の反射波形を水平方向に集中的に並べて作り出す土中の図形である。

1. パターンの基本は、円弧である。

電波は、楕円錐状に地中に放射され、各々、反射物から回帰する。

同質のものでも、センサーの進行方向に対し存在している形体により、反射量が違う。

図14-1は、円弧表現がなされる場合で、これは同一距離（時間）に反射面積が多いためである。

図14-2は、直線表現になるが、細い管などは、何の表現もされない。

また、太い管で表現されても少し位置がずれると消えてしまう。

これは、反射面積の角度が全部違うため、反射面積の範囲が小さくなるからである。

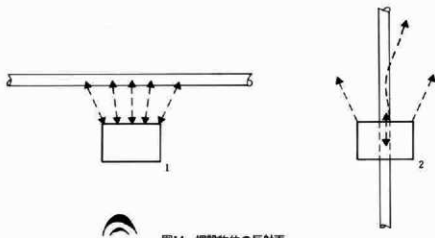


図14 埋設物体の反射面

2. 遺跡データは、複雑なパターン図形の集合。

平面積の広いものは、パターンの集合として反射面そのものが、図上、表現される。地層、又は、土層があり、大きな構造物面も含まれる。これをリアルラインと呼称する。

しかし、地層や土層も、何かの境目では、その境目の状態、大きさによっては、パターンが発生する。一つの図形の中から、パターンとリアルラインとを区別する必要がある、比較的、面倒で、誤差や判断違いを起こしやすい。

大略、以上のような感じで、ここに他の要因が入ってくると、より複雑なデータが収集される。

3. パターン図形はいろいろな誤差を含む。

- 1) 距離計の動きが不規則
 - 2) 地形、地層による反射波のゆがみ
 - 3) 土中含水率等による反射波のゆがみ
 - 4) 画面判読点の誤り（判読誤差、ミス）（解析誤差）
 - 5) 現場位置記入上の誤り、誤差
- } パターンやリアルラインのゆがみ

従って、目的とする対象物の位置誤差をどの程度の範囲にとどめるかで、測定作業工程の内容を変えなければならない。

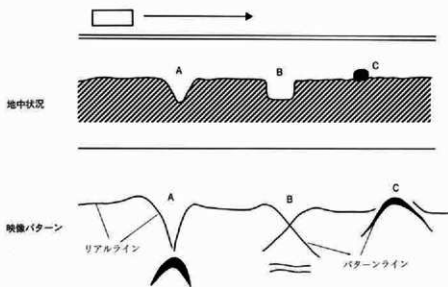


図15 リアルラインとパターンの発生

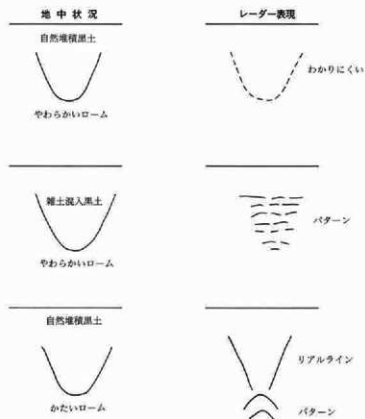


図16 ローム層遺跡での反射波の取得条件（溝の場合）

4. 遺跡調査での作業能力

操作時間は、一般に、障害物のない平坦な舗装面の1kmの測定がH時間とした場合、山林地で伐採跡を行ってもH時間内に30%が限度である。判読結果を伴い、精度を要求されれば、さらにその測定距離は、少なくなる。

従って、広い面積では、精度より量をまず行い、その結果をもとに局部的に精度の高いデータ収集を行う。一般に、遺跡の場合、H時間当たり、70%が限度である。

V 地中レーダの原理と構造

1. 地中レーダ探査法の原理

地中レーダ探査法は、地中に埋設されている配管類、空洞等の位置および地下浅所の土質状況等の探知を目的に開発されたものである。

アンテナ部から地中に、VHF (100~300MHz) と呼ばれる極超短波帯 (図17) の電磁波パルスを送射し、地中の反射面で反射し戻ってくる反射波を受信して、信号処理を行ない、アンテナ走行線沿いの地下断面映像をブラウン管上にカラー表示するので、地下構造を直視的に把握できることが特徴である。

ブラウン管の横軸は、アンテナの移動距離、縦軸は、反射走時 (パルスが発信されてから受信されるまでの時間) を表している。また、カラー表示は、受信強度区別別に設定される。

1. 受信強度

反射波がアンテナで受信された場合の受信電力 (Pr) は、レーダ方程式で近似される。

$$Pr = Pt \cdot Gt \cdot Gr \cdot Re^2 \cdot \lambda^2 \cdot S \cdot R^2 \cdot \frac{e \times D \cdot (-4 \alpha L)}{64 \pi^2 L^3}$$

ここに

Pt: 送信電力	S: 反射面の有効反射面積
Re: アンテナの受信効率	R: 反射面の反射係数
Gt: 送信アンテナの利得	α : 地中における減衰係数
Gr: 受信アンテナの利得	L: 反射面の深度
λ : 電磁波パルスの波長	

Pt・Gt・Gr・Re²は、探査機固有の定数であり、感度調整により可変できる。電磁波パルスの波長 (λ) は、機種により固有の値となる

SおよびR、 α は、反射体の電気特性により変化する変数であり、金属物体や空洞等の反射面の反射係数、および有効反射面積が大きいと反射強度が強くなる。また、(深度)⁴で減衰するので深度の深いほど反射強度は弱くなる。

文献資料

電気通信大学 鈴木啓
電波による地中・水中の探査
計測と制御
Vol. 20 No. 8
昭和56年8月

文献資料

株式会社 光電製作所
地中レーダKSD3AM
取扱い説明書

2. 反射係数 (R)

反射は、媒質中の電気特性が異なる境界層で発生し、反射係数は次式で表される。

$$R = \frac{\sqrt{\epsilon_1} - \sqrt{\epsilon_2}}{\sqrt{\epsilon_1} + \sqrt{\epsilon_2}} = \frac{C_1 - C_2}{C_1 + C_2}$$

ここに

ϵ : 媒質の比誘電率

C : 媒質中の電磁波の伝播速度

$$C = 3 \times 10^8 / \sqrt{\epsilon} \quad (\text{m/s})$$

すなわち、2層の、誘電率 (または伝播速度) の差が大きくなるほど反射係数は大きくなる。

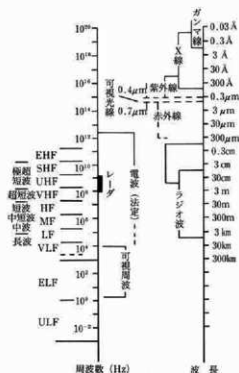


図17 地中レーザ法に利用される電磁波パルス帯

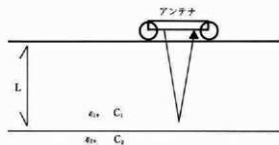


図18 媒体の電気特性

3. 反射面の深度

地中レーダ探査法は、反射法であるので、地下の反射面の深度（d）は、次式で表される。

$$d = 0.5 \times C \times T = 0.5 \times \frac{3 \times 10^8}{\sqrt{\epsilon_1}}$$

ここに

T： 反射走時

参考として、主な物質の電気的性質を表1に示す。

表2に示すように、比誘電率は、材質により、電磁波速度が大きく変化する。また、現地で比誘電率を連続的に測定することは困難であるので、調査地の土質の平均的な比誘電率を仮定して深度に換算する。このため、探査機では、表2に示すような仮定比誘電率に対応した探知レンジが設定されている。ブラウン管の縦軸は、深レンジで、120ms幅の反射走時を表示しているが、探知レンジを設定すると深度表示（m）変換することができる。比誘電率は仮定しているため深度は正確ではない。

表1 主な物質の電気的特性

名称	比誘電率 ($\Omega \cdot m$)	比誘電率	電磁波速度 (cm/ms)
空気	—	1	30
アスファルト	~ 1000	2.5~3.5	16~19
コンクリート	~ 100	3~ 9	10~17
土	肥後土	100~ 1000	9~ 14
	砂質土	50~ 400	11~ 18
	シルト土	20~ 200	14~ 36
	粘土	1~ 30	25~ 56
岩	砂岩	200~ 1000	9~ 14
	石灰岩	2000~ 10000	6~ 11
	水	—	3.2
水	—	81	3.3
海 水	0.05	81	3.3

表2 探知レンジと比誘電率 (KSD-3AM)

探知レンジ 比誘電率	浅		深	
	表示深度	深度スケール	表示深度	深度スケール
(乾土)	5.6	0~3.8 m	1.0m毎	0~7.6 m 2.0m毎
砂 地	6.7	0~3.47m	#	0~6.95m #
	8	0~3.18m	#	0~6.36m #
市街地	9.5	0~2.91m	0.5m毎	0~5.83m 1.0m毎
	11	0~2.71m	#	0~5.42m #
農 地	13	0~2.49m	#	0~4.99m #
	16	0~2.25m	#	0~4.5 m #
(湿度)	22	0~1.91m	#	0~3.83m #
	32	0~1.59m	#	0~3.18m #
81	0~1.00m	#	0~2.0m #	

2. 地中レーダ探査装置の概要

1. 探査機の構成概要

探査装置の構成は、図19に示すようにアンテナ部と送・受信部、表示部、記録部からなる。

受信アンテナ部の発信装置から指向性を持ったパルス状の電波を地中に発信すると、地下の電気特性が変化する境界面で電磁波が反射され、再び地表に戻ってくる。この反射波は、アンテナ部の受信装置により受信され、電気パルスに変換される。電波の送・受信10回毎に、受信パルス波を平均し、反射強度区分をおこない、区別別にカラー指示（8色）を行い、ブラウン管上の縦方向の1本の走査線として表示する。

1本の走査線は、256個の画素（ビット）で表わされる。

アンテナ部の車軸には、移動の距離を検出する“エンコーダー”が取付けられており、これから発信される距離検出パルスに同期して、一定距離間隔で送受信を繰り返す。このため、アンテナの移動線（測線）沿いの地下情報が連続的に表示される。横方向は、1画面あたり、256本の走査線で構成される。

したがって、地中レーダの画像は、横軸を水平距離、縦軸を反射走時（深さ）とした座標軸に、反射強度区分ごとに色別された縦横各256個の画素で構成されたものである。

処理された信号のデータは、データレコーダーに記録しておき、室内で再生でき、再生表示の映像を写真撮影し、その写真により解析を行う。

図20は、ディスプレイ（または焼き付けられた写真）の映像の見方を示すものである。

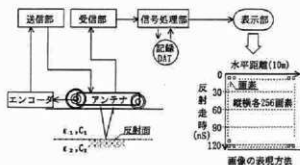


図19 地中レーダ探査装置概略図

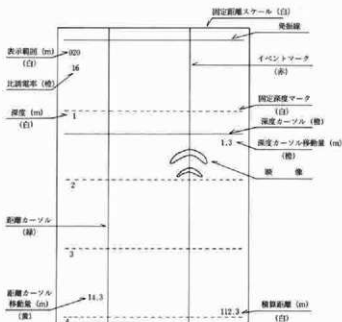


図20 CRT映像表示例

2. 主要性能および仕様

今回使用した地中レーダ装置の性能および仕様は、表3および表4に示しております。

表3 主要性能

探 査 深 度	2m(max)アスコン45型2層構造舗装下の開 東ローム層中でのφ100mm鋼管が探知可能	
分 解 能	水平	75cm (深度1.5mの100φの鋼管) 垂直
表 示	アンテナ走査断面をカラーブラウン管に表示	
アンテナ走査速度	1.0m/s (max)	
電 源	A C 100V 50/60Hz 200VA	
周 囲 温 度	-0℃～40℃	

表4 主要仕様

送 信 器	送信パルス 約150Vpp	6nsモノサイクリックパルス 繰返し周波数 50KHz
受 信 器	利 得 S T C	55dB ± 3dB (可変) 22dB ± 3dB
サンプラー	利 得	6dB以上
ビデオ増幅器	入 力 出 力 利 得 S T C	10mVpp～10Vpp 20Vpp (max) 0～20dB可変 0～40dB #
表示機構	表 示 画素密度 映像同期 映像モード	11インチ カラーブラウン管8色 256ビット×256ビット アンテナ走査距離に同期表示又は 時間表示の切換 生データと処理データの切換表示
信号処理	空間フィルタ法 差 分 法	水平距離方向のフィルタ 水平方向の固定エコー除去

VI 日本における地中レーダの開発と今後

昭和49年、東京電力土木本部の長坂は、米国土本誌エンジニアニュースレコードの中に次の様な記事を認めた。

それは、米国内にあるGSSI社の紹介というもので、次のように記載されていた。

「GSSI社の製作販売する Underground Radar は、地下水及び水位、転石、鉱材、パイプ、土管、空洞の探知、また船で引いて湖底の測深などが可能である。」

送電ラインの地中化を進めようとする東京電力としては、地下埋設物の状況把握は、きわめて重要なことであった。長坂は、その手法の概要につき、資料を集め、研究した結果、我が国がその頃より急成長をしつつある、ハイテク分野の技術を利用して研究することにより、より高度なものを製作できるかもしれないと考え、社内答申した。これをうけ、東京電力総合研究所は、電気通信大学に外注依頼した。

電気通信大学の計測研究室教授鈴木木務は、米国に渡り、マサチューセッツ工科大学をベースに文献などを調査し、開発が可能であることを知った。

東京電力総合研究所では、何社かへの打診において、応答のあった(株)光電製作所と開発を開始した。(株)光電製作所は、その前身を海軍の技術研究所の電波傍受分野に始まる海洋機器のメーカーであるが、技術本部長の田中は、以前、運輸省の要請により、滑走路下の地盤調査手法の研究を依頼され、超音波が利用出来ないか研究開発した経験がある。田中は、この種の作業の出来るこのシステムについて、興味を持った。

昭和51年、(株)光電製作所は、朝倉、堀田、野津、木下等を中心とする研究

開発チームをつくり、開発が開始された。しかし、最大の問題は、その基本的内容に踏み入る基礎データは、どこにも何もなかったのである。

この頃、土木現場においても、この種の機器の重要性が叫ばれるようになる。土木工事における埋設物事故の多発性は、その損害やトラブル問題から、各現場における最も頭の痛い事実であり、各建設関係者は、常にこの問題に良い方法を求めている。

(株)光電製作所の地中レーダ研究開発グループは、文献収集から基礎的な技術問題まで、まったくの手さぐりの状況の中で進んでいた。このため、電気通信大学鈴木、荒井による基礎論の確立も急がれ、検討会がくり返された。

昭和53年頃、山梨県上野原町にある(株)光電製作所上野原工場に実験のためのフィールドが完成した。そこには、東京電力の求めに応じた精度を確保するためのテスト埋設物が埋められてあった。

昭和54年、実験機による埋設物の探知に成功。

昭和55年、実用実験機の製作が開始された。

この頃、(株)光電製作所は、海洋開発機器の一つに、カラー魚群探知機の製作に成功し、業界に先駆け発表していた。そして、地中レーダにもこの技術が取り入れられた。それは、将来、カラーCRT映像などが、画像処理技術との関係から、切り離せないものとして考えられたからである。

昭和56年、カラーCRT、距離エンコーダ、画像処理CPUなど当時のハイテク機能を伴った実用実験一号機が完成、報告された。

しかし、その後、実用としての地中レーダの利用は、遅々として進まない。フィールド以外になると、データが何を意味するかよくわからないためである。

昭和58年、鹿島建設技術研究所松本、阿部、土弘、五十嵐のグループは、データが、それぞれの物体で特有の表現を持つことに着目、これをパターンと称し、パターン解析の基本データの収集実験を行った。その結果、複雑な日本の土質では、より多くの現場実証を行い、パターンの基本理論を作成することが、地中レーダの活用のための最短の道であることを報告した。それまで、波形解析を主体としたものから、全データの比較法やデータ図形の判読法で地中の状況を知る様になり、地中レーダ普及へとつながった。

しかし、波形解析、信号処理などの技術が無駄というわけではなく、今後、演算速度の速い小型コンピュータなどの発達と、多くの実証データの活用により、波形解析、信号処理は、重要性を増し、その発達により、データ判読や、地中状況図の作成は、人間の手を離れていくようになるであろうし、考古学分野へもその技術は急速に広まっていくと考えられる。

執筆者紹介

氏名：渡辺 広勝
 所属：テラ・インフォメーション・エンジニアリング
 連絡先：〒227 横浜市緑区板谷30-6
 (045) 982-1776

〔1〕田篠中原遺跡の提起する諸問題

菊池 実
飯塚 聡

1 環状列石

群馬県内で検出された環状列石は、田篠中原遺跡で3例目であった。その後、2遺跡で検出され、また環状列石と考えられる遺構もあり、現在では6例になっている。時期別には中期前半1例(利根郡月夜野町十二原Ⅱ遺跡)、中期末4例(吾妻郡中之条町久森遺跡、富岡市田篠中原遺跡、多野郡吉井町長根安坪遺跡、渋川市空沢遺跡)、後期1例(碓井郡松井田町行田Ⅱ遺跡)である。

十二原Ⅱ遺跡⁽¹⁾は、二重の環状構造をとるものと思われ、長径22m、短径18mの範囲に礫が散漫的に配置されている。この礫の配置を子細に検討すると、内側と外側に配置された礫群に分解できる。内側は8×6m程の規模を有し、外側は22×18mの規模となっている。そしてこの配石間に焼土の堆積2カ所が認められた。いずれも1×0.65m程の範囲であり、掘り込みは確認できなかった。内側の配石には26号土壇(配石墓)が、外側の配石には屋外埋設土器が存在するなど、特徴的である。この配石遺構は北西部で途切れて、中期前半の居住域と結ばれているなど非常に興味深い構造となっている。そしてこの配石を取り囲むように縄文時代の土壇が存在することも重要な事実である。

久森遺跡⁽²⁾は、推定直径40mと推定直径30mの二重の環状構造を呈している。列石は人頭大から拳大の安山岩礫を集めたものである。列石の構築時期は田篠中原遺跡と同時期の加曾利E3式期に求められる。調査は列石下までは及んでおらず、環状列石の性格を考えるうえで重要な役割を果たす土壇の有無については残念ながらわからない。ただし十二原Ⅱ遺跡例や田篠中原遺跡例と同様に列石内に配石墓と屋外埋設土器を伴っている。列石間からは柄鏡形敷石住居跡3軒、円形の住居跡1軒が検出されている。

長根安坪遺跡⁽³⁾は、推定直径約15mの環状列石であり、多孔石・石皿・焼石等の礫を使用している。残念ながら複合遺跡のために列石の約1/2程は破壊されたものと思われるが、残存している列石下には直径約1.3m程の土壇群が存在している。これらの土壇内覆土は残存脂肪分析を実施しているが、考古学的所見からは墓壇と考えられるものであった。

空沢遺跡⁽⁴⁾は、列石が幅1m、長さ30mにわたり検出されている。加曾利E4式期の柄鏡形敷石住居跡6軒との関連が考えられている。この列石は調査概報では石垣状遺構として報告されており、また多孔石・石皿は40個以上出土しているという。環状列石として把握して間違いのないであろう。

行田Ⅱ遺跡⁽⁵⁾は、後期の環状配石墓群で3群検出されている。現在調査中の遺跡であり、詳細は不明である。

(1) 菊池 実編『三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡』1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(2) 丸山公夫編『上沢遺跡群』1985 中之条町教育委員会

(3) 『年報8』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(4) 『群馬県史 資料編1 原始古代1(旧石器、縄文)』1988 群馬県

(5) 『行田Ⅱ遺跡・行田Ⅱ遺跡 現地説明会資料』1989 山武考古学研究所

以上が、県内から検出された環状列石の概要である。中期前半に登場して、中期末段階では数を増している。これらの環状列石は孤立して存在するものではなく、縄文集落の中核・中枢として重要な意義をもつ円形広場として機能していたことがわかる。田篠中原遺跡の環状列石は、列石下の3基の屋外埋設土器の在り方から、加曾利E3式期の短期間で構築されたことがわかる。そしてこの列石の弧に沿うように同時期の敷石住居跡が環状に配置された集落構造をとることからも、列石のもつ意味は縄文人にとっては神聖なものであったのではなかろうか。ところがE4式期になると敷石住居跡は極端に列石に近接して構築されるが、その配置はE3式期とは大きく異なり、列石の東側には住居は構築されなくて、列石の中心から北西方向に集中していた。田篠中原遺跡ではE3式からE4式期になって集落構造が大幅に変わってくるが、これはまた列石（円形広場）に対する縄文人の意識の変化とも読み取ることができるであろう。

2 敷石住居跡

当遺跡からは中期加曾利E3式期の敷石住居跡7軒と同E4式期の敷石住居跡4軒が検出されている。時期決定については埋壘と炉体土器を基本とした。

No.	規模()は現状 上段は土葬部下段は掘出し部	形態(推定)	時期	炉	埋壘	列石の中心からの距離
1	② 2.75×2.0m	(円形)	E3	石囲い炉	斜位	北東約96m
2	① 1.65×1.30m	(円形)	E3	地床炉	斜位	北東約56m
5	3.70×3.5m	円形	E3	石囲い炉	逆位	北北西39m
17	(5.0 × 3.1)m	(円形)	E3	石囲い炉	不明	北北東59m
36	2.6 × 2.6m 3.4 × 0.5m	柄鏡形	E3	石囲い炉	斜位 斜位	西南西101m
37	4.0 × 3.7m 2.7 × 1.1m	柄鏡形	E3	石囲い炉	不明	南西118m
38	(4.6 × 4.0)m	(柄鏡形)	E3	不明	斜位	西115m
8	2.4 × 2.3m	柄鏡形	E4	石囲い炉	斜位	北東25m
23	3.0 × 3.0m 3.4 × 0.9m	柄鏡形	E4	石囲い炉	斜位 斜位	北西46m
24	3.8 × 3.2m 3.4 × 1.2m	柄鏡形	E4	不明	斜位 斜位	北西43m
26	(3.4 × 3.3)m (1.4 × 0.6~0.8)m	柄鏡形	E4	埋壘炉	斜位	西北西47m

E3式期の敷石住居跡を概観すると、柄鏡形を呈するもの2軒(36・37号配石遺構)、円形を呈するもの1軒(5号配石遺構)であるが、1・2・17号の配石遺構は円形の敷石住居跡である可能性が高く、38号は柄鏡形を呈する可能性が高い。結果的には円形4軒、柄鏡形3軒となり、E4式期の敷石住居跡がすべて柄鏡形を呈するのとは対照的である。当遺跡からはE3式期の円形の竪穴住居跡2軒が検出されていることを考えると、住居形態が円形竪穴住居跡から敷石住居跡へと変化する過渡的段階と判断することができる。すなわち5号配

石遺構は敷石住居跡の初源形態ととらえることができるのではなかろうか。

5号配石遺構は長径3.7m、短径3.5mのほぼ円形に石を巡らし、炉北側に部分敷石を施している。部分敷石の範囲は長径約1.5m、短径約0.8mであった。1・2号配石遺構が敷石住居跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状態であり、炉跡と埋壘の存在からであった。このほかに部分敷石をもつ遺構は、36号配石遺構に認められた。E4式段階の敷石住居跡には部分敷石は認められず、また主体部全面に敷石を施すことはない。

E3式期とE4式期の敷石住居跡に共通する要素としては、主体部を圍繞する縁石があげられる。E3式期では不明の3軒を除いた4軒に認められているが、縁石に使用した石は全体的には大小様々な石が選定されており、統一性はとれていない。しかしE4式期の敷石住居跡の縁石では比較的統一のとれた石を選定していることがわかる。張出し部の敷石については、E3式期・E4式期とも主体部の敷石に比べると明瞭であり、かなり意識的に構築されていることがわかる。また張出し部に立石を伴う住居跡がE3式期に1軒、E4式期に1軒確認された。

敷石住居跡からの出土遺物は、埋壘・炉体土器・土器片と石器類である。石器類では敷石住居跡全体で見た場合、多孔石38点(25.3%)、凹石29点(19.3%)、打製石斧21点(14%)、磨製石斧(成品)18点(12%)、磨石13点(8.7%)、石皿11点(7.3%)、磨製石斧(未成品)10点(6.7%)、砥石5点(3.3%)、敲石3点(2%)、丸石・台石各1点(各0.7%)であった。多孔石の出土状況の検討は、〔2〕出土石器の検討の項目中で述べているのでそちらを参照していただきたい。

3 配石遺構

当遺跡からは36基の配石遺構が検出された。各配石遺構からは縄文時代中期加曾利E3式土器片から同E4式土器片が出土している。配石遺構の時期決定については明確にすることは困難であったが、その主体となる土器片によって時期決定を行った。E3式期に構築され、E4式期まで機能し続けたと考えれば簡単であるが、実際には敷石住居跡にかぎってみても、E3式期とE4式期においては遺構配置に大幅な変更があることから、配石遺構についても同様な傾向を示すことが当然考えられた。しかし、埋壘や炉体土器を伴わないことから明確な分類は実施し得ず、主体となる土器片によって時期決定を行わざるを得なかったのである。その結果、E3式期の配石遺構は20基、E4式期の配石遺構は13基、土器片の出土がなくて時期を決定できなかった配石遺構は3基となった。

配石遺構の規模は、最小0.33㎡、最大62.9㎡であり、平均は15.4㎡となった。時期別にみるとE3式期では0.66㎡～2.7㎡に5基、6.1㎡～7.3㎡に3基、10.7㎡～11.2㎡に4基と集中しており、15㎡以上ではまばらであった。E4式期で

は最小2.6㎡、6.9㎡～8.2㎡の間に4基集中しており、18.6㎡以内に10基がまとまっている。E3式期に比べてやや大きな傾向にある。しかし使用石材の点数では、E4式期の配石遺構では1㎡あたりの点数は、一部を除けばE3式期よりも少ない傾向が認められた。

明らかに環状構造を意識して構築されている配石遺構には、4号・44号・50号の3基があげられる。4・44号の2基については2重構造が考えられた。これらの所属時期は加曾利E3式期である。半円構造をとる遺構には、6号・12号・40号の3基が認められた。これらの所属時期もE3式期である。他の配石遺構の形態はまとまりのないものであった。

配石遺構からの出土遺物は、土器片と石器に代表される。土器片の1㎡あたりの分布密度は、E4式期の配石遺構のほうがE3式期よりも高い。石器類では配石遺構全体をみると、多孔石39点(28.3%)、打製石斧36点(26.1%)、凹石26点(18.8%)、磨製石斧(成品)10点(7.2%)、磨石9点(6.5%)、磨製石斧(未成品)8点(5.8%)、石皿6点(4.4%)、砥石・敲石・丸石・台石各1点(各0.7%)の出土であった。これを時期別にみると、E3式期では多孔石25点(33.8%)、打製石斧21点(28.3%)、凹石10点(13.5%)、磨石6点(8.1%)、石皿4点(5.4%)、磨製石斧(成品)3点(4%)、磨製石斧(未成品)2点(2.7%)、敲石・丸石・台石各1点(各1.4%)である。これに対して、E4式期では打製石斧15点(25.9%)、凹石14点(24.1%)、多孔石11点(19%)、磨製石斧(成品)7点(12.1%)、磨製石斧(未成品)6点(10.3%)、磨石3点(5.2%)、石皿2点(3.4%)となり、石器含有率に変化が認められる。しかし、すでに5章〔2〕出土石器の検討のなかで述べたように、多孔石は配石遺構と関係のある石器と見え、多孔石に伴う祭祀が執行された場所が配石遺構であったと見ることができる。また焼石の混入率では、10%以上の混入が認められる配石遺構は9基であり、なかでも22号配石遺構のように30.7%と異常に高い配石遺構も認められた。しかし、全体的に見ると、敷石住居跡よりも焼石の混入率は低かった。

配石遺構を構成する石材の特徴は、片岩類が圧倒的に多く使用されているが、さらに片岩類は石炭片岩類の使用が緑泥片岩類の使用よりも高くなっている。48号配石遺構のように片岩類の使用が49.1%と低い以外は、大体60～70%の使用率であった。

4 埋 壘

11軒の敷石住居跡からは総計13個体の埋壘が検出されている。時期別にはE3式期の敷石住居跡からは7個体、E4式期の敷石住居跡からは6個体の出土であった。E3式期の埋壘は基本的に1個体であるが、36号配石遺構(柄鏡形敷石住居跡)では主体部と張出し部の接続部から1個体と張出し部の先端部から1個体の計2個体が出土している。E4式期では1個体出土している住居跡

2軒、2個体出土している住居跡2軒であった。その埋設場所は接続部1個体（8号配石遺構）、張出し部先端部1個体（26号配石遺構）、張出し部先端部2個体（23号配石遺構）、接続部と張出し部先端部計2個体（24号配石遺構）と、統一性はない。しかしいずれも住居の出入り口部に該当する場所である。

埋塞の埋設状態は、逆位1個体、不明1個体、斜位11個体であり、圧倒的に斜位状態で出土が多かった。土圧等の影響で斜位になったものではなく、意識的に斜位状態で埋設したことは調査から明らかであった。埋塞の欠損状態は、口縁部を欠損したものが6個体、胴下半分を欠損したものが3個体、口縁部と底部を欠損したものが2個体、底部だけのものが1個体、不明1個体となり、口縁部を欠損したものが全体の46.2%を占めていた。

埋塞について筆者は、かつて次の一文を記したことがある。「竪穴住居跡の出入り口部床面下に埋設された転用土器の事例は、今日麗大な量の検出があり、東日本の縄文時代中・後期社会におけるきわめて普遍的現象と認められるに至っている。その用途をめぐり、胎盤などの後産を収納する施設、幼児などの埋葬遺骸を収納する葬棺施設、住居の新築・建替え時の儀礼に用いる施設等の諸見解があり、過去多くの研究者を論争の渦に巻き込んできた。1981年1月末日現在、木下 忠の集成によれば、北は青森県から南は静岡県に至る276遺跡1079例の住居内埋塞が確認されているが、人骨の検出は今もって皆無である。もちろん、胎盤などの後産も形骸を残さず齧食してしまっているであろうから、今後とも確認されるものではない⁶⁾。

その後の状況は類例こそ増えているものの、用途論は決着をみていないようである。しかし最近、「残存脂肪分析法」が開発され、この分析法を用いて埋塞の性格、用途を解明できることがわかった。このため担当者間で協議して可能な限り分析を依頼することとなった。その結果、分析対象となった埋塞の個体数は6個体となった。もちろん総ての埋塞について分析を実施すれば良いわけであるが、予算の問題さらに土壌や屋外埋設土器についても実施したい意向があったために上記個体数となった。なお、分析土壌採取にあたっては、中野先生、長田所長の来跡、指導をうけた。分析結果は、4章〔1〕を参照していただきたいが簡単に表にまとめてみた。

(6) 菊池 実「埋塞葬」『縄文文化の研究』1983 雄山閣出版株式会社

No.	時期	個数	埋設場所	埋設状態	欠損状態	残存脂肪分析の結果(○実施×不)
1号配石	E 3	1	出入り口部	斜位	口縁部一部欠	○ 動物遺体の埋葬
2号配石	E 3	1	出入り口部	斜位	口縁部・底	○ 高等動物の胎盤由来の遺物
5号配石	E 3	1	出入り口部	逆位	胴部欠	×
8号配石	E 4	1	接続部	斜位	口縁部・底部欠	○ 動物遺体の埋葬
23号配石	E 4	2	先端部	斜位	口縁部欠	○ 高等動物の胎盤由来の遺物 ○ 動物性脂肪を検出できず
			先端部	斜位	口縁部欠	
24号配石	E 4	2	接続部	斜位	口縁部欠	×
			先端部	斜位	口縁部欠	
26号配石	E 4	1	先端部	斜位	底部残	×

No.	時期	個数	埋設場所	埋設状態	穴掘状態	残存脂肪分析の結果(○実施×不)
36号配石	E 3	2	接合部	斜位	胴下半部欠	×
			先端部	斜位	口縁部欠	×
37号配石	E 3	1	先端部	不明	不明	×
38号配石	E 3	1	先端部	斜位	胴下半部欠	×

6個体の埋蔵の分析結果は、高等動物の胎盤由来の遺物3個体、動物遺体の埋葬2個体、動物性脂肪を検出できなかった埋蔵1個体であった。高等動物の胎盤由来の遺物が検出されたことは埋蔵の用途を考えるうえで大きな成果である。しかし同時に検出された動物遺体の埋葬は検討を要しよう。少なくともより明確にするためにも分析試料の増加が今後も望まれる。

5 屋外埋設土器

12基の屋外埋設土器（E 3式期-10基・E 4式期-2基）が検出されているが、このうち4基については残存脂肪分析を実施して、その用途解明にあたった。詳細は4章〔1〕を参照していただきたいが、以下簡単にまとめてみた。

No.	時期	埋設状態	穴掘状態	残存脂肪分析の結果
1	E 3	逆位	胴下半部欠	高等動物の胎盤由来の遺物
3	E 3	逆位	胴部欠	高等動物の胎盤由来の遺物
4	E 3	逆位	胴部残存	高等動物の胎盤由来の遺物
6	E 3	斜位	胴部残存	動物の脂肪を検出できず

分析を実施した4例中3例の屋外埋設土器内部には、高等動物の胎盤由来の遺物が収納されていることが判明した。1号屋外埋設土器は環状列石下から検出され、3号は19号配石遺構に伴い、4号は単独の屋外埋設土器であった。いずれも逆位状態の出土であることに共通している。従来、竪穴住居跡の出入り口部に埋設された土器内部に胎盤を収納したものと考えられ、また当遺跡における分析結果もすでに記したが、今回の分析からは、さらに屋外埋設土器の用途にも確実に胎盤を収納したと考えられるものが存在しているという事実である。

〔燹棺（内部から人骨の検出された土器）を除く屋外に埋設された土器は、東日本を中心に前期から晩期にわたり確認されている。単独出土のものもあれば、複数個体出土している事例もあり、その在り方は様々ではない。報告書を概観すると、その用途について、断定はさけながらも燹棺としての機能を報告者は考えているようである。しかし、近年宮城県登米郡青島貝塚例や福島県双葉郡道平遺跡例のように意識的に獣骨（イノシシ）を収納した事例も検出されており、今後、屋外埋設土器遺構に対する安易な断定は慎み、調査に慎重を期したい¹⁷⁾。

8年前に上記一文を記したが、田塚中原遺跡のように内陸部に位置している遺跡にあっては、内容物は検出されることはほとんどないし、今後も確認され

17) 菊池 実「日本歴史地図 原始・古代編（上）埋蔵」1982 柏書房株式会社

ることではないであろう。そこで住居内埋土と同様に残存脂肪分析を実施したわけである。結果は予想もしていなかった胎盤取納という事実であった。この事実は、屋外埋設土器については壙棺、獣骨取納容器、胎盤取納などの様々な用途があることをわかり、今後も引き続き分析を実施して、その用途解明に当たらなければならないということである。

6 土 壤

総計22基の配石墓・土墳墓・土壌が検出されているが、このうち7基については残存脂肪分析を実施した。詳細は4章〔1〕を参照していただきたいが、以下簡単にまとめてみた。

No.	上面 (cm) (長径×短径)	底面 (cm) (長径×短径)	底面積 (m ²)	残 存 脂 肪 分 析 の 結 果
2	(70× 51)	(42× 31)	0.1	動物遺体の埋葬
3	(100× 95)	(78× 75)	0.5	動物遺体の埋葬
4	(124×105)	(103× 95)	0.8	動物遺体の埋葬
5	(100× 85)	(95× 75)	0.6	動物性脂肪を検出できず
6	(80× 72)	(61× 54)	0.2	再葬墓の可能性が高い
9	(128× 95)	(91× 51)	0.6	動物遺体の埋葬
10	(103× 98)	(91× 78)	0.4	再葬墓の可能性が高い

分析の結果、7基の土壌のうち4基には動物遺体が埋葬されていたと推測されたが、動物種とくにヒトの認定については、残念ながら判定はできなかったということである。しかし考古学的所見からは、2号土壌については抱石葬を想定でき、3号土壌上には墓標である多孔石が配置されているなど動物遺体の埋葬といっても、それがヒトであることには間違いのない事実であろう。5号土壌は掘り込みが浅く、また覆土中に炭化物粒子が多量に認められたことから墓墳の可能性は考えられなかったが、分析結果も動物性脂肪を検出できず、考古学的所見が正しいことも立証された。6・10号土壌は再葬墓の可能性があると指摘された。再葬とは、遺骸を一旦埋めるか、風雨にさらす死体処理の葬法があり、生体や軟部の腐敗したある時期、または完全に白骨化したある時期を経過した後、骨を取り出し再びこれらの骨を容器などに収納安置する遺骸処理の葬法であり、ただ一回の葬時で完結するものではない。洗骨葬・改葬などの語とあまり区別されないで、また互換的に用いられている。現在確認できる最古例は、埼玉県入間市坂東山遺跡例で、これは後期初頭の称名寺式土器内に熟年期の男性骨が収納されていたものである。容積の面から、また人骨の出土状況からみても、再葬手段によるものであることが看取されたものであった。6・10号土壌の分析結果は、縄文時代中期にも再葬墓は確実に存在していることを裏付け、またその葬法にあたっては土壌を使用していることが認識された。壙棺を使用していないために、これにかわる木製の容器等の使用があったかもしれないが、調査から確認されるものではなかった。6・10号土壌は縄文時代の

ごく一般的な土壌と判断されるが、人骨の検出が不可能な地域にあつては積極的に残存脂肪分析を進めて行かなければ、単なる土壌と処理され、あまり意味のない調査となってしまう恐れがある。

分析土壌を含めた土壌22基の分布は、2基の土壌を除いた20基が環状列石外に分布している。墓塚についてみると18基のうち16基が環状列石外の分布となり、明らかな墓域は列石外に構築されていることが理解できる。環状列石に伴う墓塚2基の様相は、8号土壌が環状列石下から検出され、墓標は列石に連なっていた。22号土壌は列石内から検出されたが、規模の大きな配石墓であった。一般的な墓塚とは異なり何らかの象徴と考えられるが、これら2基から環状列石は墓地遺構であると断定することは不可能であった。

おわりに

時間的・紙数の制限から当遺跡の性格を十分に深めることはできなかった。担当者としては残念に思う。今後、個々の問題については別稿を準備して担当者としての責をはたしたいと考えている。大方の御教示をお願いするしだいである。

〔2〕 出土石器の検討

— 多孔石・凹石・石皿・磨石を中心として—
菊池 実

はじめに

田籾中原遺跡からは多量の石器類が出土している。このほかに環状列石、敷石住居跡、配石遺構を構築している多量の石材も出土しており、その総点数は17,255点に達している。配石遺構等構築の石材についての検討は別稿に譲り、ここでは当遺跡出土石器を代表するところの、多孔石・凹石・石皿・磨石について、簡単に検討を加えてみた。

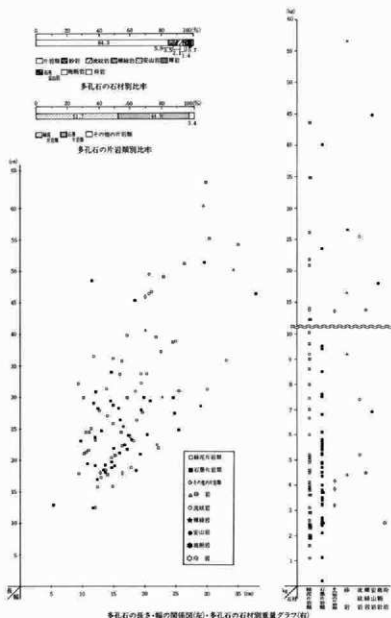
(1) 多孔石

多孔石は140点出土した。遺構別の出土点数は、環状列石15点(10.7%)、立石2点(1.4%)、敷石住居跡38点(27.1%)、竪穴住居跡12点(8.6%)、配石遺構39点(27.9%)、屋外埋設土器4点(2.9%)、土壇9点(6.4%)、廃棄場所7点(5%)、グリッド14点(10%)である。

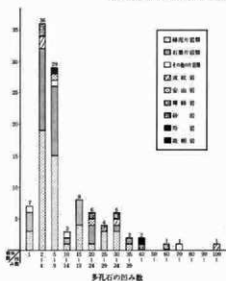
敷石住居跡38点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から25点、同E4式期の敷石住居跡から13点である。また竪穴住居跡からは12点の出土があるので、E3式期の住居跡からは合計37点の出土となる。配石遺構出土の39点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から25点、同E4式期から11点、中期末3点である。

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計50点出土しているが、平均では1軒から3.8個の多孔石が出土していることになる。配石遺構では平均1.08個の出土となり、住居跡では配石遺構の約3.5倍の出土率となっている。しかし、これは他の石器の出土率(凹石約8倍、石皿約6.4倍、磨石約3.9倍)と比べると僅差であり、また配石遺構36基中23基の配石遺構から出土していることを考えると、多孔石は配石遺構と関係にある石器と言える。多孔石の出土していない配石遺構をみると、小規模な遺構(10・13・15・41・43・49号)であったり、環状列石の張出し部(7号)に該当すると考えられる遺構である。また14・16号配石遺構からは石皿が出土している。このような事実はより一層、多孔石を配石遺構と結びつける根拠にもなるであろう。

では、住居跡からどのような状態で出土しているのだろうか。敷石住居跡から出土した38点の内訳は、鎌石として使用されているもの17点、部分敷石に使用されているもの7点、張出し部に使用されているもの6点であり、計30点の多孔石が敷石住居跡の構成石として転用されている。このほかに炉石として転用されているもの1点がある。特殊な出土状況をしているものに37号配石遺構(第116図-9)の多孔石1点がある。丸石(流紋岩)に4個の凹みを有するもので、張出し部の西に意図的に配置されていた。何らかの指標になっていたものであろう。一方、竪穴住居跡からの出土は覆土中のものであるが、2号竪穴



多孔石の長さ・重量の関係(短径)・多孔石の石材別重量グラフ(%)



多孔石の凹み数

住居跡の多孔石の出土状況には興味深いものがある。ほぼ床直上に円形状の石の分布が認められるが、その縁石部分に多孔石の出土が認められるからである。敷石住居跡の縁石に転用されている多孔石が多いことを考えると、今後、敷石住居跡出現前の様相を理解する遺構として検討して行かなければならないであろう。

環状列石出土の多孔石はいずれも大型であり、基本的には列石の指標の石となっている。土壌出土の多孔石は、墓標として使用(3・18・19号)されたり、また配石墓の石として使用(22号)されている。

このように出土状況を検討してみると、多孔石は配石遺構での使用を原則とし、そこで執行された何らかの祭祀活動に伴う祭祀具とみることができる。そして敷石住居跡の構成石にも多数転用されていることを考えると、その構築にあたっては少なからず、多孔石に伴う祭祀が反映されているもの

であろう。さらにまた土壌の墓標となっている事実は、土壌内に埋葬された人物の生前における活動を反映しているものであろうか。今後さらに類例を集めて検討していきたい。

多孔石の大きさは、最大のもので長径64.2cm、短径29.8cm、厚さ13.7cm、重量43,600g。最小は長径12.9cm、短径5.3cm、厚さ1.8cm、重量200gであり、平均値(完形・ほぼ完形から算出)は長径29cm、短径17.6cm、厚さ9.7cm、重量8,911gである。完形品は140点中106点(75.7%)、破損品は34点(24.3%)であり、完形品の占める割合が高い。凹みの数は最大102個、最小は1個であり、平均は12.3個。9個までのものが71点であり、全体の50.7%を占めている。50個以上の凹みを有するものは極わずかであった。凹みの長径は平均17mm、短径14mm、深さ5mmで逆円錐状である。

使用石材は片岩類118点(84.3%)、砂岩8点(5.7%)、流紋岩5点(3.6%)、輝緑岩3点(2.1%)、安山岩2点(1.4%)、輝岩・石英安山岩・斑極岩・矽岩各1点(各0.7%)である。片岩類の使用が圧倒的に多いが、これはさらに緑泥片岩類61点(51.7%)、石墨片岩類53点(44.9%)、その他の片岩類4点(3.4%)に分類できる。個々の石材では点紋緑泥片岩51点、網雲母石墨片岩44点となっている。緑泥片岩類は凝灰質岩の中程度変成作用を受けた岩石である。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造がよく発達し、薄くまた厚く板状である。産地は三波川結晶片岩の分布する地域に、石墨片岩類と接して産出するもので、雄川、下川、野上川、銅川の流域にみられる。石墨片岩類は粘土質岩の変成岩であり、暗黒灰色で節理がよく発達している。産地は雄川や下川上流域である。緑泥片岩類・石墨片岩類の採取地は雄川の河原であろう。

(2) 凹石

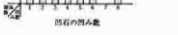
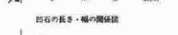
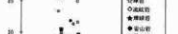
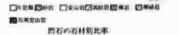
凹石は113点出土した。遺構別の出土点数は、環状列石17点(15%)、敷石住居跡29点(25.7%)、竪穴住居跡9点(8%)、配石遺構26点(23%)、屋外埋設土器4点(3.5%)、土壇1点(0.9%)、廃棄場所4点(3.5%)、グリッド23点(20.4%)である。

敷石住居跡出土の29点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から15点、同E4式期の敷石住居跡から14点である。また竪穴住居跡からは9点の出土であるから、E3式期の住居跡からは合計24点の出土となる。配石遺構出土の26点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から10点、同E4式期から14点である。

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計76点出土しているが、平均では1軒から5.8個の凹石が出土していることになる。配石遺構では平均0.72個の出土となり、住居跡では配石遺構の約8倍の出土率となっている。多孔石の出土率とは大きく異なっている。凹石が産果類、特にクルミの破砕具としての機能をもっていたものであることを考えると、日常生活の場である住居跡からの出土は当然であり、配石遺構からの出土が少ないのは、配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを反面裏付けていることになろう。

凹石の大きさの平均値(完形・ほぼ完形から算出)は、長径15.1cm、短径8.5cm、厚さ3.8cm、重量634gである。完形品は113点中90点(79.6%)、破損品は23点(20.4%)であり、完形品の占める割合が高い。また凹みの数は最大8個で、2個と4個の凹みをもつものが多く、平均は3個となった。

使用石材は、片岩類92点(81.4%)、砂岩5点(4.4%)、安山岩・流紋岩・輝緑岩各4点(各3.5%)、輝緑岩3点(2.7%)、石英安山岩1点(0.9%)である。片岩類では緑泥片岩類63点(68.5%)、石墨片岩類24点(26.



1%)、桐雲母片岩類5点(5.4%)であり、点紋緑泥片岩の占める割合が高かった。点紋緑泥片岩は緑泥片岩に曹長石の白っぽい点紋を混在する岩石である。これらの石材は雄川から採取したものであろう。

(3) 石皿

石皿は30点検出された。遺構別の出土は、環状列石5点(16.7%)、敷石住居跡11点(36.7%)、竪穴住居跡3点(10%)、配石遺構6点(20%)、土壇1点(3.3%)、廃棄場所2点(6.7%)、グリッド2点(6.7%)である。

敷石住居跡出土の11点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から7点、同E4式期の敷石住居跡から4点である。また竪穴住居跡からは3点の出土があるので、E3式期の住居跡からは合計10点の出土となる。配石遺構出土の6点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から4点、同E4式期の配石遺構から2点である。

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08個の石皿が出土していることになる。配石遺構では平均0.17個の出土となり、住居跡では配石遺構の約6.4倍の出土率となる。石皿は磨石との併用によって、主として植物性食糧の圧潰・破砕・粉化等に使用されたことを考えれば当然の結果であろう。しかしその出土状況を検討すると、2次的使用(転用)を思わせるものが多数ある。環状列石の指標となっている石皿2点、列石内から3点、敷石住居跡の緑石として転用されているもの6点、張出し部敷石として転用されているもの1点などがあり、本来の使用目的後の転用率は非常に高い。このことはまた破損品が30点中24点(80%)占めていることと関係しているであろう。すなわち、石皿の転用にあたっては土器の転用と同様に意図的に欠損されたとみることができる。

使用石材は片岩類20点(66.7%)、砂岩10点(33.3%)である。片岩類はさらに緑泥片岩類17点、石墨片岩類3点に分けられ、点紋緑泥片岩の使用が15点と圧倒的に多かった。また砂岩が特徴的に使用されていることも石器使用本来の目的と合致するものである。砂岩の産地は、当遺跡の南部で三波川結晶片岩と断層で接する地域に分布するのが顕著で主な産地であり、雄川にも転石が得やすい。

(4) 磨石

磨石は35点検出された。遺構別の出土は、環状列石3点(8.6%)、敷石住居跡14点(40%)、竪穴住居跡1点(2.9%)、配石遺構10点(28.6%)、土壇3点(8.6%)、廃棄場所2点(5.7%)、グリッド2点(5.7%)である。

敷石住居跡出土の14点の内訳は、加曾利E3式期の敷石住居跡から8点、同E4式期の敷石住居跡から6点である。配石遺構出土の10点の内訳は、加曾利E3式期の配石遺構から6点、同E4式期から3点である。

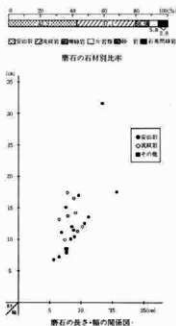
〔2〕出土石器の検討

敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08個の磨石が出土していることになる。配石遺構では平均0.28個の出土となり、住居跡では配石遺構の約3.9倍の出土率となる。しかしこれには凹石のなかに磨石として利用されたものは除外してあるので、実際は4倍以上の差となる。磨石が植物質食糧の処理・加工具としての機能をもっていたものであることを考えると、日常生活の場である住居跡からの出土は当然であり、配石遺構からの出土が極端に少ないのは、凹石の出土傾向と同様に配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを反面裏付けていることになろう。

磨石の大きさの平均値は、長径12cm、短径8.5cm、厚さ5.3cm、重量879gであった。使用石材は安山岩14点、流紋岩13点、輝緑岩3点、片岩類2点、砂岩1点、石英閃緑岩1点であり、安山岩と流紋岩を基本石材としている。加曾利E3式期とE4式期による石材の変化は認められない。安山岩や流紋岩の利用度が高いのは、物理的にも強く、表面がザラザラしている性質が評価されたためである。安山岩・流紋岩の産地は鍋川上流及び南牧川の上流域であり、遺跡からは最短距離にして北800mのところを鍋川が東流している。遺跡の東を流れる雄川や西を流れる下川から運び込んだり、また鍋川からも運び込んだ石材である。

おわりに

以上簡単ではあるが、当遺跡から出土した多孔石・凹石・石皿・磨石について、その概略を記した。このほかにも打製石斧150点、磨製石斧81点、砥石6点、敲石4点、丸石9点、石棒1点、台石2点、立石・墓標の石等が出土している。打製石斧・磨製石斧については桜井美枝氏が検討しているので、それを参照していただきたい。また他の石器については、今回報告した石器を含め再度詳述したいと考え、現在別稿を準備中である。



〔3〕田篠中原遺跡出土石斧について

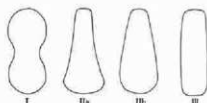
椋井美枝

田篠中原遺跡からは、打製石斧150点、磨製石斧81点が出土した。以下に打製・磨製石斧のそれぞれについて、その特徴をしるす。

1) 打製石斧

全150点を主に平面形によって4種類に分類した(第1図)。

I類:いわゆる分銅形。石器のほぼ中央部にえぐりが入る。大多数のものは両側縁にえぐりが入るが、一部片側のみのもこの類型に入れた。II類:いわ



第1図 打製石斧分類概念図

ゆる楕形。側縁の状況によって二分し、側縁が内湾するものをII a類、直線状のものをII b類とする。III類:いわゆる短冊形。基部から刃部まで幅がほぼ一定で、平面形が長方形を呈する。いずれにおいても直刃・凸刃のものがあつた。各類型の内訳は、I類51点、II a類33点、II b類49点、III類17点である(第2図)。

各類型の調整加工の特徴を記すと、I類は周辺のみ調整が施されるものが多い。特に、I類に多用される片岩類の石材のものは、その傾向が顕著である。また片岩類の石材は、片状組織を持つため¹⁾剥離が板状の片理に沿って進み、ステップ状の剥離痕を呈するものが多い。片岩類以外の石材のものは比較的調整の頻度が高く、粗い調整によって全体の形を整えた後、細かな調整をほぼ全周に加えている。刃部・えぐり部ともに平坦剥離による調整で、ブランディング状の調整は見られない。II・III類については片岩類以外の石材が多く、調整の頻度が高いものが多い。I類と同様、大まかに調整を加えた後細かな調整によって仕上げているが、刃部や基部よりも側縁部により細かな調整が加えられる例が多く、平坦剥離が多用される。また、各類型とも片岩類以外の石材のものについても、両面もしくは片面に素材となった礫や剥片の自然面や主要剥離面を残すものが見られ、概して両面全面に加工が及ぶものは少ない。

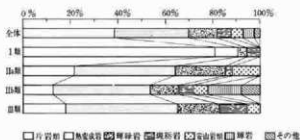


第2図 打製石斧類型組成

参考文献
 (1) 柴田秀賢・須藤俊男「原色
 藍物岩石検査図鑑」1964
 北隆館

	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長幅比
全体	14.3	6.8	2.3	316.5	2.1
I類	15.9	7.4	2.2	371.8	2.2
IIa類	13.8	6.8	2.4	320.3	2.1
IIb類	12.6	6.6	2.3	259.6	2.0
III類	14.4	5.7	2.2	269.6	2.5

第1表 打製石斧計測値平均



第3図 打製石斧類型別石材組成

完形のものについては、長さ・幅・厚さ・重量・長幅比について比較を行った(第1表)。長さ・幅・重量については平均値でI類が最も大きく、比較的大形のもの割合が高い。一方厚さではI類がIII類と並んで最も小さな値となり、分布のピークも1.5~2.0cmと最小値となる。周辺のみ調整加工が多いというI類の特徴から考えて、この厚さに見られる特徴は石斧の素材となった板状礫や剥片・稜の特徴であり、従ってI類の素材としては、他の類型に比べ若干薄手のものが選択されたと考えられる。この理由としては、I類の素材に多用されている片岩類の石材が、片状組織が顕著なため器体の全面を覆い厚みを減じような調整加工に不向きなため、あらかじめ薄手の素材を選択したり、機能的な面からより薄い形態が必要とされたことなどが推測される。長幅比は、III類が平均値で最大で分布も比較的大きな値を取り、他に比べて細長い傾向が見られる。ただし、かねてから指摘されているように、石斧においては刃部再生や破損後の再調整などの工程が普遍的に見られ、製作から使用・廃棄にいたるまでのどの段階にあるかによって形態にかなりの差が見られる²⁾。従って、III類の細長の傾向が本来的な特徴であるかどうかはなお検討を要する。

使用石材については、I類と他の類型との間で顕著な差が見られる(第3図)。I類は片岩類の石材が圧倒的に多く、次いで熱変成岩、斑岩、輝緑岩となっている。II・III類は熱変成岩が4割以上を占め最も多く、片岩類の石材は1~2割にすぎない。以下輝緑岩・斑岩・安山岩(玻璃質安山岩を含む)などが使用されている。

以上、各類型の特徴を見てきたが、最も顕著な差が見られたものは使用石材についてである。先述したとおり、片岩類の石材は片状構造を持つため片理の方向に沿って剥離が進行しやすく、それ以外の方向には割れにくい。一方熱変成岩は比較的均質・緻密で、剥離の進行が節理や夾雑物によって阻害されるこ

2) 長崎潤一「後期旧石器時代前半期の石斧—形態変化論を視点として—」『先史学研究』3 1990 阿佐ヶ谷先史学研究会

とが少なく加工しやすい。この石材の性質は、調整加工の特徴にそのまま現われており、片岩類の石材においては周辺加工のみで調整の頻度が低く、熱変成岩では調整の頻度が高い。すなわち、各石斧の調整加工の特徴は、使用石材によってある程度決定づけられている。それでは、なぜⅠ類と他の類型の間で使用石材に差が見られるのであろうか。Ⅱ・Ⅲ類の石斧は比較的平面形が整ったものが多いが、Ⅰ類ではえぐり部を除いてかなりのバラツキが見られる。このことから、Ⅰ類においてはⅡ・Ⅲ類に比べ平面形に対する規制が弱かった可能性が考えられる。もしそうであれば、素材の形態を大きく変える必要の無いⅠ類の素材として、細かな調整は加えにくい、遺跡周辺に普遍的に存在する片岩類の石材が多用されたと推測できる。もちろん、石材の選択については、機能的な面から硬度や比重なども吟味されたと考えられるが、調整を行う上での石材の特性も大きな条件になったであろう。以上のことから、田篠中原遺跡の打製石斧については、機能的・技術的な面から、類型ごとに石材の選択が行われていたものと思われる。

2) 磨製石斧

全81点のうち、一部でも磨かれた面を持つものは23点のみである。他のものは研磨面を持たないが、石材や形態の特徴などから製作途中の未製品であると考へて、磨製石斧に分類した。全点を粗割→敲打→研磨という製作工程に沿って、以下の6段階に細分した。①粗割途中：粗割によって形を整えている途中のもの。②粗割段階：粗割が完了した状態。完成品の形態に近い。③敲打途中：敲打によって形を整えている途中のもの。粗割した面をかなり残す。④敲打段階：ほぼ全面に敲打を加えた状態。⑤磨き途中：研磨によって仕上げている途中のもの。研磨面が全面に及んでいない。⑥磨き段階：ほぼ全面に研磨が施されたもの。完成品。各段階の内訳は、①：20点、②：18点、③：12点、④：8点、⑤：11点、⑥：12点である。ここで問題になるのは、粗割段階のものと打製石斧との区分であろう。両者とも剥離によって形づくられているが、打製石斧の厚さが平均2cm強であるのに対し、粗割段階としたものは2～7、8cmと厚く、調整もより粗いことを基準として分類した。また、石材も打製石斧が片岩類や熱変成岩が多いのに対し、磨製石斧は輝緑岩・角閃岩などが使用されていることなども考慮した(第4図)。

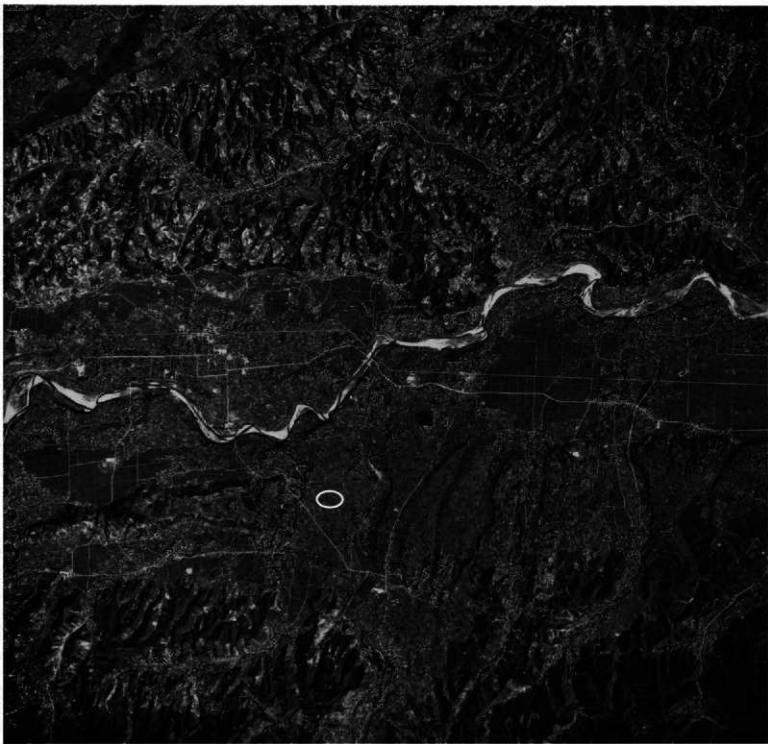
これらから、当遺跡における磨製石斧の製作工程について記す。まず素材であるが、粗割途中のものにかなりの割合で自然面が見られることから、確もしくは分割礫が利用されているようである。それらを粗い剥離によって形を整えた後、全面に敲打を施している。その後研磨を行い、一部に敲打痕・剥離痕を残すが、ほぼ全面が磨かれる。



第4図 磨製石斧石材組成

写 真 图 版

PLATES



航空写真

○田原中原遺跡





PL. 2
航空写真(遺跡上空から撮影)

PL. 3
航空写真(東から)

航空写真の撮影は、ヘリコプターとセソナ機を使用して、調査の進展に伴い随時実施した。低空からの撮影ではヘリコプターを使用し、高高度からは、セソナ機使用を基本とした。



1



2



PL. 4

1. 航空写真(西から)
2. 航空写真(南から)

PL. 5

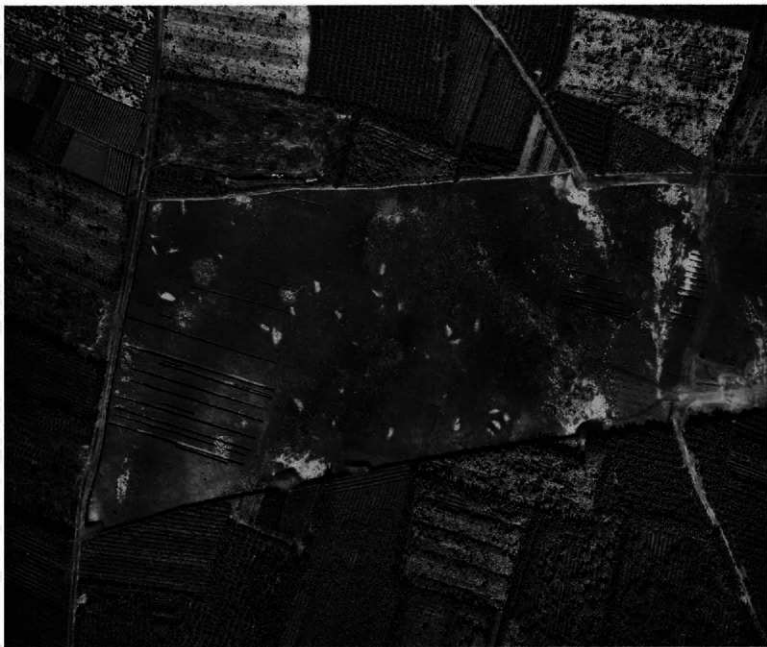
1. 航空写真(北から)

PL. 4-1は内匠丘陵上空から雄川方面を望み、図2は錦川を望んでいる。遺跡は雄川扇状地の扇先端部に位置しており、北からこの扇状地を撮影したのがPL. 5-1である。



1区全景(東から)

1区調査区は昭和61年5月から62年3月まで調査を実施した。調査区西側は0区(昭和62年度調査区)にあたる。背後の丘陵は内匠丘陵で、丘陵上には内匠上ノ宿遺跡が調査されている。



〇区全景(上空から)

〇区調査区は昭和62年4月から同年12月末日まで調査を実施した。写真右側に1区調査区が埋められている。1区・〇区の調査総面積は約15,800㎡である。

PL. 8



PL. 8-1とPL. 9-1はモザイク写真





PL.10

1. 環状列石(北東から)
2. 環状列石(北から)

PL.11

1. 調査スナップ(列石の石を囲んで)
2. 環状列石(南から)



径約38cmの環状列石であるが、列石の明確な部分はFj-44、FK-44・45・49、Fj-46・47・48グリッドにかけてであり、実際は弧状列石として理解できるものである。従来環状列石として把握されているものも石の分布に連続があることから構築当初からのものと理解してよいのかもしれない。
(本文PP.23-46)



1. 環状列石の部分(南東から)
2. 環状列石の部分(東から)
3. 環状列石の部分(北東から)



列石を構成する石の中でも指標となる石には大石が使用され、また一定間隔で配置されている。これらの石の最長間隔は3.7m、最短間隔は1mで、平均間隔は2.11mであった。これらの石の重量は一番軽いもので約17kg、最大重量は60.5kgであり、平均は約40kgとなった。



1



2



3

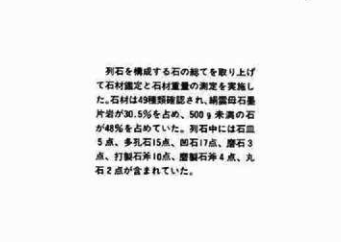
1. 環状列石の部分(北東から)
2. 環状列石の部分(北東から)
3. 環状列石の部分(北東から)
4. 環状列石の部分(北東から)
5. 環状列石の部分(北東から)
6. 環状列石の部分(北東から)



4



5



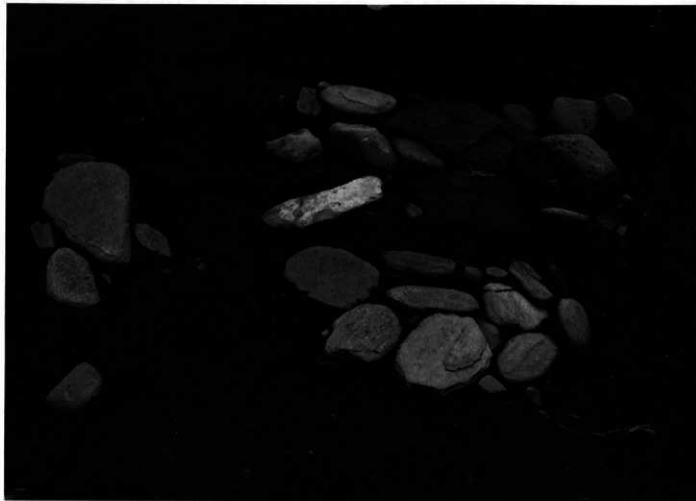
6

列石を構成する石の総てを取り上げて石材鑑定と石材重量の測定を実施した。石材は49種類確認され、絹雲母石墨片岩が30.5%を占め、500 μ 未満の石が48%を占めていた。列石中には石墨5点、多孔石15点、燧石17点、磨石3点、打製石斧10点、磨製石斧4点、丸石2点が含まれていた。

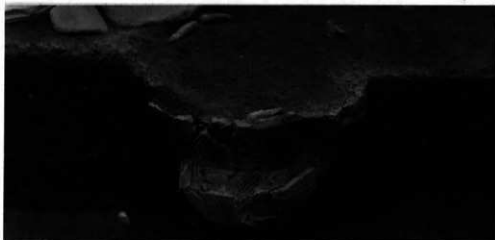


1. 立石(北から)
2. 立石復元写真(北東から)

環状列石の中心から北東13m、列石内部に位置している。秋田県大瀧遺跡列石の所謂日時計と共通するものである。11点の石から構成され、中心の立石は長さ78cmを測る。下部には土壇は存在せず、墓塚のシンボリック存在だったものであろう。
(本文PP.46-48)

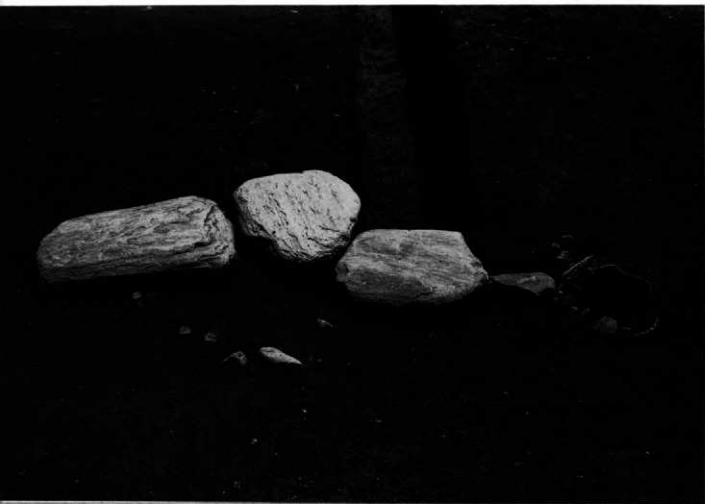


1. 1号配石遺構(西から)
2. 1号配石遺構炉(北から)
3. 1号配石遺構埋壁(西から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。

(本文PP.46-54)



1. 2号配石遺構(西から)
2. 2号配石遺構炉(北から)
3. 2号配石遺構(西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の敷石住居跡と考えられる。構築当初の姿は、5号配石遺構と同様の円形を呈していたものと思われ、炉を中心とした小範囲に部分敷石を施したものであろう。しかし、1・5号配石遺構と異なり、敷石は抜かれたものが多いと思われる。またその敷石にあたっては、当時の地表面上に配置したものと考えたい。
(本文PP.55-58)



5・6号配石遺構(北から)

写真左が6号配石遺構、右が5号配石遺構である。6号配石遺構については、5号配石遺構の突出し部はないかと思われたが、配石の位置関係から別遺構と判断せざるを得なかった。



5号配石遺構(北から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形竈石住居跡と考えられる。炉を中心とした小範囲に部分敷石を施し、周囲に石を円形に配置したものであるが、バラつきが認められる。当遺構は1・2号配石遺構の構築当初の姿になると思われる。
(本文PP.58-66)

1. 5号配石遺構部分敷石(東から)
2. 5号配石遺構炉(南西から)
3. 5号配石遺構埋室(南東から)



PL.19-1は伊の北面に配置された敷石の写真。部分敷石は長径約150cm、短径約80cmの規模である。1・2号配石遺構が敷石住層跡と判断されたのも、実にこの部分敷石の状況からである。PL.19-2は石圓いす。長径65cm、短径60cmのほぼ円形を呈している。炉石は2個で北端と東端に配置され、1号配石遺構と同様に硬い輝岩と輝緑岩が使用されていた。PL.19-3は出入口部埋室に該当するもので加曾利E3式土器の深鉢(胴部欠損)が遺位状態で埋設されていた。



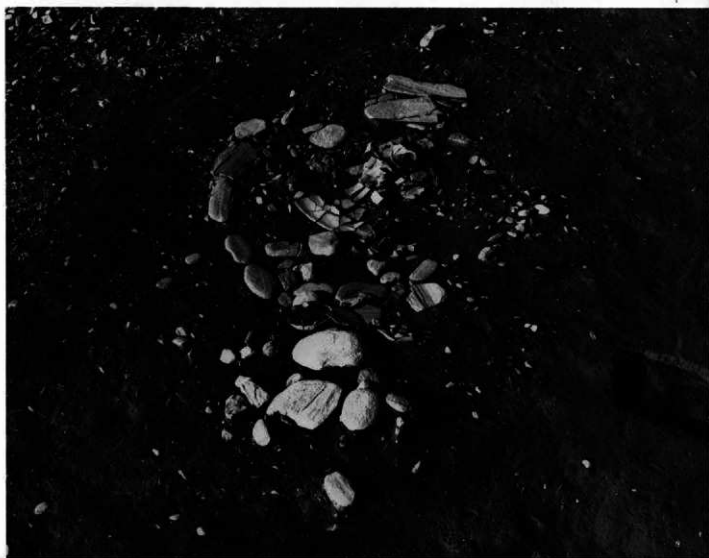
PL.20

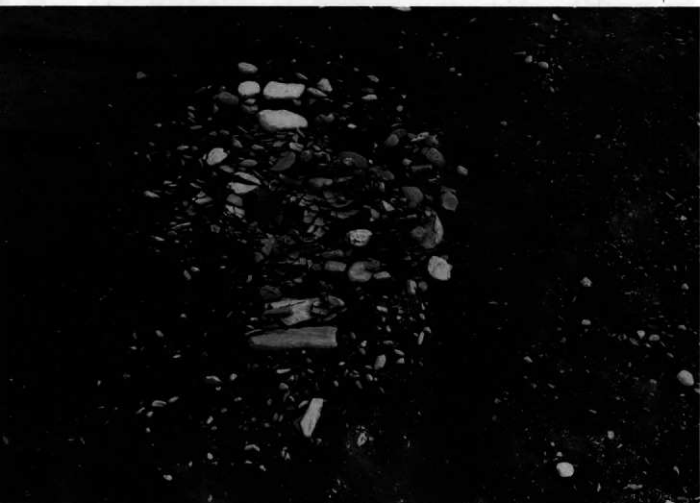
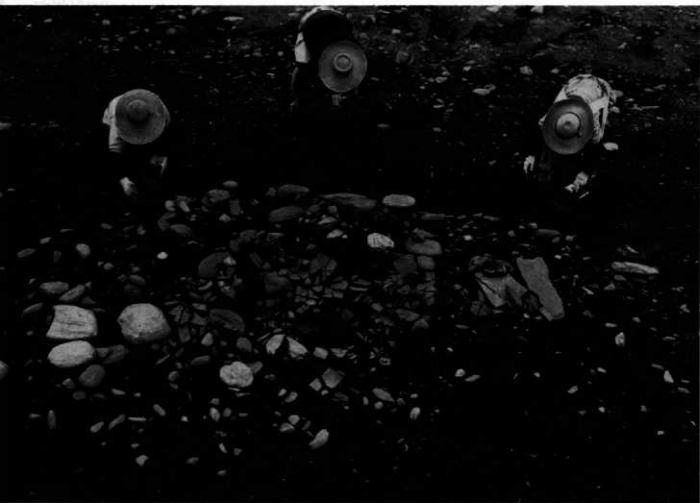
1. 7・8号配石遺構の調査スナップ

PL.21

1. 8号配石遺構(北東から)
2. 8号配石遺構(南東から)

8号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の小規模な柄圓形敷石位層跡である。主体部は長径2.4m、短径2.3mのほぼ円形を呈し、突出し部は長径1.55m、短径1.1mを測る。突出し部では明瞭な敷石が認められるが、主体部内部には敷石は施されていない。(本文PP.66-77)





PL.22

1. 8号配石遺構調査スナップ
2. 8号配石遺構遺物出土状況
(北西から)

PL.23

1. 8号配石遺構遺物出土状況
(北西から)
2. 8号配石遺構遺物出土状況
(北東から)
3. 8号配石遺構遺物出土状況
(北東から)



伊体土器と埋塞の他には、伊東から
 胴下部欠損の大型土器、伊南から胴下
 部欠損の大型土器片が出土し、この他
 に口縁部21点、胴部184点、底部3点
 の計208点の土器片が出土している。
 石器では凹石1点、打製石斧1点が出
 土。

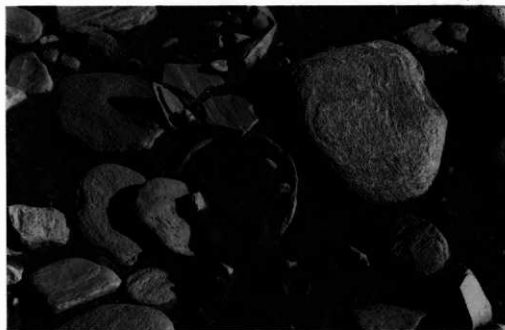


1. 8号配石遺構張出し部
(南東から)
2. 8号配石遺構張出し部
(南西から)

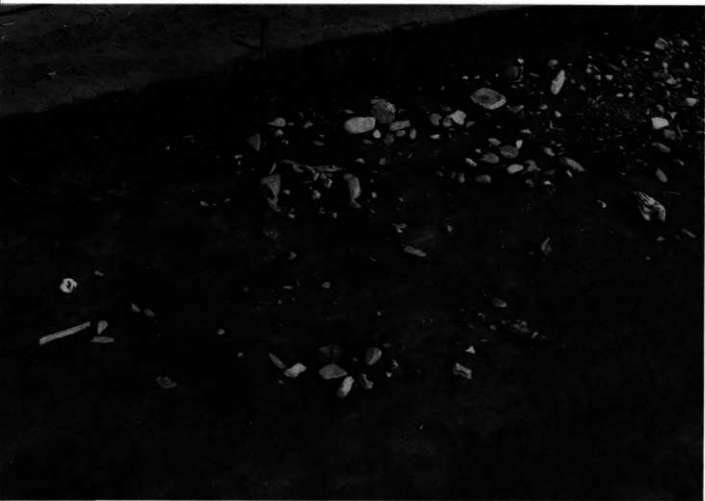


張出し部の規模は長径1.55m、短径1.1mである。3個の石を配置し周囲に押入の石を配置したものである。3個の石の最大は、高さ45cm、短径31.5cm、厚さ7cm、重量15.5kgであった。主体部と張出し部の接合部に埋髪が存在している。

1. 8号配石遺構炉(南東から)
2. 8号配石遺構埋壘(南西から)
3. 8号配石遺構埋壘(北東から)



主体部と張り出し部の接続部に加普利E4式土器の厚鉢（口縁部と底部欠損）が斜位状態で埋設されていた。埋設土壌は長さ75cm、短径70cm、深さ27cmの円形を呈している。埋壘には偏平な重石が伴い埋壘の東側にずり落ちていた。

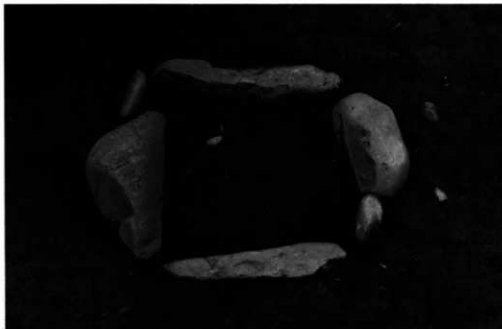


PL.26

1. 17号配石遺構(南西から)
2. 17号配石遺構(南から)

PL.27

1. 17号配石遺構石囲い炉
(南から)
2. 17号配石遺構石囲い炉
(南から)
3. 17号配石遺構石皿出土状況
(南西から)



当遺構は縄文時代中期加登期E3式期の敷石住居跡である。ただし完備でなかったために円形なのか、楕円形なのかは判断つかない。炉南西1.8mところに石が集中している。また炉東1.5mの部分にも集中箇所があるが、遺構内部の敷石ではなくて圍繞する縁石となろう。石囲い炉は長径52cm、短径40cm、深さ34cmの楕円形を呈している。4個の大きな石と2個の小さな石を配置している。

(本文PP. 77-85)



PL.28

1. 23～26号配石遺構(北東から)

PL.29

1. 23号配石遺構(北東から)
2. 23号配石遺構(南東から)

23号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の円錐形敷石住居跡である。主体部は長短とも径3mの円形を呈し、突出し部は長径3.4m、短径0.9mで、全長5.4mを測る。主体部の縁石と突出し部に敷石が施されているが、主体部の内部には敷石が認められない。(本文PP.86～100)





PL.30

1. 23号配石遺構縁石(南東から)
2. 23号配石遺構縁石(南から)
3. 23号配石遺構縁石(北東から)

PL.31

1. 23号配石遺構縁石(北から)
2. 23号配石遺構縁石(東から)
3. 23号配石遺構張出し部立石
(南東から)
4. 23号配石遺構張出し部
(南西から)
5. 23号配石遺構張出し部
(北西から)
6. 23号配石遺構先端部埋塞
(南東から)
7. 27号配石遺構石囲い炉
(南東から)
8. 23号配石遺構石囲い炉
(南東から)



主体部の縁石の間隙には小石が詰められた。また張出し部の石の下には多数の小石が押入の石として使用されていた。敷石住居跡を構成している敷石と、この敷石の押入の小石は総計518点検出されている。

3.4mの張出し部で明確な敷石が認められるのは、埋塞の北1.2mまでの範囲である。接続部近くに立石があった。

張出し部先端から口縁部を欠損した加曾利E4式土器2個体が出土した。埋設土壌は長さ85cm、短径56cm、深さ24cmの楕円形を呈している。埋塞はこの土壌内に斜位状態で埋設されていたものである。重石が伴っていた。

石囲い炉は長さ84cm、短径82cm、深さ26cmの方形を呈している。炉石には4個の大石が使用され、この間隙に小石を配置している。



1



2



3



4



5



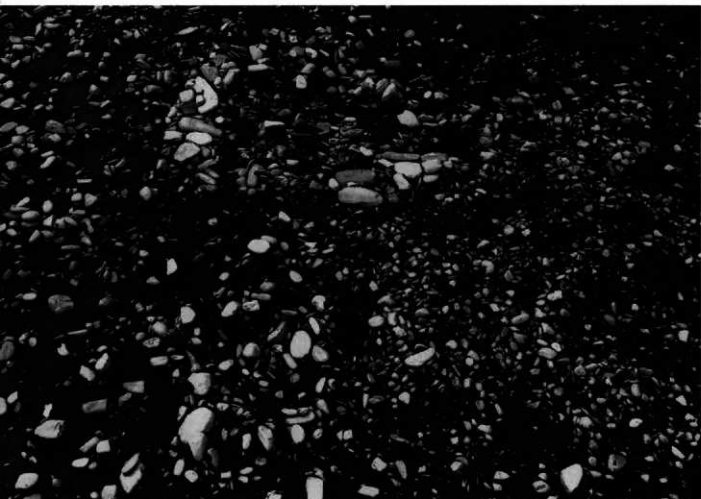
6



7



8





PL.32

1. 24号配石遺構(東から)
2. 24号配石遺構主体部(西から)

PL.33

1. 24号配石遺構調査スナップ
(東から)

当遺構は縄文時代中期加曽利E4式期の円錐形敷石住居跡である。主体部の規模は長径3.8m、短径3.2mの方形を呈する。突出し部は長径3.4m、短径1.2mで敷石住居跡の全長は7.2mを測る。主体部の縁石と突出し部の一部に敷石が施されているが、主体部内部には敷石が認められなかった。縁石は罫穴内に巡るのではなく、張り込みの外側に巡らされたものである。
(本文PP.101-124)



PL.34

1. 24号配石遺構跡石(北から)
2. 24号配石遺構跡石(西から)
3. 24号配石遺構跡石(東から)

PL.35

1. 24号配石遺構先端部埋塞
(東から)
2. 24号配石遺構先端部埋塞近景
(南から)



北壁と西壁上に並んでいた緑石は、
 墓穴内部に崩れこんだ状態で検出され、
 多量の石が使用されていた。東壁と南
 壁の緑石は大きな石が選定されてい
 るが、西壁の緑石はやや小さな石が主
 的に選定されている。

埋塞は主体部と張り出し部の接続部に
 1点、張り出し部の先端部に1点の計2
 点が出土している。

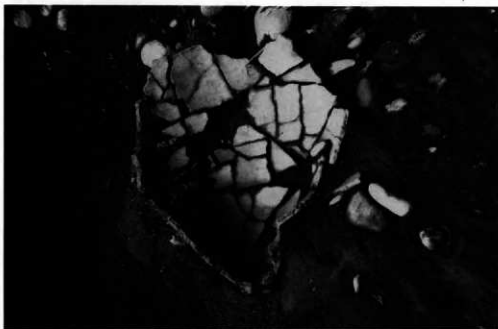




PL.36

1. 24号配石遺構先端部埋塞
(東から)
2. 24号配石遺構先端部埋塞完
備状況 (東から)
3. 24号配石遺構接続部埋塞
(西から)

接続部の埋塞は口縁部の一部を欠損した加普利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。この埋塞には数石が伴っている。先端部の埋塞は口縁部の一部を欠損した大型の加普利E4式の土器であり、土壌内に斜位状態で埋設されていた。

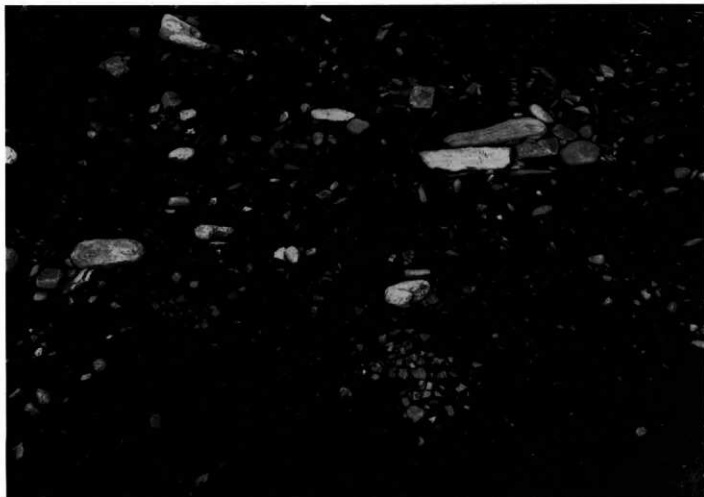


PL.37

1. 26号配石遺構(南西から)
2. 26号配石遺構掘出し部
(南西から)

当遺構は縄文時代中期加普利E4期の柄鉢形数石住居跡である。主体部の規模は指定長径3.4m、指定短径3.3mを量している。掘出し部の規模は長径1.4m、短径0.6-0.8mで、数石住居跡の全長は4.8mを測る。

(本文PP.125-137)

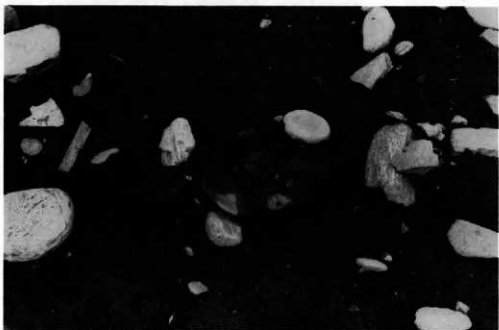




PL.38

1. 26号配石遺構編石(南西から)
2. 26号配石遺構炉(南西から)
3. 24号配石遺構先端部埋塞
(南東から)

炉は埋塞炉である。炉体土器は胴下半部を欠損した加曾利E4式土器であり、潰れた状態で出土した。埋塞は湧出し部の先端から検出され、底部を転用したものである。斜位状態で検出された。



PL.39

1. 36号配石遺構(南東から)
2. 36号配石遺構調査スナップ

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の柄鉢形敷石住居跡である。主体部の規模は長径2.6m、短径2.6m。湧出し部は長径3.4m、短径0.5mで敷石住居跡全長は6mを測る。

(本文PP.137-153)





PL.40

1. 36号配石遺構(北東から)
2. 36号配石遺構主体部
(北東から)

PL.41

1. 36号配石遺構主体部
(東から)
2. 36号配石遺構張出し部
(南東から)
3. 36号配石遺構炉(北東から)



主体部内部の全面には敷石は施されていない。炉を中心に西側にかけて敷石が認められるが、大小さまざまな石が使用され雑然としている。この周囲に縁石が巡る。

張出し部は新しい耕作溝によってその一部が壊されているが、残存状況は比較的よい。

炉は石圍い炉である。長径53cm、短径46cm、深さ9~14cmの楕円形を呈している。炉石は主体部の敷石が代用されているもので、規則的には組まれていない。



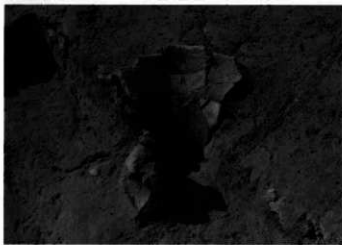
1



2



3



4



5



6



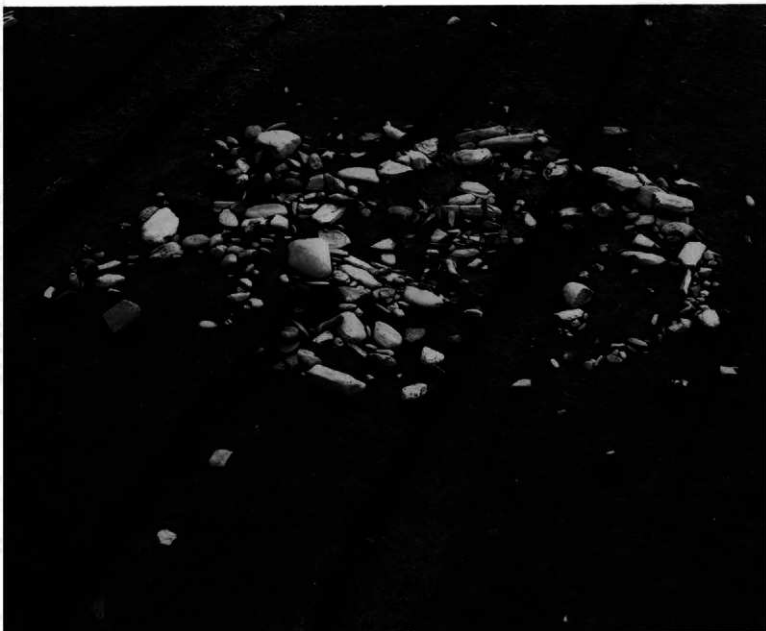
7



8

PL.42

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. 36号配石遺構先端部埋裏検出状況
(北東から) | 5. 36号配石遺構多孔石出土状況
(北東から) |
| 2. 36号配石遺構先端部埋裏完備状況
(南西から) | 6. 36号配石遺構丸石出土状況
(北東から) |
| 3. 36号配石遺構接続部埋裏検出状況
(北東から) | 7. 36号配石遺構石皿出土状況
(南西から) |
| 4. 36号配石遺構接続部埋裏完備状況
(北東から) | 8. 36号配石遺構磨製石斧出土状況
(北から) |



PL.43

1. 37号配石遺構(北東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の柄杓形敷石住居跡である。主体部の規模は長径4m、短径3.7mである。張出し部は長径2.7m、短径1.1mで、敷石住居部の全長は5.4mを測る。主体部の縁石と張出し部には敷石が施されているが、主体部内部には敷石が認められない。

(本文PP.153-165)



PL.44

1. 37号配石遺構(南東から)
2. 37号配石遺構張り出し部
(南東から)

PL.45

1. 37号配石遺構縁石(南西から)
2. 37号配石遺構縁石(北東から)
3. 37号配石遺構縁石(北西から)



縁石は東縁では小さな石が選定されているが、西縁・南縁・北縁では比較的大きな石が選定されている。



1. 37号記石遺構緑石(南から)
2. 37号記石遺構緑石(南東から)



1. 37号配石遺構調査スナップ
2. 37号配石遺構石囲い炉検出状況
(南東から)
3. 37号配石遺構石囲い炉
(南東から)



石囲い炉は長さ52cm、短径36cm、深
さ10cmの楕円形を呈している。炉石は
6個の石から構成されていた。



1. 37号配石遺構立石(北西から)

2. 37号配石遺構先端部埋塞

(北西から)

3. 37号配石遺構多孔石出土状況

(北から)

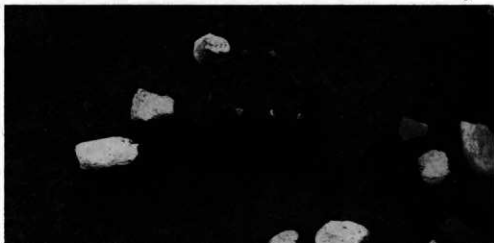


掘出し部の東から小さな立石が検出された。この立石は周囲を石で囲われている。立石の長さは16.5cmである。

埋塞は掘出し部の先端部から検出されたが、耕作溝によって壊されていたために全容を知ることができなかった。埋塞の破片は加賀利E3式土器であった。



1. 38号配石遺構(南から)
2. 38号配石遺構(東から)
3. 38号配石遺構埋壁
(東から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E3式別の敷石住居跡である。路縁外に遺構が延びていること、一部破壊されているためにその全容をつかむことはできなかった。おそらくは掘出し部に該当する部分であろう。
(本文PP.165-173)

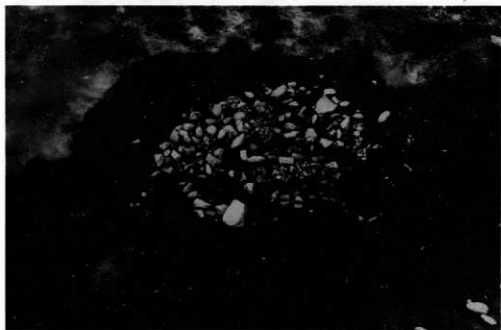


PL.50

1. 1号竪穴住居跡(南から)
2. 1号竪穴住居跡遺構確認状況
(南西から)
3. 1号竪穴住居跡遺物出土状況
(北西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の竪穴住居跡である。長径3.1m、短径3mのほぼ円形を呈している。覆土層から土器片とともに多量の石が出土している。

(本文PP.173-180)

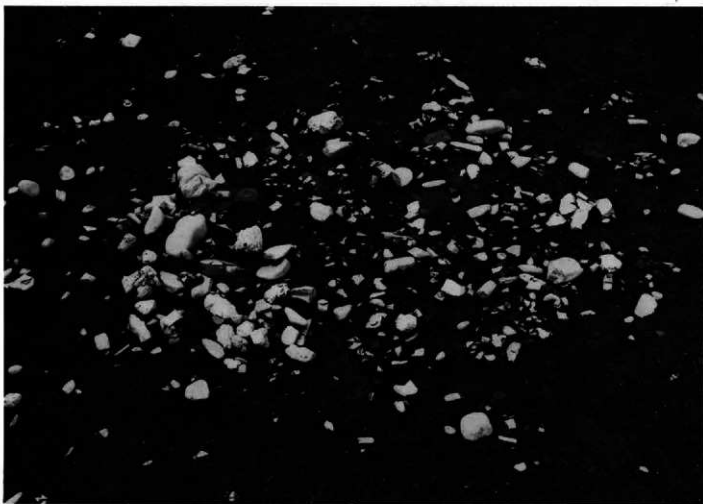


PL.51

1. 2号竪穴住居跡(西から)
2. 2号竪穴住居跡遺物出土状況
(南東から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の円形竪穴住居跡である。長径5m、短径4.8m、確認面からの深さは4-16cmほどである。覆土からは多量の土器片と石器が出土している。

(本文PP.180-187)





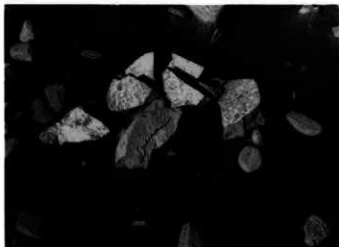
1. 2号竪穴住居跡遺物出土状況
(北東から)
2. 2号竪穴住居跡遺物出土状況
(南東から)
3. 2号竪穴住居跡遺物出土状況
(南東から)



2号竪穴住居跡からは、埴土器1個体、大型土器片3個体の他に、口縁部99点、胴部651点、底部10点の計760点の土器片が出土している。石器では石皿3点、多孔石11点、礫石5点、磨石1点、砕石1点、打製石斧3点、磨製石斧3点が出土している。この他に663点の石が出土している。



1



2



3



4



5



6

1. 2号壟穴住居跡遺物出土状況
(東から)
2. 2号壟穴住居跡遺物出土状況
(東から)
3. 2号壟穴住居跡遺物出土状況
(西から)
4. 2号壟穴住居跡磨製石斧出土状況
(南西から)
5. 2号壟穴住居跡炉体土器検出状況
(北から)
6. 2号壟穴住居跡炉体土器調査状況
(南東から)
7. 2号壟穴住居跡炉体土器
埋設ビット(南東から)



7



PL.54

1. 3号配石遺構(西から)
2. 4号配石遺構(南から)

3号配石遺構は長径 6.2m 、短径(47cm)の小規模な遺構である。下部に土壌等は存在しなかった。

4号配石遺構は長径 4m 、短径 3.6m の規模である。出土遺物から判断して縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。

(3号配石遺構 本文PP.198・199)
(4号配石遺構 本文PP.200・205)



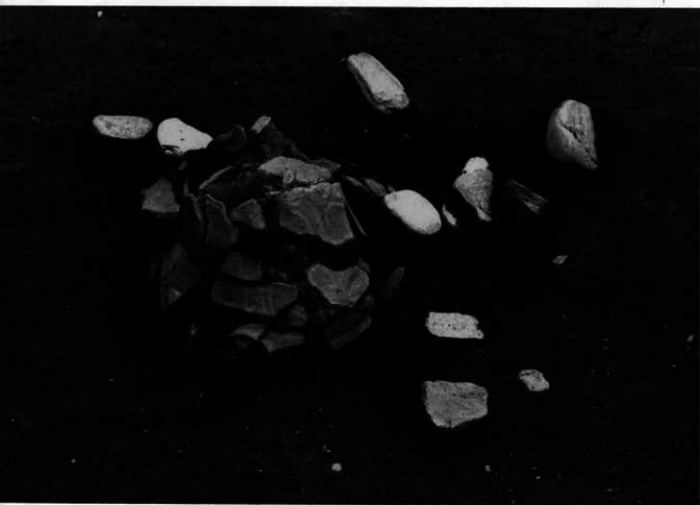
PL.55

1. 6号配石遺構(北西から)

PL.56

1. 6号配石遺構(南東から)
2. 6号配石遺構伏廻(北東から)

6号配石遺構は5号配石遺構の東に埋して構築されていた。その規模は長径 2.2m 、短径 1.3m である。また南端の伏廻周辺には小石が配置されている。当遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。
(本文PP.206・210)







PL.57

1. 7号配石遺構(東から)
2. 7号配石遺構(南から)

PL.58

1. 7号配石遺構(南から)
2. 7号配石遺構部分(南から)
3. 7号配石遺構土器出土状況
(南西から)

7号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構であり、環状列石の一部を構成するものである。長径4.5m、短径2.3mの楕圓形を呈するようである。

(本文PP.211-217)



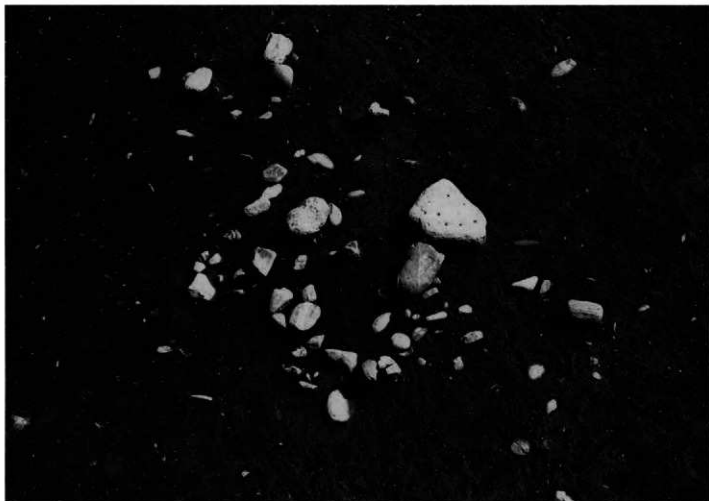
PL.59

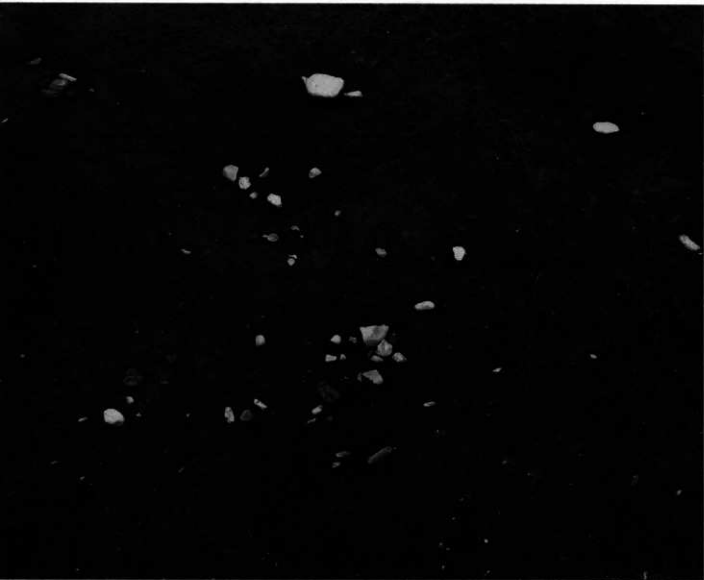
1. 9号配石遺構(北から)
2. 10号配石遺構(北から)

9号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径2m、短径1.1mの規模で下部に土壌等は存在しなかった。

10号配石遺構も加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長径1.4m、短径1.1mで、下部に土壌等は存在しなかった。

(9号配石遺構 本文PP.218-221)
(10号配石遺構 本文PP.222-223)





1. 11号配石遺構(北西から)
2. 11号配石遺構多孔石(丸石)
出土状況(北東から)

9号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長径約5m、短径約3mの範囲に数層的に石が配置されている。ややまとまって分布している範囲は、長径2.5m、短径2.3mである。

(本文PP.224～229)



1. 12号配石遺構(東から)
2. 12号配石遺構調査スナップ



12号配石遺構は縄文時代中期加曽利E3式期の配石遺構である。半円状に配石が認められ、その規模は長径3.4m、短径2mである。下部に土壌等は存在しなかった。
(本文PP. 230-233)





PL.62

1. 14号配石遺構(東から)
2. 15号配石遺構(東から)

PL.63

1. 16号配石遺構(東から)
2. 16号配石遺構石皿出土状況
(東から)



14号配石遺構は縄文時代中期加賀利E3式期の配石遺構である。長径5m、短径3mの範囲に石が散在している。

15号配石遺構は長径1.4m、短径1.2mの小規模な配石である。

16号配石遺構は長径3m、短径2mの規模である。いずれの配石遺構下部には土壌等は存在しなかった。

〔14号配石遺構 本文PP.234-238〕
〔15号配石遺構 本文PP.238・239〕
〔16号配石遺構 本文PP.240-244〕



PL.64

1. 12号屋外埋設土器(北東から)
2. 12号屋外埋設土器出土状況(北東から)

12号屋外埋設土器は環状列石下からの出土である。埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、斜位状態で検出された。

(本文PP.374-390)



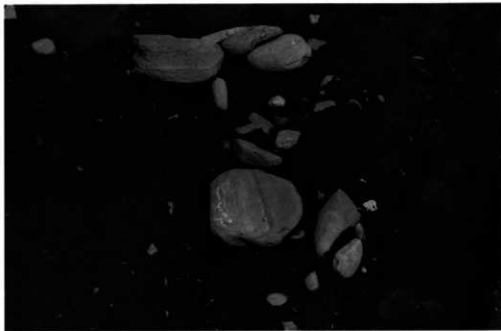
PL.65

1. 20号配石遺構(南東から)
2. 20号配石遺構(南東から)

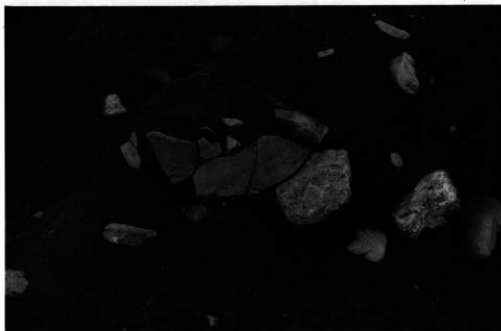
当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の配石遺構であり、7号配石遺構と同様に環状列石の裏出し部になるものと判断される。長さ5m、径2.3mの範囲に石が配置されている。中心部にやや大きな石を使用しているが、列石内部に通じる通路のような役割を果たしていたものであろうか。

(本文PP.248-255)

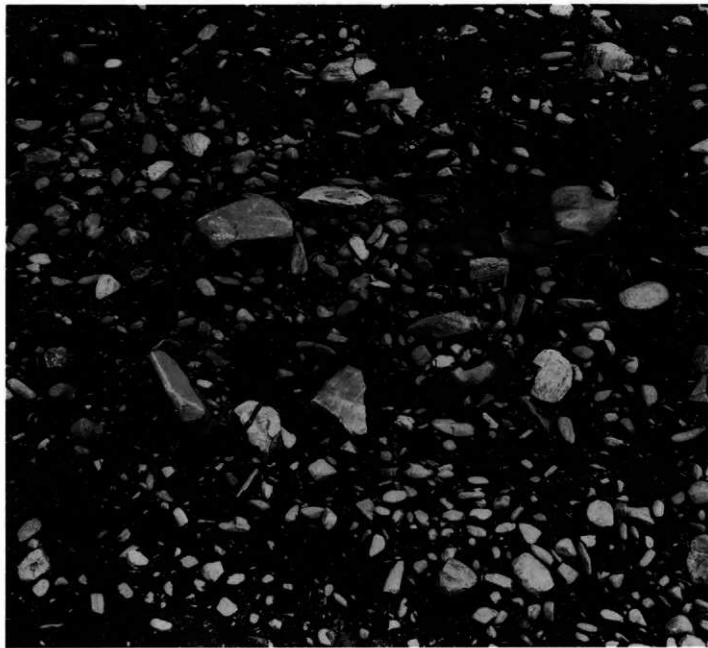




1. 21号記石遺構(南西から)
2. 21号記石遺構伏壘(北東から)
3. 21号記石遺構調査スナップ



当遺構は縄文時代中期加曾利E3期の記石遺構である。長径1.7m、短径1.1mの小規模な遺構であり、下部に土壌等は存在しなかった。また記石の中心から東2.4mのところに伏壘が検出された。
(本文PP.256-258)



1. 22号配石遺構(南西から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。他の配石遺構と異なり砂留が多量に使用され、焼石が多く、また埋壁を伴うことから異質な感じを受ける。長径4.5m、短径3.5mの規模である。

(本文PP.259-265)



PL.68

1. 22号配石遺構部分(北東から)
2. 22号配石遺構埋戻し状況
(南西から)
3. 22号配石遺構埋戻し調査状況
(北東から)

配石下から掘下半部を充填した埋戻しが出土した。この埋戻しは長さ40cm、短径37cmのビット内に正位状態で埋戻されていたものである。偏平な砂岩が埋戻しビットを片側覆っているが、当初はこのビットを完全に覆っていたもので、蓋石として使用されたものであろう。



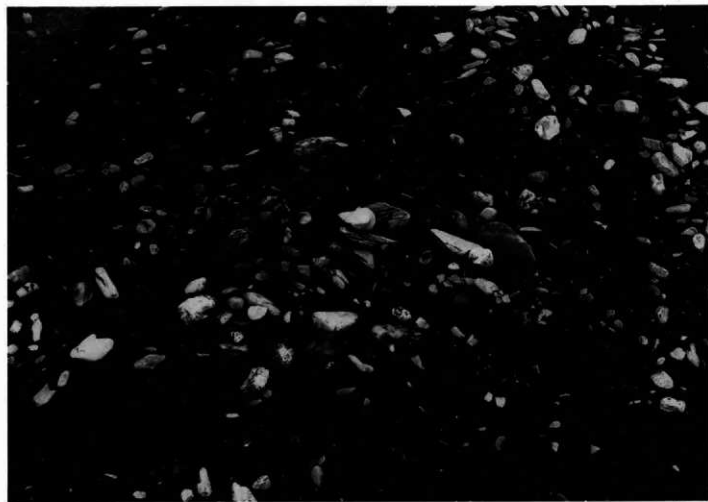
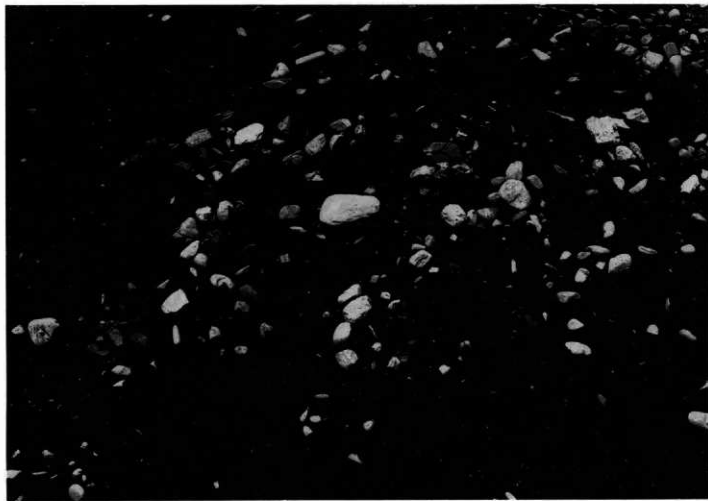
PL.69

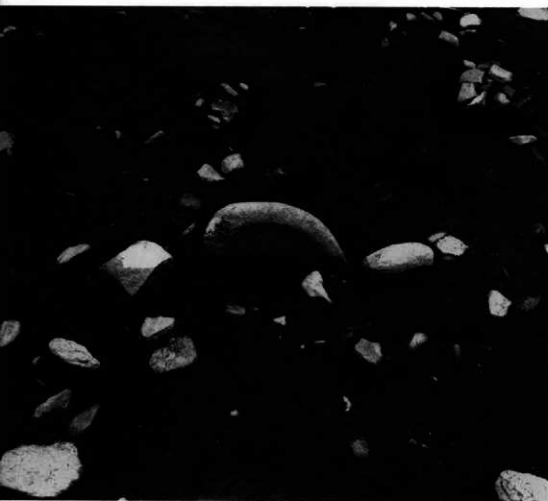
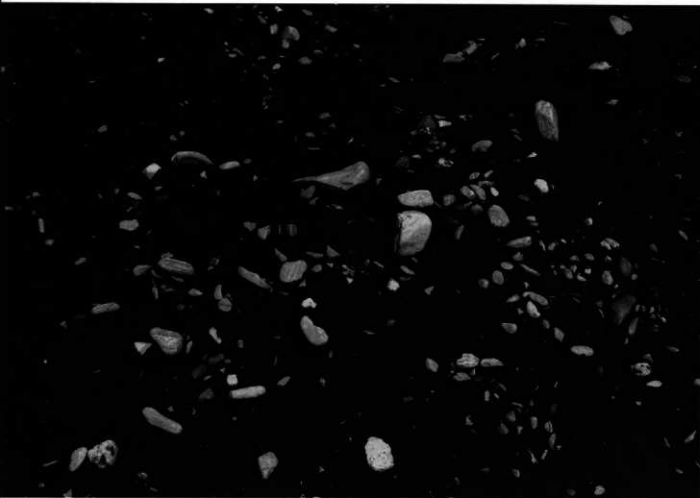
1. 27号配石遺構(北西から)
2. 28号配石遺構(南東から)

27号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長さ3m、短径2.5mの規模で、中心に多孔石を配している。

28号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長さ3m、短径2.3mの規模である。

(27号配石遺構 本文PP.272-277)
(28号配石遺構 本文PP.278-282)





1. 29号配石遺構(南東から)
2. 29号配石遺構石皿出土状況
(南東から)

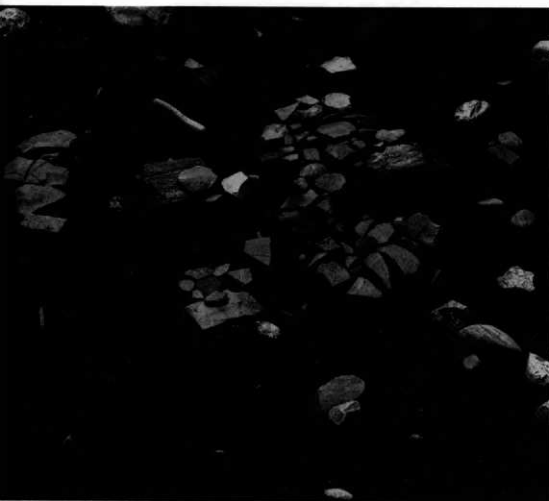
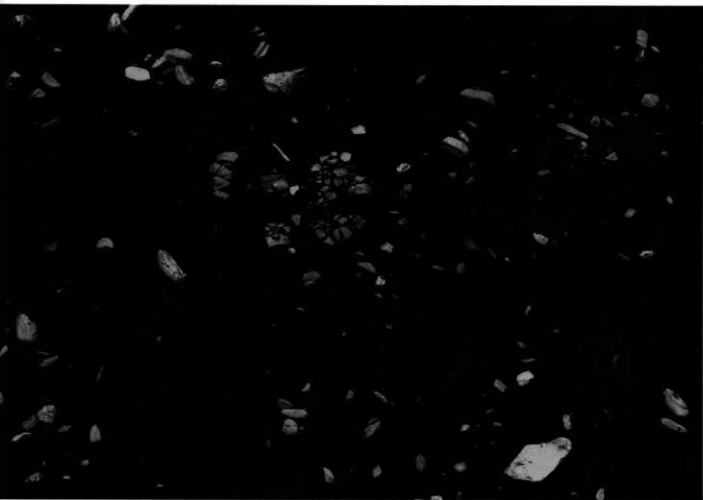
当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径3.9m、短径3.5mの範囲に石が配置されている。石皿は立石的な使用をされている。下部に土壌は存在しなかった。
(本文PP.283-289)



1. 30号配石遺構(東から)
2. 30号配石遺構部分(西から)

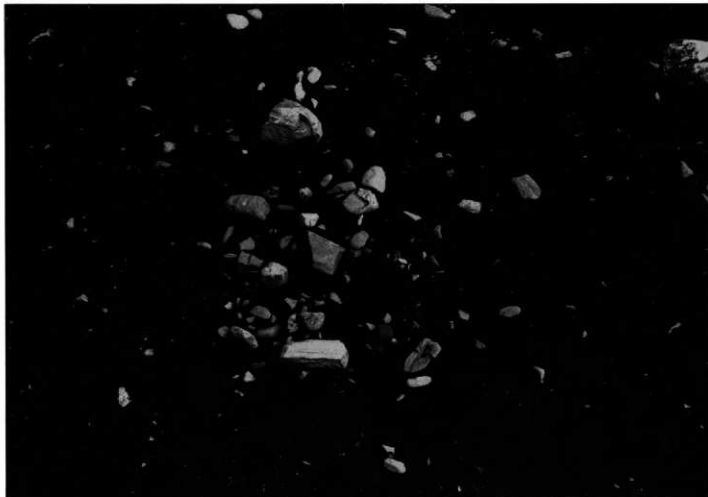


当遺構は縄文時代中期加賀利E4式期の配石遺構である。長さ1.6m、短径1.5mの範囲に集中して石が配置されている。配石南端には立石と考えられる石が出土している。下部には土壌等は存在しなかった。
(本文PP.289-295)



1. 31号配石遺構(北から)
2. 31号配石遺構部分(北から)

当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長径5m、短径4.5mの範囲に石が散漫的に配置されている。中心部には土器片が集中している。(本文PP.295-301)



1. 32号配石遺構(西から)
2. 32号配石遺構部分(北から)



当遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。長さ5m、短径4mの楕円形の範囲に石の分布が認められるが、集中する範囲は長さ2m、短径0.8mの範囲である。下部に土壌等は存在しなかった。
(本文PP.302~307)



PL.74

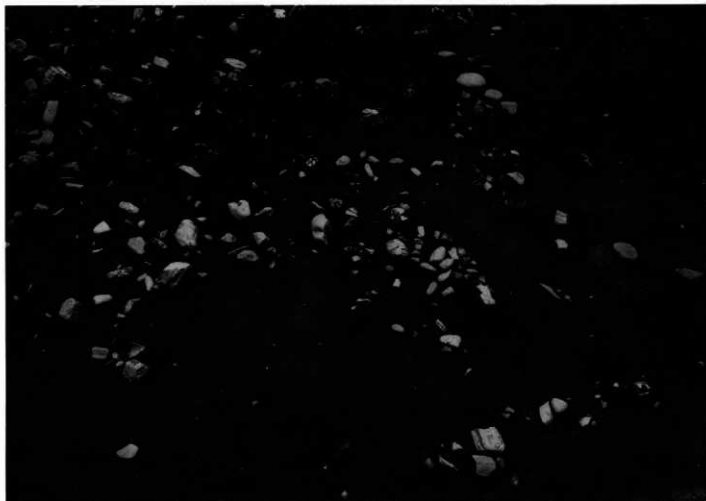
1. 33号配石遺構(北から)

PL.75

1. 33号配石遺構部分(北から)
2. 33号配石遺構部分(北から)

当遺構からは縄文時代中期加曾利E
3-E4式の土器片が出土している。
長さ10m、短径7mの広範囲に多量の
石と土器片が分布していた。この分布
の北側からは遺物の出土はほとんど認
められなかった。

(本文PP.307-315)



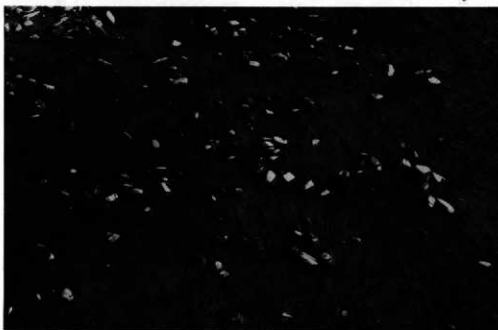


PL.76

1. 34号配石遺構(南西から)
2. 34号配石遺構部分(南西から)
3. 35号配石遺構(北から)

PL.77

1. 40号配石遺構(南東から)
2. 40号配石遺構部分(北西から)



34号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。規模は長さ8.5m、短径6mである。

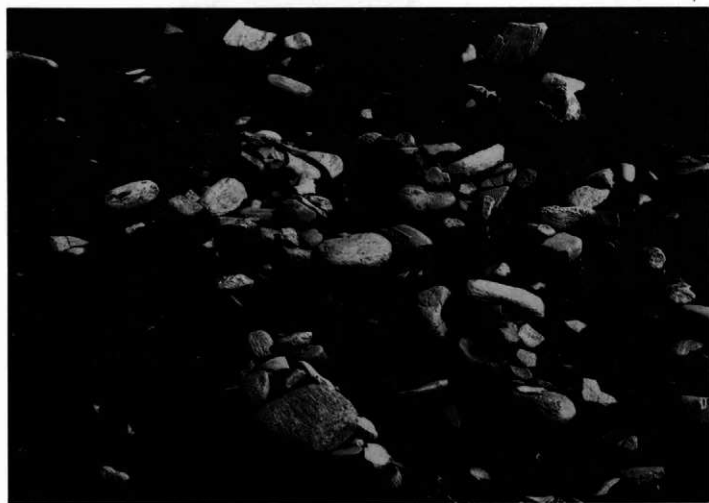
35号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。広範囲に遺物が分布しているために、明確に遺構として把握することに対しては疑問が残る。

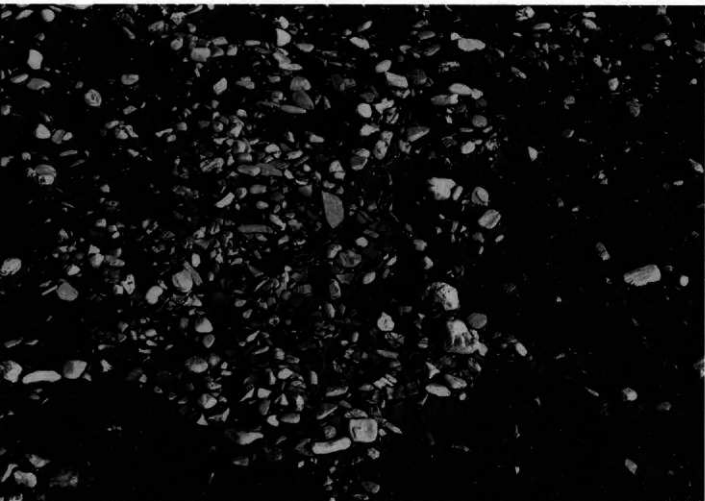
40号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。規模は長さ2.5m、短径2mである。

〔34号配石遺構 本文PP.315-321〕

〔35号配石遺構 本文PP.322-327〕

〔40号配石遺構 本文PP.327-333〕







PL.78

1. 41号配石遺構(西から)
2. 43号配石遺構(南東から)

PL.79

1. 44号配石遺構(北から)
2. 45号配石遺構(南東から)



41号配石遺構は縄文時代中期加曾利E4式期の配石遺構である。規模は長さ3.1m、短径2.7mである。

43号配石遺構は中期の配石遺構である。規模は長さ0.5m、短径0.4mである。

44号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。二重の環状構造を呈していると考えられる。

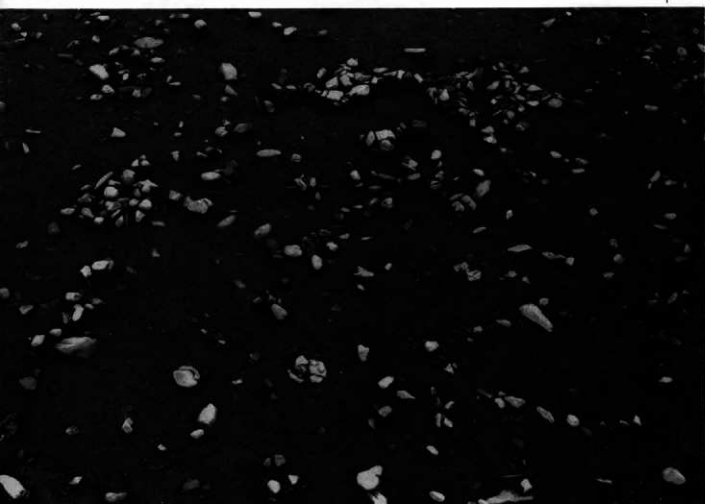
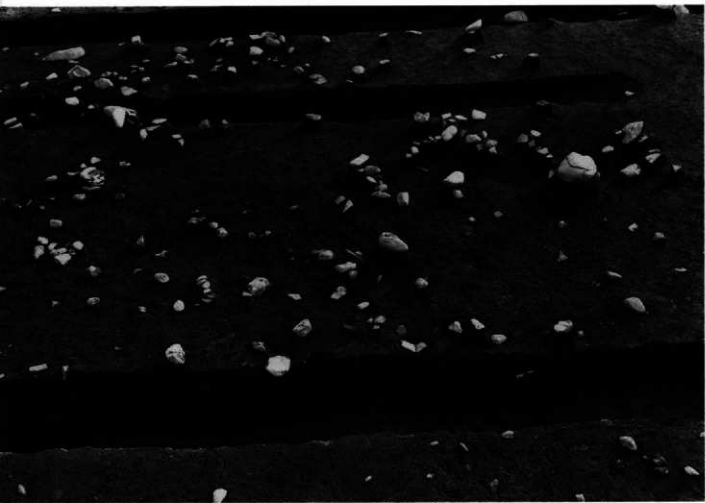
45号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3式期の配石遺構である。長さ7.5m、短径5.5mの範囲に石の分布が認められるが、一部に列状配石がある。

41号配石遺構 本文PP.334-340

43号配石遺構 本文PP.341-342

44号配石遺構 本文PP.342-347

45号配石遺構 本文PP.348-352





PL.80

1. 46号配石遺構(北から)
2. 47号配石遺構(北西から)

PL.81

1. 48号配石遺構(南東から)
2. 48号配石遺構多孔石出土状況
(北西から)



46号配石遺構は縄文時代中期加曾利E3武期の配石遺構である。規模は長さ約10m、短径約7mである。

47号配石遺構は加曾利E4武期の配石遺構である。規模は長さ4.8m、短径3mである。

48号配石遺構は加曾利E3武期の配石遺構である。規模は長さ3.5m、短径1.7mである。

46号配石遺構	本文PP.352-359
47号配石遺構	本文PP.359-365
48号配石遺構	本文PP.365-369



PL.82

1. 49号配石遺構(南から)
2. 50号配石遺構(北西から)
3. 50号配石遺構調査スナップ

PL.83

1. 13号配石遺構(南西から)
2. 19号配石遺構(南東から)



49号配石遺構は中期の配石であり、規模は長径75cm、短径70cmの小規模なものである。

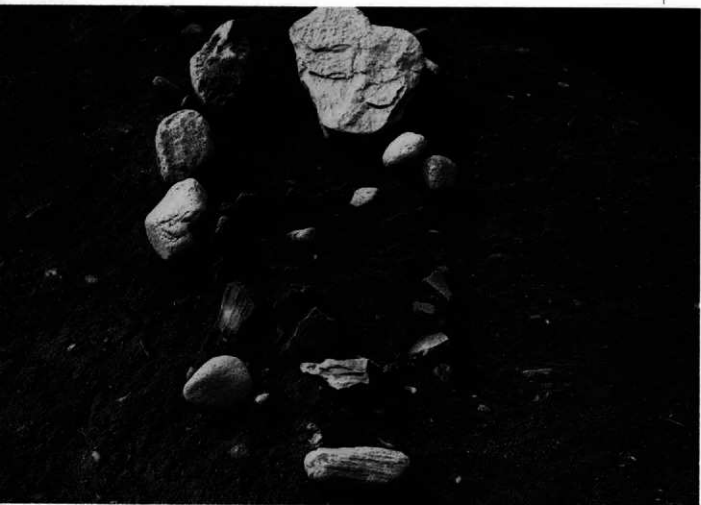
50号配石遺構も中期の配石であり、長径6m、短径4mの小規模な環状構造物となっている。

13号配石遺構は加曾利E3式期の配石であるが、基石として把握したほうが良いかもしれない。下部に土壌等は存在しなかった。

19号配石遺構は加曾利E3式期の配石であり、長径8m、短径4.5mの規模である。3号屋外埋設土路が検出されている。

49号配石遺構	本文PP.369-370
50号配石遺構	本文PP.370-373
13号配石遺構	本文 P.333
19号配石遺構	本文PP.244-248





PL.84

1. 1号屋外埋設土器(東から)
2. 2号屋外埋設土器(南東から)

PL.85

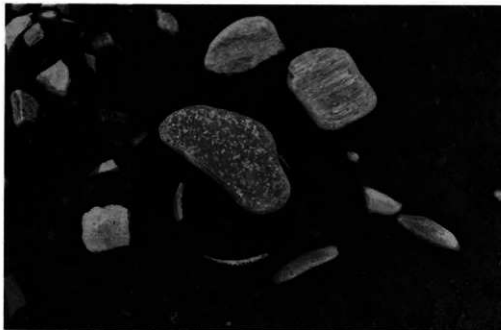
1. 2号屋外埋設土器調査状況
(南から)
2. 2号屋外埋設土器石置出土状況
(南東から)
3. 2号屋外埋設土器完備状況
(南東から)



1号屋外埋設土器は環状列石下から検出された。埋設土器は胴下半部を欠損した加曾利E3式土器で、逆位状態で埋設され、土圧によりやや南に傾いていた。残存輪防分析を実施。

2号屋外埋設土器は環状列石内部から検出された。埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E4式土器で、斜位状態で埋設されていた。

(本文PP.374～390)



1. 3号屋外埋設土器(東から)

2. 3号屋外埋設土器調査状況
(南東から)

3. 3号屋外埋設土器残存脂肪分析
土壌採取



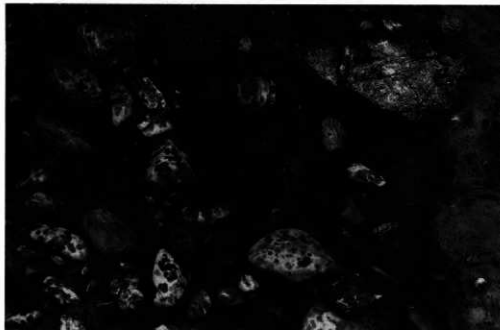
3号屋外埋設土器は19号配石遺構内から検出された。埋設土器は胴部を欠損した加曾利E3式土器で、逆位状態で出土した。残存脂肪分析実施。
(本文PP.374-390)



1. 4号屋外埋設土器検出状況
(西から)
2. 4号屋外埋設土器調査状況
(南から)
3. 4号屋外埋設土器(南から)



4号屋外埋設土器は、加曽利E3式土器の胴部で逆位状態で埋設されていた。
(本文PP.374~390)



1. 5号屋外埋設土器(南から)

2. 6号屋外埋設土器検出状況

(東から)

3. 6号屋外埋設土器調査状況

(南東から)



5号屋外埋設土器は廃棄場所から検出された。埋設土器は斜位状態で、壘石を伴って出土。

6号屋外埋設土器は横状列石下から検出された。埋設土器は加曾利E3式土器の胴部で、斜位状態で出土。列石が壘石となっていた。

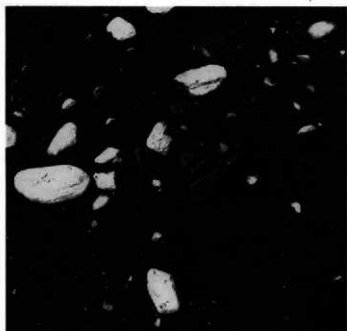
(本文PP.374-390)



1



2



3



4

1. 7号屋外埋設土器(北東から)
2. 8号屋外埋設土器(北東から)
3. 9号屋外埋設土器(北から)
4. 9号屋外埋設土器調査状況
(西から)
5. 10号屋外埋設土器(北から)

7号屋外埋設土器は加曾利E3式土器の両耳蓋で正位状態で出土した。

8号屋外埋設土器は土器片を利用したもので重石を併せていた。

9号屋外埋設土器は口縁部を欠損した加曾利E3式土器で、正位状態で出土。即石が重石となっていた。

10号屋外埋設土器は加曾利E3式土器の胴下半部で、正位状態で出土。

(本文PP.374-390)



5



PL.90

1. 1号土壌(東から)
2. 2号土壌検出状況(東から)
3. 2号土壌完掘状況(東から)
4. 3・4号土壌(南から)

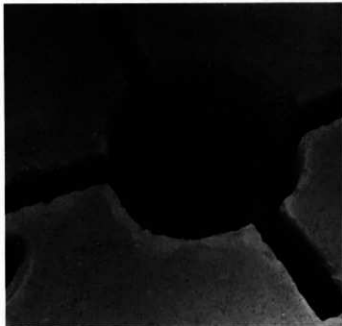
PL.91

1. 3号土壌蓋標(東から)
2. 3号土壌完掘状況(北東から)
- 3・4. 3号土壌残存脂肪分析土壌採取
5. 5号土壌検出状況(南から)
6. 5号土壌完掘状況(南から)





1



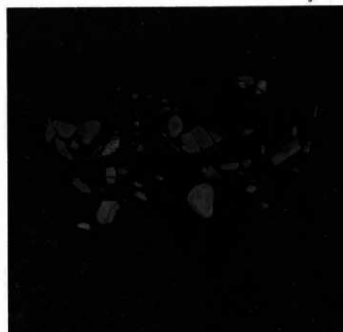
2



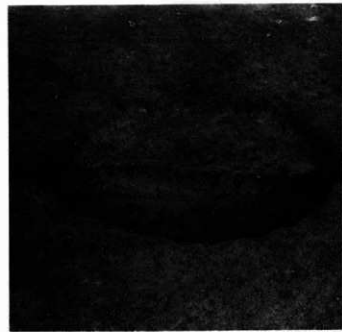
3



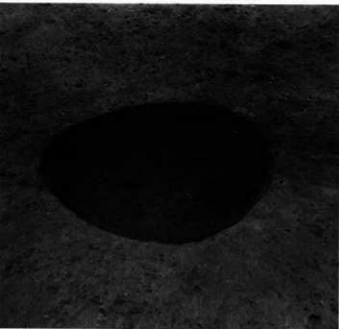
4



5



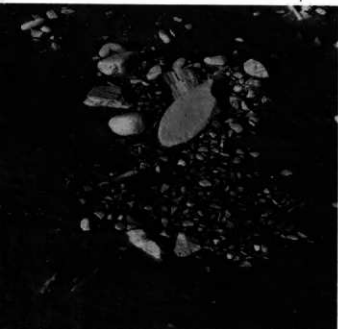
6



1



2



3



4



5



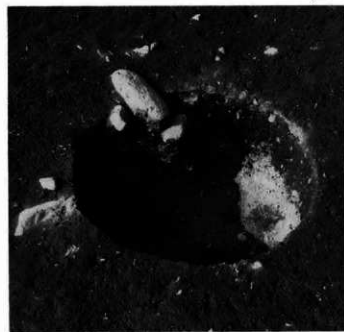
1



2



3



4

PL.92

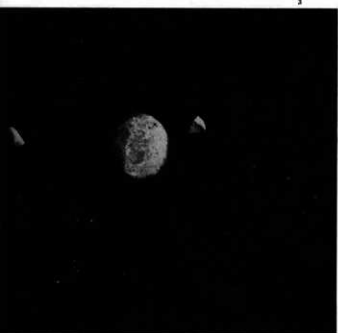
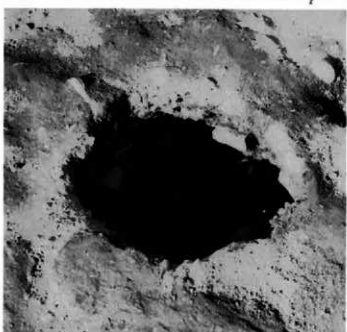
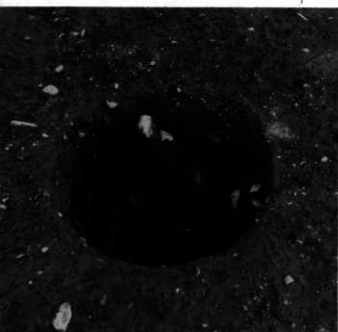
1. 6号土壌(南から)
2. 7号土壌抽出状況(北から)
3. 8号土壌抽出状況(北から)
4. 8号土壌完掘状況(東から)
5. 8号土壌スナップ

PL.93

1. 9号土壌(南から)
2. 10号土壌(北から)
3. 11号土壌(南から)
4. 12号土壌(南から)
5. 13号土壌(東から)



5





1



2



3



4

PL.94

1. 14号土壌(南東から)
2. 15号土壌(北西から)
3. 16号土壌(北西から)
4. 17号土壌(南から)
5. 18号土壌検出状況(北西から)
6. 18号土壌完播状況(南から)

PL.95

1. 19号土壌検出状況(北西から)
2. 19号土壌播種(北西から)
3. 19号土壌調査状況(南東から)
4. 19号土壌完播状況(南から)
5. 20号土壌(西から)



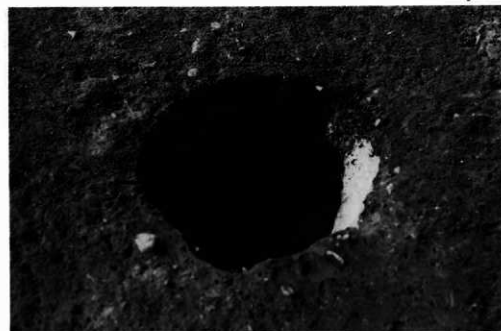
5



1. 21号土溝検出状況(南東から)

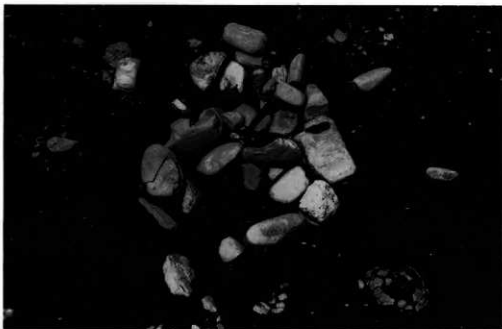


2. 21号土溝調査状況(西から)



3. 21号土溝完掘状況(北東から)

1. 22号土壌(東から)
2. 22号土壌(東から)
3. 22号土壌伏壁(南から)







1



2

PL.98

1. 廃棄場所(南東から)
2. 廃棄場所(東から)

PL.99

1. 廃棄場所多孔石出土状況
(東から)
2. 廃棄場所多孔石出土状況
(東から)
3. 廃棄場所調査スナップ
4. 廃棄場所石皿出土状況
(北西から)
5. 廃棄場所多孔石出土状況
(西から)

集落の北東端にあたる場所から検出されたが露坪外にも及びている。廃棄場所の一角を調査できたものである。集落の存続期間(加曾利E3式期-E4式期)中、遺物が廃棄され続けたものであろう。
(本文PP.411-417)



3



4



5



1. グリッド調査状況(南から)
2. グリッド調査状況(東から)
3. グリッド調査スナップ





1

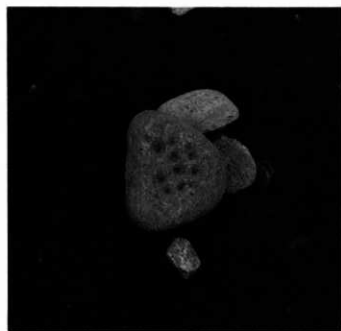


2



3

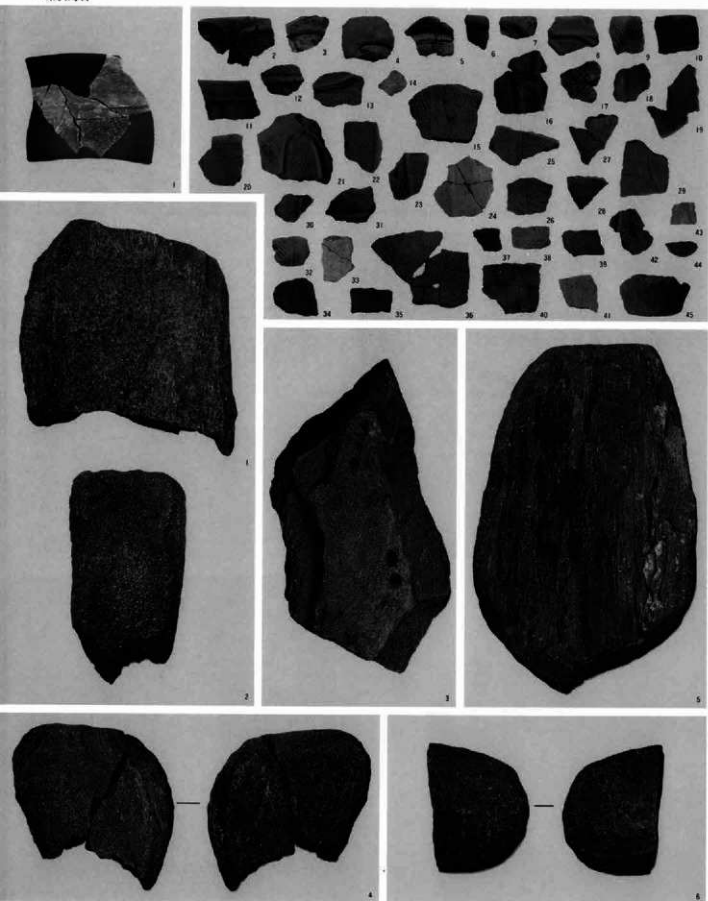
1. 石棒出土状況(北西から)
2. グリッド遺物出土状況
(北西から)
3. グリッド遺物出土状況
(東から)
4. 多孔石出土状況(北から)



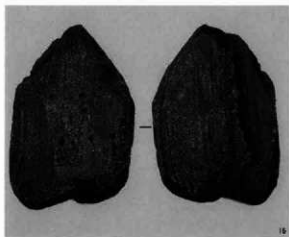
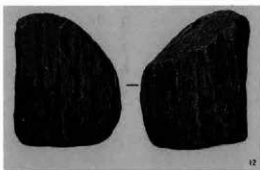
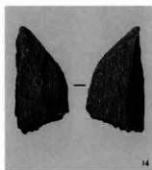
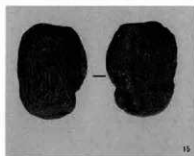
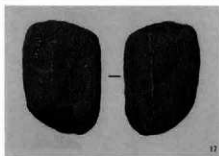
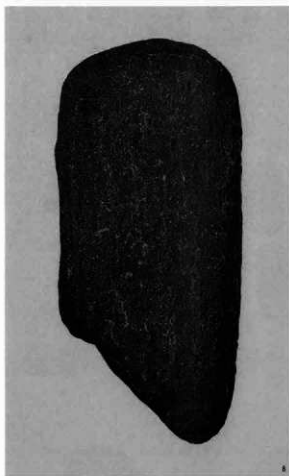
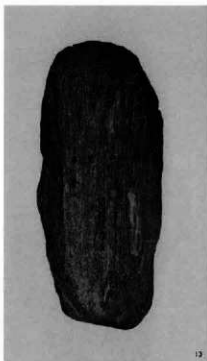
4

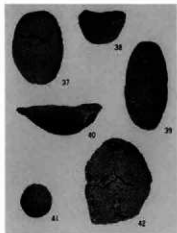
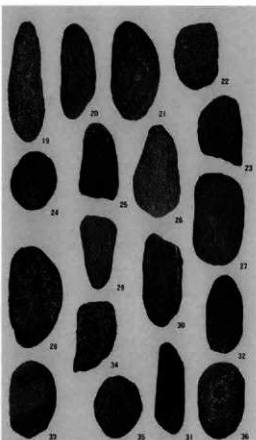
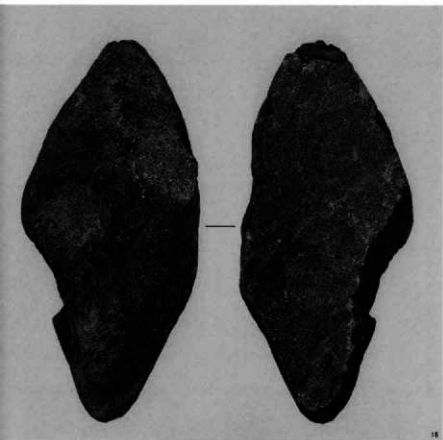
遺物写真は $\frac{1}{6}$ を基本とした。ただし大型土器については $\frac{1}{6}$ で掲載したものもある。
土器・石器の遺物番号は挿图中的の番号と一致している。

▼環状列石

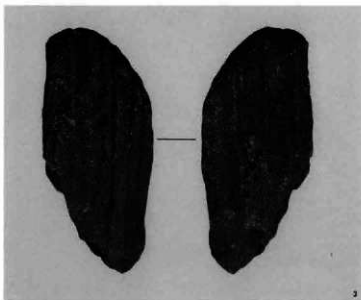


▼環状列石

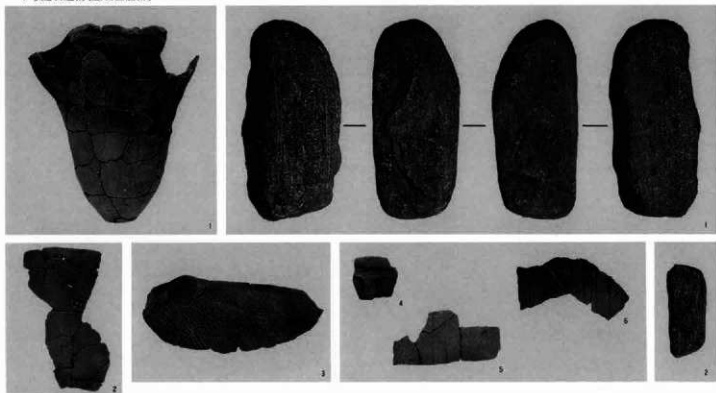




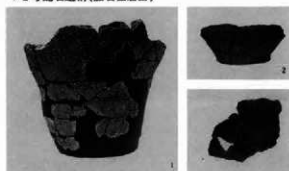
▼立石



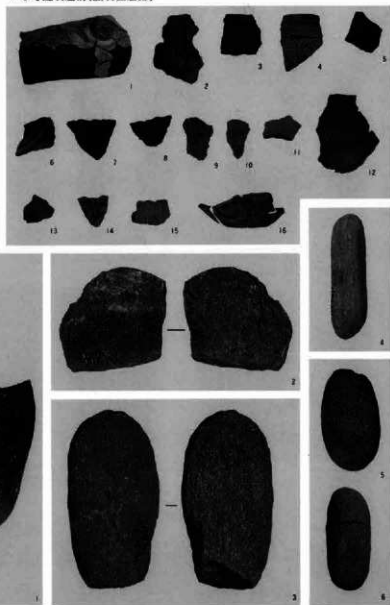
▼ 1号配石遺構(敷石住居跡)



▼ 2号配石遺構(敷石住居跡)



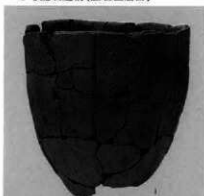
▼ 5号配石遺構(敷石住居跡)



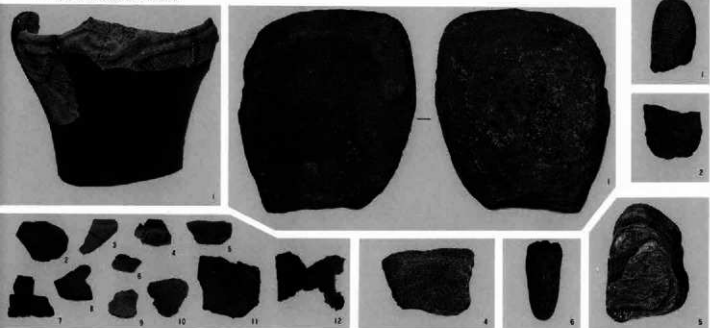
▼ 5号配石遺構(敷石住居跡)



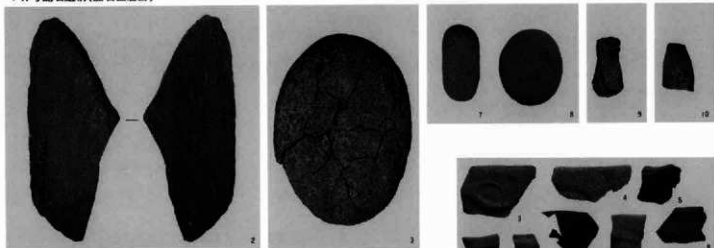
▼ 8号配石遺構(敷石住居跡)



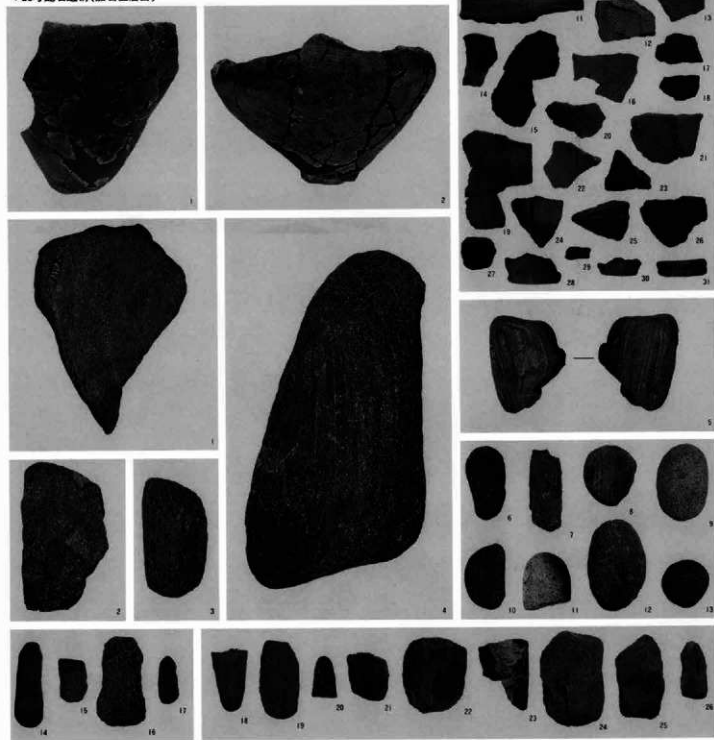
▼ 17号配石遺構(敷石住居跡)

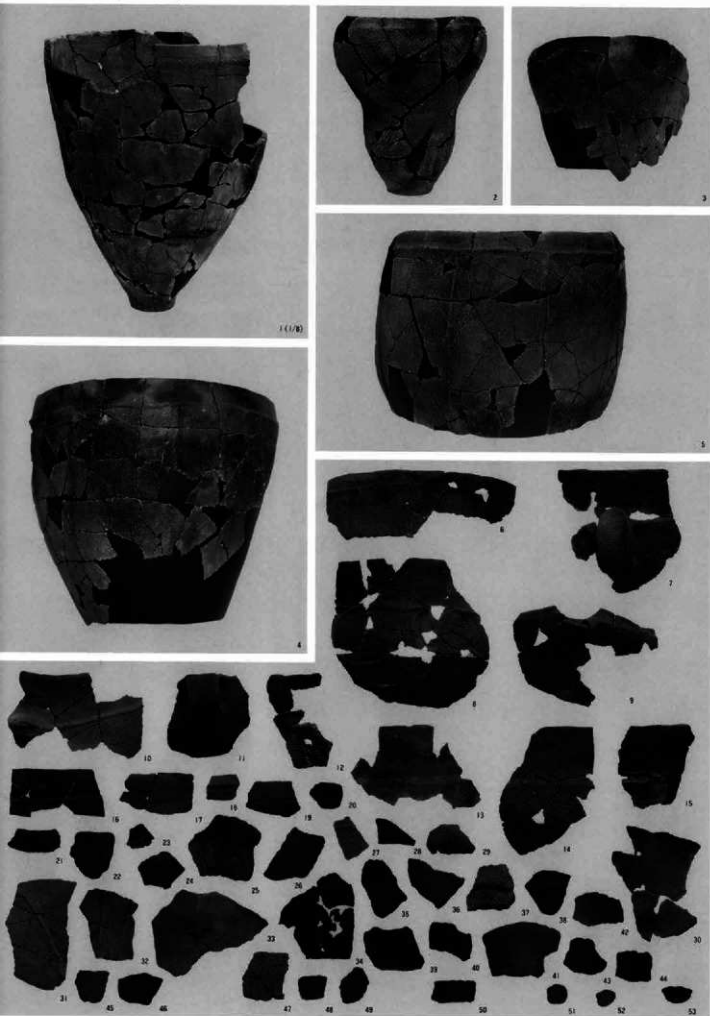


▼17号配石遺構(敷石住居跡)

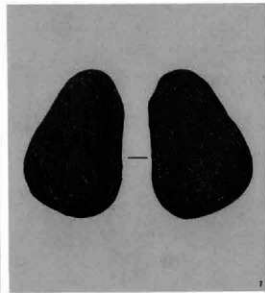
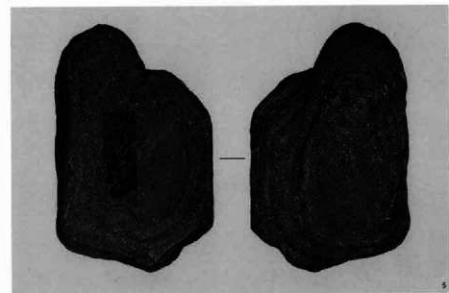
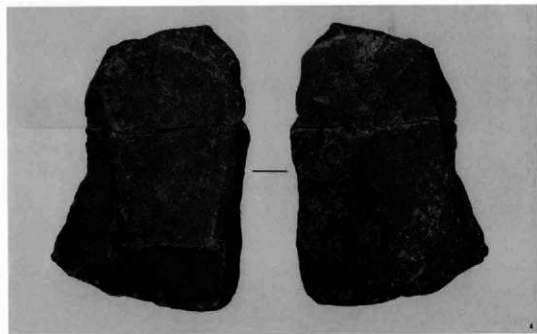
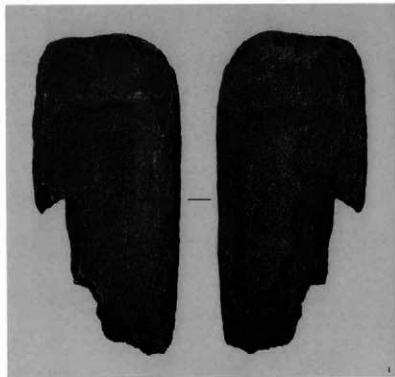
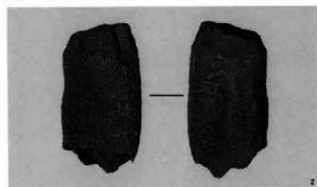
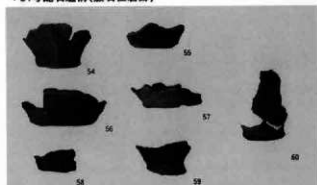


▼23号配石遺構(敷石住居跡)

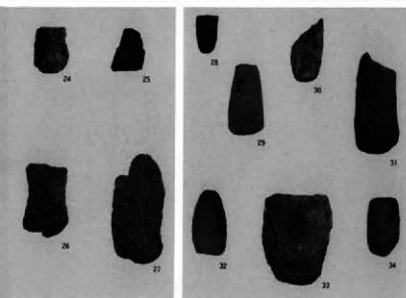
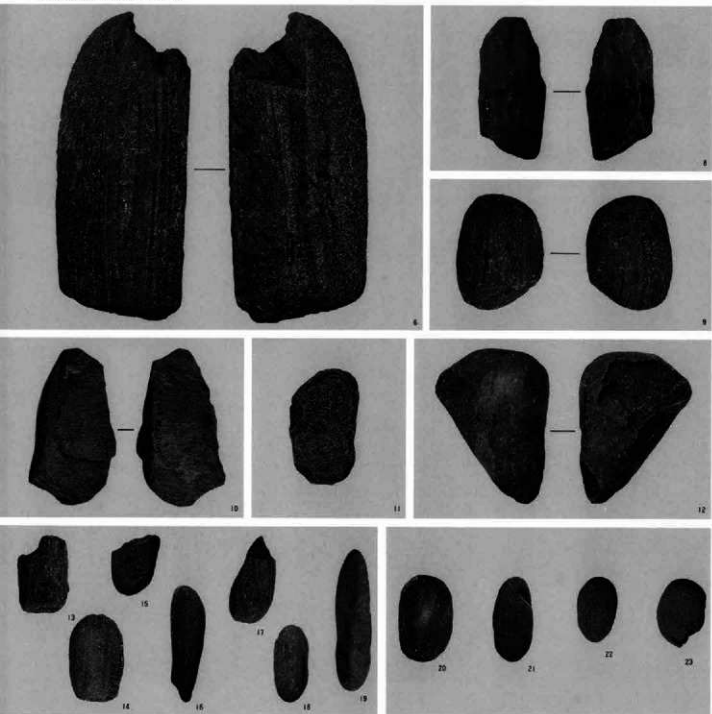




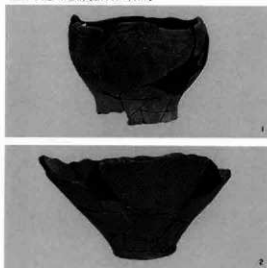
▼24号配石遺構(敷石住居跡)



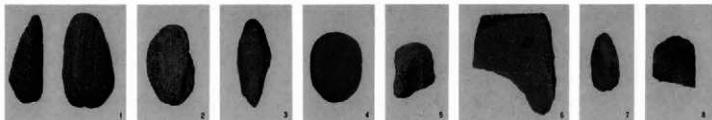
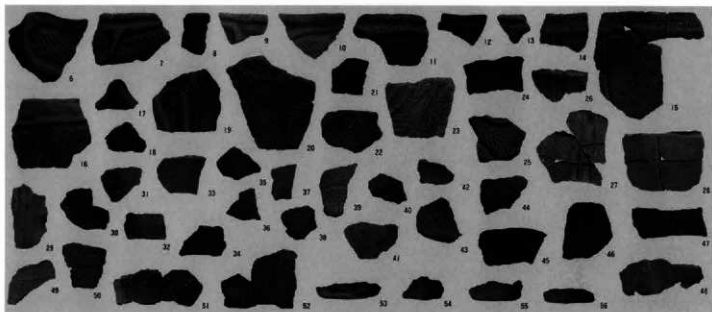
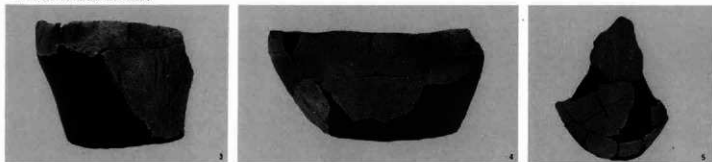
▼24号配石遺構(敷石住居跡)



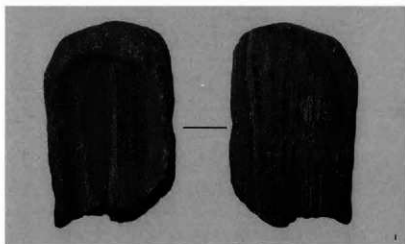
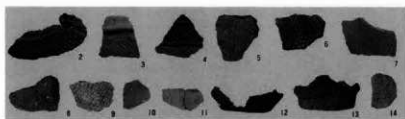
▼26号配石遺構(敷石住居跡)

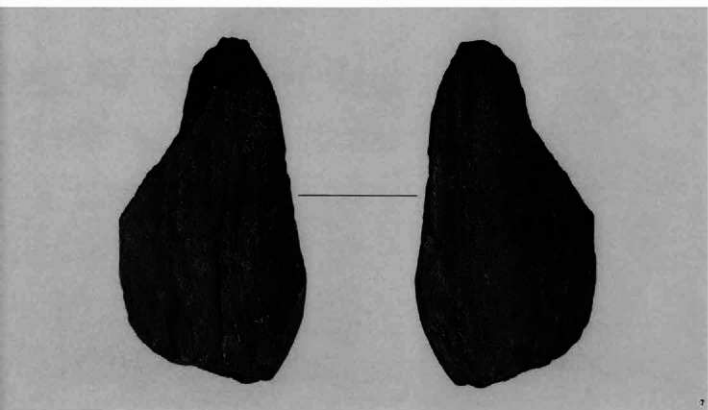
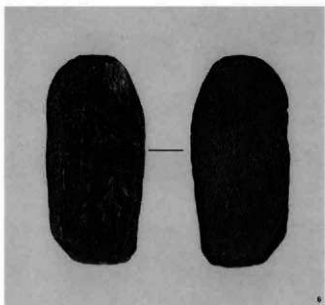
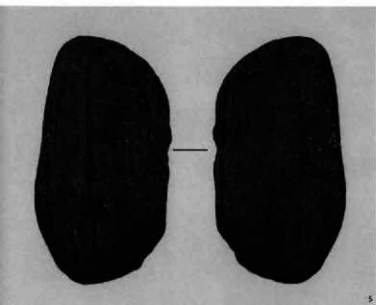
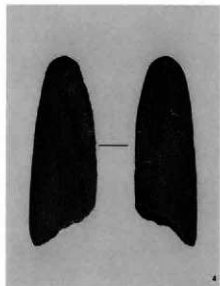
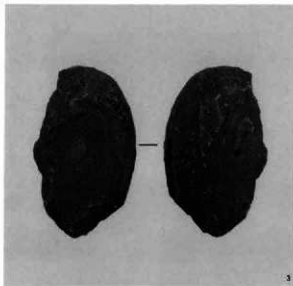


▼26号配石遺構(敷石住居跡)

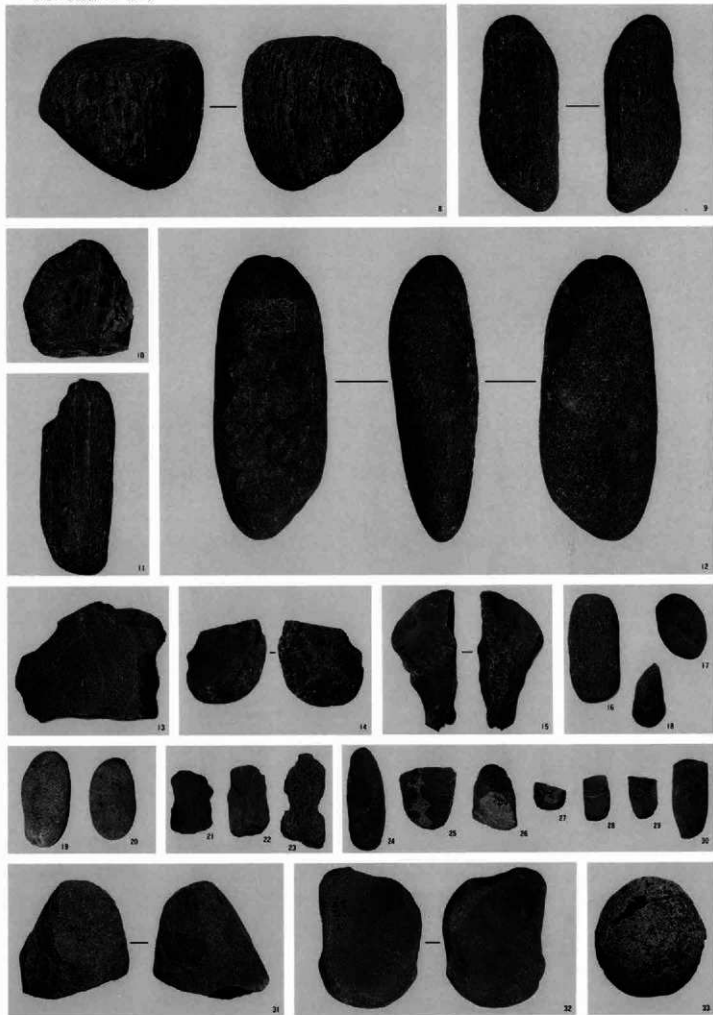


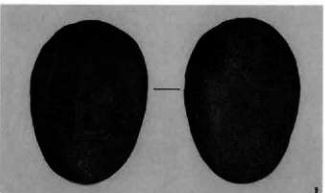
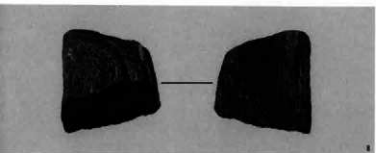
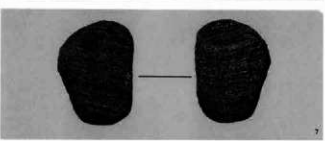
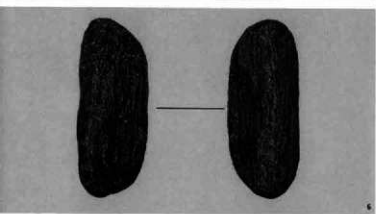
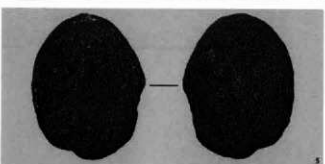
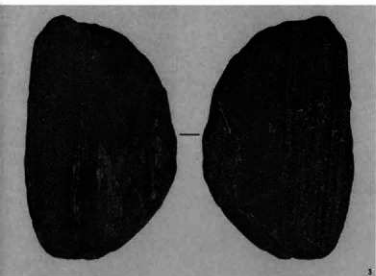
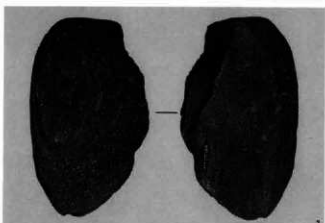
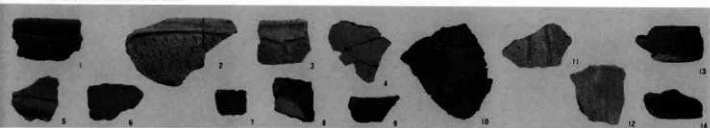
▼36号配石遺構(敷石住居跡)



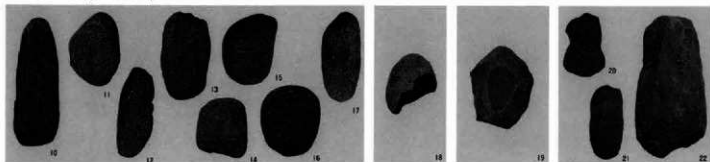


▼36号配石遺構(敷石住居跡)

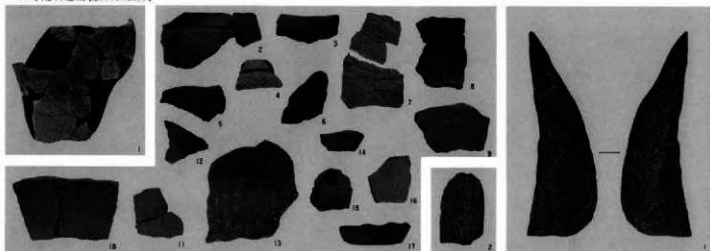




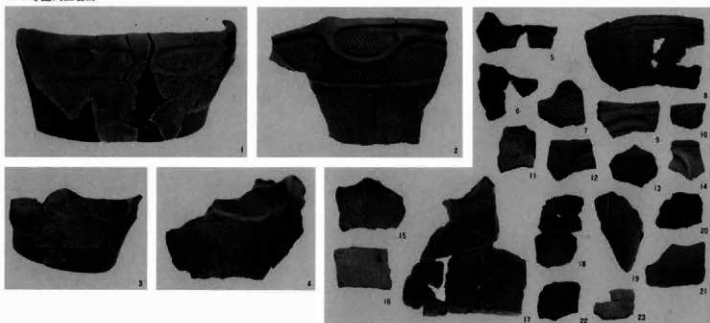
▼37号配石遺構(敷石住居跡)



▼38号配石遺構(敷石住居跡)



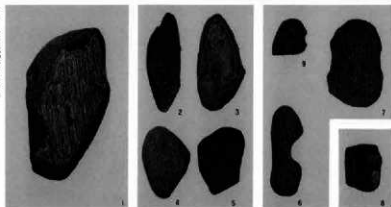
▼1号竪穴住居跡

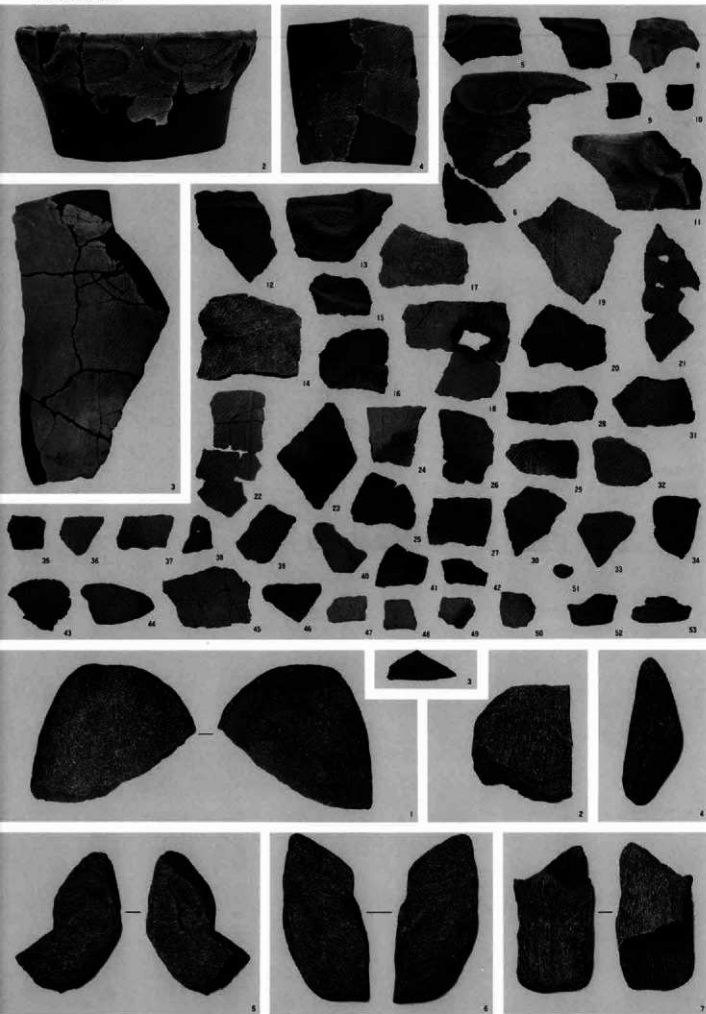


▼2号竪穴住居跡

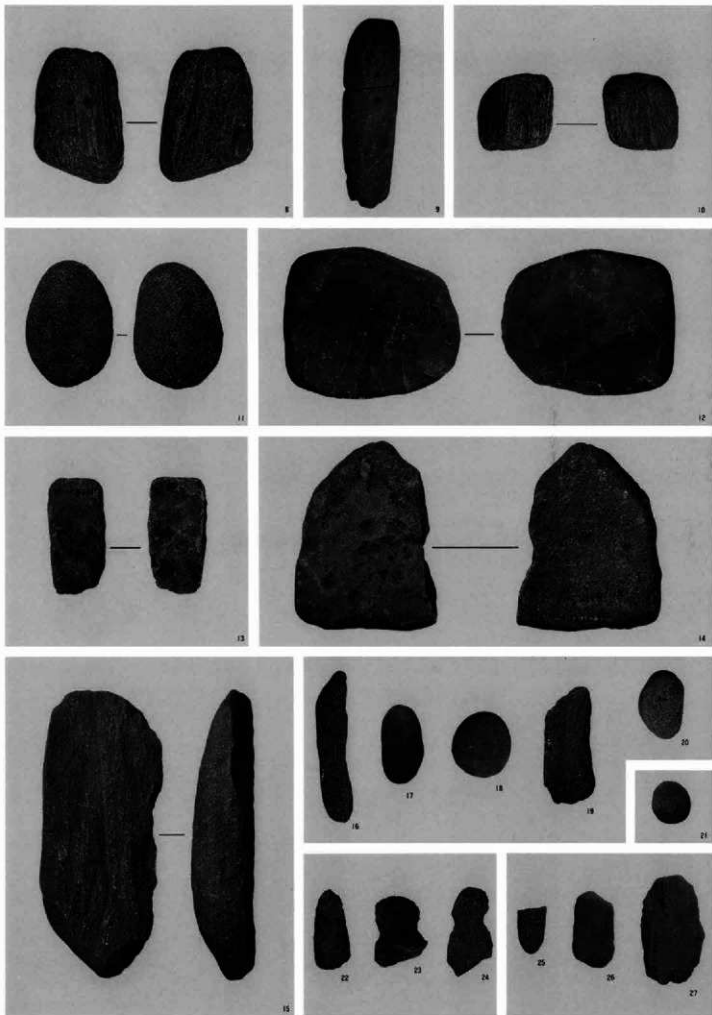


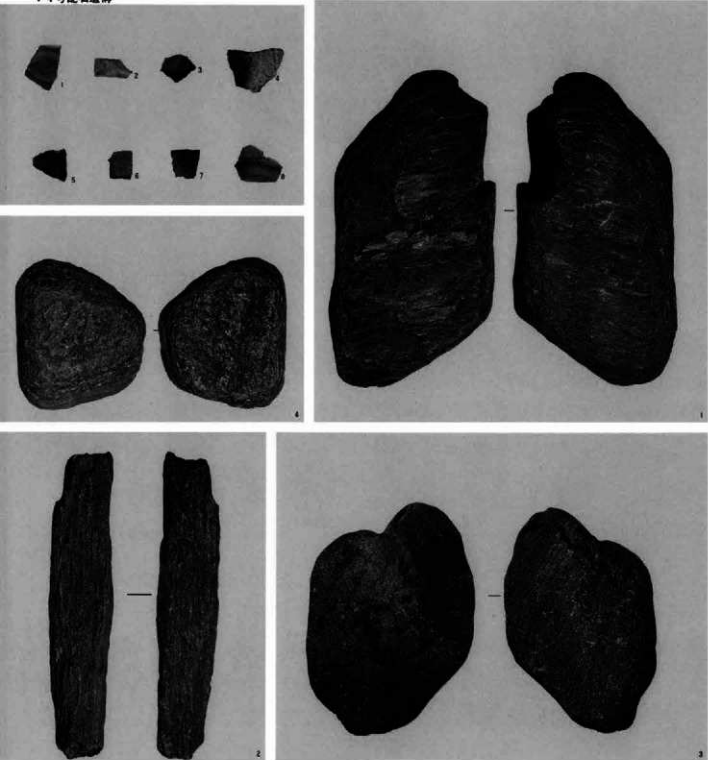
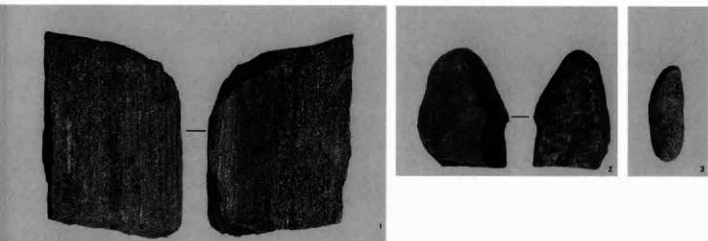
▶1号竪穴住居跡



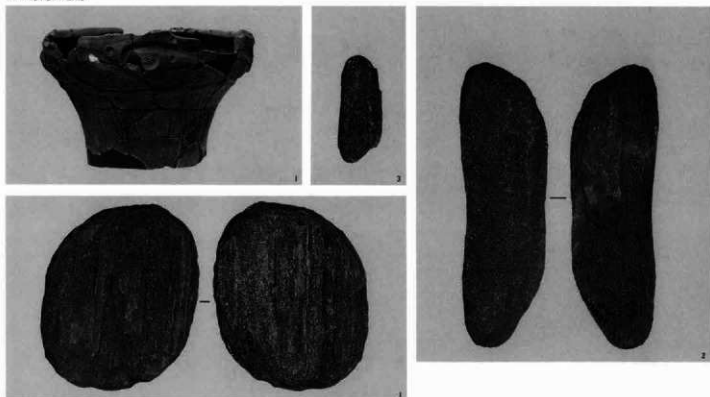


▼ 2号整穴住居跡

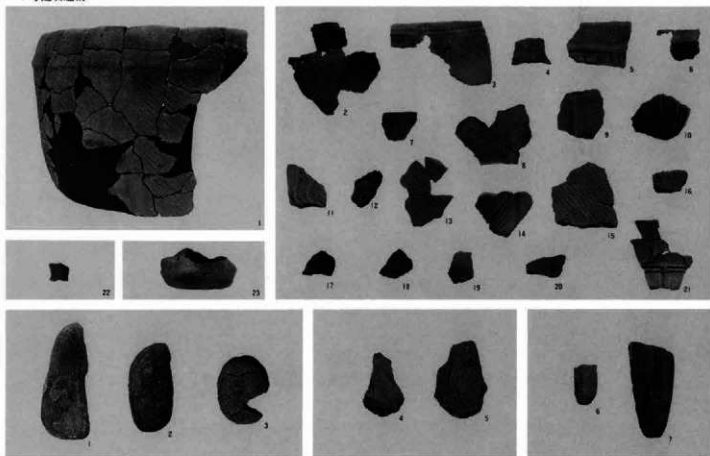




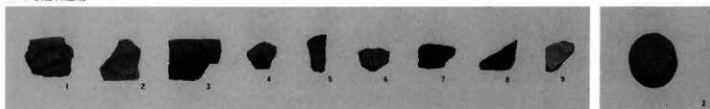
▼ 6号配石遺構



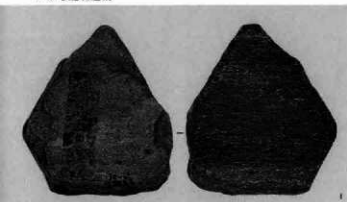
▼ 7号配石遺構



▼ 9号配石遺構



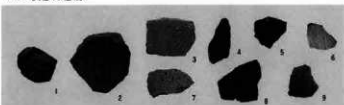
▼9号配石遺構



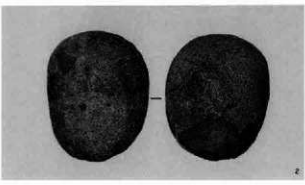
▼10号配石遺構



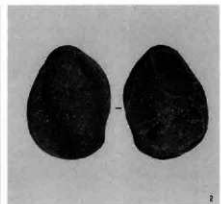
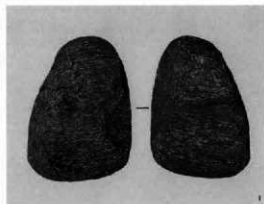
▼11号配石遺構



▼11号配石遺構



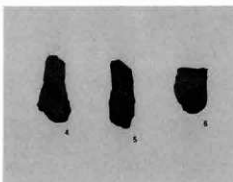
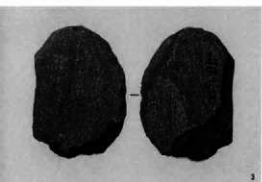
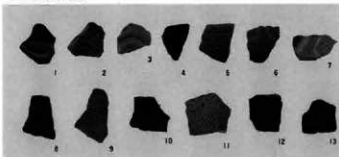
▼12号配石遺構



▼13号
配石遺構



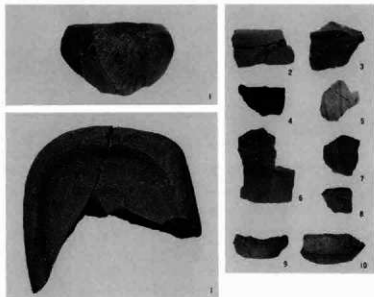
▼14号配石遺構



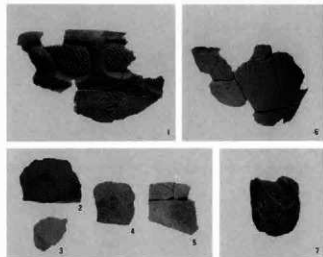
▶15号配石遺構



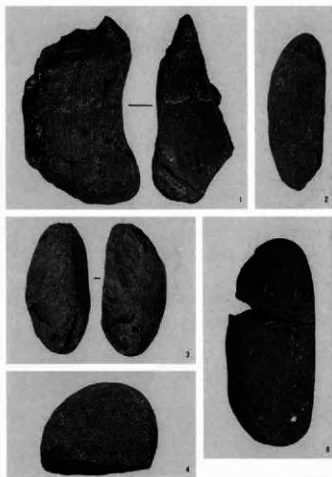
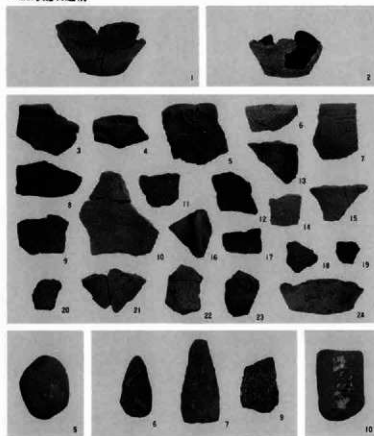
▼16号配石遺構



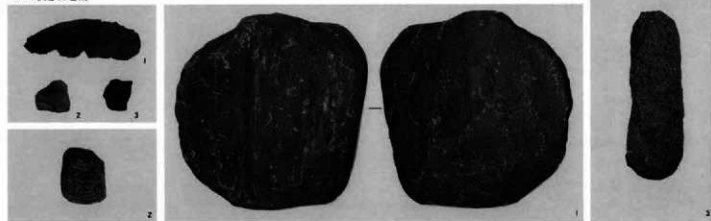
▼19号配石遺構



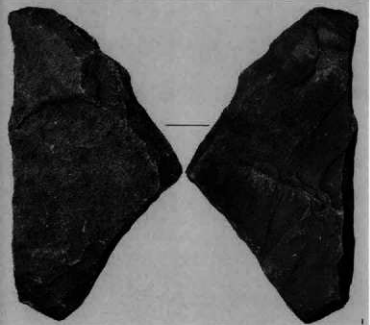
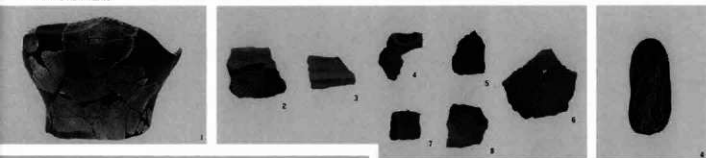
▼20号配石遺構



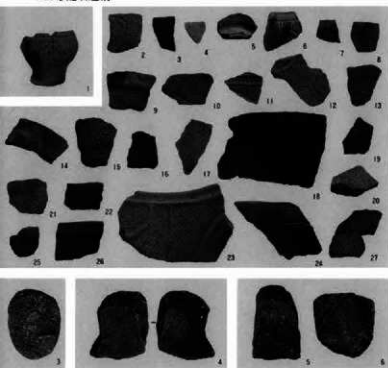
▼21号配石遺構



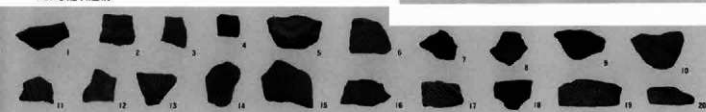
▼22号配石遺構



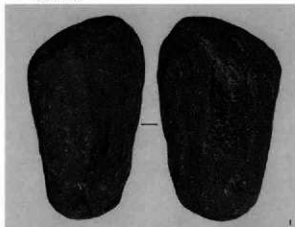
▼25号配石遺構



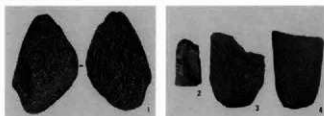
▼27号配石遺構



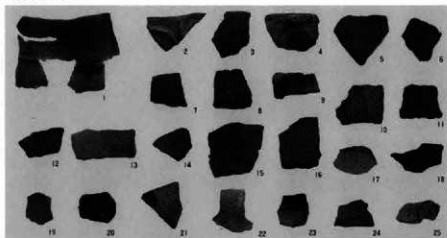
▼27号配石遺構



▼29号配石遺構



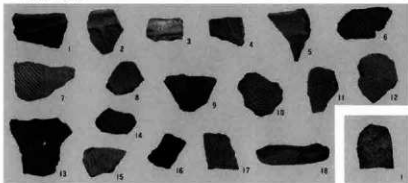
▼30号配石遺構



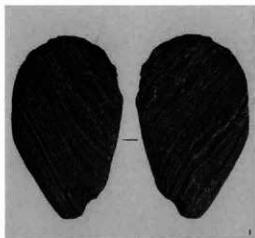
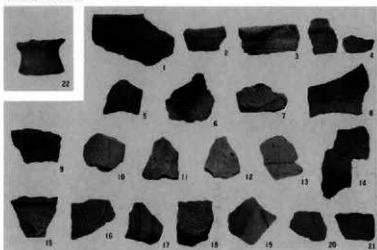
▼31号配石遺構



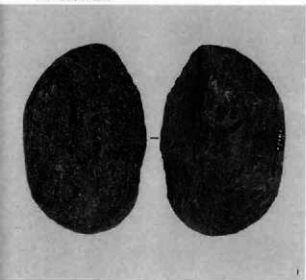
▼28号配石遺構



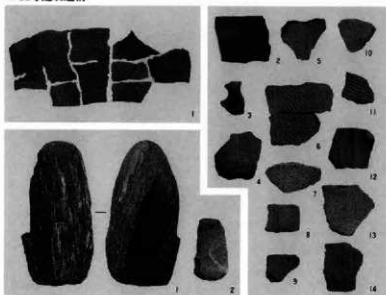
▼29号配石遺構



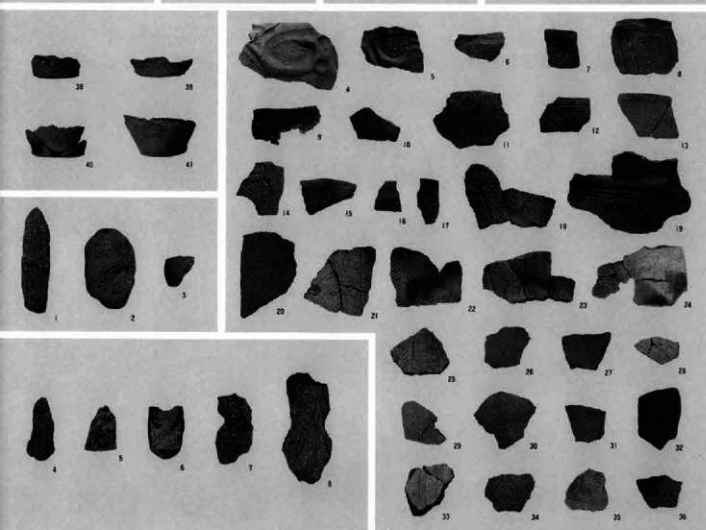
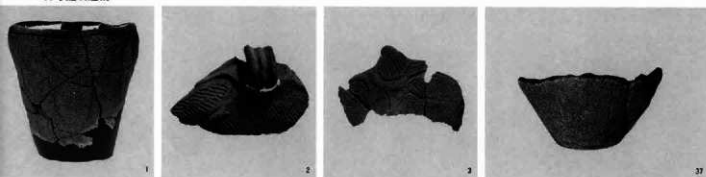
▼31号配石遺構



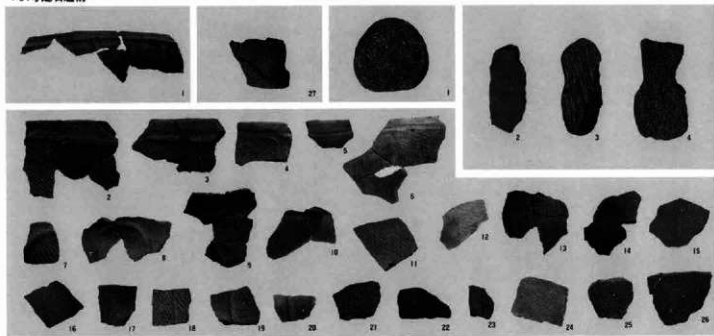
▼32号配石遺構



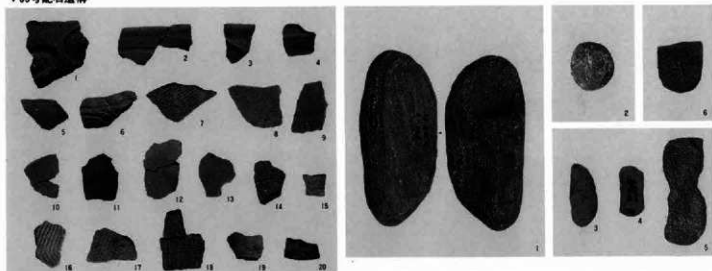
▼33号配石遺構



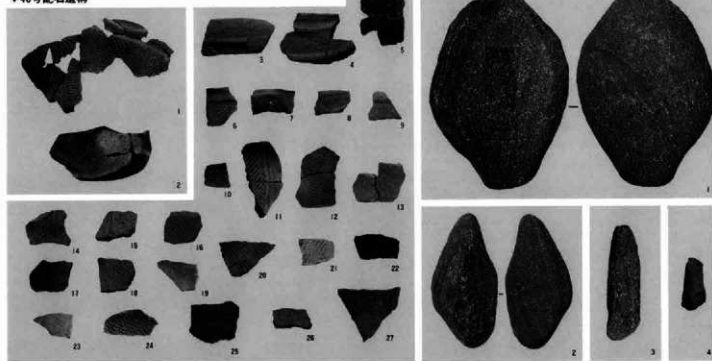
▼34号配石遺構



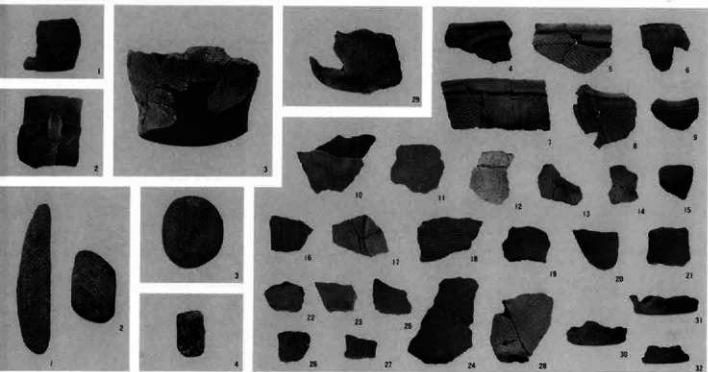
▼35号配石遺構



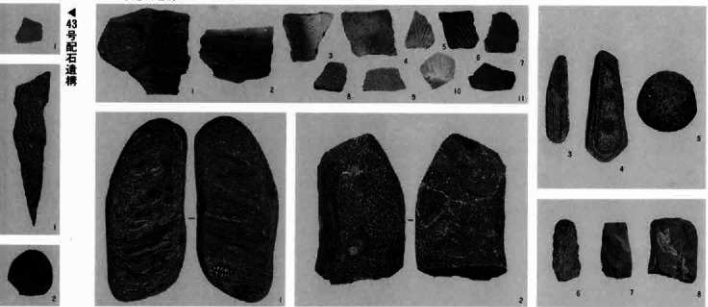
▼40号配石遺構



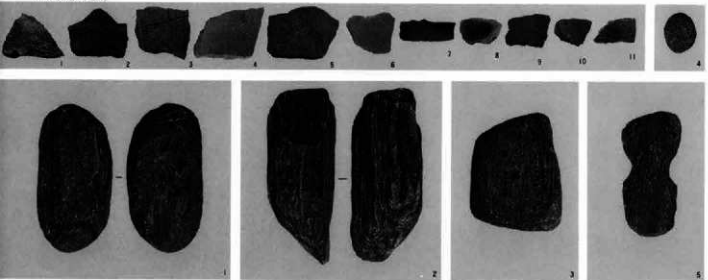
▼41号配石遺構



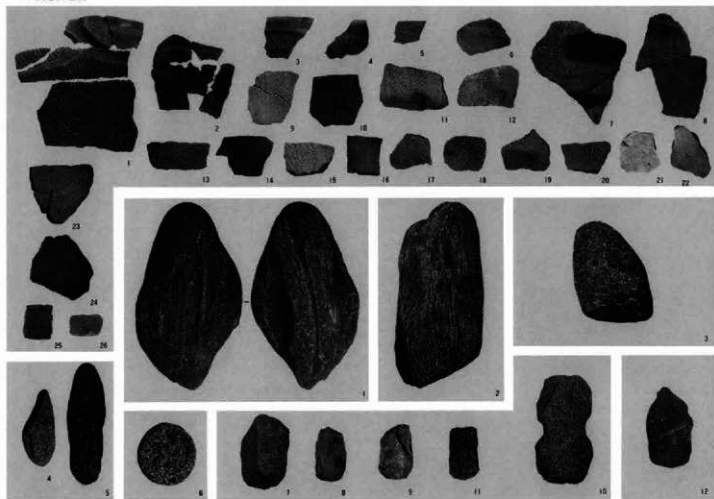
▼44号配石遺構



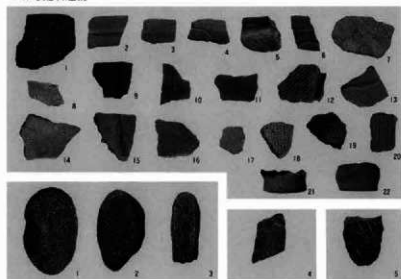
▼45号配石遺構



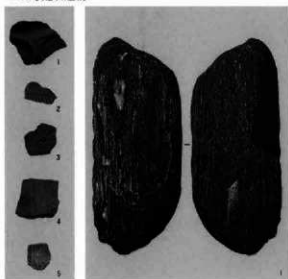
▼46号配石遺構



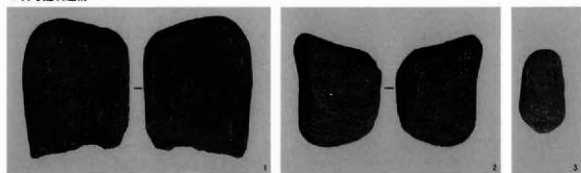
▼47号配石遺構



▼48号配石遺構



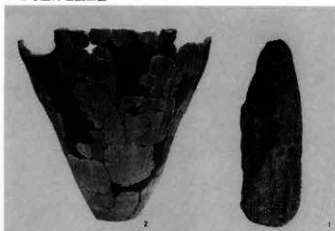
▼50号配石遺構



▼1号屋外埋設土器



▼2号屋外埋設土器



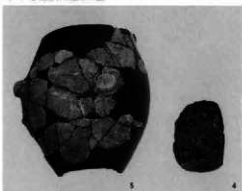
▼3号屋外埋設土器



▼4号屋外埋設土器



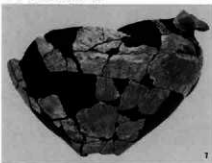
▼5号屋外埋設土器



▼6号屋外埋設土器



▼7号屋外埋設土器



▼8号屋外埋設土器



▼10号屋外埋設土器



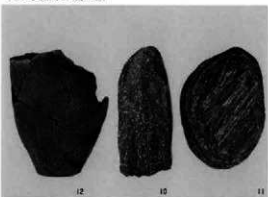
▼11号屋外埋設土器



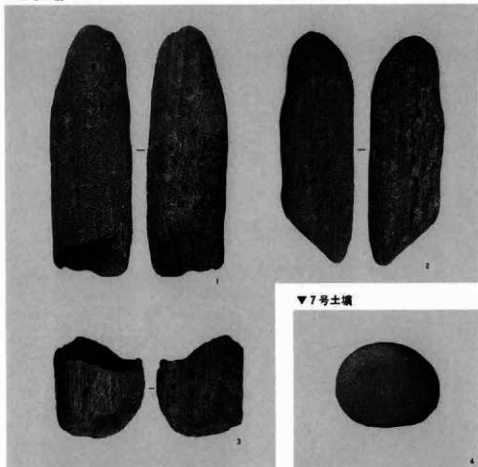
▼9号屋外埋設土器



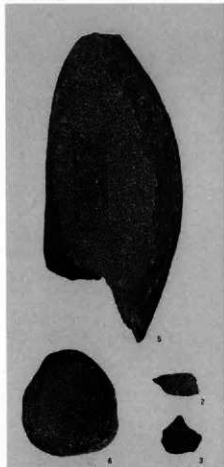
▼12号屋外埋設土器



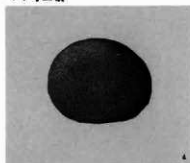
▼3号土塊



▼6号土塊



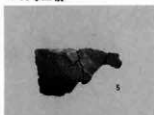
▼7号土塊



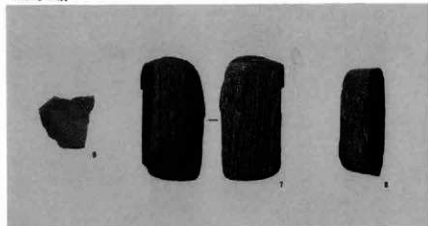
▼9号土塊



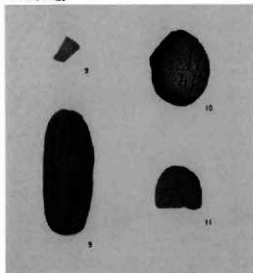
▼13号土塊



▼14号土塊

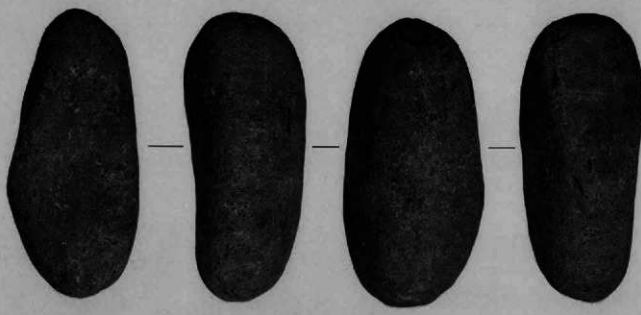
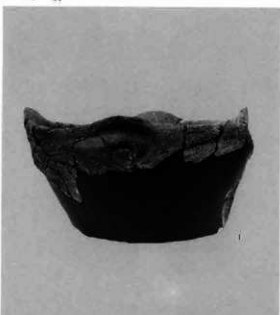
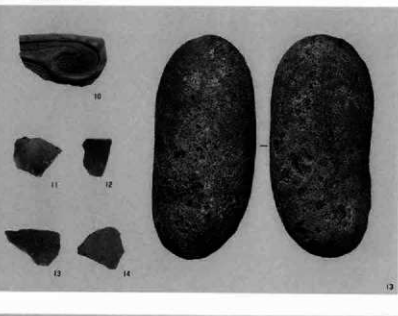


▼15号土塊

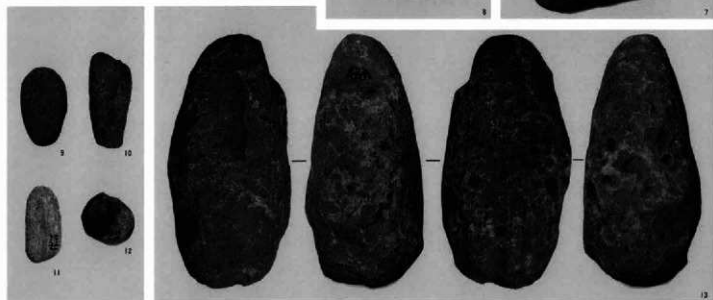
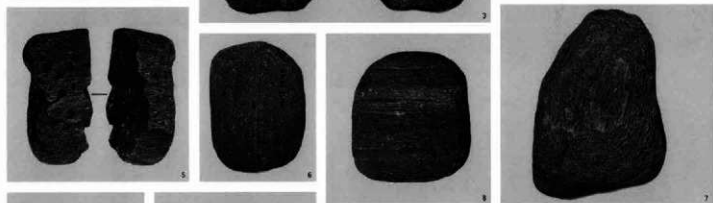
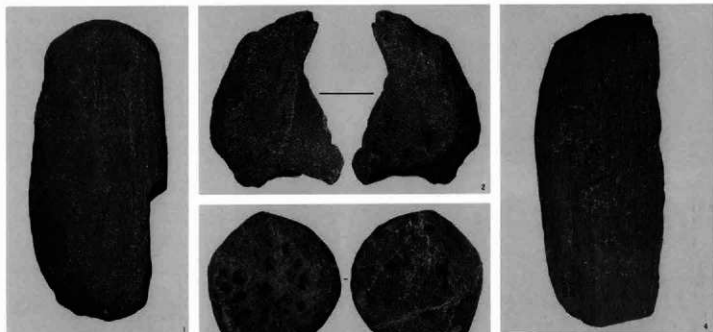
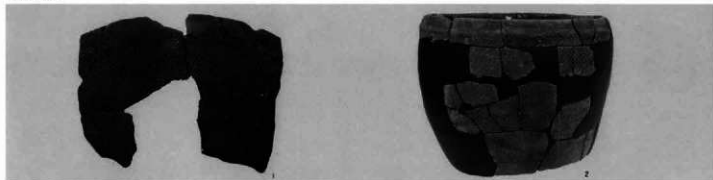


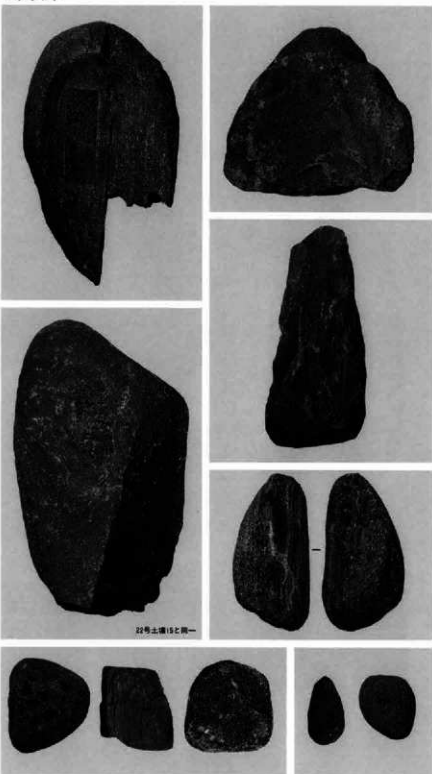
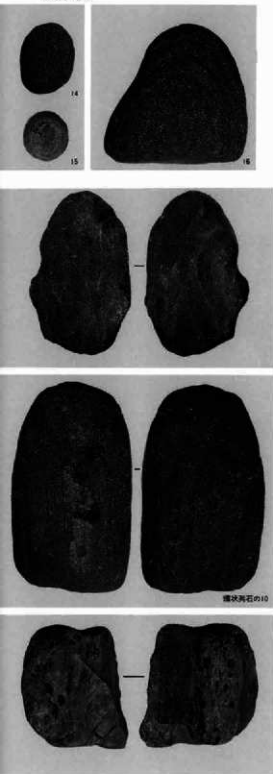
▼18号土塊





▼虎家場所





群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第112集

田篠中原遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第5集

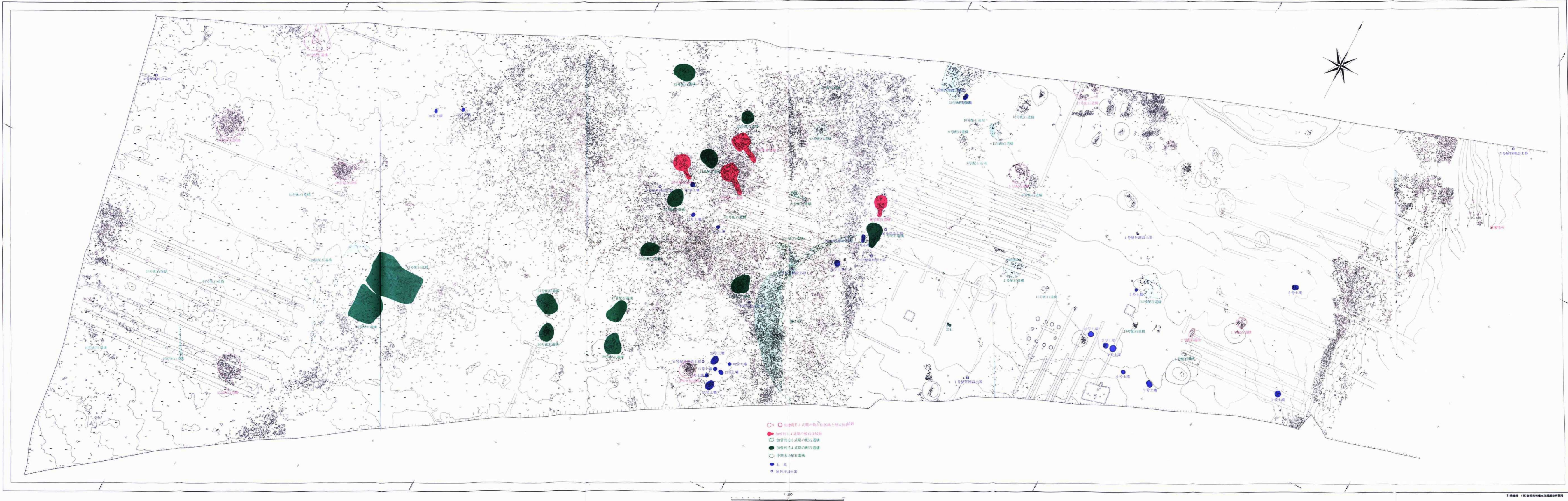
平成2年10月15日 印刷

平成2年10月25日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

付図1 群馬県富岡市田篠中原遺跡全体図





付図2 環状列石全体図



付図3 環状列石石材別分布図



付図4 環状列石重量別分布図